
職業は何を？ 勇者です。

にんぽっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

職業は何を？ 勇者です。

【Nコード】

N4737T

【作者名】

にんぽっぼ

【あらすじ】

ドラゴンクエスト3の勇者（女）アレル。

とある出来事により異世界に流されてしまい、自慢の装備はひのきのぼうとたびびとの服だけに。そんな彼女の我が道を行く気侘な冒険日記。まったり生活を目指して地下迷宮をうろつる徘徊したりします。

でも残酷描写も時々あります。ご注意ください。

以前arcadia様にて掲載しておりました。

現在は削除してあります。

無事完結しました。ありがとうございました！

第一話 勇者が現れた(前書き)

はじめまして。こちらで初めて連載させていただきます、にんぽっぼです。

どうぞよろしくお願いいたします。

この話は、名作ドラゴンクエスト3を私が独自解釈をしたのものです。

こんなの勇者じゃないという方もいると思いますが、私なりの解釈ということでお許しください。

色々あって性格が捻くれていますので、不快に思われる方もいるかもしれません。

王道は小説版ドラゴンクエスト3がオススメです。これも名作です。

過去篇の設定は途中までは低レベル縛り、途中から一人旅という感じですよ。

もしこのような状況だったら？ という事を妄想しています。

あまり最強要素はないと思います。

のんびり書いていきたいと思えますので、どうかよろしくお願いいたします。

第一話 勇者が現れた

「お帰りください」

「な、なんでよ！ ちゃんと答えたじゃない！

慣れない敬語まで使ってあげたのに、どうしてよ！」

素っ気無く出口を指差す受付の女。

その視線は冷たく、忙しいんだからとつと帰れよと言わんばかりである。

私はカツとなり、ドンと机を叩く。

その音に周りが注目を始めるが、私は全然気にしない。

「他のお客様の迷惑になりますので、騒ぐのはお止めください」

ハアアッと大きくため息を吐いて、再び書類に目を落とす女。

先程私が書き上げた申請書である。

この街に存在する『地下迷宮』に挑戦する為の許可証。

それを手に入れるには、このなんとら協会の審査を通らなければいけないらしいのだ。

「グダグダ言わないで、とつとと許可証を寄越しなさい。

もう何時間待たされたと思ってるのよ！」

そう、この審査を受ける為に、私は何時間もチンタラチンタラ行列が進むのを待っていたのだ。

みすばらしい農民やら、ごつい筋肉男。スカした男女に、真面目そうな僧侶やらエトセトラエトセトラ。

ようやくゴールにたどり着いたと思っただらこれである。

慈愛の女神と呼ばれた私も、流石に堪忍袋の尾が切れても可笑しくないというものだ。

「……それでは『勇者』様でしたっけ？ そのギルドの職業認定証を見せてください。

私を知る限りでは、そんなギルドや職業は存在していなかったと思いますが」

書類をポンポンと手に打ち付けながら、イライラを押し殺したように女が話す。

「ギ、ギルド？」

「そうです。地下迷宮に挑戦する方は、まず一定以上の能力があると認定を受けなければなりません。

勝手に入られて、ポンポン死なれたらこちらも迷惑なんですよ。魔物の餌になって、どんどんと増える一方ですからね」

「だ、だれがポンポン死ぬか！」

ドンドンと地団駄を踏む。ポンポンではない。

「とにかく、いずれかのギルドに所属してからまたお越しください。

というか、書類をお渡しした際に説明があつたはずですよ。

冒険者たるもの、『人の話を聞く』という事は基礎中の基礎です。その空っぽの頭にしっかりと叩き込んでみてくださいいね」

長々とご高説をたれる眼鏡女。

しかも嫌味までプレゼントしていただいた。

ムカついたので、張り倒してやるうかと思つたがここは我慢する。

大暴れして、大捕物になるのは面倒臭い。
今度こそ、『楽しんで生きる』。これこそがこの世界での目標なのだ
から。

「ち、ちくしょう！ 覚えてなさい！」

どこかで聞いたような捨て台詞を吐いてみる。

うーん、この胸に染み渡る敗北感。意外と悪くない。
悪党が思わず使ってしまう気持ち分かる。

「はいはい、それでは次の方どうぞ」

「ようやくか。邪魔だ、さっさとどきな！」

「い、いたっ！」

次に並んでいたむさくるしい男に押しつけられ、私は行列からどか
される。

この野郎と血が上がるが、お腹が空いているので怒るのは我慢する。
体力と精神力の無駄である。

やれやれと思いつつながら、トボトボとんたら協会の建物を出る。
その際に、入り口においてあるギルド紹介のチラシを手を取った。
ぼけーっと流し読みするが、パツと見では理解できない。

「……なになに、って無意味に長いし細かいわね」

細かい字でびっしりと書いてあるそれを、嫌々ながら目を通してい

く。

もつと絵や色使いを増やすべきである。非常に読みづらい。

それを我慢して読み進める。

チラシの内容を要約すると

- ・ なんとたら協会から許可を貰うには、アートの街に存在する『ギルド』に所属しなければならない。
 - ・ ギルドには、戦士、魔術師、僧侶、レンジャーの4つが存在する。
 - ・ これらギルドの依頼をこなし、一定以上の実力を認められることで『職業認定証』を授与される。
 - ・ 『職業認定証』を手に入れ、なんとたら協会から『探索許可証』を貰うと自由に地下迷宮を冒険できる。
 - ・ パーティの仲間をお探しの際は、『ルイーダの酒場』まで。協会からの依頼も請け負えます。
- アイテム預かりや、宿泊施設まで便利な機能が一杯。ルイーダの酒場を是非ご鼻屑に！

以上である。

「ここにもルイーダの酒場があるのね。というか名前まで一緒っておかしいじゃない。」

本当はここアリアハンなんじゃないの？」

最後の一文が宣伝であることを突っ込む前に、思わず『ルイーダ』に突っ込んでしまう。

懐かしき愛すべき世界を思い出す。あの女ときたら、使えない奴らどもばかり紹介してきやがって。

ムカついたので、武器と防具だけひっぺがして叩き返してやった。

そしたらあの年増女、王に言いつけやがって、散々説教されてしま

った。

今思い出しても腹が立つ。

……本当に。

「それは良いとして、さてどうしたものか。お腹は減ったけど手持ちがもうほとんどないし。

身包みはここに来た時、何でか知らないけど剥がれていたし」

私自慢の装備はこちらに落つことされた際に、全部無くしてしまつた。

この街の近くで川に浮かんでいた時には、既に影も形もなかったのだ。

川岸に意味ありげに置いてあつた袋の中には、『たびびとのふく』と『ひのきのぼう』、そして『銅貨50枚』。私の大事にしている本が一冊。

思わず泣けてくるが、素っ裸でいるわけにはいかないので、有り難く装備させてもらった。

きつと日頃の行いが良い私へのプレゼントだろう。中身はしょぼいけど。

その『ひのきのぼう』を杖代わりに、よいしょよいしょと歩き出す。だるい。死なないけどだるい。死にそうなほどだるい。

腹も減つたし、ベッドで寝たいし、体を洗いたい。

銅貨50とは恐らく50Gの事だろう。

ということとは、一泊食事つきなんて贅沢を続けたら、すぐに足りない

くなってしまうだろう。
人間らしい最低限なはずなのに、贅沢とは。
我が事ながら情けなくなる。

「あ、あのー」

「ああ、だるい。面倒くさい。息をするのもだるい」

「す、すみません」

「気のせいかな空耳まで聞こえてきたわ。そろそろお迎えかしら」
ぼそぼそと語りかけてくる女の声を無視して、さらに前進する。
困ったときは前進あるのみ。今までもそうしてきた。

キリツと格好つけて、老人のように歩を進める。体力は残り一桁ぐらいだろうか。
ノロノロと歩いていたら、見知らぬ人物に回り込まれてしまった。

「すみません！ その、困っているようでしたので。
もしよければ、私と一緒にギルドに行きませんか？」

「なんで？」

「えっと、先程協会の方でお見かけしたものですから。
それで、これから私もギルドに所属申請を出しに行くので、よかつたらと思ひまして。」

あ、私は『戦士』ギルド志望なんですけれど」

人の良い笑顔で提案してくる若い女。
裏がありそうな感じは見受けられない。
こういつ時の勘は、私は鋭い。

「……なんで私が戦士だと思っの？」

単純で、脳みそが筋肉で出来てると思ったりしてるわけ？

そうよね、所詮私は脳筋女よね。考えるより手が先に出ちゃうから」

魔物にも脳筋勇者と馬鹿にされてきた私だ。今更気にしない。

気にしないが、その魔物には脳天に昇天するような一撃をくれてやった。

そうしたら、あまりの嬉しさに真っ赤になって喜んでたわね。
血の色的な意味で。

「と、とんでもありません。た、ただ『棒』をお持ちでしたから。
戦士ギルドと入っても、色々な職業があるんですよ。

だから、きつと自分に合った職が見つかるはずですよ！」

「だから、私は『勇者』だって……」

「ええ、ええ、分かります。誰しも皆『勇者』に憧れるものですよ。
ら。」

その想いを持って、鍛錬に励むことが大事なんです。

貴方はそれが良くわかってるんですね！ 素晴らしいですよ！」

拳をグツと握り締めて力説している。

あ、この娘疲れるタイプだ。一発で分かった。

この手のタイプは体力だけでなく、精神力を消耗することが多い。
主に私の。

地味だがしつかりとした造りの装備、家紋の入った盾。金髪ポニーテールの可愛らしい娘。その目はキラキラと輝いている。きつと育ちの良い家庭のお嬢様なんだろう。まだ汚れていない。羨ましいことだ。

「……まあ良いわ。もし案内してくれるなら助かるわ。この街、大きすぎてまだ把握出来てないのよ。どんだけでかいんだって話よね」

「それはもう！ この街は『地下迷宮』を囲んで築き上げたものですから。」

魔物の出現を防ぐ結界を張っている、最終防衛線でもあるんですよ。なんて、今更説明するまでもないですよね」

アハハと照れ笑いを浮かべる少女。

この世界のことは良く知らない私には興味深い話である。

『地下迷宮』の行き着く先には、まあ想像したくない何かが待っているんだろう。

地上侵攻に意欲がないのか、力をためているのか、それとも敢えてバランスを保っているのか。

まあどうでも良い話ではあるが。

「あ、申し遅れました！ 私、マタリ・アートと申します。どうぞよろしくお願いしますね！」

ペコリと頭を下げてくる少女。その際にポニーテールが馬の尻尾のように揺れる。

「……アート？」

私は思わず聞き返す。街の名前がアート、この娘の名前もアート。偶然の一致だろうか。まあ違うだろう。

「あ、はい。私も一応アートの一族なんです。ただ、正式には認められていないですから。

それに、最早アートの名もお飾りみたいなものです。……過去の栄光に縋りついているだけなんです」

表情を曇らせて呟くマタリ。先程までのテンションとは違ってかわって、背中に影が差している。

アートの一族が何かはさっぱり分からないが、一応フォローしておこう。

「ふーん。まあ色々大変みたいね。とにかく元気出しなさいな。そんなに落ち込んでると、運が下がるわよ。そうしたら良いアイテムが拾えないわ」

そう、呪いの装備を拾ったり、腐ったおにぎりを拾ってしまうだろう。

それは恐ろしいことだ。

「う、ごめんなさい。そうですね。ちょっと愚痴を吐いてしまいました」

テヘツと笑い、舌を出す。可愛らしい仕草だ。

私がそんな行動を取ったら、きつと魔物は泣いて逃げ出すだろう。当然ながら、追いかけてブチ殺すのだが。

「じゃあ案内してもらえない？ その戦士ギルドとやらで構わないから。」

まあ、ぶっちゃけどこでも良いんだけど」

「勿論です！ さあ行きましょう。私達の栄光への第一歩ですから！」

テンションアゲアゲで腕を振り上げるマタリ。

私はテンションだだ下がりで腰が曲がる。

嗚呼、お腹が空いた。何か食べたい。貪りつきたい。

特にアレだ。アレをバリバリ食べたい。

私があの特徴の苦味のある、アレを妄想していると。

「ところで、貴方のお名前を聞いても宜しいですか？」

マタリが、アツと気づいたように問いかけてくる。

私はさてどうしたものかと考えるが、元の世界の名前を答えることにする。

最早帰るあても、つもりもないのだから、偽名など使う必要もないだろう。

「アレル。アリアハンのアレルよ」

「アレルさんですか。……アリアハンというのは？」

顎に指をあてて、考え込むマタリ。

「私の出身地よ。まあ深く考えないで良いから」

手をヒラヒラと振って誤魔化する。
出身地までは答えなくても良かったのだが、なんとなくつけてしまった。
だって格好良いから。

戦士ギルドに到着して、ギルドマスターの開口一番の台詞は、

「お前、人生を舐めているのか？」

「な、なんでよ！ 私は清く正しく逞しく、いつだって真剣に生きてきたわよ！」

「あ、アレルさん、どうか落ち着いて。ロブさんも言い過ぎでは」

馬鹿にしたような視線を向けるギルドマスター。

名前は確か、ロブとか言っただか。

マタリが挨拶したときは、ニコニコ笑顔を浮かべていたくせに、私が話そうとした瞬間これである。

ムカつく筋肉達磨である。短髪刈り上げの太眉毛の癖に！

「これから地下迷宮に挑もうって奴が、なんだその格好は。そこらで拾ってきたような棒きれに、普段着ときたもんだ。

「ここはダンスを教える場所じゃないんだぞ」

呆れたような口調のロブ。それを聞いた回りの男達もガハハと下品な笑い声を上げる。

正式ギルドの癖に、酒場のような雰囲気建物。

雰囲気というか、実際に酒を提供しているのだから呆れたものだ。

とはいえ、ここにいる人間の面構えはそこそこのもので、

それなりの腕をもっていそうではある。こけおどしではないだろう。このロブとやらも、一流の実力者のはずだ。

思考の渦に入り込んでいた私に、先程盛大に笑い声を上げていた男達が声を掛けてくる。

「ようようお嬢ちゃん。色々と事情があるんだろうが、ここは遊び場じゃないんだ。」

もし稼ぎたいなら、その身体に見合った場所に行くといいぜ」

「ま、その貧相な身体じゃ、幾らにもならんだろうがな！」

「ワハハハ！ いやいや、奇特な趣味の奴もいるかも知れんぞ！

世の中には小さい方が良いという奴もいるらしいからな！」

「ハハハ、そんな奴本当にいるのか？ 良かったな嬢ちゃん！ 変

態共の人気者になれるぞ！

アートNO1娼婦目指して精々頑張りなよ！！」

酒を煽り、先程以上の馬鹿笑いを上げる屑共。

マタリは顔を真っ赤にしている。あまり下品な言葉に免疫がないようである。

ロブはとくに表情を変えずに、こちらへ退出を促してくる。

「という訳だ。現実って奴を理解したら、とつとと帰りな。俺もそんなに暇じゃないんだ。マタリ嬢ちゃんは手続きがあるから残ってくれ」

「ろ、ロブさん！ アレルさんは」

「俺も遊びでギルドを運営している訳じゃない。死体になると分かっている奴を、迷宮に送り込むわけにはいかん。それぐらい分かるだろう？」

「……は、はい、でも」

「でもじゃない。お前もアートの一族なら分かるだろう」

「い、ごめんなさい」

シユンとうなだれてしまうマタリ。
こちらを申し訳なさそうに上目で見つめてくる。
はてさてどうしたものか。

「ほらほら嬢ちゃん、突っ立ってないでさっさと出ていきな！俺で良かったら、この後相手してやっても良いんだぜ？」

「ハハハ、お前そういう趣味があったのか！」

「ワハハハ！ 変態め！」

「なあに、最初の客になってやろつと思つてさ。料金も弾むぞ?」
ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべ、私の肩を触ろつと手を伸ばしてくる。

いい加減大人しくしているのも限度というものがある。
この屑には徹底した教育が必要なだろう。
心がほんの少しだけ痛むが仕方がない。
本当は全然痛まないけれど。

その厭らしく伸ばされた手を掻い潜り、みぞおちに思いっきり正拳を叩き込む。

鉄製の頑丈そうな鎧の上からだが、衝撃は殺せていないだろう。
そんなに加減はしていないから。

「グ、グエツツエエエエ!」

「汚いわね。男なら我慢したらどう?」

腹を抱えてうずくまる男の顎を、杖代わりにしていた『ひのきのぼう』で軽く叩き上げる。

本気でやったら粉碎してしまうので、あくまでも軽くだ。

凄まじい勢いでテーブルに突っ込んでいく哀れな男。
上に乗っかっていた酒や料理が当たりに散らばる。もったいないことだ。

追い討ちをかけるべく、私は更に飛び掛る。

「そらそら、さっきの勢いはどうしたの？ 得意気に笑ってみたらどう？」

ほら、笑えって言ってるでしょう！」

ひのきのぼうでメッタ打ちにしつつ、罵声を投げかける。

私は基本Sである。Mではない。

「ヒイヒイ、い、痛いっ！」

「ただの棒切れのお味はどうかしら。結構痺れるでしょう。打撃って、骨身に染みるのよね」

振り下ろした一撃を浴びせる。

「グ、グハツ！ ま、まで。俺が悪かった！ だ、だから」

「謝らなくていいわよ。それにお前が死ねばギルドの枠が一つ空くじゃない。」

だからさっさと死ね」

「ヒイヒイ、痛い！ だ、だ、誰か！ た、助けてくれ！」

出来る限り威力を抑えた連打を、蹲る男に叩き込んでいく。本当に殺してしまうと、色々と面倒くさいから。

木製の棒が、鉄をたたきつける音が室内に響き渡る。

呆然と見ていた男達が、それぞれの得物を抜き始める。

「お、お前いい加減にしろ」

「ジャバから離れる！」

威嚇してくるが及び腰で迫力がない。

それではスライムでも逃げていかないだろう。

「助けたいなら、どうぞ御自由に。その代わり、五体満足でいられると思わないでね」

魔物が震えながら失禁する笑みを、男達に向けてやる。

ガタガタ震えるそれらを、叩き潰していくのは気分が良い。私の性格は破綻している。

「お、お前先にいけよ」

「いや、お前がいけよ」

「じゃ、じゃあ俺が援護するから、お前いけ」

「どござどござ」

「ぶざけんな！」

和気藹々と順番を決めている情けない連中。その間も、私の攻撃は止まっていない。

そろそろこのジャバとかいう男は、本当に再起不能になってしまうだろう。

その時、

「そこまで！ 先程の件は謝罪する。数々の無礼を許して欲しい。」

ギルドに加入することを認めよう」

パン！ と大きく手を叩き、私に向かって謝罪を告げるロブ。

「ろ、ロブさん」

「だから、そいつを放してやってくれ。そのままじゃ本当に死んでしまうからな」

「……仕方ないわね。お返しするわ」

警戒する目つきで、こちらを睨んでくるロブ。

その威圧は大したものだ。

それを軽く受け流すと、ジャバを立ちすくむ連中の方へと蹴り飛ばす。

息も絶え絶えになり、口から泡を吹いている。

当分は活動できないのは間違いない。勇者御墨付だ。

「ゲボツ！！」

「お、おい大丈夫か！」

「す、すぐ医者の所へ！」

「いや、僧侶ギルドだ！ 確か知り合いがいたはずだ！」

ジャバを担ぎ上げると、ものすごい勢いでダッシュしていく男達。脱兎の勢いでもいうのだろうか。

「ア、アレルさん、強いんですね。で、でもちょっとやりすぎじゃ」

「そんなことないわよ。誇りを傷つけられたんだもの。殺し合いになる覚悟がないなら、そんなことしなきゃ良いのよ」

「『誇り』ですか」

「そう。それを失ったら家畜と一緒によ。人間であることの証明が『誇り』。」

よく覚えておきなさい」

と、えらそうな事をしゃべりつつ、テーブルの上においてあった料理をパクつく。

誇りも大事だが、食事はもっと大事である。

勇者が餓死するのは実に頂けない。

そういう結末は、太った商人がお似合いである。

ムシャムシャと骨付き肉を貪りついていると、ロブが呆れたように

話しかけてくる。
マタリは先程の『誇り』という言葉を、自分に言い聞かせるように繰り返している。

「とにかく、我ら戦士ギルドへようこそ。名前は、確かアレルだったな。

その力、協会の為に役立てるよう励むことだ」

「ムシャムシャ（あい）」

「聞いているのか？」

「ムシャムシャ（もちろん）」

大きく首を縦に振る。

「結構。今日はこんな有様だから、明日また来てくれ。これは迷惑料兼、歓迎の印と思ってくれ」

ロブがこちらに、銀貨を1枚投げってくる。

「モグモグ、ムシャムシャ（どうもありがとう）」

「宿はいろいろあるが、ルイーダの酒場がオススメだ。同業者が多数滞在しているからな」

分かったら今日は出て行けと、押し出すようにギルドを追い出されてしまう。

うーむ、なんだか悪い印象を与えてしまったようである。巻き添えをくらって追い出されたマタリに声を掛ける。

「ごめんね。アンタまで巻き込んだじゃって」

「い、いえ良いんです！ それに、先程の棒さばき、実にお見事でした。」

将来は武闘家を目指されるんですか？」

両手を合わせ、本心から感動したと言わんばかりに見つめてくる。

「い、いや、そこまではまだ考えてないかな」

だって勇者だし。武闘家も金が掛からなくて良いのだけれど、私には適正がない。

『勇者』から転職することは不可能だ。それは認められていない。

「そうなんですか？ 才能は抜群といった感じでしたけれど。」

まあとにかく、ルイーダの酒場に向かいましょうか！」

元気良く案内を始めるマタリ。

私はその元気に押されながらも、素直に後をついていく事にした。

背負った袋から、先程さり気なくつめこんだ果物を取り出すと、口へと投げ入れる。

果物の果汁が口一杯に広がり、その甘さが疲れを癒してくれる。

「やれやれ、どうなることやら。まあ、なるようになるかな」

種を勢い良く口から吹き出すと、前を進むマタリの頭につっかかり当

たつてしまった。

怪訝な顔をしてあたりを見回すマタリ。

私は素知らぬ顔をして、『どうかした？』と、とぼけておいた。

第一話 勇者が現れた（後書き）

本文一行目でオチがついています。

ご覧頂きまして、本当にありがとうございます。

第二話 勇者と悪夢、後二日酔い

「……ど、どういふこと？」

突然告げられた言葉に動揺を隠すことができず、思わず声が震えてしまう。

「今申し上げた通りです。俺達はもう貴方についていく事が出来ない」

「申し訳ありません勇者様。ですが、貴方のレベルに我々は追いついていけない。」

我々は普通の人間なので。……貴方とは、違うのです」

「私達は私達なりに、この世界の為に尽くすつもりです。道は違いますが、

たどり着く場所は同じです。ですから……」

「そ、そんな。今まで一緒に頑張ってきたのに。」

私もつと頑張るから、だから！」

どんな辛い敵、険しいダンジョンでも、皆がいたから戦ってこれた。一人では無理だ。旅は続けられない。私だけではとても無理だ。

「……もう限界なんです。これは俺達三人で話し合っただけで決めたこととです。」

以前から思っていました、今日確信しました」

「客観的に見ても、我々は貴方の足を引っ張っている。」

先日の戦いでも、貴方は常に我々を庇いつつ戦っていた。残念ですが、最早我々は貴方の戦力にならないのです。むしろ、助ける所か足を引っ張る始末。既に邪魔者でしかない」

「今まで買い与えていただいた装備は全てお返しします。志半ばでこのような形になるのは、非常に心苦しいですが。

……それでは失礼します。もうお会いすることもないでしょう」

感情を押し殺したような声で、仲間の一人が私に告げる。

武器防具を置いて、皆出て行ってしまおう。

私はそれを呼び止めようとするが、足が動かない。

早く引き止めないと、皆行ってしまつのに。

「み、皆。待つて。ね、ねえ、お願い待つて!!」

お願いだから、私を一人にしないで。

一人は寂しすぎる。これからも私が皆をカバーするから。

もっと頑張る。誰にも負けなくらいに頑張る。死んでも頑張るから。

だから。だから。

「一人にしないで！ 私は、私はッ！」

少し離れた場所で、三人が足を止めて私を振り返る。

私の願いが伝わったのだろうか。

希望を籠めて、三人の顔を見つめる。

その内の誰かが、怯えたような顔つきで呟く。

『……………化け物』

「……………またあの夢か。胸糞悪い。もう私は全然気にしてないって言うのよ」

乱れた呼吸を落ち着かせ、大きく深呼吸をする。

隣のベッドには、マタリがすやすやと安らかに眠っている。

非常に気持ち良さそうであり、少しだけイラツとする。

「やれやれ、目が覚めちゃったわ。……………気分転換に下の様子でも見てくるとするかな。」

「なんだか喉も渴いちゃったし」

誰にともなく独り言を呟く。

これは私の悪癖とでもいうのだろうか。

長く続いた一人旅において、いつからか分からないが身に付けてしまったものだ。

思ったことをすぐに口に出す。

薄暗く気持ち悪いぐらい静かな洞窟やら迷宮では、とにかく話していないと気が触れそうになる。

というか、もしかしたら既に狂っているのかもしれないが。

まあそれはそれで構わない。これからは私の好きなように生きるのだから。

下着姿から、たびびとのふくへと素早く着替え、一応ひのきのぼうを装備する。

そのうちに武器も新調するべきだろうか。

呪文で戦えば良いのだろうか、あまり派手にやりすぎるのもどうなのだろう。

かといって、いつまでもひのきのぼうというのはアレだ。格好悪い。勇者たるもの、装備も一級品を目指すべきだ。格好良いから。

「そういえば、この世界の魔法ってまだ見たことないな。マタリは剣が得物っぽいから、魔法は使えなさそうだし。今度どこかで見てみたいなあ」

腰ベルトに袋を縛りつけ、部屋を後にする。

なんで相部屋なのかは意味が分からないが、マタリが強く希望したので断りきれなかった。

何でも、『探索許可証』を手に入れるまでは絶対に実家に帰らないぞうだ。

ならば、宿泊費を折半したほうが経済的であると主張した。

お金にあまり余裕がない私は、損する話ではないと判断し、素直に受け入れることにした。

盗まれて困るような物もないし、この娘の育ちからいけばそのよう

な事はしないだろうから。

部屋を出て、階段を下りていくとワイワイと喧騒が聞こえてくる。この酒場はほぼ一日営業しているらしく、朝方のわずかな時間だけ仕込みの為に閉店することだ。

実際は客はその間もグダグダしているらしく、実質上二十四時間営業といえるだろう。

なんともご苦労なことである。

酔っ払い達を尻目に、私はカウンター席につく。酒場のマスターがこちらを向いて、怪訝そうな視線を送ってくる。

「いらっしやい……と言いたいが、ここは子供の来る場所じゃない。さっさと部屋に戻ってミルクでも飲んでな」

「私は子供じゃないし、ミルクは好きじゃない。いいからとっとと酒を出しなさい」

トントンと指でテーブルを叩く。酒場でミルクを飲んでどうするのか。そういうのはマタリにお似合いである。

「やれやれ、最近の子供は大人の言うことを聞きやしない。それにミルクを飲まないからそんなに小さいんだ。まったくやれやれだ」

マスターは軽いため息を吐くと、適当に見繕った酒をこちらへ提供してくる。

私はそれをチビチビ飲んでいく。

胸に染み渡るこの味。うーん、堪らない。

「ねえ、私この街に来てから日が浅いの。もう一杯注文するから、ちょっと色々教えてくれない？」

上目遣いにウインクする。チラリとこちらを見たマスターの顔がたちまち歪む。

「……………」

「おい」

「……………」

失礼な奴である。女神のウインクといわれたこの私の特技が。魔物に使ったらおびえてすみあがっていたけど。私を何だと思っているのだ。

とにかく情報収集は旅の基本である。

そして情報が集まる場所といえば酒場。これがセオリーだ。

『人の話を聞く』、『人の話を思い出す』。

これは忘れてはいけない。冒険者として当たり前のことである。

「ねえったら」

「はあ、子供の上に世間知らずと来たもんだ。全く世も末だ。世界の破滅も近いのかね。地下から魔王が這い出てくるって噂もいよいよ現実味を帯びてきたな。

こりゃ見の振り方を考える必要があるそうだ」

ブツブツと失礼なことを言っている。
客商売なのにとんでもない話である。

「うるさいわね。子供じゃないって言ってるでしょう」

「そうかそうか。まあ事情は分かった。一応お客様だからな。

俺の知っている事なら教えるでしょうか。どうせこれから暇だしな」

周りを見回すマスター。

もはや客は出来上がっており、テーブルの酒を適当にあおっているだけだ。

料理の注文はこの先当分ないだろう。

「どうもありがとう。流石は大人ね」

「やかましい」

苦笑すると、空になったグラスに酒を注ぎ足すマスター。

これでアレがあれば最高なんだけどな。

明日にでも道具屋にいったって買い込むでしょう。

冒険の必需品だしね。

「それで結局、なんで皆この街の地下迷宮に挑むの？

なんか美味しい話があるんでしょ？ だって危険そうだし」

率直に聞く。実は良くわかっていなかったから。

通りすがりに小耳に挟み、噂の地下迷宮に行ってみようと思っただけの話。

それでなんとたら協会に申請に行ってみたら、大行列を作っているで

はないか。
人が大勢いるということは、そこには惹きつける何かがあるということだ。
楽して生きるためには、美味しい話にどんどん乗っていかなければならぬ。

マスターは心底呆れたように話し出す。

「……お前そんなことも知らないで、この街にいるのか。
世間知らずも程ほどにしないと、本当に命を落とすことになるぞ」

「だからこうして情報を集めているんですよ」

「そういうことは来る前に調べておけ。
来てから調べる馬鹿がどこの世界にいる」

ここにいて。けれど来てたくて来たわけじゃない。
目的を果たして帰ろうとしたら、大穴に落とされたのだから。
これは不可抗力というやつだ。

「急だったから仕方ないじゃない」

「呆れて言葉も出ない。が、人それぞれだから構わないけどな」

「流石は大人」

グラスを磨く手を止め、本当に仕方がない奴だと愚痴った後、話し始める。

「早い話、教団から『星』を貰うためだな。」

一つだけでも、十分遊んで暮らせる。二つ星なら笑いが止まらない生活が送れるだろうよ。

三つ星でも手に入れようものなら、国の英雄クラスだな。皆から認められること間違いなしだ」

「教団？ 星？」

「教団つてのは、この街を実質上仕切っている『スリースター教団』だ。

星の導きでうんたらかいたら言ってる変な奴らだ。

言ってることはアレだが、権力は凄まじいぞ。大陸三国に匹敵する財力と兵力を持つてるからな」

「ふーん」

「それで『三国及び、スリースター教団により公平かつ平等に管理運営される協会』、

その通称『協会』から依頼を受けて、どんどん成果を積み上げていく。

まあこの協会のトップが、教団の教祖だからな。実質教団支配下と変わらないのさ。

それが一定に達すると、晴れて『星』をもらえるって寸法だ」

「も、もう一度お願い。頭に入っていないわ」

早口言葉になりそうな協会名だ。長すぎる。

それに一体なんなんだ、『公平かつ平等に』って。

あからさますぎて、逆に不平等な印象を与えていると思う。なんというか、胡散臭すぎる。

「三国及び、スリースター教団により公平かつ平等に管理運営される協会だ。

重要なことだからしっかりと覚えておけ」

すらすらと諳んじてみせるマスター。

少しだけ見直した。

「なんたら協会が良いわよ。長すぎるわ」

「そんな言葉を聞かれたら、教団の奴らにぶん殴られるぞ。あいつら武闘派揃いの、ネジが一本イカれた連中だからな」

「マスターの方がやばいこと言ってるじゃないの」

「俺は良いんだよ。褒めているんだからな。

何しろ俺はスリースター教を、心の底から崇め奉っているからな。

我らに『星の導きあれ』ってな」

全く本心には聞こえない言葉を口から垂れ流すマスター。

天に向かって祈りをささげているが、態度がわざとらしい。

「あつそ」

「俺を超えるほどの熱心な教徒は、この街には存在しないだろうな。なにしろむしり取られている金、いやお布施も凄まじい額だからな」

「苦労してるのね」

「生きるってことは苦労の連続さ。これは親父の受け売りだがね」

しみじみと語るマスター。

マスターの人生についてはとりあえず置いておくとして、

『教団』について少し考えてみる。

この感じでは権力はあっても、布教はいまいち進んでいないらしい。しかしながらこの集団が協会を掌握している以上、争いを起こすのはあまり賢くないだろう。

ああいう連中は、一度敵対すると非常に面倒くさい。

次に教団からもらえるという『星』について考える。

星をゲットすれば遊んで暮らせるらしい。

しかも二つてにいれば笑いが止まらないとは。

所謂ウハウハというやつではないだろうか。

三つ手に入れるのはやめておこう。英雄なんかもう真っ平ごめんである。

誰からも崇められ、そして誰からも恐れられ、今まで良い事など何一つなかった。

『勇者』を捨てるつもりは全くないが、使い捨ての英雄になど死んでもならない。

当面の目標は決まりだ。

二つ星を手に入れて、『笑いの止まらない生活』を送る。
考えるだけで、思わず笑みが零れてしまいそうだ。

でも、笑いの止まらない生活ってなんだろう。

「とはいえ、世の中そんなに上手い事ばかりじゃない。協会からの依頼ってのは地下迷宮深部に関することばかりだ。生半可な腕じゃ、魔物の餌になって終わりだな」

「そうなんだ」

「ギルドの依頼をこなして、小銭を稼ぐ。腕を磨いて、協会の依頼を達成することを目指す。

これがこの街にいる奴らの行動方針だ。馬鹿でもわかるだろ」
「なあ？ と生暖かい視線を向けてくる。

「今私を馬鹿扱いた？ ねえ」

「気のせいだろ」

「そうかしら」

「もちろんだとも」

私の言葉を軽く受け流し、何で俺が案内役みたいなことをと、また愚痴っているマスター！。

仕方ないので、機嫌をとる為にもう一杯注文する。

本当は空になったからなのだが。酒は百薬の長である。

苦しいこともお酒があれば忘れることが出来る。私の人生の友である。

決して酒に溺れている訳ではない。

マスターが子供の癖にペースが速いと小言を漏らす。

私は当然無視をする。

すぐに新しい酒で満たされる。

「ちなみにそこらで酒を飲んでる奴らが、お前の同業者だ。

どうだ？ どいつもこいつも良い顔してるだろう。

壁にぶつかって挫折した奴や、仲間を失って途方にくれてる奴、手に入れた栄光に笑いが止まらない奴。

俺はそうだった顔を眺めるのが、密かな生き甲斐なんだ。

お前はいつたいどうなるんだろうな。実に楽しみだ」

「嫌な生き甲斐ね。もっと楽しいことを探しなさいよ」

「ほっとけ」

小さく笑いを漏らすと、再びグラスを磨き始める。

私は笑いを漏らす側にまわりたい。というか絶対そうやってみせる。

「それで、この酒場で仲間を探すというわけ？」

「ここは二つ星認定を受けた酒場だからな。

協会、ギルド両方の依頼を請け負うことができる。

仲間を探したり、情報を集めるにはうつつつけて訳だな」

「ところでルイーダの酒場なのに、マスターは男なのね」

「迷宮関連は、ルイーダの奴がやってるよ。俺は酒場業に専念してるのさ。」

まあルイーダはグースカ寝てるがね。わざわざ夜中に迷宮に向かう自殺志願者はいないからな」

「そつか。大体の事は分かったわ。」

どうもありがとうマスター。これからもよろしくね」

グラスの中身を一気に飲み干すと、席を立ち上がる。

「これからがあれば良いけどな。精々命は大事にすることだ。死んだら終わり、やり直しは効かないんだからな」

「死んだら終わり？ 普通はそうよね。」

でも違う人間もいるかもしれないわね。」

そいつが本当に人間かどうかも怪しいけれど」

「……そういう話は教団の奴らとやってくれ。」

泣きながら説法を聞かせてくれるだろうよ。目から星が飛び出るくらいにな」

しゅしゅと追い払うような仕草をするマスター。

私は軽く笑うと、代金をカウンターに置く。

「それじゃあ、お休みなさい」

「……ああ。って、あと数時間で朝だけだな」

ふぁーと大きな欠伸をしながら部屋に戻り、素早く服を脱いでベッドに潜り込む。

相変わらずマタリはすやすやと眠っている。

こうして安心して眠れるというのは幸せなことだ。

この娘もいずれ『汚れる』のだろうか。

それともそれを知らないまま冒険を止め、幸せな生活を送るのだろうか。

愛らしい子供を抱き、昔は剣を取って無茶をしたものと、目を細めて英雄譚を語るのだろうか。

まあどちらでも良いけれど。

「おはようございます、アレルさん……っってお酒臭いです！」

鼻をつまんで非難めいた視線を送ってくるマタリ。

頭が痛いから大きな声を出さないでほしい。

「おはようマタリ。なんでお酒臭いんだろう。不思議ね」

「……全然不思議じゃありません。夜中にお酒を飲んだんでしょ。今日はギルドで正式に活動を始める初日なんですよ！」

「なーに景気付けってやつよ……おエツ。うっ、中身が出そう。

今日は日が悪いから出かけるの止めようかしら。

なんか天気も悪いし。先行きが危ぶまれるわ」

窓から外を眺める。雲ひとつない快晴だ。

実に気分が悪い。目に眩しさが突き刺さる。

今私の体力はどんどん低下している。

「どこが天気が悪いんですか！ 爽やかで、本当に素晴らしい快晴ですよ！

お日様も私達を祝福してくれています！

とにかくさっさと着替えて、顔を洗ってください。

早くしないと、集合時間に間に合わなくなりますよ！」

あくせくと動き回るマタリ。

着替えるのを健気にも手伝ってくれる。

この娘はきつと、将来立派な嫁になるだろう。

勇者お墨付きである。

「……よしっ、これで大丈夫です。

さあ顔を洗って、ご飯を食べて元気に出かけましょう！」

鎧を着込んだマタリが元気よく声を出す。

その声がガンガン頭に響き、ぶっ倒れそうになる。

二日酔いに、元気印は非常に堪える。

「……そうね。元気にいきましようか。元気に。……おエツプ」

手で口を押さえて、吐き気を堪えながら返事をする。

消え入りそうなため息を吐きだすと、

マタリの後を追いかけて部屋を後にした。

これは所謂二日酔いというやつだろうか。ステータス的には『どく？』

「……やっぱりお前、人生舐めているだろう」

「……舐めてないわ。ちょっと具合が悪いだけ。

私は見掛け通りデリケートだから」

「ふざけた装備に、初日から二日酔い。ここまで舐めきった新人はお前が始めてだ。

馬鹿なのか豪快なのか、評価に迷うところだな」

腕を組んで、眉を顰めるロブ。迷っているどころか、大馬鹿者を見る目である。

集まった数十人の新ギルドメンバー達の前で、散々罵倒されるこの状況。

これで私の評価はガタ落ち確定である。
底辺の底辺という奴だろう。ある意味凄いのだろうか。

この一件がなかったとしても、評価には大した違いはなかっただろうけれど。

新人達はそれぞれが、自慢の装備に身を包み、誇らしげに振舞っている。

豪華な装備、家紋の入った武具一式、魔法のエンチャントがどうのこうのと蘊蓄を語っている。

金額にして数万ゴールドぐらいはしそうな感じである。

貴族のボンボンやら、どっかの国の有名な騎士の息子、英雄志願の若者で溢れかえっている。

わかっていない奴らだ。そんなものは所詮は道具。
使い手たる自分だけがレベルアップしなければ……。

「オエツプ。だ、大丈夫。私は常に万全を期するからね。
これぐらいでぶっ倒れたりはしないのよ」

「あ、アレルさん。フラついてますよ。私の肩に掴まってください」

「あ、ありがとうマタリ。ちょっと失礼するわね」

少しだけ屈んだマタリの肩に、盛大に寄りかかる。
ういーっ。だるいわ。死ぬ。

(なんだいありゃ)

(どっかの世間知らずの馬鹿娘が遊びのつもりで来たんだろ)

(まあ一番に死ぬのは間違いないな)

(巻き添えを食らわないようにした方が良いな。下手に組まされたりしたらこっちまで危険だ)

(まったく、地下迷宮も舐められたもんだな。観光地じゃないんだぞ)

どことなく冷たい視線が突き刺さるが、私は全然気にしない。

これぐらいでくじけるようでは、勇者は務まらない。

『くじけぬこころ』、それこそが勇者に必要なモノなのだから！

「それでは気を取り直して、会合を始める。

今日はお前達新ギルドメンバーが一同に会する日でもある。

既に仕事に取りかかっている者もいれば、そうでない者もいるだろう」

辺りを見回し、最後に私を見つめてくるロブ。

何かを計る様なその目つきに、私は薄ら笑いを浮かべて挑発的に返す。

ロブは視線を逸らすと、話を続ける。

この男、私の実力になんか感づいているな？

戦士の勘って奴なのかな。なかなか鋭い。

「それぞれが希望する職業に向けて、鍛錬を積んでいくことだ。

そして、とにかく『生き残る』こと。これが最重要だ。

死ななければ、何度でもやり直しは効くんだからな」

命を大事に。命を大事に。

死んだらお終い。死んだらお終い。

誰もが唱えるお題目。そんなに死ぬのが嫌なら家で引き籠もっていれば良いのだ。

そんな事を考える私の性格は破綻している。

「これからお前達には、ギルドの依頼をこなしていつてもらうことになる。」

他のギルドとも同じ依頼だから、パーティを組むのが良いだろう。見事達成すれば、小銭を支給する。分かったな？」

ロブの言葉に、新人の一人が手を上げて質問する。

おニユーの装備が実に微笑ましい。

「その、依頼とは何なのでしょうか。第一、我々は地下迷宮には入れないのでしょうか？」

「良い質問だ。これからお前達には『仮許可証』を支給する。

こいつは三時間だけ、地下迷宮の活動を許されるものだ。

時間が来れば、強制的に帰還呪文が働くってわけだ。どうだ、凄いだろう？」

「さ、三時間ですか」

「そうだ。まあ簡単にいうと、『探索許可証』を持っている奴等の露払いが主な仕事だ。

しょうもない上層で消耗されてちゃ、探索が進まないからな。

お前達は腕を磨けて、ベテランはサクサク進める。迷宮のゴミは片付いて、協会は潤う。

良い事尽くめだろう」

「は、はあ」

「ちなみに許可証はアイテムではなく、魔術による刻印だ。そそっかしい奴が『うっかり』なくしても大丈夫なようにな。

死んでも発動するから、何にも心配はいらないぞ。ちゃんと埋葬してやるからな」

放っておくとゾンビになるからとのことだ。

首なし死体がゴロゴロ来たときはうんざりするがな、とロブは豪快に笑う。

しばらく笑った後、また真剣な顔つきに戻り、もう一度念押しする。

「とにかく、最初の一年は生き残ることを優先しろ。そうすれば己の適正も見えてくる。

……新人の七割は、最初の一年で脱落するからな」

死んだり、諦めたり、別の道を探したりとのことだ。

まあそのぐらい脱落者が出なければ、ギルドが人で溢れてしまうのだろう。

「その、ギルドマスターは星をお持ちなんですか？」

新人の一人が確認するように尋ねる。ロブの実力について知りたいのだろう。

「ああ、俺は一つ星だ。一応それなりに下まで潜ったこともある。

まあ今はお前達のような、後進の指導役だな」

鎧の肩部を外すとそこには一つ星の刻印があった。刺青のようであり、黄色く鈍い輝きを放っている。

これも魔術による刻印なのだろう。ということはいずれ、アレが私にもつくのか。

ちよつと嫌だな。なんか格好悪いし。

「そ、そんなんですか。どうもありがとうございます！」

感動したように、新人が深く頭を下げる。

たかが星一つであそこまで感動できるとは羨ましい。

額に自作の星シールでも張っていれば良いのだ。

皆がひれ伏すだろう。私はきつと大笑いしている。

というか、『探索許可証』なんてなくても、小銭だけで暮らしていけそうな感じもする。

三時間あれば、相当奥まですすめるだろうし。

ちよつと聞いてみるか。

「正式な許可証がなくても、協会の依頼を達成したら星って貰えるの？」

「……貰えないという規則はないが、余計なことは考えないことだ。たった三時間で協会の依頼に関われるほどの深部までは潜れない。あまり迷宮を舐めない方が良いぞ」

「それと、七割脱落する割には、協会は行列を作っていたと思うんだけど。

あれは一体なんで？ あそこは探索許可証を申請する場所なんでし

「よう？」

「登録にはいろいろと時間がかかるからな。

だが、一番の原因は、お前みたいなの『人の話を聞かない』連中が毎回大拳して押しかけるからだ。

何度説明してもそのたびに面子が変わるから、協会もアホらしくなつて匙を投げたのさ」

非常にキツイイヤミを頂いた。

というか、なんで私が『人の話を聞かない』と言われたのを知っているのか。

そんなどうでも良い噂を流している馬鹿がいるのだろうか。

あの受付の眼鏡女か。おのれ。

まあとりあえず、形だけでも感謝を表しておこう。

一応ギルドマスターだから偉いわけだし。

人付き合いは譲歩も大事である。

「そっか。どうもありがとう」

「……もう少し言葉には説得力を持たせるんだな。全く心が籠っていない」

「あい」

(アイツ、一番に死ぬだろうな)

(三日以内にいなくなつてそうだ)

(装備も棒切れにただの普段着だしな。頭がおかしいんじゃないか)

(マタリお嬢様も、変なのにとわりつかれて大変だな)

(没落貴族にはお似合いだろ)

(おい！ 仮にもアートの一族だぞ)

(フン、偉大なのはG・アート卿で、子孫じゃないからな)

周りの視線が突き刺さるが気にしない。

陰口は私だから聞き取ることが出来るほど、小さなものだ。

マタリがおどおどとしているが、私は全然気にしない。

だって勇者だもの。

ロブは気を取り直しすように咳払いを一つする。

「ギルドからの依頼はたった一つ。

『地下迷宮の掃除』だ。殺した魔物の一部を持ち帰れば、それに見合った報酬を渡す。

くれぐれも無理はしないように。それでは解散！」

『おっ！』

気合のこもったロブの掛け声により、新人達は元気よく返事を返す。

私は、へーいと気の抜けた返事をしておいた。

まだ酒が抜けていない。

「ど、どうしましょうアレルさん。とりあえず迷宮行って見ますか？

それとも、酒場で仲間を探しましょうか」

「あれ、アンタ私と行動する気だったの？

どうみても私貧乏くじだけど。それに二日酔いだし」

いつの間にか仲間に加わっていたらしいマタリ。

全然気付かなかった。

「は、はい。こうして一緒になったのも何かの縁ですし。もし宜しければ」

「んー、別に構わないけど、周りの目があるんじゃない？
アンタ名のある一族なんですよ。変な噂が立つわよ」

「いえ、そんなことは全然気にしません。

以前にもお話したとおり、最早過去の栄光ですから。

私は自分の手で、栄光を取り戻して見せます！」

拳を強く握り、目をギラギラと熱く滾らせている。

あ、暑苦しいわ。性格はねっけつかんか、おせっかいね。間違いないわ。

「そう、じゃあとりあえず見物がてら行きましょうか。

どのくらいの難易度かによって、仲間集めを検討するしましょう」

「そうですね、百聞は一見に如かずと言いますし。

何事も経験してみないと駄目ですよね！」

そうは言ったものの、私の仲間になってくれる奴などいないだろう。

マタリもいずれは離れていくに違いない。

来るもの拒まず、去るもの追わず。それが今の私だ。

結局のところ、最後に頼れるのは自分だけ。

魔王の心臓に、刃を突き刺したときに私は悟ったのだ。

一人でなんでもできる。それが勇者という存在なのだ。

剣では戦士に合わず、魔法では魔法使いに合わない。

回復は僧侶に比べ中途半端で、素早さは武闘家には及ばない。

だが総合的に上回っているのは勇者だ。
だから私は一人でここまでこれた。それが何よりの証明だ。

「アレルさーん、どうしたんですか？ 追いつちやいますよ！」

少し離れた場所で、マタリがこちらを振り向き声を掛けてくる。
鎧のガチャガチャという音がこちらまで響いてくる。
私は苦笑いを浮かべると、マタリに向かって手を振る。

「……さてさて、噂の地下迷宮とやらとの初顔合わせか。
どんな敵が出てくることやら。まあなんとかなるか。
今までもどうにか頑張ってきたしね」

口から出てくる独り言。
ひのきのぼうを杖代わりにし、フラつく身体を支えながら私は歩を進める。

何故か滲む視界に、かつての仲間達の後姿が見えた気がした。
幻だということは分かっているのに。
私の動悸が早くなる。心臓を打つ音がやけに大きく聞こえ始める。
転びそうになりながらも、私は歩くペースを速める。
そうしないと置いて行かれてしまうから。

バランスを崩し、私は地面に顔から倒れこんでしまう。
泥まみれになりながら、目をこすってもう一度確認する。

そこには、こちらへ向かって心配そうに駆けてくるマタリの姿があった。

第二話 勇者と悪夢、後二日酔い（後書き）

どうもにんぽっぼです。

アレルは16歳、容姿はSFC準拠です。

以下、今はまだどうでも良い設定一覧。飛ばしても全然構いません。いずれ話数が増えてきたら、分離します。

貨幣価値と相場

銅貨1枚1G 銀貨1枚 1000G 金貨1枚 10000G
アート印貨 100000G
やくそう1個：銅貨8枚 宿泊料一泊食事付：銅貨20枚

・アートの街

地下迷宮を囲むように円形に作られた巨大な要塞都市。

外部の侵攻を防ぐ大壁と、内部からの侵攻を防ぐ大結界が存在する。

地下迷宮は大結界により完全に覆われており、

下級魔物は触れるだけで即死すると伝えられている。

迷宮へ進入するためには、結界を抜ける為の魔術刻印が必要。

300年前に結界を張り、魔物の侵攻を防いだのは、街の創設者ゴ
ールデン・アート。

ムンドノーヴォ大陸中心に位置しており、永久中立を宣言している。
各国とは平和協定を結んでいる。

『アートのまちへようこそ』

・アート一族 丸にAの家紋。

ゴールデン・アートの働きにより、独立権を持つ都市と貴族階級を

手に入れる。

だが子孫の放蕩により資産は底をつき、教団により街の支配権を奪われる。

かつての栄光の名残は、銅貨100000枚分の価値を持つアート印貨にのみ見ることが出来る。

家訓によりアートの一族として認められるには、協会から『探索許可証』を取得しなければならない。

すでに形骸化し、それを守っているものは最早いない。

『決して驕る事無かれ。さすれば栄光は持続する』

・スリースター教団 青地に黄三ツ星の旗印。

教団への貢献度を星で認定する。独自の私兵団を組織しており、外部からの干渉を一切認めない。

三国全てが正教として認可している。

『星の導きあれ』

・三国及び、スリースター教団により公平かつ平等に管理運営される協会

『協会』が通称。実際は教団が実権を握っている。

星の権威は大陸全土で通用する。

『星は血であり、また命でもある』

・UU連合 大陸北方面 赤地にU2の旗印。

大陸一の強国だったが、二国に挟まれ勢いは衰える一方。読みはユーツー。

『連合の手に、昔日の栄光を』

・キーランド王国 大陸西方面 白地に黒鍵の旗印。
UU連合と激戦を繰り広げていたが、魔物の出現により和睦。現在は冷戦状態。

『連合に死を。帝国と共存を。王国に栄光を』

・ドールバックス帝国 大陸東方面 白地に駆ける天馬の旗印。
貿易により勢力を拡大。魔物出現の混乱に乗じてUU連合から独立を果たす。

経済による支配権拡大を目指す。

王国、教団との関係を強化している。

『輝く黄金こそが我らの兵。決して滅ぶことはない』

第三話 勇者とネズミ

「ここはルイーダの酒場。旅人たちが仲間をもとめて集まる出会いと別れの酒場」

ルイーダがいつものように声を掛けてくる。
いつもとはいえ、私が聞くのは数回程度だが。
最初は旅立ちの時だ。
あの日の事は、今でも思い出すことができる。

「……こんにちは。あの、仲間になってくれる人を探しているのですが」

私がそう話しかけると、周りにいた冒険者達が顔を背ける。
ルイーダは営業スマイルを崩すことはなく、登録されている名簿を眺め始める。

「んーそうねえ。丁度戦士、魔法使い、僧侶が誘いを待っているわね。」

後は商人や遊び人といったところだけだ」

「じゃ、じゃあ最初の三人でお願いします」

私の言葉に、後ろで座っていた男が大きな音を出して立ち上がる。

「お、おいリーダー！ お前、俺に死ねっというのか！」

「登録している以上、アンタに拒否する権利はないわよ。国から金貰った上に、こうして遊んでくらすってんだからね。少しは世の中の為に働いて来な！」

リーダーが名簿を叩きつけた上で、冷たく言い放つ。

「あんな端金で死ねるか！ ふざけるな！」

酒瓶をテーブルに叩きつける男。

「その端金にホイホイ飛びついた癖に良く言えたもんだ！ ただ飯ばかり食ってないで、さつさと準備しな！」

「じよ、じよ、冗談じゃないわよ。」

噂じゃあこれからネクロゴンドに行くらしいじゃないか。

あんな場所に連れて行かれたら、私達は即座にあの世行きさ！」

「そ、そうですぞ。勇者殿、我らなぞ連れていった所で戦力なるはずがありません！」

もう一度お考え直しくだされ！」

年老いた魔法使いが、懇願するように頼み込んでくる。

「で、でも。私一人じゃこれからの旅はできないし。」

勿論、ネクロゴンドに突入する前にしっかり準備もするから」

「そ、そんな無茶な」

「グダグダ言ってるじゃないわよ。これ以上舐めた事言ってる、違約金支払いと牢屋行きさ。」

契約の時に何回も念押しした通りにね。覚えてないとは言わせないよー!」

ルイーダが怒鳴り声を上げ、備え付けのベルをチリンと鳴らす。

その音を聞き付け、カウンターの奥から武装した用心棒の男が数名現われる。

普段は雑務担当だが、冒険者同士の争いを阻止するのが本業である。当然、それなりの実力者“だった”人間である。

引退した今、冒険者達には遅れを取るだろうが、その間に警備兵達が駆けつける手筈となっている。

「……わ、分かった。勇者殿のパーティに加わる」

「そ、そうね。牢屋行きなんてまっぴらよ」

「……………」

全く納得していない表情だが、一応は同意してくれた。

時間はかかるかもしれないが、きっと旅をしている内に分かってくるはずだ。

本当は私だって怖い。それでも誰かがやらなければいけないのだから。

「ど、どうもありがとう。私の名前はアレル。アリアハンのアレル。この世界を救うために、一緒に頑張ろう」

その言葉に対する返事は、敵意の籠った視線だった。

「アレルよ。ルイーダから大体の事情は聞かせてもらった。これから幾つか質問をするので正直に答えてもらいたい」

玉座に座り険しい表情の王が、頭を垂れ跪く私に声を掛ける。

「……はい陛下、神に誓って嘘は申しません」

「よろしい」

隣に控えている大臣に目配せすると、書類が王へと手渡される。

「まず、旅立ちの際に仲間に加えた者達が、離脱した理由を聞かせてもらいたい。

……彼らに聞いても口を閉ざし、それが何故かを答えようとはしないのだ。

無論、それぞれが実力者であり善良であることは承知している」

別に罰を与えるつもりはない、何があったのかを知りたいだけだと王は付け加える。

「私が急ぎすぎたのだと思います。一刻も早く世界に平和をと。そして魔王を倒すべきであると。その分無理をしすぎました」

私は正直に答える。あれから何度も原因を考えた。全ての責任は自分にある。

「それは間違いではない。こうしている間にも、魔物の手にかかり死んでいく者達がいるのだから。」

だが彼らとて、多くの困難が立ちはだかることは承知していた筈だ。でなければこれまで戦ってこれたとは思えん」

納得出来ないといった表情で呟く王。

「……決定的だったのは、サマンオサの偽王の一件です。ポストロールとの戦いの後、全てが変わってしまったと考えます」

「その事件の詳細は聞いている。姿を変えて国を乗っ取るうとは恐ろしいことよ。」

……して、その戦いで一体なにがあったのか」

「正体を現したポストロールの強さは、大変恐ろしいものでした。あの時の私達が勝てたのは奇跡と言っても良いでしょう。」

……私は、勝つために全ての道具、あらゆる呪文を使い、倒れた仲間を無理やり助け上げました。

何度倒れようと、何度意識が失われようと。例え血を吐き、骨折れ、拒絶の悲鳴を上げようと」

トロルの首領との激戦が脳裏に浮かぶ。

恐るべきスタミナ、脅威の破壊力、守備力を低下させる呪文を使いこなす化け物だった。

巨大な図体に似合わぬ敏捷さ。

自慢の怪力で振り回される棍棒は、一撃で仲間を昏倒させた。

ありったけの攻撃、呪文を喰らわせても、まるで倒せる気がしなかった。

「だが、最後には勝利した」

「……はい。私は自分だけで戦いきることを選択しました。もう彼らには戦う意思が残っていなかったから。」

私はどれだけの攻撃を受けようと、必死で我慢しました。

自分で自分を治療し、何度も何度も剣を突き刺しました」

痛みを押し殺し、相打ち覚悟で何度も何度も突き刺した。

最後の最後、もう魔法力、生命力も尽きようとしたその時。

私の最後の一撃が、相手の急所を捉えた。まさに会心の一撃。

本当に勝てたのは奇跡だった。偶然の賜物だ。

勝利の代償は仲間の信頼だ。彼らには勝利を喜ぶ気持ちなど既になかっただろう。

「彼らは普通の人間だ。生まれながらにして勇者のお前とは違う。だからこそ己の限界を知り、自ら離れていったのだろう。」

その選択が正しいとは思わんがな。己の事しか考えておらぬ」

「……私も人間です」

「人間である前に勇者だ。お前には世界を救うという死命がある。それをゆめゆめ忘れてはならぬ。お前は勇者オルテガの血を引くただ一人の者なのだから。オルテガ亡き今、お前だけが世界を救うことが出来る」

「……はい」

「彼らには引き続き、魔物との戦いの最前線に立つてもらおうつもりだ。

実力者を遊ばせている余裕は、我が国にはないからな。本人達もそのことは既に了承している」

強い口調で王は言い放つ。

彼らならば、その期待にきつと応えることが出来るだろう。私は彼らの顔を思い出しては消していく。

書類を大臣に返し、次のものが王へと手渡される。

「次の件だが、つい一週間程前、新たに仲間に加えた者達がいるはずだ。

そして、何が言いたいかも察しがついているな？」

「……はい陛下」

「それでは率直に聞こう。

この者達が訴えている事は真か？」

「……一つだけお聞かせください。

彼らは何と？」

私は王の顔を見上げる。

「役立たずと罵倒された挙句、暴力を受け、お前に全ての装備を奪われ解雇されたと。」

よって、自分達は契約には違反しておらず、罰を受ける謂れはない
そうだ」

「……そうですね」

「言いたい事はないのか？ 恐らく事実ではないのだろう。
ルイーダがお前のことを庇っていたのだから。」

何より、お前がそのような事をするとは到底思えない」

「特に言いたい事はありません」

「……そうか、では彼らには追って沙汰を下すことにしよう。
今日は家に帰ってゆっくり休むが良い。相当疲れが溜まっているよ
うだ。」

勇者アレルよ、また会おう」

玉座から静かに立ち上がり、踵を返して退出していく国王。
控えていた大臣、近衛兵達も王の後に続く。
それを見届けた後、私はゆっくりと立ち上がる。

もうここには誰もいない。

今日はもう帰ろう。

「ただいま」

消え入りそうな声で、私は挨拶をする。
その姿を見て、母さんはとても辛そうな顔をする。

「お帰りなさい、わたしの可愛いアレル。」

今日はさぞ疲れたでしょう。もうお休み」

大体の事情は知っているのだろうか。

あの人たちが、城に戻る前に街で噂を広めていったらしい。
自分達は勇者に装備を奪われて追い出されたと。

ルイーダさんは全く信じていなかったが、街の人たちはそうでもないみたいだ。

私が勇者であることを鼻にかけていると思っっているようだ。

「　　待て、アレルや」

「…………お爺ちゃん」

「お義父さま、どうかしたのですか？」

二階から、静かに、だがどこか怒ったような表情で下りて来る。

私をジッと見つめるその視線に、思わず目を逸らしてしまう。

「お前の父オルテガは立派な勇者だった。この爺の息子じゃ！」

「……うん、そうだね」

子供の頃から、何度も何度も聞かされた英雄譚。

私はその姿に憧れた。私もそうなりたいと思った。

その背中はまだまだ遠いけれど。

恐らく追いつく事は出来ないのだろう。

「それに比べお前と来たら、仲間に愛想を尽かされたくらいでしょげているとは情けなくて涙が出るわい！！」

お爺ちゃんが、今まで見たことないくらい顔を真っ赤にして怒っている。

確かに、仲間に愛想を尽かされる勇者なんて情けない。涙が出そうだ。

「お義父さま！ 言い過ぎです！！」

「お前は黙っていないさい。アレルや、まずその涙を止めなさい。

勇者が泣いて良いのは、魔王を倒し、世界を救ったその時だけじゃ。

それまではどんなに悲しくても泣いてはいかん」

先程までとは違い、いつもの優しい表情に戻るお爺ちゃん。

その言葉に従い、私は袖で涙を拭う。

「う、うん」

「良いか、お前の父オルテガも最初は仲間と共に旅をしていたのじや。

だが、途中から一人で旅をするようになった。
何故だか分かるか？」

「な、なんで？」

「オルテガのレベルに着いていけなくなったからじや。
仲間達はそれでも、一緒に連れてってくれと頼み込んだ。
だがオルテガはそれを断った。その気持ちだけで十分だとな」

在りし日の息子の姿を思い浮かべ、お爺ちゃんは誇らしげな笑みを
浮かべる。

「良いかアレル、我が自慢の孫よ。
勇者たるもの、もっと自信と余裕を持たなければならん。
例え苦しくても、辛くても、泣きたくなっても豪快に笑い飛
ばすのじや。

仲間がいなくなったからといってウジウジしているようでは、魔王
を討つ事など到底できん」

「で、でも私一人だけじゃ、無理だよ」

恐ろしい魔物達が、叫び声を上げながら、自分唯一人目掛けて襲い
掛かってくるのだ。

一人で立ち向かうなんて、絶対に無理だ。

「どうしてもか？」

「う、うん」

お爺ちゃんは深い溜息を吐く。

「……そんなお前に、ある物を渡そうと思う。最後の手段と言う奴
じゃな。」

これだけは世に出したくはなかったのじゃが」

後ろに組んでいた手を前に出すお爺ちゃん。

そこには古びた装丁の本があった。どことなく怪しげな光を放っている。

「そ、それは？」

「これはな、かつてオルテガが、とある場所で入手した魔法の本じ
ゃ。」

恐ろしい効果を秘めているから、軽々に読むではならぬと言ってお
った。

……その効果というのはな、『せいかくがかわる』のじゃ」

「せ、性格が変わる？ 本を読んだだけで？」

「そういう魔力を帯びているらしくてな。本を読むこと自体が儀式
になってしまうそうな。」

よって、今までこの爺が大事に大事に仕舞っておいたのじゃ。

誰かが読んでしまつては危険じゃからな」

階段下からゆっくりと近づいてくると、私の手へ本を渡してくる。

古びた表紙の感触がどこか心地よかった。

「……読むと、どんな性格になるの？」

「そうさな、傲岸不遜にして大胆不敵。どんなことがあると、へこたれることはない。

オルテガのように、自信と余裕を併せ持った『豪快』な性格になれること間違いなしじゃ。

この爺が言うのじゃから、本当の本当じゃ

「す、すごい。こんな本があつたなんて」

私は大事な宝物のように本をかかえる。

「ただし、一度変わってしまった性格は二度と元には戻らん。読むときは、もうどうしようもない、本当に追い込まれた最後の最後にするんじゃ。」

決して軽々しい気持ちで開いてはいかんぞ

優しい顔で、諭すように頭を撫でてくるお爺ちゃん。

「う、うん。どうもありがとう。お爺ちゃん、本当にありがとう」

私は、本を強く強く抱きしめた。

「……レルさん、アレルさん！ 聞いてますか!？」

マタリが耳元で大声で叫ぶ。

そんなデカい声を出さなくても十分に聞こえている。

「何、どうかした？」

「どうかした？ じゃないですよ。ここがお望みの道具屋です。到着しましたよ！」

ガチャガチャと鎧の音をさせながら、そこそこに賑わっている店舗を指差す。

地下迷宮入り口へと向かう巨大な通りの一画にあり、看板には雑貨の絵が描いてある。

辺りを見回すと、武器屋、防具屋、魔道具屋？、エトセトラエトセトラ。

もう何があるやら良くわからないほどの賑わいである。

客層は冒険者が殆どであるらしく、呼び込みもあちこちで行われている。

とはいえ、今回の目当ては薬草と毒消し草である。

この巨大な都市ならば、幾つも競合店がありそうではあるが別に特別な品を買っわけではない。

不良品さえ掴まされなければどこだろうと構いはしない。

「あー、どうもありがとう。じゃちょっと買い物してくるから」

「私も道具を補充することにします。万が一があったら危険ですからね」

「分かった。それじゃあ後で」

ヒラヒラと手を振り、マタリに合図を送る。

それを見て訝しげな表情を浮かべる。

「? 一緒に買えばいいじゃないですか。もう生死を共にする仲間なんですから。」

探索費用と報酬は冒険の後に計算しましょう。私ちゃんとメモっておきますから!」

そう言うと、私の肩を押して強引に中へと押し込んでいく。

戦士ギルドを最初から志望していただけあって、中々の腕力の持ち主だ。

「ちょ、ちょっと。そんなに押さないですよ! 逃げたりしないから!」

「良いですから。さ、入った入った!」

結局、私は薬草と毒消し草を数個、マタリは包帯やら良くわからない薬を買い込んだ。

私の手持ちは銅貨80枚ほどだったので、マタリが立て替えてくれ

た。

報酬については、マタリが多めにいきわたるようになければならないだろう。

仮初のパーティーとはいえ、そこはキッチリやらなければならない。

地下迷宮入り口を目指し更に先に進むと、

巨大なアーチ下で星印付きの僧衣を着た男が前に立ちはだかる。

手には戦斧を持ち、頭部は鉄製のヘルムを被っている。

体格もがっしりしており、いかにも戦闘タイプといった感じを受ける。

門番に相応しい実力を持っていると考えると考えてよい筈だ。

「用件はなんだ。立ち入るならば『探索許可証』もしくは『仮許可証』を見せる。」

まあ見る限りギルドに入ったばかりの新人にしか見えんがな」

「……やたらと横柄なのね」

「何か言ったか？」

「別に」

「え、ええと。これで良いですか？」

マタリが素直に手の甲を差し出す。
私もそれに倣い大人しく差し出す。

両名の手の甲には、黒い星と剣の刻印がされている。
これが戦士ギルドのマークなのだそうだ。

『仮許可証』の間は、これを付け続けなければならないらしい。
刻印を外すのは簡単だそうなので、一安心。
刺青みたいに一生涯残るかと思ってしまった。

「二人とも戦士ギルドか。早いうちに魔術師か僧侶ギルドの連中を
誘うんだな。」

魔法がなければ、いずれ頭打ちになる。まあなくても奥に進んでる
イカれた連中にはいることはいるが」

「は、はい。助言ありがとうございます」

「なあに、お前らが稼いでくれれば我らも潤うからな。
ポツクリ死なれては勿体無い。命の無駄遣いだ」

ヘルムの隙間から、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる教団兵。

「はいはい、分かったからとつと中に入れてよ。
いつまで腕を差し出してれば良いわけ？」

「慌てるな。『仮許可証』の連中は、特別に『お布施』をする機会
が与えられているんだ。」

というわけで、迷宮に入りたいたならば銅貨50を支払え。ちなみに
毎回だ」

「な、何それ」

「当たり前だろう。三時間後に現世に連れ戻してやる奇跡をかけてやるんだ。

命の値段と考えると安すぎるだろう。銀貨1枚でも良いぐらいだ」

こ、この野郎！！

銅貨50も払ったら、残り30枚。今日一泊したら終わっちゃうじゃない。

「仕方ありません。アレルさん、素直に支払いましょう。その分魔物を倒して稼げば良いじゃないですか」

「その『アート』の嬢ちゃんの言う通りだ。

しっかり稼げば何の問題もない。いずれ栄光を取り戻すことも叶うだろうよ。

おっと、これは失言だったかな」

教団兵は嘲笑うと、私達を小馬鹿にしたように見下す。

マタリは悔しげな表情を見せるが、何も言い返さなかった。

話していても腹が立つだけだと判断し、素直に銅貨50を差し出す。マタリもそれに続く。

「……よろしい。お前達に『星の導き』がありますように」

教団兵が呪文を唱えると、手の甲の星が輝き始める。

特に何も感じないが、確かに光っている。別に痛かったり熱かったりはしない。

「これは？」

「結界の内部に入れるようになった証だ。既に時間のカウントは始まっているぞ。無駄にしたくなかったら急ぐんだな」

マタリは慌てたように背負った皮袋から懐中時計を取り出す。アートの家紋が入っており、中々の逸品のようだ。動力は魔力か？ なんらかの力を感じる。

「よし、これで大丈夫です。さあ、いよいよ中にはいりましょう！」
時間を確認すると、アーチをくぐり、中へと駆け込んでいく。私もそれを追いかけていく。

結界らしき青白い幕を一気に突破する。別にそこまで慌てる必要はどこにもないのだが。

途中、青い鎧を着た集団が、何かを翳すと一瞬で姿をかき消した。それが何なのか気になりはしたが、とりあえずは置いておく。

「ちょっとマタリ！ 待ちなさい！」

「あ、はい！ ちょうど階段の所です！」

「まったく」

もしかして猪突猛進タイプなのだろうか。装備はオーソドックスな剣と盾だから、慎重だと思っていたのだろうけど。

ちなみに私は、相変わらずの『ひのきのぼう』だ。

意味ありげな石造が見下ろす、かなりの大きさの階段を下る。壁は石レンガの灰色が続く。所々に薄暗い灯りが点っており、視界が遮られることはない。

通路はそれなりに広がっており、余裕で馬車がすれ違つことができらるだろう。

戦闘には不便はないが、当然相手も同条件だ。天井から襲い掛かられる危険性もある。

まあそんなことより、一番突つ込みたいのは。

「ねえ、なんで床に矢印がペイントされてるの？乗ると、勝手に移動するとか？」

床をドンと踏みつける。別に動いたりはしなかった。

踏みつけた床には黄色い矢印がしっかりと塗られている。

少し先を見渡すと、また矢印が記されていた。

「えーと、下り階段への道順みたいですよ。

ベテラン冒険者が時間短縮の為に、自主的に塗ったそうです。この迷宮ガイドブックによると」

皮袋から、なにやら書物を取り出してペラペラめくっている。

「なにそれ」

「迷宮ガイドブック初級篇です。協会発行の正規品です。金貨1枚もしたんですから」

「……なんか良い情報載ってるの？」

「えーと地下10階までの歩き方ですね。あと出現魔物の種類とか。これさえあれば、『探索許可証』ゲット間違いなしって書いてあります。」

でも小さく、何事にも例外というものはあります、って但し書きが少し呆れながらも、どれどれと本を覗く。

1Fに出現するモンスター

・ネズミ 銅貨2枚

・ヘルキャット 銀貨1枚

まれにネズミが大量発生することがあります。危険ですので逃げましょう。

自信があるならば、全部掃除していただくと助かります。

「1Fはネズミと猫か。その本の情報が確かならね」

「金貨1枚もしたんだから、嘘じゃないと思いますよ。」

それに協会発行ですし」

「まあ大体分かったわ。とりあえず、ぶらついて魔物を狩りましょ

う。

時間も限られているしね」

「そうですね。それでは行きましょう！」

矢印通りに進んでいくと、ネズミが現われる。

こちらに向かい、威嚇のポーズを示している。

目が真つ赤に充血し、それなりに鋭いツメを持っているようだ。特筆すべきはその体躯の大きさか。相当デカイ。大ねずみと同じか、少し下ぐらいかだろう。

「こいつら結構でかいわね。数が揃うと結構面倒くさいかも」

棒を手で遊びながら、マタリへと声を掛ける。

「行きます！」

「え？」

私が止める間もなく、ネズミに向かって突進するマタリ。

ネズミが奇声を発して飛び掛るが、盾で強引に払い落とす。

『ギョエ！』

「トドメ！」

腹を見せてバランスを崩したネズミに、マタリは勢いをつけて剣を振り下ろした。

『ギエエエエエエ！！』

串刺しのまま血飛沫を上げ、ネズミは断末魔の声を上げ、やがて動かなくなった。

「…………お見事」

「ありがとうございます！」

剣を抜き、血を払い落とす。

鎧や顔には血飛沫がべっとり付いている。

マタリは全く気にした様子はない。

「アンタ、人の話最後まで聞かないタイプでしょ」

「？ 良く分かりません」

「まあいいわ」

マタリは首を傾げるが、良く分からなかったらしく。始末したネズミの解体へと取りかかる。

無防備に剣を床へと置き、小型のナイフを取り出す。そしてその太い尻尾を切り取るうとする。

「うーん、中々切れませんね」

「思い切り引きちぎったら？」

「やってみます」

尻尾をピンと張り、鋸のように切り裂いていく。

ふと気配を感じ、私は天井を見上げる。

無防備な得物に飛び掛ろうと、5匹のでかいネズミが張り付いて隙を伺っていた。

開けた口から涎が垂れかかっている。

「マタリ。そのまま動かないでね」

「え？」

「『メラ』！』」

手から炎を繰り出すと、天井の一匹に適当に発射する。

『ギヤギヤアアアアッ！！』

「せーの！」

火達磨になりながら、落下してくるそれを、思い切り勢いをつけて棒で横薙ぎにする。

位置的には、マタリの丁度頭上で。

パシャっという飛沫を上げて、ネズミは完全に四散する。跡形もなく、残ったのは黒こげた肉片と尻尾だけ。

その光景を見たネズミは、一目散に逃げようとする。天井を伝って、中々の素早さだ。

「逃がさないわよ。『ギラ』！」

軽く意識を集中し、ネズミの先頭目掛けて火炎を放射する。火は瞬く間にネズミたちに引火し、しばらくもがき苦しんだ後息絶えた。

ベギラマを使わなかったのは簡単だ。私が貧乏性なだけである。出来る限り節約する癖がついている。回復もホイミではなく薬草だ。

それにしても、地下1Fに相応しい雑魚である。ただデカイだけで、攻撃手段は体当たりと、ツメぐらいか。が、油断すると危ないかもしれない。

「ふー、掃除完了っつと」

汗を拭う仕草をとる。別に全然疲れていない。

「天井にいたなんて。全然気付きませんでした」

「油断しちゃ駄目よ。四方八方気を張っていないとね」

人差し指を上げて注意を促す。

私がいる間だけでも、矯正すべきところは指摘しておこう。

「そ、それに。アレルさん魔法使えたんですね。そうならそうと言って下さいよ、もう」

「言っただけ」

「聞いてません！」

血まみれ姿で、プンスカ怒っている。

先程のネズミの血飛沫が、私とマタリを覆い尽くしてしまった。

まあこの程度魔物とやり合うならいつものことである。

ひどいときは体液まみれなのだから。

臭いも慣れれば大丈夫。と自分に言い聞かせるのだ。

「後で詳しく教えて下さいね。」

私も魔法を直接見るのは始めてなんです」

「魔術師やら僧侶ギルドがあるの？」

「街では一般人の魔法使用は禁止ですから。」

それに、魔法の才能がある子供は教団やら国の管理下に置かれてしまします。

魔法の器があるか、ないかの二種類なんだそうですよ」

「ふーん。そこらへん、後で聞かせてね。」

詳しく聞きたいけど、時間が勿体無いものね」

「勿論！ というか、魔法使えるのであれば魔術師ギルドに行った方が良かったのでは？」

せっかく才能があるのに勿体無いです」

「いいのいいの。私勇者だから。どこでもなんでも全然気にしないわ。
いつか勇者ギルドでも作るとしましょう。そして伝説の勇者でも育てましょうか」

「？」

良く分からないといった顔をするマタリ。

私は笑って誤魔化し、尻尾を集めましょうと促す。始末した5匹のネズミの解体作業にとりかかる。今度は油断することなく、しっかりと切り取った。

その後、更に奥へと進み、矢印の到達地点、2Fへの階段を見つけた時には、ネズミの尻尾は50個まで増えていた。

ただし、私達の身体は真っ赤に染まっているが。顔だけは布巾で綺麗に拭っている。

一応女だから。

マタリの鎧は耐魔コーティングとやらが掛かっているらしく、血で腐食することはないらしい。

「私の服、どうしよう」

当然ながら、ただの『たびびとのふく』であり、特殊な効果などな

い。

「洗濯したら、お、落ちるでしょうか？」

「無理じゃないかな」

「……そうですね」

「ま、いつか」

まあ拾い物だから買い換えれば良い話ではある。
次は鎧でも買いたいものだ。お金が溜まれば。

そういえば、このネズミの死骸って誰が片付けるんだろう。
やっぱりネズミ？ それとも違う何か？

ふとそんな事を考えた。

・古びた本

とある老人が、行方不明になった息子を称えて書いた伝記本。
様々な脚色が加わっており、本来の息子の性格とは程遠い。
書いてから後悔したらしく、タンスの奥に長い間仕舞われていた。

魔力を帯びていた形跡は一切ない。
『ワシも旅に出てみたかったのう』

第四話 勇者は死ねない

滴り落ちる汗を拭い、私はしっかりと大地を踏みしめる。

熱気が漂う、火口付近へギリギリまで近づく。

盾をかざして何とか暑さを凌ごうとするが、あまり効果はない。

朦朧としてくる頭で、忘れられた島『ルザミ』で聞いた話をぼんやりと思い出す。

『魔王の神殿はネクロゴンドの山奥！

やがてそなたは火山の火口にガイアの剣を投入れ……自らの道をひらくであろう！』

私はフラつくのを堪え、ガイアの剣を鞘から抜き天高く掲げる。

赤い柄の、シンプルな装飾の実用的な剣である。

白刃が日光を反射し、眩く輝いている。

「……これを、火口に投げ入れる。一体どうなるんだろう」

伝説の不死鳥ラーミアを復活させるためのオーブを手に入れるには、ネクロゴンドの祠を目指さなければならない。

その為には、この先にあるネクロゴンドの洞窟を突破する必要があるのだ。

……例え一人だとしても、必ず乗り越えなければならない。

道具は万全、装備も出来る限りのものを整えた。

後は自分次第と言うわけである。

落ち着く為に呼吸を整え、投擲の体勢に入る。
距離的には問題ないはずだ。ただ投げ入れれば良いのだから。

「……せえのー!!」

掛け声と共に、全力でガイアの剣を投げ入れる。

火山のマグマが剣を完全に飲み込むと、その瞬間足元が大きく揺れ始める。

地響きが始まり、大きな音を立てて溶岩が噴出していく。

私はすぐさま物陰に隠れ、その様子を伺う。

この場所も安全とはいえないが、最早どうすることもできない。
直撃を避け、なんとか生き延びることを考えるべきだ。

「す、すごい。本当にこんな事が起こるなんて」

私は驚きを隠すことが出来なかった。

口元をマントで押さえ、漂う硫黄の臭いから身を守りつつ、辺りを覗く。

数分後、火山の噴火がまるで嘘だったかの様に収まり、
大地はその形を変えていた。

流れ出した溶岩が川を埋め立て、まるで洞窟まで誘うかのように『道』を作り出していたのだから。

しばらく待機し安全を確認した後、私はその作られた道を進み、目的の地へと急ぐ。

切り立った岩山のふもとに、ぽつかりと不気味に開いた洞窟。恐らく、ここがネクロゴンドの洞窟なのだろう。どこか冷気が流れ出ている気がする。そしておどろおどろしい怨嗟の声も。私の恐怖心から来るものなのだろうか。

「……精霊ルビス様、どうか力をお貸しください。我が道のりに、どうか光をお与えください」

その場に膝をつき、目を瞑りしばし祈りを捧げる。

大丈夫、私は一人でも行ける。必ず乗り越えて見せる。
大丈夫、大丈夫、大丈夫。

大きく息を吐くと、傍らに置いた草薙の剣を強く握り締める。そしてドラゴンシールドを左手に装備する。ここまで来たら、もう後には退けない。先に進むのみだ。

無理やりに勇気を奮い立たせ、まるで地獄へと誘うかのような暗闇に突き進んで行く。

その先に何が待ち受けようとも、私は一人で行くしかないのだから。

……

聞くに堪えない断末魔の音が、玉座の間に響き渡る。

国王と大臣は顔を顰め、近衛兵達は瞠目したただ立ち尽くす。

女官達は耳を両手で押さえ、途絶える事のないその悲鳴が少しでも入ってこないよう努める。

しばらくするとその声が途絶え、静寂が訪れる。

王は小さく溜息を吐くと、確認するように声を出す。

「……大臣」

「駄目だったのでしょうか。」

あのネクロゴンドを一人で越えようなど無謀という他ありません。いくら勇者とはいえ、無茶が過ぎるといふものです」

「それがアレルの決めた道だ。何としてもやり遂げてもらおう年端のいかぬ娘には酷だとは思いますが、それが勇者の宿命だ」

「陛下。恐れながら申し上げます。

我々も兵を出してはいかがでしょうか。」

魔王城までは無理だとしても、その道中ぐらいならば」

隣に控える大臣が、王へと進言する。

こうして時間を無駄にしている間にも、民達の犠牲は増え続けているのだ。

ならば多少のリスクを犯しても、防備に当てている戦力を割く意義はある。

「ネクロゴンドは自然の迷宮、魔物の巣窟と聞く。

旅慣れた者でなければ、ただの足手まといに過ぎぬ。

10人向かわせれば10、100人向かわせれば100の屍となるであろうな」

「しかし、そうだとしても。精霊ルビスの加護があれば」

「蘇生できるならば、勇者と共に行けると。そう言いたいのか」

「はっ。わが国が誇る精鋭の騎士達を共に向かわせるのです。

必ずや魔王の首を」

「肉体は蘇ったとしても、精神がもたぬ。脱落した者達は皆ひとか

どの人物だった。

そう、騎士達に引けを取らぬ強者達であった。だが、それでも勇者には着いて行くことが出来なかったのだ」

王の言葉に、大臣は沈黙する。

勇者の仲間には『精霊ルビスの加護』があり、例え力尽きたとしても確実に蘇生することが出来る。

普通であれば、肉体損傷がなく、死亡直後という条件を満たした場合のみ、

死者蘇生呪文ザオリクで復活させることができる。

これは病死、寿命による死にはもちろん適応されない。でなければこの世に死人は存在しなくなる。

条件から外れれば外れるほど、その確率は急速に低下していく。

勇者一行が全滅した時のことを、大臣は今でも思い出すことが出来る。

最期の瞬間のまま、玉座の間に現れた勇者の亡骸。

その仲間達は『棺桶』に入れられて、突然出現したのだ。

悪い冗談にも程がある。精神がもたなくても無理はない。

王妃はノイローゼになり、未だに部屋から出てこようとはしない。

玉座正面、少し離れた位置に『眩い光』が発現し、勇者の姿が現れる。

苦悶の表情を浮かべ、胸を押さえたまま、膝から崩れ落ちている。

今回は、力及ばず心臓を一突きにされたのであろうか。

勇者が死んだ時、まず絶命時の悲鳴が響き渡る。

その後、最期の姿のままここに現れるのだ。

目を背けることは許されないと云わんばかりに。

一同が無言で勇者の亡骸をただ見守る。室内が沈黙で包み込まれる。みるみる内に傷口が再生し、血の気を失っていた顔色が回復していく。

ありえない。だがそれこそが勇者の証明。

オルテガが持たずして、アレルだけが持つ勇者の証。

これは本当に加護なのだろうか。ある意味では呪いではないかと大臣は時折考える。

『勇者』は決して死ぬことを許されない。諦めることは認められない。

宿命とはいえ、あまりに過酷である。大臣は心中ではそう思っている。

いや、きっと誰もが思っているはずだ。たとえそれが王であったとしても。

だがそれを声に出すことはない。

何故なら魔王に立ち向かうことが出来るのは、勇者だけなのだから。

やがて意識を取り戻し、混乱したまま激しく息を乱しているアレルに、王は語りかけた。

『おお、アレル。死んでしまつとは不甲斐ない』

「ふう、それにしてもネズミしかいないのかしら。

私達はネズミ駆除に来たんだっけ？

ネズミを狩りたいなら猫でも放しておけば良いのよ。」

切り取った尻尾をブンブン回しながら話しかける。

小銭稼ぎとはいえ、これで腕が磨けるとはあまり思えない。」

「地下4階まで来ましたが、まだネズミしか出てきてませんしね。

とはいえ油断は禁物です！ 気を引き締めて行きましょう！」

マタリが気を引き締める。

どんな雑魚でも油断しないのは鉄則である。

雑魚ほど群れる習性があり、それが数百匹にでもなれば脅威となる。今までの道のりで、他の冒険者が狩ったと思われる死骸に出くわすことはなかった。

ということ、誰かがそれを『掃除』しているわけだ。

迷宮中に存在する掃除屋。このネズミがそれに該当するのかもしれない。

雑談をしながら、湧いてくる雑魚を蹴散らしていく。

目の前のネズミを棒で叩き潰す。

マタリが剣で頭を叩き割る。

『ギラ』で集団を焼き払う。

あっという間に皮袋は『ネズミの尻尾』で一杯になってしまった。倒す時間より、切り取る時間の方が多く掛かっている。

「こうしてみると、結構気持ち悪いわね。

なんかドブ臭いし」

「慣れてきた冒険者は、ネズミの尻尾には見向きもしないそうですよ。

銅貨2枚では、割りに合わないのでしょうか」

「殺しても殺しても出てくるしね。

上層でダラダラするだけならコイツで良いのかもしれないけれど」

アレルは尾を切り取られ、無残に転がっているネズミを棒でつつく。

酒場でたむろっていた男達の姿を思い出す。

何かを諦めた表情でひたすら酒を啣るその姿。

彼らの酒代は、恐らくこのネズミの尻尾なのだろう。

別にそれを責めるつもりもなければ、咎めるつもりもない。

ただ、自分はネズミの尻尾ごときで満足はしない。

「それではいけません。私達が目指すべきはもっと高みに存在するのですから!」

キラキラと目を輝かせているマタリ。
その格好が血塗れでなければ、夢見る美少女といったところである。
ちなみにマタリの意見には私も賛成である。
その方向性は逆だとしても。

「はいはい、そんなこと言っている間に次の階段にたどり着いたわよ。」

……誰かいるみたいね。一応警戒して進みましょう。」

地下に続く階段の先。一際明るい光が灯っており、話し声らしきものが聞こえてくる。

「他の冒険者でしょうか。今まですれ違わなかったのが不思議なくらいですしね。」

「いきなり襲い掛かれてあのせいきなんてゴメンよ。不意打ちに備えなさい。」

むしろ襲い掛かる心構えが必要よ。」

ひのきのぼうをブンブンと振り回す。

この行為に特に意味はない。

「そ、そんな乱暴な。」

「じゃ、行くわよ。」

棒を構え、慎重に階段を降りていく。
急な階段ではなく、幅も相当広い。

……地下の底の底から地上へ軍隊を送り込むなら、この程度の広さ
は必要か。
わざわざ上ってくるというのは考えにくい話ではあるが。
送り込むゲートを展開し、そこから出てくるという方が現実味があ
る。

そんなことを考えながらも、棒を前に構えながら徐々に階段を下り
ていく。

マタリは盾を前面に構え、あらゆる攻撃から身を守る態勢だ。

息を押し殺し、階段を下りきった先の大部屋。

そこには疲れきった顔で座り込んでいる、立派な鎧を着込んだ若者
数名と、

焚き火の前に座り肉を炙っている壮年の男がいた。

正面には整った顔の僧衣を着た人物もいる。

頭には装飾のついた頭巾を被り、静かに瞑想しているようだ。

「……なにこれ。ここはキャンプ場？」

私達もお邪魔しちゃって良いのかしら。

丁度お腹が空いてきたところだったのよね」

私の声に、座り込んでいた面々が顔を上げる。

その中で一番でかい声を上げたのが、最も豪華な鎧を着込んだ若者
だ。

私に殺気がないので、壮年の男と僧衣の男は特に気にする様子はない。
い。

だが、すぐに戦闘に入れる姿勢である。休息の時も警戒をするのは

鉄則だ。

「だ、誰だっ！ 魔物か！？」

「どこの世界にこんな可愛い魔物がいるのよ。冗談はその顔だけにしなさい」

「おのれ無礼な！ この私を誰だと……ヒイツ！」

興奮する若い男に、肉を炙っていた男が骨を投げつける。

若い男は驚きの余り、声を失う。すっかり萎縮してしまったようだ。

「やかましい！ 迷宮内では地位や身分なんか糞の役にも立たねえ。今のお前らと同じようにな……って、ゲエツ！？」

威厳のある顔立ちで凄んでいた壮年の男が、こちらを見た瞬間奇声を上げて固まる。

私の顔までは確認できていなかったらしく、目をまん丸にしている。

うん？ と思い良く見てみるとどこかで見た顔立ち。

主に、私に対して暴言を吐いた糞野郎に瓜二つである。

おぼろげな記憶によると、棒で滅多打ちにして病院送りにしたはずだ。

「あら、アンタあの時の。あれだけやったのに案外丈夫なのね。もっと痛めつけてあげれば良かったかしら」

棒を肩に構えて、敢えて不敵な笑みを浮かべてみる。

敵を作る必要はないことは頭では理解している。

だがこういう性格なのだから仕方ない。

「あ、アレルさん」

マタリが宥めようとしてくるが、私は全然気にすることはない。

「貴方がジャバを散々に痛めつけた人ですか。

おかげで私の睡眠時間はたったの1時間でしたよ。

見かけ以上にダメージが深かったものですからね。どうもありがとうございます」

僧衣を着た若い男が、こちらに向かって静かに話しかけてくる。

皮肉交じりに、治癒に時間が掛かったということを言いたいらしい。ということは、この世界では即座に治療などという便利な魔法はないということか。

それが当たり前である。

「感謝には及ばないわよ」

手をヒラヒラさせて僧侶に応える。

「……チツ」

ジャバが舌打ちすると、こちらに向かって歩いてくる。

武器は焚き火の側に置いたままだが、腰には小型のナイフが括り付けられている。

マタリは慌てて警戒の態勢を取るが、私は特に何もしない。

この男からは殺気が感じられないからだ。

「何かしら？」

「……この前は悪かったな。その姿を見りゃ文句の付けようがねえ。どうやら遊び半分って訳じゃなさそうだ」

「え？」

私の血塗れの格好を見て、なにやら想像とは違う台詞を吐く。

「迷宮を度胸試しや、華々しい冒険の場と考えている馬鹿が後を絶たなくてな。

ついこの前は調子に乗っちゃまった。この通り謝罪する」

ジャバがぼりぼりと髪を掻くと、こちらにしつかりと頭を下げ謝罪してくる。

予想外の展開に、私は少しだけ驚いた。

「この赤い化粧がお気に召したのかしら。中々落ちないのよね」

ネズミの返り血を浴びた一張羅を、自慢げに見せ付ける。

ついでにくるつと一回転。滴る血が若者の顔につくと、ひいっと情けない声を出す。

「この馬鹿共ときたら、家宝の鎧に血が付いたなんて騒ぎ出しやがってな。

ネズミ一匹に大騒ぎだ。その上かび臭いだの、血生臭いだの散々文句を垂れた挙句、

もう動けないときたもんだ。実力もないくせに分不相応な物を装備するからそうなる」

若者達を順番に見ていくと、ギルドで私に陰口を叩いていた連中だ。重そうな立派な鎧兜。明らかに体格にあっていない。

そういえば、私のことを確か初日に脱落するとかぬかしていたような。
取りあえず、鼻で笑ってやることにする。私の性格はそんなに宜しくない。
気付いた男たちが顔を真っ赤にするが、起き上がってくる元気はないようだ。

「……私はもう全然気にしてないわ。でもそのお肉をくれたらもっと気にしなくなるかも。
とっても美味しそうなものね」

炙られている数本の骨付き肉を指差す。油の焦げた匂いが食欲をそそる。

腹が減っては戦は出来ぬ。私の大好きな言葉だ。

「分かったよ。これでこの前の事は水に流してくれ。

……アンタ、只者じゃなさそうだしな。俺は実際に叩かれたから良く分かる」

肉を取り、こちらに放り投げってくる。

香ばしい匂いが私の鼻をくすぐる。

「どうもありがとう。私もやりすぎちゃって悪かったわ。
カツとなるとついね」

それをキャッチして、私は貪りつく。

うん、実に美味い。

何の肉なのかは興味が無いし、知る必要もない。

「いや、冒険者って奴は皆そうさ。

そのぐらいの気迫がなきゃ、この糞みたいな迷宮には耐えられねえ」

「でも苦勞した分だけ美味しい思いが出来る場所なんですよ？
じゃなきゃわざわざ乗り込む筈がないもの」

「ハッ、生き残ることが出来りゃあな。

こいつらみたいに観光地と間違えてくる奴は、俺の経験上真っ先に死ぬんだがな。

最後の最後で運があつたらしい。実にツイてるぞ、お前ら」

ニヤリと笑みを浮かべるジャバ。先日と違い、ベテランの余裕が伺える。

それを見て、貴族のボンボンらしき連中は身体を寄せ合い始める。
恐らく二度と迷宮に来ることはないだろう。

「それにしてもジャバが一方的に倒されるとは。

こつ見えても熟練の冒険者なんですがね。

見習いを引率する程度にはギルドからも信頼を得ています」

「こつ見えてとはどついう意味だ」

「そのままの意味ですよ」

顎に指を当て、不思議そうにこちらを見つめてくる僧侶の男。

「誰だつて油断はするものでしょう？　きっと私の運が良かったのよ。

ね、保護者さん」

なんとなく猫を被ってみる。こちらを胡散臭そうに見てくるジャバ

と僧侶。

「ふん、貴族のガキどもの引率なんか知ったことか。金にならなきゃ誰がやるか、こんなこと」

肉を齧り、不満そうに食いちぎるジャバ。

「まあ現実を知ったようですから、次はないと思いますよ。今度こそネズミの餌になるかもしれせんからね」

「う、うう何でこんな目に」

「自分で望んだからですよ。そして私達は貴方達のお守り役。今更確認するまでもないでしょう」

「で、でも聞いていた話と全然違う。もっと華麗に華々しく戦えるって……」

「そういうのがお望みでしたら、山程ある英雄譚でもお読みになるのをオススメします。

少なくとも命を落とすことはありませんからね。お父様もきつとお喜びになりますよ」

残酷な微笑を若者達に向ける僧侶。その視線にボンボン連中は震え上がっている。

まあ私としてはこいつらがどうなるかと知ったことではない。邪魔をしなければ何も問題はない。

「ところでネズミにしか会ってないんだけど、いつまでこれが続くわけ？」

肉を噛み千切りながら問いかける。
香辛料がピリツと効いて中タイケる。
溢れ出す肉汁に舌鼓を打つ。

「ネズミはどの階層にも棲息しているぞ。
毒やら病気をもった奴もいるから油断しないことだ。
舐めて掛かると、そのうち骨まで齧られちまうぜ」

「ジャバの言う通りです。ネズミの脅威はその数です。
自信をつけた頃に、あっさりとネズミの餌になる者は後を絶ちませ
んからね。
群れで襲われる事がないよう、最大限の注意を払わなければいけま
せん」

たかがネズミ、されどネズミ。
その適応力、生命力、繁殖力の高さはやはり脅威か。
倒しても美味しくないし、実に嫌なやつらだ。

それはそれとして。

「やっぱり死骸を食っているのはネズミ？」

「ああ、何でも食うぞ。悪食だから食わないのは装備ぐらいだな。
まあ、その装備を食う魔物もいるんだが」

装備を食う？ そんなふざけた奴がいるのだろうか。
剣をバリバリ食べるグルメは、前の世界にも流石にいなかったが。
腐ったパンを食う奴はいそうだったが。

「……それってスライムですか？」

マタリが確認するように話しかける。

手にはガイドブックを持ち、情報をしっかりと確認しているようだ。

「ああ、その通りだが。ってお嬢ちゃん。

そんなインチキ本買ったのか。金貨1枚の価値なんかないっていうのに全く。

魔物の情報ならギルドでいくらでも調べられるぞ」

「いえ、私にとっては立派な教本です。とても役に立っています」

「……やっぱりそういう本だったのね」

「そりゃそうだ。協会が善意でそんな本を製作するか。

当たり前前なのが延々と書かれているだけだぞ。“ネズミには気をつけよう”？

笑わせやがるぜ」

ジャバが呆れたように呟いているが、マタリは全然聞いていないようだ。

本に見入ったままスライムについて調べている。この娘は人の話を聞かない。

早めに教育しなければならぬか。

僧侶がマタリをチラリと見た後、スライムの特徴を語り始める。

「形状はアメーバ状、生物を見ると問答無用で攻撃してきます。

打撃、斬撃が効かず、基本的に魔法でしかダメージを与えられませ

ん。

さらにその攻撃は装備を溶かす厄介な魔物です。当然、身体に直接浴びれば、『痛い』と心の底から叫ぶことができるでしょうね」

「ふーん。こつちのスライムは強いのね」

青いとんがり頭を思い出す。たまに友好的に話しかけてくる奴までいる変な種族だ。

基本的には臆病で、脅威となるような魔物ではない。

「……こつち？」

ジャバが怪訝そうな顔をする。

「ううん、何でもない。で、アンタ達いつまでここにいるの？」

「あ、ああ。三時間経ったらこの馬鹿共が強制的に戻されるからな。俺達はそれを見届けて、普通に上って帰る。それまではここでのんびりしているぞ」

筒を口にして、液体を煽るジャバ。

流石に酒ではなく水だろう。

油断しているように見えて、警戒は怠っていない。

「ええ、迷宮は瞑想の場にもってこいですからね。

こつちで精神を研ぎ澄ませるのです。ああ、身が引き締まります。」

法具を持ちだしおもむろに呪文を唱えだす。

「やれやれ、まーた始まった。早く時間にならねえかなあ」

「貴方も一緒にやりますか、ジャバ。精神を集中すれば、切れ味も上がるでしょう」

「いや結構。俺はこうしてダラダラしているのが瞑想なんだ」

僧侶は再び目を瞑ると、ブツブツ何かを呟き始めた。

ジャバは手を上げると、剣の手入れを開始する。基本的にこういう性格なのであろう。

「じゃあ、そろそろ行く？ 休憩も出来たし」

「そ、そうですね。まだ半分以上時間は残っています」

袋から時計を取り出し、時間を確認するマタリ。

私も横から覗き込むが、確かにまだまだ余裕はある。

どこまで行くかは体力との相談だ。

私はまだまだ余裕も余裕。むしろ100階まで突入できそうな感じである。

勿論行かないけれど。

「あー、一応注意しておくか。必要ないかもしれないがまあ聞いておけ」

「？」

ジャバが何かを思い出したように声を漏らす。

「迷宮内の揉め事は、基本的に冒険者同士でケリを付けるのが暗黙

の了解だ。
たとえ何が起こっても、外の法で裁かれることはない。
泣きついたところで、どうにもならん」

当然街中で騒ぎを起こしたら、教団兵が飛んでくるがねと付け加えてくる。

「……誰かが襲ってくるのかしら？」

「魔物を殺しながら地下に延々と進むより、
冒険者を狩った方が儲かると判断した奴らもいるのだ。
貴族の道楽と勘違いした、こいつった馬鹿共がうじゃうじゃいるからな」

チラリと横目で顔を青ざめさせているボンボンを見る。
なるほど、高価な剣や鎧を持った『かもねぎ』だ。
強敵相手に命を張るよりも、こいつらを殺した方が金になるのは間違いない。

それが人として正しいかどうかは別として。

「でも、冒険者からは憎まれるでしょう？」

「当然賞金首だ。協会は関与しないが、ギルドが懸賞金を掛ける。
迷宮で見つけ次第、即座にぶち殺せとな。
外に連れ出したら手が出せなくなるから、必ず殺す。
だが、そう簡単に尻尾を出す連中じゃない。
そんな雑魚はすぐに淘汰されるからな」

「怪しい場所には近づかない、どんな人間にも最大限の警戒をする。
長生きするための鉄則ですよ」

僧侶が瞑想しながら独り言のように呟く。

「とりあえず覚えておくわ。助言ありがとうね」

人間にも注意しなければいけないか。

見かけで判断できれば良いが、恐らく笑顔の裏に刃を隠してくるだろう。

私はともかく、マタリは危ないかもしれない。

お人良し、猪突猛進、人の話を聞かないの三拍子だ。

かもねぎどころか、スープまでついている。

マタリを横目で眺めると、大きく頷き、

「あ、ありがとうございますジャバさん！」

深く頭を下げる。

実に心配なことだ。

「なあに良いって事よ。同じギルドだしな。

ま、精々無理しないようにな。まだ始まったばかりだろう」

「私は僧侶ギルドですがね」

「お前は一言多いんだ」

ジャバとその一行に別れを告げ、私達は先へと進み始める。

地下5階、そして6階へと下っていく。特に見新しいものもない。相変わらぬ殺風景な造りの通路である。

魔物は相変わらずのネズミばかりだが、サクサクと料理していく。

またしても矢印が塗られている為、一応その通りに進んでいく。

「……この矢印、あまり当てにするのも考えないといけないかもね」

「え、どうしてですか？」

「上層は駆け出しの素人ばかり。まず頼りにするのはこの矢印。じゃあこの矢印が本当に正しいという証拠はあるの？」

不機嫌な顔を私は作り、地面に描かれた黄色い矢印を思い切り踏みつける。

塗料が少しだけはがれ、茶色い地肌が覗く。

「……それは、誰かが罠に使うかもしれないということですか？」

「地獄への道標かもね。とにかく、絶対に油断しないように。常に張り詰めているのは無理でも、奇襲だけは喰らわないようにしなさい」

マタリに諭すように声を掛ける。

それを聞き、一層身体を硬くしている。

逆効果だったかもしれないが、油断して死ぬよりはマシだろう。

……しかし、どうにもこの階層嫌な感じがする。

粘っこい殺意というか、隙を伺うような不愉快な視線を感じる。

所謂勇者の勘という奴だ。残念なことに、大抵は当たる。

おもむろに後方を振り返り、暗闇を凝視する。
点々と灯る明かり以外は何も見えない。

ちなみにこの明かりは魔力で保たれているらしい。

ギルドの依頼には、魔力石の設置というものであるそうだが。
実にご苦勞なことだと思ふ。私はそういうチマチマしたことは大嫌
いである。

「あ、あれ。行き止まりですよ」

「……みたいね」

「ど、どうしましょうか」

「不用意に入るのは危険よ。こういう場所は気をつけないと」

警戒しながらも、矢印通りにとりあえずは進んできた。

最後に行き着いたのは、小部屋。

最後のマークは、小部屋の入り口に矢印が真っ赤に塗られている。
まるで血の色だ。

入り口から見る限り、特に何も異常はないように見受けられる。

何やら小箱のようなものが意味ありげに置いてある。

まるで誘っているかのよう。

私は思いつき顔を顰める。
怪しげな小箱を見たからではない。

血の臭いが濃すぎるのだ。部屋中に染み付いている。
入り口であるこの場所にまでその臭いが漂ってくる。

どんなに死体を隠そうとも、それだけは隠し切ることには出来ない。
かなりの人間が、この場所で命を落としている。間違いない。

「とりあえず……」

私は引き返すことを提案しようとする。

この部屋に入るのは不味い。私だけなら構わないが、マタリが危険だ。

「とりあえず、気をつけて入ってみましょう！ あの箱に何かがあるのかもしれない」

私を尻目に、小部屋へ盾を構えて素早く入り込んでいくマタリ。
止める間もなく、一直線に箱へと進んでいく。

警戒はしているらしいが、部屋に入ること自体の『危険性』をまるで理解していない。

私はすぐさま怒鳴り声を上げる。

「馬鹿！ 戻りなさいッ！！」

「えっ？」

横目に不思議そうな声を上げるマタリ。

足元でカチツという小さな音が聞こえる。

何かが炸裂し、バランスを崩したマタリが部屋の奥へと追いやられる。
私も後方へと爆風で押し戻される。

「キャッ!」

「チッ!」

対人用のトラップ。呑気に入ってきた『駆け出し』を狩る為の、殺人装置の初手。
第二のスイッチも恐らく入っているはずだ。

「う、うつつ」

中央で態勢を崩した状態のまま、辺りを伺うマタリ。
盾は衝撃を受けた拍子で、放してしまったようだ。
少し離れた場所に落ちた、盾を拾いに行こうとよろよろと立ち上がる。

その瞬間。

空気が多数抜けるような音がする。
四方から勢い良く矢が放たれ、マタリの身体は瞬時に針鼠のようになる。
敢えて狙わなかったのか、頭部には刺さっていない。
鎧の上から串刺しになり、口元からは血がゴポゴポと溢れ出す。
その表情は何が起こったかわからないといった様子である。
マタリは自分の身体を見ると呆然と声を上げる。

「……あ、ああ」

私はそれを冷静に観察している。
まだ畏の動作は続いている。
入った瞬間、私も串刺しになるだろう。
危険覚悟で突っ込むか、留まるか。
私は判断しなければならぬ。

「……あ、アレ、ルさん」

倒れ伏せながらも、こちらに向かって、震えながら手を伸ばすマタリ。

その目は輝きを失い、今にも閉じられようとしている。
もはや致命傷であることは疑いようがない。
数刻を持たずして、息絶える運命だ。

『もう生死を共にする仲間なんですから』

脳裏に浮かぶ、先程の言葉。
別にそんな言葉を簡単に信じた訳じゃない。人はすぐに掌を返す。
どいつもこいつも自分のことしか考えていない。所詮はそんなものだ。

……だが私は行くべきなのだろう。そうなのだと思う。

私が意を決し、部屋へと突入しようとした瞬間。

小部屋から、誰かの嘲るような笑い声が聞こえたかと思うと、マタリの細い首目掛けて、白刃が勢い良く振り下ろされた。

・賞金首

各ギルドから懸賞金を掛けられた冒険者。その悪行の分だけ賞金額が上がる。

賞金首一覧がギルドにより作成され配布されている。

協会は関与しない為、迷宮への出入りは自由、街でも自由に行動可能。

当然ながらギルドからは除名されている。

熟練であることが殆どで、並の腕では討ち取る事は困難。

徒党を組んでいる事が多い。

『魔物と人間に大した違いはない。我々はどちらも平等に扱っ』

・賞金首一覧表

各ギルドが作成し、所属メンバーに配布している。

顔、名前、特徴、懸賞金額が記載されている。

始末することに成功した場合、

首もしくは『職業』が刻印された部位を持ち帰るよう注意書きがある。

『賞金首は魔物と同じ。見つけ次第必ず殺せ』

第四話 勇者は死ねない（後書き）

ストック切れました。

頑張っ て書いていきます。

第五話 勇者と賞金首（前書き）

今更ですが、アレル視点は一人称。

その他の場面は三人称です。

これは私の好きな小説の展開形式でもあります。

浅田次郎先生の『プリズンホテル』です。

第五話 勇者と賞金首

「ハアアアアアアアッ！！」

気合一閃、燃え盛る火炎を掻い潜り、ガメゴンロードの首を叩き落す。

悲鳴を上げる間もなく、コロコロと叩き落したそれは転がっていく。安堵することなく即座に移動し、敵に発見されないよう姿を隠す。

ヒット&アウェイ。一人で突破するために私が選んだ戦法。

数が少ない場合のみ戦闘を行い、集団の場合はやり過ごす。

当然上手くないかない事もあるが、全てを切り伏せていく余裕はない。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ」

乱れた呼吸を整える。スタミナの消耗も抑えなければいけない。

皮袋から薬草を取り出し、そのまま貪る。

苦味が口いっぱいに広がり、私は思わず顔を顰める。

しかしながら幾らか体が楽になった気がする。

気休めかもしれないが、使わないよりはマシだ。

辺りを警戒しつつ、私は再び迷宮を進み始める。

魔物達の息遣いがそこら中から聞こえてくるようだ。

とても恐ろしい。怖くて仕方がない。

ネクロゴンドへの挑戦は、今回で5回目となる。

私は4回ほど無残な最期を迎えているはずなのだ。

だが覚えているのは、最期の瞬間のみ。

迫り来る刃、灼熱の傷み、噴出す鮮血。

その後は、何故か『玉座の間』で意識を取り戻す。
そして王から私をなじる言葉を頂くのだ。

「……不甲斐ないと思うなら、自分達がやれば良いのに。
どうして私だけが」

今まで誰にも漏らしたことのない愚痴、不満。
私の心の中に、マグマのように滾っている。

どいつもこいつも人に責任だけを押し付けて、自分は行動しようとし
ない。
何故私だけが。どうしてこんなに苦しまなければならない。

その理由は簡単だ。

「私が、オルテガの娘だから」

不意に、ライオンヘッドが横の通路から大きな牙をむき出しにして
襲い掛かってくる。

獅子の頭を持ち、6本脚、蝙蝠の羽を持つ化け物だ。

盾でそれを押し返し、草薙の剣で喉下目掛けて勢い良く突き出す。

『ゲギヤアアアアッ!!!』

「せいっ!」

すぐに引き抜き、脳天から思い切り振り下ろす。
ライオンヘッドは真つ二つになり、ぴくぴくと痙攣したまま倒れ伏せる。

その返り血で、私の身体は真つ赤に染まる。

『クケケケケケケ！』

背後からケタケタと笑う声がしたかと思うと、
勢い良く三叉のフォークを振りかざしてくるミニデーモン。
それは私の背中に深く突き刺さり、ぐりぐりと抉って来る。

「ッ！ このッ！」

振り向き様に切り払い、フォークを叩き落とす。
傷口からはドクドクと血液が流れ落ちる。

ミニデーモンは醜く笑い、羽ばたいて素早く後方へと下がると、呪文を唱えた。

『クケケケケ、メラミ！』

私目掛けて放たれた火炎弾をドラゴンシールドで受ける。
直撃は防いだが、熱が身体に伝わり、傷口を刺激する。
痛い痛い痛い痛い。

「舐めるなっ！ 稲妻よ我が敵を撃て！

「ライドイン!!」

ミニデーモンを稲光が包み込み、蒸気を上げながら焼き尽くす。肉の焦げる嫌な臭いがこちらまで伝わってくる。

苦悶の声をあげることなく、ミニデーモンは息絶えた。

息を吐く間もない連戦連戦、また連戦。

出口はまだまだ遠いのだろうか。

考えても仕方がない。とにかく今は回復をしなければ。

私がベホイミを唱えようとした瞬間、焼け付くような息が辺りを包み込む。

「え？」

異変を感じた直後、私の体に激痛が走り、身動き一つ取れなくなる。剣を握り締めたまま、私の体が硬直する。身体が重い。まるで石像になったかのようなようだ。

正面から軋むような音と共に、騎士の鎧を着たガイコツが現れる。

6本の腕には、錆付いた剣が握られている。

じごくのきしだ。

ふと、左右からも不気味に軋む音が聞こえてくる。

目だけを動かして、その両方を確認する。

じごくのきしが、剣をガシガシ打ち付けながら、私の方へとゆっくり歩いてきている。

私はしびれて動けない。

「そ、そんな」

『キシヤアアアア！！』

勝利の雄たけびを上げるじごくのきし。

私の眼前までくると、ニタリとその髑髏の口を歪ませる。
剣を交差させ、ガンガンとけたたましく打ち付ける。

これから行われる呪われた儀式を、まるで祝うかのように。

「い、イヤ。誰か、助けて。誰か」

助けて、お願い、誰か。

もうイヤだ。こんなのはイヤだ。私は壊れてしまっ。

私の両腕、両足を錆付いた剣が貫く。

私はしびれて動けない。

私の両肩を錆付いた剣が貫く。

私はしびれて動けない。

私の腹部が正面、左右から串刺しにされる。

私はしびれて動けない。

『クキキキキ。キシヤアアアアアア！！』

喉元へその切先を当てると、地獄の騎士は己を誇示するように呪いの咆哮を上げた。

私はそれを虚ろな眼で眺めると、自分の喉に異物がゆっくりと突き刺さるのをただ待ち受けた。

口から生暖かいものが溢れ出る。

だが、涙はもう出なかった。

これで本当の『勇者』に一步近づくことができただろうか。

間もなく、私の意識は真っ黒に塗りつぶされる。

地獄が終わり、また地獄が始まる。

「おお、アレル。死んでしまつとは不甲斐ない」

もうなにも聞こえない。聞きたくない。

抑えた喉元からゆっくりと手を離し、袋から一冊の本をゆっくりと取り出す。

王の話はその間も続き、周りの人間の私を見下す視線が突き刺さる。

そいつらに視線を合わせると、慌てたように視線を逸らす。

まるで関わりたくないとも言つかのように。

やがて言いたいことを言い、満足したのだろうか。
王は近習を引き連れて退出していった。

私は祖父から貰った本をただ抱きしめ続けていた。

畏師サルバドは、目の前で這いつくばっている若い女を、ゴミを見るような目で見下ろす。

その身体には鎧の上から数十本の矢が突き刺さり、血が大量に流れ出している。

もがき苦しむのを眺めるのは嫌いではないが、少々やりすぎた感がある。

これでは長時間甚振ることが出来ない。残念だがすぐに息絶えることだろう。

自分の仕掛けたトラップの出来には満足するが、中々加減が難しい。

小箱に腰掛けながら、サルバドは『ハイド』を解除する。

自分が座っていることに全く気付かず、

意味ありげな小箱に向かつて、馬鹿丸出しで突っ込んでくる。そして罨に嵌り、敢無く最期を遂げる寸前の絶望に歪む顔。その表情はサルバドに、何にも勝る悦びを与えてくれる。女を抱くときよりも、大金を手に入れた時よりもそれは大きい。

サルバドとて最初から外道を選んだ訳ではない。手下達も同様である。

皆、最初は大望を抱いてこの街にやってきたのだ。目を子供のよう

に輝かせて。だが、貴族階級に属する騎士に便利屋として雇われ、扱き使われる人生に嫌気が差したのだ。

そして働きが足りない、給金を渋るようになった時に腹は決まった。

金の事はどうでも良かったが、自分の誇りを汚されたと感じたのだ。自分と騎士。大した違いはない。ただ生まれた場所が悪かっただけだ。

だから自分を馬鹿にする事など、決して許されない。

次の日、人生の中で最も精緻な罨を仕掛け、騎士とそのお抱えの連中を一網打尽にしてやった。

ギロチントラップが決まったときは、思わず絶頂を迎えたものだ。首を実家の門に送り届けてやった時は、溢れ出る笑みが止まらなかつた。

今までの糞みたいな日々が、ようやく報われたと心から感じた。

この時、サルバドは確かに生きる喜びを感じていた。

装備を剥ぎ取り闇市に流した所、今までの働किが馬鹿みたいに思える値段で売れた。

自由気儘に生きることの出来る財産。それを元手に新しい罫を作製する。
試しに迷宮上層部でその罫を仕掛けてみると、馬鹿共が面白いように喰らいついてきた。
勝手に引っかかり、勝手に死んで、山のような金品を残してくれるのだ。

こんなに愉快で面白いことはなかった。

だがやがて悪名が広まり、ギルドを除名され懸賞金を掛けられることとなる。

とはいえ表立って襲ってくる者もおらず、迷宮内ではいつもの通り罫を仕掛ける日々。

サルバドの日常は何にも変わる事はなかった。

同じような不満を抱くものが徐々に自分の下に集まり、『徒党』を結成するようになる。

サルバドは金に対して執着はあまりなかったので、気前良く手下達に配ってしまっていた。

サルバドが見たいのは、夢潰える時の絶望した表情なのだから。

目で合図を送り、壁際で身を隠していた手下に、女の首を刎ねるよう命じる。

もう一匹が入り口あたりで躊躇しているようだが、その背後にも勿論手下を配置している。

部屋に5名、通路に1名。これがサルバドの徒党である。

全員が元レンジャーギルド所属であり、それぞれがローグ、シーフの技術に長けた者達だ。

嘲笑を浮かべた手下が、サーベルを女の首目掛けて振り下ろすと同

時に、通路から勢い良く何か飛んでくる。
それはサーベルの柄に辺り、音を立てながら転がっていく。
女の首はまだ胴と繋がったままだ。

「……一体何事だ」

「へ、へえ。どうやらもう一匹が得物を投げつけて来たようで。
今すぐに片付けます」

サルバドが転がり落ちる得物に視線を向ける。

ただの棒切れであり、これを得物と呼ぶに相応しいかどうかは疑問が残る。

「……とにかく早く始末しろ。俺の愉しみを遅らせるな」

苦悶の表情を浮かべた生首。

それを肴に酒を飲むのだ。

手下達には一向に理解されないが、別にサルバドは気にしていない。

「へ、へい。申し訳ありません」

手下は舌打ちをして血塗れの少女を睨みつける。

居丈高に正面まで歩いていくと、イライラした様子で唾を吐き捨てる。

「ガキが。得物を投げるなんて正気か？

まあ死ぬことに変わりはないから、どうでも良いけどな」

その手には鋭利なダガーナイフが握られており、

どのような返事をしようとも、即座に首は掻き切られることだろう。

狩りの対象である獲物と、交渉する事などありえないのだから。

「勿論正気よ。死ぬのはアンタだけどね」

「死ね」

手下はダガーナイフをそのまま一閃させる。

慣れた手つきであり、何人もの喉を掻き切ってきた熟練の技。血飛沫が勢いよく舞い上がり、少女の首は軽く跳ね飛ばされる筈であった。

だが、少女は冷静に回避すると、そのまま懐に潜り込み手下の喉を右手で掴み上げる。

「ぐっ、て、てめえ！ 離しやがれ！！」

「ゴミが口を利くな。ベギラマ！」

「ッ！！！」

手下が暴れようとした瞬間、少女の右手から火の手が上がり、手下の喉を焼き切った。

哀れな手下は、悲鳴を上げること出来ずに地面をもがき回っている。

喉元からヒューヒューと漏れ出す音が、室内に響く。

「昔はさ、人間を出来るだけ殺さないようにしてたのよ。

どんな奴でも更生すると、そのときは信じてたから。

でも、屑はどこまで行っても屑なのよね」

そう冷たく言い放つと、もがいている手下の頭を思いっきり踏みつけた。
潰れたトマトのように、赤い液体が撒き散らされる。
胴体だけがピクピクと痙攣を起こしている。

サルバドは警戒を強める。

強力な魔法ほど、長い詠唱時間が必要とされるのだ。
だがこの少女は、溜めもなく何やら魔法のようなものを使用した。

（こいつただのガキじゃない。修羅場を潜り抜けてきている。
魔術師か？ それともモンクか？）

危険と判断し、部屋に潜む残りの面子に合図を送る。
どんな手段を用いても殺せ。単純明快である。

甚振るときは、徹底的に甚振る。
殺すと判断したら、即座に殺す。

これがこの迷宮におけるサルバドの基本方針だ。

「ゴミが結構潜んでるみたいね。面倒だから一気にいかせてもらおうよ」

「この糞餓鬼がっ、死ねッ！」

四方から手下が集中攻撃を仕掛ける。

声を出した奴は陽動、本命は背後に潜む手下の『首狩り』である。
攻撃を仕掛ける際に、声をあげるような真似はローグやシーフはしない。

強敵に遭遇した場合を想定しての連携攻撃。

既に幾人かを屠っており、効果は実証済みだ。

「イオラ!!!」

眩い閃光が部屋を包み、直後に爆発音が響く。

手下は壁際に吹き飛ばされ、サルバドも同様に叩きつけられた。

「て、てめえ!!!」

起き上がるうとする手下達。それを少女は鼻で笑う。

そして呪文を連続で唱えだす。まるで謡うように。

『イオラ』

『イオラ』

『イオラ』

「グハッ!!!」

「うげええっ!!!」

「う、うっつ!!!」

手下達がそれぞれ苦痛の声を漏らす。だが攻撃の手は休まらない。再び閃光と爆発音が響き渡る。

それは途切れることなく、何度も何度も連続して炸裂している。

手下達は壁に何回も打ち付けられ絶叫を上げるが、やがて昏倒し身動き一つしなくなる。

サルバドは全ての力を防御に回し、何とか耐える。

確かに危険な魔法だが、耐え切れればサルバドの勝ちだからである。

何度目かの爆発のときに、手下達は体の内部から炸裂し、跡形もなくバラバラになった。

サルバドは何とか耐え切った。装備は悲惨な状況ではあるが、確か

に耐え抜いたのだ。

「まだゴミが一匹残ってるか。意外と丈夫なのね。流石はボスって事かしら」

「……お前、一体何者だ？」

手下達に対する哀れみや同情は一切ない。

だが己の誇りを傷つけることは誰だろうと許さない。

この糞餓鬼は禁忌を破ったのだから、確実に始末する。

ダメージはかなり大きいのが、遅れを取るとは思っていない。

あれだけの強力な魔法を使ったのだ。最早残りの魔力も僅かだろう。

溜めのない炸裂魔法。詳細は分からないが、代償は大きいはずだ。

「通りすがりの勇者。そして今はゴミ掃除中よ。

臭うからきちつと始末しないとイケないの。

一匹も見逃さないわ」

その答えに、サルバドは思わず噴出してしまう。

何者かという問いに、勇者などと答えた者は今までにいない。

「ククク、勇者、勇者だと。冗談にしては度が過ぎているな。頭がお花畑なのか、本当に狂っているのか」

「良く言われるわ。とにかく、不愉快だからさっさと死んでくれる？」

不快気に吐き捨てると、こちらへ向かい手をかざしてくる。

サルバドは気取られないように、背後のスイッチへと手をかける。会話をしながら、気付かれないよう徐々に移動していたのだ。サルバドは己の勝利を確信する。

「まあ落ち着け。これでも味わっていけ」

ギロチントラップを作動させる。

罨師サルバドの最高傑作。相手の首を補足して、確実に叩き落とす。サルバドの人生は、このトラップを作成する為にあったと言っても過言ではない。

部屋上部から魔力により最高まで強化された、鋼鉄のギロチンが数枚振り下ろされる。

「ちっ!」

「まだまだあるぞ」

少女は、下に転がっている串刺しの女を抱えて回避行動に移る。

1、2、3枚。全てが紙一重で回避される。

だがこれすらも罨。本命は最後の1枚だ。

全てを避けきったと油断したところに、切り札を叩き込む。

これこそが罨師の真髄。

少女を想定通りにある位置まで誘導する。

自分の意思で避けたと思っっているだろうが、『誘導』したのだ。

そしてギロチンが動かなくなったのを見計らい、安堵の声を上げる。

「……これで終わり？ 中々面白い見世物だったわね」

全てが計算通り。罫を作動させる。

「ああ、これで終わりだ」

「え？」

壁から、高速で回転する刃が『勇者』を名乗る少女目掛けて発射される。

横からは想定していなかったのか、少女の反応は一瞬遅れる。

刃は少女の頸動脈を掻き切り、そこから血が勢い良く飛び出している。

側面の壁は瞬く間に赤く染まる。

「本当は首を落とすつもりだった。その勘の良さは大したものだが、もうお前は助からない。絶対にな」

サルバドはゆっくりと少女へと近づいていく。

久々の強敵、勝利の喜びは大きい。

この少女の首は腐るまで保管しておくことにする。

この端整で小生意気な顔が、腐り落ちるのはさぞかし趣き深いものになるはずだ。

「あ、ああ」

首を手で押さえているが、溢れ出るものは止まらない。

「残念だが致命傷だ、大人しく諦めることだ。

さあ、いよいよお別れだぞ。

久々に楽しかったよ。どうもありがとう」

腰からダガーナイフを取り出す。

こんなに楽しみな処刑は久々だ。心が疼く。

（さあ、どうやって刈り取るうか。

やはり傷のついていない方から切り裂くのが美しいか）

サルバドがトドメの方法を思案していると、

少女が呪文を唱える。

「ベホマ」

手から淡い光が放たれると、少女の首筋が瞬く間に治療、再生されていく。

溢れ出ていた血は止まり、少女は首をコリコリと鳴らしている。

その光景を、サルバドは驚愕の表情で見ることしか出来ない。

「ば、馬鹿な！！ そんな早く『治療』するなんて不可能だ！！

第一、致命傷には効果が及ばない！」

「なんでかしら。実に不思議ね」

「ふざけるな！」

「私と問答している余裕が、アンタにあるのかしら」

小馬鹿にしたような口調でサルバドに答える。

その際、落ちている手下のダガーナイフを拾っている。

「ば、化け物め！」

「それも良く言われるわ。今では全然気にしなくなったけれど。ところで、そろそろ覚悟は良いかしら？」

凄絶な笑みを浮かべ、サルバドに少女は向き直る。

恐慌状態に陥ったサルバドは、一直線に突撃する。

首が駄目ならば心臓。心臓を突かれればどんな化け物だろうと死ぬ。

「死ぬ、この化け物!!」

勢いをつけ、渾身の力で必殺の突きを繰り出す。

ローグの得意技、急所突きである。

サルバドのダガーナイフが、少女の心臓へと鋭く突き刺さる。

「と、殺った!!」

「ベホマ」

サルバドが歓喜の声を上げる前に、少女が呪文を唱える。

淡い光が少女を包み、突き刺したはずのナイフがゆっくりと押し戻される

確実に死に至る傷口が、綺麗に塞がっていく。

確かに、確かに心臓を抉ったはずなのに。

サルバドの身体が恐怖で震え始める。
命乞いをするこゝすら考えに浮かばなかった。
あるのは、目の前の化け物に対する恐怖だけだ。
こんな感情は今まで覚えたことはない。

「そ、そそそんな。あ、ありえない、ああありえない」

「それじゃあ、さようなら。中々面白い罠だったわ。
地獄で自慢することね」

「あ」

少女がナイフを横薙ぎに振ると、サルバドの首が胴から零れ落ちる。

サルバドが最後に見たのは、首から血飛沫を上げて崩れ落ちる自分の胴体だった。

「こうして、悪名高い罠師サルバドとその一派は、少女の手により完全に壊滅することになった。

少女は念のため、サルバドが腰掛けていた意味ありげな小箱を開けてみたが、
中身はからっぽだった。

「世の中そんなものよね」

そう呟くと、思い切り小箱を蹴り飛ばして粉碎した。

・農師サルバド

元レンジャーギルド所属のローグ。年齢不詳。

手先の器用さは天性の才能があり、ギルドでも並ぶものはいなかった。

その将来を囑望されたが、道半ばにして外道に堕ちる。

ギルド除名後は己の欲望のままに殺しを行い、悪名を高めていく。最期はアレルという名の少女により、徒党ごと皆殺しにされる。

『他人の不幸は蜜の味と言っだろう。俺はそれを間近で見物したいのや』

第五話 勇者と賞金首（後書き）

サイズについてなんですが、1話どの程度が良いのか悩んでいます。10kぐらいのほづが読みやすいのでしょうか。

あまり多いと読みにくいのか、自分では良く分からなくて。特に問題がなければこのぐらいで行こうと思っています。

第六話 勇者とピンキー

マタリが重い目蓋を何とか開けると、見覚えのある薄汚れた天井が視界に入った。霞む視界が徐々に晴れていくことで、それが宿屋の一室であることを理解する。

(……あれ、私は確か迷宮にいたような?)

疑問に思いながら寝返りをうつと、そこには椅子に腰掛け本を読んでいるアレルがいる。その表情はいつもの強気な物ではなく、どこか寂しげな印象を受ける。

マタリが彼女のそのような表情を見るのは初めてであり、少し興味を覚える。一体何を讀んでいるのだろうかと、目を凝らしてみる。

タイトルは文字が小さくてよく見えない。劣化が進んでいるのか、黄ばんでいるのがここからでも確認できる。アレルはその本を、パラパラと確認するようにめくっている。所々で手が止まり、ジッと食い入るように文字を追っている。

(もう少し近づけば、本のタイトルが分かるかな?)

そう考えたマタリが身を乗り出すと、枕元にかけてあった布巾が落ちちてしまう。

その物音で、目を覚ました事に気付いたアレルが本を静かに閉じる。

袋の中にそそくさとしまうと、椅子から立ち上がりベッドの傍まで近寄ってくる。

「おはよう。体調はどうかしら？」

「え、ええと。良く分かりません。頭はちょっと重いですけど」

「そう、じゃあ問題ないわね。駄目だったらそんな能天気な顔は出来ないからね」

意地悪げに微笑むと、テーブルの上においてあった果物の載った皿を持ってくる。

綺麗に切り分けられており、食べやすい一口サイズだ。

「丸一日寝込んでいたのだから、お腹が空いたでしょう。」

「さあ好きなだけ食べなさい。アンタのお金で買ったから遠慮はいらないわ」

ぐいぐいと押し付けてくるので、止むを得ず適当に選び、口に投げ入れる。

強い酸味が染み渡り、まだ寝ぼけている脳を刺激する。

「す、すっぱいですね」

「マスターに見繕ってもらったのよ。文句はあの親父に言いなさい」

「い、いえ文句なんて。ありがとうございます」

「それを食べたなら、また安静にしていることね。」

無理をしてぶっ倒れられたら迷惑だから」

そう言うと、アレルはベッドから離れ、再び椅子に腰掛ける。血塗れだったはずのアレル服装は、新しいものに代わっている。普段着と間違えられた服装は、冒険者らしい整ったもの変わったようだ。

この街では冒険者が着用するものであり、鎧の下に身に着けることもある。

あらゆる災難から身を守るようにと祈りが籠められた『身かわしの服』。

丈夫さ、機能性ともに優れた逸品である。

残念ながら、敵の攻撃をヒラリとかわすような効能はない。

ただの験担ぎである。

頭部には青水晶の付いた額当てが着けられている。

防御には期待できそうもないので、アクセサリーの類だろうか。

特に豪華な装飾ではないが、何故か目を惹きつけられた。

「……その額当て、綺麗ですね」

「そう？ デザインが気に入ったのよ。

前の世界でも似たような持ってたから」

アレルは懐かしそうに、その頭部につけている装飾を優しく撫でる。差し込んだ日光が水晶に反射して、透き通った輝きを放っている。

「……前の世界？」

「何でもないわ。さあ、細かいことは良いから、病人はさっさと栄養つけてくたばってなさい！」

パンパンと手を鳴らすと、さっさと食べると口を尖らせて煽ってくる。

仕方がないので、マタリは果物に手をつけ始める。瑞々しい果実を咀嚼しながら、記憶の糸を手繰る。

(……病人？ いや、私は確か)

マタリの脳裏に思い浮かぶ光景。

アレルの静止を聞かずに、小部屋に勢い良く突入したマタリ。響く炸裂音、小箱に座る気味の悪い男、四方から掃射される鋭利な物体。

それに体中を貫かれる自分。口から流れ出る真っ赤な液体。

(確かに、私は重傷を負ったはず。それなのに、私の体には怪我ひとつない)

自分の身体をマタリは確認する。

肌着に着替えさせられてはいるが、その肉体にはなんら変わったところはない。

多少ぼーっとはするが、体調もおかしなところはない。

「……アレルさん。私は」

「アンタの精神力が回復するまで、お説教は後回し。

今はグダグダ言わずに横になって大人しく寝てなさい」

どこか不機嫌そうな表情で宣告された。

やはりあの部屋で何かがあったのは間違いないと確信する。

果物をさつさと平らげると、マタリはベッドから立ち上がり、アレルの元へと歩き出そうとする。

どうしても確認しなければならぬことがある。

「アレルさん、私は死んだのでは。いえ、確かに私は致命傷を」

「死んでる割には元気そうね。最近の死人はそうなのかしら。

そういえばアンデッドって無意味に元気よね」

腐った死体やミイラおとこ、がいこつ剣士も凄まじく元気だったなあ。あとアレルは思い出に浸る。

動く骸骨『じごくのきし』の姿が浮かんだところで、顔を思い切り顰めた。

今でもあの6本腕はトラウマなのだ。ご機嫌な骨野郎を見るとアレルの機嫌は酷く悪くなる。

「そうじゃなくて。私は、あの部屋で畏に嵌って、それで」

マタリは両手で頭を抑える。自分の最期の瞬間が浮かぶ。

体から熱い何かが流れ出るのを感じつつ、段々と意識が薄れていくのだ。

徐々に体温が下がって行く感覚。忘れようとしても忘れられない。

「やかましい。私は寝てると言ったはずよ。

話は快復してから、ゆっくりリネチネチとしてあげるわ」

「で、でも」

「でもじゃないのよ。例えば体力は戻っても精神までは癒せない。

睡眠は精神力を回復させる一番の手段なのよ。」

つまり、アンタに必要なのはタダひたすらに眠ること。
わかったら」

「癒す？ アレルさんが助けてくれたんですか？ 一体どうやって？」

言葉を途中で遮り、矢継ぎ早に質問を投げつけるマタリ。

その顔は真剣であり、眠気はすつとんでしまっている。

金色のポニーテールが、馬の尻尾のようにブンブンと暴れまわる。

「人の話を聞くように、と前も言ったでしょう」

はあ、とため息を吐くと、アレルは呆れ顔でマタリの目を見据える。
そして一言だけ呟いた。

『ラリホー』

戦闘が終わり、先程までの喧騒が嘘かのように静まり返った室内。
むせ返る様な血の臭いが充満している。

「やれやれ、わざと刺されたのはやりすぎだったか。身体は回復しても、服は戻らないものね」

ふーっとため息を吐くと、破れてしまった服を眺める。

下着がそこから覗いているが、まあ色気の欠片もないだろう。

血の色に染まった女など、近寄りたいとは私は思わない。

と、くだらない事を考えながら横に倒れているマタリへと視線を送る。

戦闘中、ベホマをかけて見たが、既に息絶えており効果がなかった。残念ながら死んでいる。

隣に膝をついて、その亡骸を見つめる。

矢が何十本も刺さっており、その虚ろな瞳には光が灯る事はもう永久にない。

そう、普通ならば。

私は無言で突き刺さっている矢を抜き始める。

鏃が体内に残らないよう、慎重に、それでいて素早く。

全てを抜き終え、私は一度目を閉じる。

本当にこれからする行為が正しいのかどうか。

自分には良く分からない。

以前と同じ過ちを繰り返すことになるのではないか。

このまま死んだ方が、もしかしたらこの娘にとっては安楽ではないのか。

本当は既に腹は決まっている。
怖いのは。私が恐れているのは。
二度と聞きたくない言葉は。

目をゆつくりと開け、私はマタリの身体を丁重に仰向けにする。
その目蓋を手で閉じ、両手を体の中央で祈るように組ませる。
この行為に特に意味はない。だが必要なことだと思っている。

「ふう、これを使うのも久しぶりね。

一人のときは使う必要がないもの。

さて、何回目で成功するかしら。私の予想だと3回目ね」

誰にともなく、独り言を淡々と呟く。

返事をくれる相手がいらないというのは、案外寂しいものかもしれない。
い。

ふと、そんなことを思った。

「彷徨える魂よ、我が祈りに応え再び舞い戻り給え。
ザオラル死者蘇生呪文!!!」

マタリの身体に手を当て、私は呪文を唱える。

この蘇生呪文の成功率は半々といったところだ。とはいえ、成功するまでやるのだから実質100%といえる。亡骸を淡い光が包み、徐々にその輝きを増していく。それが最高潮になったと同時に、光は弾けるように散って行った。

マタリの胸に耳を当てる。

……。

…… ゆっくりだが、鼓動を打つ音が聞こえる。

成功だ。この娘は運が良いようだ。

しかし肉体の傷は完璧には癒えていない。

このままでは再び死の河を渡る羽目になるだろう。

「ベホマ」

傷口がすぐさま塞がり、マタリの肉体は完全に回復した。

身に着けている鎧はボロボロで、誰が見ても『死に至る傷』を受けたと認識することだろう。

「ふう、これで良いか。連戦の拳句、呪文連発で流石に疲れたわ。ベッドで今すぐ横になりたいわ。本当にだるいもの」

その場に座り込み、はーつと嘆息する。

マタリの意識は当分戻ることはないだろう。

蘇生して肉体の傷は癒せても、精神までは癒すことは出来ない。

つまり、私達はこの血生臭い、死体が散乱する部屋で三時間経過するのを待たなければいけない。

『リミット』を試してみる手はあるが、1人で脱出することになったら不味い。

そもそもこの世界で『ルーラ』や『リミット』は使えるのか試して

いないし。

それに自由自在に脱出できると、あの横柄な門番に知られたら色々
と難癖をつけられそうだ。

「うーん、そういえば他の奴等も毎度毎度1階からスタートして
るのかな。

地下がどの程度まで深いのかは知らないけれど、毎回じゃしんどい
わよね。

正式に探索許可証を貰ったら、何か便利なものでも支給されるのか
しら」

うーんと腕を組んで考えるが答えは出ない。

知っていきそうな人物は隣で眠っている。永眠ではない。

と、その瞬間。

入り口の方からパチパチと手を叩く音がする。

リズム良く、ゆっくりと打ち付けられるそれ。

どこの馬鹿が拍手なんかしているのだろうか。

さっきの屑共がゾンビとして蘇ったのかもしれない。

きちっと燃やしておくべきだったと、少しだけ後悔する。

やれやれ一体何事だと振り返ると、ピンクのトンがり帽子にピンク
のローブが目に入る。

暗い迷宮では、あまり目に優しい色彩ではない。ちょっと明るすぎ
る。

そんなピンキーな衣装に身を包み、髑髏の杖を持っている変な女。

歳は二十代後半といったところだろうか。

とんがり帽子の下から、綺麗と言って良いだろう銀の長髪が伸びて
いる。

私は基本的に面倒くさがりなので、手入れが楽なショートカットが好きである。

どうでも良い話だけど。

まあ美人といって良いとは思いますが、趣味は悪そうである。

私の勘は結構当たる。

「あまりに悲しく感動的な光景に、思わず言葉を失ってしまいましたわ。仲間の死を悼み、悲しみを堪えながら鎮魂の儀式を行う少女。なんと悲劇的なシーンなのでしょう。ああ、涙が出てしまいそう」

演技ぶったわざとらしい口調で、こちらに同情の視線を送ってくる。手に持ったハンカチで、目元を拭う仕草をする。

だがその口元の笑みを隠すことが出来ておらず、本心では小馬鹿にしているのがバレバレだ。

隠す気もないようである。

私の苦手なタイプだ。性格が腐っている。

性根が捻くれている私と言えた台詞ではないが。

こういう手合いは、関わりと碌なことがない。

よって即座に追いつ返すのが正解だ。

「そう、それじゃあ満足したでしょう。」

回れ右して、とっとと出て行ってくれる？」

「あらあらつれないわねえ。仲間が死んだから感傷的になっているのかしら？」

「……………」

ああ、だるい。一つ返事をすると、二つムカつく台詞が返ってくる。会話を続ける意欲が急速に減っていくのが分かる。

ピンキーな魔法使いは杖をグルグルと回しながら、胴体とおさらばしたボスらしき男に近寄っていく。

ツンツンと杖で首を遊びながら、うーんと不思議そうな声を上げる。その間も器用に首をコロコロ転がしている。

まるでボールの遊ぶように。

「ねえ、貴方がコイツを殺したの？ 貴方みたいな餓鬼が殺せるよ。うな相手じゃないと思っただけど。何が起こったのかしら」

「転んだ拍子に、勢い余って首を刎ねちゃったのよ。」

本当悪いことしちゃったわ。それで今お悔やみ申し上げているところなのよ。

分かったらさっさと出ていけ」

「フフ、面白い子ねえ」

そう言いながら薄く笑みを浮かべると、杖で思い切り首を弾き飛ばした。

壁にあたり、勢い良く辺りを転げまわっている。

あまり気分の良い光景ではない。切り落としたのは私だけだ。

「ちょっと、血が飛び散るからやめて頂戴。

これ以上汚したくないのよ」

「私は大丈夫よ。魔法エンチャントで血飛沫がつかないようにしているから。」

やっぱり女は美しさが大切よ。そのためならいくらでも投資するわ」

「へー」

そんな効果があるエンチャント？ とやらがあるのか。

別に血塗れになるのは気にならないが、一々洗うのも面倒くさい。

前着ていたイカれた鎧は、洗うのに実に苦労したものだ。

なんというか、手を近づけるのも躊躇われる造りだから。

全体がトゲトゲしていて。

「それで、この賞金首『畏師サルバド』をどうやって殺したのか教えてくれる？

たかが『仮許可証』の駆け出しに討ち取れるような相手じゃないのよ。

一体どうやったのか、実に興味がそそられるわあ」

ニタニタと笑いながら、こちらへと近寄ってくる。

ああ、早く3時間立たないかな。

変なピンクに絡まれてしまったようだ。

「だから、転んだ拍子に」

「その割には、周りの手下がバラバラになって死んでいるのはどうしてかしら。

転んだ拍子なんて冗談は全然笑えないわあ。

これはとても芸術的な殺り方よ。まるで内部から爆発したような」

ピンク女は部屋を見渡して、一つ一つ死骸を確認している。

どれもこれも酷い有様だ。

私が出たことだけでも。

「飲んでた酒に引火して吹っ飛んだんじゃないの？
ほら、度数高いと火つくじゃない。」

多分そうよ。私見たもの。」

何も考えず、適当に返答する。

ピンクな女は段々イラついてきたのか、視線が鋭くなってきている。

「……素直に教えては貰えなさそうね。」

ちよつと試してあげようかしら。」

「やるの？ 別に良いけど、手加減はしないからそのつもりで。」

挑発的な女の視線に、私は口元を歪ませることで答える。
数秒程視線がぶつかり合い、一触即発の空気が漂う。

が、暫くするとピンクは視線を外し、軽く肩を竦めた。

「……今は、止めておくわ。何らかの手段でサルバドを殺した危険人物。」

たとえ糞餓鬼だとしても、警戒するに越したことはない。
いきなり仕掛けるのはお利口さんとは言えないものねえ。」

「その方がこつちも助かるわ。今日はもうしんどいから。
オバさんの相手は疲れるのよ。」

手をひらひら振って、ピンクに答える。

一瞬般若のような表情を浮かべるが、すぐに元に戻った。

顔芸だけは面白い女である。

「それじゃあお邪魔する前に、商談と行きましょうか」

「……商談？」

私の訝しげな視線に、ピンキーは笑みを浮かべながらこちらに手の甲を見せてくる。

そこには六芒星の刻印があり、怪しげに赤く光っている。

「私は魔術師エーデル・ワイス。またの名を死霊術師エーデル。使役するのは『死体』と『精霊』」

ピンキーことエーデル・ワイスの身体から、人魂のようなものが滲み出る。

それはグルグルとエーデルの周りをふわふわと浮遊し、青白い光を放っている。

「……外法術師か」

わざわざ自分の正体を喋るということは、実力に自信のある証拠だ。この女、ただのピンクではないようだ。警戒態勢に入り、女の奇襲に備える。

「そういう呼び方は嫌いよ。私は悪いことは一切していないもの。死体を回収して、わざわざ掃除してあげてるのだから。だから私はギルドを除名されることもないのよ」

手を下ろすと、エーデルは杖を両手で再び握り締める。
漂う人魂が髑髏に宿り、空虚な瞳に光を灯す。

「それで、その変態さんが一体なんだと言うの」

「話は簡単よ。このサルバドの死体と、貴方のお仲間の死体を買って欲しいの。」

本当は、サルバドに適当な死体を買ってもらったつもりだったんだけどね。

相手が変わっちゃったから、こうして貴方をお願いしてるわけ」

横たわっているマタリへと視線を送ると、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべるエーデル。

やはりこの女は変態だ。ピンキーで十分である。

「そのサルバドだかサルマタだかはどうでも良いけど、この娘は駄目よ。」

だって生きてるからね」

私の言葉に、何を馬鹿なといった表情を浮かべるピンキー。
まるつきり信じてはいないようだ。

まあ、装備している鎧の惨状を見れば、生きてると思うほうが可笑しい。

しかも、死んでいるような体勢で横になっているし。
意味ありげに両手も組んでるし。

「生きていて欲しいと願う気持ちは分かるけど、どう見ても死んでるじゃない。」

早く現実を見ることね。そんな事じゃこの先やっていけないわよ。
大事なのは切り替え。前を向いて歩かなくちゃ駄目よお」

「そうなんだ」

適当に返事をしてみる。棒読み口調で。

「そうなのよ。私の言うことに間違いはないわ。

……で金額だけど、サルバドは銀貨1枚。その金髪の娘は金貨1枚で買い取るわ。

たかが死体に破格の値段でしょう。感謝してもらいたいわね」

「はあ」

「サルバドは首なしだから肉壁用の使い捨て。

その娘は顔が綺麗だから、保存の魔法をかけて召使にでもしようかしらねえ。

うん、決めた。そうしましょう。戦わせて傷付くのが勿体無いもの」

そう呟くと、変態ピンクがこちらに銀貨と金貨を1枚ずつ投げてくる。

私はそれを乱暴に受け取ると、金貨だけ投げ返す。

流石にマタリを売る気は全くない。

が、迷惑料として受け取っておいても良かったかもしれない。

「銀貨はありがたく受け取るわ。だけどマタリは駄目よ

これで言うのは二回目だけど、この娘は生きているのよ。

だから絶対に売れないわ。疑うならこっちに来て確かめなさい」

「本当にしつこいわねえ。まあ良いわ。

それで納得するなら確認してあげるわよ。

検死までしてあげるんだから、感謝しなさい」

両手を上げて呆れたポーズをとると、こちらにドシドシと更に近づいてくる。

そして横に伏せているマタリの傍にしゃがみ、観察を始める。

「どう？　ちゃんと呼吸もしているし、脈もあるでしょう。ちなみに私は外法は使わないから」

「……う、うそ。な、なんで生きてるのよ！

こんなに深そうな傷をいっぱい受けて、治癒が間に合うわけがない！

ありえないわ」

鎧の傷跡を指で確認し、その深さを予測しているようだ。

確かに、その推察は正しい。

「運が良かったんじゃないの？」

「運で何とかなるわけないでしょう！！

致命傷は治癒することは不可能。そんなの常識よ！

……一体どういう事なの」

何やら顎に手を当てて考え始めている。

マズそうなので、適当にごまかすことにしよう。

「それが常識なんだ。まあとにかく諦めてよ。生きている人間を連れていくのは誘拐だものね」

私が冷たく言い放つと、ピンキーはぐぬぬと唸り声を上げる。どうしてもマタリが生きている事実には納得がいかないらしい。

まあそれは合っているのだが。
一度死んで蘇ったのだ。間違っていない。
だがわざわざ教える必要がないので余計なことと言わない。
知られると煩そうだから。

「はあ、仕方ないわ。この首なしのサルバドだけで我慢するわよ。
折角活きの良い、小奇麗な死体が入ると思っただのに。
本当に残念だわあ」

髑髏の杖の先を床に叩きつけると、そこから目視できる魔力の刃を放つ。

それはサルバドの右手を切り飛ばし、私の目の前にポトリと落ちた。
切断面からは赤黒い液体が流れている。
嫌がらせだろうか。

「……何のつもり？」

「私は人の手柄を奪つようなことはしないのよ。
それは貴方の戦利品。私のじゃないわ」

右手をよく見ると、ナイフと鍵のマークの入った刻印がされている。
なんだか分からないが、恐らく職業を表すものだろう。
ピンキーは魔術師だったし。

それでこの右手だが、恐らくネズミの尻尾と同じようなものではないか。

ギルドに持ちかえって、恐らく換金してくれるのだろう。
というわけで、イヤイヤ皮袋に詰め込む。

中を見ると、尻尾がうじゃうじゃと、血が滴り落ちる切り落とされた右手。

うん、実に嫌な光景だ。乙女が持っていて良いものではない気がしてならない。

だが背に腹は変えられない。

腹が減ってはなんとやらだ。

「さて、それじゃあ行くわね。貴方の顔すっかり覚えたわ。

縁があれば、そのうちまた会うこともあるでしょう。

その時まで無事に生きている事をお祈りしてるわ」

杖から赤い光を迸らせると、サルバドの胴体へと発射する。

暫くすると、胴体がのそのそと起き上がり、

不恰好な歩き方で部屋の入り口へと向かっていく。

去り際に恭しく一礼すると、ピンキーは鼻歌交じりに出て行った。

その後を首なしサルバドが追いかけていく。

私はガクツと頭を垂れる。精神力が更に消耗した。

「嵐みたいな女だったわ。しかも顔を覚えられてしまったし。

あーとつとと帰りたいわ。後何分かしら」

はあ、疲れた。当分ピンクは見たくない。

目がピンクでチカチカする。

その後、私は三時間経過するまでその場に待機していた。背負って出口まで戻るのは、もっと疲れそうなので我慢した。時間になると、私とマタリは即座に迷宮前まで瞬間的に送り飛ばされる。

血まみれのまま街を歩く気かと横柄な門番に一喝され、結界内部にある『清めの泉』で身体を洗い流し、『有料』で安っぽいローブを買わされた。意識を失ったままのマタリを背負い、ルイータの酒場までたどり着く頃には、辺りはすっかり夜の帳が落ちていた。

第七話 勇者の初報酬

迷宮から帰還したギルドメンバー達で、夜の戦士ギルドは大きな賑わいを見せていた。

無事生還した冒険者は、まず各ギルドで魔物を倒した証を換金するのだ。

その金を持って、パーティの仲間と酒場で喜びを共にしたり、女を買いに街へ繰り出したりする。

アートの街が一番の賑わいを見せるのはこれからの時間帯だ。

それも我慢できない横着者が、酒場のスタイルを取っていることで勝利の美酒に酔っているのだ。

今日は新人達も多く、先輩ギルドメンバーに色々とアドバイスを貰っているようだ。

本業は酒場ではないので、そんなに酒や料理の種類は多くはないが、ただ飲めれば良いのだから問題ない。

ちゃんとした訓練所も勿論存在しているし、正式な認可を受けたギルドである。

が、一見しただけでは酒場となんら変わらないこの場所。

ギルドマスターのロブは、そんな適当さを気に入っていた。

別にロブがこうした訳ではなく、戦士ギルド創設以来の造りである。

ちなみに酒や料理を提供しているのは、本業の調理師であり、注文を取る係や経理担当もしっかりと雇っている。

ロブはギルドの関連業務のみを行っており、酒場の業務には手を出さない。

よく勘違いされるが、酒場のマスターではないのだから。

ふざけて注文してくる舐めた輩には、ロブの拳が顔面に炸裂するこ

とだろう。

「ようロブ。今日は繁盛しているじゃないか。稼ぎが増えて笑いが止まらないだろう」

「ああ、副業が賑わいを見せるのもどうかとは思うがな」

「なあに生還を祝う大事な儀式さ。これをやらないとどうにも落ちつかなくてね。

後でリーダーの酒場で、しっかりと飲みなおすんだが。

もう少し酒の種類が増えれば、更に言うことなしなんだがね」

そう笑いながら、グラスに入った酒を一気に飲み干す。

この男は、戦士ギルドでも古参であり腕前もなかなかの物である。

たしか魔術師、僧侶、レンジャーの面々とパーティを組んでいたはずだ。

稼ぎも十分であり、いずれは協会の依頼を達成し『星』を獲得するだろうとロブは見ている。

「やれやれ、まあ協会から睨まれない程度には『魔素』を抽出できているしな。

このままなら俺の地位も安泰だ。

お前らにはもつと頑張ってもらわないといかん」

「ハハツ、そんなに心配なら新入りの訓練に力をいれることだ。

ジャバの奴が嘆いていたぜ。なんでもかんでも押し付けるなってな」

「その分の手間賃は払っているんだ。もつと喜んで欲しいものだ。もしかしたら逸材が転がっているかもしれない」

「へっ、そいつは難しい注文だ。馬鹿のお守りで命を落としたら洒落にならねえ。」

ジャバが引率したボンボン連中、泣きながら逃げ帰ったそうじゃないか。

全く根性の足りない奴等だぜ」

新入り連中の中でも、やたらと威張りちらしていた貴族のボンボン。装備だけは立派なものだったが、まさか1日で脱落するとは。

戦士ギルドでもかなり早い部類である。

今頃自宅で半べそをかいている事だろう。

「戦士ギルドは魔法の才能がない連中が集まるからな。」

そういつた舐めた手合いがどうしても多くなる」

「ちげえねえ。剣を『使える』と、剣で『戦える』は別物だ。」

そこを理解することが、駆け出しを卒業するための第一歩さ」

「それが何より難しいんだがな。理解する前にあの世に行ってしまう」

ギルドに所属する際、魔法の才能がある連中は確実に『魔術師』か『僧侶』ギルドを選ぶ。

魔法の才能は後天的に身に着けることは出来ない。

いわゆる『魔法の器』があることがそれらのギルド所属の条件となる。

魔法を教え、扱いをきちんと伝授してくれる為、ギルドというより学校のようなものもある。

勿論無料ではないが、その見返りは大きい。魔法は迷宮ではとても重宝される。

次に育ちの悪い奴等、癖の強い連中は『レンジャー』ギルド。鍵開け、畏の取り扱い、剣術、弓術についてもみっちり教えてくれる。

元々そうだった事に関わっていた人間が多いため、元々の技量が高い。

所属条件は、ギルドマスターに認められること。ただそれだけだ。

そして魔法の才能がなく、レンジャーにも適正がない連中。

言い方を変えると、己の肉体と剣で戦うことを選んだのが戦士ギルドだ。

所属条件は特になし。ここは基本的に誰でも受け入れる。

余りにも舐めた『馬鹿』でもないかぎり、ロブが受け入れを拒否することはない。

剣術、戦士としての立ち回り方、連携についてなども請われれば教えるが、

そうでなければ何もしない。

毎月数十人と入れ替わるのだ。一々構っているほど暇ではない。

最も脱落する人間が多いのが、この『戦士』ギルドなのだから。

一流と、落ちこぼれの格差が最も大きい。

魔術師、僧侶、レンジャーと組むことが出来ない奴等は、戦士同士で組むことしかできない。

そうなれば上層部でうろうろすることしか出来ずに、やがては絶望することになるのだ。

無理してもぐったところで、死体になるのが関の山だ。

迷宮はそんなに甘くはない。

ふと扉の開く音がして、一人の冒険者が入ってくる。

教団配布の白いローブを着た、小柄な少女。

ロブが実力を測りかねている、良く分からない奴である。

「お、見るよマスター。新入り様のお帰りだぞ。

あの顔を見るに、中々の稼ぎだったんじゃないか？

可愛い嬢ちゃんが一体どこまで成果を上げたか実に気になるね」

赤ら顔でガハハと豪快に笑う熟練戦士。

ジャバとの争いの件を見ていないため、特に思うところはないようだ。

一件可愛い顔をしているので、どこまでやったかぐらいの興味だろう。

「……ああ、そうだな」

ロブは一言だけ答えた。

「なんだい、その気の抜けた返事は」

「うん？ いや、ちよっとな」

「おいおいマスター、新人の初仕事からのご帰還だぞ。もつと景気をつけてやらないと駄目だぜ。」

おい、野郎共！！ 新人の嬢ちゃんの凱旋だ！！

皆で盛り上げてやろうじゃないか！！」

唐突に男が声を張り上げると、

思い思いに酒をあおっていた連中が盛大に歓喜の声を上げる。

からかい気味に拍手やらふざけ半分の言葉を叫び、酒場は一気にヒートアップする。

「おお、少女戦士様のご帰還だ！！ 英雄の凱旋に乾杯！」
「ハハハ、ネズミ狩りのエキスパートになれたか？」
「まさか尻尾1個ってことはないだろうな。ガハハハ！」
「いやいや、きつと10個はあるぞ。驚くべき戦果だな！」
「戦乙女に乾杯だ！」

騒がしくなった場に、盛大に顔を顰める少女、確かアレルという名前だ。

初対面のインパクトが大きいので良く覚えている。

勿論悪い意味でだが。

以前持っていたはずの『棒』は持っていないようだ。

やたらと満杯の皮袋を背負い、実に不機嫌そうな顔をしている。

仕方がないので、ロブは声を掛けることにした。

このままでは馬鹿共が大騒ぎを続けると思われたからだ。

流石にギルドマスターとしては看過できない。

「おい、こつちだ。魔物の部位の換金は俺が受け付けている。仕事はさっさと済ませたいんでな。とつとと来い」

そう促すと、アレルは軽く頷いてカウンターまでやってくる。

白いローブの下は、血で染まった服を着用しているようで、

鉄が錆付いたような臭いが漂い始める。

ロブにしてみれば慣れた臭いなので、別に何か言うことはない。

カウンター席で酒をあおっていた熟練戦士が、気楽に声を掛ける。その笑みは実にニヤついており、酔っ払い以外の何者でもない。

「よう、初めての迷宮はどうだったよ。興奮しすぎてイッチまった

か？

それとも優しくしてくれたいか。何しろ初めてだったんだろ？

なんてな、ガハハ」

「……うるさいわね。大人しく飲んでなさいよ」

「ワハハ、愛想がないなあ嬢ちゃん。そんなんじゃ嫁の貰い手がないぞ。」

女ってやつには慎みが必要だぜ。日常生活でも、ベッドの上でも嫌らしく笑うと、ポンポンとアレルの肩をたたき始める。

また一騒動起こるかと思えば、アレルは嫌な予感がしたが、アレルは特に気になる様子はなかった。

「ちょっと、この酔っ払い何とかして頂戴」

「ハハハ、威勢が良くて結構！ その意気だぞ！」

「……マタリはどうした？ 一緒だったんじゃないのか？」

ロブは、アレルが1人であることを多少疑問に思い率直に尋ねる。万が一があったとは考えにくいだが、一応確認だ。

「今はルイーダの酒場の寝室で寝てるわ。ちょっと疲れたみたい。身体に問題はないから大丈夫よ」

「そうか。それなら良いが」

一応子供の頃から知っている関係であり、多少の心配ぐらいはする。アート一族の復権とやらには全く興味はない。

アートの他の連中は屑ばかりだからである。

かつての権威を笠に来て、実力もないのに威張り散らす。没落している今、それは嘲笑の対象でしかない。

G・アート卿が見たら、さぞ嘆くことだろう。

だが、顔見知りとしては、影ながら応援してやりたいとロブは思っている。

マタリに対しては、特に悪い感情は持っていない。

むしろ敵意を持っているのは、アート一族の方だろう。

何しろ、マタリは妾の娘だからである。

今回の件も体良く放りされたに過ぎない。

本人は良く分かっていないようだが。

「はい、これ。今回とってきた魔物の部位よ。

全部換金よろしく。疲れているから手早くお願いね」

ドンと皮袋をテーブルに置くと、両手を叩いて汚れを払っている。

「分かった。それでは確認させてもらっぞ」

返事をして、ロブは袋の口を開ける。

うじゃうじゃ嫌になるぐらいの尻尾が詰まっており、もう入らないというぐらい満杯だ。

初回でこれだけ尻尾を取ってくる奴も珍しい。

「おうおう、こりゃすごい。ネズミだったって厄介なことには変わりはないからな。

ちよつとだけ見直したぜ、お嬢ちゃん」

不精髭の生えた顎を撫でながら、感心した声を上げる男。

騒いでいたギャラリー達も、同様だ。
軽く見ただけで100はあるだろう尻尾。
中々の成果であるのは間違いない。

「大したことないわよ。ちょっと重かったけど」

「そう、その重さが厄介だな。そのうちぶっ殺しても、尻尾を刈り取らなくなる。」

銅貨2枚じゃ割に合わないことに気がつくのさ。

そうなれば、駆け出しは卒業さ。嬢ちゃんも頑張れよ」

優しい声を掛ける男。一応先輩として、見守る気持ちは持っているようだ。

ロブは尻尾を10本ごと束にしながら、横にした袋から取り出していく。

そしてそれを計算し、ギルドメンバーの功績表に記録する。

「今回は、ネズミの尻尾が102個だ。これはマタリとの共同成果ということ構わないな？」

「ええ、問題ないわ」

「宜しい。それでは記録させてもらった。」

これが報酬だ。しっかりと配分するようにな。

初にしては中々の物だ。これからも精進すると良い」

ネズミの尻尾は一個で銅貨2枚。

よって銅貨204枚が今回支払われる報酬となる。

そこそこの額であり、一泊銅貨8枚であることを考えると十分すぎる稼ぎだ。

回収した魔物の部位は、雇っている鑑定士が魔素を抽出する。それを協会に納めることが、ギルドに課せられた使命というわけだ。それが一定を下回ると、ロブはギルドマスターを解任されてしまう。よって各ギルドマスターは、しっかりとメンバーの教育にも力をいれなければならない。

その見返りとなる報酬は、それなりに大きいものではある。

ロブはその報酬で、アートの街で豪邸を手に入れた。

元は一介の傭兵出身のロブ。それが貴族並みの豪邸を手に入れる大出世。

戦士ギルドメンバーの出世頭である。

「どうもありがとう。」

……といたい所だけど、もう一つあるのよ。

ほら、一個見落としているわよ。」

「うん？ もう尻尾はないようだが」

「これよ、これ」

怪訝そうな顔を浮かべるロブ。

アレルは皮袋を引っくり返して、中身をテーブルへとぶちまける。

埃やら土やらとともに、どす黒く変色した『右手』が放り出される。

「おいおい、穏やかじゃないな。これは誰のものだ？」

どうやらレンジャーギルドの人間らしいが」

隣の戦士が咎めるような声を出す。

誰かの死体から、悪戯で切り取ってきたのかと疑っているようだ。

レンジャーギルドと分かったのは、右手に鍵とナイフの刻印がある

からだ。

これはローグの刻印だ。

「なんか賞金首のものらしいわよ。名前はサルマタだったかしら。よく覚えていないんだけど、そんな感じ」

「……そんな名前の賞金首はいない。

騙そつとしていているなら止めておいたほうが良いぞ。

鑑定すれば一発で分かるんだからな」

ロブは声のトーンを落として警告する。

賞金首関連の嘘は罪が重い。ギルド間の信頼にも関わる為、一発で除名対象だ。

仮許可証のアレルが除名された場合、二度と迷宮に入ることは出来ない。

「嘘じゃないわよ。なんかピンクの女が教えてくれたもの。

あんまり思い出したくない服装だったわね。

目に優しくないわ」

ピンクの女？　ロブが思い出すのは一人しかいない。

イカれた魔術師、エーデルワイズだ。

賞金首一歩手前でなんとか留まっている女。

死体を操るなどという外道であり、個人的にはさっさと死んで欲しい部類に入る。

迷宮で見かけたとしたら、即座に殺しに掛かりたい対象である。

「その女が誰かには心当たりはあるが。

まあ良い、一応鑑定してみよう。今回は違ったとしても、罪には問わん。

そのピンク女に騙されたということにしてやる」

「ハハツ、どうしたんだロブ。随分優しいじゃないか。まさか年下が趣味なのか？」

目の前の男がからかう。ロブは不機嫌な顔を浮かべ、手でシッシッと払う。

「俺だって鬼じゃない。駆け出しの『ミス』ぐらいは大目に見るさ。おい、この『右手』を鑑定してやってくれ」

裏に控えている痩せ気味の若い男に、『右手』の鑑定を頼む。この男は魔術師ギルド出身で、鑑定作業の為に雇っている。

魔素の抽出もこの男が行っており、腕前は確かなものだ。残念ながら体力がなかった為、冒険者としては成功することは出来なかった。

だが魔法の才能があれば、色々と潰しが効く。

「……はい。それでは失礼します」

「テーブルの上に乗っかっている手だ。

見ていて気持ちが良いものじゃないから、手早く頼む」

「……了解しました」

よたよたと歩いてくると、テーブルの上にある右手を鑑定する。手をかざし、意識を集中することでその物体の情報を入手するのだそうだ。

良く分からないが、真贋が分かれば細かいことはどうでも良いのだ。

鑑定作業を終えると、静かにその結果を鑑定士は報告する。

「……賞金首リストに該当あり。畏師サルバドの右手に間違いありません」

「何だつて？」

「……サルバドの右手です。職業刻印もあり、賞金首討伐と認定します」

「ハハハ、そいつは間違いだ。あのサルバドが駆け出しにやられる訳がねえ。」

あの野郎イカれている癖に、全く油断しやがらねえからな」

「その通りだ。あの野郎、陰険な罠ばかり仕掛けやがって。とんでもねえ奴だが、実力は折り紙つきだぜ」

「もう一度鑑定したらどうだ！ どうせそこらの死体の右手に違いないぜ」

一笑してそれを否定する男。周りで聞き耳を立てていた連中も、そうだそうだと同意する。

だがロブは笑う事が出来なかった。

鑑定士は嘘をつかない。嘘をつくことは己の誇りに関わるからだ。

さらに、鑑定士の偽証は教団から『異端』指定を喰らう。

異端指定を喰らったら最期、この世からは晴れておさらばという訳だ。

そんなリスクを犯してまで、嘘をつく必要が鑑定士にはない。

さらに『鑑定魔法』が誤った情報を示すことはないらしい。

つまり、この右手は『畏師サルバド』のものに間違いはない。

「鑑定士は嘘をつかない。それはお前も分かっているだろう。死と引き換えにそんなことをする理由が何もない」

「……勿論、我々鑑定士は嘘を申しません。己の仕事には誇りを持つております。

嘘をつくぐらいなら、死を選びますよ」

「い、いやかしよう。サルバドを殺るなんてそんなこと出来る訳がねえ！」

ドンとテーブルを叩いて強調する男。その表情からは酒が抜けている。

「ねえ、それで褒章金はくれるの？ さっさと帰りたいんだけど」

髪をかき上げながら、アレルが疲れた表情で尋ねる。

それには答えず、ロブは質問を投げかける。

「……一体どうやった？ お前みたいな駆け出しに殺せる相手じゃない。

ましてアイツは徒党で行動している。

今まで何人の熟練者が殺されたことか」

「全員普通に殺したわ。思ったよりも雑魚だったわね。

ああ、面白い罠が幾つかあったかしら。

発想は悪くなかったわね」

特に表情を変えず、大したことがないように答える。

「さ、サルバドを雑魚だと！ お、お前は」

「……奴のギロチンを一体どうやって」

「うん？ 迷宮6階の小部屋に残骸が残ってるわよ。興味があるなら回収したらどう？」

賞金首の渾身のトラップ。回収してレンジャーギルドに渡すべきではある。

今回懸賞金を掛けたのもレンジャーギルドである。信頼を裏切り身内を手につけたことから、恐ろしい程の憎悪の対象となっていた。

目で合図を送ると、目の前の熟練の男が戸惑いつつも頷く。調査をして報告しろという指示だ。

「分かった。賞金首サルバドを討ち取ったと認定する。報奨金は金貨10枚。良くやったな」

この世界での金貨は、銅貨1万枚分に相当する。アレルが以前いた世界でいう1万Gと同等だ。つまり、10万Gの収入である。

「ほ、本当かよ……」

金貨を10枚、小さな袋に入れて手渡す。

ギルドはすっかり静まり返り、その光景を見つめている。

鑑定士は尻尾の束を抱え、奥に戻っていく。
特に思うところはないようである。

彼らにとって大事なのは、正しい鑑定を行う、ただそれだけなのだ。

「中々の額ね。これで新しい装備が買えるかしら。
流石に棒じゃアレだったものね」

袋をジャラジャラと鳴らすアレル。

ロブはそれを無言で見ている。

「……………」

「それじゃこれで失礼するわ。

ああ、ちゃんとマタリにも渡すから心配いらないわよ」

ロブに挨拶をすると、手を振ってアレルは背を向ける。

ロブはそれを見て、独り言のように言葉を漏らす。

「……………お前は一体何者なんだ。本当に信じられん」

それを耳にしたアレルは笑顔で振り返ると、ロブに告げた。

「私は勇者よ。勇者アレル。

別に信じなくても構わないけどね。

誰が何を言おうと、私が『勇者』であることは変わらない」

「な、なにを」

「ただの独り言よ。気にしないで良いわよ?」

一笑に伏そうとしたが、ロブの顔は固まり笑う事ができなかった。顔は笑顔だったが、その瞳には修羅場を潜り抜けた仄暗い光が灯っていたから。

かつてロブよりも、地下階層に挑み続けた奴等も同じ目をしていた。『人間』であることを止め、当初の目的を忘れ、ただ只管に下を指す狂戦士。

数多くの成果を上げ、最早『三つ星』確定とまで言われても、迷宮に挑み続けた。

英雄として祭り上げられることを拒絶し、糞みたいな場所へ何度も何度も潜る。

彼らは血に取り憑かれ、魔物を狩ることのみに生き甲斐を見出したのだろう。

ロブはその境地には至れなかった。

だから一つ星を授与された段階で、ギルドマスターの座を継いだのだ。

ロブがギルドマスターの座について数年後。

やがて彼等は地上に戻らなくなった。

死んだのか、今でも迷宮を下り続けているのかは分からない。

もしかしたら屍となりながらも徘徊を続けているのか。

その彼らと同じ狂った目を、ここで見ることになるとは予想もしていなかった。

正直、直視するだけで背筋に震えが走る。

死にたくなければ関わってはいけないと、本能が叫ぶのだ。

他の奴等も同じらしく、全員が下を向いて視線を合わせようとはしない。

ロブとメンバー達が無言で立ち尽くしていると、それを尻目に悠然とギルドを去っていくアレル。その後姿をロブはただ眺め続けることしか出来なかった。やがてその扉が閉まったとき、一同はようやく安堵のため息を吐く。

「……駆け出しなんてとんでもねえ。あの目はヤバい。」

ロブ、お前も覚えておるだろう。

何か壊れてるんだよ。じゃなきゃあの目はできねえ。

あの人達と同じだ。お前もそう感じただろう?」

男が目には手を当てながら、疲れたように呟く。

三つ星の連中を思い出しているのだろう。

この男は奴等を途中までは心から尊敬していた。

そしてそれが変わっていくのを、間近から見ていたのだ。

「……俺に聞くな」

ロブの本心からの言葉だった。

予想以上の収入を得たことで私の機嫌はかなり良くなっていた。

思わず鼻歌でも飛ばしたくなる気持ちである。

マタリが負傷したのは失敗だったが、賞金首を討ち取れるとは幸先が良い。

金貨10もあれば、当分気楽に生活が出来るだろう。

当然ながら、マタリときつちり配分する。

初期投資をしてもらった分、マタリと私で6：4といったところか。

「んー。とりあえずは服か。この白いローブじゃちょっとね。なんかあの門番の得意気な顔を思い出すわ」

センスの悪い白いローブ。横柄な門番に売りつけられたものだ。お布施お布施と実に不愉快な奴である。

ブラブラと通りを見渡すと、まだ営業を続けている店ばかりだ。

冒険者達相手ということで、今の時間帯が盛況するのかもしれない。

適当に当てもなく歩いてみると、一軒の店が目に入る。

洒落た服飾店であり、鎧やら盾やらまで扱っている。

総合防具屋といったところだろうか。

軽い気持ちで店に入ってみる。

ドアを開けた瞬間に、店主が満面の笑みで声を掛けてきた。

中々出来る奴である。

どこかの街で反乱を起こされた拳句、牢屋に入れられた馬鹿野郎とは大違いだ。

ちなみに一応助け出してやったが、即座に逃亡しやがった。

恩知らずの、本当に腹の立つ奴である。

「いらっしやいませ。何かお探してしょうか」

「うん、ちょっと服を探しているんだけど。着ているのが駄目になっちゃって。何かオススメある？」

「左様でございますか。それでしたらこちらがオススメでございます。」

『みかわしの服』、機能性抜群の逸品でございます。お値段もお手ごろで、非常にお買い得ですよ。」

こちらに一着の服を手渡してくる。聞き覚えのある名前に、ふと懐かしい気持ちが湧き上がる。

「何か特殊な効果でもあるの？」

「いえ、残念ながら伝説にあるような効果はございません。あらゆる攻撃をヒラリとかわす。そのような祈りだけは籠められておりますが。」

汚れにも強く、鎧の下に来ててもかさばることはございません。」

伝説という言葉に思わず噴出しそうになる。

確かに時々ありえない瞬発力を授けてはくれたが、防御力は大したことがなかった。それが伝説級とは。

……でも名前まで同じなんて不思議なこともあるものね。

「じゃそれで良いわ。いくらかしら？」

「はい、銀貨4枚でございます。」

それが高いのか安いのか良く分からない。
マタリがいれば相場が分かるのだろうが。
少し腕を組んだ後、まあ良いかと判断した。
とりあえず服は手に入れなければならぬのだから。

「それじゃこれ」

「はい、ありがとうございます。

それではただいまお包みますので。

商品をご覧になってお待ちになってください」

代金を手渡すと、みかわしのふくの在庫を取りに良く店主。
私は特になんとはなしに、店を歩き回る。

「んー。いろんな服があるのねえ。

鎧は流石に良い値段ね」

皮の鎧：銀貨1枚、鋼の鎧：銀貨5枚。

目玉商品のミスリル鎧は金貨10枚と凄まじく高い。

この分だと、まずは皮の鎧かしらねえ。

マタリが目を覚ましたら相談してみることにしよう。

あの娘の鎧もボロボロだし、修理を手配するか、新品を調達する必要があるし。

店主の元へ戻る途中、処分品の籠の中に、妙に気になる商品を見つけた。

青い水晶がはめ込まれた額当て。

前いた世界で、私が最後まで見につけていた物に瓜二つだ。
値札を見ると、銅貨10枚と随分安い。

「……これぐらいなら買っても良いかな。
なんか頭部が落ち着かないのよね」

それを手に取ると、無人のカウンターに置く。
数秒後に、店主が裏から現れた。

「お待たせしました。こちらが商品になります」

「どうもありがとう。あとこれも欲しいのだけど」

「ああ、それですか。頭部を守るにはあまりオススメできませんが
……」

こちらを心配してくる店主。人の良い性格をしているようだ。
私は苦笑すると、手を振りながら返事をする。

「いいのいいの。頭か割られたらどんな兜着けてても一緒よ。
それに、なんか気に入っちゃったしね」

頭部に直撃を受けたら普通は死ぬし。

私は兜には拘らない主義だ。

はんにゃの面は好きだったけど。あのセンスは素晴らしい。

「かしこまりました。それでは銅貨10枚ですが、5枚にサービス
致しますよ。」

これからの冒険、頑張ってくださいね」

なんと割り引いてくれた。私が駆け出しっぱいなので応援してくれる
らしい。

素直にそれを受け入れると、代金を支払いその場で装備する。

「どう？ 似合つかしら？」

「はい、とってもお似合いでございますよ。

……あれ？」

私の額を見て怪訝な表情を浮かべる店主。

額当てに何か付いていたのだろうか。

まさか値札外し忘れたとか。それは恥ずかしい。

私は銅貨10枚ですとアピールしているようなものだ。

念のため、確認することにする。

「どうかしたの？」

「い、いえ。何やら水晶に紋章のようなものが見えたような。

ああ、申し訳ありませんでした。私の気のせいだったようです」

少しだけ慌てた様子を見せる店主。

私はあまり納得してないが、特に突っ込む必要性もないだろう。

「ふーん。まあ良いわ、それじゃあ失礼するわね。

サービスしてくれてどうもありがとうございます」

「いえ、とんでもございません。

お買い上げ頂き、ありがとうございます。

またのお越しをお待ちしております」

「また来るわ」

深く頭を下げ、私が店を出るまで丁寧に見送る店主。

私は気分良く、防具屋を後にした。
優しく額の水晶を撫でてみる。
ああ、懐かしい感触だ。これがないとどうにも落ち着かない。

さあ、ルイーダの酒場に戻るとしよう。

私は星明りと、街の明かりに照らされる大通りを進み、
ルイーダの酒場に帰ることにした。

・『三つ星』確定と呼ばれた狂人達

戦士3名、魔術師1名、僧侶1名のパーティ。

協会からの依頼を何度も達成し、名声を得ていた。

二つ星を授与された後も、迷宮に挑み続ける。

それぞれがギルドマスター候補と呼ばれ、

やがては各国に招かれると噂されていた。

次の言葉を残し、迷宮で消息を絶つ。

『地上の栄光などどうでも良い。我らが知りたいのは迷宮の終点だ。
その為ならば、どんな代償も支払おう』

・魔素

魔物の部位から抽出される物質。

魔物の格が高いほど、濃密な魔素を抽出することができる。

鑑定士のみが抽出することを許されている。

ギルドはこれを協会に納めることで、運営資金を手に入れる。

協会から教団に渡っているとわれ、それが何に使われているかは不明。

『魔素が何か知りたいって？ 教団の奴に聞いてみる。

次の日には気にすることもなくなっているさ』

第八話 勇者の帰還と変貌

アレルの消息が途絶えてから既に一ヶ月余り。

アリアハン王宮では、全力を挙げて搜索するよう厳命が下っていた。その命令は、ここ数週間で何度も発せられたものであり、事態が進展していないことを窺わせる。

「アレルは一体どこに行ったのだ！」

一月以上、何の音沙汰もないとは。

勇者としての自覚が足りないのではないか……！」

王の怒声が響く。

その表情にはどことなく焦りが見え隠れする。

万が一、勇者が消えたとなれば世界の終わりだ。

ルビスの加護とやらが、永久に続くなどという保障はなかったのだから。

心が折れた勇者が、本当の『死』を迎えたとしても不思議ではない。

「陛下。ただいま騎士達が全力を挙げて搜索を行っております。もうしばらくお待ちください。」

ただ、魔物達の数が多く、思うようには行ってはおりませんが」

「それは分かっている。ネクロゴンド地方は魔物の巣窟だ。決して無理はしないように。兵力を無駄に減らすのは愚策だ。」

……して、実家に連絡は来ていないのか？」

「はっ、毎日確認しておりますが、何一つ連絡はないそうです。母親も大層心配しております。」

……ただアレルの祖父が気になることを」

大臣が言いよどむ。

発言すべきかどうか迷っているようだ。
不審に思った王が問いただす。

「何だ。申してみよ」

「はっ、祖父が言うには、

『アレルは死んではおらん。真の勇者になる為の特訓をしているのだ』

とのこと。詳しくは分からないそうですが」

「馬鹿馬鹿しい。そのような戯言に付き合う必要はない。

老人の言葉に耳を貸している暇があったら、搜索活動に力を入れよ！
出来うる限りで全力を尽くすのだ」

「は、はい。申し訳ありません。

必ずや、勇者アレルを探し出してみせます」

大臣が素早く武官達に指示を飛ばしていく。

そう、こうしている間にも既に魔物達の侵攻は広がっている。

小さい村は瞬く間に飲み込まれ、

都市でさえも決壊する手前で防衛している状態だ。

それが破られれば、最早本丸を残すのみ。滅亡は免れないであろう。

聞く話によると、己が滅んだことに気付いていない哀れな村まであるという。

夜は日常生活を送り、朝日と共に屍に戻る。

住人達は、『死』が訪れたことを認識することすら出来ていない。哀れな魂は、いつまでこの世を漂うのだろうか。未来永劫、縛り付けられたままなのだろうか。

このような悲劇は、恐らく至る所で起きているはずだ。

もし、もしもだが。

このまま勇者が戻らなかつたら。

アリアハン王は一つの決意を固めている。

各国と連携し、最後の決戦を挑むのだ。

全兵力を挙げ、船団を率い魔王城へ総攻撃を仕掛ける。

勝算は低いが、座して死をまつよりはマシである。

各国が連携し、人類が持ちこたえる『最大の兵力』にて魔物に当たるのが理想だ。

今までは利害が絡み、率先して被害を受けようなどという国家はなかった。

それは何故か。

『いずれ、勇者が魔王を討伐する』と信じているからだ。

魔王は勇者の手によって討たれる。子供でも知っているおとぎ話。

各国の王達が懸念しているのはその先。

魔王が消えた後、世界の覇権を巡り、争いが起こらないとは言いきれない。

その為に、兵力を温存したいという考えはどの国にもあるだろう。

動乱を機に復権を狙うエジンベアは、特にそれが顕著である。

富国強兵に専念し、武力の増強に余念がない。

逆に、勇者を取り込もうとした国もある。

シャンパーニュ地方を制するロマリア王国である。

『王』という名誉職は勇者に譲り、実権は王族が握る体制。

アレルは拒否したが、それを聞いた時アリアハン王は平静ではいらなかった。

王族の一人をアレルの婿とでもすれば、生まれてくる子供が再び『王』の座を取り戻す。

国の名声は確実に高まり、勢力バランスは確実に崩れるからだ。

勇者の血を継ぐ王家の誕生。

そのような事は断じて認めるわけにはいかない。

例えアレルが承諾したとしても、あらゆる手段を用いてそれを潰したことだろう。

何しろ、アリアハンにはアレルの家族がいるのだから。

アドバンテージは、アリアハンが握っていると王は確信している。

こんなときに、人類同士で争っている場合ではないのは分かっている。

それは為政者の誰もが分かっているのだ。

だが国を治める以上、国家間の情勢についても考慮しなければならぬ。

この世界は、魔王を倒しました『めでたしめでたし』では終わらない。

物語は永遠に続いていくのだから。

アリアハン王は基本的には穏健派であり、勢力拡大などは望んでいない。

英雄や霸王になることなどは求めてはいないのだ。

むしろ代わりがいるのならば、即座に王座など譲り渡したいくらいである。

届く報告は悲痛な物ばかり。民からは早くなんとかしてくれという

陳情。

武官からは戦力増強の為の予算増額。

文官からは火の車の車の財政に関するものばかり。

魔物の侵攻により、税収は減る一方。

増税に対する不満の声は最早限界まで達している。

そう、頼みの綱は最早勇者だけなのだ。

国王から、民にいたるまでの全てが、『早く魔王を倒せ』と願っている。

例え『一人の娘』の人生が大きく狂ったとしても、それは仕方のない犠牲なのだ。

我々が彼女を選んだのではない。神がそう決められたのだ。

王はそう言い聞かせ、自分に言い訳をする。

最近は碌に睡眠を取れていない。体の調子も芳しくない。食欲も失せている。

アレルの断末魔の声が耳から離れない。

脳裏には、アレルの死に際の苦悶する表情が浮かぶのだ。

なんとか眠りについた先に待ち受けるのは、壮絶な悪夢。

この悪夢の中では、魔王の次に討ち取られるのはアリアハン王である。

散々利用しつくした憎悪の対象。

アレルは輝く剣を王に向け、顔を醜く歪める。

勇者の剣が、王の身体を引き裂くと同時に目が覚める。

アレルにとって、自分は憎むべき魔物と同じなのではないだろうか。

王が誰にも漏らしたことはない本音である。

アリアハン王が、思考の渦に取りこまれていると、玉座の間に伝令が走りこんでくる。

「へ、陛下!!」

「何事だ、騒々しい!! 陛下の御前であるぞ!!」

近衛兵が槍を交差させて、伝令の行く手を遮る。

王は目で合図を送り、通してやるように伝える。

恐らく、またどこぞの村が焼き払われたのだろう。最早どうすることも出来ない。

「なんだ、今度はどこの村がやられたのだ。」

それとも魔王軍が総攻撃でも仕掛けてきたか?」

王が冗談交じりに伝令へと問いかける。

伝令の表情が、あまりにも慌てたものであったから。

「い、いえ違います! 勇者アレル殿がお戻りになりました!! ただいま、こちらに向かっておられます!!」

「なんだと!?!」

ざわめき出す武官、文官一同。

王は大臣と顔を見合わせる。

「城外には、巨大な鳥が羽ばたいており、恐らく『ラーミア』の復活に成功したものと思われます!!」

その言葉に一同は窓へと近寄り、上空を見渡す。

澄み切った青空には、雲ひとつなく。

伝説の不死鳥ラーミアが己を誇示するかのよう、優雅にその羽をたなびかせていた。

人々は、その美しさに思わず見とれた。

「へ、陛下。ということは、見事ネクロゴンドを突破したのでは」

「……うむ。流石は勇者。オルテガの血を引くだけのことはある。消息が分からなかったのは、恐らく何らかの事情があったのだろう。残すは、魔王の首ただ一つだ」

「ようやくですな。本当に長かった」

「まだ安心するのは早いぞ大臣」

「も、申し訳ございません」

だが国王の顔には、先程までの悲壮なものはない。

武官や文官が歓声を上げ始める。

それはたちまち感染し、皆が喜びを共にする。

なぜなら、不死鳥ラーミアが蘇った今、

残るは魔王バラモスを討ち取るだけである。

そして、それはそう遠くない未来に訪れるであろう。
彼らもそれを強く理解しているのだ。
並み居る面々の表情がそれを物語っている。
先程までの沈痛な表情が嘘のようだ。

『勇者アレル万歳！』

『アリアハン万歳！』

『精霊ルビス様万歳！』

『人類に光あれ！！』

『我ら人類に勝利を！！』

歡喜の声が木霊する。

そして、我らが英雄の到着をただ心待ちにする。

そして。

アレルが姿を現した。

その姿を見た一同は、徐々に笑顔を曇らせる。

歡喜の声は小さくなり、やがて完全に消えうせる。

残ったのは動揺のざわめきのみ。

それは何故か。

アレルの姿が、『勇者』と言うには程遠い姿だったからだ。
人々の想像する『勇者』では有り得なかった。

莊嚴な鎧兜と身につけ、凜とした眼差し。

闇を切り裂き、光を指し示す希望の剣。それが勇者というものだ。

騒然とする人々を掻き分けて、アレルは王の直ぐ前まで悠然と歩いてきた。

「陛下、ただ今戻りました」

「う、うむ。ご苦労だったな」

王はアレルに気圧される。

たかが一ヶ月だというのに、まるで別人のようになっていた。どこかおどおどしていた表情は、攻撃的といえる程に不敵なものへと変わっていた。

「各地に散らばるオーブを集め、不死鳥ラーミアを復活させることに成功しました」

「良くやったな、アレル。して、この一ヶ月の間どうしていたのだ。皆、心配していたのだぞ」

「フフツ、心配。心配ですか？ 全てをなすりつける相手がいなくなるかも？」

「そりゃあそうよね。こんなこと、好き好んで誰がやりたがるものですか」

「ア、アレル。お前は」

「貴様！ 陛下に対してなんたる言葉遣いか！！」

「勇者殿といえど、見逃すわけにはいきませんぞ！」

武官の数名が激昂する。

が、アレルが睨みつけると萎縮してしまう。かつてのアレルとは違い、本気の殺気が放たれている。

「気に入らないなら、アンタ達がやれば？」

それとも一緒に連れて行ってやるのかしら。

死んでも逃げ出すことは許さないわよ。

魔王を討ち取るまで、何度も何度も戦わせる。

泣こうが喚こうが、目的を遂げるまでは永遠にね」

アレルが冷たく言い放つ。

その言葉が冗談ではないことは、彼らが痛いほど理解しているだろう。

「う、ううっ」

「そ、それは」

「立派なのは格好と口先だけ？」

騎士様ともあろうものが、実に情けないわね。

雑魚はひっこんでなさい。その使いもしない剣を延々と磨いてると良いわ」

武官は完全に黙り込み、顔を青ざめさせる。

万が一にでも冒険に狩りだされたら堪らない。

何しろ死ぬことが出来ないのだから。

「アレルよ、そのぐらいにしておくのだ。

彼らとて立派に勤めをはたしている。

……して、その装備は一体どうしたのだ。

余りにも物騒ではないか」

そう、皆が押し黙った理由の一つが、アレルの身に着けている鎧だ。

鎧の名は、『やいばのよろい』

重厚な鎧に、鋭い刃先が幾重にも装着されており、何者をも近づかせない容貌となっている。

その刃には返り血がべつとりと付着しており、謁見の場に身に着けて良いものではない。

あまりに剣呑である。

「ああ、これですか？ ネクロゴンドの洞窟で拾ったんですけどね。中タイカれた感じがして、結構気に入っちゃったのよ。

これなら屑どもが近づいてこないでしょう？

孤独な勇者に相応しい鎧よね」

何しろ、近づいてきたらブスリといくからね、と凄絶な笑みを浮かべるアレル。

その顔には、以前のアレルの面影は全くない。最早別人と言つて良いだろう。

「……一体何があつたのだ。何がお前をそこまで変えた？」

「今更そんなことどうでも良いでしょう？」

肝心なのは、魔王を殺すこと。ただそれだけのはず。そつでしよう、陛下」

馬鹿な事を聞くなと言わんばかりの表情。

王は言葉を失う。

「……………」

「そうそう、これからまたしばらく姿を消すから。あまり探し回らないでね。本当に邪魔だから。」

魔王を殺すには、まだまだ腕を磨かないといけないのよ」

アレルの言葉に、一同が動揺の声を上げる。

もう間もなく平和が訪れると思っていたのだから。

まだ時間が掛かるとはどういうことか。

「どういうことだ。後は魔王バラモスただ一人ではないか。今のお前ならば」

「たった一人で殺すには、まだまだ力が足りないわ。

まだ魔王には及ばない。自分が一番分かっているのよ。

それともアンタ達が力を貸してくれる訳？

それなら今すぐにでも行ってあげるけど」

辺りを見回すアレル。

彼女と視線を合わせようとする者は誰一人としていない。

「し、しかし。こうしている間にも、犠牲者の数は増える一方。勇者殿、たとえそれが茨の道としても、今すぐ魔王城へ向かうべきです。」

それが勇者としての運命なのですから。

でなければか弱き民達が

「

大臣が横から口を挟む。

勇者は事実上最強の駒である。

出来る限り、迅速に魔王へとぶつけなければならぬ。

ましてや『ルビスの加護』があれば死ぬことはない。

足止め、牽制の為に魔王城へと向かわせたい。

例え外道と罵られようとも、それが国を守る臣下としての勤めだ。

「 だから？ だから何なのよ」

アレルはそれが一体何の問題がある？ といった口調で問いかけてくる。

「ただのうのと待っている奴等のために、
どうして私が急がなくていいけない訳？

そいつらの代わりに私が何回『死』を味わったと思ってるのよ」

アレルが口調を荒げる。大臣は思わず及び腰になる。
自分に向けて殺意が発せられていたからだ。

「ゆ、勇者殿」

「フフツ、『死んでしまうとは不甲斐ない』。

私の事が不甲斐ないですって？

だったら自分で行けば良いじゃない。

私に納得いかないなら、勝手にやれば良いのよ！

………どういつもこいつも、ふざけるな！！」

アレルが黄金色の剣を天にかざすと、衝撃が巻き起こる。

大臣はその余波を受けて吹き飛ばさせる。

近衛兵は王の前に立ち盾となるが、戦意は喪失している。

剣先を王へと向けると、アレルは宣言する。

「これからは私のペースでやらせてもらうわ。

でも安心して？ 必ず魔王は殺すから。

それが『勇者』の存在意義だもの。

誰が何を言おうとも、私は必ず達成する」

ニコリと満面の笑みを浮かべると、アレルは踵を返す。

もうお前達に語ることは何もないと言うかのように。

それを止めようとする、勇気あるものは誰もいなかった。

だが、王は一言だけ問い掛ける。

今まで尋ねたくても尋ねることの出来なかった一言。

王が口にするには、あまりに無責任なその言葉。

だが、今この時を逃しては、二度とその機会は訪れないだろうから。

「……アレルよ。余を恨んでいるか？

『オルテガの娘』、ただそれだけの理由でお前を駆り立てた事を」

「別に恨んでないわよ。だって仕方がなかったんでしょ？

他に誰もいなかったんだからね。神の思し召してやつかしら。

……だから、私がこうなったのも、きつと『仕方がない』のよ」

振り返ることなく王の言葉に答えると、アレルはそのまま退出して

いく。

去り際に、アレルは麻袋を乱暴に後方へと放り投げる。どさりという物音を立てて、それは豪華な絨毯の上に着地した。

しばらくの間呆然としていた兵士達だが、警戒しながらその麻袋を開ける。

危険な物でないと、確認する必要があるからだ。

袋の中には、『50G』と、王が発時に与えた『武器・防具』が無造作に詰められていた。

迷宮地下6階。

戦士ギルドからの連絡を受け、レンジャーギルドの一団が搜索活動を行っていた。

案内役として戦士を派遣すると言って来たが、非常に迷惑なので丁重に断る。

使えるか使えないか未知数の奴を、わざわざ伴う必要が欠片もないからである。

レンジャーギルドから選抜したメンバーで向かわせるだけで十分なのだ。

床に記された『黄色い矢印』を呆れ気味に見下ろしながら、
一団のリーダーらしき男がぼやく。

「なんだあこりや。この階にもご丁寧に矢印が描いてあるぞ。
いつからここは案内付きの迷宮になったんだ。
一体どこの馬鹿の仕業だ！」

「へい。なんでも横着するために、
戦士ギルドの馬鹿がわざわざ塗っていったそうですぜ。
ただそいつは塗ってる作業中に、『猫』に喰われちまったそうです
が」

「なんだそりや。間抜けも良いところだな。

戦士ギルドの連中は脳味噌が足りないんじゃないのか」

「ハハツ、そりやそうだ。あいつら脳味噌が筋肉だからな。
脳筋とは良く言ったものだ」

部下達が嘲笑を浮かべている。

「馬鹿には実にお似合いの最期だな。

おい、目障りだから全部消しておけ。

駆け出しの馬鹿が罫に引つかかる元凶だからな。
全く手間をかけさせやがる」

リーダー格が命じると、控えていた部下達がだるそうに削り落とすていく。

その態度に文句を言うことはなく、リーダー格はやれやれと水をガブ飲みする。

本当は酒が飲みたいのだが、仕事なので我慢をしている。

「あー、しかしだるいな。本当は今頃酒場で一杯やっている所だつてのに。」

おい、なんで俺たちはここに来たんだっけか？

散歩か？ それとも迷宮の掃除か？

「頭あ。すっかりしてください。」

ギルドマスターに言われて、現場の検分に来たんじゃありませんか。まだ酔っ払うには早すぎますぜ」

というか水じゃ酔えませぬぜ、と付け足す部下。

「おうおう、そうだったな。」

後、俺のことは頭と呼ぶんじゃねえ。

レンジャーギルドサブマスター様と呼ぶんだ」

筒を乱暴に投げ捨てると、嗜めた部下を軽く睨みつける。

「そりゃ長すぎますぜ。もっと縮めたらどうでしょうか？ サブマスってのはどうです？」

「馬鹿野郎。そんなところで横着するんじゃねえ。」

それに長いぼうが箔がつくだらう。箔が」

「そうですかねえ」

「考えてねえで、さっさと動け！」

腕を組んで悩んでいる部下の尻を、思い切り蹴飛ばすと、リーダー格はずんずんと進んでいく。

部下達は削る作業を行いながら、それに遅れないようにと必死でついでいく。

蹴飛ばされた部下も、尻を擦りながら後を追う。

たまに現れるネズミは、ローグの投げナイフにより秒殺される。当然死骸は放置する。尻尾などわざわざ刈り取るのは、駆け出しぐらいのものだ。

「頭あ！！ ありました！」

戦士ギルドの連中が言っていた小部屋！

しかもギロチンが放置されてますぜ！！」

「デカイ声で叫ぶんじゃねえ！」

頭に響くだろうが！！」

手斧をブン投げると、部下の顔直ぐ横へと突き刺さる。

顔を青くさせながらも、健気に報告を続ける。

このぐらいの事は、レンジャーギルドでは日常茶飯事である。

「あ、後、サルバドの糞野郎が……」

「それを早く言わねえか！！」

あの糞野郎、ぶっ殺してやる！！」

巨体を震わせ、リーダー格が小部屋へと勢いよく突入する。そこには作動後のギロチンが数枚ぶら下がっており、側面には大量の血飛沫の跡と、鋭利な刃が突き刺さっている。粉碎された木片も散らかつており、室内は乱雑としている。

「おいサルバド！！」

てめえ、よくも恩を仇で返しやがったな！！
その恥知らずな面ごと叩き切ってやる！！」

リーダー格は、人一倍サルバドに目を掛けていた。

その才能は、磨けば更に伸びると一目で分かったからだ。

それが外道に墜ち、ギルド除名、賞金首ににまで至る始末。

更には身内であったギルドメンバーまでその手に掛けたのだ。

最早生かしてはおけぬと、ギルドからは必ず殺せという厳命が下っていた。

勘が人一倍鋭く、中々網に掛からなかったが、ようやくこの時がやってきた。

ギリギリと握り締める斧に、力を籠める。

「サルバドツ、覚悟！！」

「その首もらった！」

「賞金は俺のもんだ！！」

腰から戦斧を取り出しながら、リーダー格は標的を探す。

部下達もそれぞれ得物を取り、戦闘態勢に入る。

基本的にレンジャーは奇襲を得意とするが、

リーダー格は正面からの肉弾戦を好む。

だが決して鈍くはない。

その姿に騙されると、即座に頭をかち割られるだろう。

「か、頭。落ち着いてくださいえ。」

サルバドの奴はもう死んでます」

「え？」

何を言っているのか分からないという表情のカンダタ。

手下は丁寧に説明を始めた。

これが初めてではないので、慣れたものである。

「え？ じゃありませんぜ。」

出発前に言ったじゃないですか。

既に討ち取った後だって。今はその検分作業中ですよ」

「そうだったかあ？」

「へい。確かに言いましたぜ」

「……それじゃあ早速やるとするか」

「へい、これですよ」

斧を投げられた部下が、腐敗が始まっている生首を指で示す。

その顔は恐怖に染まっており、中々無残な最期を遂げたようである。

「おいおい、なんだこりゃ。首だけじゃねえか。」

胴体はどこに出かけたんだ？

まさか散歩じゃないだろうな」

「ネズミに食われたんじゃないですかね。
ほら、ネズミの足跡が」

「まあ良いか。死んでるなら構わねえ。

しかし、俺が直々にぶつ殺してやるうと思ってたのによ。
取り合えず気晴らしの為に、こうしておくでしょう。

おらよッ!!」

巨大な戦斧を振りかぶると、生首目掛けて垂直に叩きつける。
サルバドであったものは、見る影もなく破裂し、欠片すら残ることはなかった。

「お見事です、頭っ!!」

「いよっ、色男!!」

「今日も見事な斧さばきでしたぜ!!」

「なあに、大した事はないぜ。俺に掛かればこんなもんよ」
部下が盛大に拍手をすると、リーダー格は上機嫌になる。
斧を投げつけられた部下が、念の為に確認する。

「頭、この罫は回収するんで?」

「勿論だ。持ち帰って研究することにしよう。
レンジャーたるもの、常に向上心を持たなければならん。
それに落ちているんだから、使わなければ勿体無いだろう。
再利用して経費節減だ」

「分かりました！ 全部回収しますぜ！」

「怪我しないように気をつけろよ。」

あの糞野郎の罠だ。何が仕込んであるか分かったモンじゃねえ。全く死んでからも忌々しい野郎だ」

破裂して飛び散った物体を、グリグリと踏みつける。

まだ怒りが収まっていないようである。

暫くすると、部下達がギロチントラップの回収作業を終える。

首も確認し、罠も回収できた。

検分作業としては十分過ぎるほどだ。

リーダー格は深く頷くと、満足気な笑みを浮かべる。

「よおし、そろそろ帰るとするか！」

今日は俺が奢ってやるぞ。

非常に気分が良いからな！」

斧を肩に担ぐと、威勢よく言い放つ。

「流石、頭は話分かる！」

「一生付いていきます！」

「レンジャーギルド万歳！」

それぞれが調子の良い言葉と共に、リーダー格を盛大に持ち上げる。世辞であることは分かっているが、こういう時に大事なものはノリである。

リーダー格は全く気にしない。

と、一つだけ気になる点があった事を思い出す。
大したことはないが、奥歯に挟まった感じがして気持ちが悪い。
リーダー格は確認することにした。

「……おい、そついやサルバドを討ち取ったのは誰だっけか？
確か戦士ギルドの奴だったよな」

「へ、へい。」

なんでも駆け出しの新人が初回の探索で討ち取ったとか。
連絡を入れてきた古参風の男が、ビビってましたぜ」

「ほー、そりゃ見所があるな。」

戻り次第、レンジャーギルドに引き抜くか。
戦士ギルドなんかには惜しい人材だ。
で、名前はなんて奴なんだ？」

戦士ギルドは玉石混合である。

殆どが石コロであるが、稀に逸材となる原石が転がっている。
それを引き抜くのも、サブマスターとしての重要な仕事である。
才能をそのまま放置しておくには勿体無いからだ。

原石は磨かなければ意味がない。ただの石として終わってしまう。

そもそも、『戦士ギルド』などと名乗ってはいるが、所詮は寄り合
い所帯。

大した訓練、教育もしない癖に、所属人数だけが多い。
その癖、人数が多い分、魔素抽出量も多くなり評価もその分高くな
る。

少数精鋭のレンジャーギルドにしてみれば、目の上のたんこぶだ。

少しは絞って、贅肉をそぎ落とすべきである。

リーダー格は己の腹を摘みながら、そんなことを考えていた。

「へい、『アレル』とかいう野郎だそうぞ」

その名を聞いた瞬間、リーダー格の表情が固まる。

「あ、あ、ああアレル？　おい、そいつの名前は本当に『アレル』なのか？

き、聞き間違いじゃないのか？　アベルとか」

リーダー格は狼狽し、脂汗を流し始める。

それを不審に思いながらも、部下は正確に報告する。

「いえ、確かに『アレル』ですぞ。

聞き間違える訳ありませんぞ。

頭、どうかしたんですかい？　顔が真っ青だ」

「い、いやなんでもねえ。それでそいつはどんな男なんだ？

さぞかしゴツイ野郎なんだろうな。

覆面にパンツ1丁みたいな格好に決まってる」

野郎という言葉を思い出し、リーダー格はなんとか平静を取り戻そうとする。

そして筋肉もりもりの髭男を無理やりに想像した。

「いや、頭。野郎と言うのは言葉のアヤでして、

なんでも10代半ばの小娘だつて話ですぜ。
可愛い顔してる癖に糞生意気とか何とか。
世も末つて奴ですかねえ」

その言葉に完全に硬直する大男。
最早リーダーの威厳は欠片もない。

「こ、こ、小娘。あ、アレルという名前。
そして、糞生意気な性格。
い、いやアイツがいる訳がねえ。
そんな事ありえねえ。だつてアイツは」

自分に何回も言い聞かせ、大きく深呼吸をする。
小部屋の中は、血と腐臭で凄まじいのだが、
大男にそれを気にする余裕は全くない。

「ああ、そういえば。
なんでも自分の事をこう名乗つてたらしいですぜ。
『勇者アレル』とかなんとか。
全く、とんでもねえ話ですぜ。
……つて頭、聞いてますかい？ 頭！」

大男は、勇者という単語を聞いた瞬間、
意識を失いかけ、後ろへと大きくよろめく。

部下達が慌ててそれを受け止め、何度も声を掛ける。

「頭っ！ 頭っ！」

「おい、今すぐ撤収だ！」

「頭が大変だ！」

「兄貴、カンダタの兄貴！　しっかりしてくだせえ！！」

レンジャーギルドサブマスター、『大斧のカンダタ』。

意識を失う前に、走馬灯の様によぎった過去の光景。

ロマリア王から金の冠を見事盗み出し、

シャンパーニの塔でその悪名を轟かせていたカンダタ。

駆け出しの小娘とその仲間達に、激闘の末打ち破られた。

だがその時はまだ、盗賊としての心は折れていなかった。

カンダタは再戦を誓い、野に下る。

懲りずにバハラタで、こつそり悪事を行っていたカンダタ。

それをわざわざ『暇潰し』に壊滅させに来た悪魔のような小娘。

かつての軟弱な面影はなく、情け容赦なく打ち倒された。

洪水のような涙と、鼻水を流しながら土下座して、

なんとか命だけは助けてもらった。

当然今まで奪った金品、装備は全て没収された。

アレフガルドに落ち、改心したはずのカンダタ。

以前の詫びとして、小娘に『たいようのいし』の在り処を教えてやったのだ。

すると牢屋越しに『言葉遣いが気持ち悪い』と、

強烈な拳を見舞っていった鬼のような小娘。
その時の衝撃で、再び己を見失うことになったのだ。

「ゆ、勇者がくる。た、助けてくれえ」

「か、頭あッ!!」

カンダタの意識が戻ったのは、ギルドに戻り、ギルドマスター愛用の『鞭』で、顔をこっぴどく打ちつけられてからであった。カンダタの顔は、赤く腫れ上がったが、どこか嬉しそうな表情を浮かべていた。

・番外 改心したカンダタと勇者のやりとり

「やや、あなた様は!? 私です、カンダタです」

カンダタは、牢屋ごしに大声でとある人物を呼び止める。その人物は、かつて自分を懲らしめてくれた勇者である。改心したカンダタにとっては恩人のような存在である。

「……アンタ誰だっけ？」

「ほら、王冠を盗んだり、バハラタで悪事を働いていた私ですよ。あのカンダタです」

「あー、いたっけそんな奴も。確か覆面パンツの変態親父」

その言葉に、カンダタは顔を引きつらせる。が、すぐに気を取り直すと、ニコニコと笑みを作る。それを見た勇者は顔を顰め、不快な顔をした。

「昔のお礼に良い事を教えましょう。

ラダトームのお城には『たいようのいし』ってやつがあるらしいですよ」

「ふーん。わざわざ教えてくれて、どうもありがとう。それじゃあね」

踵を返そうとする勇者。

カンダタは慌てて呼び止める。

「あ、あの。良かったらここから出して欲しいのですが。私も、すっかり真人間に戻ったことですし。

情報と引き換えといっつては何ですが、

そ、そろそろ出してもらっても良いかななんて、ハハハ」

牢屋の中から懇願するカンダタ。

その声に戻ると、勇者は人の良さそうな笑みを浮かべた。

「……ちよつとこっちに來なさい」

「は、はい！」

手招きする勇者。カンダタは犬のように牢の入り口の方へと近寄っていく。

そこに、勇者の強烈なカウンターが炸裂した。

「あががッ！！」

顔を抑えながら、床を転がりまわるカンダタ。

「作り笑顔とその言葉遣いが気持ち悪い。

性根が変わるまで、そのまま数十年間入れてもらってなさい。

じゃ、そういうことで」

邪悪な笑みを浮かべると、勇者はスタスタと歩き去っていった。後に残されたのは、顎を押さえて、未だに転げまわっているカンダタの姿であった。

第八話 勇者の帰還と変貌 (後書き)

次回更新は仕事が忙しい為、少々遅れます。
申し訳ありません。

誤字脱字は確認次第修正しています。

その際、加筆を行うこともあります。
進行に影響を与えることはないです。

第九話 勇者の訓練

かつて勇者を何度も死へと追いやり、遂にはその心をへし折った場所。

そこに光が射し込むことはなく、常に魔物の息遣いが聞こえてくる魔の巣窟

その地獄の釜の最深部では、今日も殺戮が繰り広げられていた。岩と土で構成されている通路には、血糊が至るところに撒き散らされている。

腐食した四肢や黒焦げの肉片、大小様々な骨の残骸が乱雑に積み上げられており、そこから発せられる異臭は凄まじい。

常人であれば一時間とて、正常な精神を保つことは出来ないだろう。

獰猛な人食い巨人、トルルがその臭いに誘われて現れる。

まるで誘っているかのような濃厚な血の臭い。

手には荒削りの棍棒を握り締め、哀れな獲物を叩き潰さんと力を溜める。

自慢の怪力は、あらゆる敵を無残な肉塊に変えてきた。顔を歪めると、舌なめずりをする。

巨体を豪快に揺らしながら、トルルはその臭いが最も濃い大部屋へと辿りつく。

その部屋は四方に通路が伸びており、中央には『焚き火』が設置さ

れている。

そこでは『餌』が炙られており、血と肉を焦がす臭いが辺りを覆っている。

この臭いが隙間風に乗り、洞窟全体へと流れているのだろう。

そう、臭いに誘われたのはトルルだけではないのだ。

向かい側からも、魔物の群れが虎視眈々と獲物の様子を伺っている獲物の取り合いとなるのは間違いない。

トルルはすぐに突撃体勢を取る。この獲物は自分のものだから。焚き火の前で、悠然と座っている少女。

鎧には物騒な刃がついているが、その身体付きは貧弱そのもの。トルルが軽く撫でれば、細首がへし折れてしまいそうである。

『グヒヒ』

歳若い女の肉。それを想像すると、トルルの口から涎が溢れ始める。柔らかかそうな首筋。小奇麗な顔。あまりにも細いその腕や脚。

今すぐにでも頭から齧りつきたい。苦痛の声を聞きながら、ゆっくりとその内臓を喰りたい。

生かしたまま、この少女の目玉をくり貫いたら一体どのような叫び声を上げるのか。

人間の悲鳴は、人食いトルルにとって最高の調味料なのだから。

『ゲヒヒヒヒヒヒ！！！！』

いよいよ我慢の限界に達したトルルが、いきり立って無防備な少女へと襲い掛かる。

一拍遅れて、魔物の群れが部屋を埋め尽くさんばかりに入り込んで

くる。

それを受けても、少女は身動きひとつしない。

身がすくんで動けないと見たトロールは、棍棒で叩き潰すのを止める。まず四肢をへし折り、少女を生け捕りにすることに決めた。

甚振りながら食い殺す。今回の食事は生かしたままの踊り食いだ。

雪崩込んでくる魔物の群れを威嚇しながら、トロールはその腕を少女へと伸ばす。

巨大な腕が、少女の身体へとよいよ届く。

その瞬間。

座り込んだまま、少女が一言だけ呟いた。

「ギガデイン」

トロールの視界に、白い稲光が走る。

荒れ狂う稲妻が、魔物の群れをなぎ倒す。

そしてそれは、トロールの身体を瞬く間に包み込んだ。

轟く雷鳴がようやく収まった頃、アレルは肩をほぐしながら立ち上がる。

周りは魔物の死骸で溢れかえっており、濃厚な血の臭いで満ちている。

自らの臭いで、わざわざおびき寄せられるのだから手間がかからない。

だが、一つだけ問題がある。

臭いのだ。アレルは眉を思い切り顰める。

マントで鼻を覆っても、まるで効果がない。

そろそろ嗅覚が麻痺しても良い頃なのだが、中々上手くいかない。

いよいよ我慢できなくなったアレルは、悪臭を強引に掻き消すことにした。

「魔物の死骸は本当に臭いわねえ。鼻が曲がりそう。

これは一旦掃除しないと駄目ね。

「ベギラマ！！」

おもむろに手をかざすと、死骸を火炎で焼き払っていく。

死体を焦がす臭いが、部屋を満たしていく。

こちらも負けず劣らず凄まじい臭いだが、先程よりは幾分マシである。

パチパチと弾ける音の中に、ほんの微かだが異音が混じる。

何かが地面を這いずるような小さな物音。

「……………そこかッ！！ 死ねっ！！」

気配を察知すると同時に、

アレルは『稲妻の剣』を、全力で投げつける。

行く手を遮る『トロルの肉塊』を爆散させながら、剣は一直線に標的へと向かっていく。

投擲された剣は、全力で逃走を図るそれに『会心の一撃』を与える。

『ピ、ピキーツ！！』

「大当たりかしらね」

銀色の液体状の身体に、稲妻の剣が突き刺さった。

『はぐれメタル』はけたたましく断末魔の声を上げる。

液化化している為、衝撃は伝わりにくく、その身体には呪文も効かない。

警戒心が非常に強く、その逃げ足はとてつもなく早い。

だが、核となる部分は脆く、それを貫かれるとたちまちに絶命してしまう。

とはいえ一撃で屠るには熟練の腕が必要であり、

核を瞬時に見切る洞察力も求められる。

『はぐれメタル』は、腕を磨くための格好の獲物なのだ。

やがて甲高い悲鳴が途絶えると、はぐれメタルの活動は完全に停止する。

銀色の身体は徐々に黒ずんでいき、最後にはボロボロになって完全に崩れ落ちた。

「……これで何匹目だったかしら。

もう数えるのも億劫なくらい殺したものだ。

そろそろ銀色狩りも卒業かしらね。

自分の『レベル』も限界近くまで上がったような気がするし。

これ以上は時間の無駄ってやつかも」

アレルは、食料の補給や睡眠時を除き、全ての時間をここ『ネクロ

ゴンド』で過ごしている。
休む、鍛錬、休む、鍛錬の繰り返しだ。

『魔物の餌』でおびき寄せ、最近覚えた呪文で一網打尽。
そして本命がこの銀色生命体であった。

こいつが一番己の『格』を上げてくれるような気がしたのだ。
それはきつと間違いではないはずだ。所謂勇者の勘という奴だが。

その銀色のおかげかは知らないが、この場所でアレルの障害となる
魔物は最早存在しない。

「さてと」

投擲した稲妻の剣を回収する為に、アレルははぐれメタルの死骸へ
と近寄る。

と、背後から殺気を感じたので、身を翻してそれを回避する。
その際、稲妻の剣を引き抜き鞘へと戻している。

突き出されたフォークが、虚しく空を切る。

以前のアレルであれば、回避することは出来なかったであろう。

『キ、キキツ!?!』

「ミス、勇者にダメージを与えられないってやつね。
だって見え見えなんだもの。当たる訳ないじゃない。
毎度毎度ワンパターンなのよ」

『キ、キキツ！ メ、メラ 』

慌てて呪文を唱えようとするミニデーモン。
だがアレルはそれを見逃さない。

即座に口に手を突っ込んで阻止をする。

ミニデーモンは噛み切るうとするが、籠手に阻まれて上手くいかない。

「 慌てない慌てない。」

そんなにガツカリしないで良いのよ。

私が今慰めてあげるから」

口元を歪めてミニデーモンの身体を掴むと、
力強く抱擁する。

『グ、グゲゲゲエ！！』

「泣き叫ぶほど嬉しい？

それじゃ、もっと強くしてあげるわ。

特別サービスよ？」

『……………グゲツ』

鎧の反り返った刃が、ミニデーモンの身体を無残に貫く。

己の腹に突き立った三本の刃を驚愕の表情で見下ろし、小悪魔は苦悶の叫びを上げる。

アレルは更に力を入れると、刃を利用して小悪魔の身体を引き裂いた。

そして無造作に投げ飛ばす。

真つ二つになったそれは、青い血を撒き散らしながら他の死骸に重なった。

アレルはついではばかりにフォークを投げ飛ばすと、まるで墓標のように突き刺さる。

手の埃を乱暴に払いつつ、独り言を呟く。

「さーて、いよいよ行くとするか。

魔王を討ち取らないと、気分良く寝れないものね。

屑が偉そうにしているの想像すると、なんかムカつくし」

蹴りで焚き火を消し飛ばすと、アレルは荷物袋を手に取る。

そこから薬草を取り出すと、口に放り投げそのまま咀嚼する。

傷ついてはいないが、この苦味が癖になるのだ。

顔を顰めながら、その味を堪能する。

「うん、実に苦い。まんげつ草も悪くないけど、やっぱりコレよね。何しろ安いし、どこでも手に入るもの」

ペツと茎の部分を吐き出すと、口元を袖で拭う。

そして部屋を見渡すと、少しだけ目を閉じる。

今までの事、そしてこれからの事。

魔王を倒した後、一体自分には何が残るのだろう。

そして、何が変わるのだろうか。

一つだけ分かるのは、

『魔王を倒した後、勇者は必要がなくなる』ということだけだ。

「……ま、いつか。

きつとなるようになるわよね。
明日は明日の風が吹くもの」

努めて明るく独り言を呟いた後、アレルは呪文を唱えた。

『リレミトー』

「今日はこれくらいにしておく？
地下10階まで来たし、そろそろ時間も時間でしょう」

私は隣を歩くマタリに声を掛ける。
盾を構えての警戒歩行。
前回の失敗を反省し、常に気を張っているらしい。
だが、見てるこちらが疲れてしまう。

「え、ええ。そうですね。
今日はこれぐらいで良いかもしれません」

剣を収め、懐中時計で時間を確認している。

私の体内時計によると、残り時間は後三十分程度である。具体的にはお腹の減り具合から割り出されている。

「じゃ、ちよつと休憩しましょう。小腹も空いたしね」

通路脇の、適当な段差に私は腰掛ける。

「ふう。少し疲れましたね」

それを見て、マタリも一息ついて、そのまま座り込む。やはり疲れが溜まっているらしい。

1Fから気を張っているのだから当たり前である。

私は腰の小袋から、小さく刻んであるパンを取り出し口に放り投げる。

味気ないが、噛み応えがあり食べた気になれるのだ。

「食べる？」

「いえ、私は結構です。今は何も食べたくなくて」

「そう、じゃあ良いわ」

なんだか落ち込んでいるマタリを尻目に、私はムシヤムシヤと咀嚼を続ける。

余りに味気ないので、非常食の干し肉も口に放り投げる。

塩味が口の中に広がり、私は小さな幸せに包まれる。

やっぱり人間、食べてるときと寝てるときが一番幸せよね。

じゃあ何でこんな糞みたいな場所にいるんだって話だけど。楽をするにも元手が必要だし、私は戦うことしか出来ない。

今更『普通の娘』として生きるのは無理だ。手遅れであるし、そのつもりもない。

「あ、あのアレルさん」

「ん、なに？」

「そ、その……」

言い淀むマタリ。私は首を傾げる。

まあ言いたいことは大体分かる。

が、本人の口から出てくるまで私から話すことは何もない。

前回の件は、本人が一番痛い目にあつたので、軽い説教で済ませてやった。あまり覚えていないらしいので。

悩むマタリを眺めていると、先の通路から何やら獣がトコトコと近づいてくる。

ネズミを一回り大きくしたようなサイズ。

ネズミの天敵、いわゆる『猫』である。

ニャーとなぎ、人間を小馬鹿にするあいつらだ。

たまに悪魔が化けているので、油断してはいけない。

砂漠の王国では酷い目にあつた。実に懐かしい。

『ニャー』

「あ、猫ですよアレルさん。ちょっと大きいですけど、可愛いですね」

悩む姿から一転、マタリは能天気な声を出している。現金な奴だと少し呆れながらも、私は猫を観察する。人懐っこい顔を浮かべながら、顔を手で擦っている。そして私の干し肉を眺めると、ニヤーと甘えるような鳴き声を上げた。

「猫、ねえ。もしかして、この肉が欲しいのかしら。ねえ、欲しいの？」

手で干し肉をブラブラとぶら下げる。猫は目を細めてニヤーと再び鳴いた。

「アレルさん、それあげちゃ駄目ですか？私、猫好きなんですよね」

窺うような表情のマタリ。犬より猫派らしいが、そんなことはどうでも良い。ちなみに私も猫派である。以前は犬が好きだったが、その飄々とした性格が良い。

それはともかく、私はマタリに冷たく告げる。

「駄目に決まってるじゃないの。というか、今すぐ殺しなさい」

「え、ええ！？ど、どうしてですか」

「こんな迷宮に普通の猫がいるわけないでしょう。良く考えなさい。油断したら最後、頭から齧られるわよ」

「た、確かにそうですね。うーん」

マタリが信じられないというような表情で猫を見ている。私はダガーナイフを抜き、猫に切先を向ける。

「いつまで『猫』を被っていられるかしら？」

『……グルル』

「あ、アレルさん。猫が脅えていますよ」

「良く観察して。こちらの際を伺っているのが分かるはずよ。意識を集中して、コイツの殺気を感じ取りなさい」

「は、はい！」

マタリは言われたとおりに、目を凝らして観察を始める。

何かを感じ取ったらしく、静かに剣と盾を手を取った。

これで気付かないようなら、即座にお払い箱だ。

餌を連れて行くほど、私もお人良しではない。

「……その猫被りは中々だけど。アンタから血の臭いがするのよ。ほらっ、さっさと正体現しなさい！」

ダガーナイフを投擲する仕草を取ると、

『猫』は後方に一回転して、本性を現す。

『グルルルルル!!』

歯を剥き出しにして、鋭い鉤爪を構える化猫。

上層部に出現するとかいう『ヘルキヤット』だろうか。
確か銀貨1枚だったはずだ。

「マタリ、私が援護するから討ち取りなさい。
逃がすと邪魔臭いから、必ず仕留めるのよ。

準備は良い？」

「は、はい！ いつでもいけます！」

盾を正面に構え、剣を後ろに引いている。

これがこの娘のスタイルなのだろう。

ネズミ戦でも盾を駆使した戦い方が目立っていた。

まだまだ荒削りだが、これから伸びるだろう。

女にしては体格に恵まれ、実に戦士に向いている。

隣同士で並ぶと、私が見上げる形になるのだから間違いない。

その癖、私の方が偉そうにしているのは、傍から見てどう映るのだろうか。

化け猫がマタリに飛び掛ろうとするのを、視線で牽制する。

殺気を籠めたそれは、化け猫の身体を竦ませた。

「ギラ!!」

『ギニヤア!!』

化け猫の顔目掛けて、火炎呪文を放つ。

火が猫の顔を覆い尽くす。

熱による痛みを堪えきれずに、顔を抑えてもがき始める。その隙を逃さず、マタリが突撃を開始した。

「ハアアアアッ!!」

盾で相手の頭を痛打し、化け猫の体勢を崩す。

そこに振り下ろしの剣が突き刺さる。

化け猫が暴れながら爪を走らせ、マタリの腕を引き裂く。

『ギニャアアアアアアアッ!!』

「クッ! このッ!!」

鎧によりダメージは軽減されたが、血が滲み出る。

それぐらいで剣を手放すようではお話にならないが、当然そんなことは有り得ない。

脳髓を抉るように、マタリは剣を小刻みに動かし続ける。

血飛沫が迸り、マタリの鎧を赤く染め上げていく。

私は華麗に回避する。

新品の服なので、一応少しだけ気にしておいた。

化け猫は喧しく絶叫を上げると、やがて身動きしなくなった。どうやら終わったらしい。

連携というには程遠いが、それなりに上手くいったようだ。

「ハア、ハア！」

「良い攻撃だったわ。特に、刺した後のグリグリ。あれは効くのよねえ。やられると痛いじゃすまないけど」

軽く笑い飛ばしながら、私はマタリへと歩み寄る。

そして腕を取ると、治癒を開始する。

「アレルさん？」

「ベホイミ」

癒しの光が、マタリの右腕を包み込み、傷をたちまちに回復させる。そこまでの重傷ではないようなので、これで何も問題はない。

「き、傷が塞がっていく」

「跡は残らないわよ。心配しなくても大丈夫」

「……………」

「どうかしたの？ 押し黙っちゃってるけど。」

ああ、料金は取らないわよ」

下からマタリの顔を覗き込む。

先程の悩んでいる時の顔がそこには浮かんでいた。

「あ、あの。さっきも言おうとしてたんですけど」

「……………うん？」

「アレルさんはどうして私と組んでくれるんですか？
魔法を使いこなし、治癒まで扱えるのに」

「……………」

「だ、だから、その。」

もしかして、私はお荷物なんじゃないかなあ、なんて

アハハと自嘲気味に笑うマタリ。

だがその言葉は、彼女の本音なのだろう。

前もこんなことを言われたような気がする。

今回は、『化け物』呼ばわりしないだけ、マシなのだろうか。

あの時は一体なんと言われたんだっけ。

良く思い出せない。

「……………どうしてアンタと組んだのか。

うーん、なんでだったっけ。私にも良く分からないわ。

成り行きってヤツかしらね」

「そ、その、もし迷惑なら言ってくださいね！

私の事は気にしないで大丈夫ですから。

今までも一人でしたし、慣れていきます」

悲しげな笑みを浮かべる。

恐らく、彼女の出身が影響しているのだろう。

確か没落した貴族だったはず。

ここに来るまでに、色々あったんだろう事が窺える。

良くある話ではあるが。

『勇者』の私が言うのだから間違いない。

それはともかくとして。

「……一人より、二人の方が良い時もあるのよ。
敵の攻撃が分散するし、お互いの隙をかばい合うことが出来る。
それに自分が足手まといだと思えば、鍛錬すれば良いだけよ」

「……でも」

「『でも』じゃない。

魔法が使えないなら、剣術をひたすら磨けば良いのよ。
アンタは筋が良いから、経験を積みばきっと強くなれる。
私が保証するから間違いないわ」

どうして私はコイツを庇うような事を言っているのだろう。
こんな世間知らず、どうだって良いじゃないか。
一人で突き進んで、勝手に野垂れ死ねば良いのだ。
その隣に、もう私はいないのだから。
知ったことではない。

「……………」

「……それに、万が一、私が痺れて動けなくなっても、
アンタがいれば助けしてくれるでしょう？」

あの時、誰かがいれば私は変わらなかつただろうか。
それともやはり、こうなってしまうただろうか。

私は無意識に、喉元へと手をやる。
なぜか分からないが、焼けるように熱い。
剣は喉に突き刺さっていないのに。
抑えていた掌を眺めてみたが、やはり血痕はついていなかった。
私の世界が歪む。

「ア、アレルさん？」

「……それでも嫌なら、アンタの好きにきなさい。
元々正式なパーティじゃなかったんだし。
去る者は追わないわ。それが私のポリシーだからね。
慣れてるから大丈夫よ」

マタリから視線を外し、ダガーナイフを力任せに振るう。
化け猫の尻尾を斬り飛ばすと、乱暴に皮袋へと突っ込む。

マタリが慌ててこちらへ近づいてくると、凄腕で頭を下げてる。

「弱音を吐いたりして、ごめんなさい！
しばらくはお荷物かもしれませんが、きっとすぐに追いつきます！
絶対に強くなつて見せます！！」

「そ、そう良かったわね」

「はい！ なんだか吹っ切れました。
私は剣の道を究めることに決めました！」

「そ、そうなんだ」

「はい、ずっと悩んでたんです。本当にこのままで良いのかって。」

アレルさん、本当にありがとうございます！」

そう言うと、がっしりと私の手を握り締めてくる。

先程までの落ち込みが嘘かのように勢いづいている。

正直暑苦しい。握り締められた手が悲鳴を上げている。なんとという馬鹿力だ。

「ちょ、ちょっと。いきなり何よ。」

ほら、離れなさい！！ 暑苦しいわ！！」

強引に手を振り払うと、今度は頭を掴まれる。

凹んでいたかと思ったら、やたらとアグレッシブに。

本当に掴めない娘である。

私の頭はきっちり掴まれているが。

「ちょっとだけ、顔に血が着いています。」

今綺麗にしますから、動かないで下さい。

すぐに終わりますからね」

マタリが布でゴシゴシと私の顔を拭き始める。

顔が面白い形にグニグニと形を変えられていく。

もう少し加減とやらが出来ないものであるうか。

というか、一体何を考えてるんだこの娘は。

私は子供ではないのだから。

「はい、これで大丈夫です。
いつものアレルさんに戻りました」

「あ、アンタね。やり方つてものがあるでしょう!!
顔を拭くぐらい自分で出来るわ!」

「じ、ごめんなさい」

頭を掻いているマタリ。

「本当は悪いと思ってないでしょう。
顔にそう書いてあるわ」

「そんなことはありません!
毎日欠かさず、顔と歯は洗っていますから!」

両手を前に出し、とんでもないと身体でアピールしている。
私の精神力が少し消耗した。
やはり解散しておくべきだったかもしれない。
頭痛の種を手に入れてしまった気がしてならないのだ。

どうせならラックの種が欲しい。
それならば『幸せ』が手に入りそうだから。

「はあ、なんだか疲れたわ。
今日はパーッと騒いでぐったりベッドで休むわよ!
当然、アンタの奢り」

「そ、そんな。割り勘にしましょう。私達は仲間なんですから！」

意外とセコい。私も結構セコいけれど。何しろ、旅には金が掛かるものだから。貧乏性なのは職業病か。

「やかましい。一人で大騒ぎした迷惑料よ。私は小食だから、安心して良いわよ」

「……嘘ばかり」

「何か言った？」

「いえ、何も言ってません！」

「……おい、寝るなら部屋に行ってくれ。他の客に迷惑だ。一応稼ぎ時の時間なんでな」
マスターが、小声で注意してくる。

「……私に言わないでよ」

心外である。寝ているのはこの馬鹿女なのに。

ルイーダの酒場に着くや否や、散々飲み食いした挙句、いきなり爆睡する始末。

私がいくら揺り動かしても、全く起きる気配がない。

「お前の仲間だろうが。最後まで面倒を見る。

しっかりと飲み食いした代金を、きちんと払ってからな」

おかしい。確か私が奢られるはずだったのだが。

どこかでボタンを掛け違えたらしい。

仕方がないので、私はこうすることにした。

「マスター、もう一杯」

「酒はもう駄目だ。お前、自分も寝てしまえば何とかかなると思ってるだろう。」

俺の目は誤魔化されないぞ。今すぐ金を払って部屋に帰れ。その嬢ちゃんを連れてな」

警戒する目つきで、こちらを睨みつけてくる。

まんまと料金を踏み倒されたトラウマでもあるのだろうか。

私の事まで疑うとは、実にとんでもない話である。

「はいはい、分かったわよ。今日はもう帰るわ。

はい、代金よ」

文句をブーたれたい気持ちで一杯だったが、私は我慢した。大人な私は、自分を抑えることが出来るのだ。

金をテーブルに勢い良く叩きつけると、馬鹿女の腕を取り、私の首に回す。

背負うのは流石に恥ずかしいので、このまま運んでいくとしよう。

「女なら、もう少し丁寧にしたらどうだ。

……一っだけ警告しておいてやるか。

賞金首の数名が、お前に興味を持ち始めたって話だ。精々気をつけるんだな」

「へえ。一体どんな奴等なの？

また面白い見世物が見れるかもね」

挑戦的な笑みを浮かべてみる。

ギロチンシヨールは中々だった。

作った奴の性格が滲み出ていたし。

「賞金首なんてのは、どいつもこいつもイカれてる奴等さ。

そんなヤツが、普通に街で暮らしてるんだからおつかねえ」

やれやれと首を振るマスター。

こついつた商売柄、色々なヤツを見てきたのだろう。

「ふーん。まあどうでも良いわ。

見つけ次第ぶっ殺すことにするから」

「……しかし、お前みたいな小さいのがサルバドを討ち取るなんてな。

未だに信じられないぜ。何かの間違いじゃないのか？」

「間違いなんかじゃないわよ。それに、私は小さくないし」

私の背丈は標準である。

隣でグースカ寝ているマタリが、デカいだけだ。歳は18歳で、私よりも年上。信じられない。ちなみに私は16歳である。

「……胸は小さいみたいだな」

不躰に私の身体を眺める糞親父。とある場所で視線が止まると、軽く溜息を吐いた。

「ああ`?」

殺気を籠めてマスターを睨みつけると、脂汗をダラダラと流し始める。

ダンディな顔が台無しである。

「い、いやなんでもない。俺は何も言っていないぞ。きつと空耳だろうな」

「そう? 本当に聞き違いかしらねえ。

……これは貸しにしておくから。今度サービスしなさいよ」

ジト目でマスターを睨みつける。

両手を上げて降参のポーズを取っている。

「分かった分かった。」

……とにかく、油断しないことだ。

イカれた奴等に狙われるなんて、洒落にならないからな」

それに手を上げて了解すると、私は階段を上り始める。

さあ、この馬鹿を放り投げて、とっとと暖かい布団で横になることにしよう。

きつと今日は気分良く寝れるはずだから。

・ヘルキャット

ネズミと人間が好物。人間の子供程度の大きさ。

猫を被って近寄り、油断したところを食い殺す。

爪は鋭く、鉄を簡単に引き裂く。

群れは作らず、単体で行動する事を好む。

繁殖期は更に凶暴化するので注意が必要。

『ニヤー』

第十話 勇者と死体と生き人形

大通りから外れた、裏通り。

この寂れた通りを抜けた先には、荒廃した地区が存在する。迷宮に結界が構築される前、この地域が魔物の襲撃を受け、数多くの犠牲者を出した。

他の地区の発展に取り残され、未だにその傷跡は癒されてはいない。荒れ果てたこの場所には、多くの『貧民層』が居を構えている。ボロ家や、廃墟が数多く存在し、住民が何人存在しているのかも定かではない。

道端には白骨化した遺体が放置され、野良犬が死肉を漁るのも珍しい光景ではない。

治安も非常に悪く、訳ありの人間が身を隠すには最適とも言える場所だ。

教団の『治安維持隊』が稀に見回りに来るが、効果はあまりない。適当に見回った後、浮浪者に『慈悲』の食料を与えると、大いに満足して帰っていくのだ。

街の支配者である教団も、このスラム化した地域には本腰を上げようとは思っていない。

むしろ、公に出来ない人間を潜ませるのに利用している。

『光ある限り闇もまたある』

これが教団の教えの一つだからである。

そのスラム街の一角にある、寂れた店。

窓は埃でくすんでおり、店内は明かりが灯らず、蜘蛛の巣が至る所に巣を構えていた。

用途の分からない道具、魔道具が乱雑に置かれているが、その全てに埃が積もっている。

まともな客は訪れることはないが、人の出入りはそこそこにある。訳アリの人間には、需要があるのだ。

勿論、ガラクタ紛いの商品を買って求めに来るのではない。

そこに、顔をターバンのような覆面で覆い隠した男が来店する。

手には大きな袋を持ち、それをカウンターへと置くと、小さくベルを鳴らした。

店内に漂う、様々な『香』の臭い。男は眉を顰めるが、いつものことなので我慢した。

「……いらつしやい」

奥の暗闇から、初老の男が姿を現す。

深緑のフード、ローブを着用し、その顔色までは窺うことはできない。

「こいつの抽出を頼む。
かなりの量だが」

「……分かりました。
暫くお待ちください」

店主は袋を抱えると、再び奥へと戻っていく。

基本的に余計な会話はしない。

お互いの素性には興味がないからだ。

ギルドを何らかの理由で除名された者は、魔物の部位から魔素を『抽出』する手立てがない。

賞金首や、訳アリの人間として生活するには金が必要だ。

冒険者を狩り続けるにも、魔物は普通に襲い掛かってくる。

賞金首だろつが、冒険者だろつが同じ人間だからだ。

下手をすれば、冒険者を仕留めた後魔物に食い殺されるという、

間抜けな事態が待っている。

その為、あまり美味しくないとはいえ無視する訳にもいかないのだ。

溜まる一方の部位、しかし抽出する手段はない。

そこで、闇医者ならぬ、闇鑑定士が存在するのである。

闇鑑定士の人数はそれなりにおり、このスラム地区にその殆どが身を隠している。

教団から許可を貰っていないため、当然見つかったら『死』を与えられる。

だが、このスラム地区だけは、見て見ぬフリをされている。

結局のところ、抽出された『魔素』は別ルートを経由し、教団に納められるからだ。

利益があがるならば、その手段はどうでも良い。

教団上層部の考え方は現実的である。

中には、魔素を溜め込む者もいるが、その割合は多くない。

「こちらになります。

中々の量でしたよ」

「ああ、ちよいと張り切り過ぎた」

店主が小さな袋を持って、姿を見せる。

それを受け取り、男はいつも通りに中身を確認する。

黒光りする結晶が詰め込まれており、怪しい輝きを放っている。それに満足すると、袋をベルトに結びつける。

これが一体何に使われているかは分からない。

特殊な魔道具の材料になっているというのが通説である。

魔素を魔道具に合成すると、その効果を何倍にもすると。

その量が多ければ多いほど、『星遺物』クラスの威力を発揮する。それを独占するために、アートの街を教団が支配したというのが、世間の認識である。

魔素の独占を防ぐため、各国が圧力を加え『協会』を設立したというのも理に適っている。

実際のところは全く分からない。怪しげな噂が広まるばかりだ。

勇気ある何人かが、教団に忍び込んだが、そのまま行方不明となったという話もある。

「お代はいつも通り、抽出した魔素から頂きました」

「分かっている。また頼むぜ」

代金は、抽出した魔素で支払う。

『何個抜いたか?』などと確認することはない。

鑑定士が抽出してくれなければ、魔物の部位はただのゴミでしかない。

とはいえ鑑定士とて、吹っ掛けすぎると危険である。

客となるのは、イカれた連中や、人を殺すことを何とも思っていない奴ばかりだからだ。

客の機嫌を損ねれば、即座に殺し合いに発展することもある。

ちなみに、この店主もその中の一人である。

「……ところで、何か、面白い話はありませんか？
ここにいと、中々耳に入ってこないもので。
世間の情報にとんと疎くなつてしまします」

用件は済んだと、出て行こうとする覆面の男を小声で呼び止める。
無視しても良かったのだが、良い印象を与えておくに越したことは
ない。

面倒くさそうに、男は答える。

「特に変わった出来事はないな。
相変わらずの腐った世の中だ。

……そういえば、罷師サルバドが殺られたらしいが」

「……ほう、それはそれは」

興味を示す店主。男は話を続ける。

「ただの小娘が殺つたつてんで、酒場はその話題で盛り上がったた
な。

俺はそいつを見てないから、詳しくは知らんが」

「小娘、ですか」

「確かアレルとか言つたかな。
アートの末娘と行動しているつて話だな。
まだ『仮許可証』の駆け出しらしいぜ」

「ふむ。なるほどなるほど。」

ということは、迷宮上層にいるわけですね。
それは素晴らしいお話です」

その情報を、刻み込むように何回も頷き始める店主。

「やたら食い付くじゃないか。
アンタにしちゃ珍しい」

普段、世間話などした記憶がないので、覆面の男は疑問に感じた。
気の小さそうな声色しか、聞いたことがなかったのだ。

「いえいえ、そんな前途洋々たる少女が、
どんな顔をしているのか。非常に興味があります。
才能に満ち溢れ、未来を語る。

その目の輝きはさぞかし美しいでしょうねえ」

先程までが嘘のように、饒舌に話し始める店主。

「……俺はどうでも良いがね。
まあ大層な賞金を持っていることは確かだから、
それには興味はあるな」

覆面の男は顎に手を当てて考える。

小娘が、美味しそうな大金をぶら下げて歩いているのだ。
果たして我慢できるかどうか。

その場になってみなければ分からない。

「金？ 金なんかどうでも良いのです！

私が気になるのは、その娘の眼ですよ眼！！

どんな眼をしているのか！ それだけが大事なのですから。

フフ、ぜひともお会いしたいものです。
ああ、気になって気になって、居ても立ってもいられない！」

そう叫ぶと、忙しく身体を動かし始める。

男は気味悪く思い、さっさと引き上げることにした。

狂人の戯言に付き合っている時間はない。

長居するには、この臭いがキツすぎることもある。

我慢するのもそろそろ限界が来ていた。

「……じゃあな。俺は帰らせてもらうよ。

こいつを換金しなくちゃいけないんでね。

また、頼むぜ」

「非常に有意義な情報をありがとうございました。

次は、サービスさせてもらいますよ」

「そいつは楽しみだ」

覆面の男が退出すると、店主は奥の部屋へと戻る。

そこは『香』の入り混じった臭いが充満し、

普通の人間なら、咽てしまうだろう。

部屋の中央には、魔方陣が描かれている。

その上に店主にとって、特別な『人形』が丁寧に置かれている。

様々な器具や、魔道具がその隣の台に積み上げられており、

『人形』の製作に使われている。

部屋の隅には、人形制作時に使われた『材料』が無造作に置かれており、

鉄が錆びたような異臭を放っている。

多数置かれている『香』はそれを隠すためのものだ。

店主はあまり気にしてはいないが、客があまり良い顔をしないのだ。

その奥には、まだ手のつけられていない『材料』が虚ろな瞳で立っている。

これはまだ『人形』ではない。ただの素材だ。

これから幾つかの工程を経て、立派な人形へと進化するのだから。その数は数十体に及び、部屋の一角に整列されている。

「フッフ、もうすぐ完成です。」

私の可愛い娘。ただ一人の最愛の娘。

ああ、早くその声を聞きたいものです」

店主は製作途中の、特別な『人形』を強く抱きかかえる。

数分の間抱き続け、漸く満足した店主は再び魔方阵の上に寝かせる。

手を中央に組ませ、愛おしそうに髪を撫でる。

「後は、『眼』です。中々相応しい物が見つからない。

我が娘に最も似合う、素晴らしい逸品でなければいけません。

こうしてはいられない。すぐにでも行かなくては。

自分の『眼』で確認することにしましょう。

ああ、忙しい忙しい」

早口で独り言を呟く。

頭を乱暴に掻き毟ると、店主は準備を整える。

愛用の杖、使わなかった『材料』から取り出した触媒。

更に、自作の召喚札を数十枚用意する。

彼の名は魔術師ラス・ヌベス。
またの名を人形術師ラス。
魔術師ギルドを除名され、闇鑑定士に身を落とした。
賞金首の中でも、その『性癖』から一際恐れられる人物である。

今日もまた迷宮に繰り出すために、門番にお布施を支払う。

「……たまにはタダで通しなさいよ。

私達から、一体幾ら巻き上げる訳？」

「そう思うなら、さっさと探索許可証を貰うことだ。

俺だって好きでやってる訳じゃないんだ」

聞く耳を持たないと言った様子の門番。

だがその顔は言葉とは裏腹にニヤついている。
きつとコツソリと懐に入れているに違いない。

「許可証を貰うには、職業認定を受けなければいけないですよね。
でも、どうやったなら認めてもらえるんでしょうか」

腕を組んで悩み始めるマタリ。

「さあ、神殿でも行ってお祈りするんじゃないの？
私は経験ないけどね」

ダーマのインチキ神官を思い浮かべる。

『遊び人』に転職したいといったら、とんでもない！ と怒鳴りや
がった。

ムカついたので神殿の入り口に落書きしてやった。

「……何も知らないんだな。少しは勉強しろ。」

各ギルドによつて多少異なるが、戦士ギルドはあれだ。

ギルドマスターがお前達の腕前と貢献を認めたら、

『試練』を受けることが出来るはずだ」

門番が親切に教えてくれた。

もしかしたら説明するのが好きなのかもしれない。

こんな所でポーツと突っ立ってるのも案外暇なのだろう。

「ロブと勝負して、勝ったら何かの職業に就けるの？

それなら、今すぐぶちのめしてやるわ」

「いやいや、そんな野蛮なことほししない。

『星見の水晶』により認定試験が行われるんだ。

それが何かは、その時までのお楽しみにしておけ」

「そうなんですか。教えてくれてありがとうございます！」

マタリが頭を深く下げると、門番が照れたような笑いを浮かべる。

「ありがとう、ウフフ」

私もありがとうとウインクすると、笑いが呆れた顔に変化した。何をしてるんだコイツみたいなアホを見る目。

ちくしょう！ 私だってもう少しすれば。

後数年もすれば、妖艶な色気を身につけるはずなのだから。それまでは雌伏の時である。

「……というわけで、入るならさっさとしろ。

俺も暇じゃないんでな。

ちなみに、眼が乾いているなら睡眠を十分にとることだ」

「アレルさん、ウインクはないんじゃないでしょうか」

「……うるさいわね。美女がサービスしてやったのに何なのよ」

プツと噴出す門番。

思わず蹴飛ばしたくなったが我慢した。

「もう少し、女らしさを身に着けてからそういつことはやれ。

子供が無理をするもんじゃないぞ」

「もういいわ。そこで突っ立ってなさいよ」

「あ、アレルさん待って下さい！」

ムカついたので、私はズンズンと先を進むことにする。

後方からマタリが慌てて追いかけてくる足音が聞こえる。

「そついえば、危険な奴が数時間前に迷宮に入って行ったな。深緑のローブを被った初老の魔術師だ。」

死にたくなかったら、絶対に近づかない方が良さだろっな」

後方から門番がこちらを見ずに呟く。

独り言と言っには余りに大きな声である。

どういつつもりかは知らないが、心配をしてくれているようだ。

一応感謝しておくことにしよう。

「ご忠告ありがとう」

「……………これは独り言だ。礼を言われる筋合いはない」

「私のも独り言よ」

「……………そうか。それなら良いんだ」

門番がわざわざ言うぐらいだから、相当アレな奴なのだろう。

面倒臭そうだから、今日はあまり深入りしない方が良さかもしれない。

またマタリが倒されたら、あまり気分は良くないだろうし。

そんな事を考えながら、私とマタリは地下へと繋がる階段を下りて行った。

死霊術師エーデル・ワイスは、迷宮上層の大部屋で『敵』と相対していた。

地下迷宮の上層部に当たる10F。地下に進むには、必ずこの大部屋を通らなければならない。

「おやおや、誰かと思ったら可愛い愛弟子、エーデルじゃありませんか。

元気そうでなによりです」

馴れ馴れしく、笑顔を浮かべながらラスは明るく話しかける。

「貴方に弟子呼ばわりされる筋合いはないわねえ。

不愉快極まるから止めてもらえるかしら」

かつての師、魔術師ラスに対して冷たい視線を向ける。

エーデルはこの間にも、魔力を充填し、詠唱に入っている。

恐らくは、ラスもそうであろう。

「これはつれないですね。

かつてはあんなにも私に懐いていたというのに。

月日の経過とは恐ろしいものです」

オーバーアクションで、やれやれと首を振るラス。

「よくもそんな台詞を吐けたものね。

一番墜ちたのは貴方でしょうに。

娘の死を受け入れることが出来なかった、哀れな男が」

「カタリナは死んでいませんよ。
今はただ『眠って』いるだけですから。
あまり失礼な事は言わないでもらいたいものです。
カタリナが悲しみますから」

不快な表情で吐き捨てるラス。

「……それで、こんな所で何をしているのかしら。
私を待ち伏せでもしていたの？」

「いえいえ、とんでもない。
貴方に用は全くありませんよ。自惚れてはいけません。
ちよつとした人物に用事がありましてね」

赤い水晶が先端についている杖。
ラスはリズム良く地面を軽く叩く。

「貴方にはなくても、私にはあるのよねえ。
まさかこのタイミングでとは思わなかったけど。

賞金首ラス・ヌベス。墜ちた魔術師よ。
ここでお前を討ち取らせてもらおうわ」

エーデルは髑髏の杖を思い切り地面に叩きつける。
詠唱が完了し、召喚準備が整ったのだ。
これ以上の時間はエーデルには必要ない。

地面を突き破り、人間、魔物のなれの果てが数十体現れる。
その全てが腐敗しており、生前の姿は既がない。
エーデルは杖を回転させると、精霊をそれらに憑依させる。

「これは素晴らしい！」

私を討つために、外法に手を染めましたか。

噂には聞いていましたが、この目でみると感慨深いものですね。いやいや、その覚悟には応えてあげなければなりませんよ。予定にはありませんでしたが、遊んであげますよ。」

ラスも赤石の杖を叩きつける。

既に詠唱は終わっていたらしい。魔術師ならば当たり前であるが。光と共に、人間が数十人召喚される。

冒険者らしい男から、普段着の女まで老若様々である。

その全てが虚ろな瞳であり、目に光がない。

腕を前にダラリと垂らし、まるで死人のようだ。

「……人形遣いとしての腕は落ちてないみたいね。

趣味は悪くなつたみたいだけど」

「フフ、人形はね、生きての方が良いんですよ。

死人や、ただの土くれとは違い、趣があるんです。

貴方もいずれは分かったとは思いますがね。

不必要な『意思』さえ処分してやれば、私の思うがまま。

材料は至る所に転がっていますからねえ」

軽薄な笑みを浮かべるラス。

大部屋は、死の兵隊と、生ける人形が向かい合う異様な光景となっている。

冒険者が通りがかつたら、すぐさま引き返すであろう戦場だ。

「下衆が。私は貴方とは違うのよ。

誰でも死んだらただの物体。それを有効活用しているだけだもの。本人の意思を奪つたりはしないわ」

「キヒヒ、同じことですよ。魂を冒瀆していることに違いはない。私と貴方は同類なんですよ。同類。」

何しろ、貴方を教えたのはこの私なのですから!!

私の下衆であるならば、その弟子もまた下衆なのが道理。そうでしょう、キヒヒヒヒヒヒ!!」

「黙りなさいッ！ 貴方と私は違うッ！」

「言っていないさい愚かな弟子よ。」

貴方も私の人形にしてあげましょう！

大事に大事に可愛がってあげますよ!!」

哄笑を上げると、杖を振りかざす。

人形達が得物を手に、行進を始める。

エーデルも同時に進軍の命令を出す。

死者と生者が組み合わせをはじめ、お互いの肉体を傷つけ始める。奇声が上がリ、血飛沫が部屋を染め上げ始める。

戦況は、エーデルが操る死者の軍団が押されている。

死を恐れない、命令を遵守する兵とはいえ、死体は死体。

身体は腐敗し、四肢が欠損しているのだ。

一方、相手は完全な人間であり、装備も十分。

兵の質は、残念ながらラスの人形の方が上だ。

人形にまわりついていた『首なしサルバド』が、

剣で胴体を串刺しにされる。

エーデルが妙な小娘から買い取った死体。

倒れ伏せたその身体に、数名の人形が囲むように立つ。

そして一斉に剣や斧を振りかざした。

「これは勝負が見えましたかねえ。

今大人しく降参するなら、待遇も考えて差し上げましょう。

そうですね、私の妻となるのはどうです？

カタリナもきつと喜びますよ」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべるラス。

エーデルは即座に拒否する。

「……丁重にお断りするわ。

今の貴方は私の好みじゃないから。

それにまだ勝負はついていない」

「そうですかそうですか。

では、貴方の意思を奪い、強制的に妻となってもらいましょう。

フフ、カタリナは貴方に良く懐いていた。

きつと良い母親になるでしょうねえ」

「黙りなさい！！

炎の精霊よ、我に力を与えたまえ。

我が敵を業火に包み、その罪を焼き尽くしたまえ！！」

詠唱を終え、髑髏の杖から巨大な炎を繰り出す。

炎の精霊の力を利用した、エーデル最強の攻撃魔法。

エーデルの長い銀髪が、風圧を受けて翻る。

目を見開くと、裂帛の気合を込めて発射した。

『メギド・フレイム!!』

「これはこれは。中々素晴らしい。師として、誇らしいですよ。成長しましたね、エーデル」

平然とした様子で、業火が迫るのを見ているラス。やがて煉獄の炎が深緑のローブを焼き尽くし、ラスは炎に飲まれる。それでもラスはそのまま立ち尽くし続ける。絶叫を上げることなく、ラスは灰燼に帰した。周りの人形はそのまま立ち尽くしている。最早命令を下すものはいないからだろうか。エーデルの死者の軍勢は、既に打ち破られていた。軍勢は破れたが、指揮官同士の戦いはエーデルが勝利を得た。

「か、勝ったの？ 私が、ラスを討ち取った。これで、これで！」

感極まった声を出すエーデル。だが、その喜びは直ぐに消えることになる。

「『魔術師は、決して油断してはならない』そう、教えませんでしたかねえ。相変わらず、肝心なことを忘れてしまっようですね」

呆れた口調でラスが姿を現す。

いつの間にか、人形の姿に化けていたらしい。

「　　そ、そんな馬鹿な」

「馬鹿は貴方ですよ。観察を怠りましたね。それでは減点ですよ。減点」

かつての師だった頃のような口ぶりを見せる。

エーデルが焼き尽くしたのは、別の哀れな人間だ。

強力な魔法を行使した後なので、エーデルは次の攻撃までに時間が掛かる。

「ま、まだ諦めない。

私は貴方を越えてみせる。

貴方の罪を止めなければならぬのよ」

エーデルは再び詠唱に入る。

「フフ、それは余計なお世話という奴です。

私はもう一度娘の声を聞きたいだけなのですから。

さて、次は私の番でしたねえ」

「クッ」

パチンと指を鳴らすと、手に触媒が現れる。

それは『材料』から切り取った心臓である。

保存の魔法を掛けてあり、いまだにその色は赤々としている。

「人形だけでなく、触媒も生きている方が効果を発揮するのです。

これは私が発見したんですがね。

ほら良く見てください。まだ脈を打っているでしょう。フッフ、素晴らしい。命の鼓動というものです」

ラスは自慢気に掌に乗せた心臓を見せ付ける。

エーデルの体に鳥肌が立つ。

ここまで外道に堕ちたのかと。

最早師だった頃の面影は欠片も残っていない。

「く、狂ってるわ」

「死体を操る貴方が何を言うのですか。

目を見開いて、良く見ていなさい。

この鼓動が掻き消える瞬間を。

もつとも命が輝きを見せるときですよ！」

ラスが詠唱と共に、心臓を握りつぶす。

炎を上げながら、心臓だったものは零れ落ちていく。

「……………」

その危険な魔法が発動する前に、エーデルは切り札を使う。

ラスの足元に、密かに死体を移動させておいたのだ。

それに気付いた様子はない。

そしてこれが最後のチャンスだ。

失敗すれば最早次はない。

『コープス・フレイム!!』

「ッ！」

「地獄に落ちなさい、この狂人がッ！」

死体がラスに纏わりつき、己の身体ごと炎を巻き起こす。

そして笑みを浮かべると同時に、爆発する。

死体を潜ませ、敵もろとも自爆させる魔法。

これがエーデルの最後の切り札。

閃光とともに熱を帯びた煙が巻き起こる。

爆心地は、無事ではいられないはずだ。

エーデルは油断せず、それを見守る。

ラスの場合、その首を取るまでは安心できない。

「危ない危ない。

身代わりがいなければ即死でしたよ。

油断していたのは私の方でしたね、ククク」

その声を絶望の表情で聞くエーデル。

最早切り札はない。

「……………」

「そんなに悲しい顔をしなくても良いのです。

発動していた魔法を、『防御』に回しただけですから。

本来なら、私は木っ端微塵でしたよ。

実に素晴らしい魔法でした。花丸ものですよ」

拍手とともに、エーデルを褒め称える。

人形達も命令を受け、エーデルを称える拍手をしている。大部屋に奇妙な光景が展開された。

暫くしてそれを終わると、ラスは再び触媒を召喚する。心臓を握り締めると、それをエーデルへと向ける。

「お礼に、私の新しい魔法を披露させて下さい。殺さないように加減しますから、心配しなくても大丈夫ですよ。死んでしまつては『人形』にできませんからね」

「ほ、炎の精霊よ我に力を」

エーデルは最後まで抵抗を見せる。

ラスは一笑に付すと、詠唱を開始した。

「もう手遅れですよ。」

生ける心臓よその鼓動と共に呪いの声を響かせたまえ。滴り落ちる鮮血で、彼の者に赤き戒めを！！」

『カース・オブ・ブラッド！！』

握りつぶされた心臓。

放たれる黒い瘴気。流れ落ちる血が凝固して、まるで触手のようにラスの掌から展開される。

エーデルを捕らえようと、それらの魔手が殺到する。すかさず飛び退り、回避行動を取るが所詮は魔術師。

その力はタカがしれている。

例え熟練の戦士であろうと、それを引き千切るのは難しいだろうが。

血の触手がエーデルの四肢を捕らえ、首に纏わりつく。

ピンクのローブが赤く染まり、そのとんがり帽子が地面へと墜ちる。

ついには命綱である杖すらも手放してしまふ。

こうなれば魔法を発動することは出来ない。

魔術師は、杖を介してのみ魔法を発動できるのだから。

「く、くああアツ！」

「じわじわと体力を奪わせてもらいます。

もう暫くしたら楽になりますよ。

その上で、じっくりと脳を弄らせて頂くとしましよつ。

キヒヒヒヒ」

ラスが触手に命じると、エーデルの身体は宙へと吊り上げられる。大の字に拘束すると、徐々にその戒めを強くしていく。

「ぐ、ああああ」

「無駄な抵抗は止めなさい。

我が妻となる女性に、手荒なことはしたくないのですよ。

その美しい肉体に傷がついては、価値が落ちてしまふ。

カタリナも悲しみますからね。

キヒヒヒヒ」

苦悶の声を上げるエーデルを、心から楽しそうに眺める。
締め落としたあとは、自宅に持ち帰り『人形』とするのだ。
その時を思い浮かべると、ラスの興奮は最高潮まで達しそうになる。

「ではいよいよ落とすのでしょうか。
赤き戒めよ、彼の者の意識を奪え！」

「い、いや……だ、誰か」

ラスの杖が怪しく光を放つと、触手はさらに力を強める。
エーデルの意識がいよいよ失われようとしたその時。

「ニフラム！！」

少女のような声とともに、眩い光が部屋を包み込む。
ラスは思わず目を覆い、一瞬視界を失う。

「くっ、何事です!?!」

「　　マタリ、ピンキーを回収しなさい。
なんだか良く分からないけど。
私の勘だと、倒すべき敵はアイツなのよね」

「　　ぴ、ピンキーですか？」

あ、ああ、あの人ですね！」

「そそ、ピンキーって感じでしょ。
ピンク尽くしで目が痛くなるわ」

ラスが視界を回復すると、エーデルの元に鎧を来た女が駆け寄って
いくのが見えた。

触手はどうしたのか跡形もなく消滅していた。

(……触手が消えた？ 一瞬私の集中が途切れたからだろうか)

現在の状況を確認すると、ラスはいきなり現れた邪魔者へと声を掛
ける。

青い水晶のついた額当てを身に付け、みかわしの服を身に着けた少
女へと。

「……私の楽しみを邪魔してくれたのは貴方ですか？
中々勇敢なお嬢さんですねえ」

苛々を押し殺しながらも、丁寧に話しかける。

「邪魔だからつい手出しちゃったのよ。
こんな所で迷惑よ。もっと端でやりなさいな」

「これはこれは。
口の悪いお嬢さんだ。教育の必要がありそうですねえ。
その可愛らしい身体に叩き込んであげましょう」

「アンタも中々の屑みたいね。

一目見ただけで分かったわ。

お前ら屑は必ず『悪臭』がするからね。

本当鼻につくのよ。その存在自体が」

そう吐き捨てるが、少女は特に得物を構えようとはしない。

腰に見につけているのはダガーナイフのみ。

魔術師相手に、時間を掛ける危険性を理解しているのか。

戦闘はこうしている間にも既に始まっているのだ。

（ただの馬鹿か。まあ良い。人形にして『触媒』にでもするとしましよう）

「中々に酷い言われようだ。

貴方は特別に意識を持ったまま『人形』にして差し上げる。

どのような顔を見せてくれるかワクワクしますよ」

「その臭い口を閉じなさい、糞野郎が」

「フッフ、良い意気込みです。

それでは始めましょうか！

人形達よ、小娘を生かしたまま捕らえなさい！」

周りに待機している『人形』を少女に向かい前進させる。

人形達は得物である剣や斧、槍を正面に構え行進を開始した。

一系乱れぬその光景は、統率の取れた兵団をイメージさせる。

ラスは満足気にそのパレードを見る。

同時に詠唱を行い、不測の事態には備えておく。

決して油断をしない。魔術師の鉄則だからだ。

「ピンキーさんは助け出しました！」

「そう、それじゃあ入り口の方で待機していて。絶対に近づかないように。」

「アンタは、そこでピンキーを守ってなさい」

「で、でも」

「アンタはアンタの出来ることをやりなさい！」

「わ、分かりました」

鎧の女が、エーデルを連れて入り口へと離れていく。

後で捕まえれば良いと、ラスは判断した。

目の前の少女の哀れな抵抗は、すぐに終わりを迎えるのだから。

「それじゃあやりましたよか。」

「といつても、直ぐに終わらせるけどね！」

人形達は少女を取り囲もうと散開する。

指令を与えているのは当然ラスである。

人形には意思はないし、最早取り戻すことは不可能である。

完全なる生き人形、ラスの魂を籠めた生ける作品なのだ。

小柄な少女はラスへと向き直ると、不敵な笑みを浮かべた。

第十一話 勇者と人形術師

整った複数の足音が、徐々に速度を上げる。

それが駆け足に変わると、愚かな少女目掛けて殺到し始める。

『押しつぶし、殺さぬ程度に蹂躞しろ』

これがラスの与えた指令である。

腕の一、二本ならば千切ってしまうても構わない。

この小娘は、楽しみを邪魔した拳句に、舐めた口を聞いたのだから。

（その小生意気な顔が、苦痛に歪み、涙と鼻水を垂れ流す。
ククク、実に楽しみですよ）

「ハアッ！」

少女が怒声を上げると同時に、拳を振りぬく。

殴りつけられた冒険者の人形が、ラスの隣を掠めて吹き飛んでいった。

叩きつけられた壁には、大きなひびが入り、人形はそのまま身動きをしなくなる。

痛みを感じないとはいえ、一定のダメージを超えると、行動は不能となるのだ。

つまり、肉体へのダメージが限度を越えたということである。

もうこの人形は使い物にならないだろう。

どこにそれほどこの腕力があるというのか。

ラスは驚愕し、その目を大きく見開く。

「 な、なに」

「数だけはいわねえ。サクサクいかせてもらうわよ」

「小娘がツ！ふざけた真似を。」

構いません、バラバラに引き裂いて殺しなさい！」

獲物を捕らえようとしていた人形達が、その動作を変える。

少女目掛けて、人形達がそれぞれの得物を突き出す。

それを余裕といった表情で回避すると、手から光を迸らせる。

「イオラ！」

閃光が少女から放たれ、人形達は衝撃で跳ね飛ばされた。もう一度少女が閃光を放つと、更に深く打ち付けられる。

人形達は、先程の冒険者と同じ末路を辿る。

「……貴方は魔術師ですか。見た目に誤魔化されましたよ。精々戦士かレンジャーだと思っていたのですがね。」

杖をお持ちではないようですが、どこかに隠しているのですか？」

ラスは少女の服装を観察する。

特に杖を隠せそうな場所は見当たらない。

だが、巧妙に隠していないとも言いきれない。

「私は魔術師じゃないわよ。勇者だから。」

勇者は杖は装備しないもの。常識でしょ？」

「ほう、勇者ですか。それはそれは。」

子供の頃は誰しもが憧れるものです。
闇を切り裂き、光へと導く救世主。
いやはや、素晴らしい素晴らしい！」

「実際やってみると大変よ。
御伽噺通りの素敵な冒険譚とはいかないからね。
現実はずっと泥臭くて、血生臭いもの」

「ほうほう、それは良い事を聞きました。
今後の参考とさせて頂きます。」

では、お礼にこれを差し上げます！」

杖の先端を、ラスは勢い良く叩きつける。
アレルは思わず注意をそれに向けてしまった。

注意を引くこと。それこそがラスの狙いだ。
敵の死角からの奇襲。人形術師の本来の戦い方だ。
全方面からの攻撃、ラスが外道に落ちる前は、
数多の魔物を打ち破ってきた技である。

「一体何を」

「遅いですよっ！」

打ち付けられた人形の一体、かろうじて指令を与えることができる
それ。

会話の最中に、少女の背後へと差し向けたのだ。
意思がないということは、気配すら殺すことが出来る。
熟練の人形遣いならば容易いことだ。
白刃が少女の死角から襲い掛かる。

刃が胴体を貫く寸前、少女が振り向き様に回し蹴りを食らわせる。鎧を着た人形の腹へと炸裂し、入り口方面へと凄まじい勢いで叩き飛ばした。

「残念、後一步だったわね」

蹴り飛ばしたままの足をそのままゆらゆらと動かし、まるで武闘家のようなポーズを取っている。ラスはそれを不快そうに見やる。

「……あれを避けるとは。」

私も耄碌しましたかねえ。

かつて得意としていた技だったんですが」

「喰らってあげても良かったんだけどさ、

これおニユ一の服なのよね。

血でいきなり汚すのもどうかと思って。

結構良い感じだから、気に入ってるのよ」

服の埃を叩き落す仕草を取る。

そして見せ付けるように一回転。

人形の事など、まるで眼中にないかのように。

それがラスの自尊心を大きく傷つける。

「貴方は、一体何者です。」

魔術を使い、そこまでの武術を身に着けている。ただの馬鹿とは考えにくい。

まさか、教団の子飼いですか？」

警戒を露にして、ラスは少女へと問いかける。
教団云々はただの出任せ。何の根拠もない。

これも時間稼ぎの一端である。

先程から人形へと指令を飛ばしているが、それに応えるものはない。
完全に行動不能となっている。

ラスは思わず舌打ちをする。

「私？ 私はアレル。勇者アレル。」

別に覚えなくても良いわよ。アンタはここで、直ぐに死ぬから。
冥土の土産も、屑にはいらないうでしよう？」

勇者などという戯言は聞き流すが、アレルという名前には覚えがある。

ラスがここに来た本来の目的。

賞金首を倒した少女を品定めすること。

そして相応しいものであるならば、その『眼』を頂くことである。

「アレル、アレルさんですか。」

いやいや、これはまた奇遇といったところですね。

私がここへ来たのは、貴方にお会いする為だったんですよ。」

口元を歪ませ、フードの奥から笑みを見せるラス。

アレルと名乗った少女は、実に嫌そうな顔をした。

「私はアンタなんかには用事はないわよ。」

「実際この目でお会いするまで、半信半疑だったのですが。」

その腕前ならば、サルバドを討ち取ったとしても不思議ではない。

まだお若いというのに、大したものです」

「あつそ」

「それに、その挑発的な『眼』。実に素晴らしい。攻撃的な視線の裏に見え隠れする脆弱さ。

それを押し隠すための強気な態度。

キヒヒ、なるほどなるほど。実に歪んでいらつしやる」

「……………」

杖で地面を叩きながら、ラスは続ける。

アレルは沈黙を続ける。

「大変気に入りましたよ。私の娘の『眼』とするに相應しい！
貴方を倒した後で、その『眼』をくり貫くことにします。

ああ、まだ命は奪わないので心配はいりませんよ。

貴方の身体はその内臓まで、一切の無駄なく使わせて頂きますからね」

ラスは哄笑を上げる。

アレルの身体を嘗め回すように見つめると、厭らしく目を細めた。その手はくり抜いた眼球を遊ぶ仕草を取っている。

生理的な嫌悪を感じ、アレルの肌が粟立つ。

同時に煮え滾る怒りが一気に溢れ出す。

屑の想像に出されるだけで、苛々が止まらない。

「死ね、屑が」

「キヒヒ、その美しい『眼』、くり貫かせて頂きますよ！」

アレルは全力でラスへと疾走を始める。

相変わらずの無手ではあるが、その形相は怒りを露にしている。

ラスはすかさず心臓を召喚し、魔法を発動させる。

既に詠唱は終わっており、後は発動させるだけなのだから。

馬鹿な小娘を捕らえ、後は蹴るだけである。

膂力にいくら自信があろうとも、この魔法を打ち破ることは絶対に出来ない。

呪いの触手は、物理的に切り裂くことは不可能なのだから。

『カース・オブ・ブラッド!!』

『マホトーン』

アレルが指を突きつけ、魔封じの呪文を唱える。

青い光がラスを包むと、やがて消え去った。

ラスの魔法は発動せず、ただ握りつぶされた心臓から赤い液体が滴り落ちた。

動揺を隠すことなく、ラスは血に染まる己の手を見る。

「ば、馬鹿な！ 何故発動しない！」

こんなことはありえん!!」「」

「どうやら成功したみたいね」

「だ、黙れ餓鬼めがッ！ か、カース・オブ・ブラッド!!」

呪いの戒めで我が敵を

「

杖を何度も振りかざし、魔法を発動させようとする。

だが発動しない。詠唱すら出来ない。

地団駄を踏むラス。己の杖を睨みつけ、何度も何度も振っている。

「余所見しているなんて随分余裕ね。

ちよつと痛いわよ？

そらッ！！」

アレルの助走をつけた強烈な蹴りが、ラスの脇腹へと突き刺さる。

「ぎ、ギエエエエエエエエエ！！！！」

奇声を上げながら、身体を折り曲げたまま側壁へと打ち付けられる。フードはずりおち、その老いた顔が露になる。

白髪混じりの頭髮が大きく乱れる。

額からは血液が流れ落ち、体中が痛みを訴えている。

たった一撃で、大ダメージを負ってしまった。

危険と判断したラスは、時間を稼ぐ為に下僕をぶつけることを思いつく。

敵わぬまでも、多少の抵抗ぐらいは出来るはずだ。

その間に態勢を立て直さなければならぬ。

ラスはこんな所で朽ち果てる訳にはいかないのだから。

「に、人形達を召喚するッ！！

来い、我が忠実なる下僕達！

さ、サモン・リビングゴーレム！！」

召喚札をばら撒き、魔力を解放する。

いや、解放しようとしたのだ。だが魔法は封じられている。

魔方陣と、詠唱呪文が書かれた紙片が、宙をただ彷徨いながら地面へと落ちていく。

「さ、サモン・リビングゴーレム！！

下僕よ直ちに姿を現せ！！

な、何故発動しないッ！？

私の魔法が失敗するなど、絶対にありえないのだッ！！」

紙を拾い集め、再び投げるが何も起こらない。

ラスは混乱して叫び声を上げる。

先程までの余裕は最早存在していない。

「無理無理。アンタの魔法は封じたから。

今のアンタに出来るのは、懺悔することと死ぬことだけよ。

そろそろ覚悟を決めなさい」

残酷な微笑を浮かべると、アレルはゆっくりとラスへと近づいてくる。

途中、エーデルの操っていた魔物の死体を、思い切り踏み潰しながら。

死体からは黒い血液が流れ落ち、その地面を汚し始める。

「あ、ありえない。私の魔法を封じた？

そんな馬鹿なこと出来る訳がない。

更に溜めもなく魔法を使うなんて、そもそも不可能です。

い、いや。ま、まさか口、ロストスペル」

「なによそれ。聞いたことないけど」

「ばばば、馬鹿な。そんなはずが。

あ、あれはただの伝説。作り話の」

「世迷いごとはもう良いかしら。
アンの臭いが我慢ならないのよ。
一刻も早く死んでくれる？」

ダガーナイフを腰から抜くと、その切先をラスへと向けた。

「ひ、ひいいいいいい！！」

ラスは狼狽しながら、アレルから少しでも逃げようとする。
尻餅をつきながら、その掴んだ杖を必死に動かして。
ずるずると足を引き摺りながら、距離を取り始める。

死霊術師エーデルは、それをただ呆然と見つめていた。

己が苦戦し、死の寸前まで追い詰められた宿敵。

かつてのエーデルの師であり、魔術師ギルドでもトップクラスのレ
ベルだった男。

それがまるで子供扱い。見るも無残に打ち崩され、今まさに止めを
刺されようとしている。

エーデルが全身全霊を掛けて望んだが届かなかった相手。
それがボロ雑巾のように潰され、無様な醜態を晒している。

「こ、こんなことが。人形術師ラスが手も足も出ないなんて」

「ほ、本当に凄いです」

「……一方的過ぎる。これならサルバドを討ち取ったというのも頷けるわ。」

ラスの人形がまるで太刀打ちできなかつた。
身のこなしと言い、あの小娘只者じゃない」

多少の嫉妬と、畏怖を籠めてアレルを睨みつける。

「あ、アレルさんは凄いです。魔法も使えるし、腕も一流なんですから。」

私の目標です！」

自分を担いでいる鎧の女をエーデルは凝視する。

この女は、あの時瀕死、いや死んでいたはずの女だ。

エーデルの初期観察によると、心臓停止、呼吸停止の完全な死亡状態。

アレルとかいう小娘が、妙な儀式を行った後、いきなり息を吹き返したのだ。

確かに息は吹き返したとはいえ、こんなに早く回復できる訳がない。それがピンピンしているとは、一体どういうことだ。

「あ、貴方なんです」

「はい？」

「い、いえ。何でもないわ。」

そ、それより、何故ラスの魔法が発動しないの。
そんな魔術はありえないのよ！」

この娘を死体として買い取ろうとした時。

戦闘の一步手前の状況であった。

あの時、もし戦闘になっていたら、自分は殺されていただろうか。

『手加減はしない』。あの小娘は確かにそう言っていた。

魔法を封じる手段があるならば、エーデルに勝ち目はない。

魔法の使えない魔術師など、なんの価値もないのだから。

「わ、私に聞かれても、その、詳しくないもので。

ご、ゴメンなさい」

心底申し訳なさそうに呟く。

記憶によると、確かマタリとかいう娘。

家紋の付いた盾を見るに、アートの一族だろう。

だが今はそんなことはどうでも良い。

エーデルが見届けるべきは、ただ一つのみ。

「……………」

エーデルは再び大部屋へと視線を向ける。

いよいよアレルがラスの目前に迫ろうとしているその光景へ。

本来ならば、自分が討ち取るはずだった、かつての恩師。

そして彼女が妹として可愛がったカタリナの父親。

その命が今尽きようとしている。

複雑な表情で、エーデルはただ見つめることしか出来なかった。

「ひ、ひいいい」

「往生際が悪いわね。観念したらどうなの。」

「応賞金首やってんでしょうがッ！」

「そ、そうだ。ここは退かなければ。」

「ここさえ凌げば何とかなります。キヒヒッ！」

「この借りは必ず返しますよっ！！！」

懐から『石』を取り出すと、上に向かって掲げようとする。それをアレルが見逃すはずがない。

「メラ！」

「ギャッ！」

石を握った手を、火が包み込む。

余りの熱さに思わず石を手放してしまう。

そこに、アレルはダガーナイフを勢いをつけて投擲した。

『職業刻印』の入った右手が、血飛沫を上げながら切り取られる。

一瞬呆然としていたラスだったが、直後に絶叫する。

「わ、私の右手がッああああ！」

「い、痛いッイイイ！！！」

「今までアンタがしてきた事に比べれば、

全然大したことないでしょう？
首を落とされなかっただけマシよね」

不快そうに唾を吐き捨てながら、アレルは距離を詰める。

「ま、待て。私の話を聞いてくれ。

私も好きでこんなことをしてきた訳じゃない。

ただ、娘にもう一度会いたかっただけだ。

そう、私は哀れな父親。娘を愛しているだけなんだよ」

右の手首を押さえつけながら、哀れみを請うような視線で弁解するラス。

表情には涙を浮かべ、頭を地面に叩きつけながら謝罪する。

「だから？」

「私は、こんな所で死ねないんだ。

あ、あと『眼』さえあれば、娘は完成するんだ。

間もなく蘇り、私を父と呼んでくれる。

か、金なら幾らでも支払おうツ！

私に掛けられている賞金の十倍出す！

だから、この場は見逃してくれツ！！

頼む、後生だ！！」

「へえ」

「頼む、頼むツ！ お願いだ！」

誇りも全て投げ捨てて、ラスは土下座する。

「 答えは、『死んでもお断り』よ。屑とは取引しないの。」

見逃したりしたら、気分が悪いでしょう？屑の性根が治ることはないのだから」

アレルはラスを見下ろしながら、言い放つ。

こういう類は必ず根に持つ。

ここで見逃すことは、必ず禍根として残る。

なにより、人間を玩具として弄り回す外道だ。最早会話の必要性がない。

「こ、こんなに頼んでいるのに。き、貴様はアアアツツ！！」

最後の力を振り絞り、接近戦を仕掛けるラス。

その爪には猛毒が仕込んであり、切り裂くことが出来れば、相手に致命傷を与えることが出来る。

正真正銘、最後の手段である。

「 っつと」

ヒョイとアレルは避ける。

爪先が微かに左腕を掠める。

ラスの執念という奴だろうか。

アレルは少々目測を誤った。

「や、やったツ！ 当たった！ 当たったぞ！

もう間もなく、猛毒が貴様の全身を犯す！！

最後の最後に笑うのは、やはりこの私だ！！

父の愛が、全てを上回ったのだ！！
キヒヒヒヒヒ！！」

爪が掠ったアレルの左腕が、傷口から徐々に青くなっていく。
濃縮された毒であるそれは、数分持たずに全身を蝕むのだ。

「うるさいわね。耳障りだから黙りなさい」

アレルはやれやれと首を振りながら、
地面に突き立っているダガーナイフを手に取る。

そしておもむろに自分の腕へつき立てると、毒に蝕まれた部分を
一気に削ぎ落とす。

「貴様、な、何を！！ 正気か！？」

「アンタに正気を疑われちゃお終いよ。

ベホマ」

削ぎ落とされた部分が、みるみる内に再生し、元通りに回復する。
毒が再び効果を表すことはなかった。

「ち、治癒だと。しかも即座に再生するなどありえない。

そんな魔法は聞いたことがない。ありえないありえないありえない。
キヒヒ、あ、ありえないいいいいいい。キヒヒヒヒイ」

「 それじゃあね。

最後のは中々良い一撃だったわよ」

アレルは狂った笑いを上げるラスに呟く。

そして天井に向かって思い切り蹴り上げた。
ラスは身体をくの字に曲げながら、血反吐を吐く。
骨を砕く音と共に、高く放り投げられる。
背中が天井へと激突し、凄まじい激痛が走った。

「ゲハアアアッ！」

「聖なる雷よ、我が敵を討ち払え！！
ギガデイン！！」

指をかざすと、ラスの眼前に巨大な雷球が現れる。
アレルは勢い良く指を振り下ろす。

それを合図に雷球は炸裂する。

部屋中に雷鳴が轟き、荒れ狂う稲妻が迸る。

ラスのみを標的としたアレルが持つ最強の攻撃呪文。

ラスの身体は即座に弾けとび、一片の肉片すら残さずに蒸発した。

それを確認すると、ラスの使用していた杖を踏み潰す。

鈍い感触と共に、赤石の杖は粉々になった。

それでも足らずに、アレルはグリグリと地面へと押し付ける。

「……………ちよつとやり過ぎたか。
余りの気持ち悪さに、つい」

アレルは額の汗を拭くと、様子を見守るマタリ達の下へと歩いていった。

「あ、アレルさん！ 大丈夫ですか！？」

「大丈夫よ。最後はちょっと想定外だったけど。ほら、傷跡はないでしょう」

服を巻くって、毒を喰らった部位を見せる。マタリはそれを見ると、安堵の溜息を吐いた。

「あまり無茶はしないでください。私も一応いるんですから！」

「一応って何よ。もっと主張しなさいよ。後は私に任せるとか、ガンガンいこうぜとか」

私はジト目でマタリを見る。

「そ、そこまではちょっと。」

あの人たち、なんか怖かったですし」

崩れ落ちている人形を見て、マタリが表情を暗くする。

「一応殺さなかったけど、アレ直せるの？
ちよっとピンキー！そこんどこどうなのよ」

呆けた顔をしているピンキーに怒鳴りつける。
一瞬誰のことか分からなかったようだが、
自分の服装を見て漸く気付いたようだ。

「だ、だれがピンキーよ!!」

私の名前はエーデル。エーデル・ワイスよ!

私はピンキーじゃない! ピンキーじゃないのよ!!」

何かトラウマでもあるのだろうか。

やたらと連呼している。

「うるさいわね。耳元で騒がないで頂戴。

私達がいなければ、変態の玩具だったくせに」

指でピンキーのおでこをグリグリと突いてやる。

この時大事なものは、ニタニタと馬鹿にした笑みを浮かべることだ。

こうすることで、相手の怒りに油を注ぐことが出来る。

特に役に立ちはないが。

「ゴゴゴ、この糞餓鬼っ!」

アンタ達がいなくても、いなくても……」

大声を上げようとするピンキー。

だが先程の光景を思い出したのか、段々とトーンが小さくなる。

「ぴ、ピンキーさん。どうしたんですか?」

マタリが傷跡に塩を塗る。

こういうときは、天然の方が残酷である。

「い、いえ、たしかに貴方の言う通り。
私はラスの人形にされていたでしょうね。
ピンキー呼ばわりされても仕方がない」

肩を落としてしまっピンキー。

それに特に同情はしない。

マタリが慰めるように背中を擦っている。

多分逆効果だろう。

「どうしたの？ 急に殊勝な態度になったりして。

お腹でも減った？ 悪いけどもう食べちゃってないわよ」

「……クツ、何とでも言いなさい。

賞金首ラスを討ち取ったのは、確かに貴方。

お見事としか言いようがないもの」

そう言っつて、トボトボと大部屋に歩いていくピンキー。

少しの間目を瞑った後、私が切り落とした『右手』を回収して、小さな袋に入れる。

アレルはピンキーに向かい話しかける。

「……欲しいならそれ、あげようか？

何か因縁がありそうだし」

「いらないわ。私は他人の手柄を奪うような真似はしない。

前にも言っただと思うけれど。

……ハア、なんだか気が抜けちゃったわ」

袋をこちらに放り投げてくるので、私はキャッチする。

あまり持っていて気分は良くないので、皮袋へとすぐにしまい込む。

ああ、また薄気味悪い袋に変化してしまった。

「そんなことはどうでも良いんだけど、こいつらは元に戻せないわけ？」

放置してつても良いけど、魔物の餌確定よ」

虚ろな瞳で崩れたままの人形を見渡す。

指揮官を失った軍勢は、最早崩壊するしかない。

そして、主を失った人形が再び動きを取り戻すことはないのだ。

「脳を弄繰り回されたのよ。もうどうにもならないわ。可哀想だけど、楽にしてあげた方が良いでしょうね」

「そ、そうなんですか……」

ピンキーの言葉に、マタリはひどく落ち込んでいる。

世の中というのは大抵こんなものである。

まあ、一応私は治癒を試してみることにする。物は試した。

私は適当に転がっている若い男の人形を掴む。

装備の整った、冒険者だったであろう男。

「一応試してみましようか。面倒だけど」

「あ、貴方を……」

「じつするのよ。ベホマー！」

淡い光が、人形を包む。

さて、どうなるか。

……………ん？

眼をパチクリとさせると、男は意識を取り戻した。

「ん、ん？ こ、ここは一体」

「う、嘘。そんな馬鹿な」

「……………回復しちゃったか」

「な、なんで、残念そうなんですか？」

顔を引き攣らせて、マタリが私に問いかける。

だって面倒くさい、とは言えなかったので、適当に誤魔化す。

「残念なことなんて、全然ないわよ。

哀れな人々が助かって、私もとてもうれしいわ
マタリったら何を言うのかしら」

「……………凄い棒読み口調ですけど」

疑念の顔でこちらを窺ってくる。

実に失礼な奴である。

「……………そ、そんなことないわよ。
人々の幸せが、私のしあツ」

慣れない台詞なので、思い切り舌を嚙んでしまった。

「今、噛みましたか？」

「噛んでないわよ」

「噛みましたか？」

「噛んでない」

意外としつこいヤツだ。

そこにピンクキーが横から助け舟を出してくれた。
流石はピンクである。

本人はそのつもりはないと思うが。

「う、嘘でしょう？ 脳の損傷を治療するなんて
貴方一体何者なの？」

「勇者だつて言ってるじゃない。
面倒くさいから、一気にいくわよ。
うーん。はあ、なんか精神力が尽きてきたわ。
働きすぎかしら」

「あ、アレルさん、もう一頑張りです！」
ドンドンと励ますように、私の背中を叩いてくる。
力の加減が出来ていないので、痛い。

「分かったわよ。ちゃんとやるから、叩くのを止めなさい！
ゴホン。せーの！」

軽く咳払いをすると、私の使える最大の回復呪文を唱える。

『ベホマズン！！』

その後、ギルドに戻る前に、私、ピンキー、マタリの三名は人形術師ラスの家へと向かうことにした。

家はスラムの住人に金を握らせたところ、すぐに判明した。ボロい店舗の古びた扉を開けると、即座に嫌な臭いが鼻につく。これは血の臭いだ。

香で誤魔化そうとしているらしいが、全然隠しきれていない。

「こんなところに住んでいたのね……。
話によると、闇の鑑定士として生計を立てていたらしいわ。
誇り高い魔術師がここまで墜ちるとは」

「ふーん。まあどうでも良いけど。
それで、一体この不愉快な家に何の用事なの？
なんか凄い臭いし」

「後始末よ。一応弟子だったから、それは私がやらないとね」

「ゲホツゲホツ！ この臭い、なんなんでしょうか。」

すえた様な、腐った臭いが……。
オエツ、は、吐きそうです」

マタリが口元を押さえて、嘔吐を必死に堪えている。
仕方なく、私は背中を擦りながら、退出することを促す。

「マタリ、アンタは外に出てなさい。

この先に行っても、良い事はないからね」

「で、でも」

「それに吐きそうなんでしょう？」

アンタは入り口を固めてなさい。

こんな所で無理することはないわよ」

マタリは暫く逡巡したが、やがて静かに頷くと、店の外へと出て行った。

「……あの娘には優しいのね」

「見なくても良いものだってあるわよ。

哀れな男の夢の残滓。ただの悪夢に過ぎないわ。

その先はタダの行き止まり。何も無いもの」

「悪夢、確かにそうね。

その先には何も無い。ただの空虚。

……さあ、奥に行きましょう」

「そうね」

奥に入った私達を待ち受けていたのは、この世の地獄だった。
おぞましいという言葉で片付けることの出来ない惨状。

身体を　されながらも、いまだに呼吸を続けている娘。

バラバラの部位がそこかしこに散らかっている。

血の池が広がるその先には、『自分の番』を待っている意思を失った人間。

マタリを連れてこなくて正解だった。

あの娘には耐えられない。

顔を歪めながら、人形達を端から眺めていく。

ラスとかいう外道に攫われて、脳を弄くられたのだろう。

全員が虚ろな目で、ただ正面を眺め続けている。

呼吸をしているだけの、ただの人形。

ピンキーが突然、口元を押さえ、激しく咳き込む。

その目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「　ゲホツゲホツ！！」

「大丈夫？　アンタも外に出ているも良いわよ。

後は私が始末するから」

私も嫌だけど、こういうのは良くある光景だ。

魔物達が村を襲ったあとは、大抵こうなる。

悪戯半分で、人間を玩具として扱うのだから。

それを埋葬するのは、大分気が滅入る作業である。

「だ、大丈夫。私とて死霊術師だもの。

これぐらい、だ、大丈夫。大丈夫よ」

「そう、なら良いわ。

……さてと」

口元を押さえているピンキーを置いて、私は人形に回復呪文を掛けていく。

回復が効かず、もう助からないと思われる者は、介錯をしてやる。いくら完全回復呪文とはいえ、普通の人間の部位を再生することはできない。

そして蘇生呪文は、効果を為さない。

私の仲間には、ルビスの加護は存在しないのだから。なんでかは偉大なるルビス様とやらに聞かなければ分からないだろう。

10名余りを救出し、外へと放り出す。

彼女達は、全裸だったので店内のローブやらマントを一応羽織らせる。

マタリに顔見知りの門番へと連絡を取らせ、保護の手配を頼んだ。

残りの数十人は、駄目だった。

私は同情はしない。運命なんてそんなものだから。

ガランとした室内。

魔方阵の上に寝かされたツギハギだらけの少女を見る。眼孔は空虚であり、それが何かを映し出すことはない。

あの外道が私の眼を手に入れていたら、ここに収まることになっていたのだろう。

実に胸糞悪い話だ。

「か、カタリナ？」

「アンタの知り合い？」

「……十年前に死んだ、ラスの愛娘よ。

この子が病に倒れてから、あの男は狂いだした。

全ての歯車が狂いだしたのよ」

カタリナという名前らしい少女を見つめる。

この子の本来の部分は、まだ残っているのだろうか。

「そう」

私は少女から視線を外す。

エーデルは少女の身体に手を伸ばす。

「……鼓動がある。呼吸もしている。

この有様で生きてるとでもいうの？」

「それに人生を賭けていたんでしょ。

執念って恐ろしいわね。

それが正しいかどうかは別として」

私はダガーナイフを抜くと、少女の心臓部へと当てる。

悪夢はここで終わらせる必要がある。

「……わ、私がやる。それは私がやらなければならないわ」

「……良いの？ きっと後悔するわよ」

「やらない方が後悔するわ。……貸して頂戴」

私から震える手でナイフを取ると、

エーデルは静かにその刃先を沈ませていく。

血が胸から溢れ出す。

少女の口元から血が零れ落ちる。

暫くすると、鼓動は止まり、呼吸は完全に停止した。

人形術師の悪夢は、これで完全に終わりを迎えたという訳だ。

一体、何人の人間を巻き込んだのか。

全く想像がつかないし、したくもない。

全てが終わり、エーデルと私は店の外へと出る。

少女の亡骸は、エーデルの炎の魔法により焼却された。

その灰は、後で埋葬することだ。

「それは？」

エーデルが抱えている古い本に視線を向ける。

「……ラスの記した日記よ。どうしてこうなったのか。何か分かるんじゃないかと思って」

「……今すぐに燃やす事をオススメするわ。狂人の日記なんて見ても面白くないわよ」

「そう？ 人生観変わりそうじゃなくて？
本で性格が変わるなんて面白そうじゃない」

「馬鹿馬鹿しい。そんな本ある訳ないじゃない。
存在するなら是非お目にかかりたいものね」

「そんなにムキにならなくても良いじゃないの。
ただの冗談よ」

疲れた表情で、エーデルが苦笑する。
相当参っているようである。
私もそう変わりはないが。

「それじゃあ、私は帰るわ。
今回の事は、貸しにしておくから」

私はヒラヒラと手を振って、ピンキーに合図する。
魔法の行使しすぎで、少々疲れた。
身体には腐臭が纏わりついている。
今すぐ洗い流したい。

「……………ありがとう」

「何か言った？」

「……………何でもないわ」

「あっそ。それじゃあね」

私は振り返らずに、その場を立ち去る。
取り敢えずは戦士ギルドに戻ろう。
きつとマタリが首を長くして待っている。

・人形術師ラス・ヌベス
人形ゴレムを操る熟練魔術師。
人形遣いとしての腕は、ギルド一と評されていた。

妻は娘カタリナ出産の際に死別。その分まで、カタリナを溺愛する。
精霊術師エーデル・ワイスの師として、魔術の基礎、応用を叩き込む。

だが、カタリナが病により若くして死去すると、外道に墜ちた。
カタリナ蘇生の為に、あらゆる外法を行い、賞金首となる。
最期はアレルにより、迷宮地下10階にて討ち取られる。

『カタリナは、必ず蘇る』

・精霊術師エーデル・ワイス
アートの貧民層出身。

魔法の才能を見出され、魔術師ギルドに幼少時から所属する。
ラスから魔術の手ほどきを受け、その能力を開花させていく。
カタリナを妹のように可愛がり、カタリナもまた姉のように慕っていた。

師が外道に墜ちると、それを阻止めるために奔走する。

全てが失敗に終わり、ラスは遂に賞金を掛けられてしまう。
彼女が最後に辿りついたのは、ラスを殺す為の外法であった。
『師は、必ず私が止めてみせる』

・人形術師ラスの日記

カタリナが病に倒れてから綴られ始めた日記。

狂人の妄想が、びっしりと細かい字で書き込まれている。

『材料からパーツを揃え脳を移植する。娘が蘇る日は近い』

第十一話 勇者と人形術師（後書き）

次回更新は遅れます。

第十二話 勇者の受難

アレルは眠そうな目を乱暴にこすると、ラーミアの背中で大きく伸びをした。

ネクロゴンドの特訓のご褒美として、つい優雅な空の旅を楽しんでしまったのだ。

どうせ休息を取るなら、普通の宿屋よりも特等席が良い。

そう考えたアレルは、数時間程不死鳥の背中で、快眠を貪っていた。ちなみにやいばの鎧は、袋に入れて尻尾にくくりつけてある。

数時間の睡眠により、完全に体力と精神力を回復したアレル。

ラーミアの背中を軽く撫でると、たまたま見つけた辺鄙な村に立ち寄るように指示を出す。

そこは、最果ての地に存在する『ムオル』という名の小さな村だ。用件は、魔王の城へと乗り込む前の最後の補給である。

手には大きな袋を持ち、薬草を目一杯に詰め込むつもりだ。

「うーん。アンタはここで待っていなさい。

そんな巨体で広場に下りたら、村がパニックになるからね」

巨体から飛び降りると、言い聞かせるようにその身体を優しく撫でる。

白い羽、孔雀のような尻尾を持ったラーミアが、首を大きく振る。その仕草に軽く苦笑すると、アレルは一人で村へと入っていった。

村の入り口付近で腰を下ろしていた男が、見慣れない旅人の姿を見

て、怪訝そうな表情を浮かべる。

男は隣の村人に話しかけると、アレルの方を向き時折何回か頷いた。特に敵意は感じなかったので、アレルはそれに構わず道具屋へと足を向ける。

一々話しかけている程暇でもない。

道具屋の主人も、先程の村人同様に、妙な顔でアレルを眺める。段々ライラしてきたので、アレルは仕方なく尋ねることにした。

「ねえ、私の顔に何か付いてるわけ？」

どいつもこいつも、私の顔をジロジロと。

そんなに面白い顔してる？」

「い、いや。そういうわけじゃないさ。

ただ、少し前までここにいたポカパマズさんに似てるなあって。

雰囲気というか、うーん、言葉には表しにくいんだけども。

あんたとは、顔も性別も違うしね」

「ぼ、ぼかばまず？ なによそれ。

なんかの呪いの言葉？」

それを聞いた道具屋の主人は、手をブンブンと振って否定する。

「違う違う、ポカパマズってのはこちらの地方の言葉さ。

彼の故郷では『オルテガ』って言うらしいな。

いやあ、今頃どうしているんだか」

「……………」

その言葉を聞いたアレルは、表情を硬くする。

「なんでも、アリアハンってとこに赤ん坊の娘を残してきたらしくてね。

それが心残りだと、何回も悲しそうに話していたよ。

その時の雰囲気にも、お前さんが似ていたものでね。

村の奴等も同じように思ったんだろうさ」

「……あつそ。悪いけど、私は何も知らないわ。

とにかく、この袋に薬草を詰めれるだけ詰め込んで頂戴。

釣りはいらさないから」

代金と袋をカウンターに乱暴に置く。

主人は目を丸くするが、すぐに薬草を詰め込み始める。

代金が相場の10倍以上だったこともあり、話好きの主人も本業に戻ることにしたのだ。

分かりやすい店主に、やれやれと首を振るアレル。

そこに小さな子供が、ニコニコと笑いながら近づいてきた。年で言うと8才程度だろうか。ヤンチャそうな少年である。

「……………何か用？ 生憎、お菓子は持ってないわよ」

「お姉ちゃん、ポカパマズさんに本当そっくりだね。

そうやって首を振る所とか。おじさんも良くやってたよ」

少年の言葉を聞くと、アレルは不愉快そうな表情を浮かべる。

最早記憶にない人物に似ているといわれても、全く嬉しくない。

名声と重荷だけを残して、失踪した人物の事など知りたくもないのだ。

アレルにとっての親とは、アリアハンに住む母親だけである。

「……全く。似ているのはもう分かったわよ。」

ここで何回も聞かされたからね。耳にタコが出来るわ」

「うん、顔は全然違うけど、本当に似てるんだ。だから、これお姉ちゃんにあげるよ！」

アレルに、竹で作られた水鉄砲が差し出される。その意図が全く分からず、アレルは少年に尋ねる。

「……『だから』の意味が良く分からないんだけど。これをどうして私にくれるわけ？」

「これポカパマズさんに作ってもらったんだ。」

僕は作り方覚えたから、お姉ちゃんにあげようと思って。そうした方が、きつと良いと思ったんだ」

「本当に意味が分からないわ。」

アンタ持ってなさいよ。私はこんなので遊ばないの。もう子供じゃないんだから」

いらないと拒否するが、少年はグイグイ押し付けてくる。

それでも受け取らないでいると、薬草が詰め込まれた袋に上から押し込んだ。

「はい、大事にしてね！ それじゃバイバイ！」

手を振ると、勢いよく走り出して行く。
今から捕まえるのは骨が折れることだろう。

「ちょ、ちよっと！
アンタ勝手に何を！」

「良いじゃないかお嬢ちゃん。
ムオル土産ってことで貰ってあげなよ。
そんなに嵩張るもんじゃないしさ」

ようやく詰め込み終わった道具屋の主人が、汗を拭いながら声を上げる。

有無を言わず袋を縛り、はいお待ちとアレルへと放り投げた。

「ど、どいつもこいつも……」

「ハハハ、押しが強いのがこの村の特徴だね！
どこに行くのかは知らないが、怪我しないようにな！」

「ハア、なんだか疲れたわ。

……私はもう行くから。それじゃあね」

「はい、毎度あり！」

疲れた顔で手を振るアレルに、大声で返す店主。

アレルは自分に集まる視線を振り切りながら、早足に村を後にした。

森に数分入ったところでラーミアと合流し、再び大空への旅に出る。

「やれやれ、今更オルテガの名前が出てくるなんてね。
何よ『ポカパマズ』って。本当に馬鹿馬鹿しい」

荷物袋から、押し付けられた水鉄砲を取り出す。
暫く眺めた後で、軽く棒を押し出してみる。

水が勢い良く発射され、ラーミアの身体を濡らしてしまった。
それを感じたのか、ラーミアが非難の声を上げた。

「あーごめんごめん。ちょっとした手違いよ。
機嫌を直して、目的地までよろしくね」

ぼんぼんと身体を撫でると、再び大人しく飛行を始める。
意外と気難しい鳥だというのが、短い付き合いで分かったことである。

水鉄砲を袋へと戻し、今度は一冊の古い本を取り出す。
アレルにとって、命と同じくらい大切なもの。
それがこの本だ。

寝転がりながらそれを開くと、ゆっくりとページをめくって行く。
この作業が、アレルの精神を安らかにしてくれるのだ。
安穩とした表情を浮かべると、アレルは本に没頭し始めた。

陽が落ち始め、薄暗い闇が世界を包み始める。
アートの街が賑わい始めるのはこれからだ。
冒険者達が帰還し、今日の幸運に感謝する。
そして明日も再び美酒に酔うことが出来るように祈るのだ。

戦士ギルドでは、今日もまた喜びの声に沸き立っていた。
その盛り上がりはいつも以上と言えるだろう。

何しろ、消息を絶っていた若手の成長株が奇跡的に帰還したのだから。
ムードメーカーであり、いずれギルドを背負っていくかもしれない
若者。

ギルドマスターのロブも、目を掛けていた人物である。

「エクセル、良く無事で戻ったな。
もう無理だろうと諦めかけていた所だ。
見たところ、五体満足そうぞ何よりだ」

ロブが、照れたように微笑む青年の頭をグシャグシャに撫で回す。
他のギルドメンバーも皆笑顔を浮かべ、それぞれが無事を祝っている。

戦士エクセルは貧しい村から出てきた、見るからにひ弱な青年であった。

それが短期間で腕を磨き、遂には『探索許可証』を手に入れることに成功したのだ。

剣術だけを見たならば、ロブにも引けをとらないだろう。仲間にも一応は恵まれ、切磋琢磨して迷宮を突き進んでいく。『一応』としたのは、その面子に色々な問題があるからなのだが。

「はい！ ロブさん、皆さん、ご心配お掛けしました！！この通り、無事に生還しました！」

頭を深く下げると、全員に向かって謝罪するエクセル。人当たりが良いため、ギルドメンバーからの受けも良い。

「堅苦しいことは後だ。良いからお前も飲め！」

「はい！」

「おう、早くしろよ！ 酒が温くなるからな！男ばっかりだが、今日は我慢するんだな！」

古参のメンバーにせっつかれ、いそいそと席に着くエクセル。乾杯の音頭が取られると、全員が一斉にグラスを空ける。その後はいつもの通りである。勝手に騒いで勝手に出て行く。金さえ払えば、特に煩い事決まりはなし。それが戦士ギルドの飲み方だ。

ある程度時間が経つのを見計らい、ロブはエクセルの対面に腰掛ける。どうしても聞きたいことがあったからだ。

「エクセル、悪いがもう一度詳しく聞かせて貰っても良いか？」

「は、はい。でも先程お話しした通りですよ」

「ああ、それで構わない。確認の為だ」

ロボの視線に、エクセルが頷くと自分に何が起こったのかを話し始める。

先程は、エクセルの興奮が収まっていなかったので、要領を得なかったのだ。

落ち着いたのを見計らい、もう一度聞こうとロボは思っていたのだ。

「えーと、僕達4人はいつも通り『石』を使って中層まで移動したんです。

それで、すぐ先の部屋に入ったところで……」

「後ろから何者かに襲撃されて、意識を失ったと。

それからの事は全く覚えていない。

そういう事だったな？」

「はい。本当に一瞬の出来事だったんです。

敵の気配すら感じる事が出来ずにやられるなんて。

……次に目覚めたときは、上層部の大部屋でした。

自分でも訳が分かりませんよ」

腕を組んで考え込むエクセル。

彼等が目覚めたのは地下迷宮10階。所謂迷宮上層に当たる。

「なるほどな。それで、目覚めたときに誰かいたのか？」

お前を助けてくれた『誰か』がいたと思うんだが」

「えーと、可愛い女の子がいたと思うんですが。ただ朦朧としていたので、余り自信がなくなってます。もう一度見れば、絶対に思いだすんですけど。」

僕は、可愛い女の子の顔は絶対に忘れませんから」

可愛いというところを妙に強調するエクセル。

社交性もあり腕も立つ期待の若手ではあるが、一つだけ悪癖がある。身体の芯まで女好きなのだ。可愛い娘を見かければ、必ず声を掛ける。

パーティも態々女だけで構成し、その全員に手を付けている。いつか刺されるかもしれないと、ロブは心配している。

「まあ、そいつがお迎えの使者じゃなくて良かったな。

お前は本当に運が良い」

「へっ、お前の死神は『女』だと思うね。

いや、絶対に間違いない。

ケケ、日頃の行いを省みるんだな！」

「お前が寝首を搔かれる方に、俺は銀貨5枚掛けてるんだ。

迷宮で消息を絶つたと聞いた時は、思わず意識を失いかけたぜ。

助かって本当に良かった。俺が大損する所だったからな！」

「俺は金貨1枚だぞ。今か今かと待ちかねているんだがね。

とつと刺されて再起不能になっちまいな！」

隣で茶々を入れる古参の男達。

エクセルは華麗にスルーした。

都合の悪いことは、耳へ入れないスキルを持っているようだ。

「でも、賞金首に襲われた時点で運が悪いんじゃない」

「馬鹿だな。生きているだけで儲けものだ。

既に聞いているかは知らんが、何人も犠牲者が出ているんだ。

仲間が全員無事だったお前は、ダントツに運が良いってわけさ」

「……そうですね。仲間が無事だったんですから。

そっか、僕は最後の最後で運が良かったんですね」

「……ああ、そうだ」

賞金首ラスの自宅から見つかった死体。

数十体にも及ぶそれは見るも無残な状況であった。

身元確認のため、ギルドにも連絡があったというわけだ。

「僕は、その人形術師に操られていたんですよね？

誰がそいつを倒したんでしょうか。

あの女の子がやったとは思えないしなあ」

「さあな。俺は協会から連絡を受けただけだ。

教団が重い腰を上げて、異端狩りに出張ったんだろうよ。

相当な戦力じゃなきゃ、ラスは討ち取れないだろうからな」

人形術師ラスは、その名の通り人形を使役する。

数十の統率の取れた軍勢相手に、冒険者では荷が重い。

ロブの推測では、教団の『治安維持隊』もしくは『異端審問官』が
始末したと考えている。

その両方とも、滅多に武力を行使することはない。

自称穏健派の日和見好きな連中だ。
だが一度指示が下ると、敵を完膚なきまでに叩き潰す武闘派でもある。

「ということは、そいつの賞金は誰の手にもいかないってことですか？」

「まあそつだな。教団が賞金を貰うなんて聞いたことがない」

「勿体ないですね。いらぬなら僕が欲しいくらいですよ。色々とお費も多くて。本当付き合うのも大変ですよね」

「お前は生きてることだけを喜んでいる！
この贄沢者め！！」

ロブが小突くと、エクセルが誤魔化すように笑い声を上げた。

「アレルさん！ 大丈夫でしたか！？」

私の姿を見かけ、戦士ギルドの前から駆け寄ってくるマタリ。どうやらマタリの気分は良くなった様だ。

私は余り気分が良くないが。

やはり、あの家は燃やしておくべきだった。
今更ながら後悔する。

「はいはい、大丈夫に決まってるでしょう。
アンタとは経験が違うからね」

「……で、でも実は私より年下ですよね。
そ、そんなに睨まないで下さい」

全然睨んでないのに、萎縮しているマタリ。
私を何だと思っているんだろう。

「生きてきた年数なんて関係ないわ。
人の価値は、どれだけの場数を踏んだか。
それが大事なのよ」

「べ、勉強になります」

畏まって私の話を聞きだすマタリ。
ちなみに、今は適当に口から流しただけである。

「とにかく、さっさと換金して宿に戻りましょう。
アンタもこんな所に立ってないで、中に入っていれば良かったのに。
別に気にしたりしないわよ」

「いえ、そういう訳にはいきません。
戻るときはアレルさんも一緒です」

妙な所で頑固な奴だ。

「……あつそ。それじゃあ中に入りましょう。
面倒な事はさっさと済ませないとね」

「はい！」

マタリを連れて、ギルドへと入っていく。

扉を開けた瞬間、溢れんばかりの喧騒が響いてきた。

どうやら、ギルドメンバー総出で酒盛りでもやっているらしい。

実に喧しい。騒ぎ声が頭に響く。

顔を顰めるのと同時に、完全に酒に飲まれた馬鹿が、こちらに向かいフラフラと近寄ってきた。

「ゲへへ、姉ちゃん、酌してくれやって　ゲフツ！」

「邪魔よ」

酔っ払いを勢い良く蹴り飛ばして、私はカウンターへと突き進んでいく。

マタリが心配そうに眺めているが、怪我はしないようにしたので大丈夫だ。

多分。

相変わらず、顔を顰めているロブに視線を合わせると、手にした袋を乱暴に放り投げる。

持っているだけで気分が悪くなる一品だ。

さっさと処理してしまいたい。

「よう、今日はいつもより身軽じゃないか。

尻尾集めは止めたのか？」

グラスを置いて、ロブが軽口を叩いてくる。

「ネズミを無視して、下に進もうと思ったたら邪魔が入ったのよ。全く、全然先に行けないわ」

「ハハ、そいつは残念だったな。

とにかく中身を確認させてもらうぞ。

終わったら、お前達も一杯やっていけ。

今日は特別に奢ってやる」

酒盛りしている連中に視線を向ける。

何かの祝い事だろうか。

「その気持ちだけ貰っておくわ。

今日はちょっと疲れちゃったのよ。

ねえ、マタリ」

ロブの申し出を遠慮しつつ、マタリへと顔を向ける。

「は、はい。ごめんなさいロブさん」

「まあ無理には言わん。

確かにマタリの顔色は余り良くないしな。

お前は全くのいつも通りだが」

失礼なことを言う奴である。

「うるさいわね。さ、とつとと鑑定して頂戴」

「そうだな。仕事はさっさと終わらせるとしよう。」

「って、おい。猫の尻尾2個と、妙な小袋しか入ってないぞ」

「仕方ないでしょう。ネズミばかりなんだから。」

「他の魔物が全然見当たらないのよ」

「まあ上層じゃそんなもんだ。」

「美味しいのはもう少し先に進んでからだな」

「ふーん、そうなんだ」

「そういうことだ。」

「……さて、気難しい鑑定士さんをお呼びするとしよう。研究ばつかで、宴会にも顔を出しやしないんだ」

「ロブがベルを軽く鳴らし、奥に控えている鑑定士を呼ぶ。」

「奥の部屋から、心底だるそうな鑑定士がよろよろとこちらへやって来た。」

「小袋を開け、中身を覗いた瞬間に、ロブの顔色が変わる。」

「……おい、これはどういう事だ」

「何が？」

「とぼけるな。今度はどこのどいつを狩ったんだ！」

「警戒心をむき出しにして、私を睨みつけてくるロブ。そのまま、刻印のついた右手を鑑定士に放り投げる。」

顔色を変えずに、鑑定士はそれを落ち着いてキャッチした。即座に手をかざし、その真贋を確認している。

「狂った人形遣いよ。こうなったのはただの成り行き」

笑みを浮かべながら、ロブに答える。

鑑定士がロブに鑑定結果を耳打ちする。

「……賞金首ラス・ヌベスに間違いない。全く信じられないが。一体どうやったんだ？ お前みたいな新入りが討ち取れる奴じゃない。い。」

サルバドといい、こんなことは前代未聞だ!!」

ロブの大声に、酒で盛り上がっていた連中が何事かと静まり返る。

私はやれやれと首を振ると、ロブに答える。

前代未聞だろうが何だろうが、知ったことではない。

「襲い掛かってきたから徹底的に排除したのよ。

何か問題があるわけ？ それとも無抵抗に殺されるとでも言っの？」

「そんな事を言ってるんじゃない！

どうやって殺ったのかを聞いている!!」

「思いつきり蹴り飛ばしてやったのよ。

その後、雷で跡形もなく消し去ってやった」

「こいつ！ 口から出任せを！」

「ふ、二人とも落ちついて下さい。

そんなに興奮すると身体に悪いですよ！」

マタリが仲裁に入る。

もう少し言い方があるような気がするが、まあ気にしない。

「私は興奮してないわよ。そんな元気ないもの。
マスターがどうかは知らないけどね」

別に喧嘩をしている訳ではない。

人は理解できないものが現れた時、それを否定することから始める。
よくあることだ。

「……大声を出して悪かったな。

俺としたことがつい興奮してしまったようだ。

駆け出しが賞金首を狩るなんて、今まで経験がなかったものでな。

本当にすまなかった」

ロブがこちらに頭を下げてくる。

言葉では謝罪しているが、こちらを警戒している気配は薄れていない。
い。

埒が開かないと判断したのだろう。

「別に構わないわよ。そういうの慣れてるから。

化け物でもなんでも好きに呼んでくれて良いわよ?」

化け物。化け物を利用して敵を倒そうと企む屑共。

利用できない、役立たずと分かったら即座に掌を返す。

それが人間という奴だ。

私は人間である前に勇者である。

勇者という存在に、『アレル』という名札が付いているのだ。

じゃあ、私から勇者を取り除いたら、何が残るんだろう。

思考が久々にネガティブへと落ち込む。

外道と一戦交えたからだろうか。

精神が引き摺られている。良くない傾向だ。

早く本を読まなければ。

「いや、ギルドの仲間を助け出してくれて感謝しているんだ。

これは本当だ。今回の事はギルドへの貢献として記録させてもらう」

「……………」

「これが賞金の金貨20枚だ。受け取ってくれ。

……………それと、お前達が都合の良いときに、『職業認定試験』を行うつもりだ。

準備が出来たら俺に言ってくれ」

私は首を傾げる。

確か職業を認定してもらうには、ギルドへの貢献が一定以上が条件だったはず。

私はそれほど働いたつもりはない。

「職業認定試験？ それって迷宮へのフリーパスでしょうか？」

私、そんなに何かしたつもりはないけど。

ねえ、マタリ。アンタもそう思うでしょ？」

「そ、そうですね。まだ魔物もネズミと猫ぐらいしか狩ってませんし。」

十分な結果を残しているとは言えないですね」

「確かに、本来なら一ヶ月間は適正を見て、俺が許可を出すんだがな。

お前達の腕前なら十分だろう。特例って奴だな。

さつさと奥に進んでもらった方が、ギルドの評判も高まる。

素質を見込んでの投資だ」

良く分からないが、さつさと認定してもらった方が良い事は確かだ。一々三時間ごとに地上に戻されていては探索が捗らない。

さらにさらに、あの不愉快な受付をギャフンと見返してやる大チャンスというわけだ。

何か企んでいるような気配はあるが、ここは素直に受けても良いだろう。

「マタリ、アンタはそれで良い？」

次の機会に認定試験を受けるってことで」

「私は構いません。正直まだまだ早い気がしますけど」

「俺の見る限り、基礎は大分出来ているから大丈夫だろう。

大事なのは心構えだ。腕だけじゃなく、精神力も見るからな。

まあ、楽しみにしている」

「分かりました！」

ロブの言葉に、明るく返事をするマタリ。

元気で良いことだ。

私のように捻くれてしまうと、こういうことが出来なくなる。

何か裏があるんじゃないかと考えてしまうのだ。

おそらく、試験を利用して、私の実力を測ろうとでもしているのだらう。

大体の予測はつく。ああ、面倒くさい。

「それじゃあ今日は帰るわ。

マタリ、宿に戻りましょう」

金貨の詰まった袋を掴む。

適当に食い物をパクついて、今日はさっさと寝るとしよう。

「はい！ それではロブさん、失礼しますね！」

再び騒ぎ始めた酔っ払いを押しつけて、私は出口を目指す。その私の行く手を遮るように、若い男が立ちはだかった。実に邪魔である。いつもなら蹴りを叩き込んでいる所だが、これ以上余計な体力を使いたくないので、イライラを押し殺して話しかける。

「……ねえ、どいてくれる？ とつても邪魔なんだけど」

「少しお話を聞いていたんですが、

貴方が、賞金首ラスを討ち取った方ですよね？」

「……そうだけど、それが何か？」

「い、いえ。貴方の顔に見覚えがあったので。

命を救っていただき、本当にありがとうございます。

仲間達も、貴方に心から感謝していました」

若い男は、深く頭を下げ、私に感謝してくる。

こういう事に慣れていないので、私の居心地は悪い。

「……折角助かったんだから、大事にしなさい。

次はないかもしれないわよ」

一応忠告しておく。

別にどうなるうと知ったことではないが、

折角回復してやったのだ。

長生きしてもらったほうが、私が苦勞した甲斐もあるというものだ。

「はい、肝に銘じます。

本当にありがとうございます」

「そう。じゃあそろそろどいてくれるかしら？

宿に帰って寝たいのよ。そろそろ精神力が尽きそう」

もう良いからと、軽く合図するが、若い男はその場を動かない。

いい加減にしろと怒鳴りたいが、その気力もない。

「え、ええと。

良ければ、貴方のお名前を教えてはいただけませんか？」

「……なんで？」

「命の恩人のお名前を、心に刻むのは当たり前のことです。

それがこんなにも可愛らしいお嬢さんなら尚更ですよ」

どことなくキザな口調で言葉を垂れ流す男。

もう意図を問い詰めるのも面倒なので、素直に答えることにする。

「……アレルよ」

「アレルさんですか。想像通りの可憐なお名前です。

それと、よろしければ、今度食事でもご一緒に」

我慢の限界に達した私は、無言で拳を叩き込んだ。

一応は加減はしてあるが、馬鹿の意識は刈り取った。

最初からこうしておくべきだった。

精神を酷使した後は、非常に機嫌が悪くなるのだ。

崩れ落ちる馬鹿を足蹴にすると、私とマタリはギルドを後にした。

はあ、本当に疲れたわ。

「……お前、口説くにしても相手を見たほうが良いぞ。

どう見ても、一筋縄で行く相手じゃないだろうが」

ロブが倒れこんでいるエクセルに声を掛ける。

勿論、呆れ顔でだ。

「き、効いたあ。でも、そんな激しいところもタイプだなあ。僕のパーティに入ってくれないかなあ」

頬を押さえながら、ブツブツ独り言を呟くエクセル。その根性だけは認めるが、鼻からは血が流れている。

「……駄目だこりゃ」

「それにしても、この街に温泉があつたなんてね。

おかげで気分爽快、リフレッシュできたわ」

ルイーダの酒場への帰り道。

実はギルドを訪れたあとに、マタリの案内で大浴場に寄り道したのだ。

それがまた、実に素晴らしい湯加減。

身体をホカホカさせながら、私は満面の笑みを浮かべる。

人もそんなに多くはなく、実に快適に過ごすことが出来たのだ。

血の臭いやら、腐臭やらがすっかり取れて、全身ピカピカである。

「はい、アートの街はもともと温泉で有名だったそうですよ。」

魔物が出現する前は、観光地だったんですから。だから温泉が今でも残っているんです」

「そっかそっか。とにかくまた来るとしましょう。」

あー、これで気分良く寝れそうだわ」

「喜んでもらえて良かったです！」

さっきまでのアレルさん、なんだか元気がなさそうでしたから」

「もうすっかり元気よ。ありがとうね、マタリ」

素直に感謝しておく。

マタリは見慣れないものを見たかのような、妙な顔をしている。私の顔に何かについているのだろうか。

「い、いえ。こちらこそ」

「何それ。意味が分からないわ」

「いえ！ 本当に何でもありません。」

そ、そういえば、話は変わるんですけど」

慌てて話を誤魔化そうとするマタリ。

特に追求するつもりもないので、それに乗ってやることにした。

「うん？ 何よ」

「アレルさん、宿に戻ると必ず本を読んでいるじゃないですか。あれは一体、何を読んでいるんですか？」

「ああ、あれ。私のお気に入りの物語なのよ。あれを読むと、心が落ち着くよね。寝る前に読むのが習慣ってわけ」

「そうだったんですか。」

「一体どんなお話なんです？」

興味津々といった感じで、目を輝かせている。ありふれた良くある話なのだが。

「孤独な英雄のお話よ。」

仲間から見捨てられ、頼るものもない英雄のね。それが己の力のみで、遂には魔王を打ち倒すの。その生き様を描いた物語よ」

「中々面白そうなお話ですね。」

私、ハッピーエンドが大好きなんですよ。

その英雄も、最後には幸せになるんですよね？」

「最後？ この話の最後は魔王を倒す所までよ。」

その後には物語は続かない。

魔王を倒した後の英雄の話なんて、誰も興味を持たないわ」

ハッピーエンド？

そんなものあるわけがない。

後に残るのは、都合の良い伝説だけだ。

「そ、そうでしょうか。私は気になりますけど。」

苦労した分、幸せになって欲しいじゃないですか」

「魔王を討ち取ることだけが、英雄の存在価値なのよ。それを果たしたら、英雄の役割はお終い。生きてようが、死んでようがどうでも良い。むしろ、いない方が都合が良いのよ」

そこまで話終え、私はマタリに笑いかけようとする。上手くできただろうか。

「ア、アレルさん……」

「何よ、変な顔しちゃって。

さあ、とっとと宿に戻りましょう。

なんだかとっても眠くなってきたから」

再び私は歩き出す。

「……は、はい」

なんだか静かになってしまったマタリを引き連れ、

私は宿の自室へと帰還する。

さっさと布団に飛び込もうと、勢い良くドアを開けた。

私はドアを開いたまま、思わず硬直する。

「はい。お帰りなさい。また随分と遅かったのね。あまりに暇すぎて、自分のベッド用意しちゃったわよ。次はもう少し広い部屋にしてほしいわねえ」

二個であつたはずのベッド。

それらは端に押し付けられ、中央にセンスの悪いピンクのベッドが自己主張している。

やたらとピンク。ピンクピンクピンク。いわゆるピンキー。目が痛くなり、思わず付け根を押さえる。

「……………」

「？ どうしたんですか、アレルさん。早く入りましょうよ」

中の状況は、私が邪魔してマタリには見えていない。

「私、自分のベッドと枕じゃないと寝れないのよ。繊細だから仕方ないんだけど。」

ああ、それにしてもセンスの悪い部屋ね」

「……………失礼しました」

「ちよ、ちよっ」

そつとドアを閉めると、私は今の光景を見なかったことにした。例えそれが現実逃避だとしても、誰も私を責めることは出来ない。ドアを背に思わず座り込んでしまう。

中からは、何か文句を言っているような騒ぎ声がする。
マタリが心配そうに私の身体を押さえている。
突如として世界が暗転すると、私の意識はそこで途絶えた。

どうやらピンクのせいだ、最後の精神力が尽きたようだ。

・アレルの所持している本
服とお金の入った見知らぬ袋の中に、何故か一緒に入っていた。
アレルの話によると、『孤独な英雄の冒険譚』とのことである。
表紙には何も記されていない。所々に茶色い染みがある。

第十三話 勇者とカンダタ

「エレナ様。内偵を進めていた魔術師、ラス・ヌベスが冒険者により討ち取られました。」

対象死亡により、再び異端探索任務に復帰します」

「ご苦労様でした。我々が武力を用いることなく済んだことは不幸中の幸いです。」

時間を掛けすぎたせいで、数多くの悲劇を招いてしまいました。今はただ、犠牲者の為に祈ることにしましょう」

目を瞑り、天を仰ぐ豪華な赤いローブを纏った若い女。

跪いたまま、その姿を眩しそうに見上げる男達。

彼らの目には狂信的な光が宿っている。

迷宮内で起こった事については、教団は一切不干涉を貫いている。

だが、ラスは街でも誘拐を行っているという疑いがあつたのだ。

それは事実であり、ラスの自宅には多くの一般人と思われる死体が散乱していた。

全ての証拠を揃え、いよいよ異端として始末する直前。

ラスは1人の冒険者の手により討ち取られたのだ。

「確固たる証拠がなければ決して武力を用いない。」

エレナ様のお考えには、ただただ感服するばかり」

「貴方達には歯痒い思いをさせて申し訳ありません。」

謂れない非難を受けることもあるでしょう」

「そのようなこと。全く気になさる必要は御座いません」

「我々はただ貴方に従うのみ」

「エレナ様の為に生き、エレナ様の為に死ぬ。それこそが我らの望みです」

頭を垂れると、各々の信仰を表す。

彼らにとっての信仰対象は、教団の教えではなくエレナそのものなのだ。

教祖の命令こそが至上命令。それが異端審問官達である。

善悪を判断することは彼らはしない。

信徒の中でも独自の宗教観を持つ者達。

教団創設当初から、教祖だけの忠実な手駒として存在してきた。

教祖に逆らう『異端』を始末することが彼らの主な任務だ。

「……貴方達のお気持ち、心より感謝します。

ですが、決して無理をしないように」

「ありがたきお言葉ですが、ご心配には及びません。

我々異端審問官は、貴方の矛となることが至上の喜びなのですから」

「……貴方達に、星の導きがあらんことを」

「お、おお。あ、ありがたき幸せにございます」

「お、畏れ多いことです。エレナ様から祝福を頂けるとは」

「一層の忠誠と信仰を、エレナ様に捧げることが誓います」

エレナが手を翳し祝詞を口ずさむと、彼らの心は至福に包まれる。

暫くして男達はゆっくりと立ち上がった。

最敬礼すると三ツ星が描かれたマントを翻し、重装鎧に身を包んだ男は部屋を後にする。

彼は異端審問官の1人であり、職業は僧侶である。

得物はモーニングスターであり、癒しの魔法を操る強者でもある。何人もの異端を、その鉄球により粉碎してきた。

それに続いて、メイスを装備した教団兵が退出する。

星明かりが差し込む荘厳な部屋には、ただ教祖だけが残された。

アートの街に存在するスリースター教団本部。

初めて訪れた者は、その巨大さに目を奪われるだろう。

星に少しでも近づけるようと、高く高く作り上げた『星塔』。

完成したのは、今から百年ほど前である。

細部にまで施された美麗な装飾は、著名な芸術家が魂を籠めて作り上げたものである。

塔建築の際に掛かった費用は、天文学的なものであった。

それを捻出出来るまで、教団の力は肥大化しているということだ。

スリースター教団は、約300年ほど前に突如として現れた新興宗教であった。

率いていたのは赤い衣に身を包んだ、素性不明の壮年の男。

緑のローブを纏った者達を付き従え、街の一角で怪しい儀式を行う。魔術師風の外見ということもあり、周りからは邪教の集団と見なされた。

街の人々は彼らを忌み嫌い、彼らもまた人々とは関わろうとはしなかった。

とはいえ特に衝突を起こすことはなく、お互いに干渉しないまま数年が経過する。

だが、街の中央に『地下迷宮』が突如として現われ、魔物が地上に多数湧き出してくると状況は一変する。

逃げ惑う人々を尻目に、彼らは自らの居場所を守るために戦ったの

だ。

絶望的な数を相手に、見知らぬ魔術を駆使して奮戦する魔術師達。例え力尽きても『蘇生』の奇跡により何度も蘇り戦線に復帰する。巨大な石像を使役して強大な魔物と互角に渡り合う。

そして溜めの必要ない攻撃魔法により、魔物の大軍を水際で食止めた。

その奮戦振りは、アートの伝説として数多くの書物に残されている。彼らが用いた魔法は、『ロストスペル』としてただその名を残した。他の魔術師が教えを請い身に着けようとしたが、誰も使うことは出来なかったからだ。

やがてG・アートが結界の構築に成功すると、魔術師達は街の住人から英雄として遇される。

防衛戦での功績により教団開設の許可を得ると、彼らは徐々にその教えを広めていく。

英雄達の教えということもあり、教団は爆発的にその信徒数を増やしていった。

今では大陸全土に広がり、他宗派を殆ど呑み込んだのである。

アートの星塔は大陸に散らばる支部を束ねる本拠地であり、『教祖』のお膝元である。

塔の最上階にて、教祖はただ只管祈りを捧げるのだ。

星の導きにより、弱き人々の心が救われますように、と。

女の身ながら教祖の座につく『エレナ・アーク』は、日夜祈り続けていた。

教祖の座は、教団を創設した『赤き衣』の血を引く者がその地位に就くと決められている。

そして教団幹部には、当時付き従った『緑の衣』の子孫達。

その人数は当初12人であったが、3年前の肅清により現在は6名となっている。

經典に疑問を呈した現教祖が、大部分を改訂することを表明すると、教団でも過激な思考を持つ者達が猛反発したのだ。

教団幹部も、その半数が反対意見を表明し、エレナに対し改訂の撤回を強く求めた。

彼らは古参の幹部であり、教団の実質的な運営を担っている実力者達であった。

この時点ではエレナはただのお飾りに過ぎなかった。

經典は創設者である『赤き衣』が書き残した、教えの中で最も尊いものである。

それを改竄するなどという恐るべき背教行為は、たとえ教祖であっても許されない。

可及的速やかに指示を撤回し、愚かな改竄作業を取り止めなければならぬ、と。

幹部達の反発は徐々に苛烈さを増し、やがては『直ちに教祖を廃すべし』とまで公言するようになる。

交渉と調整を重ね、エレナは説得しようとするがそれは徒労に終わる。

逆に彼らは教団から独立の動きを見せ、最後にはエレナに対し刺客を送り込む始末。

命を狙われた回数は、両手では足りない程である。

魔術の心得があるエレナは、その全てを返り討ちにしたが、それでも手傷は負わされていた。

これ以上の交渉は無駄であると判断したエレナは、苦渋の末一つの決断を下した。

彼女に絶対的忠誠を貫く異端審問官達を集め、こう厳命したのだ。

『教祖に背く異端を悉く滅すべし』

彼女が忌み嫌う武力による意見の統制。そして武力の行使。

だが最早これしか手段は残されていなかった。

過激派は独立の準備を整え、製作中の『闇の衣』も彼らの手中にある。

時間は残されていない。

どんな手段を用いても、その完成は阻止しなければならないのだから。

彼女が改訂しようとした経典には、

『魔素を集め、闇の衣を完成させるべし。さすれば星神は舞い降りる。』

偉大な神の導きにより、人々には大いなる救いが訪れる』とあった。創設者達は迷宮で倒した魔物から、『魔素』を抽出できることを発見した。

それを集め、闇の衣を完成させることこそが、教団の存在意義であったのだ。

報酬を出すことで冒険者達に迷宮に挑ませ、ギルドを通して魔素を掻き集める。

協会を設立し冒険者を完全に管理することで、魔素の流出を出来る限り抑えようとした。

その為の制度を立案、整備したのも、創設者である『赤き衣』だ。魔術だけではなく、組織運営においてもその手腕を発揮したのだ。やがてアートの一族から街の支配権を奪い取ると、巨大な外壁を築き始める。

存在する筈のない外敵から身を守るかのように。

エレナも当初は経典に疑問を抱くことはなかった。

当時の教祖である父親から、幼少時より教えを叩き込まれ、それが当たり前だと思っていた。

自分もやがては教えを遵守し、人々に救いをもたらすのだと、そう信じきっていた。

4年前に父が急死し、エレナは若くして経典の教え通りに教祖の座を継ぐこととなる。

まだまだ若輩の身で重役を担うことに、大きな責任と共に強い意欲も感じていた。

自分が闇の衣を完成させ、偉大な神を招き、必ず人々に救いを与えるのだと。

そして胸を高鳴らせ、門外不出とされる『闇の衣』を初めて目にしたその時。

衣から放たれるあまりの禍々しさに、エレナは心の底から戦慄した。『これは神を喚びよせる物などではない。むしろその逆である』と。

エレナが教団の教えに疑問を持ち始めたのは、これが最初だった。

教祖の後継者達は、親の手により長い年月を掛けた徹底的な洗脳が施され、

決して疑問を持つことがないように教育される。

エレナが闇の衣に恐れを抱き、経典に疑問を感じることが出来たのは、

父親の急死という偶然の賜物である。

一度疑念を感じると、経典の至る所に妙な点があることに気付く。闇の存在をやたらと強調し、それを受け入れさせようとする文言が多いのだ。

エレナの疑問は、経典だけではなく教団そのものにも向くようにな

る。

そもそも、教団の存在目的が『魔素の抽出、管理』の為ではないのかと。

全ては、闇の衣完成の為だけに用意された組織なのではないかと。

エレナは全てを知る為に、ある場所へと向かった。

教祖だけが入ることを許される場所。それが星枢の間だ。

信仰心篤い古参幹部からは、今はまだ決して近づかないようにと釘を刺されていた場所。

嚴重に封鎖され、『赤き衣』の一族しか入れない結界が張られている。

室内には、何かを召喚する為のような魔方陣と怪しげな装飾が施されていた。

中央には巨大な玉座が用意され、理解できない呪文が魔方陣と共に描かれる。

赤い宝玉が周りを囲み、ぼんやりと光を放っている。

傍らの机には歴代教祖の日記が残されており、エレナは震える手でそれを手に取る。

数時間掛け、全ての日記を読み終えたエレナは真実を知り、心から絶望することになる。

身体の力は抜け落ち、目からは止まることのない涙が溢れ続けた。

真実を知ったエレナは、苦悩の日々を送る。

歴代の教祖は真実を知りながら加担してきたのかと。

自分はこれからどうするべきなのだろうかと。

悩みに悩みぬいた後、少しずつだが体制を変えていくことを決意する。

これは創設者の意に背く異端行為なのは間違いない。

だが、このまま見過ごすこともエレナには出来なかった。

本来ならば、このような邪教は直ちに解散するべきである。だが肥大化した今、解散などしては多大な混乱を招くことは必至である。

教団の権力は大陸中にまで広がってしまっているのだから。ならば、真実は自分の胸にしまい、教団を徐々に正常化させていくのだ。

正しい教えにより、人々に救いを広めるのは間違いではない。例え、信じるべき『神』が存在などしていなくても。教えの全てが、ただのお題目に過ぎなかつたとしても。それを知っているのは、教祖である自分だけなのだから。

過激派との対立が頂点にまで達すると、エレナは苛烈な粛清を開始する。

強硬に反対する古参幹部6名とその手勢を、『異端』として教団から破門。

同時に異端殲滅の命を下すと、中立を表明していた治安維持隊を説得。

彼らを指揮下に置き、異端審問官と共に出撃させる。

日頃己の『武』のみを探求する治安維持隊、教祖のみが絶対である異端審問官。

穏健派と目されていた教祖の奇襲により、過激派は統制が全く取れないまま戦闘へと突入する。

たかが小娘と、古参幹部達は油断しきっていたのだ。

それが致命的なミスだと思ひ知るのは、この数時間後である。

狂信者対狂信者の戦闘は苛烈を極め、血で血を洗う抗争となる。

戦闘は星塔内部と教団本拠敷地で繰り広げられ、至る所が赤く染められることになった。

一般信徒をも巻き込み、多大な犠牲を出す結果となるが、戦況は教祖派が常に優勢に進める。

過激派も頑強に抵抗したが、やがては各個撃破されその屍を曝していく。

教祖派は、『緑の衣』の血を引く古参幹部を5人まで討ち取るが、最後の1人を取り逃してしまふ。

幹部は8割方完成している闇の衣と僅かな手勢を率い、『地下迷宮』へと落ち延びていった。

数年経つてもその行方は知れず、迷宮の何処かで闇の衣の完成を目指していると思われる。

街に逃れた過激派残党に対しては徹底的な捜査を行い、その全てを異端として処分した。

この事が『名前だけの能無し』と陰口を叩かれていた、異端審問官と治安維持隊の評価を塗り替える結果となる。

滅多に動くことはないが、一度動き出したら多大な血が流れ落ちると。

この一連の粛清は教団過激派の壊滅により幕を閉じる。

皮肉な事に、エレナに対する崇拜と畏怖はより高まる結果となった。

現在でも魔素は教団が回収しているが、エレナの意向により魔道具の作成に使用している。

それは強力な効果をもたらし、冒険者の能力向上を飛躍的にもたらしした。

装備品にのみ力を入れているが、いずれは生活レベルの向上に役立てたいと考えている。

今までは敢えて放置されていた『スラム地区』の復興も、現在の課題の一つである。

しかしながら、今最も優先すべきことはただ一つ。

闇の衣の回収、及び完全に破壊することだ。

教団からの依頼の最上級の物として、『迷宮に逃げ込んだ異端の抹殺』がある。

依頼を達成した者には、莫大なる報酬を与えることも記載されている。

（一刻も早く見つけ出し、完全に殲滅しなければならない。あれは絶対に完成させてはならないのだから）

エレナは軽く溜息を吐くと、再び天に輝く星へと祈りを捧げた。

朝食は何があるかと欠かさず取る。私のモットーである。腹が減っては冒険は出来ないのだから。

「ああ、パンが美味しいわ。

こっちのスープも絶品ね。これはかぼちゃかしら」

私はパンを喰りながら、スープを口へと運ぶ。

滑らかな味わいが広がり、私は至福に包まれた。

「あ、あのう……」

「こっちの果物も最高ね。」

「やっぱり食べているときが一番幸せよ」

マタリが何か言いたそうな顔をしている。

その隣ではピンクキーがニヤニヤとした表情を浮かべている。

「ふふ、そうやってると小動物みたいねえ。」

ほら、この種をあげましょう。美味しいわよお」

こちらに植物の種を差し出してきやがった。

それをバリボリと噛み砕くと、私は薄皮を吐き捨てる。

「……アンタ、まだいたの。」

とっとと自分の家に帰りなさいよ」

「仲間に冷たいと、そのうち酷い目に会うわよ。」

ねえ、マタリちゃん」

「え、ええと。は、はいそうですね」

「ほら、マタリちゃんもこう言ってるわよ」

ジト目でマタリを睨むと、明後日の方向を向いた。

後で頬を抓るとしよう。

「なんで私の仲間になるのよ。意味が分からないわ。」

アンタには死体のお仲間がいるじゃない。

勝手に仲良くやってなさいよ。別の場所だね。」

目に付くと食欲が失せるから」

「あらあら。つれないわねえ。

魔術師はどこでも引く手あまたなのよ。

それを無下にするなんて信じられないわ」

口に手を当てて驚きの表情を浮かべている。

一々動作が芝居がかっていてうっとおしい。

「だって、アンタピンクだし。

目が痛いよ。それにベッドまでピンク。

夢の中までピンク尽くしだったわよ」

私が気を失った後。

ピンクの悪夢が私を蝕んだ。

最後には私までピンクの衣装を着せられていた。

ピンクの勇者。

全く意味が分からない。

「ピンクの何が悪いのかしら。

明るくて優しい色使いでしょう。

どうしてこのセンスが分からないのかしら」

誇らしげに自分のローブを見せ付けてくるエーデル。

分からないし、分かりたくもない。

私はもう少し落ち着いたら色が好きだからだ。

「……はあもう良い。分かったわよ。

私のポリシーは来るもの拒まず、去るもの追わずだからね。

マタリが良いって言ったらパーティーに加えるわ」

全部マタリに丸投げした。
どうせ何を言っても着いて来るだろう。
この類は、そういう奴が多い。

「え、ええと。魔術師の方に来てもらえれば心強いです。
どうかよろしくお願いします!」

即断するマタリ。決断が早い女である。
そこはもう少し悩んで欲しかった。

「素直で良いわねえ。どっかの捻くれ者と大違いよ。
それじゃあこれから宜しくね」

「はい、ピンキーさん!
って、い、痛いです!」

笑顔でピンキーと叫ぶマタリ。
その頬を笑いながら抓るピンキー。

「私はピンキーじゃないのよ?
エーデル・ワイス。私を呼ぶときはエーデルでお願いね」

顔は笑っているが、目が笑っていない。
流星は年の功といったところだろうか。
余計なことを考えているのがバレたのか、こちらも睨みつけてくる。
私は目を逸らした。

「ひゃ、ひゃい!」

涙目になりながら頬を押さえているマタリ。

「で、結局何が目的なの？ ただの暇つぶし？」

私は直球で尋ねる。

「んー。そうねえ。それもあるけれど。

貴方の使った魔法に興味があるのよ。

私達が使う魔法とは明らかに違うからね」

「後は？」

「貴方が死んだら、是非死体を回収したいと思って。

有意義に使わせてもらうから心配はいらないわ。

新鮮な死体を回収するには、常に近くに居る方が良いでしょう？」

ふざけたことを、いけしゃあしゃあと言いやがった。

怒鳴ってやろうと思ったが、アホらしいので止めておく。

代わりにピンクキーの皿から、果物を頂いてやった。

「そうなんだ。じゃあこれは頂くわね。

食べ残したらもったいないものね」

「ちょ、ちよつとー！！

私が最後に食べようと残しておいたのにー！！」

「うるさいわね。さっさと食べないのが悪いのよ。

ばーかばーか！」

舌を出して挑発してやった。

「二、この糞餓鬼！！」

ピンキーがこちらに掴みかかってこようとしたので華麗に回避する。その瞬間、酒場の入り口から馬鹿でかい怒鳴り声が響いてきた。周りの客も何事かと一斉に入り口を注目する。

「おう！！ レンジャーギルドサブマスター様がいらっしやっただぞ！！」

屑共、頭が高いぞ、控えろっ！！」

「大斧のカンダタ様だぞ！！」

「ここにアレルとかいう糞餓鬼はいるか！？」

威勢の良い声で威張り散らしている。

その背後には、巨体が控えているが、妙にオドオドしている。というか、今私の名前を呼ばなかっただろうか。しかも糞餓鬼とか言っていたような。

「お、おい。お前ら少し静かにしろ。

あとアレルさんは俺が世話になった恩人だ。

あ、あまり失礼なことは言わないように」

巨体の言うことが耳に入っていないのか、威張り散らした手下達が席を周り始める。

どうやら、『アレル』という人物を探しているようだ。

多分私のことだろう。

「お前がアレルか!？」

「ち、ちがいます。私じゃないです」

因縁をつけられた若者が、慌てて否定する。

「紛らわしい顔してんじゃねえ!」

「そ、そんな……」

「ああ!?　なんか文句あるのか!」

各所でそのようなやりとりが起こり、やがて私達の席までやってくる。

目つきの悪い手下が、マタリ、エーデル、私と視線を送る。

「お前らの中に、アレルはいるか?」

「え、ええと……」

「そこにいるわよ」

言葉を濁すマタリに対し、ピンキーが楽しそうにこちらを指差した。人の不幸は蜜の味とも言わんばかりのしたり顔だ。

文句を付ける前に、盗賊風の馬鹿がこちらに近づいてきた。

「てめえがアレルか!

頭がお呼びだ、大人しくついてきやがれ!」

「嫌よ。面倒くさい」

「ああ！？ てめえ、頭をバカにしてんのか！
ちよつとアレだけど、そこそこに立派な人なんだぞ！」

微妙に馬鹿にしているような台詞である。

「うるさいから静かにしてくれろ？」

用事があるなら、その頭をここに連れてきなさいよ」

「てめえ頭を馬鹿にしゃがって！」

掴みかかってきた腕を座ったまま避ける。

そして軽くその馬鹿面を『撫でて』やった。

「フゲえッ！！」

その場に崩れ落ちる馬鹿。

足で踏み潰して、完全に気絶させることに成功した。

それを見た残りの手下がいきり立ってこちらにやってくる。

巨体の男はそれを引きとめようと、全力で駆け出した。

「て、てめえ！ 何しやる！」

「レンジャーギルドを舐めやがったな！？」

「やめねえかてめえら！！ いいから引っ込んでろ！」

大男が一喝すると、手下達は慌てて直立不動の姿勢を取る。

「で、でも頭」

「うるせえ！ 誰が大暴れしろって言った！
そいつを連れて、ギルドに戻ってる！」

「へ、へい……頭がそう言うなら」

「お、おい大丈夫か？」

「へへ、花畑が見えやがるぜ」

手下達は指示を受けると、気絶している男を連れて酒場から出て行った。

「……何なの一体」

「さあ。貴方に用があるみたいだけど。
人気者は大変ねえ」

「レンジャーギルドのサブマスターだそうですよ。
凄い人なんですね」

あんな巨体でレンジャーなど務まるのだろうか。
素早さで翻弄するというイメージがある。
どちらかというと、脳筋戦士といったほうがピンとくる。

頭を掻きながら、大男がこちらに近寄ってくる。
妙にオドオドしていて、実に様になっていない。

「あ、アレルさん。お、お久しぶりです！」

「……アンタ誰？」

どうやら私の事を知っているらしいが、私はまるで見覚えがない。こんな髭もじやの大男、私は全く知らない。

「カ、カンダタですよ！ ほ、ほら、ロマリアで王冠を盗んだ！」

「……ロマリアのカンダタ、カンダタ。カンダタ？
うーん、誰だっけそれ。ごめんやっぱ知らないわ」

手をヒラヒラと振って追い返す仕草を取る。

どうでも良い事はすぐに忘れることにしているのだ。

深く刻み込むのは、大事な情報だけである。

「お、おい！ それはあんまりだろう！

お前に何度痛い目に遭わされたことか！！

それを覚えてねえとはどういうこった！！」

大男が激昂してテーブルを叩く。

衝撃でグラスがひっくり返ってしまった。

中身が零れる。ちなみに私のだ。

「……良く分からないけど、もう一度痛い目に遭いたいみたいね。
食後の運動に丁度良いかしら」

私が鋭く睨みつけると、ハハハと誤魔化すように笑いを上げた。

「い、いやだなあ。ただの冗談ですよハハハ。

あ、零れた飲み物は頼みなおしておきますんで。

そ、それより思い出していただけませんか？

ほら、ラダトームでも牢屋でお会いしたじゃないですか！」

カンドタ、王冠、ラダトーム、牢屋。
うん？ そういえばそんな馬鹿もいた気がする。
覆面パンツの変態男。

「ああ！ あの覆面パンツの変態男か！
アンタ、まだ生きてたんだ。本当しぶといわねえ。
あのイカれた服装は止めたんだ」

私の言葉を聞いたマタリとピンキーが、カンドタをゴミを見るよう
な目で見つめる。

カンドタは慌てて手を振ると、全力で否定した。

「ひ、人聞きの悪いことを言うな！ い、いえ言わないで下さい。
ほら、今はこうして立派に更生したんですから。ハハ」

それにしても気持ちの悪い言葉遣いである。
だんだんイラついてきた。

「なんか、アンタの話し方気持ち悪いわ。
普段どおりに話さないよ。殴ったりしないから
その言葉遣い聞くと、鳥肌が立つのよね」

「き、気持ち悪いだど！
い、いや。なんでもねえ。そ、それじゃ普段通りに話させてもらおう。
……が、途中で怒ったりするのはナシだぞ。
絶対に殴るなよ？ 約束だぞ」

隣から椅子を持ってくると、私達のテーブルに寄せてくるカンドタ。
妙にビビっている。サブマスターの癖に情けない奴だ。

「……で、なんでアンタがこの世界にいるわけ？」

「それはこつちの台詞だ。お前がここにいるなんて聞いてねえぞ」

見知らぬ世界、私はここに落とされた。

そこに前の世界のカンダタがいるのは理屈に合わない。

「……私は色々あったのよ。アンタは？」

「俺か？ 大魔王倒された後、俺は恩赦で牢屋から出れたんだ。色々と考えて、また上の世界に戻ろうと思ってよ。」

あそこには子分達もいたからな。下の世界も悪くはなかったが」

「それで？」

「異世界に渡れるって噂の、寂れた『たびのほくら』に飛び込んだのさ。」

入ったものは二度と戻ってこないと評判のそれにな。

そうしたら見事にこの世界へ落つことされたって訳だ。

俺が来たのは数年前だな」

たびのほくらか。なるほど。

あれの原理は良く分からないし、変な世界に飛ばされることもあるのだろうか。

場所だけでなく、時の流れも歪めるとは恐ろしい装置だ。

よくよく考えると、危険なものである。

なんかクネクネ身体が歪むし。

「そりゃまあ大変だったわね」

「それから色々あって、レンジャーギルドに所属したのさ。そこそこに活躍を認められてな。出世もできた。今では所帯も持って、子供もいる。俺はここでようやく生まれ変わったのさ」

しみじみと語るカンダタ。妙に達観した表情である。家庭を持つと、人は変わるのだろうか。

「アンタみたいなのが親だなんて。驚いたわ」

「ふん、俺はお前がここにいる方が驚きだぜ。世間では、お前は死んだことになってたからな」

先程からマタリとエーデルは黙って私達の話に聞き入っている。マタリは良く分からないといった表情で。エーデルは、一句とて聞き逃すまいと真剣である。

「フフ、やっぱりか。どんな風に伝わってるの？」

「……大魔王とたった一人で戦った勇敢な勇者アレル。見事に討ち果たすが、彼女もまた力尽きた。そこにはアレルの装備だけが残され、彼女の亡骸は天に召された。彼女の功績は、未来永劫語り継がれるであろう。つてな具合だな」

「……そう、聞かせてくれてありがとう」

「ね、ねえ。大魔王って何よ。一体何の話をしてるの？ 私に詳しく教えて頂戴よ」

ついに耐え切れなくなったエーデルが、疑問を投げつけてくる。私はそれに軽く微笑む。

「ただの御伽噺よ。ねえ？」

「……ああ、そうだな。そうに違いねえ」

カンダタが腕組みをして答える。

「まあ良いわ。それで結局何の用だったの？」

私は誤魔化すように話を変える。

「賞金首サルバドを討ち取ったのが、アレルって名前の奴らしいって聞いてな。」

聞き覚えのある名に、居ても立ってもいられなくなって来たって訳さ。

そしたら見事にご本人様で、驚きの余り腰が抜けそうだけぞ」

「そう、それじゃあご満足いただけたみたいね」

「ああ、そりゃ大満足だ。また勇者様のお顔を見れたからな。ご利益があると良いんだが」

ニヤリと微笑むカンダタ。実に様になっている。

覆面パンツの変態男も立派になったものだ。

「……一つ聞くんだけど。この世界って一体なんなの？」

私が敢えて考えないようにしていたこと。
最初は天国かと思った。もしくは地獄。

元いた世界とはまるっきり違うのに、言葉は通じるし、文字は読める。

だけど魔法体系は違うし、通貨も違う。

「さあな。俺が聞きたいくらいだ。

だが、前の世界と、下の世界みたいなもんじゃねえか？
全く無関係とは言えないと思うぜ」

「……なんでそう思うの？」

「そのうち分かる。迷宮の下層部入り口に当たる100階まで行ってみな。

面白いもんがあるぜ。お前も見たことがあるはずだ。
それに、この大陸に伝わる伝説の装備。

アレは一見の価値があるぜ」

一体何だろうか。全然想像がつかない。

気になるけど、カンダタの様子からすると、自分の目で確かめると
いうことだろう。

「これからの楽しみみて奴ね。一応覚えておくわ」

「それとこれは忠告だが、あまり迷宮に深入りしない方が良い。
俺の予想だが、あそこには終わりはないと思う」

「そりゃまた大胆な予想ね。その根拠は？」

「勘だな。あそこは異世界からの漂着場なんじゃないかと思う。」

だから珍しいものが落ちてるし、妙な化け物もウロウロしてるんだな
どこまで行っても、終わりなんかありゃしないぜ。
所謂底なし沼だと俺は予想してるんだ」

「なるほどねえ」

漂着場、漂着場か。なら私がそこに落ちてきた可能性もあるわけだ。
魔物として。想像するとちょっと面白い。

「……と、長話をし過ぎたな。今日はこころへんで失礼するぜ。
俺にも一応仕事ってやつがあるからな。

もし、レンジャーギルドに鞍替えしたかったらいつでも歓迎するぞ。
お前の腕だったら、さぞかし良いレンジャーになれるだろうからな」

「まあ、考えておくわ。

色々教えてくれてありがとう。助かったわ」

「なあに、良いつてことさ。一応は同郷ってことになるんだろっし
な。

それじゃあまたな」

カンダタは巨体を揺らして、去っていく。

私はそれをなんとはなしに見つめ続けた。

マタリが何かを言いたそうな表情でこちらを見ている。

エーデルも同じだ。

「……私の顔に何かついてる？」

私はすつとぼけて尋ねる。

「あ、あの。さっきの人が言っただことは本当なんですか？
だから、アレルさんは自分の事を勇者だって」

「……どうなのかしら。ただの妄言かも知れないわよ」

「レンジャーギルドのサブマスターが、態々冗談を言いに来て来たりしないわよ。
貴方、まさか本当に？ それならその有り得ない強さも説明できるもの」

エーデルが疑わしそうな表情で私を見る。
中々勘が良い女だ。

「……勇者にも色々あるのよ。
マタリには前にも言ったでしょう？
魔王を倒したら、そこで物語は終わりだって。
後の事なんて、どうでも良いのよ」

「あ、アレルさん……」

「……………」

それにしても、本当に死んだことにされていたとは。
しかも相打ちで、その後は天に召されただって。
実に笑わせる。きつと私のことは都合の良い伝説として語り継がれていくのだろう。

あのイカれた鎧が、伝説の装備になることを想像すると、少しだけ面白い。

後の勇者候補は、きつとドン引きするだろうな。

黙り込む二人に、私は軽く微笑んだ。
何故か分からないが、私の視界は滲んでいた。

・赤き衣と、十二人の緑の衣

異世界から流れ着いたと語る魔術師の集団。

地下迷宮出現前は、その容貌と怪しげな儀式から忌み嫌われていた。
迷宮出現後は、強力な魔法を駆使して魔物達と激戦を繰り広げる。
何度力尽きても『奇跡』により蘇生し、最後まで戦い続けた。

結界構築後、スリースター教団を創設する。

協会、ギルド制度を整備し、迷宮探索の礎を築いた。

『この世界にて我らの悲願を達成する。例え数百年掛かろうとも、必ず』

・教祖 エレナ・アーク

現在19歳のスリースター教団の若き教祖。

父の急死により、15歳で教祖の地位に就く事になる。

父親からは英才教育を叩き込まれ、魔術師として才能を開花させる。

教祖は必ず『赤き衣』を身に纏い、人々を導かなければならない。

3年前に大規模な粛清を行い、過激派を教団から一掃した。

教団の拡大路線を改めようとしている。

『私は何を信じれば良いのか。何に祈れば良いのだろうか』

第十三話 勇者とカンダタ（後書き）

次回も更新が遅れます。

ークマージさんは紫ローブじゃね？ と思いましたが、

語呂の都合から赤にしました。

赤紫に見えない事もないでしょうか。

第十四話 勇者は一人往く(前書き)

SFCドラクエ3のOPからです。

第十四話 勇者は一人往く

雨が城壁を打ち付ける音だけが、虚しく響き渡る玉座の間。

どんよりとした雨雲が月を覆い隠し、辺りを照らしているのはランプの灯りのみだ。

誰もが寝静まっている筈の夜更けに、何かを待つかのように佇む人々がいた。

王は何かを考え込むように玉座で目を閉じている。忠実な大臣はその傍らで書類に目を通している。

城へと呼び出されたオルテガの家族は、沈痛な面持ちで身を寄せ合っていた。

誰もが口を閉ざし、沈黙が部屋を覆う。

彼らは祈っているのだ。

もたらされた情報が誤報であったという報せを。

『勇者オルテガ、火山を指すという言葉を最後に、消息を絶つ。

巨大な怪物と戦闘後、共に火口へ落下したという目撃情報あり』

これを受け取った国王は、直ちに調査隊を組織し派遣した。

勇者オルテガの安否、もしくは情報を確認することを厳命して。

アリアハンだけではなく、最早世界の希望であるオルテガ。

希望が潰えたなどという噂が流れたら、民に動揺が走るのは必定。

その為、王は事実を一刻も早く確認しなければならないのだ。

それが残酷な結末であったとしても。

今日は派遣した調査隊が帰還する予定であった。
家族も知る権利があると考えた王は、この場へ呼び寄せたのだ。
例えどのような報せであっても、一番に知るべきなのは彼らだ。

やがて調査隊とその指揮官が、暗い表情を隠すことなく玉座の間へ
報告の為にやってくる。

兵士の顔を見た王は、即座にその内容を悟る。

最悪の結末であると。

だが、それでも聞かねばならない。それが王の役目なのだから。

「遅かったな。して、どうであったか？」

「はい陛下……。」

火山の頂上には、我々ではとても辿りつくことが出来ず、
オルテガ殿の安否を確認する事は出来ませんでした。

ただし、オルテガ殿が火口に落下するのを目撃したという者が多数
おりました。

……残念ですが、オルテガ殿の生存は絶望的かと思われます」

調査隊の指揮官が、兜を脱いで無念そうに報告する。

「……そうか。しかしオルテガほどの強者が倒れるとは。

いまだに信じることができない。いや、信じたくないものだ。

ご家族には何と詫びれば良いのか、言葉も見つからぬ」

王はオルテガの妻に向かい、軽く頭を下げた。

オルテガはアリアハンに仕えている訳ではない。

王の依頼に応えて、危険な旅へと出向くことを了承したのだ。

「……そのお言葉だけで十分でございます。」

私もオルテガの妻、覚悟は出来ておりました。
オルテガもこの世界の為に戦う事が出来て、きっと本望だったと思います」

オルテガの妻は、気丈な顔で王の言葉に答えた。

その手は、幼い娘の肩を強く握り締めている。

娘は父の死を理解しているのだろうか。

王はその顔を見つめるが、感情を読み取ることは出来なかった。

「しかし、実に惜しい男を亡くしたものだ。

最早、この世界に魔王に挑める者はおらぬ。

我々にはもう、希望はないのだろうか」

王は思わず溜息を漏らす。

英雄の死。これがもたらす効果は大きいだろう。

民達の不安は膨れ上がり、治安が更に悪化する。

野盗が我が物顔で跋扈し、人さらいが横行する今の世の中だ。

最後の希望が潰えたと知れば、誰もが絶望に苛まれ自暴自棄になりかねない。

それほどまでに魔物達の脅威は身近に迫っているのだ。

今必要なのは『英雄』なのだ。

例え虚像や幻想でも構わない。殆どの英雄譚はそういったものなのだから。

英雄がいないのであれば、誰かが作り上げるしかない。

徹底的な訓練と教育を幼少時より施し、その人格すらも矯正する。

いずれ人々の希望となり、弱き者を導いていく存在となるように。

それが『偉大な英雄の血を引く』者ならば尚更良い。

民達はその過酷な運命に同情を寄せ、自らを奮い立たせるのだ。

そう、例えば。

王は母親に抱きしめられている娘へと目を向ける。

先程とは違い、どことなく脅えたような顔をしている幼い娘。

国王、大臣、警護兵、調査隊、母親。

皆が視線を自分に向けていることに気付いてしまったのだろう。

『血』というのは本人がどうあがこうと、どうにもならない。

王が血の繋がりのみによって、その座にあるのと同様だ。

王位を継承する者を決定するのは、人間性や能力の優劣ではない。

『血』だ。

反発し、抗ったとしても決して逃れることが出来ない。

血とは運命と同意語なのだ。

王は、オルテガの娘を『英雄』として利用することを決意する。

一人の娘の人生を犠牲に、大多数の希望とするのだ。

例え恨まれ、この身が呪われようと。

それが王たる者の業であり宿命である。

「お、お母さん？」

声を震わせながら、母親へと声を掛ける娘。

それには答えず、母親は王に向かい強い口調で話しかけた。

亡き夫、自分自身、そして娘へと言い聞かせるかのように。

「……いいえ、陛下。」

この娘がいます。オルテガの血を受け継ぐアレルが。

夫の遺志は、きつとこの娘が継いで見せますわ！」

家の者が寝静まった頃、アレルの母は数年前の出来事を思い出していた。

オルテガが二度と戻らぬことを告げられた夜。

そして、アレルを『勇者』として育てることを決意した夜でもあった。

本人の意思を確認したことはない。

アレルも何も言わず、ただ自分の言うことに従った。

これから自分がどうなるかも、恐らく分かっていたのだろう。

城からは教育係として熟練の戦士、武闘家、僧侶、魔法使いが交代で派遣された。

朝から晩まで訓練した後は、座学が始まる。

冒険をする上で必要な知識を学ぶためだ。

魔物の情報、道具の使い方、冒険者としての基礎などが叩き込まれる。

時には野外に連れ出され、実地での訓練も行われた。

それと同時に、『英雄』に相応しい人間性を身につけることを強要される。

母は流石に反対したが、王の命令ということで従わざるをえなかった。

物静かで大人しく、どこか引つ込み思案であったアレルは、徐々にその性格を作りかえられていく。

どんな時でも最後まで挫けず諦めない。世界の平和の為に己を投げ

打つことが出来る勇敢な戦士。
人々を助けることを第一とする、英雄としての模範的な性格に。

「精霊ルビス様、どうか、どうかアレルをお守り下さい。
私達の世界を平和へとお導きください。」

そして、あの子が無事にこの家に戻ってくれますように「

母はただ祈りを捧げる。

城でのアレルの一件は、その場に居合わせた兵士から聞くことが出来た。

アレルの豹変。未だに信じることが出来ない。

だが、先日心底落ち込んだ様子で戻ってきた姿を思い出す。

あれが前兆だったのだ。

そして、『助けてほしい』という最後のメッセージだったのではないだろうか。

祈りを終え、母は顔を両手で覆う。

アレルの声無き悲鳴に気付くことが出来なかったこと。

そして、そこまで追い込んだことに対する自責の念。

オルテガの血を引くというだけで、娘を強制的に『勇者』としてしまった後悔。

テーブルで目を瞑ったまま苦悩する母親。

そこに二階から義父が降りてくる。

オルテガの実父であり、今なお壮健だ。

アレルも良く懐いていた好々爺である。

両目を拭い、挨拶しようとして義父を見上げると、手には一冊の本を持っている。

以前アレルに手渡していたそれと同じ装丁の本だ。

「……お義父さん、どうかなさったんですか？
こんな夜遅くに」

「い、いや。実はな。さつき書庫に本を戻しに行った時に気付いた
んじゃが」

そういつて抱えていた本をテーブルへと置く。
古びた表紙に、黄ばんだ紙の本。

「先日、アレルに渡していた本と同じ物ですか？」

「……違うんじゃ。渡そうと思っていたのは今持つてるこの本でな。
アレルに渡したのは、第二部の為の物なんじゃよ」

そう言つて義父がパラパラと本をめくると、文字でびっしりと埋め
尽くされている。

「と、ということとは？」

アレルが持っている本は。

「う、うむ。アレルに渡したのはただの空本。

何も書かれていない『白紙の本』なんじゃ。

本当に、悪いことをしたと思つてのう。

今度来たときにでもコレを渡しておいてくれんか」

日の出を横目で眺めながら、アレルはゆっくりと本を閉じた。祖父から貰った大事な本。アレルの心の支えとなるもの。丁寧に荷物袋の中にしまう。

そしてラーミアの背中を軽く撫でてやる。

その手触りは実に気持ちが良い。

「さ、いよいよ魔王の本拠地、バラモス城よ。どんな面してるのか楽しみね」

アレルの声に応える様に、高らかにその声を響かせるラーミア。まるで己を誇示するかのように翼を大きく広げている。それと同時に加速を始める。

「フフ、元気が良いわね。

私を降ろしたら、アンタは先にアリアハンに戻ってなさい。

派手にやるつもりだからね」

それには答えを返さない。

気難しい奴だから、邪魔者扱いが気に入らないのかもしれない。

上空でブラブラしてる分には、巻き込むこともないとアレルは判断した。

刃の鎧を身につけ、両手に稲妻の剣、雷神の剣を装備する。

予備に草薙の剣も所持しておく。いざというときに剣がないではお

話にならないからだ。

愛用の額当ては道具袋の中に大事にしまう。

頭部には使い捨てるつもり鉄兜を嫌々ながら被る。

熱い臭い重いと、あまり良いものではないのだ。

とはいえ、頭部への攻撃は致命傷を負いかねないので、乱戦になりそうな時は仕方なく身に着けるのだ。

「……見えてきたわね。あの岩山の中央のアレよ。

どうやら盛大な歓迎をしてくれるみたい。楽しみね」

アレルが前方を指差すと、岩山に囲まれた場所に築かれた城が見えてくる。

そして、飛竜と怪鳥が群れをなして上空に待機しているのも目視で確認した。

「強行突破するわ。私が魔法で薙ぎ払うから、正門辺りに急降下して頂戴。

そこからは私一人で行くわ。いいわね？」

攻撃的な奇声を発すると、ラーミアは上空の魔物達目掛けて突進を開始する。

アレルは背中から振り落とされないように立ち上がると、両手に構えた剣を前方へと振りかざした。

爆裂と閃光が魔物達の中央で巻き起こり、数十匹の魔物が墜落していく。

横から喰らいつこうとするスノードラゴンの首を、一太刀で叩き落とす。

ヘルコンドルがバシルーラを唱え、強引に吹き飛ばそうとしてくるがラーミアが咄嗟に回避する。そしてすれ違い様に怪鳥の翼を切り落とすと、返す刀で胴体を通す二つにする。

アレルは周囲の状況を窺い、指先に電撃を走らせる。

「雑魚どもがつ！ いい加減鬱陶しいのよ！！

墜ちなさいッ、ギガデイン！！」

『ギエエエエエエエ！！！』

周りから雷が迸る音と同時に、絶叫が響き渡る。

自身の持つ最強の呪文で、一気に半数近くを撃ち落とす。

魔王城からは、続々と応援の魔物が出現しているが、一瞬の間が出来る。

「さて、好機到来って奴ね。 あの辺りまで行って頂戴！！」

アレルが合図を送ると、ラーミアはバラモス城正門目掛けて急降下を始める。

正門には緑の衣を来た魔術師、様々な魔物の群れが地面を埋め尽くすように待機している。

アレルは舌なめずりをすると、降下に備えて体勢を低くした。

（相手も総力戦か。……全員皆殺しよ。一匹たりとも生かしておかないわ）

ラーミア目掛けて、地上から放たれる攻撃呪文の数々。それらを回避、あるいは呪文で相殺してアレルとラーミアは接近していく。そして軽く背中を叩いた後、アレルは勢い良く飛び降り、大地へと見事着地する。ラーミアはそれを見届けると、戦場を離脱する為に一直線に飛び始めた。

アレルが顔を上げると、圧倒的多数の魔物、邪教徒達が殺意を籠めて睨みつけてくる。それを鼻で笑うと、アレルは両手の剣を挑発するかのように一振りした。

「お待たせしたわね。それじゃ早速始めましょうか。誰も見逃さないわ。魔王軍の連中は皆殺しよ。

人間だろうと魔物だろうと関係ない。全員死ね」

凄絶な笑みを浮かべて、心から楽しそうにアレルは宣告する。それを受けて、軍勢の中から緑の衣を着た男が前へと進み出る。人間とは思えぬしゃがれた声で、アレルに告げる。

かつては高名な魔法使いであったが、魔に惹かれ墜ちた人間。その魔法の才能により、魔王軍でも高い地位についている男だ。

「……この城へは一步も入れさせぬ。下賤で卑しき者よ、己が分を弁えるが良い。

自らの愚かさをとくと噛み締めながら、その醜い屍を晒すのだ」

「言いたいことはそれで終わり？」

遺言になるんだから、後悔の残らないようにしなさい。
まあ、屑の戯言なんてすぐに忘れるけどね」

アレルがマントを翻す。

同時にリーダーらしき男が杖を振りかざし、魔物達に攻撃命令を下す。

その表情は、怒りの余り悪魔のような形相となっている。

「全軍攻撃開始。愚かな勇者を欠片一つ残さず消滅させよ。
その魂までも喰らいつくせ！！」

「魔王軍に栄光を！ 愚かな勇者に死を！」

「バラモス様万歳！ 我らに勝利を！」

「我らに血の祝福があらんことを！」

『愚かな勇者に死を！ 勇者アレルに死を！！』

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツッ！！』

エビルマージが次々に呪詛を吐く。

大地、上空の魔物達から空気を震わせる程の雄叫びが上がる。

地獄の騎士は刀を打ち鳴らし、動く石像はその巨体を震わせる。

ホロゴーストがその姿を掻き消しながら、アレルへと徐々に近寄り始める。

魔王の本拠地、バラモス城での戦いがいよいよ始まるうとしていた。

「アレルさん、今日はこれからギルドに行くんですか？
私達も職業認定試験を受けられるみたいですけど」

食事を終えた後、私達は一旦自室へと戻って寛いでいた。
お腹も一杯になったし、私はまた寝る気満々であったのだ。
美味しい食事と安らかな睡眠。幾らでも貪ることが出来る。

「今日は一日休息に当てましょう。たまには休みも必要なもの。
お金は賞金首倒したから心配要らないしね」

金貨が結構溜まっている。
もしかしたら小金持ちクラスまではランクが上がってしまったので
はないだろうか。
勿論私が独占したりはしない。ちゃんと配分しているし、パーティ
共有資金として取ってある。

「……私はまだ何にもしてないけどねえ」

不服そうなピンキー。確かに仲間になっていきなり休息ではアレだ

ろっ。

「何言ってるの。一緒に賞金首倒したじゃない。だからそれもカウントに入れておきなさい」

「……ま、それは良いんだけどね。」

貴方はどうしてまたベッドに潜り込んでいるのかしら。しかも寝巻きにいつの間にか着替えたりして」

こちらにジト目を送ってくるピンキー。

私は気付かないフリをした。

「ほ、本当だ。い、いつの間に着替えたんですか！しかもどうして寝る体勢に入ってるんです！」

真面目なマタリが怒鳴り声を上げている。

私は早速布団を頭から被り、更に聞こえないフリをした。だって眠いのだから仕方がない。

「良いじゃないの。寝る子は育つって言うわよ。」

私はまだまだ成長期だからね。と、いうわけでお休みなさい。アンタ達は適当にプラプラしてて良いから」

手を布団からヒラヒラと振ると、返事を待たずに芋虫になる。ゆっくり目を閉じて夢の世界に旅立とうとすると、いきなり布団を引き剥がされた。

「はい、おはよう。さあ、起きた起きた。」

今日は皆で街に出張るとしましょう。

ついでに、貴方達の装備も買ったほうが良いわ。

折角大金を手に入れたんだものね」

「それは良い考えですね！ 私も剣を買い換えたかったんです。アレルさんも、そろそろダガーナイフがボロボロじゃないですか？ 手入れしている所見たことありませんし」

「ナイフなんかより、私の身体の方がボロボロよ。

あー眠い眠い眠い！」

まあ確かに、拾い物のダガーナイフは刃こぼれしている。

砥げば良いのだが、面倒だ。

そこまでの品でもないので、使い捨てにするつもりだったのだ。

「そんなに眠いのじゃあ仕方ないわね。

私の魔法を見せてあげましょう」

ピンキーが、妙な植物を取り出してぶつぶつと独り言を呟き始める。魔法の詠唱のようではあるが。

「ん？」

私は思わず首を傾げる。

爽やかな匂いが私を包み込むと、一気に鼻から頭へと抜けていき、スツキリとした気分になる。

残念なことに、先程までの眠気が吹っ飛んでしまった。

「フフ、眠気覚ましのおまじないよ。

どう？ 効果はあったかしら。

頭が驚くほどスツキリしたんじゃない？」

手に持っていた植物は、枯れて崩れ落ちてしまったようだ。これが触媒というものなのだろうか。それはともかく。

「なんで余計な事するのよ。こんなスツキリ感はいらないのよ。私が欲しいのは、とろけるようなマツタリ感だったのに！」

「便利な魔法もあるんですねー。で、でも街で魔法は使ってはいけないんじゃないか。」

確か特別な許可を貰った人以外は

マタリが私をスルーした。

「そんな馬鹿みたいな規則を守ってる魔術師はいないわよ。それにこんな便利なものを使わないでどうするの。」

見つからなければ何の問題もないのよ。まあ、見つかっても誤魔化すけどねえ」

得意気に答えているピンキー。

「そ、そうなんですか。知りませんでした」

「もつと魔法を日常生活に使っていくべきなのよねえ。」

教団の力チカチ頭がもつと柔らかければ良いのに。

最近はそのそこ考えも変わってきてるみたいだけど」

「へー」

私は聞き流す。長くなりそうだったから。

「貴方は頭が柔らかすぎるわね。
もっと固めた方が良いわよ。中身が出てきちゃっからね」

「うるさいわね！」

私は文句を呟きながら、再び着替えを始める。

こうなつては仕方がない。散歩がてら街をぶらぶらするとしよう。
よく考えたら、ゆっくり見てまわったことはなかったし。

「あ、あのアレルさん。もし良かったらなんですが」

「何よ。お小遣いはあげないわよ。」

人の眠りを妨げる悪魔にくれてやる物はないの」

シッシツと追い払う仕草を取ってやる。

マタリは首をブンブンと振って大げさに否定した。

「ち、違います！ その、後で私と一回手合わせして欲しいんです
が」

「て、手合わせ？」

「はい！ 一度アレルさんと戦つてみたかったです。
是非お願いします！！」

目をキラキラと輝かせて、私をお願いしてくるマタリ。

私は非常に気分が乗らない。

戦いぶりを見るに、猪突猛進なのは間違いない。

そして人の言うことが耳に入らなくなるタイプだ。

つまり、とても疲れそうだ。

「そ、そうねえ。どうしようかしら。
どちらかというと気分が乗らないけど。
というか、お断りしたい感じ」

「良いじゃないの。付き合っただけじゃ
減るもんじゃないんだしねえ。」

私も貴方の戦いぶり、もっと拝見したいわあ」

ピンキーが余計な事を言う。

ニヤニヤと笑みを浮かべているのがまた腹が立つ。

「アレルさんの戦い方、しっかりと勉強させて頂きます!!」

マタリが深く頭を下げてきた。

もう止まらない、止められない。

というか早速武装して鼻歌なんか口ずさんでるし。

一般人が見たら、さぞかしドン引きする光景だろう。

「あー、うん。まあ適当にやりましょうか。」

ほら、軽く運動する感じで。無理は良くないものね」

「いえ、全力でいかせて頂きます!」

「そ、そうなの? 折角の休息日に、そんなに張り切らなくても
身体を休めることも、戦士にとって大事なことなのよ?

……と、言ってもアンタには無駄なんでしょうけど」

皮肉交じりに諭してやる。

本当は私が動きたくないだけだが。

「はい、勿論です！」

白い歯を見せて朗らかに微笑む馬鹿に対し、私は溜息を吐くことしかできなかつた。

ピンキーは腹を抱えて、ベッドの上で笑い転げていた。

後で必ず復讐をすることにしよう。

私は深く刻み込んだ。

アートの街のすぐ近くを流れる川。

その川辺で私とマタリは延々と特訓を行っていた。

蹴飛ばしても、ぶん殴っても、しつこく喰らいついてくるのだ。

そのスタミナはどこから出ているのか。

やはり単純な奴ほど、戦士には向いているのかもしれない。

「せえいつー！」

「甘いわー！」

「え！？」

マタリの太刀を、そこらへんで拾った『ひのきのぼう』で受け流す。

上段からの振り下ろし、そこから切り返しての二連撃。切れ味は鋭いが、狙いが見え見えなので、難なく捌く事が出来る。マタリは真剣を使用しているが、私は棒にしておいた。何かあつたらまずいから。うっかり叩き切ってしまうのは非常にまずい。

「頭冷やして来なさい、この脳筋女!!」

「きゃあああああああ!!」

バランスを崩したマタリのでかい尻を、思いつき蹴飛ばしてやる。悲鳴を上げながら、勢い良く川底へと突っ込んでいく。

……頭から。

「……ちよつとやりすぎたかしら」

「さあ、良いんじゃないのお。愛の鞭ってやつで。彼女も貴方に倒されて、きつと本望だった筈よ。

さあ、彼女の冥福を祈りましょうよ」

十字を切ると、天へと祈りを捧げ始めるピンキー。その仕草が実に様になっている。

「別に殺しぢやいなわよ!」

暫くしても川から浮かんでこないマタリ。勢いをつけすぎてしまっただろうか。加減が難しい。頭を掻く私に対し、何やらメモを取りながら生返事を返すピンキー。どうも私の戦い方を分析しているらしい。

本当に私の事を研究対象として見ているらしく、いつか解剖されな

いか不安になる。

師匠がアレだから、弟子ももしかしたらアレなのかもしれない。

「……………」

マタリがゆっくりと川底から浮かび上がってくる。

頭部からは、血液が流れ落ちている。

どうやら川底の岩かなにかにぶつかってしまったようだ。

幸い重傷ではなさそうなのが救いだろっか。

「ちょっと、大丈夫？ ほら、今日はこれでお終いにするわよ。

さっさと上がってきなさい。治療するから」

「血。血が」

「マタリ？ 大丈夫よ。それぐらいすぐ治せるから。

ほら、こっちに」

私は手招きするが、マタリはそれに反応を返さない。

ゆっくりと自分の頭に手をやると、真っ赤に染まった掌を凝視する。

その目はいつもとは違い、どこか視点が定まっていないうさがある。

「……………血。血が出る。この前と同じだ。

私の身体から、血が流れ落ちてる」

「……………どうしたのよ。打ち所でも悪かった？」

「ウフフ、とっても綺麗な色。」

でもアレルさんの血はもつと綺麗なんです。

あの時もとっても綺麗でしたよ。

真っ赤で、まるで宝石みたいな色なんです。

ああ、それを固めて宝物に出来たらどんなに幸せなんだろう。

ね、アレルさん。ちよつとだけ、見せてもらっても良いですか？」

気味の悪い笑みを浮かべると、剣を勢い良く振りかざして突っ込んでくる。

先程までとは違い、その動きを読み取ることが出来ない。

私は慌てて棒を前に構える。

「あ、アンタ。一体何を」

「ハアアアアアアツ！！」

鋭さを増した斬撃。

受け流そうと繰り出した棒が、真っ二つに叩き落される。

棒を手放し、後方に下がろうとした私の肩をマタリが強引に掴む。振り払おうとするが、凄まじい力で引き剥がすことが出来ない。

「このっ！ どこにそんな力が」

「グアアアアアアツ！！」

「ッ！！」

私の喉元目掛けて繰り出された強烈な突き。

先程までとは動きが違う。まるで熟練の剣士のような動きだ。

どうやら凶暴性が増しているらしく、攻撃に遠慮がない。

「ふざけるのもいい加減にしなさいっ!!」

腰につけていたダガーナイフの柄で、マタリの腹部を思い切り叩きつける。

可哀想だが、強烈な痛みを与えて動きを止めさせてもらう。

痛みの余り悶絶することは確実だ。すぐに治療してやらないといけない。

普通の人間ならば、絶対に堪えることはできない急所への一撃だからだ。

狙い通り、私を突こうと引き絞っていた腕の動きが止まる。

「目覚めました？ 全く」

私の肩を掴んだまま硬直するマタリの顔を、下から覗き込む。

その視線が合うと、マタリはニヤリと嗤う。獰猛な獣のようだと私は思った。

直後、私の肩をマタリの剣が貫いた。

「ふう、本当エライ目にあっただわ」

ベホマで肩の傷を回復させると、私は地面に座り込む。
ピンクの奴は、最後まで観察を続けていたようだ。
実に薄情な女である。

「中々面白い勝負だったわよ。特にマタリちゃんの変貌。
あれはとっても良かったわ。何かの特性かしらね」

「知らないわよ。川に叩き落して、自分の血見た瞬間にああなった
んだから。」

聞くなら、この馬鹿に直接聞きなさい」

隣で寝転がっているマタリを指差す。

実に幸せそうな寝息を立てている。

人の肩を突き刺した後だというのに、能天気なことである。

「それにしても、マタリちゃんを眠らせた魔法。

あれも中々だったわね。それにその後の回復魔法。

いきなり完治なんて、常識外れも良いところよ」

まだまだ暴れそうな気配をかもし出していたマタリ。

私はとりあえずラリホーをかけ、大人しくさせようと試みたのだ。

見事に効いた様で、暴れ牛が勢いを失ったかのようにコロリと倒れ
た。

とりあえず自分を治療した後、マタリの頭部も治療しておいた。

また大暴れされては敵わないから。

「そんなに便利なもんじゃないわよ。

確かに、身体は完全に治すことが出来る。

でも、精神までは治せないからね」

「？ 身体が治せば何も問題ないじゃないの」

「腕が引きちぎられても、腸を食い破られても、目をくり貫かれても。」

私の回復魔法があれば戦うことは出来る。

身体だけは元通りになるからね。

でも、普通の人間はともじゃないけど耐えられないわよ。繰り返される激痛に、やがて心が折られてしまうから」

私は近くに遭った小石を拾い、川に向かって投げ入れる。

石は波紋を起こした後、静かに沈んでいった。

「……貴方は、どうして耐えられるの？」

「普通じゃないから。だって『勇者』だもの。痛いから嫌だなんて言っていられないわ。」

それにね」

私はそこで言葉を区切る。

「痛みなんて慣れる事が出来るのよ。」

身体も心もそのうち麻痺してくるから。」

私はね、それに気付くことが出来たのよ」

「……………」

ピンキーに笑いかけた後、私はマタリの元へと近寄っていく。そろそろ目覚める頃だろうから。

まずはきっちりお仕置きから始めるとしよう。

「い、いひゃいですあれるしゃん」

「うるさいわね。この程度で許してもらえるなんて幸せよ？」

「そ、そんなにやあ。し、しどいでしゅ」

「ほらほら。まだまだこれからよ」

マタリが目覚めると、早速私刑を加えているアレル。

頬を目一杯に抓っている。一体どこまで伸びるのだろうか。

エーデルはその光景を生暖かく見守っていた。

自分に害が及ばないことを最優先とした結果だ。

マタリが呑気に目覚めた後事情を聞いたが、先程の事は一切覚えていないようであった。

血を見たことにより興奮したのかもしれないが、迷宮では出血など日常茶飯事である。

もしかしたら何らかの『特性』を持っているのかもしれないと、エーデルは見ている。

冒険者の中でも、稀に『特性』を持った者が現れる事がある。

特性が何かという明確な定義はないが、並外れた才能がそれに当たるだろうか。

その優れた才能で頭角を現したものは、畏怖と尊敬を籠めて『称号』

で呼ばれる。

剣技に天性の才能を持つものは、ソードマスター。あらゆる武具を自在に使いこなすバトルマスター。

拳にオーラを宿らせ、魔を消滅させていく拳聖。

魔術師でありながら、『治癒』を使いこなす賢者。

エーデル自身も死体操作で悪名を広めてしまった為に、一時は『屍術師』などと呼ばれていた時期もある。

現在はなんとか『死霊術師』という称号に落ち着いた。

自分で勝手に名乗ったとしても、嘲笑と失笑を浴びるだけで何の意味もない。

称号自体には何の価値もないのだから。

実力が認められ、冒険者達から自然と呼ばれるようになるのが『称号』なのだ。

つまり、勝手に『勇者』などと自称しているアレルは、周りからすればただの愚か者に他ならないのである。

アレルの実力を垣間見たエーデルは、そうは思っていないが。

年に似つかぬ熟練の剣技、桁外れの攻撃魔法、常識破りの回復魔法。更にはレンジャーギルドのサブマスターとも顔馴染みであるらしい。どう考えても、ただの世間知らずの小娘とは思えない。

何か、とてつもない秘密があるのではないか。

それを知るために、エーデルはアレルと同行することを決めたのだ。興味、好奇心。それこそがエーデルの行動力の源泉なのだから。

「ふー。今日はこれぐらいで勘弁してあげるわ。さ、温泉に行つて汗を流すようにしましょう」

肩をグルグルと回して、凝りをほぐす仕草を取るアレル。マタリは両頬を押えて、無実を訴えているようだ。

「い、痛いです。どういうことなのか誰か説明してください。なんで私は抓られなければいけないんですか！」

「嫌よ。自分で思い出しなさい。それが一人前の大人って奴でしよう」

「ひ、酷いです。エ、エーデルさん、見てください。

頬が真っ赤になってるでしょう？ きつと痕になってしまいます！」

ようやく解放されたマタリが、エーデルに向かって顔を見せ付けてくる。

確かに赤く腫れ上がっている。

涙目の顔と、その真っ赤な頬が絶妙にマッチして、妙な可笑しさを作り出している。

笑って誤魔化すエーデルに、不満そうな声を上げるマタリ。アレルはその肩を掴むと、引き摺っていこうとする。

「ほら、さっさと行くわよ。

エーデル、アンタはどうする？」

「私？ 私は今回は遠慮しておくわ。

ちよっと戻ってまとめたい事があるのよねえ」

「あつそ。それじゃあ夕方までには戻るから。

大人しく留守番してなさいよ」

「はいはい。いつてらっしやい」

じたばたと暴れるマタリを連れて、アレル一行は意気揚々と温泉へと向かっていった。

本当は温泉でのんびりしたいという気持ちもあったが、己の好奇心に敵うわけもない。

エーデルが断った理由も嘘ではない。嘘ではないが、一つだけ確認したいことがあったのだ。

（あの子がいつも真剣に読んでいる本。絶対に人に見せようとはしないのよねえ。

どんな内容なのか気になって気になって仕方なかったのよ）

アレルが、朝と寝る前に読んでいる古びた本。

マタリが言う事には、内容は英雄譚との事らしい。

何度か頼んでみたが、決して見せてくれようとはしなかったのだ。

いつか機会を見て読んでやろうと思っていたエーデルにしてみれば、今は千載一遇の機会という訳である。

一つ謎が解けそうだという予感がしたエーデルは、上機嫌でアートの街へと戻っていった。

第十四話 勇者は一人往く（後書き）

次回は『決戦、バラモス城！』をお送りする予定です。

第十五話 勇者とバラモス（前書き）

魔王バラモスの台詞は、ゲームから引用しているところがあります。

『再び生き返らぬよう、そなたの腸を喰らいつくしてくれるわっ』
は原作通りです。

ゲームの登場人物は、原作の台詞を元に独自解釈を付け加えています。

第十五話 勇者とバラモス

魔王城最深部、玉座の間。

地上制圧を目論見、着々とその支配権を伸ばしてきた人類の『恐怖の象徴』。

魔王バラモスは静かに思いに耽っていた。

地上の覇権を握る手段として、バラモスは力だけではなく策も用いてきた。

アレフガルドにおいて、精霊ルビスを封印に追いやる程の実力者なのだ。

第一段階としてサマンオサにはボストロール、ジパングには八岐大蛇を送り込む。

勢力の頭をすげ替えて、実質的に魔物の支配とする計画であった。計画は順調に進み、サマンオサ、ジパングの乗っ取りに成功した。

その途中、最も危険視していた『オルテガ』を討ち取ることが出来た。

最早、魔王軍の邪魔をする者はいないはずであったのだ。

同じ手法を用いて、各国を乗っ取る。

そして、徐々に魔の勢力を人間社会へと浸透させていく。

計画成就是まさに目前にまで迫っているのだ。

「……フフ、それがまさか。このような結果になるうとはな。決して慢心したつもりはない。驕った訳でもない。

だが、あの時点では恐れるべき存在でもなかったのだ」

アリアハン方面軍からもたらされた連絡。

『オルテガの娘が旅立った模様、その力恐るるに足らず』。
たかがスライム程度に苦戦する小娘。
魔王にとって、特別警戒する相手でもなかった。
自称勇者を名乗る愚か者は、あらゆる所で湧いていたのだ。
その度に、刺客を派遣してなどいられない。
そういつた輩は、自然と魔物達の手によって淘汰されていくのだから。

「バ、バラモス様！！ 守備隊兵力が半数まで壊滅！！
こ、このままでは防ぎきれません。至急増援をお願い致します！！」

血相を変えたエビルマージが玉座の間に走りこんでくる。
バラモスは静かに目を開けると、指示を出す。

「城に控えている兵力を全て出撃させよ。
現存する全兵力だ。出し惜しみは一切無用。」

……作戦に向け待機中の、地獄の騎士とトルル達も向かわせよ。
個別で勝てる相手ではないのだ。数で押し潰せい！！」

バラモスは、城内に展開させている全魔物を向けることを命令。
更に、地獄の騎士、トルルも投入することを迷う事なく決断する。

「お、恐れながら申し上げます。
待機中の兵達は、地上制圧の為に重要な戦力ですぞ。
そ、それを防衛戦で消耗してしまつては、今後の作戦に支障が」

魔術により作り出した地獄の騎士、訓練を積み重ねたトルル兵団。
地上一斉攻撃の為に、重要な兵隊達である。
決して勇者一匹の為に、消耗させて良いものではない。

地上制圧の『期限』に間に合わなくなるのだから。

命令を知っているエビルマージはそのことを言っているのだ。何を置いても厳守しなければならない至上命令。

「愚か者めがッ！ 既にそのような事態ではないとまだ理解出来ぬのか！

貴様は黙って命令に従えば良いのだ！！」

バラモスの怒号が響くと、エビルマージは身体を萎縮させる。

地上一斉攻撃など既に来る状況ではない。

むしろ本拠地陥落の窮地なのだから。

「も、申し訳ありません！ た、直ちに！」

命令を受けると、エビルマージは一礼して駆け出していく。

再び、玉座の間に静寂が訪れる。

オルテガの娘、『アレル』がここまで成長するとは想定外であった。数々の魔物を打ち倒し、旅は順調に続けられていたのだから。

その過程で、何度かアレル一行を討ち取ったという報告はもたらされてきた。

だが、すぐに『誤報』として処理されることとなる。

それは何故か。

討ち取ったはずのアレル一行の姿が、直ぐに目撃されるからである。しかも以前よりも格段に力を上げて、魔物達を殲滅していくのだ。

当時のバラモスは、いずれ機を見て踏み潰すつもりではいた。

そろそろ目障りになり始めていたからだ。

アレルの真の恐ろしさが判明したのはそれから間もなくである。同時に、今までの報告が『誤報』などではないと判明した瞬間でもある。

魔王バラモスの腹心にして、ジパングの統治者『八岐大蛇』からもたらされた情報。

『確かに私は奴等を食い殺した。だが、次の日再びこの私の前に現れたのだ。』

何度殺しても、何度食い干切っても、それでも奴等はやってくる。』

その連絡を最期に八岐大蛇は討ち取られ、ジパングは魔王軍の支配下から離れることとなる。

事態を重く見たバラモスは、アレルの調査を開始。

その結果、『アレルは死ぬことがない』ということが分かった。

一時的に死に追いやったとしても、その亡骸は何処かへ飛ばされ、死体を確認することは出来ない。

何度殺してもその度蘇り、勝利するまで何度も何度も挑んでくる化け物。

まさに魔物を殺すために生まれてきた殺戮機械キラーマシンとでも言うべき存在だ。

ここでバラモスは一つの策を思い付く。

詳細な報告から、アレルの弱点を見出したのだ。

作られた勇者としては実に模範的な性格であるが、戦士としては『脆い』という欠点。

アレルは落とせなくても、その仲間達は別ではないだろうか。

アレルと仲間達の関係を絶ち、徒党を崩壊に追い込むのだ。

仲間から見捨てられた孤独な勇者は、人間に絶望し戦う意欲を失うかもしれない。

肉体を殺せなくても、精神を殺すことが出来れば良いのだから。

例え失敗したとしても失うものは殆どない。

アレル一行の進軍速度を遅らせることが出来、その間に兵力を増強することも出来る。

弱い者から叩き潰すのは戦略的に間違いではない。

「……あの策は、驚くほど上手くいった。

見事に彼奴めの徒党を崩壊させ、アレルを孤立に追いやったのだからな。

今考えると、上手く行き過ぎたと言っべきか」

バラモスは嘆息する。

そう、策は狙い通りの効果を上げたのだ。

バラモスから『アレル以外の仲間を優先して狙え』という指示が下る。

この命令が、アレルの仲間達の精神と肉体を徐々に疲弊させていくこととなる。

そしてサマンオサ。

ポストロールの正体を見破ったアレル一行との死闘。

バラモスの最も信頼する魔物は、最期の瞬間まで忠実に命令を実行した。

この結果、アレル一行は解散し、最後の砦ネクロゴンドで釘付けすることに成功したのである。

偵察兵から、アレルの精神が崩壊するのも時間の問題という連絡も受けていた。

「……一体何があったというのだ。何故このような結果になった。突然彼奴の人格が変わったとも言つのか。分からぬ。理解出来ぬ」

バラモスの苦悩は続く。

この場で勇者を追い返すことに成功したとしても、地上制圧の遅れは取り戻すことは出来ない。

自分の栄光もこれで終わりだ。魔王軍に失敗は決して許されないのだから。

数時間後。

玉座の間への廊下を、何者かが歩く足音が響く。

それはゆっくりと、だが確実にここへと近づいてくる。

まるで破滅が我が身へと迫ってきているように、バラモスは感じた。

やがて、扉の前でそれが止まると、扉が勢い良く蹴破られる。

バラモスが目を凝らして、その姿を見下ろす。

刃の鎧に身を包んだ小柄な少女。

全身血に塗れ、腰には2本の剣を差し、その手には守備隊を率いていたエビルマージの首。

威嚇するように獰猛な笑みを浮かべると、こちらに首を投げつけてくる。

投げた勢いで血が滴り落ち、赤黒い染みが床を汚した。

その首が浮かべている表情は、絶望と苦悶が入り混じったものであった。

バラモスはそれを一瞥すると、再びアレルへと視線を移す。

「ついにここまで来たか、アレルよ」

「随分と数が多かったわね。流石に手こずらせて貰ったわ。

魔王の本拠地なら当たり前なんだろうけどね」

「やはり一人か。我が魔王軍精鋭を、たった一人で潰したか。

まさかこれ程までの実力を身に着けるとはな」

「精鋭？ 雑魚しかいなかったわよ。

馬鹿の一つ覚えみたいに、押し潰すことしか考えてない。

全員殺したわ。一人も例外なく。人間魔物の区別もなかった」

「エビルマージも一人残らずか？ アレは一応人間だったはずだが」

「私は区別はしないわ。墜ちた人間は魔物と同じだもの。

全員容赦なく殺した。命乞いしてきた馬鹿もいたけどね。

今更手遅れよね。何を甘いこと言ってんだか」

エビルマージ達は、魔に墜ちたとはいえ元は人間である。

だが、アレルは容赦なく始末したようだ。
最早かつての脆さは欠片も見受けられない。
魔を討つ事に特化した化け物。まさに『勇者』といえるだろう。

「その姿、実に『勇者』に相応しいぞ、アレルよ。
魔を殺すことだけを考え、ただそれだけを実行する。
神々の尖兵にして、弱き人間達の都合の良い番犬。
見事な殺戮機械キラーマシンとなったものだ」

バラモスは褒め称える。
皮肉ではなく、バラモスは心からそう思ったのだ。

「その総仕上げがアンタって訳よ。
いよいよ残すはアンタだけ。
そろそろ良いでしょ？ 話すのも飽きてきたしさ」

アレルが剣を抜刀し、二刀で構える。
バラモスはそれを見て、軽く笑う。まだ戦闘態勢はとっていない。
怪訝そうな表情を浮かべるアレル。

「我らを殺した後、そなたには何が残るのだろうか。
実に興味深い事よ」

「……アンタを殺してからゆっくり考えるわ。
時間は、きつと一杯あるだろうしね」

アレルは少しだけ目を泳がせる。

「魔物が掃討された後は、自分が用済みとなることは分かっている
な？」

平和な世に、人間の分を越えた化け物は必要ないのだから。そなたの末路は我らと同じだ。貴様は我らと同類なのだ！」

「……何が言いたいのか？」

「魔王軍に降れアレルよ。そこまでして守るべき価値が人間にあるのか。」

そなたを見捨て、ただ一人で死地に送るような屑共だ。

我らは違う。力こそが全て。それこそが大地の摂理というものだ。」

アレルは、一瞬驚きの表情を浮かべるが、すぐに首を振ると微笑んだ。先程までとは違い、年相応な笑顔で構えていた剣を降ろすと、バラモスに返答する。

「フフ、心惹かれる提案だけど、お断りするわ。」

私は人間、アンタは忌むべき魔物。残念だけど、それが現実でも、ちよつとだけ考えちゃったわ。」

「そうか。残念だが仕方がない。」

それでは始めるとしようか、勇者アレルよ。」

最早我らに言葉は無用であろうからな。」

バラモスが玉座から立ち上がる。

「我が名はアレル。アリアハンの勇者アレルよ。」

魔王バラモス、その首頂くわっ！！」

二刀をバラモスに向けると、名乗りを上げる。

「この魔王バラモスに逆らおうなどと、身の程を弁えぬ小娘だ。」

ここに来たことを悔やむが良い。

『再び生き返らぬ』よう、そなたの腸を喰らいつくしてくれるわっ
！」

バラモスが咆哮すると同時に、先手を取って激しい炎を吐き出す。
玉座の間が炎に包まれ、薄暗かった部屋が赤く照らし出される。

「ハアアアアアアアッ！！」

アレルが炎を掻い潜り、剣を突き出す。

バラモスは巨体の為、動きが鈍い。

更に星振る腕輪の効力により、アレルの素早さは格段に上がっている。

バラモスは回避行動は取らず、迎え撃つことを選択する。

「燃え尽きるが良いッ！ メラゾーマ！！」

突き出される剣に向かって手を翳し、灼熱の炎を放つ。

掌を剣が貫通するが、その代償としてアレルの全身を炎が包み込む。

深い火傷を負い、痛みで耐えられるはずもないのだが、

アレルは直ぐにベホマで回復すると態勢を立て直す。

肉を焦がす嫌な臭いは進行形で辺りを漂っている。

まだ炎は消えていない。

「ま、まだまだ。最初から長期戦覚悟だからね。

アンタが死ぬまで、私は、絶対に倒れない」

炎に包まれながら、ニタリと笑うとゆっくりと立ち上がる。
普通の人間が見たら、絶叫を上げるであろう異様な光景だ。

「化け物めが。こちらも全力でいかせてもらおうぞ。
炸裂せよ、イオナズン!!!」

「やられっぱなしじゃないわよ！
喰らいなさいっ！」

アレルが稲妻の剣、雷神の剣を振りかざす。

剣から迸る稲妻と業火がイオナズンと相殺され、中央で大爆発する。

爆煙に紛れてアレルがバラモスの首目掛けて飛び掛る。

それを察知していたバラモスは巨腕を振るって、思い切りアレルを叩きつけた。

「ッ!?」

「死ぬが良いわッ!!!」

手ごたえ十分、痛恨の一撃は確実に背骨をへし折った。

鎧の刃がバラモスの身体を傷つけるが、そのような事はどうでも良い。

今はただ、アレルを殺すことが優先される。

「べ、べホマ」

柱に叩きつけられ、瀕死のアレル。

再びべホマを使い回復を図っている。

その隙を見逃すことはしない。

える。

緑色の血が勢い良く溢れ、地面へと大量に染み出していく。

「まずは呪文を封じるわ。さて魔王に効くかしらねえ。

マホトーン！」

青白い光の輪がもがくバラモスの身体を囲うと、その効力を発揮する。

バラモスの魔力が完全に封じ込まれたのだ。

「ば、馬鹿な。このバラモスが魔法を封じられるなどあり得ぬ！」

「有り得ないことが起こっちゃったみたいよ。

とにかく、鬱陶しい魔法はこれで終わりね。

さ、反撃開始といくわよ！！」

腰の草薙の剣を抜くと、バラモスに対し振りかざす。

守備力弱体の効果が発動し、バラモスの硬い守りが解かれていく。

「こ、小癩な真似を！」

「使えるものは何でも使うわよ。

例えばこんなのもね」

袋から小さな瓶を取り出すと、アレルが一気に飲み干す。

濃厚な魔力を帯びた液体。エルフの飲み薬だ。

「魔法が封じられたとて、我が強さに変わりはないわ！！」

口を開け、再び激しい炎を吐き出そうとする。

「悪いけど、私はアンタに近づかない。
これからは魔法で最後まで削らせてもらう。
どっちが先に倒れるかしら。魔王と勇者の根競べね」

「戯言を！！ 魔王に敗北はないのだ！」

「勇者は決して死なないのよ？ 最後に勝つのは私よ」

「死ねい！！」

「その台詞もう聞き飽きたわよ。」

聖なる雷よ、魔王を薙ぎ払え！！

ギガデイン！！」

役目を果たした草薙の剣を地面に突き刺すと、指を掲げギガデインを唱える。

更に雷神の剣を突き立てて迸る業火をバラモスへと放つ。

勇者と魔王の意地の張り合い、

激しい炎とギガデインの撃ち合いは延々と続いた。

「くっ」

「ハアハア、アンタもいい加減しつこいわね。そろそろ諦めて死になさいよ！」

アレルが呼吸を乱しながら話しかける。

エルフの飲み薬も既に尽き、残された精神力は僅か。隙を見て薬草を何個も貪り食っている。

「黙れ、この小娘がッ!!
惨めに潰れるが良いっ!!！」

満身創痍のバラモスが、玉砕覚悟で突撃する。

右腕を失い、魔法を封じられた今最早こうするしかなかったのだ。左手に全精力を籠めて、勇者アレルへと叩きつける。

「甘い！ 隙だらけよっ!!！」

「グガアッ!! まだまだっ!!！」

左腕の攻撃が避けられると、更にもう一撃繰り出してくる。

最後の力を振り絞った連続攻撃だ。口には炎を溜め込んでいる。アレルはそれを難なく回避すると、そのまま突き立ててあった雷神の剣を取る。

懐に潜り込み、腹部に会心の一撃、深く抉りそのまま業火を体内へと送り込む。

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!！」

「もう一撃!!！」

雷神の剣を抜くと、下段から左腕を跳ね飛ばす。

回し蹴りでバラモスの態勢を崩し、ギガデインを放つ。
再びバラモスの悲鳴が轟き渡る。

アレルは倒れた巨体を眺めると、大きく肩で息をする。
雷神の剣を強く握り締めると、いよいよ止めを刺さんと近づいていく。

「ば、バラモス様！！　只今参りますぞ！」

最後の生き残りのエビルマージが駆け込んでくる。

全員殺したとアレルは思っていたが、伝令係が残っていたのだ。

アレルに構うことなくバラモスに向かい、回復魔法を使おうとしているようだ。

アレルはその進路を落ち着いて捕捉すると、草薙の剣を投擲する。

呪文の範囲まで後一步というところで、エビルマージの首は容易く

刈り取られた。

悲鳴を上げる事すら出来ずに、元人間は血の海に沈む。

味方の援護も望めず、最早虫の息の魔王バラモス。

目は虚ろであり、先程までの威厳は失われていた。

両腕を斬り飛ばされ、立ち上がる力も残ってはいないようだ。

「……………ご、ここまでと、いうことか。」

ま、魔王ともあるう者が、は、敗北を喫するとは「

「今までで一番の強敵だったわよ。」

流石は魔王を名乗るだけはあるわ」

「ゆ、唯一の失敗は、そ、そなたを早めに始末しなかったことか、いや。それも叶わぬか。何しろ、し、死なないのだから。な、何と言う理不尽。最初から、我らに、か、勝ち目など!」

バラモスが激昂しながら吐血する。

血がアレルに大量に降り注ぐが、特に気にした様子はない。すでにその身は血に塗れている。

「……何か言い残すことはあるかしら。これが、最後よ」

アレルは雷神の剣を高くかざす。

「あ、アレルよ。わ、わしは諦めぬ。

た、例えこの身が、く、朽ち果てようとも。

け、決して、諦めぬぞ。い、いずれ、また会おう」

バラモスは最後の力を振り絞りアレルへと顔を向けた。

その目には、既にアレルの姿は映っていない。

口元が少しだけ歪んでいる。笑みを浮かべようとしたらしい。

「それじゃあね。いずれ、また」

アレルは雷神の剣を渾身の力で振りかざす。

白刃が巨体の首へと、吸い込まれるように振り下ろされる。

それがバラモスが見た最後の光景となった。

断末魔の悲鳴は、上がることはなかった。

「レルさん！ アレルさん！！
起きてください！！！」

マタリの大声が聞こえる。

「うるさい。後5時間ぐらい眠らせて頂戴。
そしたら、元気一杯で起きるから」

「何を言ってるんですか！
今日は職業認定試験を受けに行くって言ってたじゃないですか！
ロブさんにも連絡しちゃいましたよ！」

「貴方達、朝から五月蠅いわよ。
迷惑だから外でやって頂戴」

エーデルが着替えながら、呆れた顔でこちらを見ている。
自宅があるくせに、わざわざ私達と一緒に寝泊りしている変な女だ。
なんでも、仲間たるもの寝起きと食事は一緒にしなければなら
ないらしい。

なら、私達を招待しろと言ったら、丁重にお断りされた。酷い女である。

そんなことを考えていると、マタリがジト目で睨んでくる。私は寝返りをつつてみないことにした。

「もう、なんでこんなに朝に弱いんですか。寝るのはあんなに早かったのに」

夜早く寝て、朝遅く起きる。

非常に素晴らしい一日である。

戦士たるもの良く食べ、良く眠る。これが大事なのだから。いざというときに私は備えているのだ。決して惰眠を貪っているわけではない。

「弱いんじゃないのよ。寝れるときに寝ておくだけ。寝ずに戦い続けたこともあるからね。

あの時寝ておけば良かったーとか思いたくないでしょ？」

「……じゃあ、今もお願いします。もうすぐご飯ですから」

「考えておくわ。ちなみに私は長考派だから」

私は再び目を閉じようとする、エーデルが声を掛けてくる。

「ねえ、アレル。貴方の大事にしている本なんだけど。

今度話の内容聞かせてもらっても良いかしら」

「……別に良いけど、何だよ。唐突すぎるわ」

「だって何回頼んでも見せてくれないじゃないの。だったら貴方の口から、『お話』だけでも聞かせてもらおうと思っ
て。」

とーっても興味があるのよ」

面倒くさいので、マタリに振るとしよう。
同じ事を二度話すのはとても面倒くさい。

「……マタリから聞いて頂戴。大体話したから」

「え、ええ！？ 私ですか！」

「そうアンタ」

「あっそ。それじゃあマタリちゃん。朝食がてら教えてね。
どうしても確認したいことがあるの。」

お寝坊で愚図な小娘は放っておきましょう」

着替え終わったエーデルが、マタリの肩を掴んで引き連れていく。
このままでは私の朝食も危ない。

「マスターに、後で必ず行くって伝えておいて。
三十分したらいくから。宜しく」

釘を刺しておく。アイツの分はいらなくても言われたら大変だ。
食事抜きは非常に堪える。

「はいはい。貴方の朝食取ったりしないわよ。
そんなに飢えた狼みたいな顔で見ないで頂戴」

「ガールルルル！」

バリイドドッグみたいに吼えてみた。歯を剥き出しにして。目玉は垂れてないけど。

守備力を低下させてくる嫌な奴等だった。腐ってるから臭いし。

ちなみに、エーデルには呆れた顔をされた。

「そうやってると、ただの子供みたいよ。

年相応で本当可愛いわね。優しく撫でてあげたいわあ」

手をわきわきさせながら近寄ってくる年増。

貞操の危機を感じたので、素早く追い払うことにする。

「……とつとつと行きなさいよ。

ちなみに、私はそういう趣味ないからね。

予め言っておくけど」

「失礼ねえ。私だつてないわよ。

何より、非生産的だものねえ。

何も生み出さないし」

「な、何のお話ですか？」

「子供には関係ないわよ」

マタリにはちよつと早いので、誤魔化しておく。

私も興味はない。

「そうねえ。つまり、貴方にも縁がないってことよ」

それには答えず、私は不貞寝することにした。

別に起きても良いのだが、昔の事を思い出していたのだ。

魔王バラモス。中々変わった奴だった。

もし私が、アイツの誘いに乗っていたら。

世界は変わっていたのだろうか。

それとも、別の勇者が現れるのだろうか。

私はそいつに、魔に墜ちた者として首を刈り取られるのだ。

問答無用で、容赦なく。

私が邪教徒にしたみたいに。

軽く溜息を吐くと、私は布団を丸めて身体で抱きしめた。

・エーデルが隠れて読んだアレルの本

古びた装丁の本であり、表紙には何も書かれていない。

それどころか中身も一切書かれてはいない。ただの白紙である。

所々に血痕らしき茶色い染みがある。

読み込まれた形跡は見受けられる。

『炙ったら文字が出てきたりしてね。』

『悲しい冗談よ』

第十五話 勇者とバラモス（後書き）

次はいよいよギルド話を進めます。
勇者の凱旋もしなきゃいけません。

第十六話 勇者と狂戦士（前書き）

ドラクエ？のアレです。

アレルへの効果は抜群です。

第十六話 勇者と狂戦士

「それでは、これから職業認定試験を行う。準備は良いな？」

戦士ギルド内のいつものカウンター。

ロブが腕組みをして私とマタリに視線を向けてくる。

酒飲みやら、ギルド員でこった返す中やろつというのだろうか。というか試験って何をやるんだか良く分からない。

「何をやるのか詳しく教えてくれる？」

「じゃないと心の準備が出来ないじゃない」

「そ、そうですね。まだ試験内容を教えてもらっていませんし」

「別に難しい話じゃないさ。」

「コイツを使って、ちよいと夢の世界に行ってもらっただけだからな」

そう言うと、カウンターの下から水晶らしきものを取り出すロブ。

下に布を敷いて水晶を乗せると、ポンポンと軽く叩いた。

私はそれに顔を近づけて観察する。

うん、ただの水晶のようだ。

私の額当てについてる青水晶より、二周りぐらい大きい。

そこそこ値は張るのではないだろうか。

「何コレ。ただの水晶っばいけど。」

儀式にでも使うのかしら」

「そう、こいつが『星見の水晶』さ。
教団からギルドに支給される、試験の為の道具だ。
どういう原理かは知らんがね」

「へえ。戦士ギルドは青いのねえ。
魔術師ギルドは赤い水晶だったけれど」

顎を撫でながら、エーデルが興味深そうに水晶を眺めている。
「というか、コイツはなんで我が物顔でいるんだらう。
試験には全く関係ないので、適当にブラついてると言ったはずなの
に。」

「……おいアレル。なんでコイツがいるんだ。
さっきから言おうと思っていたんだがな。」

我欲の為に死体を操る、悪趣味極まりない女だぞ。
本来なら、問答無用で殺すべき相手だ」

ロブが忌々しそうにエーデルを睨んでいる。
周りのギルド員も嫌悪感を隠そうとしない。
なるほど。死霊術師の悪名は中々に広まっているらしい。
そりゃ自分が死んだ時に、人形みたいに使われるのは嫌だらう。
エーデルはそれがどうしたと言わんばかりに、腰に手を当てている。
面の皮が厚い。流石はピンキーだ。
私はとりあえず感心してやることにする。

「私？ 私はこの子達の引率者よ。
どうしてもと請われて、仕方なく仲間になってあげたの。
私も最初は断ったんだけどねえ」

感心したのは間違いだった。

「　　チヨット。誰が引率者よ。」

しかもアンタが勝手に入ってきたんじゃないの!!
それに試験に関係ないのに付いて来たりして!」

「またまた。そんな強がっちゃって。

本当は嬉しいんじゃないのお?」

しまった。つい激昂してしまった。

この女のペースに巻き込まれてしまう。

想像通り、エーデルはニヤニヤと微笑んでいる。

マタリはガチガチに緊張して、人の話を聞いていないようだ。

完全に自分の世界に入ってしまったている。

こんなことで大丈夫なのだろうか。

「とにかく、ここでは大人しくしていることだ。

下手な真似をしたら、即座に潰させてもらう。

こいつらと一緒にじゃなけりゃ、容赦なく叩き出す所だ」

警戒感を露にして、ロブが告げる。

「ほらみなさい。アンタのせいで場が殺伐としてるわよ。

分かったらとつとと帰りなさい」

シツシツと私は追い払う。

「大事な仲間の試験を見守るのは当然でしょう?」

心配で心配で、いても立ってもいらなかったのよ。

このままじゃとても帰れないわあ」

豊満な胸に手を当てて、いけしゃあしゃあとのたまっている。

「……それで、本当の目的は？」

「勿論面白そうだからよ。

貴方達がどんな試験を行うのか、興味深々なの。

問答無用で追い出されたら、どうしようかと思っていたのだけれど、取り敢えずは大丈夫みたいね」

エーデルが奥に視線を移す。

いつもは酒盛りの席となっている場所が、椅子と机が綺麗に並べ替えられている。

そこでギルド員達が一杯やりながら、非常に盛り上がった。

正面には白い大きな布が張られており、ギルド鑑定員が何やら準備をしている。

「……何あれ」

「ん？ ああ、アレか。

新人の試験を温かく見守るための観戦席だ。

水晶から試験光景があの白い布に映し出されるのさ。

決して暇つぶしや、賭けの対象にしようなんて思っていないぞ」

「……教えてくれてどうもありがとう」

思わず眩暈がしそうになる。

本当に最悪のギルドだ。

カンダタのレンジャーギルドにでも移ろうかと本気で考える。

しかし、カンダタが偉そうにしているのは気に食わない。

アイツがサブマスターで、踏ん反りかえっているなんて世も末だ。

「本当、脳みそ筋肉の戦士ギルドだけあるわ。試験内容を公開するなんて普通はありえないわよ。でも、私は楽しめるから全然構わないけれど。わざわざ魔法で覗く必要もなくなったしね。フフツ、貴方達の試験どうなるか楽しみだわあ」

エーデルの言葉に、私は呆れて声も出ない。この馬鹿、追い出されたら魔法で覗くつもりだったようだ。というか、この世界の魔術師は覗き放題なのだろうか。ふと、不安に思う。もしかして、私の身体も覗かれているのではないだろうか。由々しき事態である。

「流石はエーデルさんですね。覗きなんて悪趣味なこと普通はできないです。そのピンクは伊達じゃないってことですね！本当に凄いです！！」

いつの間にか自分の世界から帰還したマタリが、いきなり毒を吐く。天然ではなく、もしかしたら本当に腹黒いのかもしれないと最近思う。

その笑顔からは伺い知ることは出来ないが。

「……どうもありがとう。お褒めに預かり光栄だわ。あと、ピンクは関係ないからね」

毒を受けたエーデルは、頬を引き攣らせながら作り笑いを浮かべている。

話が逸れたと、ロブが軽く咳払いをする。

「……それでは説明するぞ。」

これからお前達には、この水晶を使って『夢の世界』に行ってもらおう。

試験内容はそこから『星石』を持ち帰ることだ。

どんな手を使っても構わん。とにかく手にいれれば合格だ」

「星石とはなんですか？」

マタリが手を上げて質問する。

「使用したものに、『職業刻印』をもたらず不思議な石さ。

さらに、迷宮内で『記憶』した場所に瞬間移動してくれる優れものだ。」

帰還にも使えるから、冒険者の必需品ってやつだな」

リレミトの改良版みたいなものだろうか。

しかも記憶した場所にもいけるらしい。

便利すぎる道具だ。これは手に入れなければなるまい。

そういえば、以前始末した人形遣いが使おうとしていた気がする。

あれは脱出しようとしていたと言う訳か。

阻止しておいて正解だった。

「ただ持ち帰るだけで良いんだ？ やけに簡単ね。」

そんなんで職業認定してもらっちゃって良いのかしら」

「合格率はまあ6割つてところかな。」

俺がイケると判断した奴しか試験は受けさせないしな。」

失敗しても、何度でも受けさせてやるから安心しろ」

「や、やっぱり敵は出てくるんですよね？」

不安気にマタリが尋ねる。

そりゃ散歩に行くんじゃないんだから、妨害はあるだろう。

「雑魚がそれなりと、石を守護するボスがいるな。

倒しても良いし、こっそり盗んでも構わん。

戦士になるうってんだから、盗むのはどうかと思うがな」

「わ、分かりました。精一杯頑張ります！」

「よろしい。それじゃあそろそろ始めるか。

まずはどちらからにする？」

両方一片にという訳にはいかないんだ。

水晶は一つしかないんでね」

その言葉に、私とマタリは目を合わせる。

まあ、ここはマタリから受けさせるか。

あまり時間を延ばしても、緊張が高まるだけだろうから。

「マタリ、アンタに栄えある一番手を譲ってあげるわ。

頑張ってください」

「え、ええ！？ アレルさんからじゃないんですか？

ど、どんな試験なのか様子を見ようと思ってたのに」

全身で驚きを表しているマタリ。

顔には不安げな表情がありありと浮かんでいる。

「アンタは考えれば考えるほどドツボに嵌るタイプだからね。何も考えずに突っ込んだ方がきつと上手くいくわよ。ほら、さっさと行ってきなさい！」

「そ、そうでしょうか。」

「……分かりました。勇気を出して、行ってきます！」

マタリが水晶の前へと近づき、用意してある席に腰掛ける。ロブが合図を送ると、鑑定士の男が近づいてくる。

「まずはマタリからだな。」

気を楽しにして、呼吸を整えろ。

水晶に手を乗せて目を瞑るんだ」

「は、はい。……こうでしょうか」

「よし、やってくれ」

「了解しました。術を発動します」

鑑定士が詠唱を行うと、水晶が青白い光を放ち始める。

マタリの身体がビクリと動いたかと思うと、そのまま硬直した。意識を失い、どうやら『夢の世界』とやらに旅立ったらしい。果たして無事帰ってこれるのだろうか。

私は動かなくなったマタリをジッと見つめる。

「あら、始まったみたいよ。」

ほら、あの白い布に試験が映し出されてるわ」

エーデルの言葉に、私は視線をそちらへと向ける。
男達が早速合格するか、失敗するかで賭けを行っている。
酒の勢いもあり、かなり盛り上がっているようだ。
白布へと目をやると、くつきりとした映像が浮かび上がっている。
神殿の入り口のような場所である。
完全武装したマタリが、キョロキョロと辺りを調べている。

「……便利な魔法もあるのね」

「水晶の力よ。いくら魔法だっていつても限界があるもの。
死者を復活させたり出来ないようにね。
私も精霊を憑依させて動かすだけで精一杯よ」

「……………」

「どうやら敵さんが現れたみたい。
懐かしいわねえ。私も昔戦ったもの。
あれは中身がないから、気配が読めないのよねえ」

入り口へと侵入したマタリ。
私の言うとおり、何も考えずに正面から突撃を始めたようだ。
早速敵に囲まれ、戦闘が始まった。
マタリが戦っているのは、中身が空洞の鎧の騎士。

「……どっかで見覚えがあるような」

「……あれはさまよう鎧？」

なんでこの世界にいるんだろうか。
それとも鎧が動くのは別に珍しいことではないのだろうか。

お供にホイミスライムでもいるかと思っただが、特に見当たらなかった。

「フフ、中々良いネーミングセンスねえ。

私達はリビンググアーマーと呼んでいるわ。

迷宮にも現れる、生きた鎧。

彷徨う鎧なんて、洒落た名前じゃないわよ」

夢の世界のマトリは、彷徨う鎧の攻撃を喰らいながらも、前進を開始していた。

盾で致命傷となりうる攻撃を防ぎ、隙を突いて剣撃により脚部を破壊する。

中身がないとはいえ、脚をやられては動きようがない。

何も考えてないかと思いきや、頭を使って戦っている。

「ふむ。中々良い太刀筋だな。

元々才能はあるし、鍛錬も欠かしていない。

後は、経験を積みれば申し分ないだろう」

ロブが腕を組みながら、何度が頷いている。

私は気になっていたことを尋ねることにした。

答えてくれるかは分からないが。

「ねえ。ところでボスってどんな奴なの？」

「それは答えられない。俺にも分からないからな」

「何よそれ」

「言葉通りの意味だ」

訳が分からない。

数十体の彷徨う鎧を蹴散らして、マタリは神殿最深部へと到達していた。

中央台座には光り輝く石が飾られており、

ローブを被った人物がその前に立ちはだかっている。

「いよいよ神殿最深部に着いたみたいね。これからが本番よ」

「……随分と早いよね。まだ一時間も経ってないわよ」

「所詮雑魚は雑魚よ。最低限の力があるか計るだけだしね。

見所はこれからよ。彼女にとっての『ボス』が誰なのか。

実に興味深いわねえ」

マタリと対峙している、ローブの人物が妙な形の杖を振りかざす。

煙がその姿を覆い隠し、一面を白く塗り潰す。

当然、私達もその姿を見失う。

しばらくして煙が晴れると、ローブの人物の正体が明らかになる。

「……あれ？」

「あらあら。これは驚いたわねえ。

面白くなりそう」

「コイツは予想外だな。
てつきりアート一族の誰かが出てくると思ったんだが。
お前のインパクトが、よほど強烈だったということだな」

煙が晴れると同時に姿を現したボス。

良く見慣れた姿であり、小生意気な顔をしている。

簡単に言つと、私である。

マタリも驚愕の表情を浮かべて剣を構えている。

何か話しかけているようだが、何を言っているかは分からない。

音声までは水晶は拾ってはくれないようだ。

悪魔のような笑みを浮かべると、夢の世界の私はマタリへと襲い掛かる。

得物はもっていないようだが、かなり鋭い動きを見せている。

不意を突かれたマタリは、蹴りをもろに腹部へと喰らってしまう。

あれは痛いだろう。

「ちよ、ちよつと。何で私がボスなのよ。

これはどうということよ!!」

「これがこの試験の特徴さ。

そいつが最も強い印象を抱いている奴を具現化するのさ。

俺も何度かボスを務めたことがあるぞ。

まあ、一応光栄なことではあるな」

「確かに、この子のインパクトは相当なものだからねえ。

ちつこい癖に偉そうで馬鹿力だし。口も悪いし態度も悪い。

忘れたくても忘れられないわよねえ」

気のせいか、悪口を言われた気がする。

これは私の胸に刻み込んでおく。いずれ仕返ししてやる。

夢の世界のマトリは、例の手合わせ時のように我を失い始めている。
一撃喰らうとバーサーカーに変身するのだろうか。

そうこうしている内に、超至近距離での殴り合いが始まったようだ。
マトリは剣を放り投げ、獰猛な笑みを浮かべながら攻撃を仕掛けて
いる。

私モドキは押されながらも、反撃を繰り返している。

お互いの顔は腫れ上がり見れたものではない。

観戦していた酔っ払い達も、少し引いている。

「だからって。何で勇者の私がやられ役なのよ！

納得がいかないわ。ちょっと。私をあそこに送り込みなさい」

「無茶を言うな。介入できる訳がないだろう。

第一お前が行って、何をしようってんだ」

「簡単よ。私が代わりにブチのめすのよ。

自分がやるなら良いけど、人にやられると腹が立つのよね！」

「何をムキになってるのよ。

ほら、仲間ならマトリちゃんを応援して上げなさいな。

小憎らしい小娘を、コテンパンに叩きのめすよう祈らないと駄目よ
お

私の頭をツンツンと小突いてくるピンクィー。

本当にムカつく女である。どうやって反撃してやるのかと思案して

いると、夢の世界で動きがあった。
マトリの拳が私モドキの顔面を完璧に捉え、昏倒させる事に成功したのだ。

崩れ落ちるモドキを、思い切り蹴り飛ばして叩き起こすと、容赦なく連打を繰り返すマトリ。

その姿はまさに狂戦士といったものである。

笑みを浮かべながら倒れこむ私モドキの首を両手で掴むと、力を籠めてへし折った。

細首が嫌な方向に捻じ曲がる。

私の姿のまま、モドキは息絶えてしまった。

「あらら。アレルちゃんが死んじゃったわ。

ああ、神よ。彼女に安らかな眠りをお与えください。

その哀れな魂がどうか救われますように。

フフ、マトリちゃんも中々やるわねえ」

「……………勝手に殺さないで頂戴」

心の底から楽しそうに微笑むと、十字を切るエーデル。

マトリは嬉しそうに勝利の雄叫びを上げている。

モドキの死体を踏みつけながら。

……………マトリの奴。流石にやりすぎである。

もう少し加減というものがあるだろうに。

私モドキとはいえ、なんだかムカついてきた。

「どつやら試験は合格みたいだな。

ああ、あんまり気にすることはないぞ。

敵愾心を持っているとかそういうのではなく、

単に印象の強さの度合いでボス役は決まるからな」

ロブがフォローしているようだが、私の耳には入っていない。
戻り次第、お仕置き決定である。これは確定だ。

ようやく我を取り戻したマタリが、台座の石を手に入れると水晶の
光が徐々に消えていく。

マタリの試験は無事終わったようである。

意識を取り戻すと、慌てて状況を確認しようとするマタリ。
顔をペタペタ触って怪我の具合を確かめている。

夢の世界の出来事なので、現実では無傷のようだ。

私はマタリにゆっくりと近づいていく。

「あ、あれ。お、終わったのかな。

一応石は手に入れたはずだけど」

「……おかえりなさい、マタリ。

随分と大変だったみたいね。

本当に心配したのよ」

「あ、アレルさん！ そうなんです。

石を守っていた敵が、実はありえるさんによ

」

言い切る前にマタリの頬を思い切り抓る。

抓って捻る。手加減せずに。

私の顔には愉悦が浮かんでいるだろうか。

「知ってるわ。全部見てたから。

それにしても、随分とご機嫌な戦いぶりだったわね。

日頃の恨みがもしかして出ちゃったのかしら

「い、いひゃいです！」

「夢の世界の私はもつと痛かったと思うわよ。首が気持ち良さそうに折れ曲がっていたしね。それに比べたら、なんてことはないでしょう？」

「ひゃ、ひゃめてくだひゃい！」

ひ、ひぎれひゃいますー！」

「うん？ 全然聞こえないわ。

もつとハッキリ喋りなさい」

じたばたと暴れるマタリ。

私の手は決して離れない。

笑顔で万力のように抓りあげる。

「おい、じゃれ合いもそのくらいにしておけ。

一応神聖な試験の最中なんだぞ。

マタリ、持ち帰った石をこちらに見せてみる」

ロブの言葉に仕方なく手を離す。

神聖な試験の癖に、晒し者になっているのはどこのどいつだ。文句が喉元まで出てくる。

慌てて距離を取ったマタリが非難の声を上げる。

「ひ、酷いです！ 何もそんなに抓らなくても。

ほら、見てください。また痕が残っちゃいますー！」

「まあそれは良いから。早く石を見せてあげなさいよ。ほら、手に何か握ってるじゃない。きつとそれが星石ってやつよ。凄い凄い」

「……凄く話を逸らされてる気がします」

大声を上げるマタリを宥める。
私より年上の癖に子供のようである。

まだ何か言いたそうなマタリだったが、
渋々といった感じで握っていた石をカウンターに置いた。
先程とは違い、淡い光を放っている。
夢の世界だと、輝きが増すのかもしれない。

「よし、認定試験は合格だ。
後は星石がお前の職業を判断してくれる。
先程の戦い方だと、下手すると武闘家になるかもしれない」

「え、ええ！？ 私が武闘家ですか！？
そ、そんな。困ります！」

「別に深刻に考える必要はない。
あくまでも適正だからな。
剣を使って戦うのもお前の自由だ」

「で、でも。私剣以外使えませんし。
いまさら武術に適正があるなんて言われても……」

ウジウジと悩み始めるマタリ。

まだ認定された訳でもないのに、仕方がない奴だ。

「グダグダ悩んでても仕方ないでしょ。

さっさとこの石に判断してもらいなさいよ。

後のことはそれから考えなさい」

「こいつの言う通りだ。

ほら、その石を持って強く念じるんだ。

ああ、持った方の手に刻印がされるから気をつける」

「ね、念じる？ 何を念じたら良いでしょうか」

「なりたい職業でも思い浮かべたらどうだ。

別に何でも良いんだ。とにかくやってみろ」

戸惑いながらも、ロボの指示通りに星石を左手に持つ。

そして目を瞑りながら、うーんと唸り始めた。

「……戦士、偉大な戦士に私はなりたい。

アートの名を汚すことのない、立派な戦士に」

狂戦士の間違いだろうと思ったが、口には出さない。

私は空気が読める女なのだ。

石が一瞬だけ強い光を放つと、マタリの左手が輝き始める。

なにやら紋章のようなものが浮かび上がり、やがて光は消えていった。

「……成功のようだな。おい、もう目を開けて大丈夫だ。

左手に紋章が刻印されたぞ」

「ほ、本当ですか！」

「あ、ああ。無事戦士として認められたみたいだ。

……よ、良かったな、マタリ」

何故か言い淀むロブ。その顔は少し引き攣っている。

ロブの言葉にマタリが嬉しそうに目を開け、自分の左手を確認する。満面の笑みが徐々に翳りを帯び始め、目蓋を何回か擦り始める。

どうも納得いかない何かがあるらしい。

確かに『剣』の紋章が左手に刻まれている。

これが戦士の証なのだろう。以前戦った賞金首は、ナイフと鍵の刻印が入っていたし。

「あ、あのう。こ、これ何かの間違いじゃないですか？

何かやたらと過激な刻印なんですけれど」

「うん？ 剣の刻印は戦士の証だ。

全く何の問題もない。他は細事に過ぎないぞ。

そんなことに囚われているようでは大成できん」

左手の紋章を直視せずに、適当なことを述べるロブ。

やはり深く突っ込みたくないようだ。

先程のイカれた戦いぶりを見たら、それはそうだろうなと思う。

「そ、そうじゃなくて。なんで私に髑髏印が……。

うつっ、なんか嫌です。きつと夢に出てきます」

髑髏に交わるように突き刺さる二本の剣。

かなり前衛的なデザインである。まるで海賊旗のような。実にマタリにお似合いだ。水晶も良く分かっている。やはり戦士は戦士でも、『狂戦士』だったようだ。分類としては戦士だから、一応間違っではない。

「アンタに実にお似合いよマタリ。無事（狂）戦士として認められて良かったじゃない。その刻印、本当に素敵よ」

「……か、顔が笑ってますよアレルさん。それに皆引いてるじゃないですか！！うつつ、これ消せないんですか？」

刻印をゴシゴシと擦り始めるマタリ。残念ながら消える気配はない。刻印と言っぐくらいだから、それはそうだろう。

「消せるはずがないだろう。まあ消す方法がない訳でもないが。一度消したら二度と付けられん。迷宮に入ることは出来なくなるぞ」

「うつつ、そ、そうなんですか。……じゃ、じゃあ本当は嫌だけど我慢します。な、なんで私にこんな髑髏マークが。もっと可愛らしいのが良かったのに」

猫に剣でもそれはそれで困ると思う。

「いいじゃないのマタリちゃん。」

そこらの雑魚は、その刻印を見ただけで怯えて逃げ出すわよ。
フフ、そのうち素敵な称号で呼ばれるでしょうね」

髑髏の戦士マタリ。

死神戦士マタリ。

全く似合わない称号である。

『髑髏になりそうな戦士』マタリだとピンとくる。

「……箆手で隠して見えないようにします。

髑髏印なんて縁起が悪いですし！」

「もう遅いんじゃない？ ほら。

明日にはギルド中に広まっているわよ」

観戦していたギルド員たちがヒソヒソとこちらを見ながら話している。
直ぐに噂は広まることだろう。

マタリがガクリと肩を落とす。

私も噂が広まるように協力しよう。『狂戦士マタリ現る！』とでもして。

別に先程の一件を根に持っているわけでは、決してない。

「よし、マタリはこれで良いとして。

次はお前だな、アレル」

「……全然良くないです。大問題です」

ぶつぶつと呟くマタリ。私は聞き流す。

「ようやく私の番か。サクッと終わらせるわよ」

「あ、アレルさん、頑張ってください！
アレルさんならきつと大丈夫ですから！」

左手を隠しながら、私に応援の言葉をかけるマタリ。

余程お気に召さなかったらしい。

また今度からかってやるとしよう。

ちなみに、私は頑張らなくてもあの程度の雑魚は余裕である。

問題は、何がボス役で出てくるかである。

印象に残る敵といえば、やはり魔王クラスであろうか。

それともインパクト重視で覆面パンツが出てくるかも知れない。

「ではこつちへ。水晶に手を乗せて気を楽ししろ。

……お前には言うだけ無駄だったかな」

「はいはい」

私は常に自然体である。こんなことで気負ったりはしないのだ。
だって勇者だから。

「アレルちゃんも頑張ってるね。

貴方の戦いぶりにも注目しているのよお。

フフツ、どんなボスになるのか楽しみだわ」

「……アンタは大人しくしてなさい。

というか、表に出てなさい」

「それは嫌。ここで精一杯応援するわね」

ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべるエーデル。
やはり叩き出すべきであった。

「準備はよろしいですか？
それでは術を発動します」

鑑定士が再び詠唱を始める。

強い光が私を包み、意識が深く沈んでいく。

深く深く沈んでいく。まるで水中に沈んでいくかのように。

私の意識は深い闇に完全に包まれた。

私を待ち受けていたのは、先程の神殿ではなく見覚えのある光景だった。

私が旅に出たその日まで、十数年の間暮らしていた街並み。

かつての我が故郷『アリアハン』だ。

見間違えるはずもない。私が愛し、そして憎んだこの街。

無表情で周りを見渡す私に、一人の男がゆっくりと近づいてきた。

「……良く帰ってきたな、アレル。

お前の事をずっと待っていたんだ。

皆、本当に待っていたんだぞ」

私に優しい眼差しを向ける男。

その体つきは筋肉質で、かなりの鍛錬を積んでいる事が窺える。

私にこんな知り合いはいない。
優しい声を掛けてくれる人間など、誰もいない。

「 アンタ誰よ。初対面でいきなり慣れ慣れしいわね。
……私に近づかないで。それ以上近づくな！」

私の身体は硬直して動かない。動かすことが出来ない。
警戒する私の声も聞かず、その男は近づいてくる。
やがて目の前までくると、私の肩に手を優しく乗せた。

「母さんもずっと心配していたんだ。
もうお前に寂しい思いをさせることもない。
さあ、家に帰ろう。私達の愛するただ一人の娘、アレルよ」

「……離して。私はアンタの事なんか知らない。
本当に知らないのよ！」

「すまなかつたなアレル。
もう大丈夫だ。……辛かつただろう。
お前は、本当に優しい子だったから」

男が私を抱きしめると、懐かしい温もりが私を包み込む。
それはまるで毒のように、私の身体を蝕んでいく。
私が必要ないとかつて切り捨てたもの。
本当は切り捨てたくなかったもの。

それは、こんなにも、残酷で、温かい。

・星見の水晶

教団創設者『赤き衣』こと、アークマージが製作した魔道具。使用した者の適正を判断し、職業の証を身体に刻む。術を発動することで、認定試験が開始される。

職業認定試験の真の目的は、勇者になり得る人物を発見することである。

勇者の誕生、到来を恐れたアークマージが取った防衛策の一つ。ギルド制度自体が、勇者選別装置とも言える物であった。

魔素を効率よく収集し、脅威となる『勇者』を初期に発見する制度。この事実を知っているのは、破門された元教団幹部のみである。

水晶には、標的の精神を破壊する罠が仕組まれている。

『勇者を如何に殺すか。私はそれだけを考えてきた』

第十六話 勇者と狂戦士（後書き）

全てアークマージさんの計画通り。

第十七話 勇者の刻印

優しく私を抱きしめる男。

その温かさに恐怖を覚えた私は、咄嗟に突き飛ばす。纏った『鎧』が壊れてしまうから。

私は戻るわけにはいかない。今更戻れない。きつと壊れてしまうから。

「どうしたんだアレル。」

いきなり突き飛ばしたりしたら驚くじゃないか」

驚いた表情を浮かべる男。

私を騙そうとしているようには見えない。

「……アンター一体誰よ。赤の他人が馴れ馴れしい！」

「……ふう。まだ小さかったから仕方ないか。

お前を置き去りにして、旅に出た私が悪いのだからな。

私はオルテガ。お前の父さんだよ」

「嘘を吐くな！！ お前はオルテガじゃない！」

「嘘じゃないさ。正真正銘、お前の父オルテガだよ。

疑うなら、母さんに聞いてみても良い。

すぐに証明してくれる」

こいつは嘘を言っている。

だってオルテガはもう死んでいるのだから。

アイツは大魔王の居城で、キングヒドラとの戦いにて力尽きたのだ。

全身大火傷を負い、その顔は誰の物かすらも判別できなかったが。私はアイツの遺言を聞き、最期を看取ったのだ。

その際に、アイツは自分のことをオルテガと名乗り、私のことも話していた。

だから確信を持って言える。

これはまやかし。こいつはオルテガの名を騙る偽者だと。

「悪いけどね。私はオルテガの最期を見ているのよ。

私を騙そうだったってそうはいかないわよ！

さっさと薄汚い正体を現しなさい！！」

「……そうか。あの時、私の最期を看取ったのはお前だったのか。

すまなかったなアレル。気付いてやれなくて。

お前が怒るのも無理はない」

「な、なにを」

納得したような表情をみせるオルテガもどき。

「確かに私はキングヒドラとの戦いに敗れて死んだ。

私にはルビス様の加護はないので、あの場所では回復や蘇生も無理だろう。

肉体は損傷を受け、酷い有様だったからな」

私はあの時、回復と蘇生を試みたが駄目だった。

偽者の言うとおり、肉体に損傷を負いすぎていたのだ。

加護がない者は、そうなってはどつにもならない。

「……………」

「だがな、お前の『孤独』を哀れんだルビス様が、私を蘇らせてくださったのだ。
世界を闇から救い出した褒美としてな。だからこうして私は存在している。」

そして異世界に落ちたお前を、助け出す機会まで頂けたのだよ。
さあ、アレル。私の手を取りなさい。そして私達と幸せに暮らそう」

私に向かって手を差し伸べてくる。

それを私は即座に強く打ち払う。

戯言ばかりぬけぬけと。人を誑かすのが魔物の常套手段だ。
絶対に騙されてはいけない。」

「 黙れ。魔物がよくもぬけぬけと。」

ルビスが蘇らせてくださったですって？

そんな夢物語を信じるほど馬鹿じゃないのよ。

神がそんな甘い事をする訳ないでしょうがッ！！」

ルビスがそんな簡単に力を貸すとはとても信じられない。

たかが小娘を哀れんで『蘇生』させる神などいる訳がない。

ならばはじめからオルテガに加護を与えれば良かったのだから。

そうすれば世界は救われていた。

私にあり、オルテガになかったもの。精霊神ルビスの加護。

それが有り続ける限り、私は戦いで死ぬことはない。それこそが勇者の証明。

寿命の限り魔物を殺すのが私の定め。死ぬまで戦い続ける。

「 ではお前はこれからどうするのだ、勇者アレルよ。」

私達を拒絶し、お前は一体どこへ進むというのだ」

「……何がよ」

先程までの温和な雰囲気を消し、能面のような表情を浮かべる偽者。私はつい視線を逸らしてしまう。

「お前には信頼出来る友もなく、愛する者もない。

誰にも心を開かないから愛される筈もない。

そして今、帰るべき故郷すらも失おうとしている。

残されたのは『勇者である』という小さく惨めな自尊心だけだ」

「だから？ だから何なのよ！」

好き勝手なことを言う魔物。

いつもの私なら即座に叩き潰している。

だが、先程から攻撃呪文が全て掻き消されてしまっているのだ。

どうやらここは特殊な空間らしい。

私はまんまと罠に嵌ってしまったという訳だ。

「ルビス様に、お前が異世界に落ちてからの事も聞いている。

お前は『勇者』であるという唯一の価値まで、簡単に否定されてしまった。

何がしたいかを見つけることも出来ず、ただ迷宮に挑む日々。

お前にとっては地獄のような世界だろう。

何の為に生きているのかすら分からないのだから」

言葉の刃が私を抉る。

「……るさい」

「戦っている時だけは、気分が高揚して全てを忘れることが出来る

のだろう。

屑共にトドメを差すときの愉悦の表情。最早勇者の面影すら感じられない。

人々を助ける為に戦うのが『勇者』だ。決して己の為ではない。お前はそれから必死に目を背けようとしているだけだ」

淡々と事実を述べるオルテガの偽者。

確かに私はこの世界に来て、先を見ることが出来ていない。何をすれば良いのか分からないのだ。

魔王を倒し、世界を平和に導くのが勇者の使命。

では、それを達成したら私はどう生きれば良いのか。

誰も教えてはくれなかった。

だから、私もどうすれば良いのか分からない。

大金を手に入れて、幸せになるなどただの幻想だ。

幸せな生活について、何一つ思い浮かべることが出来ないのだから。

「……うるさい」

「この世界にいては、お前の精神はいずれ崩壊してしまう。」

自分でも気が付いているだろう。徐々に心が壊れ始めているのが。

これが最後の機会なのだアレルよ。

私と共に家に帰ろう。私達家族は、最後までお前と一緒にだよ」

「うるさいのよ、屑野郎が!!」

黙っていれば好き勝手言いやがって!!」

今すぐ死になさいッ!!」

腰に差している刃こぼれしたダガーナイフ。

それを偽者の心臓目掛けて一気に突き出す。

「無駄だよアレル。ここではそんなことは出来ないんだ」

私の渾身の一撃は、偽者の身体に突き刺さる手前で止まっていた。止められたのではない。私の身体がそれ以上動かなかったのだ。身体が何かに押し込まれているかのように、重い。

「ッ。何だよ。何で動けないの!!」

「私達が家族だからだよ。お前が無意識の内に攻撃することを躊躇ったのだ。」

お前は絶対に私を傷つけることは出来ない。誰よりも優しい娘だからね」

「ふざけるな！ 私はそんなことを思っていない!!
くそっ、くそっ!!」

偽者の言葉に私は激昂する。躊躇う筈がない。

こいつは私の父親でも何でも無い。
ただの幻なのだから。

罵る言葉と共に、私はダガーナイフを必死で突き立てようとする。だが動かない。前へはピクリとも動かない。

「お前はもう孤独な『勇者』でなくても良いんだ。

もう魔王も魔物もない。過酷な日々は終わりを告げたのだ。

平和な世界で、心安らかに暮らそう。ここなら普通の娘として生きていける。

友を作り、やがて愛する者を見つけ、幸せな家庭を築いていく。

それがお前が何よりも欲している『幸せな日常』なのだから」

そうだろうか？ と微笑むオルテガ。
ダガーナイフを握り締める私の拳を、優しく包み込む。
その表情は慈愛に満ち、裏があるようには思えない。

……もし、この手を取ったら私はどうなるのだろうか。
畏ということは分かっている。だが、もうどうでも良いのではない
か。

どうせ戻ったとしても、何かが待っているわけでもない。
私は寿命が尽きるその日まで、一人ぼっちのままなのだから。
まやかしの世界に取り込まれて、誰かが困るわけでもない。

「……………」

「さあ、アレルよ。そのナイフを渡しなさい。

お前にそのようなものはもう必要ないのだから。

平和な世界に武器など必要ない。強さは必要ないのだ。

『勇者』という重荷を捨て、普通の生活に戻ろう」

私の手を少しずつ解こうとするオルテガ。

私は少しだけ迷うが、決断する。

やはり私はこうすることしか出来ないのだ。

ナイフを突いた手を戻し、私は自分の喉を勢い良く掻き切った。
流れるような自然な動作で。

全く躊躇うことなく、刃を横に滑らせたのだ。
オルテガへの攻撃は出来なくても、自分へは出来た。
良かった。本当に良かった。

「 な、なにをしている！ 馬鹿なことを！」

私の思わぬ行動に、オルテガが始めて動揺の声を上げる。
本物が偽者か、そんなことはもうどうでも良い。
ルビスの気まぐれで本当に蘇っていたのかもしれない。
だが私にとって、オルテガは既に死んだ存在なのだ。
あの時、あの場所で、確かにオルテガは死んだ。

噴出す血が世界を赤く染め上げる。自分だけではなく、世界一面を。

「ゆ、勇者であることを、捨てるくらいなら、死んだ方が、マシよ。
わ、私は、勇者、なんだから。」

これで、終わりなら、それでも、構わない。
勇者として生き、勇者として死ぬわ」

私は勇者なのだ。

だからこれで良い。

「……………」

私の返り血を浴びながら、オルテガは無表情でこちらを眺めている。
その目は作り物のビー玉みたいで。私は満足気味に歪んだ笑みを浮かべる。

やっぱりこいつは偽者だったんだ。

でなければ、私の元に駆け寄ってくるはずだ。

だから、コイツは完全な幻、偽者だ。
もし本物だったら、困ってしまうところだった。
選択を誤ったなんて、思いたくない。

コイツの手を取るのが正解だったなんて、そんなことは認められない。

「それ、じゃあね、お父さん？」

これで終わりか、そうではないのか。
果たして私の地獄はまだまだ続くのか。
良く分からない。

私は最後に喉元へダガーナイフを突き刺す。
灼熱の痛みと熱が私の脳を焼き尽くす。
力を籠めて決ると、私の意識は闇に覆われ始める。
黒と赤が入り混じり、私の世界は醜く歪んでいく。

膝から崩れ落ちる私の身体。
赤い血溜まりで、私は赤子のように蹲る。

もう周りには何もいなかった。最初から存在していないかのように
無だ。

意識が途切れるその瞬間まで、吹き上げる血飛沫と共に、ただ狂っ
たように笑い声を上げていた。

頭部に、酷い痛みを感じて私は目を覚ます。
二日酔いのような症状。最高に気分が悪い。

「……あ、頭が痛い。なんなのよもう」

布団を引き剥がし、私は身体を起こす。

テーブルには果物やら水差しやらが置いてある。

空腹を感じたので、私はそれに手を伸ばしつまみ食いすることにした。

「よいしょっと。　　ってアレ？」

私はバランスを崩して、ベッドから転げ落ちてしまう。

激しい音と共に、顔面を床に強打し、私はのた打ち回る。

鼻が痛い。

「な、何の音ですか！　　ってアレルさん、何してるんです！
身体は大丈夫なんですか！？」

どこからか慌てて飛んできたマタリが、口に手を当てて驚いている。

「あ、ああマタリじゃない。ちょっと果物を」

「『ああ』、じゃないですよ！！ 病人は大人しくしててください！

もう、本当に心配したんですからね！」

肩を怒らせて大声を張り上げるマタリさん。
何をプンスカしているのだろう。

「ちよ、ちよっと。そんなに怒らなくても良いですよ。
少し寝坊しちゃっただけじゃないの」

「何言ってるんですか！ アレルさんはもう五日も意識を失って
たんですよ！？」

どれだけ心配したと思ってるんですか！
とにかく、今僧侶ギルドの人に連絡しますから。
絶対に大人しくしててくださいね！」

私を無理やりベッドに担ぎ上げると、再び部屋から退出していくマ
タリ。

展開が速すぎて、ボーっとしている頭がついていかない。
とにかく水でも飲もうと左手を伸ばす。

「ん？」

水差しを取ったところで、手を止める。
左手になにやら紋章が刻印されている。

仮許可証時に付けられた、黒い星と剣のマークが別の物に変化して
いるのだ。

これが職業刻印なのだろう。いや、間違いない。マタリもこのように変化していたし。どうやら職業認定試験には目出度く合格していたようだ。

私はまじまじと自分の左手を見つめる。

翼を広げたような鳥の紋章。

勇者ロト。かつて私に付けられた勇者の異名。

私の残した装備は、ロトの装備として語り継がれるのだろうか。あの忌まわしい装備の数々が。

「ロトのしるし。私の身体に刻み込まれた勇者の証。やっぱりこの世界でも、私はそうなんだ。勇者として認められたんだ。」

フフ。アハハハハ！」

堪えることが出来ず、私は笑いを漏らす。

嬉しいのか、悲しいのか。それは私にも分からない。

左手を窓にむけて翳す。太陽が掌を照らし、金色に輝いている。

金色の鳥の紋章。勇者である証。

私はそれを眩しそうに見つめる。

「五日も寝込んでたくせに、随分と元気そうねえ。

そんなに笑い声をあげちゃったりして。

心配して損しちゃったわあ」

ふと横を見ると、エーデルが呆れた表情で立ち尽くしている。

私の独り言が聞かれてしまっただろうか。少し気まずい。

「い、いつからいたのよアンタ」

「最初から最後までよお。」

正確には、貴方が果物を取ろうとしてズッコけたところからねえ」

本当に全部じゃないか。

いるなら声を掛ければ良いものを。ピンキーだけあって性格が悪い。

「い、いるならいるって言いなさいよ!」

「声を掛けづらい雰囲気だったから控えてたのよ。」

私の気遣いを分かって欲しいわあ」

「ま、まあそれは良いわ。」

ところで、五日間寝込んでいたってどういうことよ。

私はこうしてピンピンしてるじゃない」

話を逸らしてみる。流石に性格が悪いだけあって、ジト目で見られた。

「……貴方、覚えてないの?」

「全然覚えてないわ。水晶に取り込まれてからはさっぱり。」

試験には合格していたみたいだけど」

顎に手を当てて、考える仕草を取るピンキー。

何を悩んでいるのか。

「試験内容の事は? 貴方が『夢の世界』で何をしたのかは覚えて
いる?」

「全く覚えてないわ。気付いたら左手に刻印があつて、今驚いているところだもの」

私の試験はどうなったのだろう。
さっぱり記憶にない。

どんなボスだったかだけでも知りたい所だ。

「……そう。なら良いわ。別に大したことはなかったもの。
順調に進んで、普通に星石を手に入れただけよ。変わったことは何もない。

何もなかったわ」

と、言う割に目つきが真剣である。

「私のボスは誰だったの？ 魔王でも出てきた？
もしかしてマタリだったりして」

狂戦士マタリだったら面白い。

私の恨みを晴らす良い機会だったはず。

「至って平和な世界だったわよ。『敵』なんていなかったし。
羨ましくなるくらい、穏やかな世界だったわね」

「ふーん。そうなんだ」

つまらない試験だったみたいだ。

まあ私が脅威に思う敵なんて、数えるほどしかないし。

「……その刻印」

エーデルが指を差ししてくる。

「何よ」

「相当珍しい刻印みたいよ。どの職業にも該当しないって。今どうするか、各ギルドのおエライさん達が集まって協議しているの。」

協会トップの教祖様まで来ているみたいだし。相当な騒ぎになっているわ。

本当、貴方は一体何者なのかしらねえ」

協会トップの教祖？

なんたら教団の奴か。

迷宮に入る度に、毎回お布施を要求してくるインチキ教団。

「私は勇者よ。何回でも言うけどね」

「その刻印を見た今じゃ、笑い飛ばすことも出来ないわねえ。実力もあり、見たことのない魔法を使いこなす凄腕の戦士。……協会がどういう判断を出すかは分からないけれどね」

「もし無職だったらどうしようかしらね」

「心配しなくても、何かしらの職業を付けて来るわよ。貴方が望む物かは分からないけれどね」

前例なしの口トの刻印。

果たしてどうなることやら。

私が勇者と言っているのだから、その通りにすれば良いのに。そうすれば、協会の糞女を見返してやることが出来る。

左手を突きつけて、得意気に微笑んでやるのだ。
あの女は齒軋りして悔しそうに、探索許可証を発行する。
さぞかし気分が良いだろう。

「で、私はこれからどうしたら良いの？」

とりあえず腹ごしらえと、汗臭いのをなんとかしたい。
温泉に行くのも良いだろう。

「……暫く安静にしてなさい。意識回復の見込みなしとまで言われたのよ。」

後でマタリちゃんにお礼を言っておきなさいよ。
貴方の看病を甲斐甲斐しく、一生懸命にやっていたんだから」

大人の貫禄で睨みつけてくるエーデル。
私は思わず口籠る。

「……わ、分かったわよ」

「素直で宜しい。着替えさせたり、水分補給、下の世話まで。
私にはとっても出来ないわあ」

「……………」

「良い仲間を持ったわね。貴方、幸せ者よ」

知ったような顔で微笑むと、散らかった部屋を片付け始めるエーデル。
ル。

私は返事をせず、布団をかぶる事にした。

やがてマタリが、僧侶を連れて帰ってくる。
以前ジャバと共に迷宮にいた、一応顔見知りの僧侶だ。
質問に何個か答えた後、念のために治癒の魔法を掛けていった。
何でも精神を癒してくれる魔法らしい。
そんな魔法あるのかと尋ねたら、笑って答えてくれなかった。

「でも、本当に意識が戻って良かったです。
もう戻ってこないのかと思ってました」

マタリが胸に手を当てて息を吐いている。
大袈裟な奴である。

「ちょっと寝すぎただけよ。アンタは心配しすぎ。
そんなことじゃ、直ぐに老けちゃうわよ」

禿げはしなくても、白髪が増えるだろう。
アリアハンの大臣は、余計な事ばかり考えているせいで、頭が禿げ
上がっていた。

「大袈裟じゃありません。あんな姿を見たら、心配するに決まっ
ます！」

「マタリちゃん？」

エーデルが、マタリへと咎めるような視線を送る。

「……あ、いえ。何でもありません」

「何よそれ。ハッキリしないわね。」

言いたいことがあるなら全部言いなさい。今すぐに」

急にトーンが下がったマタリ。

基本的に隠し事が出来ない女なのだ。

よって追求しようとしたが、邪魔が入る。

「とにかく、今日明日は絶対安静よ。」

それまでにはギルドから連絡も入るでしょう。

勝手に遊びに行ったりしないように」

エーデルが偉そうに私の額を突いてきた。

私は即答で拒否する。

「嫌よ。今から私は温泉に行くのよ。」

この汗臭い身体を何とかしないと寝られないわ。

誰が何と言おうと、絶対に行くから」

マタリが身体を拭いてくれていたらしいが、やはり身体が臭う。

しっかりと洗わなければ。広い温泉で。

「そ、それでしたら、酒場の共同浴場を使えば。」

この時間なら空いてますよ」

「あんな狭い所じゃ気分が休まらないでしょ。」

私は広いところで寛ぎたいのよ」

「で、でも。病み上がりで歩き回るのはどうかと」

酒場の共同浴場。狭い汚い混んでいると良い所がない。慰み程度に作られた本当にしょぼい浴場なのだ。少し足を伸ばして温泉に行った方が遥かにマシである。

「一度言い出したら聞かないわねえ。

仕方がないわマタリちゃん、諦めましょう。

全くまだまだ子供なんだから。

それじゃ後で皆で行きましょうか」

呆れながら両手を上げるエーデル。

別に着いて来てくれとは一言も言っていない。

しかもまた私を子供扱いしている。

我俣を言っている訳ではないのに。

「い、いや。別に私一人で良いんだけど。

温泉の場所はしっかりと覚えてるし」

「何言ってるのよ。またぶっ倒れられでもしたら迷惑でしょう。

朝御飯を食べて、準備をしたら向かいましょう」

エーデルが勝手に纏めに入った。

それにマタリも乗る。

「そうですね！ 私マスターに行って朝食を貰ってきます。

まずは腹ごしらえですよね！」

「あ、ちょっと待ってマタリ」

出て行こうとしたマタリにベッドから声を掛ける。

私はアレを一日一回は読まないと落ち着かないのだ。

「？　どうかしたんですか、アレルさん」

「うん、金庫から私がいつも読んでる本取ってくれる？

私の袋に入れてある奴なんだけど。

日課みたいなものだから」

私の言葉に、何故か表情を曇らせるマタリ。

だが、すぐに金庫から本を取り出しこちらに手渡してくる。

古びた手触りが、私の心を安らかにさせてくれる。

早速読み始めようとした私に、マタリがいきなり大声を上げる。

「あ、あの！」

「どうかした？　ああ、朝食は軽いものが良いわ。

肉は出来るだけ止めてね。ちょっと重すぎるから。

別になかったら何でも良いけど」

別に肉でも良いけど、朝はパンぐらいが丁度良い。

「い、いえ、そうではなくて。

あ、あの。今度、他の本を探しに行きませんか？

この街にも面白い本が結構あるんですよ！」

「そ、それは構わないけれど」

私は訝しげにマタリを見る。

マタリの顔は真剣だ。特にふざけている訳でもなさそうである。隣のエーデルは黙ったままだ。何を考えているかは分からない。

「はい、きつとですよ！ 約束しましたからね。最後がハッピーエンドのお話一杯あるんです。きつとアレルさんも気に入ります。私の大好きなお話なんです！」

「そ、そうなんだ」

「はい！ それじゃいつてきますね！」

テンションを勝手に上げまくっているマタリ。

そのまま私の返事を待たずに、外へ飛び出していった。

流石は猪。突撃には定評がある。

「な、何なのよアイツは」

「……心配してるんですよ。貴方のことを」

「……全然意味が分からないわ」

「そう？ それならそれで良いんじゃないの」

エーデルは私の持つ本を一瞥した後、立ち上がってどこかへ行ってしまった。

「……ふう。なんだか良く分からないわ。

世の中分らない事だらけね」

私は軽く溜息を吐くと、何よりも大事な本を開ける。

ページをゆっくりと捲りながら、私は意識を閉ざしていく。

……気のせいだろうか。いつもと本の内容が違うような気がした。

英雄が見事に魔王を打ち倒す、それで終わりだったのに。

確かにそうだったはずだ。何回も読んでいるから完璧に覚えている。

英雄が魔王を倒して物語は終わるのだ。

間違いなどある訳がない。

私に、その先のことなど想像出来るわけがないのだから。

……だが続きが本には記されている。

魔王を倒した英雄の末路。

私は食い入るようにそれを読み続ける。

自分を見失った英雄は、最後には発狂し自らに刃を突き立てる。

挟まれた喉元から流れ落ちる血が、大地を赤く汚していく。

それを看取ってくれる者は誰もいない。ただ一人寂しく死んでいく

ラストシーン。

私は思わず吐き気を覚える。嘔吐感を押し殺す為に、口元を手で押える。

挿絵には、私そっくりの少女が、『王者の剣』を喉に深く突き刺している場面。

何故だか分からないが、震えが止まらない。

背中に冷たいものが流れ、呼吸が荒くなる。

力を失った手元から本が落ちる。『白紙』のページが捲られていく。

私は自分の身体を強く抱きしめる。

マタリが朝食を持って、再び帰ってくるまで、私はただ一人怯え続けていた。

何に怯えていたのかは分からない。分からないし覚えていない。

私は本当におかしくなっているのだろうか。

脳裏に誰かの言葉が木霊する。

『お前の精神はいずれ崩壊する』

まるで楔のように、私の精神に深く打ち込まれていた。

第十七話 勇者の刻印（後書き）

私はハッピーエンドが大好きです。
本当です。

第十八話 私の職業は？

「はい、次の方どうぞ」

肩を落として列から外れていく、純朴そうな若い男。

恐らくはギルドの『職業認定』を受けていなかったのだろう。そして、このインテリ性悪眼鏡に小馬鹿にされたに違いない。前の事を思い出したら、何だか腹が立ってきた。

こいつは私が協会に初めて来た時に応対した、ムカつく眼鏡女である。

職業認定を見事受けることが出来た私は、マタリを伴い再びここに乗り込んだと言う訳だ。

相変わらずの行列を鋼の精神で耐え抜き、牛歩で数時間掛けてようやくたどり着くことが出来た。

本当にこんなに冒険者がいるのかは、今でも信じる事が出来ない。冷やかし半分や、意味もなく並んでいる馬鹿がいるんじゃないだろうか。

うん、きっとそうに違いない。

「ほら。またしっかりと書いてきたわよ。馬鹿みたいに細かい申請書類をね」

乱暴に書類を机へ放り投げる。

出身地、氏名、職業、迷宮に挑む動機。

そんなことを聞いてどうするんだと言うものまである。

私の苛々を感じているのか、マタリは先程から心配そうにこちらを見ている。

何かあったらすぐに取り押さえるような構えを取っている。

別に暴れたりしないのに、本当に失礼な奴だ。

「……ああ、誰かと思えばこの前の。今回はちゃんと人の話を聞いてきましたか？」

貴方みたいなのは、三歩歩くと忘れてしまいそうですからね」

「私は鳥かッ！！」

一応は鳥に分類されるラーミアだって、三歩歩いても忘れてはしなかった。

アレは以外に頭が良い。性格はあまり良くなかったが。

「ア、アレルさん落ち着いて。興奮すると身体によくありません」

「私はもう元気一杯よ！ いつまでも病人扱いするな！！」

「ふ、ふいまひえん」

マタリの頬を抓ってやる。

それでも心配そうに見てくるお人好し。

こいつは身体の芯まで能天気には違いない。

その癖戦闘狂というのだから、世の中驚きだ。

「他の方達の迷惑になりますので、お静かに。

なんでしたら、一番後ろから出直して下さい下さっても構いませんよ」

挑発的に睨みつけてくる糞女。

本当に嫌な奴だ。

「……良いから早く済ませなさいよ。」

それがあなたの仕事でしょ」

「それでは、確認させていただきます」

そう言うと黙って書類に目を通し始める眼鏡女。
暫くすると溜息を吐いて、書類を手で叩き始めた。

「……何よ。何か文句あるわけ？」

「……念の為に確認しますが、職業は何を？」

「勿論勇者よ。そこに書いてあるでしょ。
眼鏡の度があってないのかしら」

以前とは違い、腰に手を当てて偉そうに答えてやる。
証明がある今、遜る必要は何もない。

「どうぞお帰りください」

手を出口へと向ける眼鏡。

私は即答で拒否する。

「嫌よ」

「……それでは『勇者』様でしたっけ？ そのギルドの職業認定証
を見せてください。

何度も同じ事を言うのは嫌いなのですが、これも仕事なので仕方ありませんね」

完全に見下す視線を向けてくる。

以前と同じ流れだ。だが今の私は前とは全然違うのだ。
フフンと口元を歪めて笑みを浮かべる。
怪訝そうな顔をする眼鏡。

「そ、そんなのないわ、ど、どうしよう。」

「なーんて言うと思った？ ねえ。ねえ。」

机をトントンと叩いてやる。

「な、何を言ってるの？」

「アンタが知らないだけで、私はちゃんと認定を受けたのよ。
協会トップのお墨付きよ。」

ほら、しかとその目に焼き付けなさいッ！」

左手の口トの刻印を眼鏡女に突きつける。

ああ、最高に気分が良い。

思わず顔が紅潮してしまう。

マタリが私のおでこに手を当てて、熱を測っているが気にしない事にする。

「こ、この刻印は、い、一体、こ、こんなの私は見たことがない。

第一、ギルドのシンボルマークが入ってないじゃない！！

そんな刻印があるなんて聞いたことないわ！」

ギルドのシンボルマーク。

戦士ならば剣。魔術師ならば杖。僧侶は十字。レンジャーは鍵だそ
うだ。

どうでも良い豆知識。

私の紋章にそんな無粋なものは付いていない。

だって勇者なのだから。

「あらあら。博識のアンタでも分からないことがあるのねえ。ねえねえ、分からないなら他の人寄越してくれない？このままじゃ話が進まないもの。時間の無駄でしょ？」

以前の恨みを嫌と言うほど晴らしてやる。

心に刻んだことは私は忘れないのだ。

だからそのうちピンキーにも何らかの仕返しをする。

「くッ。しょ、少々お待ちを。上の者に確認を取ってきますので」

悔しそうな表情で奥に引っ込んでいく眼鏡。

その顔は今にも泣き出しそうな感じである。

勝った。私は勝ったんだ。

天を仰いでみる。

マタリが上から呆れた表情で見下ろしていたので、前を向くことにした。

数分後、眼鏡女が奥から戻ってきた。幾分自信を取り戻したような表情で。

……おかしいな。自尊心をへし折ってやったと思ったのに。意外に打たれ強いのだろうか。

「大変お待たせいたしました。確かに、職業認定を受けていらっしやるようです。」

協会でも確認が取れましたので、許可証を発行させて頂きます。
職業刻印のある手をお出してください」

「わ、分かったわ。これで良いのかしら」

私は少し動揺した口調で返事をする、左手を出す。
何か様子がおかしい。

「ええ、結構ですよ」

「……………」

眼鏡の顔が、どことなく嬉しそうなのだ。
嫌な予感がする。私のこういふときの勘は当たるのだ。

「それでは、戦士ギルド所属、職業：勇者（仮）のアレルさん。
貴方に星の導きがありますように」

小さな声で呪文を詠唱すると、私の口トの刻印に輝きが灯る。
少しの間光を放っていたが、やがて静かに消え去っていった。
これで探索許可証発行ということなのだろうか。

それよりも。今何か不穏なことを言わなかったであろうか。
何か（仮）とか聞こえたような。
気のせいだろうか。確認してみよう。

「ね、ねえ。もう一度職業のところ言ってくれろ？
ちよっと聞き逃しちゃったみたい」

「勿論良いですよ。職業：勇者（仮）のアレルさん。
必要なら何十回でも、何百回でも言っただけで差し上げます」

飯のところだけ、やたらと語気を強めて強調する眼鏡。
どうやら聞き間違いではなかったらしい。

「どどどどど、どういう事よ!？」

ロボの奴は勇者として認定されたって言ったのに！
話が全然違うじゃないの!」

「ア、アレルさん。落ち着いて」

「馬鹿マタリ！これが落ち着いていられるか！

何なのよ仮って！勇者に仮なんてある訳ないでしょうがッ!」

激昂する私を、再び余裕の視線を送ってくる眼鏡女。

「当たり前の話です。何にもしてない人を、いきなり勇者なんて認めることは出来ません。

貴方は、ただ伝承にある『勇者』と同じ刻印を持っているだけなの
ですから。

その名に見合った働き、恥じない活躍を見せない限り（仮）は取れ
ませんよ」

『残念でしたな』と、心にもない言葉と共にプツと笑いを漏らす。
教団の教典の中に、私の刻印と同じマークがあったのは確かだ。
勇者の証として記された、ロボの紋章。

それこそが何よりの証明であると、ロボが偉そうに話していた。

「……そ、そんな馬鹿な」

ヘナヘナと力が抜けてしまう。
足元がグラつく。視界が歪んでいく。
マタリが慌てて私を担ぐ。

「だ、大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫よ。で、でも少しだけ休ませて頂戴。
……アンタは自分の許可証貰ってきなさい。
私のことは良いから」

「で、でも」

「でもじゃないわ。またこの行列に並びたいの？
私は外で座ってるから。終わったら来て頂戴」

マタリの腕を強引に話すと、背中を叩いて眼鏡の前へと送る。
戸惑うマタリに手を上げると、私は行列から外れてトボトボと歩き出す。

「……………ちくしょう」

以前と同じ言葉を吐いてみる。
胸に染み渡る敗北感。何もやる気が出ない。
勇者に仮なんてあったのか。初めて知った。

私は協会前にある公園のベンチに横になる。
悪ガキ連中が、興味深そうにこちらを見てくるが無視をする。

照りつける太陽に左手を向けると、ロトの紋章が強く輝いたように見えた。

それがあまりに眩しかったので、私は目を瞑ることにした。

三国及び、スリースター教団により平等かつ公平に管理運営される協会。通称『協会』。

ここアートの街に存在する、迷宮に挑戦する冒険者達を管理する組織である。

協会トップには、スリースター教団の『教祖エレナ』がその座に就いている。

彼女の補佐役兼監視役として、各国より地位のある者達が送り込まれている。

が、実権は全て教団が握っている為、彼らは事実上の名誉職という扱いだ。

彼らも手を尽くして魔素を手に入れようと働きかけてはいるが、結果は芳しくない。

教団の徹底した秘密主義の前には、手練の外交官達も手を焼いているのだ。

業を煮やした各国指導者は、自国兵力を迷宮に投入し、自らの手で

入手する方針に転換している。

しかし抽出技術が未熟な為に、中々纏まった量が手に入れることは出来ない。

また、迷宮内での小競り合いも度々発生し、その損害は増える一方だ。

それでも戦力の投入を諦めないのは、魔素の持つ特性である。

魔素を用いて製造された武具には、強力で特殊な効果が付属するのだ。

これを軍事兵器に活かすことが出来れば、確実にアドバンテージを握ることが出来る。

更に、下層部においては星遺物と呼ばれるレアアイテムが稀に発見される。

かつての世界の遺物とも、異世界からの漂着物とも噂される物品。

伝承によれば、死者蘇生効果を持つ植物が存在するとあり、支配者層から見れば垂涎の逸品である。

故に、各国はどれだけの犠牲を払おうとも、迷宮探索に血眼になっているのである。

アレルがベンチに力なく横たわっている頃。

協会にあるエレナの執務室に、一人の客人が訪れていた。

レンジャーギルドのマスターにして、エレナの姉代わりでもある女性。

エレナへの『洗脳』が失敗した原因を作り出した張本人である。

妖艶なドレスに身を包み、その気性を表すような赤い長髪が翻る。

カンダタの妻にして鞭の使い手、ギルドマスター・ジャスミンである。

年齢は不詳だが、20代後半から30代前半という噂が流れている。本人に確認した勇敢なギルド員は、一週間程口が聞けない身体にされてしまった。

「ジャスミン姉さん。私は忙しいんです。

お茶を飲むなら、自分のギルドで飲んでください」

「ここで飲むから美味しいのよ。教祖様ご用達の超高級茶葉。

飾り付けられた、一流美術品の数々を眺めての優雅な一杯。

ああ、一度飲んだら他ではとても飲めないわ」

「それ、市場で私が買った普通の茶葉ですよ」

呆れた顔でエレナはジャスミンを見つめる。

その間も手は動き続けている。書類にサインをするのが主な仕事だ。

協会と教団のトップとしての二足のわらじ。

仕事はあつという間に積みあがっていく。

「……大事なのは値段より心遣いよね。

ああ、身体に染み入るわ」

ズズーツと音を立てて啜る。

お茶よりも酒の方が好きなくせにと、エレナは溜息を吐く。

「とにかく、飲んだら出て行ってくださいよ。

お目付け役がうるさいんですから。

今も手ぐすね引いて待っているでしょうしね」

小言を漏らすしか脳がない各国の監視役。

一応賓客待遇ではあるが、実際は軟禁状態のようなものである。どいつもこいつも放っておくと、勝手に工作活動を始めるから油断ならない。

一癖も二癖もある連中なのだ。

「あんまりムカつくようなら私に言いなさい。

ビシッと躡けてやるから。一度コレを喰らった奴は、犬みたいに大人しくなるわよ。

あらよつとー！」

腰に付けている愛用の鞭を取り、軽く振ってしならせる。

華麗に捌きながら、窓際に飾られている花瓶を思いつきり打ち付けた。

鋼の鞭は、花瓶の上部だけを切り飛ばし、切り取られた花はエレナの机に見事に着地する。

「……私のお気に入りの花瓶が。何ということを」

「こゝ、細かいことは良いじゃない。そんなことより、ほら。

あの一件、アレで本当に良かったわけ？」

いつものように話を逸らすジャスミン。

レンジャーに求められる才能の一つ。巧みな話術である。

『話を逸らす』は高等テクニクに分類される。

使いこなすには経験を積まなければならない。

「……後で必ず弁償してもらいますよ。

絶対に忘れませんからね。

それで、あの一件とは？」

「ほら、勇者のアレよ。うちの馬鹿が偉くプッシュしてたあの娘。何でも無事に意識を回復したそうよ。馬鹿が動揺しまくってたからね。」

全く、そういう趣味でもあったのかしら。まーたーから躡けしなおさないと駄目ね」

ジャズミンが鞭をしまい、椅子に大きな音をたてて腰掛ける。

『うちの馬鹿』とは、当然カンダタの事である。完全に尻に敷かれており、常にやられっぱなしである。

エレナも顔見知りであり、彼らの子供達とはお忍びで良く遊んでいる。

両親に似ず、穏やかで素直な良い子達だ。

「……確かに、刻印は全く同じです。」

ですが、いきなり勇者として認めるには反発が強すぎるでしょう。特に僧侶ギルドのマスターは、顔を真っ赤にして反対していましたし」

どこの馬の骨かも分からぬ者を、勇者として認定するなど言語道断だと言いつつ男。

あまりの声のでかさに、エレナは耳を塞いでいた。

「禿げ頭のニカラグのこと？ あんな生臭坊主はさつさと首にしたほうが良いわよ。」

戒律戒律と五月蠅い割に、何人も女困ってるエロ坊主だしね。

いつかこの鞭で締め上げてやるわ。きつと真っ赤なタコ坊主になるわよ」

僧侶ギルドマスター、ニカラグ。

教団の敬虔な教徒であり、治安維持隊からマスターに上り詰めた豪

腕のモンク。

実力はあるのだが、色々と頭の痛い人物でもある。

具体的に言くと、病的なまでに女癖が悪いのである。

強引に迫ったりはしないが、その独特の話術で口説くのが手法らしい。

布教活動を行ってきただけあって、中々の技術のようだ。

ちなみに教祖のエレナにも、色目を使ってきたことがある恐れ知らずである。

その際は激怒した異端審問官に『一月』程監禁されて、徹底的に再教育されてしまったが。

矯正されたかと思ったのだが、全く治ってはいなかった。いずれ折をみて、再々教育を行う予定である。

「ギルドマスター同士の殺し合いは簡便してくださいよ。

私の胃がまた痛みますから。

この若さで、胃薬が手放せないんですよ」

はあ、と深い溜息を付くエレナ。

慣れっこではあるが、ジャスミンの場合後先考えずに本当にやる可能性がある。

ちよっと偉くなるからと、エレナに告げた後、とんでもないことをやってのけた。

レンジャーギルドマスターの地位を、決闘により実力で奪い取ったのだ。

舐めきっていた前ギルドマスターは、完全に再起不能となり田舎に帰ってしまった。

彼女が得意気な顔で、エレナに報告してきた時の顔は忘れることが出来ない。

またキリキリと胃が痛み始める。

「相変わらずアンタは心配性ねえ。もう教祖なんて辞めてウチに来ない？」

あんな糞みたいなお組織、アンタに似合わないわよ。

ウチだったら一人ぐらい増えても全然気にしないしね」

口調はふざけているが、ジャスミンの目は真剣である。

「……今辞めては大陸中に混乱が生じます。

それだけは出来ません。私は逃げるわけにはいきませんから」

「あつそ。それじゃあ仕方ないわね。

もう暫くお姉さんも付き合っただけ。

可愛い妹分を放っておけないものね」

「……ありがとう、ジャスミン姉さん」

いいのいいのと手を軽く振ると、ジャスミンはお茶をガブ飲みする。

「それにしても、勇者か。どんな戦いするのか興味深々よ。

ウチの馬鹿も、何回も痛い目に遭わされたって脅えてたし。

絶対に手を出さなくてしつこいほど釘を刺されたわ」

あまりにしつこいから、鞭で引つ叩いたら大人しくなったと嬉しそうに話すジャスミン。

相変わらず夫のカンダタは痛い目にあっているようだ。

だがこれで上手くいっているのだから、世の中不思議だとエレナは思う。

凸凹コンビということかもしれない。もしかしたらSとMなのかもしれないが。

ちよっと危ない想像を振り払うと、エレナはジャスミンに話しかけ

る。

「……教典でも、『勇者』については僅かしか記述されていないですよ。」

世界を救った存在なのに、何か変なんです。敢えて隠しているような」

「へえ。ま、アンタが追い出した連中なら何か知ってるんじゃないの？」

未だに尻尾を出さない、臭いドブ鼠どもがね」

地下迷宮へと逃走した破門済みの古参幹部。

僅かな手勢を率いて、未だに逃げ延び続けているのだ。

賞金目当ての数多の追っ手を掻い潜り、今なお闇の衣完成を目指しているのだろうか。

彼らの執念には目を見張るものがあるが、それに同調するわけにはいかない。

何としてもそれだけは阻止しなければならないのだ。

故にエレナは異端審問官を迷宮へと派遣しているが、未だに成果は挙がっていない。

その居所どころか、痕跡すらつかめていない。

だが、魔物に食い殺されたとは考えにくい。

エレナには、闇の衣の禍々しさを感じ取ることができるからだ。

この身に流れる、忌まわしき血のせいかもしれない。

感じ取った闇の力は、徐々にではあるが強くなっている。

湧き水が少しずつ溜まるぐらいの速さで。だが確実に完成に近づいている。

時間は後どれぐらい残されているのだろうか。

完成したら、本当に魔王は復活するのか。

分からない。分からないから阻止しなければならないのだ。

「……勇者なら、あるいは」

「ん？ 何か言った？」

「 い、いえ。何でもありません」

エレナは慌てて誤魔化す。

困ったときの神頼みならぬ、勇者頼み。

まるで悪い冗談である。

もっと現実的に考えなければならぬ。

待っているだけで世界を救ってくれる。

そんな都合の良い存在はいないのだから。

「あつそ。じゃあ今日はこれぐらいにするわよ。

お腹減ったから、ご飯食べに行くから。

もう昼時だしね」

「あ、そうですね？ それじゃあ私は仕事が残っていますので」

そう言っつて再び書類に向かうエレナの頭をグイッと掴み上げるジャ
スミン。

ニヤリと悪戯気味に微笑むと、鞭で身体を拘束して強引に引き摺り
始めた。

「ちょ、ちょっと！ 何をするんですか!？」

「アンタもたまには息抜きが必要よ。

というわけで、これからウチのギルドに連行するから。

馬鹿と悪ガキ達もきつと大喜びするわよ」

「そ、そんな勝手な！ 私はまだ仕事があるって、聞いてますか！？」

「勿論聞いてないわよ」

そう言うと、暴れまわるエレナを連れて歩き始める。

途中、異変に気付いた教団護衛兵が助け出そうとするが、一撃で昏倒させられた。

昏倒させられたのは初めてではなく、掌では足りないぐらい打ち倒されている。

どことなく嬉しそうな表情をしているのを、エレナは見ないフリをした。

寝転がっている私に、近寄ってくる一つの影。

見習い狂戦士のマタリだ。

無事戦士として認められ、探索許可証を貰ったようである。

これで鬱陶しい三時間制限はなくなると言っ訳だ。

あの門番の得意気な顔ともおさらばだ。

「大丈夫ですか？」

「……当たり前でしょ」

「でも、なんだか泣きそうな顔してますよ」

「やかましいわ。マタリの癖に！」

私はよつと立ち上がり、マタリの頭を軽く叩く。全然堪えた様子がないので、私は拍子抜けする。だんだん頑丈さが上がっているのかも知れない。今度はハンマーを用意するべきだろう。大金槌みたいなやつを。

「頑張りましょうアレルさん。私も全力で協力します。きっとアレルさんなら立派な勇者になれますよ！」

「そう？ アンタも立派な狂戦士になれるわよ。私が保証してあげるわ」

私は不貞腐れてそっぽを向く。ついでに悪態をつくのも忘れない。

「ひ、ひどいですアレルさん。私は真剣に！」

酷いのは凶暴化したときのお前だと、口に出そうになったが我慢する。

私は空気が読めるからだ。

「やれやれ。まあいいわ。さっさと帰りましょうか。
ピンクが首を長くして待ってるわよ」

強引に話を逸らすと、私は歩き始める。
置いてかれまいとマタリも続く。

「今日は探索許可証を手に入れた目出度い日ですからね！
お祝いにパーツといきましょう！」

何でもマタリが太鼓判を押す、評判の店があるらしい。
これからの迷宮探索に備えて、たらふく食べようということになっ
たのだ。

ピンクは既に店で席を取って待っている手はずとなっている。
今頃ブーブーと文句を垂れていることだろう。

「……マタリ。案内してくれる？」

私は初めてマタリと会ったときを思い出した。
場所もこちらへんだった。間違いない。
そして同じような台詞を呟く。

「え、え？ あ、ああ！ わかりましたアレルさん！
なんだか随分前の事みたいですね！」

一瞬何のことか分からないと言った表情を見せたが、直ぐに気付い
たようだ。

馬鹿でかい声を張り上げたため、周りの視線が集中する。

「ちよ、ちよっと。アンタ声が大いいわよ。
皆見てるじゃないの」

慌てて静止しようとする私の手を取ると、全力で駆け出し始める。
私はマタリの為すがまま、引き摺られるように走る羽目となる。

「さあ行きましょう。私達の栄光への第一歩ですから！」

「こ、こら！ 離さない、この馬鹿！！」

楽しそうなマタリ。

思わず脱力する程、能天気な顔である。

私はその姿に少しだけ呆れながらも、こついうのも悪くないかなと
思い始めていた。

第十八話 私の職業は？（後書き）

アレル達の冒険はこれからだ！！

みたいな爽やかな絵が浮かんできました。

一部完みたいな。

次からはまた陰鬱な迷宮物語。

第十九話 勇者は上層部を突破した（前書き）

少し長いです。凱旋シーンはへえ程度で流してください。
個人的に納得していないので、後で修正すると思います。

第十九話 勇者は上層部を突破した

魔王バラモス、勇者アレルの手により遂に討ち果たされる。

斥候の手によりもたらされた、誰もが待ち望んだ吉報。

それが誤報でないことは、魔物達が撤退していくことで証明される。各地の防衛線において、急激に戦意を失っていく魔物の群が目撃されたのだ。

戦場の兵士達は、状況が掴めず我が目を疑う。

劣勢なのは人類側なのに、魔物が退いていく理由が分からなかったからだ。

だが、暫くして勇者が魔王を討伐したという報せが広まると、誰もが歓喜の声を上げ、仲間達と抱き合い、家族と喜びを分かち合った。

長い苦難のときはようやく終わりの時を迎えたのだ。

アレルがアリアハンに戻ると、上空にはラーミアが誇らしげに旋回しており、

人々は、伝説の不死鳥の美しさに目を奪われていた。

やがて群集の一人がアレルの姿を見つけると、大声を張り上げる。郷土の誇り、世界を救った勇者。アリアハンの英雄の凱旋である。

「おお、勇者様だ！ 勇者様がお帰りになられたぞ！！」

「ほ、本当か!？」

「アリアハンにお帰りなさいまし!

バラモスを倒したという噂は、既にここにも届いていますわ!」

「ありがたや。ありがたや」

「わ、私にも一目みせてよ!」

「アレル様よ! 素敵!」

アレルの周りを老若男女、様々な人々が取り囲む。

兵士、商人、若い夫婦、柄の悪そうな若者、そして子供達。

誰もが喜びに溢れ、心から幸せそうな表情をしている。

長年に渡る魔物の脅威から解放されたのだ。

暫くはお祭り騒ぎが続くことは間違いない。

アレルはそれに応えず、無言で人々を見回す。

その表情は能面のように冷たく、感情を読み取らせない。

歓喜に沸く人々の後ろに、アレルは母親の姿を見つけ出した。

顔を両手で覆い、涙を流しているようだ。

世界が救われた喜びからなのか、アレルが無事に戻った安堵からくるものか。

それを判断することはアレルには出来なかった。

母の隣には、祖父が誇らしげに立っている。

視線が合うと、一度だけ深く頷く祖父。

「さあ、早くお城に! 陛下もきつとお喜びでしょう!」

「勇者アレル万歳！」

「若き英雄殿、陛下がお待ちかねですぞ！！！」

兵士達が、アレルを先導するように先を進む。

アレルは視線を戻し、兵士の後を追い王城へと進み始める。

自分を勇者として育て上げた母親、そして祖父。

その立場へと追いやった張本人、オルテガ。

彼らに対して抱くのは、果たして感謝なのか憎しみなのか。

言葉に出来ない複雑な感情をアレルは抱いている。

もしも、今家に帰ったとしたら、最初に口から出る言葉は何なのか。

アレルには見当もつかなかった。

アレルの葛藤を知ることもなく、騒ぎは更に拡大していく。

今日一日は収まることは決してないだろう。

止める真似をする無粋なものも存在しない。

彼らもまた喧騒を作り出している一員なのだから。

集まった人々は、まるで城までの道を作り出すかのように二つに割れる。

人で作られた、勇者の為の栄光の道。

彼らは凱旋した勇者を、心のまま口々に称え始めた。

『貴方こそ真の勇者だ！』

『我々の誇り、勇者アレル万歳！』

『流石はオルテガの娘、若き英雄の誕生だ!!』

『オルテガ万歳！ アリアハン万歳!』

それらを耳にしたアレルは、皮肉気に口元を歪めた。

英雄オルテガの娘。

生まれた時から自分に張られていた呪いのようなもの。

魔王を打ち倒した今でも、それが剥がれることはないらしい。

アレルは最後まで無言のまま、最敬礼する兵士に迎えられ城内へと入っていく。

玉座の間へとアレルが到着すると、トランペットの音が高らかに響き渡る。

整列した儀仗兵達が左右に待機し、勇者の凱旋を出迎える。

アレルはその間をいつもと変わらない様子で進んでいき、王の前で跪いた。

「陛下。ご命令通り、魔王バラモスを討ち取りました」

「おお、アレルよ。よくぞ、よくぞ魔王を打ち倒した。しかも、そなた一人で……」

「……………」

王は決してアレルと顔を合わせようとしない。
言葉では褒め称えているが、本心では言い知れない恐怖を抱いている。

たった一人でバラモス城を陥落させた勇者。

この世界において最強の存在であり、誰も止めることは出来ない。
その刃が自分に向くことはないという、保障などないのだから。

アレルは恭しく跪いたまま、王へと挑発的な視線を向け続けている。
時折口元を歪ませて、溢れ出そうとする笑いを堪えている。

怯えている王の様子がおかしいのか、それとも自分のこの有様が笑えてきたのか。

それはアレルにも分からない。

バラモスの言葉が不意に脳裏によぎる。

『魔物がいなくなれば、お前は用済み』

『平和な世に、人間の分を越えた化け物は必要ない』

『末路は我らと同じだ』

成程とアレルは思った。

兎が死ねば猟犬は不要。

後は煮て食われるのみだ。

「そ、そなたの働きを称え、褒美を取らせたい。

我が国の宝にして、最強の武器『バスタードソード』だ。

魔王を討ちとりし、そなたにこそ相応しい。

勇者アレルよ。受け取ってくれ」

王が目配せすると、布に包まれた大剣が運び込まれる。

そしてアレルへと手渡される。

アレルは立ち上がると布を剥ぎ取り、大剣を華麗に捌き始める。重量のある大剣を軽々と振り回す小柄な少女の姿。

それはまるで演舞のようであり、人々は思わず見とれる。

最後は王へと刃を向け、一礼した後再び跪いた。

「さ、流石はオルテガの娘。見事な勇姿。

今は亡きオルテガもさぞかし喜んでいいるはずだ。

そして、国中の者達がそなたを称えるであろう！」

王は内心の恐怖を押し殺し、必死に為政者としての仮面を被る。

「……………ありがとうございます」

「落ち着いたら、そなたにもアリアハン復興の為に力を貸してもらいたい。

魔物の脅威がなくなったとしても、まだまだやるべきことは山積みなのだから」

「……………」

アレルは答えを返さない。

返すことが出来ない。

この先のことなど、何一つ想像できないのだから。

「……………返事は今すぐでなくても構わぬ。

さあ、皆の者！ 祝いの宴だ！

平和が戻った今日という日を、共に喜び合おうぞ……！」

王の掛け声と共に、再びトランペットが奏でられようとした。
その瞬間。

迸る黒い稲妻が玉座の間を包み込む。

儀仗兵達は悲鳴を上げる間もなく、肉体を焼き尽くされた。

トランペットを構えていた兵士達は、その体勢のまま黒焦げの人形となる。

玉座の間は瞬く間に地獄へと姿を変え、辺りは人が燃える嫌な臭いが漂い始める。

余りの出来事に極度に動揺し、絶句する国王と大臣。

無表情のまま悠然と事態を眺めているアレル。

例え自分に直撃したとしても、死ぬことはない。

何も怖いものなどないのだから。怯える必要がないのだ。

静まり返る室内に、どこからか声が響き始める。

日中だと言うのに闇が漂い始め、日差しは完全に遮断される。

響いてくるのは、人間のものではないと確信させる、死人のようにしゃがれた低い声。

『失礼、至福の一時に少しばかり驚かせてしまったようだ。

我が名はゾーマ。闇の世界を支配する者なり。

我がいる限り、やがてこの世界も闇に閉ざされるであろう』

「　　そ、そんな馬鹿な。バ、バラモスだけではなかったというのか」

王が茫然自失とした表情で呟く。
顔面は蒼白で、今にも倒れそうである。
大臣が駆け寄り、その身体を支える。

『さあ、悩み苦しむが良い。そなたらの苦しみは我が悦び。
命ある者全てを我が贄とし、絶望で世界を覆い尽くしてやろう。
我が名は大魔王ゾーマ。全てを滅ぼす者』

威厳溢れる声で、絶望を宣告する闇の支配者ゾーマ。
アレルは、どこことなく楽しげな声でそれに応える。

「フツツ。魔王バラモスの次は大魔王ゾーマか。
私も用済みかと思っただけれど、まだやることがあつたみたいね。
本当、運命って残酷よね」

『ルビスの狗よ。身の程を思い知るが良い。
我が深淵なる闇の力、必ずや貴様に刻み込んでくれる』

「そのうち必ずお伺いするから。精々首を洗って待ってなさい。
骨の髄まで、勇者の恐ろしさを味あわせてあげる。
バラモスが先に逝って、アンタのことを待ってるわよ」

『口を慎むが良い、愚か者が。そなたが我が贄となる日を楽しみに
しておるぞ。』

必死にもがき、足掻き続けるのだ、哀れなルビスの狗よ』

その言葉を最後に闇が徐々に晴れ、再び日差しが室内へと差し込む。

「な、なんとしたことだ。ようやく平和を取り戻せたと思ったのに。」

闇の世界の到来など、民に言える筈もない。
い、一体どうすれば良いのだ」

王が疲れきった声で呟く。

両手で顔を覆い隠し、その声は震えている。

「残念でしたね、陛下。フフ、本当に残念。
まさか魔王の上の、大魔王がいるなんてね。
本当、世の中って面白いわ」

アレルは満面の笑顔で王へと声を掛ける。
どことなく壊れたような表情で。
大剣を肩に抱えたまま、可笑しそうに笑い続けている。

「……な、何が可笑しいのだアレルよ。
……いや、何でもない。最早何も言うまい。
今は何も考えたくないのだ。

……余は少し疲れた。もう下がって良いぞ」
そう言うと、大臣を振り払い、玉座から立ち上がるようにするが、
身体がよろめき前に倒れこんでしまう。

「へ、陛下！ お気を確かに！」

「う、ううっ」

「い、今すぐに侍医をお呼びします。
誰か、誰かおらぬか……！」

だが、その声に応える者はいない。

室内には物言わぬ骸だけしか残っていないのだから。再び大臣に身体を支えられると、無言で退出していく。室内には、アレルだけが残された。

「……そろそろ行くか。もうここに用はないわ」

アレルはバスタードソードを適当に放り投げると、助走をつけて窓に向かって走り始める。

勢いをつけたまま飛び降りると、上空を旋回していたラーミアが急降下してくる。

背中に無事着地すると、ラーミアの身体を軽く叩いて合図する。

「また変なのが出たのよ。もう暫くお世話になるわ。アンタもアイツの力、感じたでしょ？」

アレルの言葉を理解したらしく、短く鳴き声を上げる。

「そうよ。アンタは賢いわね。」

それにしても、闇の世界ってどこにあるのかしらね」

ラーミアはそれには答えず、翼を大きく羽ばたかせて上空へと舞い上がり始める。

アレルは一度だけ、アリアハンを上空から見下ろす。

徐々に小さくなっていく城下町を一瞥し、やがて前を向くと静かに目を瞑る。

小さく溜息を吐くと、疲れきった子供の様に、ラーミアへと身体を預ける。

「……ちょっとだけ、疲れたわ。悪いけれど、少しだけ眠らせて」

この後、アレルがアリアハンに戻ることは二度となかった。
勇者アレルの名と栄誉だけが残り、その後の足跡は全くの不明である。

突然誰かに後頭部を殴られた。
走る激痛に、私の目から思わず星が出そうになる。

「痛いつ！ 一体誰よこの野郎！！」

辺りを見回すと、腰に手を当てて呆れているエーデル。
どうやら後ろから拳をいれてくれたのはこの女のようにだ。

魔術師の癖に、意外に力強い。

「痛いじゃないのよお、勇者アレル様。

戦闘中にボーツとしはじめるなんて、余裕がありすぎよ。

ほら、マタリちゃんを見習いなさい」

「え、ま、マタリ?」

「ほら。あんなに頑張っちゃって。

段々と『狂化』を使いこなしてるわよ」

頭を押えながらエーデルが指を差した方を見ると、

馬鹿デカイ大蜘蛛相手に、マタリが叫び声を上げながら襲い掛かっている。

緑の返り血を浴びながら、何度も何度も蜘蛛の背部を刺突している。蜘蛛も必死に抵抗しているが、マタリを押し返すことは出来そうにない。

「……………うわぁ」

少しだけ引いてしまった。私じゃなくても引くだろう。

間違いない。ドン引きだ。

「一撃喰らうか、『血』を見ることで発動するみたいねえ

まあ、その間は連携なんて出来ないわけだけでも」

そう言うと、エーデルが詠唱を開始する。

他の魔物の気配を察知したからだ。

私も遊んでいる場合ではないと、握り締めていた剣を構える。

これは劣化したダガーナイフの代わりに購入した、『鋼の剣』であ

る。

中々値が張ったが、まあ仕方がないだろう。

銀貨3枚、私がいいた世界で言う3000Gくらいだろうか。精々使い潰すでしょう。所詮は数打ち物だ。

糸を吐いてもがいている巨大な蜘蛛と、苛烈な攻撃を続けるマタリ。その背後から、獲物の身体を絡めとろうと静かに這い寄る魔物。

食人花『エビルフラワー』である。

マタリの初心者向け迷宮ガイドブックに載っていた。

上層部に当たる30階までで、一番の強敵と記されている。

自信を付けて来た新人を、その身体ごと何百人と溶かしてきた厄介な魔物らしい。

何本も生えているツタに、妖しい臭いを発する花が中央に咲いている。

花の奥には麻痺成分の混じった溶解液が分泌されており、捕らえられた獲物はそこへと放り投げられる。

哀れな獲物は、何日も掛けて嬲られながら消化されていくのだ。

ちなみに刈り取るべき部位は花びらで、一つあたり銀貨1枚となっている。

一体のエビルフラワーからは5枚ほど刈り取ることができらしい。

詠唱が終わると、エーデルが炎の魔法を唱える。

基本的には、火系統の魔術が得意なようだ。

「炎の精霊よ、我に力を。フレイム!!!」

杖を翳し、火炎弾を繰り出す。

こいつの弱点は『火』であり、魔術師がいれば対処は容易とのこと。逆にいない場合は、接近戦を挑む必要があり、毒やら麻痺やらに注意しなければならぬ。

最悪松明をなげつけろと書いてあったが、それは無理なような気がする。

敵だって大人しくしている訳がないのだから。

やはりジャバの言う通り、当てにしていけないインチキ本である。

エビルフラワーの花びら付近に着弾すると、全身に火の手が回りはじめ。

苦しげにツタがもがき回り、花びらは閉じることで致命傷を避けようとしている。

私はその機を逃さず突撃し、一刀のもとに両断した。防ごうとしたツタと、堅く閉じられた花びらごと真っ二つ。完全に息の根を止めた。

同時に私は咳き込んでしまう。
火元に近づきすぎたからだ。

「ゲホツゲホツ！ 煙が充満して洒落にならないわ。
ちよつとマタリ！ まだトドメさせないの!？」

換気が十分でない迷宮では、こんな通路で火をつかつたら当然こうなる。

モクモクと黒煙が上がり、私達は煙に巻かれる。
痛みには耐えられるが、煙いのは辛い。

目からは涙が出そうになるし、咳が止まらない。

ああ、外の世界が懐かしい。迷宮なんてクソ喰らえである。

お日様の下でのんびりと昼寝がしたい。

美しい青空を思い浮かべていると、それを邪魔するかのような下品な声が響き渡る。

「アハハッ！ クソ虫がやっと動かなくなった！！

でもまだまだ足りない。後100回ぐらい刺さないと満足できない！！

アハハ！ 死ね死ね死ね！」

「やかましいわ」

「キャウ！」

胸を後ろに反らして、歓喜の雄たけびを上げている馬鹿女。背後から容赦なく一撃を入れた後、私はエーデルに合図する。煙いから先に進むという合図だ。

魔物の部位は、エーデルが召喚している死体が刈り取ってくれる。荷物持ちもやってくれるので、本当に便利なヤツである。倫理感と、その容姿、臭いに耐えることが出来れば。

頭を両手で押えてうすぐまるマタリ。

私はその首根っこを掴んでズンズンと進み始める。

ここは地下迷宮30階。上層部のラスト目前という地点である。

認定試験を受け、5日間程寝込むというトラブルはあった。が、その遅れを取り戻すべく1週間程迷宮に通いつめたのだ。更に下層まで到達しているエーデルの道案内もあり、私達の冒険は順調に進んだ。

私の職業は相変わらず勇者（仮）のままだが。

ネズミやら、スライム（アメーバ状）やら、花の化け物、馬鹿デカイ蜘蛛。

段々とキモくなる魔物達だが、私達は問題なく対処できている。

「ふう、中々順調なペースよ。

1週間で30階目前なんて、かなりのハイペース。

私達の連携も中々の物ってことかしらねえ」

杖を華麗に一回転させて、エーデルが語りかけてくる。

後方には使役する死体が、のそのそと歩いてきている。

「……連携というか、各自適当に戦っているのが上手くいってるだけじゃないの。

この馬鹿は暴れまわるだけだし、アンタは死体を使って気分に暴れてるし」

私は引き摺っているマタリの頭を、軽く小突く。

『痛いっ！』という可愛い悲鳴が聞こえるが、聞こえないフリをした。

「んー、それをアレルちゃんが上手く補っているって感じねえ。

とても慣れた動きよ。流星は『勇者』なだけあるわ」

「あっそ」

おどけた言葉で褒めて来るエーデル。

勇者（仮）だったと判明した時、こいつは腹を抱えて爆笑していた。よって今更褒めても許さない。折を見て、顔に落書きしてやるつもりである。

ようやく己を取り戻したマタリが立ち上がる。
キョロキョロと辺りを見回すと、頭を掻いている。

「あ、あのう。ま、またやっちゃいましたか？」

「そうよ。まあ、それがアンタの特徴でもあるんだから仕方ないけど」

「うつつ。どうしてこんな事に。あ、あの罠に引つかかってからですよ。」

急に意識がなくなったかと思うと、いつの間にか大暴れしてるんです。

何ででしょうか……」

あの罠とは、マタリが串刺しにされて死んだアレのことだろう。

その後、私のザオラルにより蘇生したのだ。

一度死を味わったことにより、何かが覚醒したのかもしれない。良く分からないけれど。

「まあまあ。私達もフォローするから、細かい事は気にしない方が
良いわよお。」

使いこなせれば、貴方の強力な『特性』になるわ。

見る限り、素早さ、腕力、体力、攻撃性。全てが上昇しているもの」

確かに、能力は大幅に上昇している。

狂化中は人の話を全く聞かないが、元々聞いてなかったし。
あまり問題はない。

「は、はい。そうですね。頑張ります！」

「肩に力が入りすぎてるわよ。もっと気楽にいきなさい。焦っても碌な事がないからね」

私が忠告すると、更に身体をガチガチにする。

……言わなければ良かったか。

「こ、こうでしょうか」

「……もういいわ。アンタの好きに生きなさい」

「は、はい！」

再び私達は先へと進む。

パチンと指を鳴らすと、エーデルが死体の大ネズミを先導役として進ませる。

頭部には松明がくり付けられており、明かりのついた『トーチラット』となっている。

警戒兼、照明担当のネズミ。素体は迷宮至るところで入手可能。

敵が現れた場合、すかさずネズミを相手にけしかけて、その身体ごと自爆させる。

エーデルの高等死霊術『コープス・フレイム』だ。

威力を上げるために、身体には『火薬』が装着されており、その破壊力は絶大だ。

先程も2体現れた大蜘蛛のうち、1体は自爆により跡形もなく吹き飛ばされている。

相手からしたら理不尽この上ない魔法だなあ、と私はしみじみ思った。

爆弾岩が自分から突撃してくるようなものである。

いきなりメガンテを使われたら、さすがの私も腰が引けてしまっただろう。

隊列は、先頭が照明兼自爆用ネズミ、次にマタリと私。

エーデルが後に続いて、最後尾に荷物持ち兼肉壁の死体である。

大鼠（死体）、勇者、狂戦士、死霊術師、死体。

魔王もビックリするに違いないパーティーである。

「ん？ どうやら到着したみたいよ。

ほら、下への階段があるわ」

地下へと続く階段。上層部はこれで終わりだ。

次からは迷宮中層部。31階から70階までがそれに該当する。

ここからは亜人種が出没するという話だ。

「おめでとう。これで貴方達も、駆け出しを卒業ねえ。

記念として壁に名前を彫りましょう」

エーデルが、迷宮の壁に石で名前を彫り始める。

ゴリゴリと強引に削り取っている。

『勇者（仮）アレル参上』

「……ちょっと。恥ずかしいからやめなさい。

というかやめろ、この年増女！」

「いやよお。まだマタリちゃんと私の名前を書いてないもの」

『狂戦士マタリ、麗しの魔術師エーデル』

何が麗しだ。死霊術師にして外道の年増女の間違いだ。手にした石を放り投げると、エーデルが満足気味に頷く。

「……あ、あのう。『狂』はいらないんですけど」

「ちょっとしたサービスよ。喜んで良いわよお。

さっ、これで完璧ね」

「ご丁寧に『保存』の魔法を落書きに掛けると、エーデルは荷物持ちを呼び寄せる。

袋から星石と『小さな袋』を取り出すと、全員にほいほいと手渡ししていく。

「……さ。いつもの通り、粉を満遍なく振りかけて頂戴。

ちゃんと星石に記憶させなきゃ駄目よ。

忘れたら、まーた27階からやり直したもの」

これは先日手に入れた『星石』に、現在の地点を記憶させる儀式である。

この粉が何なのかは知らないが、何でも魔力の籠っている由緒ある物だそうだ。

再び挑戦するときは、迷宮入り口で『星石』を使うことにより、

この粉を振りかけた場所まで一瞬でワープできるのだ。

迷宮から脱出するときは、普通に使えば良い。

何とも凄いことだ。ルーラトリミットをあわせた様な感じである。

まあ、一つしか記憶させることが出来ないのはアレだけど。

「はいはい。それにしても便利ねえ。
まあ、毎度毎度1階からやり直しなんて馬鹿馬鹿しいしね」

「誰がこの技法を作り出したのかは分かってないのよ。
でも、この儀式によって格段に効率が良くなったのは間違いないわね。」

今では誰もが使っているから」

ちなみにこの粉は迷宮入り口の門番から購入する。

お布施はとられなくなつたが、今度は粉袋を買わされるとは。

1袋銀貨1枚。5回程度でなくなってしまう。

本当に上手い商売である。だがなくては探索が捗らない。

門番はニヤニヤと汚い笑顔を浮かべていた。

僧兵よりも、商人に転職すべきである。

「えーと。今日はここまでですか？」

マタリが誰ともなく尋ねる。

少し足を伸ばしても良いが、私はお腹が減っている。

よってさっさと帰りたいのが本音である。

「ここから先が、迷宮本番よ。」

今までと違って、人型の魔物が出現するからね。

しっかり準備と心構えをしてから挑みましょう。

舐めていると、頭をかち割られちゃうわよお」

エーデルが杖で地面を軽く叩く。

「そいつらは強いのか？」

「中層部だから、手に負えない程じゃないわ。現に私も一人で突破はしたしね。勿論頭と死体を使いこなしてだけど。」

「……ただ」

「た、ただ？」

意味ありげなエーデルに、マタリが聞き返す。

「集団で襲い掛かってこられると、かなり危険よ。」

亜人種は知能があるからね。

万が一、指揮官がいたりしたら直ぐに撤収するべき」

「指揮官？ 軍隊でもいるわけ？」

「31階からはオークの縄張りに突入するわ。」

基本的には10階層ごとに、出没する亜人が変化する。

魔物達もお互いに、縄張り争いしてるってわけ」

「オークねえ」

豚の人型だろうか。

さぞかし、アレな種族なのだろう。

丸焼きにしても美味しくないことは間違いない。

「オークの好物は、鼠と人間。特に若い女が大好物よ。」

というか、この迷宮の魔物は大抵人間が好物なだけどね。

残忍な性格だから、捕まりでもしたら大変。

散々髑られた拳句、食い殺されるわよお」

エーデルがマタリを脅かすように、低い声で喋る。

「こ、怖いです。き、気をつけましょうね、アレルさん！」

顔を青くしているマタリ。想像してしまったのだろう。
私は慣れているので、特に問題がない。

「アンタは気をつけなさい。精々迷子にならないようにね。
私は全然大丈夫だから」

「ま、迷子になんかありません！ちゃんとアレルさんの後をついていきますから。」

後ろにくつついて、絶対に離れないことにします！」

「そ、そう。良かったわね」

それもどうかと思うが、口には出さなかった。

「あいつらは脳筋だから、落ち着いて各個撃破すれば問題はないの。ただ、指揮官が率いていると、強さが段違いになる。」

統率の取れた精鋭に変化するの。だから、慎重にいくことね」

「分かったわ。色々と助言をありがとう、エーデル先生」

「分かれば良いのよ。本当出来の悪い生徒を持つと苦勞するわあ」

「はいはい」

私の軽口に軽口で返してくるピンキー。

それにしてもオークの指揮官か。

どんなヤツなんだろうか。ボストロール的なものであるとか。だとしたら、確かに厄介だ。

「でもリスクの分だけ、見入りも大きいけどね。あいつらは武具を装備しているから、剥ぎ取るだけでも収入になるし」

「それじゃまるで追いはぎじゃないの」

私もたまーに魔物の装備を拾ったけれど。

勇者だから問題ない。大体が使い物にならない紛い物だったけど。

「魔物から徴収するんだから問題ないわよお。

それに、部位の『耳』も銀貨1枚だしね。

一匹殺せば、武具代と耳2個で中々の収入よ」

「……結構美味しいわね」

「中層を稼ぎ場所に行っている冒険者も多いからね。自分に見合った場所を探すのも大事なのよお。別に無理して下に行くこともないしね」

再びエーデル先生の講義が始まった。

私とマタリは大人しく聞くことにする。

「ほかに美味しい話はあるの?」

美味しい話は大好きである。

深く胸に刻み込む準備をする。

「そうねえ。オークの住処には『オークフラワー』が咲いているの。それは花1つで金貨1枚で取引されているわ。入手難度がとっても高いからね

『王』のいる場所には花の群生地帯があるって噂だけど」

当然住処だから、オークが群を成して襲い掛かってくるとも付け加える。

「オークフラワー……って、あれですか？」

マタリが顔を顰めて尋ねる。

「そう、魔法薬よ。オークが宴の際に興奮剤として用いる植物。人間が使用すると、凄まじい快感と幻に包まれるというアレ。それを使って性行為に及ぶと、極楽にイけるって話よお」

なぜか私の顔に視線を送ってくる変態女。

こういう話題になると、何故か私を標的にしてくるのだ。子供だと思って馬鹿にしているに違いない。

「……あっそ」

「あらあら、顔が赤いわよアレルちゃん。

お子様にはまだ早かったかしらねえ」

「……………」

そっぽを向いて反応しない。反応すれば喜ばせるだけだから。

酔っ払いセクハラ親父は、無視が一番なのだ。

「手に入れるのも大変だし、数も出回らないから。オークフラワーの相場はどんどん上昇しているわよ。各国の馬鹿貴族がこぞって依頼してくるからね。どっだけお盛んなのかしら」

「こ、子供が欲しいのではないのでしょうか。た、多分」

顔を赤くしたマタリが自分を納得させるように呟く。

「そうかしらねえ。ただ猿みたいに腰振ってるだけじゃないのかしら。」

一度その快楽を味わうと、病み付きになるらしいの。

貴方も気をつけなさいよ、マタリちゃん。

悪い男に騙されて、変な薬使われたりしないようにね」

「……なんでマタリだけ注意するのよ」

「……色々な趣味の人もいるから、『一応』アレルちゃんも気をつけてねえ。」

多分というか、絶対大丈夫だと思うけれど」

ついでといった感じで、私にも注意してきた。

その際、私の身体を上から眺め、胸の辺りで視線が止まったのを私は見逃さない。

溜息を吐いて、同情の視線を送ってきたことも忘れない。

このようなギルドを通さない依頼は、ルイーダの酒場に集まってくる。

行方不明となった人物の搜索、鉱物や植物の採取、魔物のサンプルを取ってきて欲しいなどなど。

ちなみに、私はまだこの世界のリーダーとは面識がない。マスターとは顔馴染みになったのだが。

何となく会うのに抵抗があるというのもも本当のところだ。もし、もし、アリアハンのリーダー当人が出てきたら。どういふ反応を取れば良いのか分からない。

「さて、そろそろ戻るわよ。セクハラ女にこれ以上付き合ってもらえないわ」

「興味があるなら、あとで内緒で色々教えてあげるわよお。

あ、私はそっちの趣味はないからね。悪いけど。

あくまで一般常識を教えるだけよお。

薬が欲しいなら、自分で手に入れて頂戴ね」

慌てて手を振るピンクィー。

私だってそっちの趣味はない。

というか、恋愛などといったものにまるで興味が無い。

幸せな家庭をつくるなど想像することも出来ない。

誰かと結ばれるといったことも、この先訪れることはないだろう。

私だけの領域に踏み込む事は、誰であろうと許さない。

「誰がいるか！ 余計なお世話よ、この馬鹿ピンクィー！！」

「落ち着いてください、アレルさん。さあ、深呼吸して」

「それじゃあ盛り上がったところで帰りましょう。」

「お先に失礼するわねえ」

パチンと指を鳴らすと、死体と鼠を送還する。

そして星石を掲げ、数秒後に光に包まれると姿を掻き消すエーデル。

「言いたいことだけ言って、とつとと帰りやがったわよあの年増。
今度二人で徹底的にとつちめるわよ！」

私も星石を取り出して、迷宮を後にする準備をする。

「あ、ま、待つてください！ まだ準備が」

石を取り出すのが、落っことしてしまつマタリ。
慌てて拾い上げると、高く掲げた。

同時刻。

この先の階層でとある集団が、圧倒的多数のオークと報われぬ死闘を繰り広げていたのだが、

今のアレルたちには知る余地もない。

先程エーデルが話していた、オークの指揮官『オークキャプテン』に率いられた軍勢である。

ちなみに、とある集団とは『オークフラワー』の採取を目的とした冒険者徒党で、

その数は100名程の大所帯である。様々な職業の者達が欲望の花の為に掻き集められたのだ。

一攫千金を目指し、依頼を受けた勇敢かつ無謀な冒険者達。
『ツキ』は彼らにはなかった。

数ヶ月に一度開かれるオークの宴。それは決められた満月の日に開催される。

オークの祖霊を迎え盛大に称える為の、彼らにとって欠かすことが出来ぬ重要な儀式である。

1週間前からは、オーク達は食欲と性欲を禁忌とし、己の信仰を祖霊へと一心に捧げる。

摂取するのは水分と、オークフラワーの根のみが許される。

破った者は、種族の面汚しとしての悲惨な末路が待っている。

宴は満月の度に必ず行われる訳ではなく、オークの王がその吉凶を占い、実施するかを判断する。

毎月連続で行う時もあるれば、半年間行われない時もあるのだ。

彼らは迷宮深部にいて、どのように月が満ちるのを知ることが出来るのか。

オークたちは月から放たれる魔力を、身体で感じる事が出来るのだ。

最大まで満ちたときに発せられる膨大な魔力を、オークは本能的に分かっている。

故に彼らが月の満ち欠けを誤ることはない。

冒険者達にとって不運だったのは、今が宴開催の前日であったことだ。

宴の前の一週間程は、禁欲生活からオークの凶暴性が高まり、攻撃性が格段に上昇する。

それが前日ともなれば、ピークとも言える最も危険な時期である。

更に、宴の為の『食料』を掻き集めるために、オークが徒党で迷宮を行動するようになる。

普段は本拠地を防衛している、最精鋭のオークキャプテン達が、徒党を組み、それぞれが指揮を執って『人間狩り』を始めるのだ。統率の取れたオーク達は、熟練の冒険者でも苦戦する兵となる。それが、人間を狩る事を目的に闊歩するのだから、危険極まりない。よって、宴の開催前は決してオークの縄張りに侵入しないことが不文律となっている。

この情報はギルドからメンバーへと最優先で伝達されている。

その危険性は冒険者達も分かっていたが、自分達は大丈夫だろうという根拠のない自信と、

目が飛び出るような高収入に釣られてしまったのだ。

熟練の冒険者が100人、連携し固まって行動する。凶暴化したオークとはいえ恐れることはない筈だった。

相場では1個あたり金貨1枚のオークフラワー。それがこの依頼では、一つにつき金貨3枚支払われるからだ。量によっては特別手当も支払われる。

金貨1枚とは、アレルのいた世界の1万Gに該当する。

それを袋一杯に持ち帰りでもすれば、普段の冒険の数年分に匹敵する収入となる。

普段の冒険でもリスクがあるのだから、今回に賭けようと思ったのも無理はない話ではある。

いつまでも続けていられるほど、冒険者というものは甘くはないのだから。

『人間狩り』で生け捕りにされた人間達は、普段とは違い暫くはオークの住処で生かされている。

宴の日まで檻に閉じ込められた後、ご馳走としてオーク達に振舞う為だ。

大好物である人間達が、無防備な状態で目の前に晒され続ける。オークたちは必死に湧き出る食欲と戦い続ける。その禁欲こそがオーク達の信仰心の表れなのだ。

宴の日。欲望を解放される事を許されたオーク達は、その本能を爆発させる。

男は生きてそのまま食い殺され、女は散々慰み者とされた後、やはり食い殺される。

不運な冒険者約100名が、完全に壊滅し生け捕りにされたのは、その数十分後の事であった。

100人の大行進ともなれば、当然発見されるのも早くなる。

斥候のオークスカウトによりすかさず捕捉され、オーク達が駆けつけてくる。

住処に突入するどころか、波状攻撃を仕掛けて来るオークの兵団の前にすすすべもなかった。

四方を重囲され、絶対に避けるべき消耗戦に嵌ってしまったのだ。仲間を見捨て逃走することを決断し、星石を掲げようとした者もい

たが、

集中力が上昇しているオークアーチャーにより、その腕を射抜かれる。

オークメイジの幻術により惑わされ、盾を構えたソルジャーが徐々に距離を詰めてくる。

その後方には続々と応援が駆けつけ、最早手の施しようがなかった。それでも最後まで全員が戦い続けたが、体力と精神力には限界がある。

好機と見たオークキャプテンが『全員突撃』の号令を掛けると、戦

線は完全に崩壊する。
連携を絶たれた冒険者達は、各個に撃破されていったのだ。

生け捕りにされた冒険者の中には、アートの街の孤児院出身の若者達がいた。

先日人形遣いから助け出された、戦士ギルドのエクセル達の姿もある。

失態の汚名を返上するべく、難度の高い依頼に挑戦してしまったのだ。

全員が散々に痛めつけられ、最早戦意の欠片すらも見えない。

目には絶望の暗い光だけが浮かんでいる。

男女問わず、逃げる事が出来ないよう足をへし折られている。

武装は回収され丸裸にされた後、紐で完全に括られ引き摺られて行く。

孤児院出身の冒険者達は、孤児院の運営資金を集めるために、危険を省みず依頼を受けてしまったのだ。

孤児院を運営するシスターは、当然止めたが彼らの決意を翻すことは出来なかった。

彼らの冒険で稼いだお金は、冒険資金と施設の借金返済だけで精一杯だったのだ。

食べるものにすら困窮する状態で、最早猶予がなかったのも事実。だが自分達の実力に、自信があったのも一つの要因である。

彼らはそれぞれのギルドでは、若手の有望株と可愛がられていたからだ。

着実に職業認定を受け、中層を突破し徐々に名を売るようになってきていた。

自分達ならば、オーク如き軽く蹴散らすことが出来ると慢心していたのだ。

現にオークなどは、苦勞することもなく何十体と撃破してきているのだから。

彼らがその無謀の報いを受けるまで、後一日足らず。

冒険者達に待ち受けるのは、確実な死のみである。

人間としての尊厳を碎かれ、その肉を綺麗に食い尽くされた後、見せしめの為に縄張り内部に骸を晒されるのだ。

・オークフラワー

オーク達が栽培している赤い花。白い斑模様が混じっている。

その栽培技術はオークの秘伝とされており、人間達が成功した例はない。

開花した花を食べると、オーク達に興奮作用をもたらす。

根は集中力と凶暴性を高める効果があり、禁欲中はオークたちが常に貪っている。

宴の前はオーク達の為に大量に用意される為、危険を冒して突入する冒険者も少なくない。

その殆どがオークの食料になるの言うまでもない。

レンジャー特技『ハイド』で忍び込む方法は、オークスカウトにより見破られる為通用しない。

人間社会では、快樂を与える効果がある魔法薬として流通し、主に貴族達が己の欲望の為に購入している。

花自体に常習性はないが、これを用いて性行為を行うと、
脳が焼かれるような快感をもたらす。

多量に摂取すると強すぎる快樂により、廃人化する可能性もある為、
服用時は注意が必要。

『オークフラワー？ アレは凄いぜ。誰でも一発で昇天できる。
ただ、普通じゃ満足できなくなるのが最大の欠点だな』

・貨幣価値一覧表

アート印貨	100000G	(普段は使われない)
金貨1枚	10000G	
銀貨1枚	1000G	
銅貨1枚	1G	

第十九話 勇者は上層部を突破した（後書き）

大長編 アレルもん。

『勇者とオーク兵団』はじまります。

第二十話 勇者の判断

もう間もなく黄昏を迎えようとする時刻。

協会の会議室において、臨時の会合が行われていた。

協会会長である教祖エレナ。各ギルドマスター4名。

何故か教団私兵の異端審問官、治安維持隊の長の姿まであり、いつもの定例会合とは違う、異様な雰囲気となっている。

誰もが無言のまま、緊張に包まれる会議室。

その張り詰めた空気をまず破ったのはエレナだった。

「皆様、このような時刻にお呼び立てして申し訳ありません。まずは皆様にお詫びを申し上げます」

エレナが一同をゆっくりと見回した後、深く頭を下げる。

「一体何事ですかエレナ様。

異端審問官殿までいらっしゃるとは穏やかではない。

もしや異端狩りでも始められるおつもりですか？」

僧侶ギルドマスター、ニカラグが坊主頭を撫でながら問う。

年齢は30代後半、その肉体は戦士に負けないレベルまで鍛えられている。

腰には重量のある鉄杖を下げ、神聖魔法を使いこなす強者である。

「……僧侶ニカラグ。エレナ様がこれからお話になられる。

貴様はただ黙って聞いておれば良いのだ」

異端審問官を統率するエレナの忠実な狗、司教イコナ。

眼鏡の位置を直しながらニカラグに警告する。
神経質そうな顔立ちで、痩せ気味の体系である。

類はこけており、同性同世代のニカラグと比べるとあまりに懦弱に見える。

しかし外見で侮ったものは、必ず後悔することとなる。

その正体は苛烈な攻撃魔法を駆使する熟練の魔術師だ。

何人もの異端を立件、完膚なきまでに粉碎してきた狂信者でもある。

彼は自ら善悪を判断することは決してしない。

命じられた事に対して疑問を抱くこともない。

狗は主人の命じるまま動けば良いのだから。

「イコナ殿は相変わらずですな。

恭しく尻尾を振るなら、ここではなく外でお願いしたい。

協会は名目上は中立。教団での上下関係は適応されないのですから」

「ニカラグよ。貴様また“教育”されたいのか？

今度は情けはかけんぞ。貴様の罪状は既に限界まで積みあがっているのだからな。

それ以上吠えたら、即刻異端として処分する」

ニカラグとイコナが睨みあう。

この二名は水と油といえる程に相性が悪い。

ニカラグが教団での出世を諦め、ギルドマスターの地位を選んだ原因でもある。

今にも殺し合いを始めそうな二人をジャスミンが一喝する。

「そこまでにしな！話が全然進みやしないよ。

それでも喧嘩したいなら、今すぐこっから出て行きな！」

「これは失礼しましたジャスミン殿。皆様、お騒がせして申し訳ない。エレナ様、お話を進めてください」

「……………」

ニカラグが首をやれやれと振った後、進行を促す。イコナは無言のまま睨み続けている。喉元まで出掛かった詠唱の言葉を、必死で押えているのだ。

「……………それでは続けます。」

先程、とある依頼を受けた冒険者達が、オークの縄張りにて消息を絶ちました。

各々のギルドで、既に状況を把握しているかもしれませんが」

「ああ、オークフラワーの依頼の件だろう。」

残念なことに、ウチのギルドが一番多いだろうな。

欲に目が眩んだ馬鹿共が。俺の教育が足りなかったようだ」

ロブが腕を組んで、舌打ちしながら発言する。

戦士ギルドの十数名が、迷宮に入ったまま帰還していないのだ。

エクセルが行方不明になったという情報も既に入っている。

そして、何の依頼に挑戦したのかもだ。

「時間を掛けて丹念に育て上げた、私の可愛い子供達。

これからのギルドを背負うべき才能ある若者達。

それが一瞬にして刈り取られる。運命とは儚いものですわ」

魔術師ギルドマスター、エメラルド。

年齢不詳の女魔術師。束ねられた銀髪、露出の高い魔装束を身に纏

い、

青白い肌には様々な刺青が施されている。

姿は若々しい妖艶な女性であるが、実年齢は確実に百を超える。

ここ百年の間全く外見が変化せず、実は魔物が化けているのではないかと噂も流れている。

異端認定されてもおかしくないが、教団へ多大な貢献をしている為に見逃されているのだ。

「ここ最近流通量が激減した『オークフラワー』。

貴族達に大金で売りつけるために、商會が痺れを切らして採取を依頼したのでしよう。

相場の三倍という餌まで用意して」

数ヶ月で流通量の減少した理由。

それは簡単だ。採取に向かったものが帰ってこないからである。

宴開催の時期に関係なく、殆どの者が屍となりオークの縄張りに晒された。

腕の良いレンジャーならば、普段ならば単身でも潜入できるのにも関わらず。

オーク達に何らかの変化が生じたのか、最近では31から40階層の犠牲者が格段に増えている。

所謂、『オークの縄張り』エリアである。

力は強いが、愚鈍で連携とは無縁な為、中堅冒険者の手頃な稼ぎ相手だったのだ。

落ち着いて対処すれば、決して苦戦する敵ではない。

「オークですか。最近は何かなことになっているという話は聞いています。」

新種のオークを目撃したという噂まで流れておりますからな」

「新種？ なんだいそりゃ」

考え込むニガラグに、ジャスミンが尋ねる。

「極稀に、『赤いオーク』が出没するそうなんですよ。血のように赤い皮膚をしたオークがね」

「そんな話は初耳だよ。噂の出所はどこだい」

「死人に口なし。既にこの世にはいませんよ。」

息を引き取る前にうわ言のように呟いていたようで。その詳細は確認できませんでした。残念ですがね」

ニカラグが口到人差し指を当てる。

その気色悪い仕草に、ジャスミンの顔は思わず引き攣った。勿論気持ち悪かったからである。

「今回集まって頂いたのは、その件にも関連しています。」

消息を絶った冒険者達の中から、命からがら逃げ帰った者がいるのです。

彼は協会に事態を報告し、すぐに救援に向かって欲しいと要請したそうです」

壊滅した冒険者達の中で、最も運が良かった男。

間抜けにも仲間とはぐれてしまった為に、囲いの外側にいることができたのだ。

彼が追いついたのと同時にオークが突撃を開始し、冒険者達は壊滅した。

身を隠し、状況を最後まで見届けた後、すかさず『星石』を使い脱出。

協会に届け出て、仲間の救援要請を行った。

冒険者100名程がオークに生け捕りにされ、巢に連れて行かれたと。

宴が開催される前に、助け出さなければ全員食われてしまうと。

「ほう。それで俺達にその間抜けな欲ボケ共を助けに行けと？」

迷宮での出来事には不干涉を貫くのが、教団のあり方だった筈だが、戦士ギルドとしては、救出など必要ないと考える」

ロブが吐き捨てる。

迷宮で消息を絶ったからといって、協会を挙げて捜索に行くなど前代未聞である。

莫大な報酬には多大なリスクが存在する。冒険者ならば覚悟して行くべきだ。

こちらがリスクを負ってわざわざ救出に向かうなど、お話にならない。

その中にエクセルがいたとしても、考えは変わらない。

ロブはギルドマスターなのだから。

冒険者としてのロブならば、また意見は違う。

可愛がつている弟分を、直ぐにでも救出に向かうだろう。

だが、今は私情で動ける立場ではないのだ。

「確かに。迷宮内での出来事に、我々教団は一切関知しません。

勿論、協会としても救出に向かうなどありえませんが。

厳しいようですが、それが今までの慣例ですから」

エレナはそこで言葉を一度切る。
思わずジャスミンが口を開く。

「それじゃあ、私達は何のために集まったんだい？
哀れな冒険者達の冥福を、皆でお祈りするなんて言わないでくれ
よ。」

「こう見えても私は忙しいんだ」

「はは、それは良い。是非やるべきですな。
私も精一杯お祈りさせていただきますぞ。
昔を思い出しますなあ」

ニカラグが胸で十字を切る仕草をする。

その得意気な顔に、司教イコナの形相はさらに凶悪なものとなった。
エレナは呆れながらも、話を続ける。

「……報告によると、オークの集団の中に、
先程話題に上がった『赤いオーク』が混じっていたそうです。
これは、見逃せない情報である、と私は考えます」

「赤いオークねえ。ただの見間違いじゃないのかい。
返り血を思いつきり浴びていたとかね。」

そいつが冷静に観察出来たとは思えないしね」

「見間違いならば、その方が良いのです。
とにかく、真偽を確認する為に我々教団は兵を出すことに決定しま
した。」

目的は『変異したオークの確認及び捕獲』です」

エレナはイコナに視線を向ける。

それに頷くと、司教イコナは主へと状況を報告する。

「現在鋭意準備を整えております。明朝には突入可能。異端審問官、治安維持隊共に精鋭のみを選抜致しました。皆死を恐れぬ、信仰心の篤い者ばかりです」

「ありがとうございます司教イコナ。今回皆様に集まって頂いたのは、他でもありません。我々だけではなく、各ギルドからも戦力を出して欲しいのです。魔物の突然変異。これは協会としても見逃すことが出来ない事態です。」

迷宮内に波及した場合、恐ろしい事になりかねません」

エレナの言葉に、一同が黙り込む。

今は中層部のオークの変異が目撃されている。万が一、変異が魔物を強化する類のものだとしたら。もしそれが迷宮全体に広がったら。今後の運営に支障が出るのは間違いない。

「お言葉、確かに承りました。」

しかし、今すぐでなくても良いのでは？

宴前の、オークが凶暴化している時期でなくても……」

ニカラグが眉を顰めて発言する。

宴開催前の凶暴化したオークは、非常に厄介な存在となる。ギルドの腕利きを、わざわざ消耗するのは好ましくない。

「これは一刻を争う事態かもしれませんが。」

『宴』と共に大量に変異しないとも限らない。

変異した原因も分からないのですから。」

それに詳しい『情報』が欲しいということもあります。生け捕りにされた冒険者から、更に詳細を聞くことが出来れば」

「分かったよ。レンジャーギルドは戦力を出す。私とウチの馬鹿。それに子分どもを連れて行くよ。顔はアレだけど腕利きばかりだ」

ジャスミンはエレナの意見に賛意を示す。突然変異のオークについては確かに危険だ。

『宴』と共に、厄介な事態にならないとも言切れない。しかし、囚われた冒険者を救出に向かいたいというのも本音だろう。

孤児院出身の冒険者が消息を絶つたのは聞いている。レンジャーギルドに所属する者も何人かいたからだ。運営しているシスターが、エレナに面会したという話もある。シスターは必死の思いで、彼らの救援を要請したはずだ。恐らくエレナは断つただろう。己の立場を考えてそうしたはずだ。

だがこの娘は、人間臭さを捨てることが出来ない。最後の最後で、『情』を切り捨てられないのだ。それ故、忌まわしい洗脳から逃れることができたのかもしれないが。

「……戦士ギルドからも出す。俺と数名だがな。ギルドマスターとしてではなく、一人の冒険者として参加させてもらう。」

妙な前例を作ると、厄介な事になるからな」

「僧侶ギルドからは私と弟子が出ます。なあと、私がいれば百人力ですぞ」

禿げ頭をポンと叩くニカラグ。

魔術師エメラルドはそれを冷たく一瞥した後、エレナに告げる。

「魔術師ギルドからは出せません……と言いたい所ですけど。子供達の中から、適当に見繕っていかせますわ。

助けられるのなら、助けるに越したことはないですわ。

今まで掛けた費用、時間、労力が無駄にならないですものね」

各ギルドマスターが協力を約束する。

その後、いくつか打ち合わせを行い、当日の行動内容を煮詰める。即席であるため、各人の裁量に任せられる部分が多くなるのは必然だった。

「ウチの奴等が攪乱及び、救出任務を担当する。

これはレンジャーギルドの腕の見せ所だからね。

他の奴等には変異オークの件をお任せするよ」

「混乱に乗じて切り込んだ後、すかさず撤退って形だろうな。時間を掛ければ掛けるだけ不利になる。

消耗戦だけは避けるべきだ」

「そうですね。一撃離脱で長居は無用。

何しろオークの本拠地なのでから。

食われて死ぬのは僧侶の名折れ」

「殿は我ら教団兵が務める。

全ての結果を見届けた後、星石を使用して脱出する手筈だ。それで宜しいでしょうか、エレナ様」

イコナが主に判断を仰ぐ。

エレナは深く頷くと、一同に告げる。

「決して無理はなさないように。」

撤退の判断は現場の方々に一任します。

成功の暁には、『功績』とさせて頂きます。

どうか、よろしく願います。」

エレナが深々と一礼する。

一同もそれに続き、会合は終了した。

作戦内容は以下の通り。

突入は翌日明朝。オークの宴当日。

各ギルド員が予め上層部の露払いを行う。

選抜された精鋭達が、1階から中層まで一気に駆け抜ける。

『オーク』に変装したレンジャー達が巢を混乱させた後、本隊が突入開始。

変異オークの確認、及び冒険者の救出を行う。

その後、各々の判断で星石を使用し脱出。救出した者には予備を渡し撤収させる。

救出に関しては可能な限りとする。

対外的には合同演習とし、『救出』の前例は作らない。

変異オークについては、一切口外無用。

迷宮上層部を突破した私達。

一応おめでたいということで、現在ルイータの酒場で酒盛り中である。

ちなみに既に温泉で一風呂浴びた後なので、私の気分は最高に良い。風呂上りの一杯は、私に幸せを与えてくれる。

「ぶはーっ！！ この一杯の為に迷宮に潜ってるようなもんよね。胸に染み渡るわ」

ジョッキに注がれたエールを飲み干し、テーブルに叩きつける。冷えた液体が、乾いた喉を潤してくれる。

その刺激が最高に心地よい。

「……親父臭いわよアレルちゃん。もっと慎みを持ちなさいな。

貴方も一応女性なんだから」

ピンキーが小うるさいことを言う。

良い小姑になるだろう。

「うるさいわね。誰にも迷惑掛けてないんだから良いじゃないの」

「アレルさんはお酒あんまり強くないんですから、無理はダメですよ。」

また二日酔いになっちゃいますから」

マタリが大人ぶって私に注意してきた。

この前飲みすぎでダウンしたのはこいつの方である。しかも覚えていないのが性質が悪い。

「　　って空になっちゃったわよ。」

ピンキーちよつとお酒注文してきて頂戴。

一刻も早くお願いね」

「　　寝言は寝てから言いなさいよお。」

可愛らしいちびっこ勇者様」

ピンキーが悪戯っぽく微笑んだ後、私のおでこを突いてきた。

私の頭が前後に揺れる。この女、何かと言うと私のおでこを突いてくるのだ。

反撃しようとして私が立ち上がったところで、目の前にお酒やら料理が差し出される。

なんだ、既に注文していたのか。

「はいお待たせしました。コレは私からのお祝いよ。遠慮なく食べて良いからね」

「　　どうもありがとう……って誰よアンタ」

年は三十半ばぐらいだろうか。トレイを持った女が私をまじまじと見つめている。

見た感じ酒場の従業員のようではあるが。

「まだ挨拶してなかったわね。」

私の名はルイーダ。一応この酒場の主って奴かしら。

ほら、店の名前にもなってるでしょ。貴方がアレルさんよね？」

「そうだけど」

「噂通り、可愛い娘さんね。」

本当はもっと早くお話したかったのよ」

ニコニコと笑いながら自己紹介するルイーダ。

アリアハンのルイーダと雰囲気似ているが、

こちらの方が多少温和な印象を受ける。

棘のないルイーダと言ったら、元の世界のに失礼だろうか。

「あ、始めまして！ 私はマタリと言います」

「知ってるわ。色々大変みただけど頑張ってるね。」

私は貴方を応援してるから」

「……お久しぶり、ルイーダ。今はこの子達と組んでるのよ。」

私の目的はもう達成できたしね」

「……良かったわねエーデル。こんなに素敵な仲間が出来て」

「素敵かどうかは知らないけれど、退屈はしないわ。」

この子達を見ているだけで、一日時間を潰せるもの。

暇つぶしにはもってこいね」

それぞれが会話を交わす。

エーデルはどうやら知り合いだったらしいが、さりげなく失礼な事を言っている。

「酒場でも噂になってたのよ。妙なパーティが結成されたって。その中心人物がどんな子なのか、とても興味があったの。中々時間が合わなかったけれど、ようやく会えて嬉しいわ」

別に私は嬉しくはないけど、料理を奢ってもらったので良しとしよう。

タダより安いものはないのだ。

私は会話に参加せずに、酒を飲んで料理を貪り食う。

若鶏の香草焼き。中々美味である。

「それでどう？ 実物を目にしてみて。

一応勇者様だから、拜んだらご利益があるかもしれないわよお」

エーデルがグラスを傾けながら、「冗談めかして話しかける。

「……そうね。正直言って驚いたわ。

だって、本当にそのままなんだもの」

「……そのまま？ 何が？」

私は思わず聞き返す。そのままとはどういつことだろう。

「ええ、実はね。 っって何事かしら」

ルイーダが私の問いに答えようとした時、酒場の奥から怒鳴り声が響く。

そちらに目を向けると、カウンターで受付係の女と子供の集団がなにやら揉めている。

カウンターといっても、マスターのいる場所ではない。

依頼の受理やら冒険者を仲介業務を行っている区画である。

マスターは酒場と宿泊関連。ルイーダは依頼やらの仲介業務を行っているらしい。

酒場にいなながら、今まで面識がなかったのはその為である。

「……あらあら。何やら面倒ごとみたい。

悪いけれど、これで失礼させてもらうわ。

また今度、ゆっくりお話ししよう」

会釈すると、少しだけ早足で騒ぎが起きている場所まで戻っていく。酒場の主だけあって、色々と忙しいようだ。

私も見習って、目の前の料理を急いで片付けていくべきだろう。

「ルイーダも大変ね。繁盛してるだけあって忙しそう」

私は耳から聞き流して、ひたすらに食事を貪っていく。食べれるときに食べる。これが冒険者の鉄則。

「本当に美味しいわ。タダなのが美味しさの秘訣かしら。ああ、幸せで胸が一杯」

「呆れた。大金を持つてるくせに、ケチ臭いのねえ」

「それとこれとは話が別よ。ねえマタリ」

「え、そ、そうですね。アレルさんはケチですよね」

いきなり話を振られて混乱した猪女が、私に口撃してきた。
天然な分、罪は重い。

「良い度胸してるわねマタリ。
後で頬をこねくり回してあげるから、楽しみにしていなさい」

「そ、そんな！ 私が一体何を」

大声を上げようとするマタリ。

私がいかにからかおうとした所、目に妙な光景が飛び込んでくる。
先程揉めていた子供の集団が、こちらへとゾロゾロ歩いてきたのだ。
どうみても私達の席に一直線に進んできているように思える。
他の客も何事かとざわつき始めている。

遠目にルイーダを見ると、頭を抱えて悩んでいる様子が窺える。

「……一体何事かしら。アレルちゃん、何かやらかしたの？
別に止めないけど、私を巻き込むのは止めて頂戴ね」

ジト目で睨んでくるエーデル。

私は身に覚えがない。

「知らないわよ。私が高んでそんな面倒くさいことを。
ガキなんかに関わるわけないでしょうが」

「子供達のお菓子を取り上げたとか。お腹空いたら貴方やりそうだし」

「ア、アンタね。私を何だと思ってるのよ！」

「ほらほら、そんな大声出したら子供達が驚いちゃうわよお」

そんなやりとりをしている間に、私達のテーブルは子供の集団に完全に囲まれてしまっていた。

先頭に立つ、やんちゃそうな顔をしている悪ガキが、リーダーのようだ。

別に悪いことをしたわけではないが、悪ガキっぽい印象を受ける。他は半べそをかいていたり、おどおどとしているのが殆どである。はっきり言って、酒場には完全に場違いの面々である。

仕方ないので、私はガキに尋ねてみる。

お小遣いが欲しいとか言ったら、全員お仕置き決定だ。強烈なデコピンで、必ず泣かす。

「ゾロゾロと一体何なのよ。ここはガキの遊び場じゃないのよ。探検ならお外でやりなさい」

「……姉ちゃんは、本当に勇者なのか？
ここのおっちゃん達に聞いたら、姉ちゃんがそうだって」

周りを見渡すと、不自然に視線を逸らす何人かの酔っ払い。余計なことを言ったのは、こいつらに違いない。

「い、いきなり唐突ね。まあ良いわ。
そうよ。私が勇者。勇者アレル。
この通り、刻印もちゃんとあるもの」

私は左手の『ロトの刻印』を見せ付ける。

周りの子供達はまじまじと見つめたあと、目をまんまるにして驚いているようだ。

鳥のような紋章は、やはり物珍しいのかもしれない。

「なんか凄い。鳥みたいだ」

「格好良いね。他の人と違うよ」

「……兄ちゃん、やっぱりこの人勇者だよ。本で調べたけど、こんな刻印見たことないもん。勇者だから他の人とは違うんじゃないかな」

大人しそうな女の子が、分厚い本を抱きかかえながら悪ガキに告げる。

髪は三つ編みで、見るからに真面目そうな印象を受ける。

「そつか。それじゃあ噂通り勇者なんだな。俺達の兄ちゃん達よりちっちゃいのに」

10もいかないようなクソガキに、小さい呼ばわりされる勇者アレルこと私。

隣のピンクィは口元を押えて笑いを堪えている。

マタリはあからさまに目を逸らしているが、顔が紅潮している。笑いたいなら、素直に笑えば良いのだ。

当然その報いは受けさせるが。

「……私を馬鹿にしにきたわけ？ 満足したらさっさと家に帰りなさい。」

アンタ達に構ってるほど、私も暇じゃないのよ」

しゅしゅと追い払う仕草をすると、三つ編みの女の子が半べそをか

悪ガキはしかめ面をした後、テーブルの上に小さな小袋を差し出す。硬貨が入っているらしく、擦れる音が微かに響いた。

「依頼したい事があるんだ。

ルイーダ姉ちゃんに聞いたら、受けてくれる人がいないって言われて。

だから、勇者の姉ちゃんにお願いしたいんだ」

厄介ごとだ。

今までの経験からして間違いない。

勇者は無償で人々の為に尽くさなければならぬ。

誰かがそんなムシの良い話を広めているに違いない。

私の予想だと、あの性格の悪い大臣がばら撒いたと思う。

一人で魔王城に突っ込めと言いつつ出すぐらいだし。間違いない。

「……一応聞くだけは聞くけど。一体何を？」

「うん。実は」

話は簡単だ。

オークフラワー採取の依頼に挑戦した、大勢の冒険者達が戻ってこない。

その冒険者達の中に、孤児院出身の連中も混じっている。

ガキ達も同じ孤児院なので、そいつらは兄や姉みたいなものであると。

この時期のオークは、人間を殺さずに生け捕りにする。

『宴』までは捕虜は生きてるので、なんとしてもそれまでに助け

出して欲しい。

でもそんな危険な依頼に挑戦してくれる物好きは存在しない。褒賞金もこの小袋に詰まった『銅貨100枚』しかないのだと。

依頼を受けてくれる奴がおらず、切羽詰ったガキ達は『勇者』の噂を聞きつけた。

『勇者』ならば、困っている人々を助けてくれる。

そう考えたこいつらは、ルイーダに最後の確認を取った後、私の元に現れたと言う訳だ。

「なるほどなるほど。」

それでこの銅貨100枚で、オークの巢に乗り込んで来いと言う訳ね。

丁度凶暴化してるオークひしめく中に、私だけで行って来いと

私は口元を歪めて、悪ガキの顔をじつと見つめる。

それに押されたのか、ガキは視線を逸らす。

「そ、そうだよ。でも勇者なら受けてくれるんだろ。」

困ってる人を助けてくれるって、本にも書いてあったし」

ガキが隣に目を向けると、首を小さく縦に振る三つ編みの少女。

「う、うん。勇者は、皆の希望なんだって。」

だから、困ってる人々を見捨てられないって書いてあるんだよ。ほら、ここに」

少女が抱えている本をめくって、私に見せようとする。

私はそれを手で払うと、冷たい口調で言い放つ。
少女は傷ついた表情を浮かべるが、私は見ないフリをする。

「馬鹿馬鹿しい。そんな依頼受けるわけないでしょ。
自分から危険な場所に突っ込んでいった馬鹿を、なんで助けなきゃいけないのよ。」

そんなの自業自得じゃない」

「でも」

「アレルさん、相手はまだ小さいですし。
もう少し柔らかく言ってあげても」

マタリが私を宥めてくるが、苛々は収まらない。

「勇者だからってね、馬鹿を一々助けるほど暇じゃないのよ。
勇者だって人間なのよ。神様じゃないの。分かる？」

お願いすれば、何でも聞くと思ったら大間違いよ!!」

テーブルに拳を打ち付ける。

皿上の料理が散らばってしまう。

エーデルが無言で、それらを拾い集めている。

「でも姉ちゃんは勇者なんだろ!? なんで助けに行ってくれないんだよ!

このままじゃ皆食われて死んじゃうよ!」

悪ガキが涙を浮かべて叫び声を上げる。

理不尽な現実には直面し、理不尽な事を叫ぶ。

子供だから理解できないのも仕方がない。

「それが運命って奴でしょ。分かったら諦めなさい。
泣き叫んだって、誰も助けてくれないわよ」

私が泣き叫んだとき、誰か助けてくれただろうか。
地獄の騎士に、身体を串刺しにされ、喉元を貫かれたとき、
誰か私を助けてくれただろうか。

「……じゃない」

悪ガキが何かを呟く。
声が小さいので聞き取れない。

「何？ 声が小さくて聞こえないわ。
男ならハッキリ話しなさいよ」

「お前なんか勇者じゃない」

「勇者よ。誰が否定しても、私は勇者」

私が否定しようとも。
決して逃げられない。そういうものだ。

「 違っツ！ お前なんか勇者じゃない！！」

悪ガキは傍にあったエールのジョッキを取ると、
私の顔目掛けてぶっかけてきた。
哀れ私の身体はエール塗れ。ずぶぬれになってしまった。
避けようと思えば出来たけど、そうはしなかった。
なんとなく。

「……それで、気は済んだ？」

「クソツ！ 皆帰るぞ！ こんな偽者に頼んだって仕方ない！
他の人をお願いしてみよう！」

困んでいた子供連中が、先頭の悪ガキの後に続いて酒場から出て行く。

本を抱えた三つ編みの少女が、何か言いたそうにこちらを眺めていたが、

しばらくすると後を追って退出していった。

「……大変だったわねえアレルちゃん。

これも有名税ってやつかしら」

エーデルが茶化して話し始める。

マタリは綺麗な布を出すと、私の身体を拭き始めた。

自分で出来るのに、お節介な奴である。

「臭いが残っちゃいます。後で洗濯しないとダメですね。
とりあえず、着替えてしまった方が良くもしれません」

「……そうね」

私の着ている『みかわしの服』の代わりはない。

部屋には、血の跡の残るたびびとの服と、門番にもらった白いロブがある。

下着の替えは買ってあるので問題ないが。

「でも、本当に助けにいかないんですか？」

な、なんだか子供達が可哀想でしたし」

マタリが小さな声で呟く。

私は首を振って、それに答える。

「……………受けた方が良かったと？」

仲間を危険に晒す、明らかにヤバそうな依頼よね。

ちっばけな自己満足と僅かな褒章金の為に、行くべきだったかしら」

「可哀想だけど、アレルちゃんの判断が正しいわ。

現に他の冒険者達も、何件か出されている救出依頼を受けていないし。

自殺願望があるなら、行っても良いかもしれないけれど。

私だったら丁重にお断りするわね」

「……………」

視線を落とすマタリ。

「……………マタリは納得がいつてないみたいね。

逆に聞くけど、アンタがリーダーだったら受けるの？」

私とエーデルを巻き添えにしてまで、依頼を受けるのかどうか。それを聞かせてくれる？」

「わ、私ですか？」

「そうよ。偶には自分の頭で考える事も重要よ。

私はアンタの意見を聞きたい」

私の言葉に、腕を組んで考え始めるマタリ。

暫くした後、私の目を見て自分の考えを述べ始める。

「……すみませんでした、アレルさん。
やっぱり、私も断ると思います。」

仲間を巻き込む訳にはいきませんから」

「そう、それが正解よ。」

後先考えず、お願いされたことを一々引き受けてたら身がもたない。
誰でも少し考えれば分かることよね」

「は、はい。そ、そうですね」

かつて、私と袂を分けた彼らは正しかったのだ。
間違っていたのは私。

今更ながら気付くことが出来た。

困っている連中など見捨てていくべきだった。

冒険を急がずに、確実に己の力を磨いていくべきだったのだ。

その結果、何千、何万という犠牲が出ようとも。

その後、私は部屋に戻り白いローブに着替えた後ベッドに入る。
マタリとエーデルもやがて戻ってきて、部屋の明かりが消される。
嫌な事も寝れば、全て忘れてしまっただろう。
今までもそうしてきた。

だから、今日は大人しく寝よう。それで良いはずだ。

オークの縄張りである31階から40階。

彼らの本拠地はその中間に位置する、35階に存在した。

35階は単純な構造であり、ただ進むだけならば何も考えずに前進すれば良い。

幾つかの小部屋を抜けた後、下への階段に辿りつく。

もしオークフラワーの採取を望むのならば、途中で左に逸れば良い。

何者かによってくり貫かれた、ぽっかりと開いた入り口が存在する。その先は入り組んだ通路となっており、途中途中でオーク達の襲撃に遭うだろう。

その最中でも、僅かではあるがオークフラワーを見かけることが出来るはずだ。

大抵の冒険者はここで引き返す。奥に進めば進むほど危険が増すからである。

暗く長い通路を抜けた先には、思わず息を呑むような巨大な空間が存在する。

この場所こそが、オーク達の本拠地『オークの巣』である。

彼らが集団で生活している場所であり、オークフラワーも大量に栽培されている。

壁に穴をくり貫いて住居代わりとしており、屋内には幼いオークも見かけることが出来る。

獲物の骨で作られた家具やオブジェが、至るところに飾り付けられている。

中央の台座には群を統率するオークキングが居座っており、来るべき『宴』の為に、ひたすら祖霊に祈りを捧げ続けている。

巨大な空間の端には、粗末な檻が何個も設置されており、翌日の食料となる、哀れな冒険者達が全裸で閉じ込められている。誰もが絶望を浮かべ、ただ痛みと疲労から苦悶の声を上げる事しか出来ない。

見張りのオークは、愉悦の表情を浮かべながら彼らを眺めている。あと一日我慢すれば、本能のままに食うことが出来る。

血と肉の味を想像して、あふれ出る涎を隠そうともしない。

35階に下りて直ぐの部屋に、オークスカウトが身を隠して待機していた。

宴前日ということもあり、本拠地周辺の警戒態勢は厳重である。

彼がオークにのみ聞こえる『笛』を鳴らすことで、

本拠地からオークの兄弟達が応援に駆けつけるのだ。

オークスカウトは誰もがこの『笛』を所持している。

他の縄張りについては、オークキャプテンが徒党を率いて徘徊している。

獲物を捕獲するのは彼らの役目だ。

ふと、オークスカウトの耳に、何者かが近寄ってくる足音が聞こえてきた。

聴力が発達しており、接近する者をいち早く察知することができる。彼は『ハイド』状態のまま、短弓に矢をつがえる。

そして入り口方向に意識を集中させた。

暗がりから現れたのは、オークの中でも最精鋭であるオークキャプテン。

よるよるとよるめきながら、歩を進めている。

彼らは徒党を率いて人間狩りを行っていたはずだが、と疑問に思っやがて、その顔が部屋の明かりに照らされると、オークスカウトに動揺が走る。

オークキャプテンの顔は血塗れであり、両腕は切り落とされ、背中には斧が突き刺さっている。

その斧はオークが製造したもので、通常より一回り大きい物となっている。

生きているのが不思議な程の重傷だ。

「グ、ググアアア」

漏れる呻き声。指揮官としての威厳は欠片も存在しない。

完全に戦意を喪失しまっている。

「わざわざ道案内ご苦労様だったわね。そろそろ楽になって良いわ

よ。

もうすぐアンタ達の住処なんですよ？」

女の声が聞こえたかと思うと同時に、オークキャプテンの身体が縦に両断される。

血飛沫を撒き散らしながら、悲鳴を上げる事も出来ずに彼は息絶えた。

その後ろから姿を見せたのは、返り血で染まったローブを身に着けた小柄な女。

手には鋼の剣を装備し、つまらなそうな表情を浮かべている。

オークスカウトは、一瞬不意を突くことを考えたが、考えを改める。見かけは小柄だが、鋼の肉体を誇るオークキャプテンを両断する膂力の持ち主。

油断すれば目の前の肉塊と同じ目に遭いかねないのだ。

ここは応援を呼ぶのが最善。無理をする必要はない。

本拠地には兄弟達が何人も待機しているのだから。

即座に判断すると、懐から『笛』を取り出し、息を籠めて吹き鳴らそうとした。

次の瞬間。

「せーのっどー!!」

オークキャプテンの死体から素早い動作で斧を引き抜き、おもむろに投げつけた。

斧は、『ハイド』で姿を眩ませているオークスカウトの肩に突き刺さる。

「グギヤアアアアアアッ！！」

痛みで思わず『笛』を落としてしまう。
勿論ハイドは解除されている。

「上手く隠れてるつもりなんでしょうけど。

その不快な臭いで分かるのよ。あまり舐めないことね」

「ク、糞猿ガツ！！」

罵声と共に突き刺さっている斧を引き抜く。傷口から勢い欲血が流れ落ちる。

早めに治療しなければ致命傷となる。

「うるさいわね。でかいのは図体だけにしなさい」

「キ、キサマ！！」

我方同胞達二何ヲシタ！！」

「何をしたって、皆殺しにしたに決まってるでしょ。

後、豚が偉そうな口を聞くんじゃないわよ」

ローブの女が駆け始め、距離をつめてくる。

オークスカウトは狙いを定め、装備している短弓で矢を発射した。

女は発射された矢を素手で掴むと、目前まで近づいて、

彼の眼球目掛けて勢いよく突き刺した。

「ッ！！！！！！」

「今度は騒がせないわよ」

悲鳴を上げようとする口を無理やり塞ぎ、地面へと押し倒す。倒れ伏せたオークの身体。急所である喉元を足で踏みつける。呼吸が出来ないオークは、痛みと苦しみから四肢をばたつかせる。しかしその拘束は解くことが出来ない。

「！」

「さてと。死ぬ前に一つだけ聞いても良い？」

この先がオークの巢な訳？ ちよつとした用事があるんだけど」

ローブの女がまるで世間話でもするかのように問いかける。

少しだけ足の力が弱まった為、オークスカウトは呼吸ができるようになる。

「イ、今二、仲間が駆ケツケルゾ。ニ、逃ゲルナラ今ノウチダ！」

「あつそ。ご心配どうもありがとうございます。」

それじゃあね」

少女はそう答えた後、力を籠めてオークの喉元を踏み潰した。頭部が分離して、コロコロと転がり血を撒き散らしていく。顔面には矢が刺さっており、不規則な転がり方をしている。

「……まあ適当に進むとするか。」

別に間に合わなくてもどうでも良いしね」

やれやれと溜息を吐いた後、少女は再び歩き始める。

「しかし、何で私はここにいるのか。
同情した訳じゃない。自己満足の為でもない。
自分で自分が分からない。今でも考えは変わらないのに。
……本当に、理解できないわ」

癖である独り言が漏れる。

一人で旅をしていた時に身についた悪癖。
誰にともなく喋り続ける。

「……金になるオークフラワーを取りに来た。
そついうことにするか。」

他に納得の行く理由は存在しないし。

私は自分の利益の為にここに来た。
そう、ただそれだけ」

通りがかりに、オークの頭部を粉碎し、少女は一人通路を進み始めた。

・オーク

オークキングを筆頭に、キャプテン、スカウト、メイジ、ソルジャーが確認されている。

猪を思わせる人型で、豚と呼ばれることを非常に嫌う。

好物は鼠と人間。特に若い女が好物で、散々に髑つた後顔面から貪り食う。

人語を喋り、意思疎通を図ることも出来るが非常に好戦的な性格。交渉により戦闘を回避することはまず不可能である。

食料の調達、縄張りの維持はオスが担当する。

メスは本拠地で、非戦闘員として子育てとオークフラワーの栽培に専念する。

オーク種族の力は恐るべきものがあるが、単純な動きなので、経験を積みれば特に問題となる敵ではない。

ただし、宴の一週間前からは強敵となるので注意が必要である。侮った冒険者は、屍のオブジェとして縄張り内に晒されることだろう。

彼らから冒険者に対する意思表示とも言われている。近寄るものには死を、という警告だと。

無事退治出来た場合、刈り取るべき部位は耳。1つ銀貨1枚で換金可能。

装備した武器防具も剥ぎ取って持ち帰れば、それなりの収入になる。当然重量があるので、考慮する必要がある。

『オークを食べたことあるか？　ありやとても食べたものじゃなかつたぜ』

第二十話 勇者の判断（後書き）

100Gあげるから、ちよっくらオーケの楽に行ってきたちよ

はい

はいえ

第二十一話 勇者とオーク軍団

オークの住処に繋がる一本の長い通路。

終点には少し開けた空間があり、巨大な門が設置されている。それを突破するとオークの巢にようやく到達することが出来る。

オークフラワーを求めて単に挑もうとする冒険者達。

苦勞してここまでたどり着いたとしても、門の堅固さを見て大抵は諦める。

目と鼻の先に、大金が転がっていると分かっているとしても、命には代えることができないからだ。

門を守護するオークソルジャーとスカウトが常に何人か立っており、さらに門を開けた先には大群が待ち受けている。

気付かれずに始末して、門を突破するというのは現実的ではない。

実際には門を開けると、両脇にオークメイジが数十人控えており、侵入者を確認次第確実に焼き殺す手筈となっている。

オークは種族の特徴として、『魔力の器』を持つものが極端に少ない。

恐るべき力と引き換えに、魔力の才能を失ったかのように。

よって、魔法を使える者はオークの群でも極僅かで、希少とされている。

その中でも鍛錬を積み、オーク呪術を習得したものだけが『オークメイジ』を名乗ることが許される。

それを門にほぼ全て配置しているということは、それだけ門の守備に力を入れているという証明である。

門を警備しているオークスカウトの一人が、前方から足音が近づいてくるのを察知する。

足音の大きさから、同胞であるオークでないことは確實。よって侵入者と判断し、周りの仲間に見て合図する。

「ケケ。宴ノ日ニノコノコ現レルトハ」

「猿ドモメ。日頃ノ報イヲ受ケルガ良イ」

ソルジャーが槍を構えて侵入者を待ち受ける。

スカウトは後方から短弓を構えて狙いを定める。

5秒。10秒が経っただろうか。足音は完全に止まり、物音は一切しなくなった。

「……ドウイウコトダ」

「恐レヲ為シテ逃ゲ出シタノダロウ。

ツマランナ」

「ケケケ。マア良イジャナイカ。

モウスグ宴ダ。猿ヲ思ウ存分貪ロウデハナイカ」

嘲り笑いを浮かべようとしたオーク達の足元に、何か球体のような物が投げ込まれる。

咄嗟にそちらに視線を送るオーク。それは恐怖の表情を貼り付けた、同胞の首であった。

額には短刀が深々と突き刺さっている。

「ナ、ナンダコレハ!？」

「ド、同胞ノ首ダ！ ヤハリ近ク二居ルゾ！！」

動揺しながらも前方に視線を向けるオークソルジャー。
薄暗い空間、小柄な人影のような物を確認できたかと思った瞬間。
凄まじい爆音が辺りを包み、オーク達は一人残らず爆散した。
四肢は乱暴に千切れ飛び、胴体は壁に打ち付けられ大きな血飛沫を
散らせた。

侵入者であるアレルは別にオークを始末しようと思ったわけではな
い。

門を吹っ飛ばす際に、巻き込んでしまっただけである。

使用した魔法は、爆裂魔法『イオラ』。

例え彼らが魔法に耐え無事だったとしても、結果は変わる事はな
かっただろうが。

アレルが魔物を見逃すことはない。

ちなみに首を投げ込んだのは、トラップがないか調べただけだ。
入り口に落とし穴でもしかかれていたら、面倒くさい。
ただそれだけである。

「やれやれ。派手にやりすぎたか。

中の連中に、『これからいきます』と教えてあげたようなものよね」
アレルは髪をかき上げながら、失敗したかなと反省していた。
こっそり潜入して、広範囲魔法で一気に蹴りをつけるつもりだった
のだ。

まあ良いかと思いつき、アレルは門の残骸を蹴り飛ばしながら先へ
と進む。

「侵入者だ！ 門が破られたぞ！！」

「オークメイジの同胞達よ。兄弟の恨みを晴らすのだ！」

「決して中にいれさせるな！ 祖霊に対する冒瀆となるぞ！」

ローブを纏ったオークメイジ達が怒声を上げる。

彼らは知性が備わっているので、人間と同じように会話をすることが出来る。

オークキング、オークキャプテンも同様だ。

怒鳴り声はアレルの頭上から聞こえてくる。

上を見渡すと、通路を守護するかのよう両脇にオーク達が並んでいる。

それぞれが殺意に満ちた表情でアレルを睨みつけている。

アレルは軽く首を横に振って、全く気にする様子もなく前進を開始した。

悠々と歩いてくるアレルに対し、詠唱を終えたオークメイジ達の魔法が炸裂する。

『オークの業火』

オークメイジ達の全魔力を注ぎ込んだ合体魔法であり、住処まで一直線に伸びる、正門からの通路を焼き尽くす、灼熱の炎である。

今まで数々の愚かな冒険者を骨まで焼却してきた、オークメイジの得意とする攻撃魔法。

例外ではなく、アレルの身体もその業火に包まれる。

気が立っているオークメイジ達は、それに満足することなく各々の

魔法を繰り出し始める。

アレルが位置するであろう地点に、それらの攻撃も次々に着弾する。轟音と砂埃、熱風が吹き荒れる中、数分の間喧騒が止むことはなかった。

「攻撃止めっ！ もはや跡形もあるまい。

猿には十分すぎるほどだ」

「愚かな猿め。魂までも焼かれるが良い！」

「宴の前に余計な手間を掛けさせおつて。

この憤りは、あの猿どもを甚振ることで発散するとしよう」

厭らしい笑みを浮かべるオーク。

知性があつても、残忍な性格は変わらないのだ。

「猿の死体が万が一残っていたら、見せしめとする。

今後このような愚か者が来ないようにしなくてはな」

口元を歪めると、念のために亡骸を確認しようと思ふと目を凝らす。

未だに煙が漂っていて視界が悪いのだ。

『ライデイン！！』

オークのものではない声が響いたかと思うと、

オークメイジ達の頭上から稲妻が迸る。

何が起こったのかすら理解できぬまま、オークの魔術師達は稲光に包まれて絶命した。

「アストロンなんて久々に使ったわ。
流石にアレを喰らったら、服が丸焦げよね。
いくらなんでも、裸で戦う趣味はないから」

上から落ちてきたオークメイジの死体。
忌々しげに黒焦げの顔面を踏み潰すと、アレルは愚痴る。

「豚どもが一丁前に魔法を使うなんてね。
一応油断はしないことにしようかしら。
今までだってしたことはないけどね」

白いローブの埃を手で適当に叩き落とすと、アレルは更に前進する。
通路を抜けたその先は、巨大な空間が広がるオークの住処。
厳かな儀式の前に発生した異変に、オーク達は誰もがいきり立って
いた。

王でさえ例外ではない。
祖霊が間もなく降臨するその前に、なんたる不手際。
オークキングは恥と怒りで身体を震わせていた。

住処全体に轟くような雄叫びを上げるオークキング。
それに続いて、オーク全員が怒りの雄叫びを上げる。

「オークの同胞達よ！！ この厳かなる宴に、招かれざる愚か者が
入り込んだ！！
許しがたいことに、兄弟達に多大な犠牲が出ている有様だ！
即刻四肢を切り刻み、腸を引き摺りだし、彼らへの慰みとするのだ
！！」

王の号令とともに、槍を構えたソルジャーが隊列を組んでアレルと

対峙する。

何百人といったオークの兵隊が決して逃がすまいと円陣を組んでいる。

入り口はオークスカウトの仕掛けが作動して、柵が降りている。逃げることは出来ない。

「猿メガ！！ 兄弟タチノ仇ダ！」

「豚が吠えるんじゃないわよ。すぐに全員殺してやるから、掛かっ
てきなさい」

アレルが鋼の剣を抜いて、威嚇する。

オーク達のボルテージは上がり続け、今にもとびかからんばかりだ。場は一触即発の空気となる。

「待て。私が相手をしよう。勇敢な戦士に対し、蹴り殺すような真似は勿体無い。

宴の前の余興とさせてもらおう」

オークの群の中から、一際巨大なオークが現れる。

重厚なプレートアーマに身を包み、頭部には巨大なヘルムを装備している。

特に印象的なのが、その皮膚だ。

血の様に赤い皮膚に覆われ、体毛までも赤く染まっている。言うまでもなく、顔面も真っ赤だ。

「……アンタ何者？」

「私は偉大な祖霊に祝福されたオーク。ブラッディオークのグアテ。

王に仕える忠実な僕の一人」

「偉大な戦士グアテよ。祖霊に捧げる生贄の一人目とするのだ。必ず首を刎ねて殺せ！！ 我らオークが受けた恥を雪げ！」

オークキングの言葉に続き、オークの群が『殺せ！！』と叫び声を上げる。

地響きと怒声が轟く中、グアテは静かに首を縦に振る。

「 承知。必ずや我が剣の錆としてみせましょう」

ブラッディオークのグアテは、背負った大剣を引き抜くとアレルへと切先を向ける。

その刀身は皮膚と同じく、禍々しい紅色をしており、まるで血が滴っているかのように見える。

「アンタがオークの一番の使い手って訳か。

良いわ、さっさとやりましょう。あまり時間がないのよね」

アレルも鋼の剣を構えて、グアテに向き直る。

「……名前を聞いておく。一人でオークの住処に侵入した勇敢なる者よ。

貴様を殺しても、首を刎ねる以外は辱めを与えることはしない。

安心して死ぬが良い」

オークの顔で、武人のような台詞を吐くグアテ。

あまりのギャップにアレルは噴出しそうになるが、我慢する。

こいつらからすれば、自分の顔の方が笑えるものなのかも知れないのだから。

アレルは鋼の剣を自分の顔の前に翳し、名乗りを上げる。

「我が名はアレル。勇者アレル。全ての魔物を殲滅する為に存在する化け物よ」

「人間の勇者か。魔物を殲滅する化け物を自称する。実に面白いな。今まで屠ってきた冒険者共とは違うようだ。

それでは始めるとしよう！」

唸り声を上げると、グアテは突進を開始する。

アレルは牽制の為に魔法を放って様子を見ようとした。

「ベギラマ！」

迸る火炎がグアテの身体を包み込む。

だが、効果は全くないようで、気にすることなくアレルへと肉薄してくる。

「人間は直ぐに魔法に頼ろうとする。

己の腕に自身がないから、まやかしに縊ろうとするのだ!! この愚か者めがっ!!」

「クッ!!」

振り下ろされた大剣をすんでの所で回避するアレル。

そのまま横に飛ばうとしたところを、グアテの渾身の蹴りが炸裂する。

「死ねっ!!!!」

腹部にもろに喰らったアレルは、凄まじい勢いで壁へと打ち付けられる。

普通の人間であれば、確実に瀕死の重傷を負っているに違いない。

「……………」

アレルは思わず呻き声を上げてしまう。

胸部を圧迫されたのは事実であり、演技ではない。

「なるほど、あれを喰らって生きているとは。

流石にここまでたどり着いただけはある。

感心したぞ。人間の戦士よ」

そう言いながら、徐々に距離を詰めて来る。

確実にトドメを刺すつもりなのだろう。

王の命令通り、首を刎ね飛ばして。

「……………アンタ、魔法が効かないの？」

瀕死を装い、小声で問いかける。

別に魔法が効かない敵は珍しくはない。

だが、念のために効いておく。

この世界でもそういう存在がいるかどうかの確認だ。

「祖霊の祝福を受けてから、私は『魔法耐性』を身に着けたのだ。

更に知恵、強靱な力、そしてこの溢れてくる生命力！！

私は試練に打ち勝ち、この偉大な力を手に入れたのだ！！」

「……………試練？」

「この宴の後に行われる、オークの試練だ。前は私だけしか生き残ることが出来なかったが、だが、いずれは何百という同胞が試練を乗り越えるだろう」

誇らしげにペラペラと話し出すブラッディオーク。試練とやらが何かはアレルには分からなかったが、放置しておけばこれからも増え続けるようだ。つまり、確実にここで滅ぼすのが正解である。

ベホマを掛け終えたアレルは弱ったフリをしながら立ち上がる。そして手を震わせながら、剣を構える。

「……勝負よ」

「見事なり。私が相手をしたのは間違っていないかったようだ。その氣勢に応え、我が全力の一撃で貴様を葬ることにしよう」

大剣を垂直に構え、力を溜めている。そして、肩に乗せて両手で握り締めると、振り下ろしの態勢を取る。

「……………」

「喰らうが良い、オークの断頭台オークキロチン!!」

巨体に似合わぬ爆発的なダッシュ力で、驚くべきスピードでアレルへと接近する。

裂帛の気合と共に、大剣を一閃させる。標的の細い首筋目掛けて。

刀身には、紅い禍々しいオーラが漂っているように見えた。

口から血を吐きながら、アレルはグアテへと問いかける。

「痛い？ 痛いでしょう？ でもすぐに楽になるわ。時間かけちゃって悪かったわね。ちよつと試したいことがあったただけだから」

「ア、アア」

痛みの余り白目を向くグアテ。その身体から、白い光が迸る。体内から漏れ出すように溢れる光。

「イオラー！！」

アレルが爆発呪文を唱えると、グアテの身体は粉微塵になり吹き飛んだ。

血や肉片がアレルだけではなく、オークの群にも降り注ぐ。残されたプレートアーマーはひしゃげてしまい、原型を留めていない。

「グ、グアテがやられただと！？ わ、我らオークーの強者が、そ、そんな馬鹿な！！ 祖霊に選ばれた、偉大な戦士が、や、敗れたというのか」

王は驚愕に目を見開いている。オークの群もあまりの出来事に言葉を失う。

アレルは心臓部まで達している傷をベホマで癒す。

致命傷を負っても取り乱すことはない。
痛みは慣れれば大丈夫。

限界を超えれば、痛みは感じなくなる。
麻痺するともいっただろうか。

治療を終えても、周りには興味を示さず、『魔法耐性』について考察する。

雑魚共の運命は既に決まっている。今更慌てることは何もない。

「なるほど。魔法耐性があるのは赤く変異した皮膚か。

体内から起爆すれば、何も問題はないみたいね。

一つ、勉強になった。今後の参考にしよう」

アレルはそう呟きながら、墓標のように突き立っている大剣『ブラッディソード』を手に取る。

小柄なアレルには似つかわしくない、巨大な大剣。

それを軽々と振り回し、次の標的を吟味する。

「な、なぜ動ける。グアテの一撃は確かに、心臓まで達していたはずだ！」

「なんでかしらね。動けるのだからどうでも良いじゃない」

「貴様本当に人間か？ 屍人ではないのか？」

オークキングが訝しげにアレルを凝視する。

死体ならば、底知れぬ生命力にも納得がいく。

だが、操られているような魔力は感じられない。

オークキングの『感知』に反応しない。

「王様だけあって面白いことを言うわね。
お礼にその首掻き切って上げるわ」

「小娘が舐めおつて!!」

怒り狂うオークキング。アレルは余裕といった感じで眺めてる。

取囲み、それぞれの得物を構えているオークの群。

恐慌状態になった一人のオークソルジャーが、アレルの背後からおもむろに槍を突きたてようとする。

それに目をくれることもなく、ただ剣を一振りして胴体を真っ二つにするアレル。

「ギヤアアアア!!」

「切れ味は良いみたいね。戦利品として、これは貰っておこうかしら。」

別に武器は何でも良いんだけど、これ紅くて結構格好良いものね。豚には勿体ないわ」

「オ、オークの至宝である『ブラッディソード』を人間が触れるなど!!」

同胞達よ、今すぐに取り返し奴を血祭りにあげるのだ!!

これ以上の屈辱は我には耐えられぬ!!」

オークキングの号令が掛かるが、それに応えようとするものは少ない。

目の前の化け物の強さに、オーク達は怯んでしまっているのだ。

「貴様ら、それでも偉大なオークの末裔か!!」

一人で叶わぬなら、三人で掛かれ！

三人で駄目なら十人で囲め！！

十人で突破されるなら百人で押しつぶせ！！

たかが猿一匹に怯えるなど、栄えあるオークの面汚しだ！！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

オークキングの激に、オークの群が士気を取り戻す。

強者とはいえ、たかが人間一匹。

我らオークは千を越える兄弟達がいる。

しかもここはオークの本拠地。負ける要素など何も無い。

何もないのだ。

「そうだ！ 今すぐ彼奴の腸を食い尽くせ！！

奴の絶命とともに宴を開始する！！

生け捕りにした奴等も好きにして構わん！

思うが俣に皆殺しにするのだ！！」

手にした錫杖を興奮気味に振り回しながら、オークキングは絶叫し続ける。

オーク達の興奮は最高潮にまで達し、もはや爆発寸前である。

オーク達は、その頭上に巨大な雷球が三つ浮いていることには最後まで気付かなかった。

王の号令により、騒がしくなったオークの群。
それをどうでも良い事のように見つめる。
アレルにはそんな事より、試してみたいことがあったのだ。

（この世界の連中は、魔法を使う際詠唱で威力を増大させている。
“溜めて” 唱えていると言っても良いかもしれない）

考えながら、アレルはギガデインの詠唱を始める。
発動は意識的に押える。

（私は即座に放つ。前いた世界では誰もがそうだった。
呪文を唱えれば即座に発動する。それが常識）

アレルは意識して、魔力を溜め続ける。
ギガデインを発動態勢のまま、自分の魔力を流し込むのだ。
イメージとしては、巨大な雷球を五個。

（じゃあ私が、溜めて、魔法を唱えたらどうなる？
そもそも可能なのかも分からないけど）

オークキングの遙か頭上に、雷球を浮かび上がらせる。
それを中心に、四つ配置するように意識を集中させる。
四角形。強くイメージする。だが上手くいかない。

（……今は三つが限界か。まあ最初だから良いとするか。
精々派手にぶっ放すでしょう）

目を見開き、発動態勢に入るアレル。

オーク達は、小娘を血祭りに上げようと四方から殺到し始めている。それはまるで雪崩のようであり、数秒後にはアレルは確実に飲み込まれてしまうだろう。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!』

オークの雄叫びが上がる。

アレルは紅い大剣を地面に突き刺し、詠唱した呪文を唱える。

「ジゴスパーク迸れ聖なる稲妻よ、悪しき者達を薙ぎ払え!!」

超極大電撃呪文!!」

三つの雷球が、弾けた。

アレルは静まり返ったオークの巢の調査を開始していた。人質となった冒険者達は後回し。まずはオーク残党が残っていないか風潰しにする。

馬鹿の面倒を最優先でみることは多少の抵抗がある。

もう少し反省しているべきだと、アレルはなんとなく思ってしまった。

オークの巢は、横に掘られた穴が多数存在する。その穴がオーク達の居住地となっているようだ。

アレルは上から全てを調べ、隠れていた生き残りを悉く屠っていた。

一切の情けもかけず、淡々と皆殺し。いつものように。やがて、一際大きい横穴にたどり着く。

警戒することもなく、そこに入ると、アレル目掛けて斧が振り下ろされる。

「バ、化ケ物メー！！ ココニハ近寄ラセンー！！」

「豚の化け物が良く言うわ。仲間が地獄で待ってるわよ」

斧を素手で叩き落とすと、首を右手で掴み上げる。
大剣は腰に据え付けたままだ。
雑魚相手に、こんなものを振り回す必要はない。

「グ、グガガアアアア」

「死ね」

首を容易くへし折ると、ゴミを捨てるようにポイッと放り投げる。
そしてさらに奥へと進む。
細長い通路を進んでいくと、赤い花が咲き乱れる広場に出た。
そこには、オークの生き残りと思われる連中が百人弱、避難して
いたようだ。

アレルの姿を確認したオーク達は身を寄せ合い、脅え始める。
非戦闘員である、雌のオークや、年老いたオーク達のようにである。
中にはつぶらな瞳をした、幼い子供も数多くいる。
今はまだ可愛らしい姿形だ。

これが成長すると、凶悪な怪物になるのだから驚きである。
現在のアレルはオークの返り血を浴び血塗れである。
所々に肉片もこびりついており、その臭いも凄まじい。
誰が見ても、眉を顰めることは間違いない。

さてどうしたものか、と考えるアレルの前に、
年老いたオークが現れる。

杖を突き、立っているのもやっとといった感じである。

「…………お主が、我等の同胞を？」

「そうよ。あの場所にいた奴等は一人残らず殺したわ。もしかしたら、まだ微かに息がある奴もいるかもしれないけどね。確実に致命傷を与えたわ。保障してあげる」

「……取引がしたい」

「魔物とは取引をしないの。悪いわね」

老オークの言葉に、アレルは即座に拒否の意を示した。

魔物とは取引をしない。したところで後で失う物の方が大きい。長い旅でそれは嫌というほど分かっている。

それはそうだろう。

人間と魔物は、絶対に相容れないのだから。

「我等を殺せば、オークフラワーは二度と手に入らぬ。

この花を求めて、お主たちはここを目指すのだろう。

栽培技術は、ここに居る者達しか知らないのだ」

「……それで？」

「最早、我等に戦う力は残されてはいない。

ここに居る者は、女子供ばかりだ。

どうか、見逃して欲しい。人間の勇者よ。

オークの絶滅だけは何としても避けたいのだ」

花畑に居るオーク全員が、アレルに対し慈悲を乞う。

オークの子供達は、意味も分からずに頭を下げているようだ。

「……………」

「見逃してくれば、お主に定期的にオークフラワーを提供する。それに、お主の徒党には絶対に手を出さないように厳命する。オークの祖霊に誓おう。決して約束は違えない」

老オークは手を翳して、祖霊に誓いを捧げる。

これは、決して約束を違えぬというオーク種族の誓いの儀式だ。

「……………」

アレルは考える。

見逃せば、アレルは定期的にオークフラワーの提供を受けることが出来る。

迷宮を汗水流して探索しなくても、こいつらから金の成る実を受け取れるのだ。

こんなに美味しい話はないだろう。

さらに、子供を殺すと言う後味の悪い思いをしなくても済む。

但し、こいつらは、必ず同じ事を繰り返す。

なぜならば、魔物だから。魔物は人間を襲うのが本能。

決してやめることが出来ない。

増してや血の味を覚えた屑共だ。人食いをやめるわけがない。

力を蓄え、爆発的に繁殖した後、再び人間狩りを始めるだろう。

そして、その頃にはこの老オークは存在しない。

約束はその時点で破棄されるのだ。

では皆殺しにしたらどうだろう。

戦う意志のない魔物達。

これを虐殺するのだ。大層後味が悪いだろう。

流石に魔物の子供を殺した経験はない。

勇者に挑んでくるのは、成長した戦士ばかりだからだ。自分の精神は耐えられるのか。良く分からない。

既に壊れかけているから、問題はないような気もする。

メリットとしては、二度とオークが人間を襲うことはない。完全に絶滅させるのだから。はぐれオークは残るだろうが。まあ、例え滅ぼしたとしても、

オークの縄張りが、別種族に取って代わられるだけだ。

おそらく何も変わりはない。

オークフラワーが手に入らなくなる以外は。

大きく溜息をついた後、アレルは決断する。

出した答えは。

作業を終えたアレルは、呪文を唱える。

『リレミト』

檻に乱雑に叩き込まれていた冒険者達。

一々回復させるほどお人好しでもなかったので、範囲を指定してアレルは『リレミト』を使ってみた。

どうやら上手くいったようで、迷宮の入り口へと帰還することが出来た。

半死状態の全裸の冒険者100名程と共に。

時刻は何時だろうか。

太陽が昇っているの、かなりの時間がたっていそうだな。アレルは目蓋を擦る。

冒険者達を見渡すが、まだ意識を取り戻した者はいない。

その中に、見覚えのある戦士ギルドの男がいたので、頬を叩いて目を強引に覚まさせる。

「……う、うつつ。こ、ここは？ 僕は一体」

「地獄よ。また長い苦しみの日々が始まるわ。

良かったわね」

「ア、アレルさん？ ど、どうして」

それには応えず、エクセルの頭を思い切りぶん殴って昏倒させる。死なない程度にだ。馬鹿には良い薬である。

アレルは何事だと駆け寄ってくる、いつもの横柄な門番に合図する。目を見開きながらも、相変わらずの横柄な態度。アレルは思わず苦笑した。

「な、なんだこれは。それに、お前血塗れだぞ。

どうやったらそんな酷い格好になれるんだ！

ほら、身体を洗って、このローブにさっさと着替える。

何度も言うが、街をそんな格好で」

差し出されたローブを受け取る。

横柄だけではなく、お節介な男だとアレルは思った。

別に悪い感情は覚えてはいない。

「分かってるわよ。うるさいわね。

そうそう、なんか気付いたら、こいつらが転がってたのよ。

後始末よろしく。私は帰るから」

「お、おい！ ちょっと待て！！

話はまだ終わっていないぞ！！」

「とつても眠いの。また今度聞くから」

「待てと言っている！ つと、こ、こいつらも重傷か。

僧侶の連中を手配しなくては！！

ああ、忙しい忙しい！！！！」

門番はこちらを追ってこようとしたが、冒険者達の惨状を見て、考えを変えたようだ。

死に掛けのやつもいるだろう。だがアレルに治療してやる気はまったくくない。

（死のうが知ったことか。地上に戻れただけでも有り難く思っべきよね）

門番に手をヒラヒラと振って、入り口近くにある泉へと足を向けるアレル。

身体を洗い流し、このタダで手に入れてしまったローブに着替えれば一丁あがりだ。

いつも大量にお布施を支払っているのだから、今日ぐらいは構わないだろう。

満杯に詰まった布袋を背負って、ヨタヨタと歩き始めた。

突き刺さる日差しが、とても眩しく、そして痛いなとアレルは思った。

正午過ぎ、件の孤児院に、オークフラワーが大量に詰まった袋が投

げ入れられる。

百、いや二百は入っているだろうか。この街に住む者ならば誰もが泣いて喜ぶだろう贈り物。

誰が投げ入れてくれたのかは今でも分からない。

だが、その希少な花を売った代金で、借金を全て返済することが出来、運営資金にもかなりの余剰が出来た。

教団からも運営資金がまわされるようになり、孤児院が困窮することとは二度となかった。

きっと自分達を哀れんだ神が、救いの手を差し伸べてくれたのだとシスターは涙を流しながら語ったという。

九死に一生を得た孤児院出身の冒険者達。

彼らは怪我が完治した後冒険者稼業をを引退し、孤児院の運営に力を尽くした。

この日以降、オークフラワーは幻の花となり、相場は急上昇を続ける。

それはそうだろう。需要に対し、供給が全くのゼロなのだから。大金目当てに偽物が増えはじめ、市場はさらに荒れる事になる。

本物のオークフラワーが出回ることは、二度とない。

第二十一話 勇者とオーク軍団（後書き）

魔物を殺して平気なの？

はい

いいえ

貴方だったら見逃しますか、見逃しませんか。

第二十二話 作られた英雄（前書き）

シリアス＋ギャグ。後シリアス

第二十二話 作られた英雄

迷宮中層、オークの縄張り周辺。
先行したレンジャーギルドの一行が、
最後の確認作業を行っていた。

一つ後ろの部屋には、他のギルドの精鋭が待機している。
最後尾には完全武装の異端審問官、治安維持隊である。
全員が重装しており、避けることは一切考えていない。
彼らが最後時間を稼ぎ、殿となるのだ。

「意外とすんなりこれだな。」

斥候のオークスカウトあたりがいると思ったんだが」

カンダタが自分の『顔』を撫でながら呟く。

「もう宴が始まってるんじゃないですかね」

手下が考えを述べる。。

彼もやたらと自分の『顔』を気にしている。

「こんな朝っぱらからか？」

あいつらが馬鹿騒ぎをやらかすのは、
確か夜からじゃなかったか？」

「学者共の話じゃそうなってるねえ。
まあそんなことはどうだって良いさ。
豚の生態なんか知ったことかい」

ジャスミンが鞭をいじくりながら、
苛々とした様子で口を挟む。

「おい、何を苛々してるんだ」

「見りゃわかるだろう。」

この醜い豚の皮。獣臭い悪臭。
まるで拷問じゃないか。

もうムカつくつたらありゃしないよ!」

声を抑えながらも怒りを露にする。

ジャスミンは周りのレンジャーギルドの連中を見やる。

全員がオークに変装している為、どいつがどいつだか見分けがつかない。

装備している得物で、なんとか判別できるくらいである。

カンダタは大斧、ジャスミンは鋼の鞭といった具合に。

ちなみにオークの皮には、『血』を染み込ませている。

マスクも当然剥いだものである。

それに特殊な香水をつけ、臭いでバレないように細工を施した。

「もうしばらくの我慢だ。」

もうすぐそのウサも晴らせるだろうさ。

嫌というほど暴れまわるとするか」

大斧を何度か振るい、肩慣らしを行う。

「でも、頭はいつもとあんまり変わりやせんぜ!」

「確かに。全然違和感がないですぜ!」

「流石は頭! 変装の必要はなかったんじゃないですか!」

「おい、そりやどついう意味だ!!
俺がオークとそつくりとでも言いて　ぐべらッ!」

激昂して声を張り上げるカンダタ。
すかさずジャスミンの鞭がカンダタの喉に巻きつき、ゲイゲイと締め上げる。

一切の容赦なく。いつものように手加減なしに。

「おい、このオークもどきが。知能までそつくりさんかい？
大声張り上げたら、敵に気付かれちまうだろうが!!
分かってんのかい、この脳筋馬鹿!」

「ぶ、ぶるびて」

オークマスクの下から、泡をブクブクと吐き始めるカンダタ。
両手を合わせて許しを請い始める。
心なしか、顔が青褪めてきた。

「あ、姐さん。ど、どうか気を落ち着かせて」

「そ、そうですね。そのままじゃ頭が死んじまう」

「それに姐さんも声がデカ　いえ、何でもありません!」

宥める部下達を一瞥すると、鞭を緩める。

これぐらいで倒れるようなら、ジャスミンはカンダタをサブマスタ
ーにしている。

一応は『夫』でもある。一応は。

「し、死ぬかと思った。相変わらず、き、効く。
思わず昇天しかけたぜ。イク寸前だった」

喉を押さえて、肩で息をしている。
どこか嬉しそうなのは、気のせいだろうか。
手下は敢えて気付かないフリをした。

「か、頭。大丈夫ですかい？」

「も、勿論だ。なんの問題もない」

よろめく身体を部下達が支える。

彼らはオークの姿をしているので、実に暑苦しい。

「とにかくだ。『門』をバレないように潜り抜け、内部に潜入。

各自散らばって、私の合図と同時に閃光弾と煙幕をばら撒く。

同時に後ろの連中が突撃してくる手筈だ。

その後は人質を救出しておサラバって訳さ。

暴れるのも良いが、囲まれてタコられないように注意しな！」

「へい！」「了解ですぜ！」「任せてくださいませえ！」

気合を入れる手下達。

オークの巣に押し入るというのに、全く怯えていない。

頭と同様、どこかが緩んでいるのだろう。

「へへっ。腕がなるぜ。ぶち殺しまくってやる。

人間様の恐ろしさを見せ付けてやるぜ」

後ろでこちらの様子を窺っていたロブに、ジャスミンは合図を送る。
作戦開始の合図。ロブは頷くと連絡の為に引き返していく。

今から10分後に、後続連中も動き出す。
レンジャー一行が全滅すれば、後ろの連中は囲まれて一網打尽にされるだろう。

先行するジャスミン達の責任は、極めて重い。
作戦成功の鍵を握るのは、レンジャーギルドの精鋭達だ。

作戦行動を開始したジャスミン達が、異変に気付くのはすぐの事だった。

オークの巣まではほぼ一本道。

その途中途中に、オークの死骸が散乱しているのだ。

見る影もなく四散したものの、岩肌に杭をうたれたかのように突き刺さっているもの。

首を落とされて、その場に座り込む死体もある。

それが数十体程。何者かが既に進撃しているのだろうか。

露払いのギルド連中が、ここまで来るとは思えない。

それほどの馬鹿は流石にいないだろう。

「……こりゃどういうことだい」

「分からん。だが、油断は禁物だ」

「当たり前だ。誰に言っただい」

お互いに頷くと、警戒しながら進んでいく。

打ち合わせでは、戦闘は行わずに忍び込む手筈だったのだ。

完全に静まり返った通路。どことなく不気味な気配を醸し出してい

る。

一切の抵抗なく、一行はオークの巢入り口、門の場所まで辿りつく。正確には『門だった』場所というべきだろう。門らしき物は完全に粉碎され、見る影もない。その周辺には、爆散したオークの死骸。何らかの魔法により吹き飛ばされたのだろうか。

「……………」

ジャスミンが顎で合図を送る。

一番身軽な手下が、ナイフを忍ばせて内部へと侵入を開始する。腰に付けた袋を落とせば、『閃光弾』と『煙幕』が炸裂する。細工されたオークマスクは、その影響を受けることはない。

数十秒程経過しただろうか。

暫くの間を置き、ジャスミン達も侵入を開始する。

そこに広がっていたのは。

散乱する数百、いや千に及ぶかもしれない死体、死体、死体。充満する血の臭い、焦げた肉の臭い、それらが入り混じり、鼻へと強く突き刺さる。

白目を剥き、舌を極限まで伸ばしている損壊した死体。

原型を留めていない肉塊。恐怖と苦悶の顔を貼り付けた死骸。至るところに散らばっている四肢の数々。いまだ黒煙を上げている、炭化した何か。それはまさに、地獄と呼ぶに相応しい光景であった。

最初に突入した手下は、腰を抜かして後ずさっていた。

「ひ、ひい！ か、頭、こ、こりゃ一体……」

「……こいつは驚いた。ここはオークの墓場か？」

「な、なんだよ、これは。」

どうすれば、こんな風になるってんだい！」

声を失うジャスミン。

カンダタは辺りを警戒しながら、腰につけていた斧を装備する。

これを起こした奴が、まだ辺りにいる可能性は高い。

それが味方であるという保障など何一つないのだ。

「……落ち着け。調査を開始するぞ。絶対に気を抜くな。

生き残りがいないか徹底的に調べる。

この姿なら、オークから事情が聞けるかも知れねえ」

押し殺したカンダタの声に、全員が頷く。

それぞれが口元を押さえながら、肉塊を確認していく。

溢れようとする吐き気を堪えながら。

このような空間にいては、まともな神経をしていたら一時間もたないだろう。

『慣れる』事など絶対に有り得ない。

普通の人間なら、『慣れる』より先に壊れてしまう。

「姐さん。人質は一人もいませんでしたぜ。

閉じ込めていたらしい『檻』は腐るほどあったんですが……」

「こつちも誰もいなかったですぜ。

巻き上げたらしい、武器や防具はありやしたが」

「……そうかい。こいつらの巻き添えを食った可能性が高いね。

残念ながら生存は絶望的か。

……死体はあったのかい？」

辺りを見渡しながら、ジャスミンは嘆息する。

「いえ、最近死んだと思われるのはなかったですぜ。

あったのは骨やら、干からびた死体やらで。

ここ数日のはありやせん」

「そうかい。分かった」

不愉快そうに吐き捨てると、歪に飾り付けられた『骨』のオブジェを鞭で粉碎する。

手下は頭を下げると、何も言わずに調査作業に復帰する。

そこに手下の一人が、張り裂けんばかりの大声を上げる。

「か、頭、姐さん！！ オークの生き残りを見つげやした！！」

死にかけてですが、なんとか生きてますぜ！」

「本当かい！？ まだ死なせるんじゃないよ！
情報を吐かせるんだ！」

その場に急行するジャスマミン達。
虫の息ではあるが、辛うじて意識を保っているオークキャプテンの
姿。

何かが庇ったのか、満身創痍ではあるが生きている。

目配せすると、カンダタが声色を変えて話し始める。
出来るだけ野太く、オークの声色に近づけるように注意を払う。

「……我が同胞よ。これは一体どうしたんだ！？
誰にやられたんだ！！」

「ウ、ウウツ。ば、化け物に、たった一人の、こ、小娘に……」

そのまま目を閉じようとするオークを、胸元を掴んで無理やり起こす。

「質問に答えてくれ同胞よ。そうすれば直ぐに楽にしてやる。
一体小娘とは誰だ？ そいつの名前は！？」

カンダタの声に、オークキャプテンは力を振り絞って声を出す。

「あ、アレルだ。ゆ、勇者アレル、と名乗っていた。
その人間に、我等オークの英雄までもが、た、容易く……。
そ、その後、何かが弾けて、こ、この有様だ」

「……そうか。良く話してくれたな。それじゃあ、直ぐに手当てをしてやる。なあに、一発で楽になるぞ」

カンダタはオークの身体を離すと、右手に力を籠める。一応ジャスミンに視線を送り、許可を取る。返事は、己の喉を親指で掻き切る仕事。

「ク、クフ、ハハハハハ！
た、たつた一人に、わ、我等の兄弟や家族が一人残らず皆殺しだ。お、お前の後ろにもいるぞ！ 我等を殺しに来るのだ！！
く、クヒヒヒイイ！！」

狂ったように哄笑するオークキャプテン。
カンダタは、大斧を頭上に掲げ、勢い良く振り下ろした。飛び散る脳漿が、カンダタの纏う毛皮を汚していく。

「アレルか。アイツならやるだろう。
いや、アイツ以外には有りえねえ。
一人で乗り込んで、種族を完全に掃討するなんて真似はな」

カンダタは考え込みながら、独り言を呟く。

「……アレル。確か仮の勇者として認められた娘だったか。
アンタ、何か知ってるのかい？」

ジャスミンが問いかける。
カンダタは何を馬鹿な事をと吐き捨てる。

「仮？ アイツが仮の勇者だと？」

冗談じゃねえ。アイツは真正銘の勇者だ。

この殲滅の徹底ぶりを見る。これこそ勇者の証明じゃねえか。魔物を打ち倒すために生まれてきた、最強の人間だ」

カンダタはそれを最後に、口を閉ざした。

「……最強の人間、か。」

まるで悪い冗談じゃないか」

ジャスミンはオークのマスクを脱ぎ捨て、乱暴に投げ捨てる。

手下からの報告で、オークフラワーの栽培地は、完全に焼き払われ
ていたことが判明。

暫くして、乗り込んできた後詰と合流したレンジャーギルド一行。
彼らに事情を説明し、更に調査を行った後で撤収した。

・変異オーク調査報告

オークの群について。

巣にいたオークの全滅を確認。

天変地異ともいえるほどの魔力にて、殲滅された形跡あり。
オークキングの死体を回収した。

変異オークについて。

変異したと思われる、赤いオークの『腕』のみを回収。

他の部位については損壊が激しいため判別不能。

『腕』は魔術師ギルドに調査、研究を依頼した。

行方不明となっていた冒険者約100名について。

オークに囚われていたものの、何らかの手段にて全員が迷宮を脱出。地下迷宮入り口において、全裸の状態で見られる。

全員が手足を折られている重傷であり、自ら脱出したとは考えにくい。

調査の必要あり。

オークの縄張りは完全に崩壊したと考えられる。

今後の生態系の変化に注意を払う必要がある。。

凶暴化したはぐれオークが迷宮上層に現れる可能性あり。

各ギルドへ通達し、上層冒険者への注意を促す。

戦士ギルド員『アレル』については、後ほど事情聴取を行う必要があると考えられる。

異端審問官 イコナ

……まずい。
とてもまずい。

「……まずいわ。本当に不味い」

先程、豆売りから無理やりを買わされた『星豆』をボリボリと噛み砕く。

苦味が口にジワリと広がり、実に不味い。

歯ごたえだけは抜群なので、もうこれでもかというほどバリボリ噛み砕く。

「そこのお嬢さん。美味しい星豆はいかが？

ウチのはそんじょそこの豆とは出来が違うよ！」

元気の良い中年女が、私の背中をボンと叩いてくる。

いらないと返事をしようとしたが、背中を叩くペースが速いので言葉が出てこない。

思わず勢いに押されていると、あれよという間に、小袋に豆が継ぎ足されていく。

「ちよ、ちよっと。何を勝手に」

「はい、これでたったの銅貨一枚！ 毎度あり！」

「……強引過ぎるわよ。全く」

なんという押し売りだろうと呆れながら、銅貨を一枚掌の上に乗せる。

仕方なく再びポリポリと食べ始める。

なるほど。今度は甘酸っぱい。先程の苦味が緩和されてきた。多少はイケる豆に当たったようだ。

……というか、豆はどうでも良いのだ。

本当にまずいのは、これから行うべき言い訳。

マタリやエーデルには何も知らせずに、勝手に突撃してしまった。当然、手ぐすねひいて宿で待っていることだろう。

特にエーデル。腐った性格をしているので、間違いなく追求してくる。

これでもかというほど粘着質に。

マタリは基本的に馬鹿でお人好しなので大丈夫だろう。

豆でもくれてやれば、一日で忘れる。多分。

さてどうしたものかと頭で悩みながら、リーダーの酒場へと向かう。

途中、前から羽根帽子をつけた妙なガキが前方に現れる。

白いワンピースに羽根帽子。一見可愛らしい少女である。

歳は以前酒場に来た、糞餓鬼共と同じくらいか。

私と視線が合うと、ニコリと微笑んで近づいてくる。

サンダルをひよこひよこさせて、まるで飛び跳ねるようにご機嫌に。

馴れ馴れしく手まで振っている。

私は全く見覚えがないので、目を逸らながら進路をずらす。すると、ガキも私の方向目掛けて進路を変える。さらに私が方向を転換すると、ガキが小走りで先回りする。

「……ちよつと。アンタなんなのよ。」

ガキは苦手だから、あつちいってなさい。

私はとつても忙しいのよ。」

シツシツと手を振って追い払う。

ガキは白い歯を見せて、爽やかに微笑んだ。

私の言葉は完全にスルーされたようだ。

「相変わらずつれないね。その性格は前と全然変わってない。久しぶりだっていうのに、これだもの。」

「……昼間から呑気な夢を見るのは感心しないわ。ガキはとつと家に帰って、昼寝でもしてなさい。ほら、行った行った。」

「嫌だよ。これから色々とこの世界を見てまわるんだから。ワクワクするよねえ、新しい場所は。」

とりあえず、これお土産。大事な宝物でしょ?。」

布で包まれた何かを私に投げってくる。

仕方なく受け取る。それほど重くはなく、小さな棒の形をしている。

「……なにこれ。押し売りなら間に合ってるわよ。」

「だからお土産だよ。預かりっぱなしだったから。積もる話はまた今度ね。ルイーダの酒場にいるんでしょ。それじゃ私は忙しいから。バイバイ」

言いたい事を言つと満足したらしく、私の返事を待たずにすつ飛んでいった。

まるで嵐のようなガキである。

陽気も暖かいので、頭がお花畑になるやつもいるだろうと、私は結論を出す。

一応布包みを解くと、見覚えのある玩具が姿を現す。どこかの村で押し付けられた、『水鉄砲』だ。

「……どうしてこれが？ アイツは一体」

私は少女の走り去った方向を振り返る。

そこには、豆粒のように小さくなった、羽根付き娘の姿があった。

酒場のドアを、音がしないようにこっそりと開ける。
結局言い訳は思いつかなかった。

仕方ないので、酒を思いつき飲みまくり、すっ呆ける方針に決定。

知らない、覚えてない、分からない。

これを繰り返すのだ。完璧すぎる。

一寸の隙もない。

椅子やら机を陰にして、ひよこひよここと移動する。

背負った大剣が非常に邪魔臭い。

こんなもの拾うんじゃないかと後悔する。

いつもの3倍の時間を掛けて、ようやくマスターのいるカウンターまで到着した。

「……お前は一体何をしているんだ？」

隠れてるつもりなら、その馬鹿でかい剣が丸見えだったぞ」

呆れた眼差し。それは私が聞きたい。

「……とりあえず強い酒を山ほど頂戴。

味はどうでも良いから。金ならあるわ。

もう浴びるほど飲むの。その後はよろしく」

席に着き、机をドンドン叩いて催促する。

性質の悪い酔っ払いの行為そのものだが、今は仕方がないだろう。

「昼間からガキが酒を食らう。嫌な世の中じゃないか。

溜息しかでないぜ」

「うるさいわね。とにかく酒を」

私が催促しようとすると、隣からグラスが差し出される。

何だ、すでに用意してあったのか。
早く言えば良いのに。

グラスを受け取るうとして、そのまま私は硬直する。

「お待たせしちやっただかしら、アレルちゃん。
はい、お待ちかねの美味しいお酒よ。

この店で一番高い『アートの魂』。味わって飲んで頂戴ねえ」

「……………おかえりなさいアレルさん」

ご機嫌に左隣へと座るエーデル。

右側には口を『へ』の字にしているマタリがいる。

いつの間にか囲まれてしまっていたようだ。
逃げられない。

「……………ちよ、ちよっと散歩してたら迷っちゃって。

それで、喉が渴いたからお酒を飲もうと思ったのよ。

ただそれだけよ？ 私は何にもしてないわ。

別に疚しいことなんて、何もないもの」

聞かれてもないのに、私は弁解を始める。

こういう時は、さっさと流してしまるのが得策。

「知ってる？ 人って嘘を吐くとき、やたらと饒舌になるそうよ。
アレルちゃんはどうなのかしらねえ」

ニヤニヤと微笑みかけてくるエーデル。
まるで蛇のような奴だ。

今にも口からチロチロと細長い舌が出てきそうである。

「凄い勢いで舌が回ってます。これでもかというほど。ペラペラと踊り狂ってますよ」

ジーッと観察してくる猪女。

これはこれでどうかしている。

「な、何よ。私がいつ嘘を言ったっていうのよ。

ちよっと迷っただけで、そこまで言われちゃたまらないわ。

私だってたまにはミスぐらいするわよ」

「あらそう。私はてつきり、貴方一人で迷宮にでも行ったのかと思っただけど」

ずばり正解を言い当ててくる。さすがの性格の悪さ。ピンキーなだけはある。

「一人で行く理由がないじゃない。荷物持ちも減るし。わざわざ抜け駆けする意味は何もないわ」

「ふーん。そうなのお」

「そうなのよ。第一、私が迷宮に行ったって証拠でも」

そこまで言っつて、目立ちまくる紅い大剣を、今だ背負っていることに気付く。

非常にまずい。バレないようにこっそり下に隠してしまおうか。

「……アレルさん。その背中of剣はどうしたんですか？

さっきから妖しい光を放っているんですけど」

いつになく鋭い洞察力を発揮してくる。
それは戦闘時にやって欲しいところだ。

「あ、ああ。これね。ちょっとそこらへんで拾ったの。
私にはデカすぎるから、アンタにあげる」

背中の剣を外して、マタリの身体に押し付ける。

「ひ、拾ったつて。こんなもの落ちてる訳ないじゃないですか！」

「うるさいわね。良いから大人しく受け取りなさいよ。
アンタが使わないなら、邪魔臭いから捨てるわ。
酒場の入り口辺りにポイつとね」

私とマタリがワイワイやっているとき、
マスターが驚きの表情で剣を凝視している。

「お、おい。その剣、『ブラッディソード』じゃないか？
オークの至宝と言われる伝説の一振り。
いやあ、俺も初めて見たぜ」

「ぶ、ブラッディソード？」

「おう、確かそんな名前が付けられてたぜ。
オークの野郎が誇らしげに名乗りをあげるんだと」

……まずい。余計な奴が蘊蓄を語り始めた。

「へえ。『オークの至宝』ねえ。」

それは面白いことを聞いちゃったわ」

そして余計な奴がまた牙を研ぎ始めた。

「そうだ。オークの最精鋭が持つことを許される伝説の剣。今までそれに切り殺された冒険者は数知れず。

数多の血を吸い込んだ呪われし大剣だな」

刀身は相変わらず光を放っている。

艶かしい血の色。確かに持っていると思な事が起こりそう。混乱したり、麻痺したり、敵から狙われるようになったり。

その話を聞いたマタリは、心底嫌そうな顔をした。

「そ、そんな剣使いたくありません。な、何か嫌です」

「武器は使うもの次第だ。それが分からないなら戦士なんて辞めちまえ。

その気になればこのナイフでだって人は殺せるんだ」

マスターが偉そうに説教を始めた。

中々良い事を言う。

「で、でも」

「ほら、文句言わずに使いなさい。

あらゆる剣を使いこなしてこそ『剣士』でしょ。

これも一人前になる為の試練って奴よ」

「な、なんだか無茶苦茶です。」

上手いこと言わなければ。

やはり、そこらへんで手に入れたと突っぱねるか？

これは嘘ではない。そこらへんの範囲に『地下迷宮』が含まれるならば。

意を決して、言葉を発しようとしたところ、

酒場のドアが開いて、ガキがわらわらと走りこんで来る。

昨日、私の顔にエールをぶっかけた糞餓鬼もいる。

大人しい印象の三つ編み少女に引き摺られている。

片手に本、片手に悪ガキ。

尻に敷かれているのだろうか。

「あ、いたいた！ 勇者の姉ちゃんいたよ！」

「早く早く！」

「お、おい、待てって！ そんなに引つ張るな！」

呆然とする私達の元まで集まりだす糞餓鬼共。

こんどは石でもぶつけてくるのだろうか。

離れたカウンターから、ルイーダが心配そうにこちらを見つめている。

「……………何か用？」

「えっと、その」

冷たく尋ねる私に、視線をキョロキョロとさせて言いよどむ例の悪

ガキ。

三つ編みの少女が溜息を付くと、仲間達にむかって強く頷く。

『勇者のアレルさん、昨日は酷いことを言っでごめんなさい！』

大声で私に謝罪してくる。全員が頭を下げて。

何か私が悪いことをしているような気分になるのは何故だろうか。

「な、何よいきなり」

「さつき、兄さんや姉さん達が帰ってきたんです。

なんで帰ってこれたのか分からないけど、無事に戻れたって」

事情を話し出す三つ編み。

この流れは、マズイ。

「そう、良かったじゃない。これで全部解決ね
じゃ、とつとと帰りなさい」

「それで、誰が助けってくれたんだらうって。

僧侶ギルドの病院で皆が話し合ってたんです。

そうしたら、エクセルっていう戦士の人が」

『アレルさんだ。勇者アレルさんが助けってくれたんだよ！』

僕は見たんだ！ あの人が天使のような笑顔で僕をたすけてくれたのわ！』

手振り身振りを交えて、嬉しそうに語り続ける。

あの糞馬鹿。やはりトドメをさしておくべきだったようだ。

私は思わず頭を抱える。

隣のエーデルの表情は見ないようにする。
きつと嬉々としていることだろう。

「それで、ギルドの人や、協会の人にも聞いたんだけど、アレルさんがやったっていう噂が広がってて。

だから、ちゃんと謝ってお礼をしようって決めたの」

エクセルだけではなく、横柄な門番にも見られている。

厄介な事態に巻き込まれる可能性は十分にあり得る。

まさに身から出た錆。

「……………あつそ。別に怒ってないから気にしないで良いわよ。
もう良いから、子供は帰りなさい」

「本当にごめんなさい。　ほら、ちゃんと行って！」

悪ガキをこちらに押し出してくる。

バツが悪いのか、そっぽを向きながら。

暫くすると観念したのか、何かをこちらに差し出してくる。

「……………ごめんよ姉ちゃん。俺が悪かった。

酒ぶっかけたりして、本当にごめん。

兄ちゃん達を助けてくれてありがとう。

これは、俺達からのお礼。……………少ないけど」

銅貨100枚と、布に包まれた何かをテーブルに置くと、
走るように酒場から出て行く。

三つ編みの少女は一度頭を下げると、それを追いかけていった。

残りの連中もその後続く。

「……良い話ねえ。私感動しちゃったわ。そう思わない、アレルちゃん？」

「知らないわ」

「開けてみましょうよ、それ。気になって仕方がないわあ」

反論する気力も起きず、言われるがまま包みを解いていく。精神力を消耗しすぎたせいだろうか。ギガデインの強化版など使った反動だ。

嫌々包みを開けると、そこには『水鉄砲』が入っていた。ただの筒でないと分かるのは、ご丁寧に『勇者のみずてっぽう』と書いてあるからだ。悪ガキお手製の品らしい。

今日だけで2個目。水鉄砲にこれだけ縁があるのも私ぐらいのものだろう。

2丁構えて大暴れしてやろうか。

「……やれやれ」

「と、言ってる割には嬉しそうよ。素直じゃないのねえ」

訳知り顔のピンキー。腹の立つ奴だ。

見つからないように、水鉄砲に酒を充填していく。

「……さて、いよいよ本題に入りましょうか。
今日、貴方は私達を置いて、勝手に」

「えい」

説教を始めようとしたエーデル目掛けて、勢い良く酒鉄砲を発射した。

哀れエーデルは化粧が落ちて、どろどろになってしまつ。
今日は魔法コーティングとやらは施していないらしい。

エーデルは身体を震わせながら、下を向いている。
ご自慢のピンクのローブまでびしょ濡れだ。
水も滴る良いピンクィー。

「……ア、アレルさん」

「化粧が落ちたら魔物が現れたわよ。
マタリ、ちよつと退治してきなさい」

「わ、私はちよつと。あ、この剣部屋に置いてきますね！」

そそくさと逃亡を始めるマタリ。判断が早い奴だ。

辺りには異様な雰囲気漂い始め、どことなく鬱屈とした魔力を感じる。

何かが起こる。そんな感じだ。

「……貴方には、キツイお仕置きが必要みたいね」

「余計なお世話よ。早く手当てしないと、顔が溶けちゃうんじゃない？

お肌の曲がり角が近いでしょうから」

プシューと酒鉄砲を発射する。

プチンと何かが切れる音がした。

「 サモン、リビングデッド！

この生意気娘をグチャグチャにしてやりなさい！！」

エーデルが召喚札を一面に投げまくる。

黒煙と共に現れる亡者の群。

人型ではなく、鼠なのが救いだろうか。

とにかく、売られた喧嘩は買わなければならない。

「面白いわ。顔までピンクに塗り潰してやる！」

「お、お前ら何を考えてるんだ！！ ここは街中だぞ！
やるなら迷宮でやれ、この馬鹿共が！！」

狼狽するマスター。

それとは逆に、煽りをいれる酔っ払いたち。

「いいぞ！ やれやれ！！」

「俺はエーデルに銀貨1枚！」

「俺は勇者のお嬢ちゃんだ!!」

その後は滅茶苦茶だ。

鼠相手に大暴れして、店内を引つ掻き回した。

空気を読んで魔法は使わなかったが、それはもう酷いことに。

最後はエーデル、合流したマタリ、自棄になったマスター、ルイーダ。

酔っ払い共と酒を飲み巻くって意識を失った。

勿論次の日は、酷い二日酔いだった。

散々な有様となったルイーダの酒場。
マスターと数名が後片付けに奔走している。
完全に意識を失ったアレルを横目に、
ルイーダ、エーデル、マタリは酒を酌み交わしていた。

「似合わないことをするわね、エーデル。
いつも冷静な貴方らしくないわ」

「……これで良いのよ。今はね。
迷惑掛けてごめんなさいね、ルイーダ。
ちゃんと弁償はするから」

目を伏せたままグラスをあおる。
ルイーダは軽く頷く。

勿論、代金は徴収するつもりでいた。
商売人たるもの、知り合いでも容赦はしない。
請求書も既に作成済みである。

「……でも、本当に一人でオークを倒したんでしょうか？」

マタリは信じられないといった表情を浮かべる。
確かにアレルは強い。

だが、千に及ぶオークの軍団を、一人で壊滅させたとは俄かには信じ難い。

「間違いないでしょう。あの大剣が証拠。
あれは間違いなく、悪名高いブラッディソード。
噂が広まるのもすぐでしょう」

「……………はい」

「貴方もこの子についていくなら、良く考えなさい」

エーデルはマタリに、重い口調で語りかける。

「……………それはどういう？」

「この子は勇者なのよ。身体の芯から。

口では何と言おうと、自ら死地に飛び込んでいくわ。まるでおとぎ話の英雄のように」

「　　勇者。身体の芯からですか。

……………今の私には、良く分かりません」

「覚悟がなければ、共に戦うのは無理よ。

別れるなら、お互い早い方が良いわ。

その方が傷が少なくて済むから」

その淡々とした言葉に、マタリは口調を荒くする。

「私は最後まで一緒に行きます！

だって仲間なんですから！」

「そう。それならもう何も言わないわ。

私もギリギリまでは付き合うつもりよ。

この子の行く末は、とても興味深いもの」

それを最後に、エーデルとマタリは黙り込む。

ルイーダは静かに話を聴いていたが、何かを思い出した様子で、カウンターの奥へと戻っていった。

「……アレルさんって、一体何者なんでしょうか」

呟くように、話し始めるマタリ。

「貴方の方が良く知ってるでしょう。最初に組んでいたんだし」

「いえ、名前と出身地以外は殆ど知らないんです。

確か、アリアハンとかいう場所から来たと言っていました」

「アリアハン？ 私は聞いたことはないわねえ。

どこかの村だったら分からなくて当然だけど」

首を捻るエーデルとマタリ。

そこにルイーダが額に入った絵を持って戻ってくる。
埃を叩き落しながら、小走りです。

「お待たせ。これよこれ。貴方達に見て欲しかったの。

ほら、アレルさんと瓜二つでしょう？」

誇らしげに二人に絵を見せるルイーダ。

マタリとエーデルは絵を食い入るように見つめる。

そこには。

「こ、これアレルさん、ですか？

ちよっと雰囲気はちがいますけど」

「どう見ても本人よねえ。見たこともないような笑顔だけど。うん、こんな表情見せたことないわねえ」

細部まで丁寧に描写された人物画。

相当の技量を持つ画家によって描かれた物のようで、素人目にも良く出来ているのが分かる。

「でしょう？ 私も絵から飛び出てきたのかと思って驚いたの。もしかしたら遠い子孫かもしれないわねえ」

絵を横にすると、ゆっくりと腰掛ける。

その絵には、恥ずかしそうに微笑む少女の姿。

アレルと瓜二つであり、青い水晶の額当てを身につけている。

それと並んで、壮年の戦士、生真面目そうな女僧侶、若い男の魔術師が並んでいる。

「この絵は一体どういった物なんですか？ 随分と古そうですね」

「初代ルイーダから伝わる、我が家の家宝みたいなものかしら。

私で13代目だから、長い歴史のある一品よ。

今は亡き王国の、勇者一行の姿を描いたものらしいけど。

これは凱旋の時に描かれたものかしら？」

凱旋という割には、少々初々しさが感じられると、エーデルは思った。

むしろ、『旅立ち』の絵と言った方が、説得力がある。

「へえ。伝説に残る勇者のパーティか。

私達もあやかりたいわねえ。ね、マタリちゃん」

「わ、私なんてとんでもない！ そんな実力まだまだありませんし！」

手を大袈裟に振って否定するマタリ。

「まあまあ。夢は大きい方が良いじゃない。

……それでルイーダ。その今は亡き王国って一体どこなの。今度、是非調べたいわあ。興味が湧いてきちゃったわ」

「文献が残っているかしらね。

殆ど教会が処分してしまったらしいから。

残っていると何か都合でも　　っと、危ない危ない」

口を塞いで辺りを見回すルイーダ。

告げ口でもされたら異端扱いされる可能性もある。

「それじゃあ分からないのかしら？　残念ねえ」

わざとらしく溜息を吐く。

「大丈夫よ。王国の名前は額縁の裏に書いてあるから。絵の題名だから、ちゃんと国名は分かるわよ。

えーと、題は『世界を救いし、アリアハンの英雄達』ね」

「　　ア、アリアハン！？」

「……………へえ」

国名を耳にしたエーデルとマタリは、

深い眠りに落ちているアレルを、思い思いの表情で眺める。

そこには、勇者とはかけ離れた、歳相応の少女の寝顔があった。

・『世界を救いし、アリアハンの英雄達』

苦難の旅路の末、魔王を打ち倒した英雄達の姿を描いたもの。

凱旋の後、王宮お抱えの絵師によって描かれた渾身の力作。

祝いの宴を終えると同時に、勇者は姿を消し、その行方は誰にも分からない。

魔王を討ち取りし『バスタードソード』と、数々の伝説だけが残された。

仲間達はアリアハンに残り、復興に力を尽くす。

その成果を称え、彼らには爵位が与えられた。

余韻を壊すおまけ

オークの縄張りから帰還したカンダタは、手下に確認する。誰にも気付かれないように、こっそりと耳打ちして。

「お、おい、例のものは一つもなかったのか？
本当の本当にか？」

「……へへっ、頭！ 実は物陰に隠れてた奴を見つけておきやしたぜ！

こいつが最後のオークフラワーですぜ！」

懐から、誇らしげに赤い花を差し出す手下。

カンダタはその肩を強く叩き、満面の笑みを浮かべた。

「良くやった！！ お前には後でいくらでも奢ってやる！
お宝もくれてやろう！！ 本当にでかしたぞ！！！」

「へへ！ 頭の為なら何でもしやすぜ！

……で、それ何に使うんですかい？」

照れくさそうにしながら、手下はカンダタに尋ねる。

別に金には困っていないはずなので、疑問に思っていたのだ。

「そりやお前。アイツにこっそりと飲ませて、ヒイヒイ言わせてやるのさ。」

いつもいつも、尻に敷かれっぱなしだからな。

そろそろ俺の恐ろしさを身体に分からせてやるぜ！

ねっちより、たっぷりとな!!」

鼻息を荒くするカンダタ。心ここにあらずといった様子だ。

大声で自分の妄想を叫んでいる。

手下は呆れてそれを見ていたが、何かに気付くと慌てて後ずさりを始める。

「そ、そうですかい。じゃあっしはこれで!」

脱兎の勢いで逃げ出す手下。カンダタはなんだあいつは、と首を傾げる。

「一体どうしたってんだ。悪魔でもみたような顔しやがって」

「……アンタ、誰を『ヒイヒイ』言わせるって?」

地獄から聞こえてくるような低い声。

カンダタはそれを聞いただけで竦み上がる。

「ひ、ひいっ!! ち、違うんだ。これには迷宮よりも深い訳が」

「黙れオークもどき。その腐った性根、今日こそ叩き直してやるわ!!」

第二十二話 作られた英雄（後書き）

次回は更新間隔が開きます。

第二十三話 勇者と蟲の回廊

……最高に不愉快な気分と共に、私はむくりとベッドから起き上がる。

時刻は分からないが、もう昼に近いのではないだろうか。
ボサボサの髪を手で梳かしながら、大きな欠伸をする。

「ふぁーあ。眠い。酒臭い。身体がだるい。
完全に二日酔いという奴ね」

下着姿から、門番から貰った白ローブへと着替える。
いつまでもこのままというわけにはいかないので、
後で武器と一緒に何か買わなければならないだろう。

部屋をぼーっと見回すと、マタリとエーデルの姿は既になかった。
一言声を掛けてくれても良さそうなものだが、冷たい奴等である。

身支度をした私は、ドアを開け1階の酒場へと向かう。
階段を下りている最中、やけに騒々しい声が響いてきたため、
思いつきり顰め面をする。

「わはは！ 飲め飲め！ 今日夜まで飲み明かすぞ！！
その後は女を買おうが、酒に溺れようが好きにして構わん！！
金は腐るほどあるからな！」

「うおおおおおおおおお！！」

「ハラー・キャラバン隊長に乾杯！」

「キャラバン傭兵団万歳!!」

……本当にうるさい。脳天にガンガンと響いてくる。

あまりの気分の悪さに、騒ぎの中心目掛けて、爆裂呪文を放り込みたいぐらいだ。

その誘惑をぐっと堪え、耳を塞ぎながら移動する。

端の方で、やれやれと溜息を吐いている死霊術師を見つけた。

私はふらつきながらそこまでたどり着き、ドスンという音と共に席へと腰掛ける。

「あら。おはようアレルちゃん。

目覚めの気分は最高かしら?」

「おはようございます。アレルさん」

「……最悪の気分よ。朝から地獄を味わってるわ。

後ね、一言ぐらい声掛けてくれても、罰は当たらないわよ?」

一応注意しておく。

なんだか、最近私だけベッドに放置プレイが多い気がするからだ。

「あのねえ。一言どころか、10回は声を掛けたわよ。

寝起きが悪い所の話じゃないわ。微動だにしないんだもの。

あれじゃ私達も根負けするってものよお」

フォークに刺さった緑の野菜を口に放り込みながら、

呆れた視線を向けてくるエーデル。

「私が寝起き悪いですって？」

そんなことないわよね、マタリ」

「……ノーコメントでお願いします」

流されてしまった。

ここは素直に流しておくことにしよう。

「それはともかく」

「話を誤魔化そうとしてもそうはいかないわよお。

貴方の寝起きの悪さときたら、もう説教ものよ。

危うく、転がった勢いの裏拳が直撃するところだったのよ！」

グラスをドン！ と中身が零れそうな勢いで叩きつける。

今日はばっちり化粧が決まっているピンキー。

「……勇者たるもの、寝ているときでも常に戦闘態勢なのよ。

私に安息の時は訪れないの。分かるでしょう？」

皿に乗ったトーストに齧りつく。

バターの香ばしい味が、口いっぱいに広がっていく。

美味しい。

「……その割には、幸せそうな顔で寝てましたけど」

ジト目のマタリ。最近性格がピンクに染まってきている気がする。

早めに矯正しないとならないだろう。

「……気のせいじゃない？」

「気のせいじゃありません」

断言されてしまったので、私はトーストを食べ尽くすことにした。腹が減っては何事もままならない。

ふと隣を見ると、未だに柄の悪い連中が騒ぎまくっていた。

「……それはともかく。隣の馬鹿共は一体何なの？」

朝から不愉快極まりないんだけど」

「ん？ ……ああ、アレ。結構名の売れた傭兵団よ。

率いているのはハラー・キャラバン。

その名を取って、キャラバン傭兵団。安直ねえ」

私ならもっとセンスある名前にするわあ、と呟くエーデル。

「あれも迷宮に挑んでるの？」

「まあ、一応ね。怪しい依頼を請け負ったりしてるみたいだけど。ただ、主としている仕事は別よ。

アイツらの本業は大陸を回って『子供』を掻き集めること。

貧しい農村から、端金で人間を買い叩くのよお」

武装した奴隷商人みたいなものだろうか。

「で、でも。奴隷制度は教祖エレナに代わってから禁止されたはずでは」

「奴隷じゃないわよ。あくまでも『雇用』しているのだから。親が承諾して預けているのに、赤の他人がとやかく言えないでしょう?」

「……でも」

納得がいかない様子のマタリ。

まあ、良くある話である。

貧しい農村では、生まれた子供を養えなくなるなどよくある話だ。

この街の孤児院でもあれば、話は別であろうが、世の中そう甘くない。

選択肢は二つ。殺すか、売るか。

残酷だが、一家全員共倒れよりはマシであろう。

かといって実の子供を殺すのは耐え難い。

そこに現れるのが、死臭を嗅ぎ付けたハイエナ共というわけだ。

お互いの利害が一致。実に素晴らしい商売である。

私の感情は、また別の問題だ。全く関係ない。

「人には事情が色々あるってことでしょ。

それで、アイツ等は『商品』を捌いてご満悦って訳なのね」

「そういうこと。

魔力の器があれば、ギルドや貴族に大金で売れるし。

身体が丈夫なら、立派な労働力になるでしょう。

器量が良ければ、娼館に売られるわ。

子供は金の成る木なのよお」

暗い灯りを目に宿らせながら、エーデルが淡々と語る。

言葉ほどには、割り切ってはいないようである。

「子供の時から仕込めば、覚えも早いって訳か」

「貴族の子飼いになったり、ギルドに引き取られたりと行く末は様々。

運が良ければ、名を上げることだって出来る。

貴方がかつて討ち取った『農師サルバド』も、元は売られてきたのよ」

「……あっそ」

私は何の感慨も起さない。

殺した相手の過去など、知る必要もないし知りたくもない。

すっかり冷めてしまったスープを口にする。

……まずい。

マタリが、躊躇いながらも質問を発する。

「もし、どれにも当てはまらなければどうなるんです？
どこかに預けられるんでしょうか？」

「……売れ残った家畜がどうなるか。
少し考えれば分かるでしょう？」

言葉を吐き捨てると、エーデルはグラスの水を一気に飲み干した。

静まり返ったテーブル。

そこに小さな虫が飛び込んでくる。

入り口から入り込んだのだろうか。私の残したスープに見事に着水してしまった。

ただでさえ不味いのに、これでは全く飲む気がしない。

皿の上でジタバタと喘いでいる哀れな虫を、私は指でつまむ。

背中には光沢があり、見方によっては黄金に見える。

6本足の昆虫。毒はもっていないようだ。

「アレルちゃん。それ、どうするつもり？」

食べるのはオススメしないけど」

「誰が食べるか!！」

「それじゃあどうするのよお」

「……ちよつと外の空気吸ってくるわ。」

「アンタたちは先に片付けてて構わないから」

「良い所あるんですね、アレルさん」

「やかましい」

やれやれと首を振りながら、哀れな甲虫をつまみながら外へと出る。空は太陽が燦々と輝いており、眩しいぐらいに私の網膜へと突き刺さる。

「ほら。もう来るんじゃないわよ」

太陽目掛けて、もがいている甲虫を解き放つ。

拘束を解かれた甲虫は、上空目掛けて勢いよく飛び立っていく。日光を浴びたその小さな背中中は、見事な黄金色に輝いている。

私は暫くの間、手を翳しながらその行方を眺めていた。

酒場へと戻ると、マタリとエーデルはまだ席で待っていた。傭兵団の連中は、マスターを呼びつけて、なにやらイチャモンをつけている。

「おい！ てめえんとこの酒には、虫を入れるサービスでもあるのかあ！？」

手下の一人がジョッキを地面に叩きつける。

零れ落ちる酒とともに、先程と瓜二つの虫が現れた。

「たまたま入ったんだろう。他の客に迷惑だから余り騒がないでくれ」

「隊長の酒だぞ！ 早く代わりをもってきてやがれ！！」

「分かったよ。代わりの分をサービスするから暴れるな」

マスターが溜息を吐きつつ、カウンターへと戻っていく。

「へへっ。最初からそうしてりゃ良いものを」

「おい。その糞虫、しっかりと始末しておけ。また入ったりしたら気分が悪いからな」

「分かりました隊長！ おらよつと！！」

隊長の指示通り、革靴で甲虫をグリグリと踏み潰す。

「やれやれ。酒を飲むときまで虫と付き合っなんて勘弁願いたいぜ。おい、どっからか女呼んで来い！」

「待ってました！ 今すぐ手配します！」

先程の虫との差は、ただ辿りつく席が違っただけ。運命なんてそんなものだろう。

私はマタリ、エーデルと合流して自室へと戻る。

何故か、微かな違和感を覚えたが、私は気のせいと思うことにした。

鼠の群を鋼の剣で捌きながら、私達は元オークの縄張りを突き進む。マタリもノツてきたらしく、ブラッディソードを軽々と振るっている。

まだ狂戦士化はしていないが、口元が嫌な感じに歪んでいる。名前は忘れたが、あの赤オーク並みの怪力だ。

一対一で勝負させたら、もしかしたらマタリが勝つかもわからない。

エーデルは鼻歌を口ずさみながら、死体の鼠を次々と己の従者としていく。

その数、なんと100体程。

後ろを振り返ると、虚ろな瞳の鼠がうじゃうじゃといるのだ。

これは夢に出ても可笑しくないだろう。

先頭にも勿論トーチラットがいるので、どの方角を向いても無駄である。

一応味方ではあるので、文句は言わない。

「しかし、鼠しかいないわね。

オークがいなくなったから？」

鼠の死体を蹴飛ばして、私は一息つく。

その死体を追いかけて、マタリが大剣でミンチにする。

やはり狂戦士状態かもしれない。最近違いが良く分からない。

「そうねえ。一時的に生態系が狂ってるわ。
当分ここは鼠達の楽園ね」

「ま、進むには楽かもね」

新品で買った鋼の剣。

軽く振って血糊を振り落とす。

防具はとりあえず皮の鎧を買っておいた。

どうせ使い潰すのだ。何でも構わない。

エーデルから、次の階層は『鎧』を必ず身に着けると言われたこともある。

その本人は、相変わらずのピンキーローブだが、特殊エンチャントを施しているそうだ。

主に、『針』など鋭利なものを防ぐ効果があるそうである。

流石に鼠の部位は放置して、群がってくる鼠を蹴散らしながら前進する。

途中、別パーティに遭遇して、情報の交換なども（エーデル）が行う。

彼等はオークの住処の探索、残党の掃討を行うそうだ。

やがて私達は、オークの縄張りの出口に当たる、

41階層へと続く階段に到着した。

いつものように、星石に粉を振りかけて、場所を記憶させる。

「……先に注意しておくけれど」

エーデルが真剣な顔で私達に告げる。

「何よ。お腹でも痛いのか？」

変なもの食べたりしてないでしょうね」

途中、妙な実が成っていたのを私は目撃している。あからさまに毒々しいので、触りもしなかったが。確実に『毒物』である。

「違うわよ！！ 真面目に聞きなさい！」

「……どうしたんですか、エーデルさん？」

「この先の41階と42階は特別なのよ。舐めて掛かると、餌食になるわ」

そう言いながら、エーデルが鞆から『香水』のような物を取り出して、自分の身体に吹き付ける。

「オークよりも危ないのか？」

「ある意味では。私は生理的に駄目ね。考えただけでもゾツとするもの」

「勿体つけてないで、早く言いなさいよ」

私は催促する。焦らされるのは大嫌いである。

「この先は通称『蟲の回廊』。その名の通り、虫がウジャウジャいるわ。」

嫌になるくらいに、ウジャウジャと」

プシューと、身体中丹念に吹きつけながらエーデルが呟く。

「虫？ 中層は人型しかないんじゃないの？」

「そうよ。『人型』の大きさの虫がいるの。」

ああ、想像しただけで立ちくらみしそう」

虫か。私もあまり好きではないが、特に苦手でもない。

人面蝶やらキヤタピラー、キラービーやさそり蜂。

大群を相手に大暴れしたものだ。

虫の体液は臭いから、色々と苦労させられたが。

「そう。マタリは虫は大丈夫？」

「わ、私ですか！？ え、ええ、えーと。」

どちらかというと、大嫌いというか、触るのも嫌というか。

見るのも嫌です」

顔を真っ青にしているマタリ。

本当に苦手なのだろう。今度顔に蜘蛛の玩具を乗っけてやるとしよう。

人生には驚きが必要だ。

「……あっそ。それじゃあアンタは回廊を抜けるまで後方担当ね。」

私が道を切り開くから。エーデルは魔法で援護して頂戴」

「い、いえ。そういうわけにはいきません!」

「それじゃあ、アンタ先陣行く？」

虫塗れ確定だけど」

「う、うう」

結局、私とトーチラット数匹が先陣。

エーデル、荷物持ちゾンビが中央。

後方は鼠100匹とマタリ。

滅茶苦茶な陣形である。

打ち合わせを終えた私達は、下へと警戒しながら進んでいく。私は“左手を引かれる”様に、先へと足を進めていった。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「うるさいわね。響くから静かにしなさいよ」

「でも！ ぎゃ、ギヤアアアアアアアアアア！
せ、背中に変な虫がはいつた！！！！」

後方から凄まじい叫び声が聞こえる。

紅い大剣を振り回しながら、虫が近づかないように一人で暴れまわっている猪女。

味方である筈の鼠に、多大な被害が出ているような気がするが、気にしない事にした。

私は前方の地面に這いずっている数匹の妙にツヤのある『黒羽虫』に視線を移す。

どうやら羽根がついているようなので、行動を起こした瞬間に飛び掛ってくるだろう。

「メラ！」

火の玉を地面にぶつけると、黒羽虫が奇声を上げて飛び掛ってきた！私は冷静に一匹ずつ剣を走らせていく。

ただ直線に飛んでくるだけの雑魚。見かけが気持ち悪いだけである。全て叩き斬ることに成功し、黒羽虫は茶色い液体を死骸から溢れさせる。

「アレルちゃん、上！！」

「ん？」

上から巨大な芋虫が、でかい口を開けて私を飲み込もうとしている。顔に少しだけ涎のようなものがかかり、ジュツという音を立てる。どうやら毒性のある体液のようだ。

剣を上に向けて攻撃態勢に入った瞬間、エーデルの魔法詠唱が完了する。

かなり素早いと思われる詠唱。やはり中々の使い手のようだ。

「炎の精霊よ、我に力を。フレイムガスト！」

芋虫を赤い煙が包み込み、やがて火の手が上がり始める。

私は危険な位置から退避して、元の陣形へと合流する。

芋虫はドロドロと融け始めて、使い終わった蠟燭のような状態になった。

そこから発せられる異臭は、実に耐え難い。鼻の奥に突き刺さるのだ。

「お見事。こいつら火に弱いのか？」

「虫は火に弱い。この世界の『常識』よ。アレルちゃんの世界とは違うのかしら？」

「……………」

「ギヤアアアアアアアアアアアア！」

だ、誰か取ってください！！ も、もぞもぞ動いて！！」

エーデルと視線を合わせると、同じタイミングで溜息を吐く。

42階を抜けるまでこの調子なのかと思うと、立ちくらみもするというものだ。

「エーデル。何でアンタには虫が寄ってこないの？
さつきから羽虫の一匹すら寄ってこないじゃない」

「虫除け香水よ。気休めだけどね。
虫に身体を這い回られたりしたら、詠唱に集中できないもの。
職業柄、常に持ち歩いているわあ」

「後でマタリにも掛けてあげなさい。
うるさくて仕方がないから」

「高いから嫌よ。貴重品なのよお？」

「じゃあ良いわ」

簡単に諦める。他人事なのでどうでも良い。
口では否と言った癖に、マタリに香水を吹き付けている辺り素直ではない。

捻くれ者は素直に行動することができないのだ。実に難儀である。

私はズンズン先に進んでいく。
左手を取られながら。

生暖かい温もりが、掌から伝わってくる。

「ねえ。私達ってどこに向かっているの？」

私は問いかける。 先導している存在に。

「……勿論、下に続く階段でしょうに。

アレルちゃん、何を言っているのよ。

……でも、道から外れているわ。

引き返しましょう。 前の路地を左よ」

エーデルが合図を送ってくるが、私は止まらない。

止まらない。 私の足は止まらない。

振り返らずに、私は返事をする。

「……エーデル。 このまま行っても良い？

止まらないのよ。 先に進むしかないわ」

「アレルちゃん？ 一体何を」

「え、エーデルさん。 アレルさん。

さ、さつきから言おうと思ってたんですけど。

あ、足音が一つ多いんです。

ね、鼠のものじゃありません。

それに、松明が照らし出している影が」

壁に映し出された影。

後ろからマタリ。

中央にエーデルと、よろよろしている荷物持ちのゾンビ。
先頭に行く私。

それともう一つ。

「……………私の手を引く、子供の影。
何だこれは。誰のものだ。私じゃない。
私には分からない。」

多少混乱するが、私の足は動き続ける。
左手は勢いよく私の身体を突き動かす。

「……………どうしましょうか。
こんなこと初めてよ。」

「悪霊かしら。その割には悪意を感じない。
そもそも、こいつに攻撃は通用するのかどうか。」

剣撃は効果がないだろう。
ニフラムなら恐らく大丈夫。多分。
もし魔法耐性があったらヤバイ。

「……………い、石を使って逃げるのは。」

撤退を進言するマタリ。

誤りではないが、コイツが憑いて来る可能性を忘れている。

「一緒にベッドで眠る羽目になるかもしれないわよ。
それでもいいなら帰りましょうか。」

「い、いえ！ 結構です！！」

虫も駄目、幽霊も駄目。

狂戦士の名前が泣いている。

今度徹底的に鍛えなおしてやるとしよう。

「取り敢えず着いて行くべきかしら。

終着点は地獄かもしれないけれども。

どちらにせよ、止まれないからそれしかないのよねえ」

エーデルが顎に手を当てて己の考えを述べる。

私もその意見に賛成だ。

というか足が止まらないのだから、確かにそれしかないのだが。

「まあ行ってみましょう。

何が待っているかは、ついてからの楽しみね」

左手を握る力が少し強くなった気がする。

喜んでいるのだろうか。

私には良く分からない。

どこをどう進んだのかは良く覚えていない。

ただ、手を引かれるがままに進んだらこの場所に辿りついた。
行き止まりの小部屋。

中央には台座があり、なにやら染みのようなものが付着している。小部屋は綺麗な彫刻が飾り付けられており、何らかの儀式を行う場所のようにも思われる。

壁には一面を使った巨大な絵が、色彩豊かに描かれている問題はその絵だ。

様々な『虫』が精細に彫られており、それが『人』を貪る様子が描かれているのだ。

邪教の儀式。虫を用いた何かの呪法だろうか。

私の左手からは、いつの間にか温もりが消えていた。

「……ここは何？」

私はつい疑問を漏らす。

「 蟲の祭壇。 蟲の回廊のどこかに存在すると噂されていた場所よ。」

私も始めて見たわ」

興味深そうに台座、壁画を調査していくエーデル。手帳を取り出すと、何やら記し始める。

「あ、あの。何か、ここ嫌な感じがするんですけど。何というか、死臭がするというか」

マタリが蒼白な顔で震えている。

鼠たちは部屋の入り口を数を駆使して固めている。

「それはそうでしょうね。」

「ここは贄を捧げる場所なのだから」

「贄？」

「蟲に捧げるのよ。生きた人間を。」

その贄が貪られた後、蟲からご褒美が貰えるわ。

銀貨100枚相当の、高濃度魔素の塊をね。

それが契約だから」

エーデルがペンを動かす手を止める。

「やけに詳しいわね。知ってるの？」

「……知ってるわ。聞いたからね。」

私の師だった人形遣い、ラス・ヌベスに」

エーデルは感情を籠めずに淡々と語る。

この迷宮は、不要なものを捨てるのに、最も適した場所なのだ。

多数存在する傭兵団に、買われて連れてこられた子供達。

だが、街に定住することが出来るのはその3割程。

それでは残りは一体どこにいったのだろうか。

答えは簡単だ。迷宮に無造作に捨てられる。

食わせるだけでも多額の金が掛かる。才能がない人間を育てる必要はない。

身元が怪しい人間、しかも子供を働かせようなどという善人はそうはいない。
教団ですら、『一切関知せず』という立場を取っているのだから。
かといって外に放り出し、万が一生き残った場合、復讐に来る恐れがある。

それではどうするのが得策か。迷宮で人知れず死んでもらえば良いのだ。

人買い達は、皆この祭壇を知っている。

迷宮に入るといふ事は、この場所に来るといふ事と同義である。

見知らぬ餓鬼を捧げるだけで銀貨100枚。

こんなに美味しい話はない。

運命の分かれ目は『銀貨100枚』。

これを下回る値段しか付かなかった子供は、袋に入れられて連れてこられる。

そして、袋に閉じ込められたまま、捧げられ、蟲達に喰われるのだ。

「私はスラム街出身なの。子供の頃、親にあっさりと売られたわ。私に付いた値段は金貨10枚。希少な『魔力の器』があったから。もしなかったら、私もここに捧げられていたかもしれないわね」

「……そう。それじゃあ、ここは処刑台みたいなものか。どつりで忌々しい気配を醸し出していると思っただわ」

「それで、これからどうするの？
私達も虫達に捧げられるのかしら」

エーデルが手帳を閉じる。
そして私にむかって問いかけてくる。

「うーん。蟲の気配はないわねえ。
取り敢えず祭壇を破壊したほうが良いのかしら？」

その言葉を発した瞬間、部屋が凄まじい勢いで揺れ始める。
悪霊？ が怒っているのだろうか。

「……違うみたいよ。それに、これは破壊しない事をお勧めするわ。
下手すると、蟲達が暴走する危険がある。

それほどまでに、怨念と憎悪がこの祭壇には積もっているのよ。
跡形もなく壊したい気持ちは、私も同じだけれど。
何が起るかわからないわ」

エーデルがいつになく真剣に警告してくる。
全部打ち殺せば問題ないと思うが、
自ら危険を生み出すことはないだろう。

「じゃあ、帰ろっか。もうやることないし」

「……良いんでしょうか」

「ただ、知って欲しかったただけかもしれない。
自分達の最期の場所を……それとも」

「それとも？」

「いや、やっぱり分からないわ。私には分からない」

分からない。そういう立場になったことがないので、私には分からない。
私の気持ちも分からないように。彼等の気持ちなど、分かるわけがない。

「……彼等の魂に安らぎと、救いがありますように」

エーデルが祈りを捧げる。

私は効果があるか分からないが、呪文を唱える。

「囚われし哀れな魂達よ。我が祈りと共に天へと召され給え！
聖光破邪呪文！！《ニフラム》」

忌まわしき小部屋が、清らかな光で浄化されていく。
完全に憎悪と怨念を消し去ることなど出来るはずもないが、
多少の効果があることを祈るしかないだろう。

これから先も、ここには、贄が捧げられるのだろうか。

迷宮入り口の門を抜け、いつものように横柄な門番と軽いやりとりをする。

何故かは知らないが、身体が非常に重い。

足を動かすだけで、精神力を消耗する。

なんだこれは。

「アレルちゃん、大丈夫？」

さっきから脂汗が止まらないみたいだけど」

「だ、大丈夫じゃない。か、身体が重すぎるわ！」

まるで何かが私に乗っかっているかのようだ。

「か、肩を貸しますから、頑張つて宿まで戻りましょう」

その言葉に甘え、マトリの肩を借りる。

特に重みは感じていないようで、マトリは平然と歩き始めた。

「な、なんなのよ。い、意味が分からない」

「……………」

正面大通りを進み、宿を目指す私達。

その前に、先日嵐のように現れた、羽付き帽子の少女が能天気立ち塞がった。

今日は白いワンピースではなく、花柄が付いた水色のローブを身に着けている。

「やあ、アレル。約束どおり、これから会いに行こうとしてたんだけど。」

それより見てよこれ。王国とかいうところで買ったんだよね。なんでも、今一番の流行らしいとかなんとか。

「どうかな、似合うかな？」

「や、やかましい！ 今はそれどころじゃ」

私は息も絶え絶えに返事をする。

「それにしても、今日はやけに大所帯だねえ。」

これからパーティーでもやるの？

「私も誘ってほしいなあ」

不思議そうな顔で、私と、その周り一体を見つめる少女。

「お、大所帯って。私を入れて3人しかいないじゃない。」

パーティーなんてやってる場合じゃないわよ、この鳥頭！」

「何言ってるのさ。軽く30人はいるじゃない。」

皆、周りで愉しそうに遊びまわってるよ。」

それにアレルの背中に、笑顔で3人乗っかってるし！」

「な、なにを」

「いや、勇者は人気者だねえ。いいなあ。羨ましいなあ」

その言葉に、私の身体は硬直する。

顔が引き攣る。確かに、背中でもぞもぞする感触がある。

エーデルの顔を見る。硬直している。

直ぐ隣のマタリの顔を見る。完全に白目を剥いている。

私は意を決して、恐る恐る後ろを振り返ることにする。

そこには。

勇敢だった私の意識は、そこで途絶えた。

次目を覚ましたら、ルイーダの酒場の自室だった。

取り敢えず気分が回復したので、一杯やったら更に気分が良くなった。

エーデル、マタリ、それと何やら大勢で盛り上がった気がするが、よく覚えていない。

私の胸には、いつの間にか『天道虫のブローチ』が装着されていた。

後日、キャラバン傭兵団隊長、ハラー・キャラバンの変死体が発見される。

死因は、口一杯に甲虫が詰め込まれての窒息死。

『生きた甲虫』は胃袋にまで満杯に詰まっていた。

隊員達は、その光景を目撃したらしく錯乱状態に陥っていた。

事情を聞くことが出来る状態ではない為、『事故死』と結論付けられた。

他の『人買い』を行っている傭兵団や、商団の元に、奇妙な虫が届くようになるのは、もう少し先の話である。

第二十三話 勇者と蟲の回廊（後書き）

一拍置く為の繋ぎの話。

いきなりゾーマ篇へは唐突すぎましたので。

次話挟んでいく予定です。

更新は不定期で申し訳ありません。

実は夏なのでホラー書きたかったのです。

あと、虫でモンスターの数稼ぎです。

黒羽虫。怖いです。

・取り憑いたのは、最初の虫の一件。

ハラーに突撃するはずが、うっかりアレルのスープへ。

逃がしてあげたので、好感度。

もう一匹は本懐を遂げて、呪いを掛けました。

踏み潰した隊員に取り憑き。

・なんで祭壇まで連れていったのか。

仲間に紹介する為。気に入られたので、3人憑いていきました。

子供っぽいので、通じるところがあったようです。

ちなみに、ニフラムに成仏させる効果はありません。

ニフラーヤさんならいけます。

・別に何かしようというわけではなく、ワイワイ遊んだだけです。

・ ついでにハラーぶっ殺していきました。

・ 嫌がらせで他の人買い連中に虫を送りつける作業に励んでいます。
強烈な呪いつきの。

第二十四話 壊れた精神（前書き）

人生山あり谷あり。

今回は谷のお話です。

タイトル通りのお話。注意してください。

第二十四話 壊れた精神

スリースター教団本部『星塔』最上階。

祈りを終えた教祖エレナは、異端審問官からの調査報告書に目を通していた。

調査対象は『勇者アレル』。

最近名を上げてきた冒険者の一人。

戦士ギルド所属の、希少な紋章を宿す少女である。

「……………」

エレナは押し黙りながら、書類を捲っていく。

アレルの精細な似顔絵、経歴、特徴などが記されている。

出身地：不明。 迷宮に挑む動機：不明。

戦士ギルドに初めて現れた時は、『棒』と『普段着』を装備していた。

勇者（仮）として認定されている。

畏師サルバド、人形遣いラスを一人で討ち取る実力を持つ。

剣術だけではなく、治癒、攻撃魔法を使いこなす。

魔法を『詠唱』せずに使用し、『杖』を必要としない。

パーティのメンバーは死霊術師エーデル、アートの娘マタリの3名。

同行するようになった理由は不明。

現在中層40階まで到達している模様。

オーク事件の重要参考人。

助けだされた冒険者の話によると、脱出した直後にアレルの姿が目撃されており、

迷宮門番の話とも一致している。

オークの住処は、何らかの『魔法』により壊滅させられた形跡があるが、

これほどの大魔法を行使することが出来る人物は限られている。

事情聴取を行うべきと考えられるが、

性格については不明瞭な為、慎重を期す必要がある。

(……オークの住処を一人で壊滅させた？

そんな馬鹿なこと、普通の人間に出来る訳がない)

戦士などの前衛が時間を稼ぎ、

僧侶が治癒を行い、レンジャーが攪乱などの補助を行う。

そして魔術師が強力な魔法を行使することで敵を屠る。

これが強敵や、大人数を相手にする際の基本的な戦術である。

それをたった一人で乗り込んで、圧倒的多数を一撃で葬り去るなど、

普通では考えられない。

そう、普通では。

エレナの脳裏に、門外不出として厳重に保管されている書物が浮かぶ。

かつて存在したといわれる『魔王』を打ち倒した『勇者』の足跡を記した書物。

誰が何のために、どうやって記録したのかは分からない。

だが、そこには勇者の誕生から、魔王が心臓を貫かれるまでの詳細

が克明に記されている。

視点は、打ち倒される側。

そう、魔王軍が勇者の手によって壊滅させられるまでの記録なのだ。どうしてこんな物が、教団に保管されているのかは分からない。分かりたくないのだ。

魔王や勇者の名前は、全て黒で塗りつぶされていて確認することが出来ない。

最初読んだときは、このような人間が存在する訳がないと笑い飛ばしそうになった。

殺すことが出来ない。八つ裂きにしても蘇る。

回復と多彩な攻撃魔法を駆使し、勇者の剣術を使いこなす。

何度殺しても、何度焼き払っても復活する。半死にして拘束することも出来ない。

麻痺や毒を用いて『死が避けられない』状態に陥ると、光に包まれ燃え尽きるのだ。

まさに魔物を殺戮する為に存在する『兵器』である。

最後の方のページは破り取られ、確認することが出来ない。

だが、魔王が『闇の衣』を打ち払われ、やがて力尽きるその場面までは記述されている。

(もしも。もしもこのアレルという少女がこの『勇者』の再来だとしたら。

それならば、オークを滅ぼすのも可能なのかもしれぬ。

魔王軍を打ち倒すといわれる『勇者』なら容易いことだろう。

でも、一体何のために彼女はここに現れた？ どうして？)

エレナが思考の迷路に入り込んだその瞬間。部屋のドアが恭しくノックされた。

特徴的なこの叩き方。異端審問官の長『イコナ』に間違いない。

「……………どうぞ。入りなさい」

「失礼致します、エレナ様。
至急報告すべき件があり参りました」

「どうしたというのです」

エレナの問いに、イコナが口元を歪めて報告を始める。

「背教者『イルガチエフ』一党の所在が掴めました。
迷宮下層部95階の隠し部屋に潜伏しています。
信用できる筋からの報告です。間違いありません」

その言葉に、エレナは椅子から立ち上がる。

「……………間違いないのですね？」

「はい。直ちに全異端審問官、治安維持隊を組織し、
迷宮下層へと急行します。彼奴はそこで身を潜めていたようです。
『闇の衣』は既に完成している模様。一刻の猶予もありません」

恐れていた事態。闇の衣は既に完成していたのだ。
これから起こされるであろう災厄。

それを未然に防ぐためにも、異端にして背教者の元大司教。
教団NO2として君臨していた、恐るべき魔術師。

イルガチエフは確実に抹殺しなければならない。

「必ず殲滅しなさい。どのような犠牲を払っても必ず！
異端は一人残らず殺すのです！！」

その身体の一片までも、確実に焼き払わなければならない。
貴方達の魂は、必ずや救われるでしょう。
星の導きがありますように」

激昂するエレナ。普段の冷静な立ち振る舞いは影もない。
時に慈愛と博愛。時に残酷なまでの苛烈さを見せる二面性。
異端として殺戮した人数は、千を当に越えている。
彼女もまた、『赤き衣』の末裔なのだ。

「ありがたきお言葉。
異端共は皆殺しに致します。
背教者には災いを。我等には星の導きを」

敬礼すると、イコナは部屋を後にする。
部屋には、息を乱しているエレナだけが残された。

ルイーダの酒場の一室。

常連であるレンジャー、魔術師が息を潜めて身を隠していた。

普段は戦士、僧侶を入れての4人パーティ。

彼等の主な稼ぎ場所は、迷宮中層から下層。主に60から70階で稼いでいる中堅である。

それなりに名前も売れ、これから荒稼ぎを始めようかという気鋭の冒険者達。

「……本当にやるのか？」

「もう前金は受け取っている。今更後には引けない。

これが成功すれば、一生遊んで暮らせる額だ。

冒険者としての地位、名声は失うがな」

「……………」

一瞬口籠った魔術師に、レンジャーが言い放つ。

「迷っているなら、俺だけでやる。

仲間の信頼を裏切ることになるんだからな」

「お前じゃ魔術施錠を解くことは出来ないよ。

俺の魔法と、お前の解錠技術。

両方ないとこの金庫は開かない」

苦笑すると、魔術師は首を振る。

「それじゃあ早いところ頼む。

暫くはお尋ね者になるかもしれないが、どうせ世の中大混乱に陥る。

俺達に構ってられる奴なんていなくなるさ」

「……この街が存在しているかも怪しいな」

「上手い酒が飲めなくなるのは残念だが、仕方がない。金の為だ。子供でも出来そうなことで、金500枚。更に追加報酬の500だ」

魔術師が詠唱を開始する。

金庫に掛かっている、魔術による施錠を外す。

そして、盗難防止として仕掛けられている精霊術を、『誤魔化す』。

「……こちらは完了だ。仕損じるなよ？
チャンスは一度きりだ」

「誰に言っているんだ。俺の先祖は、かの大盗賊バコタ様だぞ。俺に掛かれば、こんな金庫は一発だ」

特製の鍵、そして熟練の技術を用いて金庫を解錠する。

……金庫は重々しい音を立てながら、開いていく。

「さあ、ご開帳だぞっと」

「どれどれ。……中々の金額を蓄えているようだな。流石は売り出し中の『勇者』様だ。

どうする、こいつももらっていくか？」

魔術師が中を確認し、問いかける。
布袋に入った金貨の詰まった袋。

200枚はあるだろうか。

レンジャーは乱暴に掴むと、自身の皮袋へと詰め込む。

「当たり前だ。……後は、価値のありそうなものはないな。雑貨やら、日用品ばかりだ」

「さて、仕上げだ。何の意味があるかは知らんがな」

金庫から、一冊の本を取り出す。

古ばけていて、表紙は擦れている。

「一応証拠として、表紙と中身を数枚抜いていこう。違うなどと言われても厄介だからな」

レンジャーの言葉に頷くと、魔術師は乱暴に表紙を引き裂き、中身のページを数枚破り取った。

「一体なんなんだこれは。やけに使い古された感じはあるが。中身は全部白紙だぞ。何の為にこんなもの燃やすんだ?」

「俺達は言われた通りにすれば良いのだ。金さえ貰えりゃ文句はない。」

さあ、そろそろやるうじやないか」

レンジャーがドアの前に待機して、脱出経路を確認する。

ルイーダの酒場には、用心棒が数名待機しており、定期的に巡回を行っている。

その隙について忍び込んだ訳だが、帰りは気づかれる可能性が高い。マスターと、用心棒、客が隙を見せた僅かな瞬間。

行きは長時間粘ってそれを待つことは出来るが、帰りはそうはいか

ない。

「そうだな。名残惜しいが、やるとしようか。ルイーダには悪いが、こちらの仕事だ」

「いつでも良いぜ。こちらの準備は大丈夫だ」

その言葉に頷くと、魔術師は慣れ親しんだ火炎の術式を組む。

「ファイア初級火炎術式」

手に持った本を燃え上がらせると、床へと放り投げた。黒煙が部屋に充満していく。

「いくぞ！」

レンジャーは通路に飛び出すと、煙幕弾を四方へ勢いよくばら撒き始める。

魔術師はそれに続いて、飛び出していく。そして二人で腹の底から絶叫する。

「火事だ！！ 逃げろ！！」

「火が出てるぞ！！ 早く逃げないと死んでしまう！！」

その声に宿泊客、巡回している用心棒が慌てふためいて駆けつけてくる。

「な、何が起こった！ 火の手はどこだ！？」

「た、助けてくれ！！ 俺は火と水は苦手なんだ！」

着の身着のまま飛び出してきた冒険者。
用心棒は鬼の形相で一喝する。

「やかましい！ 早く水を持って来いこの馬鹿！！
氷と水系を使える魔術師は消化を手伝え！！」

「わ、分かった！ み、水だな！」

「ひ、ひい！」 「助けて！」 「ど、どけ！」

煙に巻かれた通路。押し合う人々。飛び交う怒声。

その混乱に乗じて、レンジャーと魔術師はまんまと逃亡することに成功した。

アートの街、スラム地区のとある廃墟。

元は教会だったが、信仰していたのは現在のスリースター教ではない。
い。

今は廃れてしまった宗教である。神像は取り壊され、中は荒れに荒れている。

最早誰かの祈りが届くことはないであろう。

先程の二名は、約束の時刻に合わせて、ロープを纏って訪れた。

常に警戒払いながら。

金を払うのが惜しくなり反古にされるばかりか、口封じの為に始末される危険性もある。危険な依頼は、そういうものなのだ。

暫くすると、依頼主が従者を連れて現れた。

身なりは貴族のもので、従者もそれなりに整った装束をしている。警護として控えているのは、恐らく5名程。入り口と裏口に隠れているようだ。

レンジャーは辺りに視線を走らせて、配置を素早く確認した。

「ご苦労だったね。依頼した件はどうなったかな？

ルイーダの酒場の騒ぎを聞く限りは、上手くいったみたいだけど」

依頼主である、若い貴族が問いかけてくる。

今は没落しているとはいえ、英雄として名高い一族。なぜこんな依頼をしてきたのかは、よく分からない。

「無事完了しました。証拠はこちらです」

魔術師が表紙と数枚の白紙を取り出し、従者へと手渡す。依頼主の貴族がそれを受け取ると、満足気に微笑んだ。

「確かに。報告にあつた『本』に違いない。

こんな者で精神を保っていた癖に勇者とは笑わせてくれる。まあ、これで大司教も喜ぶことだろう。

報酬を受け取ってくれ」

貴族が指を優雅に鳴らすと、従者が重みのある袋を二つ手渡してくる。

中身を確認すると、中には眩いばかりの金貨がぎっしり詰まっている。一枚ずつ確認はできないが、恐らく契約と同額が入っていると思われる。

「……確かに。では、これで契約は完了ということだ」

「……前にも言ったと思うけど。ここから早く立ち去った方が良くもつづく、『結界』がなくなるからね。

私の愛した街が化け物共に蹂躪されるんだ。

君達も、その災厄に巻き込まれなくなければ、出来るだけ遠くへ逃げることだ」

ニヤニヤと嗤いながら、忠告してくる貴族。

『結界』の崩壊。これが意味することは一つ。

魔物が地上に現れるということだ。

迷宮入り口周辺は、G・アートが構築した結界により覆われている。この結界があるからこそ、魔物達は地上に侵攻することが出来ないのだ。

「……一つだけお聞きしても宜しいですか？」

魔術師が尋ねる。レンジャーは咎める視線を送ったが、魔術師が言葉を止めることはなかった。

「構わないよ。君達は僕の依頼を完全に達成してくれたからね」

「なぜ、結界が？」

崩壊するのか。消失するのか。

それとも、お前の手により『解除』されるのか。
魔術師は全ての意味を籠めて問いかける。

「簡単だよ。僕が消し去るからだ。」

偉大な英雄であり、誇るべき祖先『G・アート』。

彼の築いた結界がこの街を守り続けてきた。

ならば、それを打ち破るのは、子孫の仕事だとは思わないかい？」

「……………」

「この街の屑共は、僕や今は亡き父上達を見下すことしかしなかった。」

誰がこの街、いや、この世界を救ったのかをすっかり忘れているんだ。

結界の『鍵』を握っているのは我等アート一族なのに。

だから、それを嫌と言う程、思い知らせてやろうと思ってね」

狂ったような眼で、得意気に話をする貴族。

魔術師はただ頷いていた。

彼もまた、この男を見下していた一人であった。

過去の栄光に縋る愚か者。本人は何も成し遂げていない癖に、没落している様は、実に滑稽だと笑い飛ばしたこともある。

「……………そうですか」

「そうさ。もうこんな街は滅べば良いんだ。
もうすぐ終わりが始まる。」

その記念すべき一步は、アート家の当主であるこの僕、
レケン・アートが踏み出すのさ。

そう、堰を切るのは、この僕だ！！」

叫び声が荒れ果てた教会に響き渡る。
押し黙る魔術師を、面白そうに眺めた後、レケンは従者を連れてその場を後にする。
残された二名はお互いに視線を合わせた後、溜息を吐く。

最優先事項は唯一つ。

この街から一歩でも遠くへ逃げ去ること。
濁流に巻き込まれないように。
そう、それだけだ。

地下迷宮95階。90階以降は星の回廊と呼ばれている。

通路が所々に輝いており、それがまるで星明りのようなことから呼ばれるようになった。

90階以降から『星遺物』と呼ばれる、希少なアイテムが現れ始める。

今まで何もなかった場所に、突如として現れる謎の道具達。

そのどれもが特殊な能力を秘めており、高値で取引される他、教団からの依頼事項にも含まれている。

このエリアで如何に稼ぐかが、『星』を認定される為に重要な事柄となる。

とはいえ、そう容易くこのエリアで狩りをする事は出来ない。

現れる魔物も凶悪なものばかりとなり、未熟な冒険者は一撃で屠られるだろう。

悪魔族や、人食い巨人族、竜族が出没するようになるのだ。

一戦ごとに、拮抗した戦いを強いられ、それが集団で現れた日には目も当てられない。

並みの者が迷宮を進行する際は、10人以上の合同徒党で挑み、星石に記憶させるという

手順を踏むのが常套手段である。

当然探索もままならず、儲けも少なくなる為、徐々に少なくなるのが慣例だ。

金よりも命。それを身に染みて分かるのが、このエリアだ。

その枠に当てはまらない連中は、いつも通りに気にせず進んでいく。技量がなければ即座に報いを受け、星に愛されし者には導きがあることだろう。

星を認定されるには、この死の壁を乗り越える必要があるのだ。

その広大なエリアの一角。袋小路の小部屋。

小部屋には魔物避けの魔法陣が偽装されて配置されている。

星石を使用し、転移してきたレケンと従者。

慎重に壁を手で擦り僅かに出っ張っている『ボタン』を押す。

瞬間、横壁の中央部分だけ歪み始め、波打ち始めた。

慣れた様子で二人はその歪みへと進入していく。

入り口を守備していた、大司教子飼いの僧兵が槍を向けてくる。

レケンの顔を確認すると槍を下ろし、一礼する。

「イルガチエフ大司教に報告したい事がある」

「しばしお待ちを。只今礼拝の時間ですのでこちらへ」

僧兵はレケン達を中へと案内していく。

迷宮の一角とは思えないほど、小綺麗な部屋。

まるで礼拝堂のようである。

先程までいた荒れた教会よりも立派な造りだ。

何故このようなものが迷宮にあるのか。

イルガチエフ達がわざわざ作ったのかもしれない。

「いつみても、迷宮とは思えないですね」

従者がレケンに話しかける。

「ああ。一体ここは何なのだろうな。

魔物が作った教会なのだろうか」

「彼等にも信じる者があるのでしょうか」

「知らないな。少なくとも、今の邪教よりはマシだろうけどね」

レケンが吐き捨てると、奥から笑い声を上げる男が現れた。

荘厳な礼服を着用し、逆さ十字の入った神官帽を被っている。

手には巨大な宝石の付いた豪華な杖を持ち、ゆっくりと歩いてくる。年齢は50代といったところか。

「邪教にしてしまったのは、現教祖のエレナ。それを理解していただきたいものですな、レケン殿」

「イルガチエフ大司教。いらっしやったとは」

椅子から立ち上がり深く頭を下げるレケン。

従者もそれに続く。

「……それで、何用ですかな？」

「先日お話した、勇者の名を騙る愚か者についてですが。僕の方で手を打っておきましたよ」

レケンは胸を張って報告する。

星見の儀式の結果はイルガチエフの手の者から報告を受けていた。彼は独自の判断で、アレルを陥れることにしたのだ。

金を使えば、情報を手に入れることなど容易い。

少女が、何を心の拠り所としているかも手に取るように分かった。

白紙の本を用いて、自己暗示を掛けていると。

「ああ、あの愚かな小娘の件ですか。

所詮は根も葉もない噂話。脅威になるとは思えませんがね」

興味がないといった様子のイルガチエフ。

「し、しかし。勇者の紋章は確かに現れましたし。

それに、賞金首の数名は討ち取られています」

「『闇の衣』は既に完成し、魔物を操る実験も成功しています。魔素を大量に注ぎ込んで、魔法耐性を付けることも成功した。一体何を恐れる必要があるというのですか」

イルガチエフが召喚呪文を詠唱し、杖を叩きつける。悲鳴を上げるレケンと従者。

その前に、赤い皮膚を持つオーク、デーモン、トロル。そして赤いリビングアーマーがひしめくように現れた。

噂で広まっていた変異したオーク。

それは彼が実験を行った物である。

実験を『儀式』と信じ込ませたのは『闇の衣』の力だ。

「で、でもオークの軍団は打ち破られて」

「あれは教団とギルドの最精鋭を集めて殲滅したと報告を受けています。」

教団に潜ませている内通者からの報告ですから間違いありません。

たかがオーク程度で大騒ぎする程度のレベル。

下層の魔物を『強化』して繰り出せば、何の問題もないでしょうな。更に、切り札も用意してあります」

誰もが恐れる、最強の切り札ですよと、

イルガチエフは淡々と語る。

「……分かりました」

「それに、その邪魔者たちも、もうすぐ葬ることが出来ます。

易々と偽情報に騙されるとは情けない連中です。

悉く皆殺しにしてやるとしましょう」

恐らくは、こちらに侵攻してきているだろう異端審問官共。死地に誘われているとも知らずにだ。漏らした情報は、勿論この部屋ではなく、罠を仕掛けた偽の隠し部屋だ。進入した瞬間、罠が発動し、赤き魔物が取り囲む。数千という強化された魔物が物量で押し潰すのだ。

「さ、流石はイルガチエフ大司教。全てをお見通しなのでですね。余計な真似をして、申し訳ありませんでした」

レケンはずいぶん伏す。

この男には絶対に勝てない。それが嫌というほど感じられるからだ。例え勇者といえども、この男の前では手も足も出ないだろう。一度だけ目にした『闇の衣』。

あれは恐ろしすぎる。絶対に逆らうことは出来ない。「そんなことより。結界は大丈夫なのでしょうな？あれこそが最後の壁。我等の道を遮る障壁なのです」

イルガチエフが鋭い視線で念を押す。彼に資金を援助してきたのは、結界を崩壊させる為だ。魔物の軍勢を率いて、教団を奪還し、更には大陸全土を支配する。これこそが大司教イルガチエフの最終目的。

闇の衣はその為に、完成させたのだ。

「勿論。指示があり次第、いつでも解除できますよ。僕はアートの当主なのですから」

「それは頼もしい。もう間もなくです。裁きの日は近い」

その言葉にレケンは頷くと、従者を連れて退出していく。

イルガチエフは杖を翳して、魔物達の召喚を解除する。そして踵を返し奥の祭壇へと移動する。

完成した『闇の衣』が祀られている場所だ。

イルガチエフは、その禍々しい装束を、愛おしい者を見るような目で見つめる。

「……フツ。これは私のものだ。誰にも渡さん。

例え、古の魔王であろうと、絶対に渡すものか」

震える手で優しく撫でると、目を閉じて思考に耽る。

かつてのイルガチエフは、『緑の衣』の子孫として、心から一つの目的の為に組み組んできた。

父や、祖父と同じく、教団の真の目的である『大魔王ゾーマ』の復活。

だが、完成が近づくにつれ、迷いが生まれるようになってきた。

『人間に敗れ、地に墜ちた哀れな魔王を復活させることに意味があるのか』

闇の衣の『魔力』により、魔物を操ることが出来ることが分かると、

特にその思いが強くなる。

今更過去の遺物を復活させることよりも、むしろ自分がこの力を使
うべきだ。

迷いは決意に変わる。

自分の考えを子飼いの教徒に打ち明けたところ、

異を唱える者はいなかった。

彼等にとっては、イルガチエフこそが信奉の対象なのだ。

「この深淵なる闇の力。私の力。私だけの力だ。

フフ。フハハハハハハッ！

人間どもめ。再び闇で世界を覆いつくしてくれるわ！！」

狂ったように嗤うイルガチエフ。

闇の衣を赤子を抱くようにかかえこみ、跪いたまま微動だにしない。
その目は何かに取り憑かれているかのように、妖しい光りを映して
いた。

「あーあ。もう虫はこりこりよ」

虫の回廊を突破したアレル一行。

43階入り口から帰還すると、全員大きく深呼吸をする。

何回か繰り返した後、アレルは溜息を盛大に付く。

マントにつけた天道虫のブローチが相変わらず光りを放っている。

「でも、今回は凄く楽しかったね。

きつと、そのブローチのおかげですよ」

「確かに。虫の方から遠ざかっていったもの。

虫除け効果でもあるのかしらねえ」

ツンツンとブローチをつつくエーデル。

その度に点滅を繰り返している。

「これ、呪われてるのよ。

私確かに置いてきたのに、いつの間にかマントに憑いてたのよ。どういふことなのか教えてくれる？」

アレルの言葉に答える者はいない。

「……誰かにあげようか？ くつつけてあげるわ」

「いらないわ。貴方にピッタリよ」

「そうですよ。私には似合いません！」

「……………褒められても嬉しくないのよ。
よし、捨ててしまおう」

アレルが天道虫を投げ捨てようとマントを掴むと、
素早くブローチが移動して回避する。

本当は虫が擬態しているのではないかと、マタリはじっと眺めたが、
確かにブローチだった。

グルグルと背中のマントを追い回すアレル。

その姿は、まるで犬が自分の尻尾を追いかけて、
まわっているかのようなだった。

何回か試したところで、アレルはようやく諦めた。

「気は済んだの？」

面白そうに眺めていたエーデルが問いかける。
顔を顰めながら、アレルはそっぽを向く。

「もう良いわ。なんだか疲れたから、先に帰る。
アンタ達は？」

「ちょっと道具を買い足しに行つて来ます。
あと、日用品も買わないと」

「じゃあ、私も付き合っわ。
新しい虫除け香水を買わないとねえ」

空になった瓶を取り出すと、ポイツと放り投げる。
門番が厳しい視線を向けてきたので、

マタリが慌てて回収しにいった。

「あっそ。それじゃあ私は先に行ってるわね。

温泉も今日は良いわ。軽く流すだけにするから」

「先に食べないで待ってなさいよあ」

「分かってるわよ。ほら、さっさと行った行った!」

手をしっしつと振ると、アレルは宿へと向かって歩き出す。

エーデルとマタリは、肩を竦めると大通りの道具屋へ向かい始めた。

大通りにある、アレル達が馴染みとしている道具屋。

今回訪れたのもその店で、マタリ達の顔を見た店主は顔を綻ばせるが、その直後、なぜかガツカリした表情に変わる。

「やあ、今日はアレルちゃんと一緒にじゃないのかい?」

「疲れているみたいで、先に帰りましたよ」

「そいつは残念。あの見下される視線が堪らないんだけどなあ。素っ気無いけどどこか愛らしいあの顔。見れないなんて残念だ。ああ、本当に残念だ。今度サービスするって言うておいてくれよ」

うわぁ、と少し引きながら、マタリは分かりましたと答えておく。
愛想笑いが上手くできているか心配になりながら。

「馬鹿な事をいつてないで、さっさと会計を済ませて頂戴」

「いつもつれないネエ。そんなんだから彼氏が」

「うるさいわ」

杖で店主の頭を殴りつけるエーデル。

マタリが慌てて止めるが、強烈な一撃がヒットしてしまった。

「い、いたた。これも相変わらずだけど、毎度堪えるねえ。

さ、商売商売つと！」

頭を笑顔で擦りながら、商売を再開する店主。

頑丈な頭をしているようだ。

エーデルは杖の方を心配している。

「はい、代金です」

「1枚、2枚……10枚つと。確かに受け取ったよ。

毎度ありがとう！」

「それじゃあ失礼しますね」

挨拶をして立ち去ろうとするマタリたち。

ポンと手を叩くと、大事な話をするのを忘れていたと叫ぶ店主。

「そういえば！ ルイーダの酒場で小火騒ぎがあったそつだよ！

放火だったみたいで、騒ぎに乗じて盗みにはいった奴がいるって。マタリちゃん達も確か、あそこに泊まってたよね？」

マタリとエーデルはお互いに顔を見合わせる。

「そ、そんな肝心な話は、一番最初にしなさい!」

「い、いや。だってアレルちゃんがいなかったし。思わず気が動転しちゃってさ」

テヘへと薄くなり始めている頭を撫でまくる店主。反省している様子は全くない。

「この変態親父! その中途半端な髪全部燃やしてやるわ!」

「エ、エーデルさん。そんな事をいつてる場合じゃありません! 早く戻らないと!」

マタリの冷静な言葉に、我を取り戻すエーデル。憎々しげに変態店主を睨みつけるが、息を吐き出すことで抑える。

「……戻りましょう」

「はい!」

「毎度あり! 今度は必ずアレルちゃん連れて来ておくれよ!」

人でごった返すルイーダの酒場。

現場を検証している、教団兵の姿もある。

街の治安を守るのは彼等の仕事だ。

中に入ると、腕を組んで顰め面をしているマスター。

非常に機嫌が悪そうである。

対照的に、相変わらずの間抜け面で酒を飲んでいる冒険者達。

普段命を掛けている彼等からすれば、こんな騒動ぐらい大したことはないのだろう。

と、ルイーダが慌てた様子でマタリ達の下へ駆け寄ってきた。

「待ってたのよ！ アレルさんが大変なのよ！」

「どうしたのよルイーダ。そんなに取り乱して」

「小火が起きたのは、貴方達の部屋なの。

金庫が開けられて、中身が盗まれていたわ。

そのあと騒ぎが起きて大混乱なのよ！」

血相を変えて大声をだすルイーダ。

地団駄を踏んで、犯人に対する怒りを露にしている。

「そ、それで。犯人は？」

盗まれたものは無事なんですか？」

「怪しい行動をしていた二人が目撃されていてね。案の定、それから消息不明よ。」

早速手配が掛けられたわ。盗品はそいつらと一緒に。」

って、そんなことより!！」

マタリとエーデルの手を掴んで、2階へと駆け上がっていく。

どこか燻臭い通路。慌てて道を譲る酒場のスタッフ。

アレル達の部屋にそのまま駆け込むルイーダ達。

そこには。

「……アレルさん？」

マタリ達に背を向けながら、座り込んでいるアレル。

両手を忙しなく動かし、彼女達が戻ってきたことには気付いていないようだ。

「アレルちゃん。何が盗まれたの？」

私は、持てないお金ぐらいしか入れてなかったけど。」

エーデルが近づきながら声を掛ける。

反応はない。

ひたすらに手を床に這わせて、一心不乱に何かを掻き集めている。

「さっきからずっとこうなの。声を掛けても反応がないの。」

それに……」

言いよどむルイーダ。

不審に思ったマタリとエーデルはアレルの正面へと回る。

「ちよつと。返事くらい」

「ないの。本が。私の、大切な本が。
どこにあるのかな。どこにもないんだ」

虚ろな瞳で、独り言を呟いている。
床には何か『本』らしき物が燃えたような灰が散乱しており、
アレルはそれを、掻き集めていた。
風が入り込む度に、灰は散らかるが、
アレルは目に入らないかのように、ただ手を動かしている。

「ない。あれがないと、私は駄目なんだ。
私が、私であり続けるためには、あれがないと。
ねえ、マタリさんと、エーデルさんも探してくれる？
お願いだから」

「アレルさん、一体どうしたんですか!？」

『さん』づけで呼ばれたマタリは、
ただごとではないと、アレルの身体を掴む。

「ああああああアアアアアアアアアアアッ……!!……!!……!!
痛い痛い痛い痛い痛い……!!
身体が痛いよ! 全身が裂けるように痛い!

内臓が抉られて、焼け爛れるように痛い！！
なんで私がこんな目に！！ どうして、どうして!?!」

マタリが身体を掴んだと同時に、アレルは悲鳴を上げる。
両手で身体を抱きしめ、涙をボロボロとこぼしながら。
痛い痛い、赤子のように泣き叫ぶ。

「お、落ち着いてください！
今、探してきますから、だから落ち着いて」

「痛い、痛いんだよ！！ 耐えられない！！
私じゃ耐えられない！！
私には耐えられないんだよ！！」

手を伸ばしたマタリを振り払い、思い切り突き飛ばす。
震える手で、腰に刺している『鋼の剣』を抜き放つと、
おもむろに自分の喉を斬り裂こうとするアレル。

マタリは驚愕のあまり、阻止することが出来なかった。
白刃がアレルの首筋を引き裂かんとするその瞬間。

エーデルの『催眠』魔法が発動する。
杖をアレルへと向け、呪文を早口で詠唱し続ける。
対象の至近距離まで接近し、効果が発動するまで詠唱し続けなければならぬ。

制約が多い為、戦闘には不向きなこの魔法。
先程からエーデルは催眠魔法の詠唱を行っていたのだ。
落ち着かせるのが肝心と、エーデルが準備していたのが幸いした。

「あ、ああ」

「水の精霊よ。彼女に一時の安らぎを。

ウォータークレイドル
水の揺籠」

力を失うと鋼の剣を落とし、そのまま眠りに落ちるアレル。

マタリは倒れこむその身体を受け止める。

余りに軽いその身体に、マタリは驚きの声を上げる。

「こ、こんなに軽いなんて」

今までは気づかなかったが、余りに軽すぎる。

この小さな身体で、たった一人でオークの軍勢を滅ぼしたなど、俄かには信じられない。

「マタリちゃん。とりあえずベッドに移しましょう。

ルイーダ。他の部屋を借りるわよ」

「え、ええ。すぐに僧侶ギルドに連絡するから。

本当にごめんなさい」

「悪いのは犯人でしょう。とにかく、今は安静にさせないと」

「さあ、行きましょうアレルさん」

マタリに抱きかかえられ、アレルは別室へと運ばれていく。

エーデルは部屋を調べると、紙切れを見つけた。

アレルが毎朝欠かさず読んでいたあの、『白紙の本』

その特徴的な表紙の切れ端。

（誰かが忍び込んで、金を盗むついでに、『本』を燃やして行った。……逆か。『本』を燃やすついでに、盗んで行ったのか）

エーデルは切れ端をポケットに入れると、アレル達を追って部屋を後にする。

窓から強い風が入り込むと、集められていた『黒い灰』は勢い良く舞い上がり、塵となって霧散していった。

・アート家当主 レケン・アート

現アート家当主。『魔力の器』を持ち、父から英才教育を受ける。3人兄弟で、長男がレケン、次男シダモ、腹違いの妹にマタリがいる。

幼少時は非常に仲の良い兄弟であったが、歪んだ教育を受け続けた

た為、

徐々にマタリを妾の子として差別するようになる。

20代半ばにして当主の座を引き継ぐと、すかさずマタリを一族から追放する。

そして弟のシダモを、地方に存在する分家に追いやった。

誰に対しても傲慢な態度で接するため、人々からは蛇蝎の如く嫌われている。

没落したアート家を立て直すために奮闘するが、全ては徒労に終わった。

その後は家に籠り、ひたすら研究に打ち込んでいる。

G・アートの魔導書を完全に習得し、数々の結界魔法を駆使する。

『僕達がアート家を立て直すんだ。シダモ、マタリ、一緒に頑張ろうな』

・性格が変わる本

性格が変わる本が欲しい？

はは、そんな物ある訳がないでしょう。

……どうしても欲しいと仰る。

ではこちらはいかがですか？

これは『自己暗示』を掛ける本ですよ。

中身は全ページ白紙ですがね。

この本を心を空っぽにして開きながら、

自分のありたいと思う姿を浮かべるんです。

そして、これが本来の自分であると、思い込むんです。
どうです、簡単でしょう。

え、じゃあこの本はいらないじゃないかって？
そんな、ひどい。

第二十四話 壊れた精神（後書き）

起承転結の『転』。

上手く転ばすことが出来たでしょうか。

ちよつと後半を付け足すかもしれない。
少し足りない感じだ。

大物になりたい人達。

彼等の夢は果たして叶うのか。

第二十五話 勇者とオルテガ

「……そう。貴方はたった一人で戦ってきたのね」

「うん。私には仲間はいないから。

だから、そうするしかなかった。

でも、私は勇者だから。逃げられない。

皆の為に、最後の最後まで戦わなくちゃ」

「……それで、『虹の雫を』手に入れた後は、どうしたの？」

「大魔王ゾーマの城へ。

私一人で。これが最後だから」

「一人で怖くなかったの？」

「勿論怖かった。でも、私は大丈夫。

だって『勇者』だから」

魔王の居城がある島を眺めながら、アレルは王者の剣を大地に突き刺す。

そして袋から『虹の雫』を取り出した。

いよいよ最後の戦い。大きく息を吸い込み、胸一杯に溜めた後、ゆつくりと吐き出していく。

泣こうが喚こうが、これが最後だ。

もう死ぬつもりなどない。両手両足を落とされても、最後まで戦い抜く。

どんなに無様であろうと、最後に立っていた者が勝者だ。

道具は万全。装備はオリハルコンから作り出した『王者の剣』。

地下洞窟で手に入れた、妙に手に馴染む『盾』。そして愛用の『刃の鎧』。

兜は敢えて身につけていない。

アレルが切り札として用意した物の為だ。

「……さて、いくか」

アレルは闇に包まれた空目掛けて、『虹の雫』を放り投げた。

七色の光りが迸り、岬から岬へと橋が掛かる。

虹の橋。光輝く聖なる橋。

闇に覆われた世界だから、余計に眩しく感じる。

アレルは少しだけ目を細め、苦笑する。

（敵に見つけて下さいといわんばかり。

いつも通り、正面突破しかないか）

アレルは王者の剣を引き抜くと、ゆつくりと歩き出す。

深い闇の源。大魔王ゾーマの城へ向かって。

アレルは警戒しながら門に突入する。
入り口周辺は不気味な程静まり返り、魔物の気配はない。
剣を構え、足音を立てないように歩く。
消耗は出来る限り避けたい。
討ち取るべきはゾーマの首ただ一つ。
他の有象無象など最早どうでも良いのだ。

(……………静か過ぎるわ。罨か?)

アレルが疑念を抱き始めたところで、辺りの様子が変わり始める。
削り取られた壁、叩き潰された魔物の死体、飛び散った血痕。
戦闘の形跡が至る所に現れ始めた。

何者かが、既に侵入し奥へと向かっているようだ。
魔物の姿がないのは、その対応に追われているのかもしれない。
何にせよ、またとない好機。

「絶好のチャンスって奴かしら。
誰だか知らないけど、命知らずが露払いをしてくれてるみたい。
……………一気に行くわ」

アレルは即断し、全力で駆け始めた。

稀に襲い掛かってくる魔物達を、アレルは一蹴していく。
ドラゴンゾンビは二度と復活できないように、完全に粉碎する。
トルキングは憎悪を籠めて、脳髓に剣を突き立てる。
哀れな王は、口から醜い呪詛を唱えながら地獄へと墜ちていった。
即死呪文を唱えるバルログは、二度と喋ることが出来ないように、
喉を捻りつぶしてやった。
死の寸前の、驚きと絶望の表情。
アレルは口元を歪めて、それに応える。

隠し階段を見つけ出し、回転する床のトラップを掻い潜り、
アレルはさらに奥へと進む。
道中の宝箱にはミミックが仕掛けられており、腹いせに箱ごと踏み
潰してやった。

たとえ中身があつたとしても、呪われた装備の可能性は高いが。
地下4階までたどり着くと、景色が突如として一変する。
湖の上に敷かれた橋。所謂地底湖を利用して建てられたようだ。
一歩踏み出すと、哀れなドラゴンの死体が横たわる。
頭部を勢いよく踏み潰しながら、アレルは前進する。

橋を渡り始めると、前方の暗がりから炸裂音と、怒声が聞こえてく
る。
アレルが集中して気配を探ると、何者かが巨大な何かと戦っている
ようである。
まさか魔王軍で同士討ちなどする訳もない。
ということとは、露払いをした誰かが戦っているということだろう。

アレルは応えようとしたが、視線を奥へと向ける。満足したキングヒドラが、立ち去ろうとしているのだ。

「……話は後で聞くわ。今はアイツを殺すのが先よ。分かったら、そこで休んでなさい」

アレルは立ち上がる。

男はなお話を続けている。

もう目も見えず、耳も聞こえないのだろう。

「も、もし、誰かいるのなら、どうか、伝えてほしい。

私は、アリアハンの、オル」

アレルはその言葉を最後まで聞かずに、一直線に走り始めた。

狙うは無防備な化け物。まずは首を落とす。

キングヒドラの頭上へと跳躍すると、首元目掛けて白刃を振り下ろした。

血を撒き散らしながら、首が落ちる。

「そらっ！」

それをアレルは湖目掛けて、全力で蹴飛ばす。

目的地へ飛び立つ前に、首はその場で四散した。

「グ、グギャアアアアアアアアアアアッ!!!!」

一拍遅れて、キングヒドラが苦痛の叫びを上げる。

首は4つまで討ち取られ、残るは中央の首唯一つ。

首が存在していた場所からは、夥しい体液が噴出し続けている。

「無様な姿ね。ヒドラの王の癖に、みつともない。ねえ、そろそろ死んだらどう？」

王者の剣を軽く振り、付着した体液を振り落とす。

キングヒドラは怒りと憎しみに満ちた顔で、アレルを睨みつける。

「睨みつけてるだけじゃ勝てないわよ。私も飽きてきたし、もう良いでしょ？」

「そのまま死ね！」

腰を落とし、力を溜めるアレル。

キングヒドラは最後の力を振り絞り、灼熱の炎を吐き出した。

完全に予測していたアレルは、前方に飛び込みながら回避して、懐へと飛び込む。

首の付け根に突きの一撃。

そのまま上に跳ね上げて、長い首を縦へと切り裂いていく。

ヒドラの王は、形容し難い悲鳴を上げる。

「最後の首、貰ったわ！」

アレルが剣を引き抜き、回転しながら振り払う。

主を失った巨大な胴体は、激しい音を立てながら崩れ落ちていく。空中に勿ね飛んだ首を乱暴に掴むと、アレルは一度だけ息を吐き出す。

息絶えた化け物から、先程の男へと視線を向ける。

壁を背もたれにしていた男は、力なく横へと倒れていた。

アレルは男の下へと、ゆつくりと歩いていく。

近づくに連れて、嫌な臭いが漂い始めるのを感じる。

「ほら、アンタの戦ってた化け物。

全部の首を落としてやったわよ」

アレルは首を男の下へと放り投げる。

反応はない。微動だにしない。

男は死んでいた。

体中から煙を出しながら。

鎧は溶け、肉体と癒着してしまっている。

アレルは顔を覗き込む。

表現しがたい、すべきではない有様。

この男が、誰なのかなど、もう誰にもわからないだろう。

アレルは剣を鞘に収める。

目障りなヒドラの首を鞘で払いのける。

「……たった一人でここまで来たんじゃない。もうすぐ。本当に、後もうすぐだったのにね」

返事はない。男は死んでいる。

「火山に落ちて、大穴に落ちた拳句、
更にはでこんな場所まで一人でやってきた。
勇者でもないのに、何を考えているのか」

返事はない。男は死んでいる。

「特別に連れて行ってあげるわ。ゾーマの所まで。
特等席で、大魔王がくたばるところを見届けなさい」

返事はない。オルテガは死んでいる。

アレルは亡骸を肩に抱えようとしたが、少し躊躇する。
自分が身に着けているのは、刃の鎧。
このままでは、鋭利な刃が死体に刺さってしまうだろう。

「……………」

アレルは少し考えた後、男を床に横たわらせる。
そして、骨がむき出しになっている腕を掴んで、
そのまま地面を引き摺り始めた。
柔らかくなった皮膚が、掌に張り付く。
嫌な感触だ。未だに熱を持っている。

徐々に、アレルの顔が歪み始める。
歯を食いしばり、耐える。

（ 重い。本当に、重い ）

足取り重く、アレルは暗闇の中を突き進む。
もう間もなく。全てに決着が着く。

「あの人は、オルテガだったんです。
私の父、アリアハンの英雄オルテガ。
私は、敵を殺すことを優先した為に、
父の最期の言葉を聞くことが出来ませんでした」

虚ろな瞳で、アレルは淡々と話し続ける。
ベッドに力なく座りながら。

「後悔しているの？」

「どうでしょうか。良く分かりません。
私は自分の事が、良く分からないので。
悲しいのか、それともそうではないのか。

私には分からないんです」

「……………少し休憩にしましょうか。
朝からずっと、喋りっぱなしよ。
そろそろ疲れたでしょう」

エーデルがペンを置いて、提案する。

アレルは首を振り、更に話し続けようとする。

「別に疲れてないです。お願いします、聞いてください。
あの人の腕、肉が爛れて、骨が見えてたんです。
骨は白いのに、黒く煤けている骨が」

「アレルさん、お薬を。興奮しては身体に」

マタリが薬を飲ませようとする。

それを振り払うと、声を大きくして、アレルは続ける。
視線は誰も見ていない。

「私は延々と引き摺りながら、その姿を見ていたんです。
皮が剥がれ、肉が裂け、あの人の淀んだ視線は私を睨んでいる。
もし、その手が私を掴んだら。そう考えると恐ろしかった。
でも、私はその腕を離さなかった！
だって、だって、あの人は、私の」

両手で顔を押さえて慟哭する。

「眠りなさい。何も考えずに、心安らかに」

「……………わ、私は」

昏迷状態に陥ったアレルに、エーデルは催眠の魔法を唱える。しばらく身体を震わせていたが、やがて静かになり、深い眠りに着く。

「……………今日はお終いにしましょう」

椅子から立ち上がり、終了を告げる。

「本当に、これがアレルさんの為になるんですか？」

「勿論そうよ。私の知的好奇心を満たすために、こんな面倒なことをしている訳じゃないわ」

「……………本当にそうでしょうか。」

人の過去を、無遠慮に暴いているだけじゃないんですか！これが正しい事だとは思えません！！」

感情を籠めずに、言葉を返すエーデルに、マタリは激昂して食って掛かる。

「静かにしなさい。起きてしまっわよ」

「ッ！」

「隣で話しましょうか」

返事を待たずに、エーデルは隣室へと移動を始める。マタリも少し距離を置いて、その後が続く。

重い空気の室内。

エーデルは水差しを取り出し、喉を潤す。

「今は、私の催眠と『薬』が効いて、彼女は何とか平静を保っている。

でも、いつまでもそういう訳にはいかないでしょう。

原因を突き止めて、それに対処しなければ意味がない」

「で、でも。それは僧侶ギルドの人に任せれば」

「何言ってるの。あいつらは『痛み止め』を置いてっただけじゃない。

肉体の傷は癒せても、精神の傷は彼等には癒せないわよ。

むしろ、魔術師ギルドの方が頼りになるわ」

「……………」

「じゃあ、名案があるなら聞かせてくれる？」

古傷を暴かずに、元のアレルちゃんに戻す方法。

あの本と同じ物でも探してみる？」

「あ、あの本は……………」

マタリが言葉に詰まる。

同じ物などある筈がない。

「そもそも、元に戻すのが正しいのか。

それとも、この状態こそが正しいのか。

私にはとても判断できないわ」

エーデルは手帳を閉じて、深く嘆息する。
精神の分野は専門外だ。

師のラスが正常な状態のままだったら、きっと助けになっただろう。
様々な分野の知識を収めている、博識の魔術師であった。

「どちらも、アレルさんなのではないでしょうか。

だから、その」

そこで、言葉を切る。

「このまま放っておくと。まあそれも一つ的手段ではあるかしら。
自殺しないように、常に見張ってないといけないけれど」

暫し沈黙が流れる。

エーデルは、再び水を口に含んでいる。

マタリが、呟くように話し始めた。

「……アレルさんは、この世界を救った勇者だったんですね。
どうして今の時代にいるのかは分からないですけど」

「世の中分らないことだらけよ。だから勉強するのよ。
まあ、本人に聞けば分かるでしょうね」

そうですね、とマタリは相槌を打つ。

「世界を救った伝説の勇者。私の想像していた英雄譚とは違いました。
た。

仲間と力を合わせて、苦難に打ち勝っていく。
最後は魔王を倒して、平和な世界で幸せに暮らす。
苦しんだ分だけ、幸せにならなきゃおかしいじゃないですか。
絶対に、おかしいです」

「人生そんなものですよ。現実と物語と違うわ。
……ルイードのを見せてくれた肖像画。あれは正真正銘本人だったって訳ね。」

作られた英雄達。為政者に都合良く作り替えられたってところから良くある話だけど」

「……納得できません」

「もう遅いわよ。そうなってしまったのだから」

エーデルは冷たく言い放つ。

マタリはそれに答えることなく立ち上がり、退出しようとする。

「どこに行くの?」

「……食事の準備を。ルイードさんに貰ってきます」

「そう。私は調べ物をしに家に戻るから、少し留守にするわ。
後はよろしくね。マタリちゃん」

エーデルは軽く手を振ると、マタリを追い越して部屋から出て行った。

アレルの眠る部屋に、羽根付き帽子をつけた少女が訪れる。
以前の花柄のローブではなく、白いワンピース姿で。

そっと足音を立てないように、忍び足でアレルの下へと近づいていく。

傍にある椅子に飛び乗って座る少女。

安らかに眠る、アレルの表情を眺めると少しだけ微笑んだ。

「やれやれ。いつかこうなると思ってたけど、まさかこのタイミングとはね。」

これが晴天の稲妻ライティンって奴？　なんか違うかな」

つんつんと、アレルの頬を突く。

「元の世界に帰るかどうか、本人に直接聞こうと思ってたんだけどなあ。」

もっと早く聞いておくべきだったよ。ごめんね」

返事はない。

「ルビスは相変わらず口喧しいし、もううんざりさ。」

あの女はもう一度封印された方が良くないかなあ。

あ、今のはルビスには内緒ね」

少女の背筋に、少しだけ寒気が走る。

思わず鳥肌が立ってしまった。鳥だけに。

悪口には敏感なので、聞き取っていたのかもしれない。
そんなことは出来るはずはないのだが。

「この街は、キナ臭い感じがするし。

嫌な気配がプンプンするよ。

なんだか面倒くさいことになりそうだなあ」

まいつか、と呟いて少女は椅子から飛び降りる。

袋から羽根を取り出すと、アレルの横へと置いた。

キメラの翼ならぬ、由緒あるものだ。

「はい、お守り。伝説の不死鳥の翼だよ。

そうそう、アレルはもうすぐ『戻る』と思うよ。

戻されるとも言うのかな。

これは、野生の勘だけど」

翼でアレルの鼻をこすると、くすぐったそうにする。

「アレルにとっては、どっちが幸せなんだろうかね」

と、少女は呟いた。

返事を待たずに、少女は部屋から飛び出していく。

来るときとは違い、ドタバタと盛大に足音を立てて。

階下から、目を丸くしてやってきたマタリに得意気に微笑みかける
と、

羽ばたくように駆け抜けていった。

地下迷宮95階のとある部屋。

背教者を完全に滅すべく派遣された異端審問官と治安維持隊は数多の魔物に重囲されていた。

もたらされた情報では、ここに異端共の礼拝堂が存在するはずだったのだ。

だが、隠し部屋に進入した先に待っていたのは、魔物達の容赦のない洗礼。

先行した審問官は悉く皆殺しにされた。

待機していた者達も窮地にある。

『魔物召喚』の罨が張ってあったらしく、四方の通路から大小様々の魔物が押し寄せてくる。

精鋭である審問官達は、イコナの号令の下、冷静に隊列を組みなおしそれを迎え撃った。

だが、数が違う。違いすぎるのだ。

1殺している間に、10後方から現れる。

通路で『狭さ』を利用して迎撃していた彼等も、徐々に中央へと追いやられていく。

「イコナ様！ これ以上は持ちこたえられません！

数が違いすぎますッ！！」

悲鳴のような報告がイコナの耳に入る。

歯軋りするイコナだが、戦況を冷静に判断し、最善の策を採用する。

「止むを得ん、星石の使用を許可する！ 全員撤収しろ！」

「了解しました！」

「撤収する！」

全員、懐から『星石』を取り出し、頭上に翳す。

……しかし、何も起こらない。

「な、何故なにも　グアアアッ！！」

トロルの棍棒が、隙を見せてしまった僧兵の頭部へと直撃する。
赤い液体を撒き散らしながら、僧兵は胴体だけを痙攣させていた。

「取り乱すな！ 何かしらの力で無効化しているのだろう！
円陣を崩すな、全滅するぞ！」

一喝しながら、イコナは攻撃魔法をトロルに放つ。

トロルの顔面は氷柱で串刺しにされ、立ったまま絶命した。

「し、しかし　」

「エレナ様の為に死ぬのだ。何を恐れることがあるか！
全員使命を果たせ！！ 我等の誓いを思い出すのだ！！」

『教祖エレナの為に異端を殺し、教祖エレナの為に命を捧げる』

恐慌状態にあつた審問官達は、己の信仰を取り戻す。そして、全員最後の一兵まで戦い続けるのだ。各自が最善を尽くして、魔の大群相手に奮戦する。剣を振るい、杖を翳し、槍を突き刺す。数々の異端を滅ぼしてきた実力は飾りではないのだ。魔物の死体が積み重なっていく。赤き魔物相手には、数人掛りで対処する。魔法が効かないため、直接攻撃を挑むしかないのだ。

「他の魔物まで変異していやがる！」

「悪しき魔物め！！」

「畜生、キリがないぞ！！」

体力、気力に限界がきた僧兵の一人が魔物の群へと突進していく。

「陣形を崩すなッ！！ 入り込まれ　！！！」

彼等は勇敢に戦ったが、限界は必ず訪れる。

円陣の一角。小さな穴が開いた瞬間、魔物達は一気に雪崩れ込んだ。そうなれば最早少数の人間に勝ち目はない。

乱戦で有利なのは、数に勝る魔物なのだから。

ネズミに体中を引き裂かれる審問官。

赤いオークに、盾ごと真つ二つにされる僧兵。

魔法を唱えながら、蟲に身体を食われていく者もいる。

下層で戦えるレベルの、約200名の教団精鋭達は、こうして壊滅していった。

最後に残ったのは異端審問官長イコナ。

自らの周りに、氷の結界を張り、魔物を全く近づかせない。

魔法態勢を持つ、赤い魔物は結界で足止めすることに成功した。

(例え一人になろうとも、任務は遂行する。

必ず機会は訪れるはずだ！)

周囲には氷柱の弾幕を張り、もがく魔物を串刺しにしていく。味方がいなくなり、巻き込む心配がなくなったので、皮肉な事に強力な魔法を使えるようになったのだ。

「全てを打ち抜え、氷針!!!」
アイスードル

「焼き払え、炎弾」
ファイアバレット

イコナのばら撒いた氷の弾幕を、同じ数の礫で撃ち返す。

深い闇から現れたのは、大司教イルガチエフ。

闇の衣を纏い、尊大な態度を取っている。

禍々しいオーラが自然と放出され続ける。

「イコナよ。そろそろ観念したらどうだ。

部下達は、既に逝ってお前の到着を待っているぞ」

「背教者イルガチエフ！ その首貰い受けるッ!!!」
アイストルネード
最上級氷嵐魔法!!!」

イコナは杖を叩きつけ、全魔力を注ぎ込んだ一撃を放つ。
不足している詠唱時間の代償として、己の生命力を引き換えとする。

（我が命に代えても、この異端だけは殺す！！）

「……愚かな」

「黙れ異端め！ 裁きを受けよッ！」

氷の礫を纏った強大な嵐が荒れ狂う。

巻き込まれた魔物は、身体を引き裂かれ、氷の礫に撃たれ、奇声を上げながら絶命していく。

赤き魔物達は、ダメージを受けてはいないが、風で身動きは取れていない。

だが、イルガチェフには効果がない。

礫を寄せ付けず、風の影響すら受けていない。

あまりの実力差に、イコナは絶句する。

以前のイルガチェフとは明らかに違う。

レベルが違いすぎると。

これが『闇の衣』の力なのか。

「哀れだなイコナよ。従うべき者を間違えた末路がそれだ。

それほどの実力がありながら、余りに惨めな最期だ。

恨むなら、愚鈍なエレナを恨むが良い。

直ぐに貴様の後を追わせてやるっ」

「戯けたことを！ 最後まで私は戦い抜く！
エレナ様万歳！ エレナ様に栄光あれ！」

「ふん、では饞別に面白いものを見せてやろう。
我が闇の力の一片だ」

イルガチエフがゆっくりとした動作で、指を向ける。

瞬間、凍てつく波動が迸り、イコナの展開していた結界を霧散させた。

容易く結界が消滅させられたことに、イコナは我を失う。

「ば、馬鹿な。わ、私の結界が」

「ロストスペル、マヒヤド！」

「ロストスペル！？」

両手を雄大に翳すと、頭上から氷の礫がイコナへと殺到する。
先程のものと同様か、それ以上のもの。

イコナが生命力と、全魔力をかけた魔法を、無詠唱で放ったのだ。

氷の礫は魔術師を貫き、肉を裂き、骨を砕いていく。

最後に一際巨大な氷塊が炸裂すると、イコナは物言わぬ肉塊となつた。

「フフ、フハハハハハハ！」

私を追い続けた愚か者達は、全員殺したぞ。

いよいよだ。いよいよ私の時代が始まる。

闇に包まれた、呪われし時代の幕開けだ！」

肉塊を、何度も何度も踏みつける。
緑のローブは血で赤く汚れてしまったが、今更気になることはない。
いずれ『赤き衣』を継承するのだから。
イルガチエフの哄笑は、いつまでも響き続けた。

その直後、最下層部から地上を目指して、
魔物達の行軍が開始された。

ツキのない冒険者は、その波に飲み込まれ、
ツキのある冒険者は、間一髪で脱出することに成功する。
脱出に成功した者達は、すぐに協会へと駆け込み、
以下のように迷宮の異変を報告する。

魔物達が、隊列を組んで動いている。
オークだけではなく、様々な魔物が『赤』に変異している。
縄張り争いなどではなく、確実に上層を目指している。

下層部で探索任務に就いていた、各国騎士たちは、
手に入れた『星遺物』と共に、その屍を晒すこととなった。
彼等にはツキがなかったのだ。

地上到達まで、後二日。

第二十五話 勇者とオルテガ（後書き）

迷宮から、虫がうじゃうじゃ出てきたら怖いです。

イメージ的には、蟻の巣。

黒いのや赤いのがウジャウジャと。

第二十六話 勇者の挑戦

偉大なる大魔王へと贄の魂が捧げられる、『生贄の祭壇』。
その台座の上には、目を剥いて舌を長く垂らしたまま絶命している
魔物の姿がある。

かつてアレルが打ち倒した、魔王バラモス。
その姿に瓜二つの巨大な魔物だった。

アレルは台座まで貫いた王者の剣を、魔物を踏みつけて引き抜く。
そのまま飛び降りると、後方を振り返る。
そこには、腐り墜ちた身体で、尚も動こうとする巨体の姿があった。

「今回も、私の勝ちね」

「……そのようだな。」

このような醜態を晒してまで、蘇ったのだが、
どうやら徒労に終わったようだ」

立ち上がるうとしていた屍だったが、
ようやく諦めたのか、顔だけをアレルに向けた。
魔王バラモス。アレルとの約束を果たすために、蘇り、
そして、再び打ち負かされた。
彼に残された時間はもうない。

「でも、紛い物よりは手強かったわ。
執念がアンタのその身体から、痛いほど伝わってきた。
私に、必ず勝利するという強い意志」

剣を鞘に収める。

もう戦いは終わっている。

「フフ。その結果がこの有様だ。だがもう良い。少し疲れた。一度死んだ身には少々堪える」

バラモスの身体が、徐々に風化していく。魔力が尽きて、肉体を維持することができなくなっている。アンデッドの末路。塵は塵に。灰は灰に。

「……すぐに、大魔王も送ってやるわ。精々地獄で仲良くやりなさい」

「クク、相変わらず、口の悪い娘だ。ゾーマ様の恐ろしさ、その身をもって味わうが良い。必ずや、貴様を髑り殺しにしてくださいさるはずだ」

「それは楽しみね」

アレルは少しだけ微笑んだ。バラモスの空虚な瞳に光りが灯る。

胴体は既に消失している。残るのは頭部のみ。

「一つだけ、言うておく。赤き衣のアークマージには、気をつけることだ。姦計で貴様を葬ろうと、画策していたからな」

思いがけない言葉に、アレルは目を丸くした。こいつは何を言い出すのかと。

「アンタ、そんな助言みたいなこととして言い訳？
仮にも魔王だった奴でしょ」

「あのような者に、貴様を討ち取られては、バラモスの名が地に墜ちる。

貴様を討ち取るのは、偉大なゾーマ様でなければならぬのだ」

「あつそ。まあ良いわ。私はそろそろ行く。

大魔王も、首を長くして待ってるだろうからね」

「……………」

アレルは、石柱に寄りかからせていた男の亡骸を引き摺り、先へと進もうとする。

「それじゃあね。いずれ、また」

「いや、もう、次はない。

……………さらばだ、勇者アレル」

最期の言葉を交わすと、アレルは振り返らずに足を踏み出した。バラモスの身体は完全に崩れ落ち、夥しい量の灰と塵だけが残された。

もしも、自分がバラモスの誘いに乗り、魔王軍に降っていたとしたら。

世界は一体どうなっていたのだろう。

勇者が魔王になる未来もあったのだろうか。

そんなことを、アレルは少しだけ考えると、苦笑した。

薬草を貪り、魔法の聖水を一気飲みして空瓶を投げ捨てる。いのりの指輪も数え切れないほど用意した。確実に長期戦になる。アレルは確信していた。

暗い地底湖を更に進むと、開かれた場所に辿りつく。

アレルを誘い込むように、道を作り出すように燭台が炎を照らしている。

時折吹き込む生暖かい風が、炎を揺らす。

警戒しながら周囲を確認し、一歩ずつ着実にアレルは進む。

道の果てには、豪華な玉座があった。

恐ろしいまでの濃密な殺気、威圧感が辺りを包んでいる。

(……いよいよか。これで、終わる)

アレルは唾を飲み込むと、掴んでいた死体を、近くの燭台へと寄りかからせる。

勇者と大魔王の最後の戦い。これ以上の特等席は、存在しないであろう。

感情の籠らない、濁った声が響く。

「……我が下僕たちはどうした？」

「全員死んだわ。私が殺した」

淡々とアレルは返事をする。

剣を抜き、大魔王ゾーマへと切先を向ける。

「実に使えぬ駒共だ。腕一本すら取れぬとは」

「アンタにお似合いの部下達よ」

ゾーマは愉快そうに笑い声を上げる。

アレルも笑みを浮かべた。

「そろそろ始めるとしようか。

最強の人間、勇者アレルよ。

貴様を始末すれば、我が道を遮る物は何も無い」

玉座から立ち上がり、アレルを見下ろす。

様々な模様が刻印されたローブを纏い、手に魔力を迸らせる。戦闘態勢は整っているようだ。

「我が名はアレル。勇者アレル。

大魔王ゾーマ、覚悟！！」

両手を前方に掲げるゾーマに、アレルは一直線に走り始めた。

右手に王者の剣、左手に盾と、ある物を隠し持つて。

星降る腕輪の効果が発動し、瞬発力は上昇している。

「アレルよ、何故もがき、生きるのか。

滅びこそ我が喜び。死に行くものこそ美しい。
さあ、我が腕の中で息絶えるが良い！！」

ゾーマの身体から、『闇』が噴出し始める。
禍々しい気配、憎悪と怨嗟の声が聞こえてくる。

これがゾーマの『闇の衣』だ。

目にしただけで、相手に畏怖を与える黒いオーラ。

ゾーマの肉体を強化し、魔力を格段に高めるものでもある。

「これが噂の闇の衣か。確かに厄介みたいね」

「喰らえいつ！！」

凍える吹雪が放たれる。

盾で防ぐが、完全には遮ることが出来ない。

アレルの足が止められる。

更に、凍てつく波動で、アレルの身体は吹き飛ばされた。

同時に、手に隠し持っていたものを、全力で投げつける。

『光の玉』。闇の衣を打ち破ることが出来る、ただ一つのもの。

玉が闇に飲み込まれると、まるで太陽のような神々しい光りを放つ。

闇の衣は、たちまに光に切り裂かれ、跡形もなく四散した。

「ほう。我が障壁を破る術を知っていたとはな。

しかし無駄なことだ。さあ、アレルよ。

足掻き、苦しみ、苦痛にのたうち回りながら、絶望の中で死ぬが良
い」

役目を終えた光の玉を、ゾーマは不愉快そうに踏み潰す。剣を構えるアレルの背後に転移すると、魔力を籠めた手刀を振り下ろした。

「い、いつの間に！ きゃああああッ！！」

回避出来ず、地面へと叩きつけられるアレル。その上から、何度も何度も踏みつける。

背骨をへし折るつもりで、ゾーマは攻撃を繰り返す。

鎧の刃がゾーマの足を傷つけるが、全くダメージを与えてはいない。

「つぎけんじゃないわよ！！」

アレルが王者の剣を繰り出すと、真空の刃が周囲に展開される。少し怯んだ隙を突き、アレルは死地から脱出した。

いや、したはずだったのだ。

先回りしたゾーマの凶刃が、アレルの胸を貫く。魔力の籠められた手刀。正確にアレルの急所を捉えていた。口から血を吐き出す。ゾーマは返り血を浴びて、愉悦の表情を浮かべた。

大魔王に武器など必要ない。

膨大な魔力こそが、最強の凶器となるのだから。

「もう終わりか？ だがこのまま死ねると思うな」

「あ、アア……」

腕を引き抜き、小さな頭部を掴むと、全力で側壁へと投げつける。

重く鈍い音と共に、衝撃で瓦礫が崩れ落ち、アレルの身体は半分埋め尽くされる。

「私の怒りは、簡単には収まらぬ。

このまま殺しても、貴様は忌まわしき『ルビスの加護』により蘇るのだらう。

ならば、ここで精神と肉体を薙りつくして、

二度と立ち上がる『意志』を持ってぬようにしてくれるわ!!」

ゾーマの苛烈な拷問が開始された。

瓦礫まみれのアレルに対し、ゾーマはマヒヤドと吹雪を連続で繰り出し続ける。

アレルはベホマにより、傷口を塞いだが、為す術がない。

繰り返される氷の猛威に、身動きが取れないのだ。

防御に専念し、隙を伺うが、機会は訪れない。

ゾーマには隙がない。

アレルが行動すると、その倍の攻撃をゾーマは繰り出してくるのだ。守っているには勝てない。それは分かっている。

だが、攻撃に出られないのだ。

回復、防御の繰り返し。アレルの精神力は消耗されていく。

「う、うつつッ」

「凍り付くが良い！ マヒヤド!!」

「あああああああ!!」

左手の感覚がなくなる。

盾を持っているのかどうかさえ分からない。

今のアレルに出来るのは、堅く身を守るだけだ。

氷の猛威が過ぎた後は、ゾーマの烈火の様な攻撃が繰り返される。アレルが回復するのを見計らい、痛みを与えることを重視した打撃が放たれる。

肩は砕かれ、両腕は押し折られ、目は抉られた。その度に、アレルはベホマで再生する。

「まさに化け物だな。貴様が人間なのが実に惜しい。バラモスが誘いを掛けるのも頷ける」

「……………」

まさか自分に、誘いを掛けるつもりだろうか。

アレルは訝しげに眉を上げる。その間に回復も行いつつ。

答えは当然決まっている。『否』。

勇者は最後まで戦うのだ。

「だが、我が部下には必要ない。

人間は一人残らず殺す。我が闇の世界には不要な存在。

ただ、絶望にのた打ち回って死ねば良いのだ」

アレルの首を掴み、力を籠める。

苦悶の声を上げながらも、アレルは回復呪文を唱える。

首を掴んだまま、ゾーマは壁に向かって走り始めた。

顔をそのまま叩きつける。

何度も何度も、叩きつける。壁には赤い血痕がびっしりとこびり付いた。

常人であれば、既に肉体は粉碎されている。

反応がなくなつたのを確認したゾーマは、放り投げた後に距離を取る。

油断はしない。精神を崩壊させるまで、ゾーマは拷問を続ける。

アレルは意識を失いそうになるのを、何とか堪える。

小刻みに震える手で、腰の袋に手を伸ばす。

（ つ、強い。普通じゃ勝てない。

今の私には、攻撃の機会すらない。

こいつの攻撃には、隙がない）

袋の中の、ある物を力強く掴む。

掴んだ掌から、嫌悪感が身体中を覆い尽くす。

煮え滾る、負の力が直に伝わってくるのだ。

（仕方がない。勝つためには仕方がない。

もう、これしかない）

ゾーマに背中を向けたまま、アレルはそれを顔へと装着する。

意識が混濁する。

殺意が満ち溢れ、憎悪で精神が塗りつぶされる。

どこまでも黒く、そして視界は赤に染まる。

「マヒヤド！！」

呪いの面の効力が、直ぐに現れる。

ゾーマの放った呪文を、人間離れた俊敏な動きで掻い潜り、落ちていた王者の剣と盾を回収する。

驚きに目を見張ったゾーマが、凍える吹雪で牽制するが、それを物ともせず、アレルはゾーマに肉薄する。

「死ね！！ 死ね死ね死ねッ！！」

「き、貴様、一体何を！？」

アレルの顔を間近で見たゾーマは、一瞬たじろぐ。

その顔には、悪魔を象ったような面がつけられている。ジパングで封印されていた『般若の面』。

装備した者の精神を狂わす代償として、絶大な力を授ける呪われた防具。

アレルは切り札として、念の為に持ち込んでいた。

もう自分は狂っているのだから。

今更精神を狂わされることなど、別にどうということはない。アレルはそう思っていた。

面で表情は窺えないが、形勢は逆転しようとしていた。

苛烈な剣撃が、ゾーマのローブを切り裂いていく。

怒りに震えるゾーマの拳が、アレルに襲い掛かる。

それを盾で押さえ込むと、さらに突きを繰り返す。

「ッ！！」

「ハアアアアッ！！」

止むを得ず後退したところに、ギガデインが炸裂する。

苦悶に歪む魔王の表情。

先程までの守りから一転し、アレルは攻勢に出た。

ゾーマの攻撃を、それを上回る火力で押し潰す。
相打ち覚悟で至近距離に飛び込み続けていく。

対するゾーマも、手数でアレルを追い込もうとする。

一時的に痛みを感じなくなっているだけ。

限界を超えれば、一気にそれは襲い掛かる。

そうなれば、勇者であろうと、精神は確実に壊れるであろう。

『呪い』とは、それほど生易しいものではない。

膨大な力と引き換えに、蝕まれ続けなければならない。

代償は確実にあるのだ。

勇者と大魔王の死闘は続く。

防御力が格段に上昇したアレルに対し、ゾーマは魔法を連発する。

接近するのは『危険』と判断したのだ。

アレルは盾を翳しながら、ただじっと力を溜める。

ゾーマの一挙手一投足に目を凝らしながら。

殺意だけを鋭く尖らせて行く。

来るべき、一撃の為に。

凍てつく波動が迸る。

アレルは後方へと押し戻されながらも、力を溜め続ける。

凍える吹雪が、荒れ狂う。

残り少ない体力が、さらに奪われていく。

構わずに、限界まで力を溜める。

動きが止まったアレルに、ゾーマは接近する。

息吹を吐き続けながら、手には魔力を籠めながら。

勇者は最後の手札を切ったのだ。
切り札を打ち破れば、最後の一柱は折れる。
勇者の仮面は剥がれ落ちるのだ。
大魔王は確信した。

視界を遮っていた吹雪が、止んだ。
ゾーマの鋭い攻撃がアレルへと襲い掛かる。
肩へと突き刺さったそれは、そのまま肉体を切り裂いていく。
白い般若が赤に染まっていく。

同時に、アレルの腕は前方に突き出されていた。
光り輝く王者の剣が、ゾーマの肉体の中心部を貫いている。
肩にめり込んだ、大魔王の右手の力が失われていく。

「アアアアアアアアアアアッ！！」

絶叫を上げながら、アレルはそのまま突き進む。
剣から刃を発生させ、内部から崩壊させていく。
ゾーマは抵抗しようとするが、勢いに押されて阻止することが出来ない。

先程とは逆に、ゾーマが壁に叩きつけられる。
剣に渾身の力を籠め、はそのまま肉体を抉り続ける。
苦し紛れの魔法を気にも掛けずに、狂ったようにゾーマを突き刺し続けた。

赤い般若の面は、まるで嘲笑しているかのように変化していた。

やがて、ゾーマの目から光が消える。

その巨大な身体から炎が生じ始め、己を焦がし始めていく。

「……………アレルよ。よくぞ、我を倒した。

だが光あるかぎり、闇もまたある。

見えるのだ。再び何者かが闇から現れるのが。

だが、その時、お前は最早生きてはいまい。

フッフ、フハハハハハハハ！　闇は、闇は決して滅びぬのだ！！」

炎が更に勢いを増す。

アレルは間近でその最期を見届ける。

灼熱が面を焼き、嘲笑を浮かべていた表情が苦悶に変わる。

「……………お面が」

般若の面が、アレルの顔から外れる。

口からは血が滴り、両目からは雫が零れている。

身体で傷がない部位などない。

立っているのが奇跡である。

「フハハハハハハハハハ！！」

我は決して滅びぬ！！　闇は不滅なのだ！！！」

哄笑しながら、ゾーマは炎に包まれていく。

闇が肉体から入り、やがて身体が消滅していく。

闇は還るのだ。そしてまた蘇る。

「……………終わった？　これで、終わり？」

アレルは握り締めていた剣から手を離し、よろよろと後退する。

勝った。終わった。全てが終わったのだ。

だが、喜びはない。

これから一体どうすれば良いのか。

アレルには分からない。

平和が訪れた世界で、使命を終えた勇者はどうすれば良いのだろう。
誰に聞けば、それは分かるのか。

アレルがここまで連れてきた男は、横たわったまま息絶えている。

彼に聞いても分からないだろう。

死んでしまっているのだから。

アレルは頭上を見上げる。

主を失ったのが原因だろうか。

大地が揺れ、天井から瓦礫が崩落してくる。

主を失った玉座が、岩に押しつぶされる。

ふと気配を感じ、アレルは振り返る。

「……………ゾーマ様」

赤き衣を着た魔術師は、ゾーマの肉体を包んでいた装束を凝視した

後、

アレルを睨みつけてくる。目は血走り、口からは泡が吹いている。バラモスの話していた、アークマージだろうか。

「心配しなくても、お前等全員皆殺しよ。

魔に与した者は、一人も見逃さない。

全員、殺す」

アレルは王者の剣を抜き取り、アークマージに死を宣告する。やることが見つかつた。

残党を一人残らず狩り尽くす。

これが勇者の最後の仕事なのだろう。

アレルは口元を歪めた。

「ゾーマ様は、眠りに就かれたただけだ。

闇は決して滅びない。必ず蘇る」

「そう。それじゃあ、アンタも眠ると良いわ。

二度と蘇らないように、徹底的に殺してあげるから。

八つ裂きにしてやる」

無造作に歩み始める。

ゾーマ亡き今、恐れるものなど何一つない。

「お前に対抗する手段を、私は昼夜を問わず考えてきた。だが、確実な答えは見つからなかった。

殺しても死なないなど、不条理極まりない」

床を強く踏みつけ、怒りを露にする。

主の為に、彼は考え続けてきたのだ。

バラモスが打ち倒されてから、彼の頭にはそのことしかなかった。

『勇者を葬る』。考えて考えて考え抜いたのだ。だが、答えは見つからない。

苦し紛れに出した結論は、バラモスと同じ策。

精神を壊すという遠回りな物しかなかった。

彼が望んだのは、もっと即物的なものだ。

「……………それで？」

アークマージは独り言を続ける。

「まあ慌てるな勇者よ。大事なのはこれからなのだ。今更急いだところで仕方があるまい。

……………ところで、この魔物を見たことはあるか？」

指を鳴らすと、一匹の魔物を召喚する。

デーモン族『ミニデーモン』。

「ク、クケツ！?!?!?」

周りを不審げに見回し、縮こまっている。

かつてネクロゴンドで見たことがある小悪魔。

魔法を操るが、大して脅威ではなかった。

特徴的なのは、手に持つ大きなフォークだ。

「そいつがどうかしたの？」

狂人の戯言には付き合ってもらえないのよ。

掃除するべき屑が多いから」

「こいつは、見かけによらず膨大な知識を備えているんだ。

使用することはできないが、失われし呪文ですら『知っている』。腐っても、悪魔の眷属ということなのだろう」

話が見えてこない。

むしろ、付き合う必要がない。

今すぐ殺す。アレルは更に近づいていく。

「私は研究に研究を重ねた。

何とかしてそれを活用できないかと。偉大な主、ゾーマ様の為に！そして、私はそれを操ることができるようになったのだ！

これがどういふことか分かるか？ お前には分からないだろう。貴様のような愚者に分かるはずがない！！」

「クキキ！？」

ミニデーモンの身体が、赤い球体に覆われた。

魔物は必死に抵抗するが、出ることは叶わない。

魔力の渦が球体内部を攪拌し、ミニデーモンは液状化していく。

「失われし古代の知識と我が魔力！

これを合わせることで、私は蘇らせることに成功したのだ！！ヒヤハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「……………アンタ」

このまま近づぐことに危険を感じたアレルは、歩みを止める。

何かが、おかしい。

「決して殺せないのなら、お前を消し去ってしまえば良いのだ！！」

痕跡すらこの世界には残さん。完全に消え去ってしまえ！！
ゾーマ様に、敗北はないのだ！！」

アークマジが、印を結び、魔力を注ぎ込む。
血管が浮かび上がり、口から血反吐を吐き出す。
それでも、赤き衣は呪文を唱え続けた。
そして、発動する。

「な、何をする気！？」

アレルは盾を構える。

「
バルブンテ
古代竜言語呪文！！」

赤い球体が、勢い良く弾けた。

アレルの身体が、光に包まれていく。
あまりの眩しさに、思わず目を瞑った。

痛みはない。熱さも冷たさも感じない。
どこことなくフワフワした感じだ。
奴の呪文は失敗したのだろうか。
それとも、これが呪文の効果なのだろうか。
幻覚を見せる効果があるのかもしれない。

まあ、とにかく。これで、少し休める。

何が起こったのかは分からないが、今ぐらいは寝ても良いだろう。薄れ行く景色の中で、アレルはそんなことを考えていた。

勇者アレルの姿を、その後のアレフガルドで見かけることはなかった。

人々は、大魔王ゾーマと相打ちになったのだと悲しみ、そして彼女の功績を称えた。

大魔王の居城に残されていた装備は、勇者ロトの装備として語り継がれることになる。

『王者の剣』はロトの剣。『刃の鎧』はロトの鎧。無銘の盾は『ロトの盾』として。

禍々しく血の色に染まった『般若の面』は、厳重に保管され、決して公開されることはなかった。

ラダトーム王家の書物には、『ロトの兜』として記録されている。

伝説は、この時始まったのだ。

第二十六話 勇者の挑戦（後書き）

次回更新は、少し間が空きます。
頑張りすぎました。

この話の為に、タイトルの殆どを勇者の
勇者の挑戦。名曲です。 としてきました。

・アレルが異世界に飛ばされた理由
パルプンテで光の彼方に消し飛ばされて、落ちてきました。
最初に異世界 パルプンテしかない！と思いついてしまいました。
もういくら捻っても、これしか出てこなかったのです。

・未来へ飛んだ理由
パルプンテの効果に、戦闘を巻き戻すというのがあります。
逆に現れれば……。

・ミニデーモンがパルプンテを知っている理由
LV23で、習得します。……DQ5で。

・アークマージャー行はどうやって行ったのか
……ば、パルプンテ理論の応用で。旅の祠に使用した。
カンダタは、後にその祠に飛び込んでしまった。

第二十七話 それぞれの決断

夜も更け、誰もが眠りに着く、人々の往来が最も少なくなる時間帯。レケン・アートとその従者は息を押し殺しながら、茂みに身を潜めていた。

迷宮に入る門とは逆方向。泉の裏側である。

彼の任務はただ一つ。迷宮の結界を解除すること。

辺りに冒険者の姿はなく、時折警護の教団兵が往来するのみである。魔物が迷宮下層から押し寄せてきている情報は、既に街中に広まっている。

結界は迷宮入り口を囲むように、大きく展開されており、目視で確認することができる。

触れただけで、魔物を消失させる程の力を持っている。

英雄G・アートが、『赤き衣』の知識を借り受け、編み出したとも言われている。

先祖が書き残した『魔導書』をレケンは何度も読み込んだが、結界呪文を会得することは出来なかった。

障壁を構築することは出来るが、魔物を消滅させる効果を付与出来なかった。

目前で輝いている青白い結界を、レケンは口惜しそうに睨みつける。

「……僕には才能がなかったということか」

「レケン様？」

「何でもないよ。……さあ、始めようか。」

滅びの始まりだ。これで誰にも止められない」

レケンには身に着けている指輪を結界へと向ける。
結界を張る事は出来ないが、解除することは出来る。
作ることよりも、壊すことの方が簡単なのが余の常だ。
血と汗が滲むような努力の結果、解除呪文のみを会得したのだ。
皮肉なことだとレケンは苦笑する。

指輪には白い宝石が付いており、主の命令をただ待ち続けている。

指輪の名は『アートの指輪』。

『赤き衣』から託された『輝く石の欠片』から作り出されたものだ。
知識の融合、指輪、膨大な魔力。そして数多の人柱。
これらが合わさり、この結界は構築された。

数多くの屍の上に築かれた結界を、己の見栄やプライドの為に、打ち壊そうとしている。

あれだけ守ろうとした、アートの名声を汚そうとしている自分。
思わずレケンの手が震えだす。背筋を冷たい物が流れる。
だが、今更引き返すことなど出きない。
契約は結ばれているのだから。

「ロスト・ウォール 結界解除。封じられし魂よ。

その役目を終え、天へと還り給え」

レケンは己の指をナイフで薄く切り、指輪へと血を垂らす。
白い宝玉が赤く濁り始め、やがて音を立てて碎け散る。
詠唱と共にその光が強さを増し、結界へと浸透していく。
青から赤に変わり、そして消えていく。
まるで虫が食い散らかすかの如く、侵食は広まる。

異変に気が付いた教団警護兵達が、ざわめき出す。明かりが灯され、周辺が照らされていく。

「レ、レケン様。このままでは見つかってしまいました」

「もうすぐだ。もうすぐ終わるよ」

汗を拭い、レケンは一心に詠唱を続ける。

従者は剣を抜き放ち、落ち着きなく辺りを見回す。

やがて、結界は完全に消失した。

この街を守る最強の盾は、今完全に失われたのだ。

「ハアツ、ハアツ！ やったぞ。やってやったぞ！
ハハハ！ 僕達を馬鹿にするからだ！
恩を忘れた愚民共め、その報いを受けるが良い！！」

肩で息をしながら、レケンは哄笑する。

従者に身体を支えられながら、移動を開始する。

だが。

「何者だ！ ここで何をしているッ！」

迷宮の門を警護する門番に発見されてしまう。

彼は非番であったのだが、騒動を聞き宿舎から駆けつけ、調査活動に加わっていたのだ。

「に、逃げる！！」

「お、お待ち下さい！」

駆け始めるレケンと従者。

慌てふためいて一目散に逃走を計る。

「不審者め、逃がすかつ！！」

その足目掛けて、門番の手から槍が放たれる。

唸りを上げる鉄槍が、レケンの右足を貫通した。バランスを崩したレケンは倒れこむ。

従者は一度それを助け起こそうとしたが、門番の顔を見ると、一目散に逃走した。

「ひいつ！！」

「お、おい、助ける！！ 僕を見捨てるのか！！」

「貴様、何者だ！ 顔を見せろ！！」

倒れこむレケンの髪を掴み、松明の灯りを近づける。その顔を見た門番は、驚きの表情を浮かべる。

「うつつ」

「レ、レケン・アートか？」

「ち、違う!」

「お前が、結界を」

「違うツ! 僕は知らない!

これはアート家に対する侮辱だ!」

「黙れ!! 自分が何をしたか分かっているのか!？」

怒声を上げながら、門番はレケンを掴み上げる。

そして懐から警笛を取り出すと、一気にかき鳴らした。

結界消失の報せを受けたエレナは、
教団幹部を緊急招集した。

その場には、各国大使の姿もある。

迷宮に派遣した騎士団が一人も帰らず、

そして今結界が消失した。

彼等には事情を正確に把握し、本国へと報告する義務がある。

「エレナ様。全員揃いました」

「早速ですが本題に入ります。
迷宮を覆う、結界が消失しました。
これは一刻の猶予もない、危機的な事態です」

エレナが淡々と話始めると、
王国大使が激昂して机を叩く。

「そのような事は今更確認しなくても分かっている！！
我等が知りたいのは、これからどうするかだ！」

「結界を解除したのはレケン・アート。
現アート家当主です。」

迷宮周辺にいたところを捕らえ、厳しく尋問した所自白しました」

教団幹部が書類を見ながら報告する。

捕らえられたレケンは、厳しい尋問を受けていた。

アート家当主であろうと関係はない。

この街の支配者は、教祖エレナであり、教団なのだから。

「結界の再構築は出来ないのか？」

「出来ないそうです。拷問にも掛けましたので、真実かと」

「なんとということだ！ 落ちぶれたアートの若造にしてやられると
は！」

この責任は貴方にあるぞ、教祖エレナ！！」

身を乗り出し、エレナを糾弾する。

それに同意するように他の大使も首を縦に振る。

「その通り。アートの街が何故中立を保っているかは、貴方が一番分かっているはずだ、教祖エレナ」

「彼は都合良く利用されていただけでしょ。裏で手を回していたのはイルガチエフ。」

元大司教にして、我々が異端指定している男です」

エレナが感情を抑えた声を出す。

異端審問官イコナを筆頭に、討伐隊は全員死亡。

まんまと誘き出されて、壊滅するという大失態だ。

「……その件は聞いていますよ。」

そして、討伐隊が悉く壊滅させられたこともね。

人の身にして、魔物を操る術を使うとは。

実に恐ろしいことだ」

拷問の結果、レケンは口を割った。

イルガチエフの誘いに乗り、結界を消失させたと。

莫大な資金援助も受けてきたことも。

魔物の群を指揮し、世界に災いをもたらそうという野心。

決して見逃すわけにはいかない。

「迷宮を管理し、魔物が地上へ出ることがないよう監視する。

この300年の間、そうして平和は守られてきた。

それはこれからも遵守されなければならない」

連合大使が言い切る。

「このような事態が起こりうることも想定はしてきました。」

ですが、同様の結界構築は未だ成功してはいません。どうしても結界を維持することが出来ないのです」

エレナは顔を伏せる。

あらゆる事態を想定するのが支配者の使命である。

結界が消失した場合についても、当然考えは巡らしてきた。

だが、結界を再構築する手立てはついに見つからなかったのだ。

「それではどうするおつもりか！！

魔物達は、すぐそこまで迫っているのですぞ！」

王国大使がさらに怒声を上げる。

「迎え撃ちます。入り口を取り囲み、魔物共を押し戻すのです。

一匹たりとて見逃さずに、押し殺すしかありません。

そして必ず現れるであろう、異端イルガチエフを討ち取ります」

平然と語るエレナ。

最早それしかない。

魔物を抑え、元凶のイルガチエフを殺す。

「馬鹿なことを！ 迷宮に魔物が何体いるのか分かっておられるのか！

百や千ではないのですぞ！」

「全教団兵と戦える教徒、更に街から義勇兵を募ります。

我が命に代えても、この街からは決して出しません。

この街を物理的結界とし、迷宮を封じます」

机の上に広がる街の地図を指差す。

「……至急本国へ連絡し、援軍を派遣させる必要がありますな」

「我等『王国』にはそのような兵など残っていない！
やるならば『連合』だけでやられるがよからう！」

「『帝国』は増援を派遣しますぞ。

世界の危機だというのに、手をこまねいてはいられませんからな。
この期に及んで、戦力を温存しようなどという輩が一匹いるよう
ですが」

王国大使を一瞥すると、嘲笑を浮かべる。

「貴様、私を侮辱する気が！！」

「ククツ、そう聞こえたのなら失礼。

出さないならば、出さなくても結構。

但し、報いは確実にあるでしょうな。

我等も、小競り合いには飽きてきたところです」

恫喝に押し黙る。

かつて大陸一の威容を誇った王国も、

現在では連合、帝国に挟まれ衰退の一途を辿っている。

万が一大戦にでもなれば、その結果は明らかだ。

その危地から脱するために、迷宮での『星遺物』の探索に力を注い
でいたのだ。

「……出さないとは言っていない。

早とちりされては困る」

「これはこれは失礼いたしました。暴言をお詫びしますぞ、王国大使殿」

厭らしく微笑む帝国大使。

各国の罅迫り合いが終えるのを待ち、エレナは話を再開する。

「増援がくるまでに、どのくらいかかるでしょうか」

「先遣隊が1週間。本隊が到着するのに半月から1ヶ月といったところか。」

これはどの国も殆ど変わらないでしょう」

大陸中心に位置するアートの街。

かつては地球の臍ラシニールと呼ばれたこともある場所。

その名は、既に過去の物となり、知っている者は極僅かである。

「……魔物が世界を跳梁跋扈することだけは避けねばなりません。どれだけの犠牲を出してもです。」

伝説にある勇者でもいてくれれば、話は別ですが」

その言葉に、エレナは一人の少女の名前を思い出す。

「馬鹿馬鹿しい。勇者などという都合の良い存在がいる訳がないだろっ！」

今必要なのは、より多くの兵と武器、それだけだ！

教祖エレナ。援軍が到着するまでこの街は持ちこたえられるのか？」

「……全力を尽くします。我等にも、切り札は存在します。結果が構築されてから約300年。徒に時を過ごしてきた訳ではありません。」

『赤き衣』の名に賭けて、この街は必ず守り抜きます」

会合終了後、エレナは幹部に命令を下す。

「魔物が溢れ出るまで後一日。」

出来るだけ多くの市民を、この街から退避させなければなりません。同時に冒険者達から義勇兵を募ります。

報酬は惜しみなく与えなさい」

「了解しました、教祖エレナ」

「『星銃』の用意を。迷宮入り口正面に据付け、陣を構築する。出来る限り強固な物を築くのです」

「しかし、『星銃』はこの星塔の守りの要。

それを外すのは危険過ぎるか」と

教団が回収した魔素を用いて開発した『星銃』。

魔素を濃縮し、術者の魔法と掛け合わせることで、数倍にの威力で放出する強力な兵器。

現在は星塔入り口と屋上に10台ずつ、計20台設置されている。

「構いません。どちらにせよ、迷宮の囲いを突破されたらそれまでです。」

星塔の守りは放棄、兵力を正面部へと集結させます！」

「教団の聖地たるこの場所を、放棄するなど出来ません！
どうかご再考を！」

「至上命令です。抑えは街の正門に配置。星銃はこちらにも設置します。」

アートの街の入り口はこの正門のみ。最悪の場合はここを最終防衛線とします。

時間がありません、直ちに行動しなさい！！」

エレナが一喝すると、幹部達は一斉に行動を開始した。

後一日。その間に全市民を避難させるなど出来る訳がない。

多くの犠牲が出るだろう。

それでも、迷宮入り口は封鎖し続けなければならない。

結界が構築出来ない今、魔物の侵攻を食止め続けるしか手段はないのだ。

静まり返った戦士ギルド。

所属する大多数は、我先にと逃げ出した。

彼等は生きるため、家族の為の金を稼ぎに来たのだ。

間違っても世界を救う英雄として死ぬ為ではない。

残ったのは生きることには飽きた奴と、物好きな連中だけである。

ギルドマスターのロブと、ベテランの戦士達が酒を酌み交わしていた。

「やれやれ、俺がギルドマスターの時に、こんな事態になるとはツイてない。

全くやってられん」

溜息を吐きつつ、一気に酒を呷りテーブルに叩きつける。
空になったグラスに、ジャバが酒を注いでやる。

「まあ諦めるんだな。普段の行いが悪いんじゃないのか？」

「お前に言われたらお終いだ」

苦笑しながらジャバの酒を注ぎ足す。

「義勇兵に参加するのか？」

「ギルドマスターだから当然だ。逃げ出したりしたら示しがつかん。
……家族は隣町に避難させたがな。
お前は逃げないのか？」

「ふん。腐れ縁の糞坊主が張り切ってやがってな。

俺もそれに付き合わされるって訳だ。
全く地獄まで一緒なんてな」

ジャバが憤慨すると、周りから笑いが漏れる。

「ハハハ。死ぬときは一緒か。

あいつが女だったら良かったのにな、ジャバよ」

「全くだ。あの皮肉な顔を見ながら死ぬのだけは遠慮したいぜ。

俺が死ぬのはベッドの上で、女に看取られながらと決めているんだからな」

頭を掻くと、ロブは辺りを見回す。

どいつもこいつも馬鹿ばかり。

馬鹿の筆頭のエクセルも、残ろうとしたので、
思いっきりぶん殴って叩きだした。

2回命を拾いながら、3回投げ出そうとするなど馬鹿以外の何者でもない。

女の面倒を見ると、余計な助言をプレゼントして送り出してやった。

「そついえば、ロブよ」

「俺がマスターだということを忘れるなよ？

こうみえても偉いんだからな」

「ハハ、堅いことは良いじゃないか。

あの嬢ちゃんはどうしたんだ。勇ましい女勇者のアレル嬢ちゃん」

ジャバが酒臭い息を吐きながら尋ねる。

調子を崩して、ルイーダの酒場にいるというのは人伝いに聞いたが、今もこの街にいるのかは知らない。

「さあな。俺には分からんよ」

「冷たいねえ。まあ無事でいてくれりゃ、言うことはないな。俺はああいうのが、好みなんだ」

「やっぱりそうだったのか。」

俺の娘には、絶対に近づくなよ。まだ10歳にもなっていないからな」

ロブは少しだけ引きながら、警告する。

「……性格の話だ。勘違いするなよ?」

「……………そうか」

ロブは猜疑に満ちた目でジャバを見つめた後、酒を一気に飲み干した。

脳裏に浮かんだのは、愛すべき家族の顔だった。

「頭! ここはこんなもんでいいですかい?」

「適当に封鎖して罠を仕掛けておけ！
どうせ焼け石に水だろうがな」

上層部の各階段を封鎖し、通路やら壁、天井にトラップを仕掛ける。ありったけの連鎖トラップを仕掛け放題ということで、レンジャーギルドの面々はこぞって参加した。もう自分でもどこにあるかは良く分からない。パツと見で仕掛けてある数個は、感知することが出来るが、全部かどうかまでは判別できない。万が一魔物の進撃が空振りだとしたら、後片付けが大変だ。トラップを仕掛け終えたローグの一人はそんなことを考えた。

「サルバドの野郎のギロチントラップはどうしやすか？
言われた通り、一応持ってきましたぜ」

「……そうだな。迷宮出口に仕掛けておけ。
陽の目を拝もうとした瞬間に発動するようにな。
魔物の悔しがる顔が目に見えようだろう」

「流石頭だ。魔物の気持ち分かるんですね！」

「頭もある意味では魔物だからなあ」

「うるせえ！ いいから仕事しやがれ！
頭力手割るぞ！！」

カンダタが手斧を投げつけると、慌てて駆け出していく。ハツと何かに気付くと、ギロチンを抱えたまま星石を使用し転移。当然ながら、入り口に転移してから設置する方が何倍も早い。

毒煙、火、爆破、麻痺針、落とし穴、矢。ありとあらゆる罠を仕掛け終えた。

本来ならもつと下の階層から設置するべきなのだが、その猶予はなかった。

ここもあと半日もすれば魔物の波に飲み込まれる。

それほど時間に余裕がある訳ではない。

迫り来る魔物の脅威に耐えながら、作業をするのは精神に堪える。

部屋に侵入してきたネズミを叩き殺すと、カンダタは命令する。

「手の空いた奴は地上の罠構築に向かえ。

既にジャスミンが手を付けている筈だからな。

間抜けが引つかからないように、目立つように設置しろ」

「了解！」

星石を使い、瞬く間に転移する数名。

この迷宮に入ることが出来るのも、これが最後かもしれない。

カンダタは暫く無言で迷宮内を眺める。

(……………こつちでもこんな騒ぎに巻き込まれるとはな。ツイてねえ。

いや、本当にツイてないのは、アイツか)

肩を疎めると、カンダタは星石を掲げた。

作業を終えたメンバーが集い、いつも以上に騒がしいレンジャーギルド。

所属するほぼ全てのメンバーが、義勇兵として参戦した。今は最後の宴の最中である。

カンダタの指示により、馬鹿騒ぎをすることに決定したのだ。

「頭！ 酒が足りないんじゃないですかい？」

「おう！ 酒場から好きなだけかつぱらってこい！

どうせ誰もいねんだ、遠慮はいらねえぞ！！」

「合点だ！」

へへへと笑いながら飛び出していく。

カンダタはそれを見送りながら、馬鹿でかいグラスを一気に飲み干す。

レンジャーギルドマスターにして、カンダタの妻ジャスミンは呆れている。

「全く、今日ぐらい静かに飲めないのかね」

「うん？ 良いじゃねえか、最後に馬鹿騒ぎしたってバチはあたらねえ」

「……それもそうか」

瓶ごと酒に口をつけると、零れた液体がジャスミンの胸元に滴り落ちていく。

カンダタは思わず見とれたが、キツイ視線を受けると縮まりかえっ

た。

「な、なあ」

「なんだい。最後にやらせるとかいったら百叩きだよ」

鞭に手を掛けると、カンダタが両手で否定する。

「ち、違う。な、なんだっけ。」

「そうだ、言いたいことがあったんだ」

フラつく巨体で立ち上がりながら、ジャスミンに向き直る。

「なんだい、改まって。いつも以上に顔が気持ち悪いよ」

「……愛してるよ、マイハニー」

カンダタがそう告白した瞬間、周りが噓し立てる。

口笛を吹き鳴らし、イヤツホウと奇声を上げる手下達。

ジャスミンは無言でカンダタの顔面へ、腰に捻りを加え渾身の勢いで拳をめり込ませた。

大の字でひっくり返ると、そのまま昏倒した。

レンジャーギルドのメンバーは、何事もなかったかのように宴を再開した。

いつものことである。

真面目な話、カンダタはジャスミンに子供達と一緒に避難するよう
に言ってきたのだ。

ジャスマンはエレナを見捨ててはいけないと、それを拒否。信頼できる部下に子供を任せ、退避させた。

確実に消耗戦になるこの戦い。

死ぬのは自分か、この馬鹿か。それとも両方ともか。結果は神のみぞ知るといふ奴だろうか。

だが、一つだけ、微かな望みがあるとすれば。

それは、カンダタが畏怖する少女。あの娘かもしれない。危機に現れ、人々を救い出すのが勇者。

それがおとぎ話の英雄だ。

本当に、勇者が実在するとすれば。

ジャスマンは苦笑しながら首を振ると、メンバーに酒を注ぎに場を回っていく。

今はそんなことを考えている場合ではない。

ジャスマンが今すべきなのは、この期に及んで留まった、この大馬鹿達に酒を振舞う事なのだから。

僧侶ギルドマスター、ニカラグは魔術師ギルドに顔を出していた。彼の率いる僧侶達は、その殆どが熱心な教徒でもあり、既に陣構築の為に駆り出されている。

最も熱心な教徒であるニカラグは、己の信仰を示すべく、こうして酒を喰らいながら、町を巡回しながら練り歩いているのだ。戦士ギルド、レンジャーギルドにお邪魔し、最後にやってきたのがこの魔術師ギルド。どいつもこいつも愛想が悪い連中で、ニカラグは遺憾に思った。

「少しいいかな？ エメラルド殿にお会いしたいのだが」

「……只今、魔術の実験中でお忙しいようです。残された時間はあと僅かだと、焦っておられました」

「こちらも至急の用件だ。取り次いでもらいたい」

「……しばしお待ちを」

眉を顰めた若い魔術師が、奥に引っ込んでいく。ニカラグは坊主頭をペシツと叩くと、近くで魔道具を手入れしていた女魔術師に色目をつかった。素っ気無く無視をされた。

「……お会いされるそうだ、僧侶ギルドマスター・ニカラグ。案内するので、着いて来て下さい」

「そうか、どうもありがとう」

階段を上り、一番奥の部屋に通される。数十人の魔術師が儀式を行っており、魔方阵が数え切れないほど展開されている。

中央では魔術師ギルドマスター・エメラルドが瞑想しながら、呪文を詠唱している。

どうやら結界を構築しようとしているようだ。

迷宮に見立てたと思われる水晶玉の周りを、青白い結界が取り囲んでいる。

暫くしてエメラルドが目を開けると、結界は霧散した。

「……常に詠唱していれば、結界自体は維持できる。

だが、現実的ではない。それだけのレベルの魔術師が何人いるというのか。

それに破邪の力が足りない。まだまだ試行が足りない。

私には時間が足りないわ。それでニカラグ、この忙しいときに一体何用かしら。

用がないのなら、今すぐ出て行って欲しいのだけれど。

私には時間がないのよ。魔力も足りないから、お前から吸収してやるうかしら」

独り言を呟いた後、早口で恐ろしいことを捲くし立てるエメラルド。機嫌はすこぶる悪いらしい。

「ええとですな。最後の晚餐ならぬ、乾杯をしようかと思ひまして。来るべき戦いに向けての景気付けという奴ですよ」

ニカラグが酒瓶を差し出すと、刺し殺すような視線を向けてくる。確実に寿命が縮まったと確信する。

「面白い冗談ねニカラグ。貴方達、この愚か者を捕らえなさい。余っている魔力を吸収し、実験を再開するわ」

魔術師達が、一斉にニカラグを取り囲み、押さえ込む。

「ちょ、ちよっとお待ちを！ 軽い冗談ですぞ！
私がいなければ、明日の戦いは」

「大丈夫よ。明日になれば回復する程度しか絞らないから。
フツ、ちよっと痛いけれど、鍛えている僧侶なら大丈夫ですわ」

エメラルドは、ぶつとい先の尖った筒を取り出すと、
ニコやかに笑い出した。

エメラルドは怪しく微笑んでいる。

ニカラグは竦んで身動きすることが出来ない。

エメラルドは笑っている。

野太い男の悲鳴が、魔術師ギルドに響き渡った。

いつもと変わらず、賑わいを見せるリーダーの酒場。
だが、客の表情は無理をして笑っているかのようにも見える。

空気で笑っていないと、精神がもたないのだ。

彼等には戻る家がない。待つべき家族もない。

戦う気力もない。そんな夢破れた冒険者が選んだ最後の場所は、ここだったのだ。

マスターはハアと何度目か分からない溜息を吐く。

先日馬鹿が小火を起こしたかと思ったら、

今度は没落貴族の大馬鹿が結界を消しやがったのだ。

直接ぶん殴ってやろうかと思ったが、忙しいのでやめて置いた。

目の前の飲んだくれに声を掛ける。

「なんでお前等ここにいるんだ？

さっさと逃げ出したらどうだ」

「ん？ 行くところなんてないからな。

それなりに馴染みの店だからよ。

最後はここを守ってやるよ」

だからツケはチャラにしてくれよなと、白い歯を見せる。

死んだらツケもこうもないだろうと思うが、こういう時はノリが大
事だ。

「仕方ねえな。ほら、好きなだけ飲め。

お前等も飲み放題だ、遠慮するなよ！」

勿論だ、と各テーブルから声がか返ってくる。

「流石は一つ星のマスターだ。

その看板は伊達じゃないな」

「うるせえ！ 畜生、ようやくこれからって時にこれだ！
まったく馬鹿馬鹿しい！！」

「ハハハ！ 人生つてのはそんなもんさ、マスター。
アンタもさっさと逃げりゃいいのに、馬鹿だなあ」

「客置いて逃げるほど、俺は落ちぶれちゃいねえよ」

「そいつはいいや。ここにいる奴等は、最後まで戦うさ。
なあに、その間にマスターとルイーダは逃げれば良い。
それぐらい、俺達だって出来るさ」

なあ、と声を掛けると、そうだそうだと威勢の良い声が続く。
ネズミばかり狩ってる癖にと、皮肉がでそうになるが堪える。
それでも言わないと、何かが零れそうだったのだ。

「……ふん。どうなっても知らんからな」

「それより、ルイーダはどうしたんだ？」

「上で常連客の看病だよ。……アイツも、馬鹿だからな」

マスターは自分のグラスに、最高級の酒を注ぐと、
チビチビと飲み始めた。

「エーデルさん。ルイーダさん。
私はそろそろいきます。陣の構築の手伝いをしなければいけませんから。」

アレルさんの事、くれぐれもお願いします」

戦闘態勢を整えたマタリが、何かを堪えるかのような口調で声を掛ける。

結界の消失。犯人は自分の兄。マタリは絶望で目の前が真っ暗になった。

恥の余り、自害しようかとも考えたが、それよりは最後まで戦い抜いて死ぬ方が良いと思った。

アレルから貰った大剣、ブラッディソードを握り締める。

「私が責任を持って、アレルちゃんの面倒は見るわ

……貴方の事は、引き止めても無駄かしら」

エーデルが問いかける。

「申し訳ありません。私はアートの一族です。
身内の罪は、私が償わなければなりません」

「マタリさん。貴方のせいじゃないのよ。」

街の皆だつて、貴方を責める者はいないわ」

「それでも、私はいきます。

最初に斬り込み、力尽きるまで私は戦い抜きます。

……ありがとう、ルイーダさん」

「……………マタリさん」

ルイーダは掛けるべき言葉を失う。

覚悟を決めた者を引きとめるのは何よりも難しい。

それは今までの経験から嫌という程理解しているからだ。

マタリはベッドで眠るアレルに近寄り、手を握り締める。

「アレルさん。今までありがとうございました。

貴方がいなければ、私はもうこの世にはいなかったと思います。

……本当に、感謝しています。

短い間でしたが、ご一緒できて楽しかったです」

アレルの返事はない。虚ろな瞳で空を見ている。

「きつと大丈夫。良くなります。

そして、平和な世界で、幸せに暮らすんです。

アレルさんには、そうなる権利があるんですから」

笑みを浮かべると、マタリは手を離す。

エーデルが顔を見ずに忠告する。

「……………命を無駄にしないように。

人は、死んだら生き返らないのだから」

「そうですね。魔物を駆逐するまで、私は死にませんよ。狂戦士らしく、笑いながら戦うことにします。……それでは、行って来ますね。……無事帰ってこれたら、また一緒に組みましょう」

踵を返すと、マタリは部屋から出て行く。彼女には、魔物と戦う前にやるべき事がある。しなければならぬ事があるのだ。

誇りある、アートの一族の者として。

「エーデル。貴方はこれからどうするの？ここにいたら、巻き込まれる危険があるわよ」

「……そうね。少しだけ考えさせてくれる。一人で考えたいの。ごめんね、ルイーダ」

「……いいのよ。それじゃ私は下に行ってるわ。何かあったら、呼んで頂戴」

「ありがとう」

手を軽く振ると、ルイーダは階下へと向かう。エーデルは目を閉じて、暫しの間考えに耽る。

目を開け、鞆から一冊の本を取り出すと、強く握り締める。

以前のものとは違い、豪華な装丁。

本には『保存』と『耐火』のエンチャントが掛かっている。中身は当然白紙。何も書かれてはいない。

準備は出来ている。だが、これは正しいのか。これから行うことは、許されるのかどうか。エーデルにはどうしても判断できなかった。

「……………」

アレルの顔を覗き込む。

放っておいたら治るだろうか。

それとも、衰弱して死ぬだろうか。

死んだら、もう復活することはないのだろうか。

分からない。

自分は勇者ではないのだから。

「死体を操る禁忌を犯した身。

今更何を恐れる必要があるというのか」

迷いを断ち切る為に、口に出す。

言葉は震え、喉が渴く。

本を開き、アレルの胸元へと乗せる。

杖を持ち、アレルへと向ける。

催眠と暗示の呪文の詠唱を始める。

人の気配がなくなった星塔。教祖エレナの命令に従い、完全に放棄された。

全ての人員が防衛の為に借り出され、人っ子一人いない。戦えるものは前線へ。非戦闘員は後方支援。地下牢に閉じ込められていた者達も、ある一名を除き全てが解放されていた。

「う、ううつ。だ、誰か、水をく、くれ。だ、誰か」

レケンには半死の状態だが、なんとか生きていた。凄絶な拷問が加えられ、全ての事情を吐かされた。だが、生きていた。

見せしめの為に処断すべきだという意見もあったが、エレナは却下した。

異端に与し世界に災いをもたらした愚か者。殺す価値もないが、生かしておく必要もない。

故に、その場に放置せよという命令が下り、地下牢に取り残された。

衰弱して死ぬか。

魔物が押し寄せて死ぬか。

どちらにせよ、彼の末路は変わらない。

「だ、誰か、助けてくれ、お願い、だ」

「……………」

目が腫れ上がり塞がったレケン。

だが、誰かの気配を感じる。

牢の扉が開く音が聞こえると、中へ無造作に入ってくる。

殺しに来たのだろうかと警戒するが、レケンの手にはグラスが握らされた。

右手は既に使いものにならないので、傷だらけの左手に。

グラスから伝わる冷たさが、痛みで熱を持つ身体に心地よかった。

「み、水。みみ水だ。あ、ありがとう。本当に、ありがとう」

レケンは差し出された水を一気に飲み干す。

口から水が零れてしまう。

潰れた瞳から、涙が零れる。

「だ、誰かはし、知らないが、聞いてくれ。

僕は、愚かな、事をしたのだと思う。

だけど、許せなかったんだ。

だから、み、見返してやろうと思った。

た、ただ、それだけなんだ。

「イ、イルガチエフ様は、僕を、分かってくれたんだ」

どもりながら、レケンには心情を吐露する。

それはまるで懺悔するかのようにだった。

「……………」

「し、シダモ、マタリ。

兄さんが悪かった。あれから、僕はいつも、一人だったんだ。

どうして、僕はあんなことを。

ゆ、許してくれ。どうか、ゆ、許して」

力を失いグラスを落として割ってしまふ。

中身は空っぽだ。破片が散らばる。

レケンの意識は既に限界まで来ており、失神寸前である。

朦朧とした意識で、謝罪を口にする。

破片の上に前のめりになり、その後もぶつぶつと何かを呟き続ける。

謝罪と後悔、湧き上がる不満、愚痴、怨嗟。

そして自責の念。

延々と繰り返す続ける。

傷ついた顔から、更に血が溢れ出していく。

以前の誇り高き当主の面影は、そこにはない。

首筋に、大剣が当てられる。

レケンはそれに気付かずひたすらに捲くし立てる。

「……………許して、畜生、なんで僕がこんな目に。

うつっ、助けて、誰か。

「イ、イルガチエフ様、どうして、助けてくれない」

紅い大剣が一闪すると、レケンの首が落とされた。

決戦の日。ルイーダの酒場の一室。

清々しい日差しが、目蓋を突き刺す。

あまりの眩しさに、思わず意識を取り戻す。

「……………ん？」

ふぁーと伸びをする。

布団から、大事な本がずり落ちる。

どうやら読みながら眠ってしまったようだ。

「おはよう、アレルちゃん」

エーデルが椅子に座りながら挨拶してくる。

人の寝顔をじーっと観察していたのだろうか。

嫌な趣味をしている奴だ。

「寝起き一発目から、ピンクが目に入ると不吉ね。

それに目がピンク色してるわよ。寝不足？」

笑いかけてやったら、ピンキーが下を向いた。

失礼な奴である。

何故かはわからないけど、涙が出てきたので、私はバレないように目を擦っておいた。

どうやら、私も寝不足らしい。

第二十七話 それぞれの決断（後書き）

8 / 29 加筆しました。

レケンさんお疲れ様でした。

次話は決戦第三新東京市ではなく、
アートの街の戦いです。

サービスはありません。

第二十八話 勇者とラーミア

息の詰まるような緊張感に包まれた、迷宮前広場。

待ち構える兵士達は、得物を握り締め、ある一点を見つめ続けている。

魔術師達は詠唱を完了し、精神をひたすら研ぎ澄ますことに集中する。

突貫作業で張り巡らされた防護柵。

一段低い地形を活用し、広場を取り囲むように盛られた土塁。

迷宮に入り口に当たる、巨大な階段を見下ろす様な形で陣は組まれている。

正門に続く大通り方面には、星銃が設置されており最重要防衛拠点とされた。

本来ならば、住宅街を守るべきなのだろうが、

今優先されるべきは、魔物をこの街から出さないことだ。

優位な位置からの弓射と魔法攻撃。進攻を食止めるための傾斜と防護柵。

階段は元々建物で覆われており、簡易結界と爆破トラップが仕掛けられている。

これが炸裂した瞬間が、開戦の合図となる。

階段の存在する建物から、何かを叩きつけるような音が響き渡る。

まるで城門に槌が打ち付けられているかの如く。

その音は徐々に大きくなっていく。

弓を装備したレンジャー達は、ジャスミンの指示に従い、矢に火を

着け始める。

火薬、油は大量に撒かれている。

哀れな敵の第一陣は、確実に爆死することだろう。

「……………」

マタリは柵の裏から大剣を構え、ただその時を待ち続ける。

既に死に場所はここと定めている。

一族としてのけじめをつけ、仲間との別れも済ませた。

もう思い残すことはない。

(そう、もう思い残すことはない。だから)

マタリが目を瞑った瞬間。

ガラスが割れるような音と同時に、建物が爆発した。

煉瓦は粉々に砕け散り、油に引火して炎上を始めている。

黒焦げになった、人型の死体が散乱している。

おそらくは魔物だろう。

陽の目を見ることなく、彼等は死んだ。

その屍を踏みつけながら、階段から魔物の群が現れる。

戦斧を構えるのは人食い巨人のトルル。

醜い形相をさらに歪めて、頭上の太陽を見上げた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツッ……………」

トルルは雄叫びを上げる。

それに続くように、地下から魔物達が声を轟かせる。押し込められていた怒りを爆発させる。

広場全体にその声は響き、経験の浅い人間は身体を竦みあがらせた。

「……エレナ様」

「まだです。敵が広場に展開するまで待ち、一気に範囲魔法を仕掛けてます。

無駄に消耗することはありません」

攻撃命令を催促する部下に対し、エレナは首を横に振る。まだ早い。

魔物達はみるみる間に地上に展開を始める。

まるで蟻の巣から這い出るかのように。

黒蟻の中に赤蟻が混じっている。魔素により強化された魔物。

取り囲む人間達を見回すと嬉しそうに舌なめずりをした。

「エレナ様、攻撃許可を！」

「星銃発射。全隊攻撃開始！」

悪しき獣を一匹残らず殲滅せよ！！」

エレナが杖を振りかざすと同時に、設置された巨大な砲台から範囲魔法が繰り出される。

『星銃』から投擲された魔光は、魔物の群を切り裂き殲滅する。

先陣を斬った栄えあるトロールは、一片の肉塊すら残さず蒸発した。

「次弾装填開始！」

「魔素を注ぎ込め！」

「早くしろ！ 早く！」

「分かっている！ 魔素を詰める！」

魔術師達により、魔力が装填されていく。

強大な威力を誇る星銃だが、莫大な魔力と魔素を消耗するという欠点がある。

連発することは出来ない。

「弓隊、撃てッ！！ 狙いは適当で良い！」

「どこもかしこも魔物だらけさ！」

「畜生！ なんて数だ！！！」

「無駄口叩いてないで、さっさと手を動かさな！！」

「火の雨を降らせるんだよ！」

「頭！ 準備完了でさ！」

「放て放て！！ 皆殺しにしろ！！」

「遠慮はいらねえぞ！」

矢が雨の様に魔物の頭上に降り注ぐ。

悲鳴を上げ数体が倒れ伏すが、それを乗り越えて魔物は進軍してく

る。

何かに操られているかのように、ただ前へと。

罨が作動し、胴体を裂かれた者。

身体が炎上し、焼け爛れている者。

死体を盾にして、前へ。ただ前へ。

いよいよ防護柵へと魔物が接敵する。

舞い上がる砂塵を睨みながら、ギルドマスターロブが声を張り上げる。

「良いか！ さっきも話したとおり、赤い奴には魔法が効かねえ！俺達が始末するしかねえんだ！

一人で当たるな、必ず複数で掛かれ！！」

「おう！！」

「ぶっ殺してやる！！」

「決して深追いするな！ 柵を利用して連携して当たるんだ！！」

棍棒を構えたオーガが突撃してくる。

その下には目を血走らせたネズミ共。

滅びたはずのオークの姿まである。

「グオオオオオオオツ！！」

「野郎共！ ぶっ殺せ！！」

柵にそのままぶつかり、数名の人間が押しつぶされる。その上から剣を突き刺し、槍がオーガの急所を貫く。ネズミが群で飛び掛かり、哀れな男は首筋を食いちぎられる。

「ぎゃああああああ!!
だ、誰か助けてくれ!!」

「こいつめ!!」

ネズミを払い落とし、一匹ずつ踏みつけて殺す。男は手で首を押さえ、血が流れ出るのを必死で止めている。

「後方へ運べ! 柵を立て直せ!!
絶対に突破されるな!」

「で、でも数が」

「うるせえ! いいからやるんだ!
泣き言なんか聞きたくねえ!」

剣でオークを突き刺しながら、ロブは怒声を上げる。後方には、計り知れないほどの魔物の姿が見える。

「押し返せ! 包囲を突破されるな!
足止めしてりゃ範囲魔法で始末できるんだからな!」

「わ、分かった!」

魔物の後続は魔法と弓の攻撃により抑えられている。

今は、まだ。

ルイーダの酒場の一室。

アレルは今までの大体の経緯を、エーデルとルイーダから聞いていた。

ベッドに座り込みながら、口元を歪める。

「へえ。私が寝てる間にそんなことがあったんだ」

「そう。街中大騒ぎ。」

残っているのは逃げ遅れた奴、自殺志願者、後は勇敢な戦士たちって所ね」

「じゃあアンタ達は自殺志願者って訳か。揃いも揃って物好きね」

アレルは呆れた顔で両者を見る。

エーデルは首を振ると、言った。

「私は、行くわ。死体がウジャウジャ転がってるでしょうし。今いかなきゃ死霊術師の名が泣くもの」

「……………」

「でも、貴方は別。貴方は違う。

私は私。貴方は貴方だもの。

避難するなら、途中まで送っていくわ。

今すぐ街から出ないと間に合わないから」

「勿論殺しに行くわよ。今すぐ準備を」

アレルは立ち上がろうとして、動きを止める。

中腰状態で、頭を右手で抑えると、唇を噛み締めた。血が、唇から流れ落ちる。

「アレルさん？」

「……………ッ!？」

「アレルちゃん、大丈夫!？」

「だ、大丈夫。何でもない。本当に何でもないわ。

……………エーデル、『痛み止め』持ってきてくれる？
あるだけ全部よ。後、水もね」

僧侶ギルドの男が置いていった『痛み止め』の薬。
アレルはエーデルに持ってくるよう指示を出す。

「どこか痛いのか？ 症状を話して頂戴。」

対処しないと」

「良いから早く持って来なさいッ!!
時間がないんでしょうが!!」

アレルが怒鳴り声を上げると、ルイードが奥へと駆け出していく。

「……………アレル」

「余計な事は、一切言わなくて良い。

エーデル、何も言わないで。

それと、この本はアンタに預けておく。

燃えないように、無くさないように、大事に、持ってて頂戴」

アレルが横に転がっている本を、無造作に放り投げる。

慌てて受け取るエーデルを見て、少しだけ笑った。

「アレル、あ、貴方」

「ア、アレルさん。お薬、持ってきたけど」

「ありがとうございます。渡して」

小瓶を無理矢理に受け取ると、掌に大量に取り出す。

「ま、待ちなさい!!」

「いいのよ」

黒い丸薬を、一気に飲み込む。

そして水で流し込んだ。

「馬鹿なことを！ 今すぐ吐き出しなさい！」

「うるさいわね。」

もう私は行くわよ。こんな時にのんびりしてたら、勇者失格よ。

ほら、邪魔よ邪魔」

アレルは身体を押さえ込もうとするエーデルを跳ね除けると、

台座の『皮の鎧』と『鋼の剣』を身に着けた。

目を瞑り、一度だけ大きく深呼吸する。

震える身体を、食いしばることで押さえ込む。

「さて行くとするか。また、地獄にね」

「ま、待って！」

エーデルの阻止は無視する。

呆然とするルイーダを尻目に、アレルは階下へと移動する。

武装した冒険者達が、何事かと目を丸くしている。

無言で一瞥すると、酒場の扉を開け放つ。

「やあアレル。元気になったみたいだね。
良かった良かった。本当に良かったよね。
無理矢理連れて帰ろうかと思ってた所だよ」

羽根付き帽子の少女はアレルに声を掛ける。

そして、後方から駆けつけてきたエーデルを、満面の笑みで睨みつけた。

「全部殺すまで、私は下がりませんよ。
第一、どこに下がるって言うんですか？
フツッ、アハハハッ！！」

「お、おい！」

「死ね死ね死ねッ！！」

剣を振るうたびに、魔物の首が飛ぶ。

マタリは血飛沫を浴びながら、嬉しそうにその道を歩いていく。

「馬鹿娘が！！ おいつ！ 援護してやれ！！」

ジャバが相棒の僧侶に声を掛けると、治癒の呪文を唱え始める。

マタリの身体を淡い光が包み込み、少しずつ傷を塞いでいく。

本人は気にしてはいないが、その鎧は傷だらけでその使命を為していない。

身体からは赤いものが流れ出て、地面へと滴り落としている。

「アハハハッ！！」

全員、兄上にいる煉獄へ叩き込んでやるッ！！

炎に撒かれながら、仲良く懺悔するが良い！！」

「退路が絶たれるぞ！！ 聞こえてたら戻れ！！

おい、マタリ！！ 死にたいのか！！」

ジャバの声は既に聞こえていない。

高揚する精神は、敵を殺すことだけに集中しているのだから。

それはマタリが力尽きるまで続くだろう。

「エレナ様、前面の戦士隊の損耗が激しく、このままでは崩壊します!!」

「予定より早いですが、控えの兵を投入しなさい。

困いを破られるわけにはいきません。

後退し、体力回復後に復帰するように」

「はっ!」

伝令が去り、別の伝令が駆けつける。

「矢が間もなく尽きます! レンジャー隊は前線への移動を希望しています!」

「許可します。全てジャスミンの裁量に任せると伝えなさい」

「了解しました!」

エレナは一度だけ、姉代わりの顔を思い浮かべるが、すぐに脳裏から消す。

そして後方の星銃を睨む。

「星銃の発射間隔が開き始めているのは何故か!？」

「魔力の消耗が激しく、回復するまでに時間が掛かっております。

秘薬を用いています。これが限界です」

「私も魔力装填を手伝います。

これでも赤き衣の末裔。役に立てるはず」

思いがけない言葉に、幹部は血相を変えて反対する。

「なりません！ エレナ様に万が一があつては教団存亡に関わります！
この本陣にて待機されますように！！」

「どこにいても同じことです！！
すぐに向かいます！！」

エレナが押しつけようとしたその瞬間、
前方の味方から悲鳴のような叫び声が発せられた。

「ド、ドラゴンだ！！ 赤いドラゴンが現われたぞ！！」

「ひ、ひiiiiiiiiiiiiッ！！！！」

「も、もう無理だ。た、助けてくれ！！」

逃げ惑う兵士達。

武器を捨て、脇目も振らずに潰走する。

上空に身を翻す赤き竜。

アークドラゴン。赤い皮膚に巨大な身体。

2枚の羽根を轟かせ、その姿を誇示するかのよう飛び回る。

「落ち着きなさい！！ 星銃の標的を赤き竜に変更！！
大地に叩き落しなさい！！」

「しかし、赤き魔物に魔法は」

ニカラグが忠告するが、他に迎撃の手段はない。
エメラルドが首を横に振る。

「他に手立てはありません！

火力を集中させて、とにかく引き摺り落とすのです！」

「りよ、了解しました！」

「ひ、火を吐くぞ！！ 全員伏せるッ！！」

その指示が届くよりも早く、赤き竜の口から炎が舞い上がる。

土塁の奥に設置されている星銃を睨みつけると、火炎弾を発射した。

灼熱の炎は星銃と装填作業中の魔術師達を焼き尽くす。

彼等は苦しむ時間すらなく、瞬時にして炭化した。

「あ、ああ。せ、星銃が。わ、我等の切り札が」

「エレナ様！ お気を確かに！」

「た、態勢を立て直さないと。で、でもどうやって。

竜を、お、落とす手立てはない。ど、どうすれば良い。
か、考えないと」

「エレナ様！！ とにかく避難を！」

衝撃で錯乱しかけているエレナを連れ、ニカラグ達は後方へと退避する。

エメラルドは竜を凝視すると、その姿を脳裏に焼き付けた。伝説の竜。最下層に封印されていると噂されていた幻の存在。

それが今蘇るとは。悪夢以外の何者でもない。

空を飛び、魔法耐性を付け、その膂力は凄まじい。

人の手でどうにかなるとはとても思えない。

「グオオオオオオオオオオオオツツ!!」

竜の咆哮が木霊する。

人間達は絶望し、魔物達は歓喜の雄たけびを上げる。

竜の灼熱の炎は、広場に設置してある全ての星銃を破壊し、焼き尽くした。

押さえ込んでいた迷宮入り口の障害は取り除かれ、

闇の深淵から魔物達の行進が再開する。

大司教イルガチエフと、子飼いの教徒数名が地上へと姿を現す。全員『緑の衣』を身に付け、誰もが至福の表情を浮かべている。

「エレナめ、中々やるではないか。

たかが小娘と、少々侮っていたようだ」

面白そうに呟くイルガチエフ。

部下の一人が赤き竜を指差す。

「ですが、アークドラゴンの投入により、全てが終わりました。星銃は破壊され、魔物の波を食止める術は最早ありません」

「イルガチエフ様、おめでとうございます」

「ククク、まだ喜ぶのは早い。まだ肝心な星塔を落としておらぬ。祝杯を挙げるのはそれからにするでしょう。そういえば、レケンはどうした？」

「結界解除後、拘束され消息不明です。恐らく、始末されたかと」

「それは手間が省けたというものの。最期まで愚かな奴だったな」

「所詮は没落貴族。アートも終わりですな。街も、一族も。全て燃え尽きる」

笑い声を上げる。部下達もそれに続いて嘲り笑う。ただの手駒。それ以上でもそれ以下でもない。

「それでは、私は星塔に行くとしよう。既に勝敗は決した」

「この場はお任せを」

子飼いの中でも最も優秀な教徒、コスタが進言する。顔を愉快そうに歪ませると、重々しく頷いた。

「よかろう。下賤な輩を皆殺しにせよ。

一人も見逃すな。この街を灰燼とするのだ。

私は星塔を落としに向かう。竜は貴様に任せる」

「はっ、必ずや」

「それでは行くとしよう。教団を我が手に取り戻す。

教祖の座は、私にこそ相応しい。

闇の衣を纏いし、このイルガチエフこそが頂点に君臨するべきなのだ」

イルガチエフは魔物の一団を率い、星塔方面へと進軍を開始する。

食止めようとした戦士達は、ロストスペルにより悉く焼き尽くされ、屍は爆散した。

防護柵は踏み破られ、土塁は瞬く間に崩され、魔術師達は一撃の下に屠られる。

包囲網の一角は容易く破られ、決壊した部分から浸食を始めていく。

側面からの攻撃を防ぐために兵力を取られ、前面の防御が薄くなる。迷宮地下からは未だに魔物が這い出てくる。

兵士達の気力、体力、魔力は消耗するが、魔物達は疲れを知らずに前進あるのみ。

最早、形勢は誰の目にも明らかだった。

「帰る？ 一体どこに帰るのよ」

アレルは鳥頭に問いたです。

笑みを崩すことなく、少女は答える。

「勿論、元の世界にだよ。ここはアレルのいるべき世界じゃない。自分でも分かっているでしょう」

「知らないわ。それに、あの世界に未練なんてないしね。

私を利用するだけ利用した屑ばかりだもの。

どうなるうが知ったことじゃないわ」

「そうだね。でも、この世界でもそれは変わらないよ。

自分達の都合で、アレルを『戻した』んだよ。

こんな世界も、どうだって良いじゃん。

そうでしょ？」

少女は笑みを消すと、無表情でアレルに言った。

エーデルが顔を背ける。

「……………」

アレルは押し黙る。

「ルビスも待ってるよ。アレルが帰ってくるのを。」
『こちら』で、いつまでも穏やかに暮らそうってね。」

「ルビス？」

「そうそう。最近特に煩くてさ。
アレルと一緒にお茶したいだの、お話したいだの。
自分の立場と、歳を考えろっていう話だよね。
まあ、それはどうでも良いんだけど。」

アレルはルビスの顔を思い出す。
取り合えずぶん殴ろうとしたら、さっと消えたので良く覚えていない。

なんだか能天気な表情をしていた気はする。
目の前のこの鳥頭のように。

「……それで、アンタは誰なわけ。
大体想像はつくけど。」

「ひどいなあ。バラモス城のこと、私は今でも覚えているのに。
懐かしいなあ。本当に懐かしい。」

「……………」

「まあとにかく帰ろうよ。これからこの街は地獄になる。
戦いはもう終わったようなもんだよ。人間達は全員死ぬ。
早くしないと、私達も巻き込まれちゃう。ってイテテ!!」

アレルは思わず少女の頬を抓る。

手加減なしで、思いっきり。

「だから、アンタと楽しくお喋りしている時間はないのよ。私は『お祭り』に行かなくちゃいけないからね。というわけで、アンタ一人でとっとと帰れ」

抓るのを止めた後、しっしっとして手で追い払う。

その拍子に、少しだけ身体がフラつくが、アレルは顔には出さなかった。

「そんな身体で？ わざわざ自分から苦労していくの？

この世界に来た時、アレルは『楽しんで生きて行こう』って決めたくない。

今度こそ、好きなように気分に生きるって。

それなのに、どうしていくのかな。全然理解できないな」
頬を押さえながら、少女が問いかける。

「アンタが鳥頭だからでしょ」

「アレル、真剣に答えて欲しい。

どうして、そこまでするのか。

命を掛けてまで、戦おうとする理由。

我が友よ、是非教えて欲しい」

アレルの言葉に、少女は口調を変えて更に問いかける。

その問いに、悩む素振りすら見せず、アレルは強く言い切った。

「 私が勇者だから。それだけよ。

後は、魔物が我が物顔で徘徊するのがムカついて仕方がないのよね。

生理的に耐えられないのよ。
というわけだから、さっさとどいて頂戴。」

少女は一瞬ポカンとした後、腹を押さえて笑い転げ始めた。
身体が汚れるのも構わずに、ゴロゴロと。
エーデルは呆気に取られている。

「フフ、アハハハ！ 流石はアレル。馬鹿なのは相変わらずだ！
『どうして？ 勇者だから』って答えになってるようでなっていないし！

そんなんだから、一人で大魔王を倒そうだなんて考えるんだね！
本当に馬鹿だ。大馬鹿だよ」

少女の嘲笑に、思わずアレルの顔が赤くなる。
拳を振り上げようとした瞬間、少女が大きく首を縦に振った。

「でも、仕方ないね。うん。私も付き合おうよ！」

「ちよ、ちよつと。何を」

「でも、勇者の癖に、そのみすばらしい格好は頂けないね。
皮の鎧に鋼の剣じゃ、様にならないし。

良い物持ってきたから、今すぐ取替えてよ！」

少女が両手を前に出すと、強い光が放たれる。

羽が何枚も舞い上がるのと同時に、見覚えのある剣と鎧が姿を現す。

「……これは」

剣を手に取り、刀身を確認する。

「稲妻の剣と、雷神の剣。それに光の鎧。私に預けっぱなしだったでしょう。全く、私は預かり所じゃないんだからさ」

「刃の鎧と王者の剣は？」

「両方とも『伝説の装備』として嚴重に隠されちゃったよ。般若の面は別の意味で隠されてるけど。アレつけて戦うなんて、本当馬鹿だよな」

あの刃の鎧が、伝説の装備となった。他人を寄せ付けない、歪な刃が何枚も付いているアレが。更には般若の面も保管されているとは。確かにどうかしている。

アレルは苦笑を浮かべる。

そして時間がないことを再度思い出し、その場で皮の鎧を外し、光の鎧へと着替えていく。胸には口トの紋章。勇者の証が輝いている。2刀をそれぞれの手に取り、力強く振りかざす。

「……………」

激痛が走り、左手の稲妻の剣を、落としてしまう。少女はそれを拾い上げ、アレルに優しく手渡した。

「……………それでも、行くんでしょう？
勇者は行かなくちゃいけないんでしょう？」

「 勿論よ。アンタ、また乗せてくれるの？
歩いていくのは、少しだるいのよね。
寝起きで、ちょっと疲れてるのよ」

「当たり前じゃない。私の背中は、当分はアレル専用だよ」

小さな背中をトントンと叩く少女。

年寄り臭い仕草に、思わず吹き出した。

「何よそれ」

「私が覚えている間はね。だって『鳥頭』だし」

白い歯を見せて微笑むと、少女は後方へと一回転する。

そして先程よりも、一際強い光を放ち、その姿を変えていく。

少女の姿から、巨大な不死鳥へと。

伝説の不死鳥ラーミア。主を見つけた喜びから、威勢よく声を響かせる。

アレルは慣れた様子で飛び乗ると、エーデルに向き直った。

「それじゃあ行くわ。今まで、ありがとう。」

アンタ達との冒険、結構楽しかった」

「ア、アレル。わ、私は、貴方を」

言葉を震わせるエーデルに、微笑みかける。

「余計な事は言うなと言ったでしょう。」

大丈夫。しっかり皆殺しにしてくるから。

こういうの慣れてるから、何も問題ないわ。
ね、ラーミア」

アレルの声に、同意を示す怪鳥。

その目は威嚇するかのように、エーデルを睨みつけている。
ラーミアは、彼女を許してはいない。
嘴を叩きつけ、堪えている。

「アンタの背中も久々ね。
さ、行つて。屑共が私達を待つてるわよ」

アレルが背中を擦ると、ラーミアは翼を羽ばたかせ始める。
烈風が酒場の扉を打ち付け、吹き飛ばす。
その音に、酒場にいた冒険者、マスター、ルイーダが何事かと飛び
出てくる。

「な、ななななんだこりゃ!？」

「と、鳥?」

「綺麗だなあ。星のお迎えかな。

……飲みすぎだな、ウエツプ」

「馬鹿! こりゃホンモノだ!

あ、アレル。こいつは一体なんだ!？」

「……ふ、不死鳥ラーミア?

勇者アレルとラーミア。そしてロトの紋章。

や、やつぱり、伝説は。

あ、貴方は」

口元を押さえて驚愕するルイーダを、アレルは面白そうな顔で眺める。

脚で大地を蹴ると、ラーミアは力強く飛翔した。後に残されたのは、呆然と立ち尽くす人々。

アレルは齒を食いしばりながら、途切れそうになる意識を繋ぎ止める。

全身を突き刺すような痛み。積み重なったものだろうか。それとも、精神的なものだろうか。

もしかしたら、もう限界なのかもしれない。

今までが異常だったのだ。

死んでも死なない。何度でも蘇る。

バラモスも呆れていたではないか。

そんな馬鹿な話はない。

きつと、いつか終わりが来るのだ。

アレルは柔らかい巨体に抱きつきながら、小さく呟いた。

「フツ。最期はどんなのが相手かしら。

竜の王、破壊神、大魔王。きつとんでもないのが相手よ。

楽しみ。本当に楽しみね」

黒煙が上がる、迷宮広場へと全速力で飛んでいく。

業火を撒き散らす赤い巨体を見つけると、アレルは嬉しそうに笑った。

第二十八話 勇者とラーミア（後書き）

少女の正体はラーミアでした。

火達磨になった哀れな獲物達は、絶叫しながら踊り狂い、後続の魔物の餌食となる。

竜の餌食となるのは戦士達だけではない。

冒険者達で賑わいを見せていた大通りは炎上し、逃げ遅れた人々がその身を焼かれていく。

マタリは、周囲を殺気立つ魔物に包囲されていた。

味方は総崩れ。陣形は完全に崩壊し、連携は寸断された。

孤立した味方が各個撃破されている今、もはや敗北は避けられないだろう。

今出来ることは、態勢を立て直す時間を稼ぐことぐらいである。

マタリは精神を極限まで研ぎ澄まし、大剣を振りかぶった。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

息を吐かせぬ連続攻撃。

太刀筋が残像を残しながら魔物を容易く切り裂いていく。

前後左右、巨大な大剣を易々と振るいながら、笑みを浮かべながら突き進む。

奥義五月雨斬り。マタリはこの窮地で会得することに成功した。

まるでナイフを振るうかの如く、紅い刀身は獲物の首を刈り取っていった。

積み重なる魔物の死体。

マタリの身体は返り血で赤く染まりきっていた。

「キシヤアアッ！！」

怒り狂った赤いトルルが、突進してくる。

膨れ上がった脂肪に大剣を突き入れると、トルルは悲鳴を上げる。

そのまま刀身を掴むと、その身を犠牲にマタリに全体重を掛けて押ししかかってきた。

地面へと押し倒されるマタリ。

力を籠めて、トルルの内臓を抉る。

「ッ！ この！」

「グ、グゲ。クケケケケケケケ！！」

トルルは嗤いながら死んだ。

マタリは死体をどかさうともがくが、余りにも重い。

周囲からじりじりと、迫ってくる魔物の群。

棍棒、槍、手斧を嬉しそうに打ち鳴らしながら。

渾身の力で死体を横に薙ぎ払い、ようやく拘束から逃れることが出来た。

乱れる呼吸を隠すことが出来ない。目が霞む。足が震える。

剣が、重い。

「ハアツ、ハアツ、ま、まだ、まだいける！」

今までの疲労が、一気に押し寄せてきたのだ。

気分を高揚させて、体力消耗を誤魔化してきたツケが回っただけのこと。

それでも自分は最後まで戦いぬかなければならない。

一匹でも多くの魔物を道連れにする。
剣を握り締め、再び構えを取る。

周りを見ると、魔物達が慌てて後退し距離を取り始める。
襲い掛かってくると思っていたマタリは拍子抜けする。
が、凄まじい殺気を感じて後方を振り返る。

正しくは、後方の上空だ。

赤い竜が、口に業火を迸らせている。
その視線はマタリを完全に捉えている。
巨大な翼を広げ、灼熱の凶弾が今まさに放たれようとしているのだ。
回避することは不可能だろう。

「……………ここまでか。ごめんなさい、アレルさん。
やっぱり、私だけじゃ、無理だったみたいですよ」

大剣を地面に突き刺し、膝を付く。
大きく息を吐き、マタリは静かに目を閉じた。

「やれやれ、寝起きには辛いわ。

最初はスライム程度にして欲しいわよね。

「アンタもそう思わない？」

息を荒げながら、アレルはラーミアの背にもたれ掛かる。

霞が掛かった視界から、地上を見下ろすと嫌になるほどの魔物が展開している。

大きく溜息を吐くと、さてどうしたものかと考えを巡らす。

一匹一匹片付けていくほどの時間と体力はない。

かといって時間を掛ければ街は完全に飲み込まれるだろう。

空を見上げる。

眩しいばかりの太陽が輝いている。

（これならいけるかな。地上なら、詠唱して溜めれば）

残り少ない精神力を掻き集め、再び集中する。

ラーミアが鳴き声を上げて警告を発してくるが、アレルは無視する。範囲は迷宮前広場一帯。円を描く様にイメージする。

赤い奴には効果が及ばないだろうが、それでも形勢は変わるはずだ。剣を十字に交差させ、祈りを籠める。

誰に対して祈っているのか。アレルにも良く分からないが、心から念じる。

「^{トヘロス}破邪呪文！！」

いつまで経っても身体が炎に包まれることはなかった。
マタリは恐る恐る目を開けてみる。
目の前には、驚愕の形相を浮かべている竜の首があった。

「え？ え？ ええっ!？」

「ぼさつとしてるとぶん殴るわよ。

ほら、さつさと腕を動かさなさい、この猪娘!！」

呆れ気味に叱り付けてくる聞きなれた声。

マタリは目蓋をこすって、思わず凝視する。

青い水晶の額当て。白銀に輝く荘厳な鎧。

名のある物に違いない、見事な二振りの剣。

勇者アレルの姿がそこにはあった。

天道虫のブローチがくつついたマントを翻し、

赤い魔物を瞬く間に屠っていく。

何故か動きが遅くなっている魔物達を、

剣から迸る爆炎と業火で一網打尽にする。

アレルを中心に、魔物達は瞬く間に命を散らしていくのだ。

「あ、あ、アレルさん!! もう大丈夫なんですか!？」

「当たり前でしょ。ちょっと寝てただけよ。ほら、そっちはアンタに任せたわよ」

その声に正面を振り返る。

身体を重そうにしながら、剣を翳そうとするオークがいた。マタリは容赦なく頭部を叩き割る。

「ド、ドラゴンもアレルさんがやったんですか？」

「寝起きにはしんどかったけどね。

後でドラゴンステーキでも食べましょう。

意外に美味しいかもしれないわよ」

笑みを浮かべると、回し蹴りを放ってネズミを粉碎する。

槍を突き入れてくる赤いリビングアーマーを、

余裕のカウンターで鉄屑に変えた。

「な、なんだか、魔物の動きが悪いような」

先程とは違い、余りにも鈍重な魔物の動き。

マタリは剣を突き入れながら、疑問の声を上げる。

「少しインチキしたからね。

ぶっ殺すのは今のうちよ。後ろの奴等はこないの？」

アレルが指差した方には、呆気に取られた味方の戦士達がいる。

何が起こっているのか理解できないようだ。

ドラゴンを討ち取り、魔物をまるで羽虫のように蹂躪していく少女。態勢を立て直す絶好のタイミングだというのに、言葉を失い立ち尽くしてしまう。

「へ、へへっ。ようやく勇者様のお出ましか。全く、遅すぎるってんだ。」

野郎共、押し返す最大の好機だ!!

レンジャーギルドの名前を汚すんじゃねえぞ!!」

「おう!!」「勝負はこれからだ!!」「頭、いきましよう!!」

「その意気だ!! 糞つたれ共を押し返してやれ!!」

手当たり次第にぶっ殺せ!! おらああああああ!!」

「うおおおおおおおおおおおお!!」

カンダタが部下を一喝し、気合を注入する。

周りの魔物は完全に弱体化し、赤い魔物のみ注意を払えば良い。

外と内からの挟み撃ち。しかも最強の人間が暴れまわるのだ。

大魔王を討ち取った伝説の勇者。

「あ、あれが勇者なのかい？」

巨大なドラゴンを簡単に……」

「当たり前だ。たった一人で大魔王をぶっ殺して世界を救った女だぞ。」

あんなドラゴン朝飯前だ」

「アンタ、あの娘のこと知ってるの？」

「へっ、昔の事は忘れたぜ。」

とにかく、今はこいつらを押し返すのが先だ。
おらおら、カンダタ様のお通りだ!!!」

大斧を手に、カンダタは巨体を揺らして突撃する。

腰の手斧を抜き放ち、アークデーモンの額に突き立てる。

レンジャー部隊が態勢を整え、突撃を敢行。

それに続くように、孤立していた部隊も反撃を開始した。
犠牲を出しながらも包囲を再構築していく。

戦況の変化を見届けたエレナは、

正門に配置してある最後の守りを投入することを決断。

星銃、全教団兵を投入、劣勢の巻き返しを図る。

情勢は一気に人間側に傾いた。

「ど、どうなっているのだ。

イ、イルガチエフ様からお預かりしたアークドラゴンが。

こ、この失態、一体どうすれば良いのだ」

緑の衣を纏った、イルガチエフ子飼いの教徒コスタは狼狽しきって
いた。

ドラゴンが何者かによって首を落とされた後、眩い光が広場を埋め
尽くしたのだ。

進軍していた魔物達は動きが止まり、全滅寸前だった守備隊達に反
撃される始末。

強化した赤き軍団は影響は受けていないが、

それだけを狙い撃つように、先程から2刀を操る小娘に殺戮されて
いる。

繰り出される反撃を、まるで歯牙にもかけないかのように、容易く屠られていく。

その速度は凄まじく、瞬間間に一掃されていくのだ。化け物。その言葉以外に当てはまるものがない。

「ち、地下からの増援が止まっているのは、何故だ！！どうして出てこない！！」

迷宮入り口に当たる階段へと目を向けると、

巨大な怪鳥が、鋭い目つきで睨みを利かせている。

時折その嘴から煉獄の炎を繰り出すと、地下から低い悲鳴が響き渡る。

「　　そ、そんな。こんな馬鹿な」

「馬鹿はアンタでしょ。」

戦闘中に他所見するなんて、随分余裕だったみたいね」

振り向こうとした瞬間、腹部から剣先が突き出てくる。

口から血が溢れ、緑の衣を汚していく。

呪詛を呟く間もなく、返す刀で首を斬り飛ばされ、コスタは絶命した。

「ハアツ、ハアツ！　だ、大分片付いたみたいね。
……ちよつとだけ休憩するわ」

アレルはその場に崩れ落ちると、肩で息をする。
顔は病的なまでに青白く、血が通っていないかのようにだ。

「アレルさん！　大丈夫ですか！？」

「私の事は良いから、入り口を制圧しなさい。
アイツもいつまでも抑えてはいられないわ」

ラーミアの炎を迸らせる間隔が短くなっている。
地下からの敵が数を増している証拠だ。
このままでは再び突破されてしまうだろう。

「で、でも」

「うるさい。良いから行け。それがアンタの仕事でしょうが」
駆け寄るマタリを押しつける。

その力が余りに弱弱しかったので、マタリは驚く。
顔色を窺うと、血の気がなく、身体も震えている。
息は乱れ、剣を支えにしてようやく態勢を維持しているかのようにだ。

「わ、私は」

「行きなさいマタリ。私の事は良いから。
さあ、早くしなさい！！ 振り返るな！」

マタリはゆっくりと立ち上がると、怪鳥の方へと向かいます。
一度だけ振り返ると、大剣を翳して走り出していった。

アレルはその背に向かって、バイバイと小さく呟いた。

ゆっくりと辺りを見渡す。

指揮していた人間は討ち取り、広場の魔物は大分数を減らすことに成功した。

人間達は再び囲いを築き、徐々に距離を狭めて、魔物を殲滅していく。

その中から、見覚えのある大男が部下を引き連れてアレルの元へ駆けつける。

「アレル、今回も助かったぜ。流石は勇者様だ っ、大丈夫か
!?!」

「声が大きいのよ。脳に響くから静かに喋りなさい」

「す、すまねえ。でも、お前、顔が真っ青だぞ!!」

「ちょっと張り切りすぎたわ。

……私は良いから、入り口を」

カンダタは合図を送り、入り口へと増援を向かわせる。

ジャスミンが駆けつけ、アレルの様子を伺う。

「大丈夫かい、アンタ！ 今治療を」

「慣れてるから、大丈夫よ。

怪我はないしね。勇者だから、大丈夫なのよ」

「勇者だって、人間じゃないか。
そんな無茶が続くわけが」

ジャスミンはアレルの身体に触れる。

余りの冷たさに、思わず絶句した。

まるで、死体に触れているかのようなからだ。

「人間の前に、勇者なのよ。
知らなかった？」

アレルは立ち上がる。

もう精神力は空っぽ。ホイミすら使えないだろう。
袋から薬草を取り出すと、貪りつく。

身体が受け付けず、嘔吐する。

「オエツ！ ゲホツ！！」

「少し休んだ方が良い。

ほら、エレナが増援を率いてきたよ。

アンタは、体力を回復させることが大事だよ。

『勇者』の役目はもう十分に果たしたじゃないか」

ジャスミンは説得する。

このまま行かせては、この少女は死ぬ。
死に場所を求めている。
そんな予感がしたからだ。

教祖エレナは本隊を投入し、負傷者を回収していく。
防護柵を構築し、ラーミアが防いでいる階段周囲を簡易結界で覆っ
ていく。

死霊術師エーデルは、エレナ、エメラルドの許しを得て
魔物の死体、人間の死体の操作を始める。
星銃により魔素の強化を得た死霊術。
死の軍団が地下から這い出る魔物とぶつかり、死闘を繰り広げ始め
る。

「……貴方が、勇者アレル、ですか？」

赤き衣を纏ったエレナが、憔悴しているアレルに声を掛ける。
ドラゴンを屠り、たった一人で戦況を覆した人物だ。
最早飯の勇者などと言う事は出来ない。
間違いなく、勇者である。

「アンタ誰？」

「私は教祖エレナ。エレナ・アーク。
この街の代表にして、スリースター教団の指導者です」

真面目そうな少女の顔を眺めた後、

纏っている赤い衣を凝視する。

見覚えのある真紅のローブ。

アレルの脳裏に、一人のイカれた魔術師の姿が浮かぶ。

(……アークマジ?)

この世界に自分を落とした元凶。

名前にアークが入っているからといって、

つながりがあるとは思えない。

が、考えとは別に、手が勝手に動いた。

「……ていつ」

「い、痛ッ！ な、何をされるんですか!？」

アレルの拳骨がエレナの頭部にヒットする。

いきなりの非礼な行為に、エレナは思わず叫んでしまった。

「迷惑料よ。それより、敵のボスはどこにいるの？
まさか迷宮の下とか？」

いきり立つ警護兵を手で遮りながら、
エレナはその問いに答える。

もう片方の手で、頭を擦りつつ。

「……敵の首領は異端イルガチエフ。
教団の大司教だった男です。」

戦いの最中、囲いを突破し教団本部『星塔』へと向かい占拠したよ

うです。

これから私が別働隊を率い、討ち果たしに向かいます」

「そいつを倒せば、この魔物達も退くわけ？」

「この異変は魔素を大量に注ぎ込んだ『闇の衣』の効果によるものです。」

それを打ち払えば、魔物達の洗脳効果は消え、彼等は退散していくでしょう。」

ですから 「

「なんだ。そんなことで良いんだ。それを早く言いなさいよ」

よっこいしょ、と立ち上がると口笛を吹き鳴らす。迷宮入り口からラーミアが飛び立ち、アレルの元へやってくる。

「後は私達がやります。その身体では無理です。立っているのさえやっとではないですか」

「闇の衣が本物なら、アンタ達の手には負えない。乗りかかった船よ。最期まで面倒見てあげるわ」

剣を携えると、ラーミアの背に飛び乗る。

落ちようとする意識を堪え、眼をしっかりと開ける。きつと、落ちたらもう帰ってはこれないだろう。

何の確証もないが、そんな気がしている。

蠟燭は、もう残り僅か。

「ラーミア、星塔に向かって頂戴。
それで、私を降ろしたら、好きにして良いわ。
今まで、ありがとう」

背中を軽く撫でると、ラーミアは翼を更にはためかせて速度を上げる。

目指すは星塔最上階。

「馬鹿となんとかは高いところが好きなのよ。
だから、きつと一番上にいるわ。勇者の勳よ」

余計な雑魚と戦って消耗する時間はない。

一撃で殺す。問答無用で殺す。

袋から薬草を取り出し、吐き気を堪えながら無理やり飲み干す。

「アレルさん」

「……アレル」

マタリとエーデルは、飛び去っていく不死鳥の姿を見届けた。

最上階に存在する星柩の間。
歴代の赤き衣が、大魔王ゾーマ復活の為に祈りを捧げた場所でもある。

魔方阵が何箇所にも描かれ、魔力を増幅する効果を發揮している。

「何故だ。何故このような事態になった!?
我が闇の衣は、全てを凌駕する『力』をもたらす筈だ!」

イルガチエフは怒声を上げる。

緑の衣を纏い、その周囲には黒いオーラが漂っている。

『闇の衣』を展開し、魔物の操作を行っている証である。

「……落ち着くのだ。現に星塔は占拠している。

ここで持ちこたえれば、いずれは地下から再び波が押し寄せる。

魔物を一匹ずつ召喚し、防備を固めるのだ」

星塔内部に、最下層に存在する魔物達を配備する。

いずれも凶悪な魔物達だ。

杖を翳し、再び魔物を召喚する。

最下層より、更に進んだ場所に存在する失われた存在。

緑の皮膚を持つトルル。

魔法耐性はないが、凶悪な臂力を誇るトルル族のボスである。太刀打ちできる人間などいる訳がない。魔法を詠唱している間に、この巨大な拳が顔面を叩き潰すのだから。

「行け、ボストロールよ。」

決してここ『星枢の間』に敵を立ち入らせるな！」

命に従い、巨体を揺らして星枢の間から出て行く。落ち着きを取り戻したイルガチエフは、瞑想する。切り札であったドラゴンを失ったのは痛い。一体どうやって落としたのか。

レケンの言葉が脳裏を過ぎる。

勇者を名乗る小娘。

(そんな馬鹿な。勇者などいる訳がないッ！)

その瞬間。

最上階に断末魔の叫びが響く。

小さな足音が近づき、やがて止まる。

堅牢な扉が蹴り飛ばされる。

そこから現れたのは、青白い顔をした少女。輝かしい鎧を身につけ、不敵に笑っている。

「アンタにプレゼントがあるの。」

懐かしい奴に会わせてくれて、ありがとう」

そういうと、何かをこちらに投げつけてくる。
それは首。緑の皮膚の醜い顔。
苦悶を浮かべ、長い舌を出しながら絶命している。

「……貴様、何者だ？」

「勇者。勇者アレル」

「勇者だと、馬鹿馬鹿しい。

……馬鹿馬鹿しいぞ、小娘めが！！

ロストスペル、メラゾーマ！！」

杖から上級火炎呪文を迸らせる。

アレルは雷神の剣を軽く振り、業火をぶつけることで相殺する。
炎はポストロールの首に引火し、徐々に焼け爛れていく。

「ロストスペル、マヒャド！！」

氷の礫に対しては、稲妻の剣で爆砕することで打ち破る。

「……最期の戦いが、身の程を弁えないエビルマジ。
ふふっ、冴えない敵ね。

やっぱり、ゾーマと相果てるべきだったかな」

「ふざけるな！！ ロストスペル」

「……うるさい」

アレルは稲妻の剣を投擲し、イルガチエフの右腕を斬り飛ばす。
杖から光が放たれたまま、部屋の隅へと転がっていく。

あああああああああああああッッ!!」

刃がアレルの胸を舐ぐ寸前に、
右脚がイルガチエフを蹴り飛ばす。

左腹部を強打され、身体は壁面へと打ち付けられる。

「や、闇の衣は。私の闇の衣はこんなことではッ!」

「雑魚が何を纏ったところで、所詮は雑魚。

しかも闇に取り憑かれて、己を見失ってる始末。

いつからそうなったのかは知らないけど。

アンタ、本当に救えないわね」

「だ、黙れ! 私は教祖なのだ。教祖イルガチエフなのだ。

世界を支配するべき偉大な人間なのだ!!

こ、こんなところで死んでたまるか!!」

血を吐きながら、魔力を解き放ち魔物を召喚する。

現れたのは自らを犠牲に大威力の魔法を放つ『爆弾岩』。

10体程呼び寄せ、盾にしながら移動を始める。

「……また、エラく懐かしいのが出てきたわね」

「動くな! 私を攻撃したら、こいつを爆発させる!!

貴様も助からんぞ!!」

「あつそ」

アレルの視界が完全に遮断される。

もう何も見えない。

次の攻撃が最後になるだろう。
時間を掛けてしまったが、狙いを外すことは許されない。

「私は、再び迷宮に身を隠す。
いずれ、また、必ず戻ってくる。
その時こそ、貴様を殺してやるッ!」

「何を言ってるの。
アンタのような屑、見逃す訳がないでしょう?」

アレルは雷神の剣を正面に翳し、気配のする方へと駆け始めた。

「しょ、正気か!? 私は本気だぞッ!」

「御託は良いから、さっさと起爆したら?
ほら、さっさとやりなさいよ!」

「くっ!」

イルガチエフは起爆の詠唱を開始する。
だが、最後の呪文を唱えることに躊躇してしまった。

「死ね!」

アレルの突き出した剣が、イルガチエフの心臓部を捉える。
イルガチエフは、最後まで爆弾岩を起爆させることが出来なかった。
彼は死にたくなかったのだ。
自らの死を選ぶボタン。彼に押すことは出来なかった。

「……………」

口をパクパクとさせているイルガチェフ。
もうすぐ死ぬ。致命傷だ。
感触から臓器を貫いたのを感じ取り、アレルは勝負が付いたことを
悟る。

「……………終わり、か」

アレルが剣を抜こうとするが、引き抜けない。
イルガチェフの遺体を闇が覆い、貫いたままのアレルの剣へと侵食
している。

視力を失ったアレルは、それに気付くことができない。
闇が展開する。

「ぬ、抜けない」

『中々に面白い見世物であった』

しゃがれた声が響く。
聞き覚えのあるその声。
アレルの背筋に緊張が走る。
この状態では、勝ち目がない。

「ッ!?!」

『慌てるな勇者アレルよ。もう戦いは終わっている。
我も復活することは叶わぬ。』

だが、闇は死なぬ。光あるところ、闇もまたあるのだ。それが世界の真理にして違えることのできない定め』

「……………」

『我は再び闇に還るとしよう。』

だが、その前にこの者に褒美を与えねばならん。我を楽しませてくれたのだからな。

……………そして、お前にもな』

「……………性格が悪いのは、相変わらずだね。

私が勝った後にそういうことするの、本当悪い癖よ」

『 ククク、それは悪いことをした。』

次の機会には、直すでしょう。

では、さらばだ勇者アレル』

『闇の衣』の中から、干からびた手が伸ばされる。爆弾岩がアレルとイルガチエフの死体を取り囲む。

「終わりかな」

アレルは疲れきった表情で座り込み、剣を放り投げる。

もうアストロンやリレミトを使う事も叶わない。

精神力はゼロ。もう何も無い。

暗闇の中、アレルは軽く微笑んだ。

「これで、ようやく、終わり」

アレルの目から、光が消えた。

迷宮入り口では、未だ死闘が繰り広げられていた。エーデルの死の軍団は威力を発揮していたが、未だ制圧は出来なかった。

兵士達も疲労を覚え、広場一体でぐったりと倒れこむ者が多数。死体が散乱している状況では、誰が生きているのか判断に苦しむところだ。

「マタリちゃん。貴方、一旦下がちなさい。もう限界はとうに超えてるじゃないの」

水分を補給に来たマタリに、目を細めて警告するエーデル。

「い、いえ、それは出来ません！
私が退いては、前線が」

「その有様じゃ、次こそ死ぬわよ。
体力を回復させてから復帰しなさい。
さっさと下がちなさい！！」

そう言うと、再び杖を翳し呪文を詠唱し続けるエーデル。
その横には星銃が設置されており、魔術師達が延々と魔術を充填し
続けている。

入り口目掛けて死体が行進を続け、それを盾にするように戦士達が
繰り出していく。

マタリはそれを見ながら、後退すべきか考える。
アレルが戦っている今、自分だけ退くなど出来る訳がない。
そう判断し、戻ろうとしたその瞬間。

大地を揺るがし、空気を振るわせる凄まじい爆発音が轟き渡る。
思わず耳を塞いでしまったマタリ。
未だにキーンという音がしている。

後ろを振り返ると、エレナと教団幹部たちが呆然と立ち尽くしてい
る。

『星塔』の方向を眺めながら。

「せ、星塔が」

「ほ、崩壊した」

「わ、我等の聖地が」

星塔があつた場所は夥しい量の土煙を上げている。

完全に倒壊した訳ではないが、上層は完全に消失している。消し飛んだという表現が相応しい。

「ま、魔物が退いて行くぞ!!」

迷宮入り口から、歓喜の聲が上がる。

「や、やった! 魔物どもを追い返したぞ!!」

「退いていく、確かに退いていく!! 勝ったんだ!!」

俺達は勝ったんだ!! ざまあみる糞つたれが!!」

「た、助かった。お、俺は生き残った。か、神様」

「野郎共!! 勝ち鬨を上げろ!!」

死んでいった奴等にも聞こえるように、でっかい声でな!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!」

歓聲があがり、それは広場へと伝染し、喜びは広がっていく。

「星塔へ向かいます。イルガチエフの生死を確認する！」

「はっ！」

エレナと数名が駆けはじめる。

アレルが見事に討ち取ったのは間違いないだろう。

だが、それを確認する必要がある。

エレナ達の後を追いつ、マタリも星塔へと駆け出す。

出来る限りの速さで。

心臓の鼓動が早くなる。嫌な予感がする。

そんな筈はないと、信じている。

思い過ぎだと、強く言い聞かせて。

マタリは走る。

いまだ倒壊を続けている星塔。

下層はなんとか堪えているが、もう本来の働きを為すことはないだろう。

いつ崩れ落ちても不思議ではない。

そしてその入り口。

崩れ落ちた大量の瓦礫の上に、輝きを放つ何かがある。

まるで何かを指し示しているかのように。

エレナとマタリ達はその場に警戒しながら近寄っていく。

そこには、持ち主を失った二振りの剣が突き刺さっていた。

「……………」

マタリは無言で瓦礫をどかし始める。

アレルの身に何が起こったのか。

嫌な想像が脳裏によぎる。

エレナや教団幹部も手伝い、搜索を始める。

後続の教団兵も加わり、大規模な物となる。

やがて、マタリは一つのものを発見する。

アレルが常に身に着けていたお気に入りの額当て。

マタリは血塗れのそれを、震える手で抱きしめる。

「　　そんなの嫌。私は嫌だ」

「……………それは、勇者アレルの」

エレナが額当てを確認する。

勇者は伝承通りに、魔を滅ぼしたのだ。

己の身を犠牲にして。

「こんなの嘘ですよ。」

アレルさんが、死ぬわけないんです。

だって、勇者なんですから。だ、だから私は「

最終話　そして、伝説へ

イルガチエフの乱から、1年後。

アートの街の復興は少しずつだが進んでいた。

街には各国の兵が駐留し、物々しい雰囲気を放っている。

迷宮の結界は、現在構築に向けての研究中で、漸く実験段階にはいったところだ。

以前のような強固な物が築かれるまでには、まだまだ時間が必要だろう。

それまで、迷宮から魔物の進攻を防ぐ為に、新たな部隊が創設されることになる。

『迷宮守備隊』。隊長はレンジャーギルドのカンダタ。

本部は協会内に設置され、迷宮の調査と守備任務に当たる部隊だ。

戦いで働きが認められ、エレナから任命された。

2ツ星が授与されたが、特に嬉しそうな顔を見せることはなかった。

ちなみに、勇者アレルには3ツ星が与えられている。

未だ、授与はされていないが。

功績を称えるために、最大級の栄誉が与えられたのだ。

アート家は結界消失の責を問われ断絶。

未練もなかったマタリはそのまま迷宮守備隊に志願し、戦いの日々
に身を投じた。

狂戦士マタリの名は広まり、紅い大剣は既にトレードマークとなっている。

一人での行動を好み、誰かと徒党を組むことはこの一年間なかった。
並ぶもののない戦功を上げ続け、守備隊での地位もカンダタに次ぐ
物となっている。

誰も近づけないような鋭い眼光、常に殺気を発し続けている為、

身内からも恐れられる存在となっている。
以前のお人よしだった頃の面影はない。

迷宮内の異常の早期発見、魔物の生態系の調査。
赤き魔物の殲滅、大量発生した魔物の間引きなどが主な仕事である。

冒険者は数を減らしたが、未だ果敢に迷宮へと突入している。

『星石』は効力を保っており、注意を払えばリスクは減らすことが出来るからだ。

調査任務を終えたマタリは、迷宮から帰還する。

激戦を生き延びた、アレル曰く『横柄な門番』が声を掛けてくる。

「マタリ様。任務、お疲れ様でした」

「……何か用か？」

大剣に着いた血糊を払い飛ばし、マタリは無表情で尋ねる。

「カンダタ様からのご命令です。」

戦士ギルドに寄って、書類を受け取ってこいと。

何でも、新隊員候補者リストだとかなんとか」

「分かった。これから向かう」

大剣を掲げると、マタリは返り血を拭って歩き始めた。

門番はその後姿を見て、一度だけ溜息を吐いた。

マタリは戦士ギルドの扉を開ける。

以前マタリが徒党を組んでいた頃と、ちっとも変わらない景色がそこにはあった。

馬鹿騒ぎをしているベテランメンバー。

からかわれている若手のホープ。

それを肴に酒を酌み交わす酔っ払い達。

無言で一瞥すると、カウンターのロブの元へと近づいていく。

「ロブ殿。カンダタ隊長からの命により、候補者リストを受け取りに来ました」

「ああ、マタリか。ちょっと待ってくれ」

引き出しを開けると、分厚い書類の入った封筒を取り出す。

マタリはそれを受け取ると、一礼して退出しようとする。

「おい、たまには一杯飲みに来いよ。」

お前も戦士ギルドの一員であることには変わりないんだからな」

「そうだぜ。たまには顔を出してくれよな。」

主に俺が喜ぶぜ」

ロブとジャバがグラスを持ちながら声を掛けてくる。

「…………折角ですが、遠慮しておきます」

「そうかい。そいつは残念だ。

……………つとそうだ。これから協会に戻るのか？」

「ええ、本部に行きますから」

「それじゃこれをルイーダの酒場に届けてくれないか。

酒代が溜まってしまつてな。そろそろ怒鳴り込んでくる頃だ」

ロブが銀貨の詰まつた袋を投げ渡してくる。

それを右手で受け取ると、ロブを見る。

「……………他の人に行かせては」

「こんな酔つ払い共に金を持たせたら、酒に変わつちまつたる。頼んだぜ、マタリ！」

眉をひそめた後、一度だけ溜息を吐く。

あそこには近づきたくなかったのだが、仕方がない。

用件を済ませて、素早く出るとしよう。

マタリは小さく了解の合図を送ると、戦士ギルドを後にした。

「すっかり変わっちまったな」

赤い大剣をみやりながら、ジャバが声を掛ける。

「今じゃ誰もが恐れる狂戦士様だ。

……根っこは同じ癖に、強がりやがって」

「何とかしてやったらどうだ。昔は兄貴分だったんだろっ？」

「俺には無理だよ。

むしろ叩き斬られる恐れがある」

ロブが首を手刀でトントンとやると、ジャバは大笑いする。

「ハハツ！ そりゃいいや。

ところで、賭けを覚えているか？」

「ああ、覚えているぞ。

『帰ってくるほうに、金貨100枚』だったか？」

「そうだ。逆に張った奴がないから、勝負にならないのが残念だな」

「そんな奴がいたら、俺がぶん殴ってやる。

さて、今日は思いつきり飲むとするか。

仕事はだるいからお終いだ」

「さっきから飲んでたじゃねえか」

その突込みを無視して、ロブはグラスに酒を注ぎ始めた。

マタリは重い足を引き摺りながら、ルイーダの酒場へと向かう。
あそこは近寄りたくない。

色々と思いが多すぎるからだ。

短い間だったけれど、鮮烈な印象を残した少女。

彼女の顔が、嫌でも思い起こされるのだ。
足を思わず止める。

843

マタリは腰に提げた皮袋から、額当てを取り出す。
彼女がいつ戻ってきてても良いように、完全に修復したものだ。
そして、これがあると彼女と冒険をしているような気分になるのだ。
だから、マタリは常に持ち歩いている。
お守り代わりとして。

「…………アレルさん」

額当てをしまつと、マタリは再び進み始める。
行きかう人々は、その姿を見て萎縮しながら道を譲る。

協会内、迷宮守備隊本部。

「ああ、暇だなあ。隊長になんかなるんじゃないかな。やっぱり俺は現場の方が向いてるんだ。身体が鈍って仕方がねえ！！」

「頭！ 愚痴はいけませんぜ！
姐さんにまたどやしつけられやす！」

「お前が言いつけるからだろうがッ！！
てめえはジャスミンの狗か！ ああっ！？」

「だって言わねえとぶん殴るって姐さんが」

「はあ、まあ良い。俺は寝るからな。
後は適当にやっつけ。書類なんて知るかってんだ」

カランダタは机に前のめりになると、そのまま鼾をかき始めた。

「まったく本当に怒られますぜ！」

……「と客人か。あーあー。」

ゴホン、良く来たな。ここは迷宮守備隊……」

不敵に笑う訪問者の姿を見た手下は絶句する。

狼狽しながらカランダタを揺り動かすが、全く起きる気配がない。

訪問者が用件を告げると、手下は慌てて駆け出す。

そして、地下倉庫に嚴重に保管されている『武器』を手に、

飛び跳ねながら駆けて行った。

訪問者は武器を受け取ると、鼻歌交じりに守備隊本部を後にした。手下はしばらく呆然としていたが、これは一大事とカランダタを何とか起こそうと近寄る。

「か、頭。そ、その顔は一体」

カランダタの寝顔には、星のマークが大きく落書きされていた。額に二ツ星。中々センスがあると手下は感心した後、大いに笑い転げた。

ルイーダの酒場を開ける。

相変わらずの賑わいを見せる酒場。

客の出入りに一々気を配ったりはしない。

マスターのいる場所まで近づくと、手を上げて挨拶をする。

「いらっしやい。　　ってお前！　い、生きてたのか！？
てつきり死んだとばかり」

大声を上げるマスターに、口元に指を当てて静かにするように伝える。

そして、酒を注文するとグラス片手にルイーダの元へと向かう。
後ろを振り返ると、血相を変えたマスターがどこかへとすっ飛んでいった。

「いらっしやい。ここはルイーダの酒場。
何か御用かしら……って。あ、貴方は！？」

……あ、あ、ああ！　　やっぱり、でも、どうして!？」

事情を説明する。

驚きの表情を浮かべるルイーダを肴に、グラスを飲み干す。

キツイ。度数が高いようだ。

「 そう、そんなことが。
……皆、貴方を待ってたのよ。
この一年間、本当に色々な事があつたわ」

黙ってルイーダの話を聞く。

「 エーデルは、結界構築の研究に没頭してるわ。
まだまだだつて言ってるけど、多分大丈夫。
あの娘、必ず完成させるからつて言つてたから。
だから、大丈夫よ」

「 マタリさんは、迷宮守備隊に入ったわ。
……毎日、身を削るように働いてる。
あの日から、一度も笑わないし、泣かないの。
泣き言を言わず、ただひたすら迷宮へ。
とても見てられないわ」

「 だから、止めてあげてほしい。
これは、貴方にしか出来ない。
あの頑固な『猪娘』を止められるのは貴方だけだから」

やれやれと首を振つた後、仕方ないと頷く。
まるで成長していないようだ。
人の話を聞く。重要な事だと教えたのに。
本当に仕方のない猪娘だ。

「失礼する。戦士ギルドマスターのロボの使いで来た。これをルイーダに渡してもらいたい」

「マタリさん！ ちょっとこっちへ！
そんなところにいないで、早く！！」

「いや、のんびりしている時間はない。
私にはそんな時間はないのだから」

無表情で首を横に振るマタリ。
愛想が全くない。

「随分と偉くなったのね、マタリ。
でも、人の話を聞かない内は、まだまだよ」

「………そういうお前は誰だ。
気安く呼ばれる謂れはない」

眉を顰め、怪訝そうな声を上げるマタリ。
誰とも知らない奴に、失礼な口を聞かれたらそれはカチンとくるだろつ。

「本当にそうかしら？」

「………なに？」

私は振り返り、笑顔を浮かべる。
マタリはポカンとした表情を浮かべると、口元を手で押さえる。
動きを止め、私をしばらくの間凝視した後、身体を震わせる。
目蓋にはうっすらと涙が浮かんでいる。
偉くなった割には涙もろい。
相変わらずだ。

「仲間を忘れるなんて、良くないわよ。
ねえ、ルイーダ」

「……え、ええ。そうね。本当に、良かった」

「アンタも同じか。駄目だこりゃ」

両手を上げてお手上げポーズ。

マタリが酔っ払いを跳ね飛ばして駆け込んでくる。

私は勢いに押されて椅子から押し飛ばされた。

「あ、ああ、あ、あ、あああッ!？」

「落ち着きなさい、この馬鹿。猪!」

「あ、あああッ。」

うっ、うあああああああああああッ!?!」

「ほら、涙を拭いて。狂戦士の癖にそれじゃ、格好がつかないわよ」

「うっ、うっ、うっ」

ハンカチを渡すが、受け取ろうとしない。
涙が洪水のように溢れ出ている。

「……ただいま、マタリ」

マタリは、言葉にならない声をあげ続ける。
何を言いたいのかは大体理解できたので、とりあえず頭を撫でてやった。

数年後。

「なあ、本当に、そこにはあるんだよな。
『世界樹の雫』ってのは」

10代半ばの少年が、念を押すように話しかける。

「う、うん。ほら、ここ見て。

この本に書いてあるよ。

かつて『世界樹』は確かに存在したって」

三つ編みの少女が、いつも手に持っている本を開いて見せる。

「大丈夫大丈夫。確かにあるから。

私は鳥頭だから、良く覚えてないけど、

確かにあったよ。多分」

羽付き帽子の少女が、白い歯を見せて笑う。

「そいつがあれば、身体だけじゃなく、精神の傷も癒せるんだよな。
そうすりゃ、姉ちゃんも苦しまなくて済むんだよな？」

「う、うん。そうだね。間違いないよ」

本を閉じて袋に入れた後、グツと拳を握り締める。

「偉い！ 思わず泣けてくるよ。」

師の心を救うために、教え子が旅に出る。

くっ、泣けるねえ！」

といった後、思いつきりくしゃみをする少女。

真剣味が伴っていないので、少年達は苦笑した。

鼻を掻いた後、少女は一回転して不死鳥の姿へと変える。

不死鳥ラーミア。世界を渡る伝説の鳥。

「まあ良いや。とにかく行くこうぜ。」

早くしないとバレちゃうからな」

ラーミアの背中に跨り、三つ編みの少女に手を差し伸べる。

強く握り締め、大きな荷物と一緒に飛び乗る。

「そうだね。トイレに行くって出てきたから、早くしないと」

「こっちは私にバレちゃうって訳よ。」

いつまでもチンタラしてるから」

青い水晶のついた額当てをした女性。

青いローブを身に纏い、二振りの刀を腰に差している。

以前は短かった黒髪は肩まで伸ばされている。

残念ながら胸は成長しなかったが、

小柄だった背は伸び始め、スレンダーと行って良い体型に成長した。

「せ、せせせせせ、先生!!」

「ラ、ラミイちゃん! 早く行って!!」

「待ちなさい!!」

一喝すると、動きを止める教え子達。

女性はやれやれと髪を掻き上げると、溜息を吐いた。

「どうせ止めても、無駄なんでしょう?」

目を見れば分かるわ。好奇心に満ち満ちているから。

「つたく、この馬鹿鳥に余計な事を吹き込まれて!!」

何のことですか? とラーミアは首をわざとらしく振る。

「ご、ごめんなさい先生。でも」

「別に止めないわ。アンタ達の人生だもの。でも、餞別を渡すくらい構わないわよね」

腰の剣を外すと、二人に手渡してくる。

「ご、これは伝説の雷神剣!!」
トヲコノキラー

「す、すっげえ。俺、めっちゃ感動してる!!」

「ご、ごっちもそうだよ。アーケドラゴンの首を落とした、稲妻の剣!! わ、私、さ、触っちゃったよ!!」

「アンタ達にあげる。大事に使いなさいよ。」

あと、これも」

ローブについていた、天道虫のブローチを少年のマントにくっつける。

「な、なにこれ」

自分のマントに移ってきた天道虫を、怪訝そうに見つめる。ブローチなのに、足が動いている。どう見ても生きている。

「勇者の印よ。それがないと締らないわ。

意外に役に立つから、マントにくっつけておきなさい。

そうそう、アンタにこれも渡しておくわ」

表紙が豪華な本を取り出すと、三つ編みの少女へと手渡す。

かつて女性が心の支えとしてきた白紙の本に似せて作成された。

友人が作ってくれた、掛け替えのない大事な物。

「先生、これは？」

「それは『冒険の書』よ。辛い事、悲しい事、嬉しい事、楽しい事。思うがままに、好きなように書き記していきなさい。

いずれ、貴方が旅を振り返ったとき、力になってくれるかもしれない」

「……ありがとうございます」

「お古だから、ちょっと汚いけど我慢しなさい。

……それじゃあ、くれぐれも気をつけて」

女性が手を振ると、教え子達は顔を見合わせて深く頷く。

「じゃあ、行ってきます!!」

「先生、行ってきますね!!」

「行ってらっしゃい」

心配を押し殺し、出来るだけ素っ気無く挨拶を済ませた女性。教え子達を見送った後、一度だけ頭を抑えて跪く。

その拍子に、地面に手紙が残されていることに気付く。

手紙は封筒に入り、重石が乗せてある。

封を破り、手紙を広げる。

『二人は私がすっかり面倒見るから、心配しなくていいよ。止めても無駄なのは、二人の性格を見てれば分かるよね。』

一応、帰ってくるつもりだから、そんな感じで。

平和な世界だから、危険もそんなにないだろうしね。

だから、心配せず、穏やかに暮らすと良いよ。

今まで頑張ったんだから、そろそろ休んでも罰は当たらないよ。

ルビスはうるさいけど、私が上手い事言っておくから。

追伸

次に繋げる為にも、“子作り”する相手を見つけるように!』

笑顔で読み上げた後、びりびりに引き裂いてなかったことにする。

子供が生まれたら、勇者を血筋で引き継がせるなんて実に馬鹿馬鹿しい。

なりたい奴が、勇者になるべきなのだ。

そのところをあの鳥頭は分かっているないので、次は徹底的に調教することにする。

女性は決心した。

孤児院の子供達が女性の下へ駆け寄ってくる。

やれやれと手をあげると、そちらへと進んでいった。

駆け寄ってきた馬鹿の中に、マタリの姿があったような気がするが、きつと気のせいだろう。

痛む頭を抑えながら、

アレルはそう思うことにした。

不死鳥の背中に乗って世界を渡った2人。

とある城下町に辿りつき、ラミイから案内を受ける。

「ここが勇者アレルの生まれた街、アリアハンだよ。どう、結構綺麗でしょ。王様はセコイけど」

まずは上の世界、そのあとはアレフガルドかなあと、ラミイは手帳を広げて頭を捻っている。気分はすっかり案内人である。

「すごい立派なお城。

私、あんなの見たことないよ」

「へん、アートの城壁だって凄いじゃないか。負けてないぜ！」

「さ、まずはどこにいこうかな。

うーん。格闘場で一儲けも良いけど……。

そうだ、腹ごしらえも兼ねて、あそこに行こうか！

こういうのは最初が肝心。しっかり『登録』しないとね！」

「登録？」

「行けば分かるさ。アートにもあるじゃない」

分不相応な剣を携えた2名と、羽付き帽子の妙ちくりんな少女は、ルイーダの酒場へと向かう。

平和になった世界、酒場は通常業務がメインとなり、

冒険者斡旋業務は閑古鳥が鳴いている。
ルイーダは欠伸を押し殺しながら、飲んだくれを一瞥しては、溜息を吐く。

「やれやれ、平和だねえ」

「失礼するよん」

「お邪魔します」

「き、緊張してきた」

そこに珍客が3名現れる。

まるで酒に縁がなさそうな連中。

冷やかし所か、遊びに来たのではと眉を顰める。
が、腰に差した剣を見てルイーダは目を見やる。

逸品だ。確実に名剣。見るだけで分かる。

貴族の子供には到底見えないので、何がしかの事情があるのか。
ルイーダは観察することにした。

暇なので。

「これが別世界のルイーダの酒場か。

あのオバちゃんも、ルイーダさんに良く似てるな」

「こじんまりとしてて、落ち着きがあるね。

あっ、アレル先生の肖像画がある！！」

「ほ、本当かよ！ おお、すごい！
アレル姉ちゃん格好良いぜ！！」

「うーん、なんだか気に入らないな。
これは偽物だよ。偽物！」

「ら、ラミイちゃん？」

ラミイは無造作に額縁を外すと、どこからともなく取り出したもう一枚を飾り付ける。

勇者アレル、狂戦士マタリ、死霊術師エーデルが描かれた一枚。中央の人物がどことなく不機嫌そうなのは、嫌々ながらモデルになったからだろう。

「ちょ、ちょっと！！ 勝手に何すんだいアンタ！！」

身勝手な振る舞いに、思わず声を張り上げる。

ラミイは全く気にした様子を見せず、得意気に絵を披露した。

「こつちのほうが良いじゃん。ほら、これは倉庫の奥深くに仕舞っておきなよ。」

ね、表情が違うよ表情が。いわゆる、自然体って奴？」

血相を変えて飛び出てきたリーダーだが、確かにこの絵は悪くない。他の二人が誰かは見当も付かないが、アレルは確実に本人だ。しかも口トの紋章の付いた鎧を身につけている。間違いない。

先程の絵は、一名を除いては偽物だ。

出発の時に描かれた物。パーティーは既に解散したはずだった。

が、勇者アレルが何処かへと姿を眩ますと伝説は作り変えられた。
英雄達の物語へと。

「……こつちも悪くないわね。でも、一体どこで描かれたの？
アンタはアレルの知り合いなの？ 今どこで何をやってるの？」

「質問が多いよ。鳥頭だから、あんまり急かさないでね」

「…今、アレルはどうしているの？」

「それなりに幸せに暮らしているよ。」

賑やかで穏やかな日々をね。だから、もう良いでしょ」

目つきを細めるラミイ。

これ以上は喋るつもりはないと、意思を示している。

「……そう。それで、アンタ達は何しに来たんだい？」

「もちろん登録だよ登録。これをやらなきゃスタートできないよね。
欠かせない肝心な事だよ」

「登録つて、誰を？」

「勿論、この2人だよ。私はいいよ。鳥だから」

ラミイはふらふら彷徨っている二人の首根っこを捕まえ、
ルイダの元へと連れて来る。

「よ、よろしくお願いしますー！」

「と、登録ってどうやるんだ？」

ルイーダはどうせ暇だから付き合っただけかと思いい、書類を取り出す。

もう脅威となる魔物はいないのだから。

「ここに必要事項を記入していきな。

全部埋めて、私の承認が降りれば、見事登録されるって寸法さ。簡単だろう？」

「おっし、俺が一番だ！」

「ず、ずるい。私も負けないよ」

悪戯坊主と、三つ編み少女が先を争いながら記入していく。ルイーダは面白そうにそれを見つめた後、酒を飲み干す。

「…………平和だねえ」

「出来た！！」

「私も！」

「…………どれどれ」

出来上がった書類を見て、ルイーダは頭を抱える。
色々突っ込みどころ満載だが、まずこれを聞かねばならないだろ
う。

「……一応聞いておくんだけど。」

「アンタ達の職業は？」

「ラミイは既にケラケラと笑っている。」

ルイーダの問いに、声を揃えて答える二人。
胸を張って、得意気に大声で。
酒場の外まで聞こえるくらいに元気良く。

「勿論、『勇者』見習いさ！」

「勿論、『勇者』見習いです……！」

そして、伝説は受け継がれていく。

最終話 そして、伝説へ（後書き）

これで終わりです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

「職業は何ですか?」「私が勇者です」「え?」「え?」

みたいなネタから、思わぬ長編になってしまいました。

30話、30万文字。3つながりでも中々良い感じですよ。

色々と詰まったこともありましたが、完結できたのは読者の皆様のおかげです。

感想、助言を頂き、本当にありがとうございました。

そして、名作ドラゴンクエストを作り出された方々に、感謝致します。

・アレルはどうやって助かったのか

ご想像にお任せします。

個人的には、瀕死のアレルをラーミアが飛び込んで助けあげたと思っ
ています。

天道虫のブローチが命の石だったというのもアリですが、
伏線がない為アレルです。

時間が経過したのは、治療に当たっていたため。

救われないラストが好きな方は、29話で最終話としてください。

・キャラのネーミング

3の登場人物を除き全てコーヒー豆の生産国、農園、港名です。

モカ：マタリ、レケン、シダモ

コロンビア：エクセルソ、エメラルド、サンタ・エレナ

タンザニア：エーデルワイス
ニカラグア、コスタリカ、グアテマラ、エルサルバドル
ハワイ・コナ、ラス・ヌベス

などなど。全て適当につけました。

苦労したのは魔法名。

普通に漢字にすればよかったです。

・ラスト

作中で救った孤児院にアレルは住み始めました。

年月の経過とともに『多少』丸くなり、落ち着きが出てきました。
それなりに穏やかな日々を送っています。

蛇足だと思われた方は、最後はばっさりカットで構いません。

大分消耗したので、しばらく休憩します。
どうも、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4737t/>

職業は何を？ 勇者です。

2011年9月26日07時57分発行